

栃木県埋蔵文化財調査報告第 360 集

東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第 2 分冊)

2013. 3

栃木県教育委員会
財)とちぎ未来づくり財団

とう や なかじま
東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

ごんげんやま いそおか
権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第2分冊)

2013.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ未来づくり財団

総目次

〔第1分冊〕

序

目次・検索表・例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の方法

第3節 調査の経過

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要

第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層

第2節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告

第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定
- 権現山遺跡 -

第5章 権現山遺跡 SG10 区

第1節 縄文時代の竪穴建物跡

第2節 縄文時代の土坑

第3節 弥生時代の土坑

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構

第6節 古墳時代の鉄関連遺物

第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

第8節 古墳時代の溝状遺構

第9節 古墳時代の井戸

第10節 古墳時代の円筒形土坑

第11節 古墳時代の土坑

第12節 古墳時代の低地遺物包含層

第13節 古墳時代の柱穴状土坑

第14節 古墳時代の遺構外遺物

第15節 平安時代の竪穴建物跡

第16節 平安時代の土坑

第17節 古代の道路跡

第18節 中世の井戸

第19節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土
した曲物桶の材質と付着物

第20節 中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱
穴群

第21節 中世の土坑

第22節 遺構外出土の中世遺物

第23節 中世～近世の溝状遺構

第24節 近世の溝状遺構

第25節 近世の土坑

第26節 時期不明の掘立柱建物跡

第27節 時期不明の井戸

第28節 時期不明の溝状遺構

第29節 時期不明の柱穴状土坑

第30節 時期不明の土坑

第31節 時期・性格不明の遺構

〔第2分冊〕

第6章 権現山遺跡 SG2 区

第1節 古墳時代の土坑

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

第3節 時期不明の溝・集石遺構

第4節 時期不明の土坑

第7章 権現山遺跡南部 SG2 区・SG10 区・SG15 区周辺の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

第2節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区のテフラ分析

第3節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体分析

第4節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析

第8章 権現山遺跡 SG5 区

第1節 古墳時代の居館（居宅）関連施設

第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

第4節 古墳時代の遺物集中地点
（祭祀遺構）

第5節 古墳時代の性格不明遺構

第6節 古墳時代の溝

第7節 古墳時代の土坑

第8節 低地部の古墳時代遺物包含層

第9節 遺構外出土の古墳時代遺物

第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テ
フラと古環境

第11節 平安時代の土坑

第12節 中世～近世の土坑

第13節 中世～近世の溝状遺構

第14節 時期不明の掘立柱建物跡

第15節 時期不明の柵列

第16節 時期不明の溝状遺構

第17節 時期不明の井戸

第18節 時期不明の土坑

第19節 時期不明の柱穴状土坑

第9章 権現山遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の土坑

第2節 時期・性格不明の遺構

第3節 時期不明の溝

第4節 時期不明の土坑

第5節 低地堆積層の調査

第6節 西区の遺構外出土遺物

第10章 権現山遺跡 SG15 区

第1節 古墳時代以降の自然流路

第2節 時期不明の土坑

第3節 時期不明の溝

第11章 磯岡遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の竪穴建物跡

第2節 時期不明の溝状遺構

第3節 時期不明の焼土集中地点

第4節 時期不明の土坑

第12章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

第2節 古墳時代

第3節 奈良・平安時代

第4節 中世

第5節 近世

参考文献・写真図版

第2分冊 目次

目次	iii
権現山遺跡南部・磯岡遺跡 遺構一覧・検索表（第2分冊）	xxii
第6章 権現山遺跡 SG2 区	443
第1節 古墳時代の土坑	443
第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物	446
第3節 時期不明の溝・集石遺構	462
第4節 時期不明の土坑	464
第7章 権現山遺跡南部 SG2 区・SG10 区・SG15 区周辺の古環境	468
第1節 分析結果の概要と考古学的評価	468
第2節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区のテフラ分析	株式会社 古環境研究所 470
第3節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体分析	株式会社 古環境研究所 474
第4節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析	株式会社 古環境研究所 478
第8章 権現山遺跡 SG5 区	486
第1節 古墳時代の居館（居宅）関連施設	486
第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係	504
8.2.1. テフラ分析の視点と考古学的評価	504
8.2.2. 栃木県、権現山遺跡 SG5 区の自然科学分析	株式会社 古環境研究所 505
第3節 古墳時代の竪穴建物跡	508
第4節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）	614
第5節 古墳時代の性格不明遺構	618
第6節 古墳時代の溝	619
第7節 古墳時代の土坑	631
第8節 遺構外出土の古墳時代遺物	652
第9節 低地部の古墳時代遺物包含層	653
第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テフラと古環境	656
8.10.1. 分析調査の視点と考古学的評価	656
8.10.2. 権現山遺跡 SG5 区低地の土層とテフラ	株式会社 古環境研究所 657
8.10.3. 権現山遺跡 SG5 区低地における放射性炭素年代測定	株式会社 古環境研究所 660
8.10.4. 権現山遺跡 SG5 区低地における植物珪酸体分析	株式会社 古環境研究所 661
8.10.5. 権現山遺跡 SG5 区低地における花粉分析	株式会社 古環境研究所 665
第11節 平安時代の土坑	668
第12節 中世～近世の土坑	669
第13節 中世～近世の溝状遺構	669
第14節 時期不明の掘立柱建物跡	671
第15節 時期不明の柵列	673
第16節 時期不明の溝状遺構	674

第 17 節	時期不明の井戸	676
第 18 節	時期不明の土坑	678
第 19 節	時期不明の柱穴状土坑	682
第 9 章	権現山遺跡 SG9 区	688
第 1 節	古墳時代の土坑	688
第 2 節	時期・性格不明の遺構	690
第 3 節	時期不明の溝	691
第 4 節	時期不明の土坑	695
第 5 節	低地堆積層の調査	697
第 6 節	西区の遺構外出土遺物	702
第 10 章	権現山遺跡 SG15 区	703
第 1 節	古墳時代以降の自然流路	703
第 2 節	時期不明の土坑	708
第 3 節	時期不明の溝	709
第 11 章	磯岡遺跡 SG9 区	711
第 1 節	古墳時代の竪穴建物跡	711
第 2 節	時期不明の溝状遺構	714
第 3 節	時期不明の焼土集中地点	716
第 4 節	時期不明の土坑	716
第 12 章	まとめ	717
第 1 節	縄文・弥生時代	717
第 2 節	古墳時代	717
12.2.1.	古墳時代の土器変遷	717
12.2.2.	古墳時代の集落と変遷	723
12.2.3.	古墳時代の各遺構	726
12.2.4.	古墳時代の出土遺物	728
第 3 節	奈良・平安時代	734
第 4 節	中世	734
第 5 節	近世	736
参考文献		736
報告書抄録		巻末

挿図目次

第 239 図	権現山遺跡 SG2 区 全体図 (1/500) ……………	444	第 297 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-11 (1) 遺構 ……………	539
第 240 図	権現山遺跡 SG2 区 SK-100・103 遺構・遺物 ……	445	第 298 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-11 (2) 遺物 ……………	541
第 241 図	権現山遺跡 SG2 区 流路 1～4 試掘トレンチ TX11～13 断面図 (1/160) ……………	447	第 299 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-12 遺構・遺物 ……………	543
第 242 図	権現山遺跡 SG2 区 A 区 流路 1～3 (1/200) ……	448	第 300 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-13 遺構・遺物 ……………	545
第 243 図	権現山遺跡 SG2 区 B 区 流路 1～3 (1/200) ……	449	第 301 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-14 (1) 遺構 ……………	546
第 244 図	権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (1) 流路 1・流路 2	451	第 302 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-14 (2) 遺物 ……………	547
第 245 図	権現山遺跡 SG2 区 C 区 流路 2～4 (1/200) ……	452	第 303 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-15 (1) 遺構 ……………	549
第 246 図	権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (2) 流路 3 ……	453	第 304 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-15 (2) 遺物 ……………	551
第 247 図	権現山遺跡 SG2 区 C 区 流路 4 断面図 ……	454	第 305 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-15 (3) 遺物 ……………	553
第 248 図	権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (3) 流路 4 ……	455	第 306 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-16 遺構・遺物 ……………	555
第 249 図	権現山遺跡 SG2 区 D 区 流路 5～7 (平面図 1/200・ 断面拡大図 1/80) ……………	456	第 307 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-17 (1) 遺構・遺物 ……	557
第 250 図	権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (4) 流路 5・流路 周辺の遺構外 A～F 区 ……………	457	第 308 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-17 (2) 遺物 ……………	559
第 251 図	権現山遺跡 SG2 区 F 区 (1/200) ……………	458	第 309 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-18 (1) 遺構・遺物 ……	562
第 252 図	権現山遺跡 SG2 区 SD-46 遺構 ……………	463	第 310 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-18 (2) 遺物 ……………	563
第 253 図	権現山遺跡 SG2 区 SX-47 遺構 ……………	463	第 311 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-19 遺構・遺物 ……	565
第 254 図	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 (1) 遺構 ……	465	第 312 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-20 (1) 遺構 ……………	568
第 255 図	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 (2) 遺構・遺物	467	第 313 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-20 (2) 遺物 ……………	569
第 256 図	権現山遺跡・磯岡遺跡周辺の古環境分析実施地点 (1/4,000) ……………	469	第 314 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-21 (1) 遺構 ……………	572
第 257 図	権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の土層柱状図 とテフラ分析試料 ……………	473	第 315 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-21 (2) 遺物 ……………	573
第 258 図	権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体 分析結果 ……………	475	第 316 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-22 (1) 遺構・遺物 ……	576
第 259 図	権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体 の顕微鏡写真 ……………	478	第 317 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-22 (2) 遺物 ……………	577
第 260 図	権現山遺跡 SG2 区 13-21 グリッドにおける樹木 花粉組成図 ……………	480	第 318 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-23 遺構・遺物 ……	580
第 261 図	権現山遺跡 SG2 区 13-21 グリッドにおける花粉 組成図 (花粉総数が基数) ……………	480	第 319 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-24 (1) 遺構 ……………	582
第 262 図	権現山遺跡 SG15 区北側低地 16-19 グリッドに おける樹木花粉組成図 ……………	481	第 320 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-24 (2) 遺物 ……………	584
第 263 図	権現山遺跡 SG15 区北側低地 16-19 グリッドに おける花粉組成図 (花粉総数が基数) ……	481	第 321 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-25 遺構・遺物 ……	586
第 264 図	権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花 粉・孢子遺体 (1) ……………	483	第 322 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-26 遺構・遺物 ……	588
第 265 図	権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花 粉・孢子遺体 (2) ……………	484	第 323 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-28 遺構・遺物 ……	590
第 266 図	権現山遺跡 SG5 区 全体図 (1/1,000・等高線 主曲線 20cm) ……………	487	第 324 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-29a・b (1) 遺構・a 期遺物 …	592
第 267 図	権現山遺跡 SG5 区 北半部全体図 (1/500・等高線 主曲線 20cm) ……………	488	第 325 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-29a・b (2) a 期遺物 ……	594
第 268 図	権現山遺跡 SG5 区 南半部全体図 (1/500・等高線 主曲線 20cm) ……………	489	第 326 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-45 遺構・遺物 ……	596
第 269 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-43 (1) 遺構 ……………	490	第 327 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-95 遺構・遺物 ……	597
第 270 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-43 (2) 遺物 ……………	491	第 328 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-99 遺構・遺物 ……	598
第 271 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-227 (1) 遺構・遺物 ……	493	第 329 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-100 (1) 遺構 ……	599
第 272 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-227 (2) 遺物 ……………	495	第 330 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-100 (2) 遺物 ……	601
第 273 図	権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (1) 遺構全体図 (1/300)	499	第 331 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-107 遺構・遺物 ……	604
第 274 図	権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (2) 遺構北辺 ……	500	第 332 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-116 (1) 遺構・遺物 ……	606
第 275 図	権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (3) 遺構東辺北半部 …	501	第 333 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-116 (2) 遺物 ……	607
第 276 図	権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (4) 遺構東辺南半部 …	502	第 334 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-137 遺構・遺物 ……	612
第 277 図	権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (5) 遺構南辺 ……	503	第 335 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-155 遺構 ……………	614
第 278 図	権現山遺跡 SG5 区 竪穴建物跡と居館関連遺構の 土層柱状図・断面図とテフラ分析試料 ……	506	第 336 図	権現山遺跡 SG5 区 SX-118 (1) 遺構・遺物 ……	615
第 279 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-1 遺構・遺物 ……………	509	第 337 図	権現山遺跡 SG5 区 SX-118 (2) 遺物 ……………	616
第 280 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-2 遺構・遺物 ……………	510	第 338 図	権現山遺跡 SG5 区 SX-129 遺構 ……………	618
第 281 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-3 (1) 遺構・遺物 ……	512	第 339 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-41 (1) 遺構 ……	620
第 282 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-3 (2) 遺物 ……………	513	第 340 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-41 (2) 遺物 ……	621
第 283 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-4 遺構・遺物 ……………	514	第 341 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-42 遺構・遺物 ……	622
第 284 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-5 (1) 遺構 ……………	516	第 342 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-44 遺構・遺物 ……	624
第 285 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-5 (2) 遺物 ……………	518	第 343 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-101 (1) 遺構 ……	627
第 286 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-6 (1) 遺構 ……………	520	第 344 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-101 (2) 遺物 ……	628
第 287 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-6 (2) 遺物 ……………	522	第 345 図	権現山遺跡 SG5 区 南半部土坑集中部 (1/200・ 等高線主曲線 10cm) ……………	632
第 288 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-6 (3) 遺物 ……………	525	第 346 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (1) 遺構 ……	634
第 289 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-7 (1) 遺構・遺物 ……	526	第 347 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (2) 遺構 ……	635
第 290 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-7 (2) 遺物 ……………	527	第 348 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (3) 遺構 ……	636
第 291 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-8 (1) 遺構・遺物 ……	530	第 349 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (4) 遺構 ……	637
第 292 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-8 (2) 遺物 ……………	532	第 350 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (5) 遺構 ……	639
第 293 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-9 (1) 遺構・遺物 ……	293	第 351 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (6) 遺物 ……	642
第 294 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-9 (2) 遺物 ……………	535	第 352 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (7) 遺物 ……	644
第 295 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-10 (1) 遺構・遺物 ……	536	第 353 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (8) 遺物 ……	646
第 296 図	権現山遺跡 SG5 区 SI-10 (2) 遺物 ……………	537	第 354 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (9) 遺物 ……	648
			第 355 図	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (10) 遺物 ……	650
			第 356 図	権現山遺跡 SG5 区 遺構外出土の古墳時代遺物 ……	652
			第 357 図	権現山遺跡 SG5 区 低地グリッド配置および遺物 …	654
			第 358 図	権現山遺跡 SG5 区 低地部および SK-190・191 の 土層柱状図とテフラ分析試料 ……………	658
			第 359 図	権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体 分析結果 ……………	662
			第 360 図	権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体の 顕微鏡写真 ……………	664
			第 361 図	権現山遺跡 SG5 区 低地部における花粉組成図 (花粉総数が基数) ……………	665
			第 362 図	権現山遺跡 SG5 区 低地部の花粉・孢子遺体 ……	667
			第 363 図	権現山遺跡 SG5 区 SK-120 遺構・遺物 ……	668
			第 364 図	権現山遺跡 SG5 区 SK-138 遺構・遺物 ……	669
			第 365 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-133・134・135 遺構 SD-134・135 遺物 ……………	670

第 366 図	権現山遺跡 SG5 区 SB-154・157 遺構	672	第 390 図	権現山遺跡 SG15 区 流路 2 および試掘トレンチ TX-16 の流路跡 (1/100)	706
第 367 図	権現山遺跡 SG5 区 SB-159 遺構	673	第 391 図	権現山遺跡 SG15 区 流路 2 北方の TX16 出土遺物	707
第 368 図	権現山遺跡 SG5 区 SA-158 遺構	674	第 392 図	権現山遺跡 SG15 区 時期不明の土坑 遺構	708
第 369 図	権現山遺跡 SG5 区 SD-108・115・148 遺構 SD-108 遺物	675	第 393 図	権現山遺跡 SG15 区 SD-1 遺構・遺物	709
第 370 図	権現山遺跡 SG5 区 SE-114・127・136・216 遺構 SE-114 遺物	677	第 394 図	権現山遺跡 SG15 区 SD-2 (平面図 1/80・ 断面図 1/40)	710
第 371 図	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑 (1) 遺構・遺物	679	第 395 図	磯岡遺跡 SG9 区 全体図 (1/200・等高線主曲線 20cm・間曲線 10cm)	713
第 372 図	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑 (2) 遺構・遺物	681	第 396 図	磯岡遺跡 SG9 区 SI-49a・b 遺構・遺物	714
第 373 図	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (1) 遺構	683	第 397 図	磯岡遺跡 SG9 区 SD-40・48 遺構 SD-40 遺物	716
第 374 図	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (2) 遺構	684	第 398 図	磯岡遺跡 SG9 区 SX-50 遺構	717
第 375 図	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構	685	第 399 図	磯岡遺跡 SG9 区 時期不明の土坑 遺構	717
第 376 図	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (4) 遺構	686	第 400 図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (1) 土師器杯・高杯	718
第 377 図	権現山遺跡 SG9 区 全体図 (1/600・等高線主曲線 20cm)	689	第 401 図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (2) 土師器鉢・小形壺と須恵器・陶質土器	719
第 378 図	権現山遺跡 SG9 区 SK-37 遺構	690	第 402 図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (3) 土師器大形壺・甕・甗	720
第 379 図	権現山遺跡 SG9 区 SX-54 遺構	690	第 403 図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷 (1) 古墳前期 後半～古墳中期	724
第 380 図	権現山遺跡 SG9 区 SD-7・8 遺構・遺物	692	第 404 図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷 (2) 古墳後期～ 終末期前半	725
第 381 図	権現山遺跡 SG9 区 SD-34・35・38 遺構 SD-38 遺物	694	第 405 図	権現山遺跡南部 SG5 区居館周辺遺構と特殊遺物	727
第 382 図	権現山遺跡 SG9 区 時期不明の土坑 遺構	696	第 406 図	権現山遺跡 SG10 区 の脚付壺と類例	728
第 383 図	権現山遺跡 SG9 区 中央区微高地断ち割りトレンチ 断面図 (1/160)	698	第 407 図	権現山遺跡 SG10 区 の有蓋壺と類例	729
第 384 図	権現山遺跡 SG9 区 中央区微高地遺構外出土遺物	699	第 408 図	胴部上半の格子叩きをナデ消す壺	730
第 385 図	権現山遺跡 SG9 区 中央区南東部低地調査区 (1) 遺構 (等高線主曲線 20cm)	700	第 409 図	頸部に細突線を持つ小形壺	730
第 386 図	権現山遺跡 SG9 区 中央区南東部低地調査区 (2) 遺物	701	第 410 図	権現山遺跡南部の紡錘車	731
第 387 図	権現山遺跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物	702	第 411 図	権現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷 (3) 古墳終末期 後半・古代・中世	735
第 388 図	権現山遺跡 SG15 区 全体図および周辺図 (1/400)	704			
第 389 図	権現山遺跡 SG15 区 流路 1 および試掘トレンチ TX-15	705			

表 目 次

第 144 表	権現山遺跡 SG2 区 古墳時代の土坑	445	第 183 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-25 出土遺物	587
第 145 表	権現山遺跡 SG2 区 古墳時代の土坑 出土遺物	445・446	第 184 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-26 出土遺物	588・589
第 146 表	権現山遺跡 SG2 区 流路 1～5 および流路 周辺の遺構外 A～F 区 出土遺物	459～462	第 185 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-28 出土遺物	591
第 147 表	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑	464・466	第 186 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-29a 出土遺物	593～595
第 148 表	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 出土遺物	466	第 187 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-45 出土遺物	596
第 149 表	権現山遺跡 SG2 区 ・SG10 区 ・SG15 区 テフラ検出 分析結果	472	第 188 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-95 出土遺物	598
第 150 表	権現山遺跡 SG2 区 ・SG10 区 ・SG15 区 屈折率 測定結果	472	第 189 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-99 出土遺物	599
第 151 表	権現山遺跡 SG2 区 ・SG10 区 ・SG15 区 植物珪酸体 分析結果	475	第 190 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-100 出土遺物	600～603
第 152 表	権現山遺跡 SG2 区 ・SG15 区 花粉分析結果	482	第 191 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-107 出土遺物	604
第 153 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-43 出土遺物	491・492	第 192 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-116 出土遺物	608～610
第 154 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-227 出土遺物	494～498	第 193 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-137 出土遺物	611～613
第 155 表	権現山遺跡 SG5 区 SA-151 柱穴の規模	504	第 194 表	権現山遺跡 SG5 区 SX-118 出土遺物	616～618
第 156 表	権現山遺跡 SG5 区 におけるテフラ検出分析結果 (1)	507	第 195 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-41 出土遺物	619～621
第 157 表	権現山遺跡 SG5 区 におけるテフラ検出分析結果 (2)	507	第 196 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-42 出土遺物	623
第 158 表	権現山遺跡 SG5 区 における屈折率測定結果	507	第 197 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-44 出土遺物	625・626
第 159 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-1 出土遺物	509	第 198 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-101 出土遺物	627～630
第 160 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-2 出土遺物	511	第 199 表	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑	631～640
第 161 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-3 出土遺物	511～513	第 200 表	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 出土 遺物	640～652
第 162 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-4 出土遺物	515・516	第 201 表	権現山遺跡 SG5 区 遺構外出土の古墳時代遺物	653
第 163 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-5 出土遺物	517～519	第 202 表	権現山遺跡 SG5 区 低地グリッド 遺物出土状況	654
第 164 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-6 出土遺物	521～525	第 203 表	権現山遺跡 SG5 区 低地部の古墳時代遺物包含層 出土遺物	655・656
第 165 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-7 出土遺物	528・529	第 204 表	権現山遺跡 SG5 区 におけるテフラ検出分析結果	658
第 166 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-8 出土遺物	531・532	第 205 表	権現山遺跡 SG5 区 における屈折率測定	659
第 167 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-9 出土遺物	534	第 206 表	権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体 分析結果	662
第 168 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-10 出土遺物	535～537	第 207 表	権現山遺跡 SG5 区 低地部における花粉分析結果	666
第 169 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-11 出土遺物	538～540	第 208 表	権現山遺跡 SG5 区 SK-120 出土遺物	669
第 170 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-12 出土遺物	542～544	第 209 表	権現山遺跡 SG5 区 SK-138 出土遺物	669
第 171 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-13 出土遺物	545	第 210 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-134 出土遺物	670
第 172 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-14 出土遺物	547・548	第 211 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-135 出土遺物	671
第 173 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-15 出土遺物	550～554	第 212 表	権現山遺跡 SG5 区 SD-108 出土遺物	674
第 174 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-16 出土遺物	556	第 213 表	権現山遺跡 SG5 区 SE-114 出土遺物	676
第 175 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-17 出土遺物	558～561	第 214 表	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑	678～682
第 176 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-18 出土遺物	563・564	第 215 表	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑 出土遺物	682
第 177 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-19 出土遺物	566・567	第 216 表	権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑	683～687
第 178 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-20 出土遺物	570・571	第 217 表	権現山遺跡 SG9 区 SD-7 出土遺物	693
第 179 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-21 出土遺物	574・575	第 218 表	権現山遺跡 SG9 区 SD-8 出土遺物	693
第 180 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-22 出土遺物	577～579	第 219 表	権現山遺跡 SG9 区 SD-38 出土遺物	695
第 181 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-23 出土遺物	581	第 220 表	権現山遺跡 SG9 区 時期不明の土坑	695
第 182 表	権現山遺跡 SG5 区 SI-24 出土遺物	583～585	第 221 表	権現山遺跡 SG9 区 中央区微高地の遺構外出土遺物	697
			第 222 表	権現山遺跡 SG9 区 中央区南東部低地調査区出土遺物	701

第 223 表	権現山遺跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物	702	第 229 表	磯岡遺跡 SG9 区 時期不明の土坑	717
第 224 表	権現山遺跡 SG15 区 流路北方 TX16 出土遺物	707・708	第 230 表	権現山遺跡南部と磯岡遺跡 SG9 区における古墳時代・古代・中世遺構と時期区分	721
第 225 表	権現山遺跡 SG15 区 時期不明の土坑	708	第 231 表	権現山遺跡南部におけるカマドの位置	726
第 226 表	権現山遺跡 SG15 区 SD-1 出土遺物	709	第 232 表	古墳時代の鍛冶遺構および鍛冶遺物出土遺構(栃木県域)	732・733
第 227 表	磯岡遺跡 SG9 区 SI-49a・b 出土遺物	715			
第 228 表	磯岡遺跡 SG9 区 SD-40 出土遺物	715			

写真図版目次

図版一	磯岡遺跡 SG9 区 航空写真・全景 磯岡遺跡 SG9 区 全景(北から) 磯岡遺跡 SG9 区 全景(北西から) 磯岡遺跡 SG9 区 全景(南東から) 磯岡遺跡 5 区(右)と SG9 区(左) 磯岡遺跡 5 区(右)と SG9 区(左)	上位は浅間 B・下位は FA テフラ SG2 区 A 区東端部の浅間 B テフラ面(東から) SG2 区 A 区浅間 B テフラ面(上)と土層断面(南から) SG2 区 A 区流路 1 北側の土層断面(西から) SG2 区 A 区 FA 下面の木(南から) SG2 区 B 区東端浅間 B テフラ面(南から) 手前は試掘トレンチ SG2 区 B 区流路 1FA テフラ降下状況(南東から)
図版二	磯岡遺跡 SG9 区 古墳時代の竪穴建物跡・時期不明の溝 SG9 区 SI-49a・b 全景(南から) SG9 区 SI-49a・b 南東部(南から) SG9 区 SI-49b 貯蔵穴 P6 土層断面(南から) SG9 区 SI-49a 貯蔵穴 P7(北から) SG9 区 SI-49a 貯蔵穴 P7 遺物出土状況(南から) SG9 区 SI-49a・b 炉(東から) SG9 区 SD-40(南から)	図版一〇 権現山遺跡 SG2 区 B 区流路 1～3 SG2 区 B 区流路 1 流木の状況(南東から) SG2 区 B 区流路 2 東半分遺物とテフラ(南東から) SG2 区 B 区全景(東から、手前は流路 2) SG2 区 B 区流路 2 北西部遺物出土状況(南東から) SG2 区 B 区流路 3 中央部遺物出土状況(南から) SG2 区 B 区流路 3 中央部遺物(北から) SG2 区 B 区流路 3 南部遺物(南西から)
図版三	権現山遺跡 SG2 区 全景 SG2 区 全景(北から) SG2 区 全景(北から) SG2 区 A 区全景(南東から) SG2 区 C 区全景(東から)	図版一一 権現山遺跡 SG2 区 C 区流路 2・3・4 SG2 区 C 区流路 4 東端(東から) SG2 区 C 区東部流路 4 縄文土器出土状況(東から) SG2 区 C 区流路 2(左)・流路 4(右)土層断面(西から) 上位が浅間 B・中位が FA・下位が浅間 C テフラ SG2 区 C 区中央部東半分流路 4 土層断面(西から) 上位が浅間 B・中位が FA・下位が浅間 C テフラ SG2 区 C 区流路 4 中央部東半分 FA 層及び遺物(西から) SG2 区 C 区流路 2(奥)・流路 4(手前)遺物出土状況(南から) SG2 区 C 区流路 3・4FA テフラの降下範囲(西から) SG2 区 C 区流路 3・4 上部 FA テフラ降下状況(西から)
図版四	権現山遺跡 SG2 区 古墳時代の土坑・時期不明の土坑 SG2 区 A 区 SK-100・101・102 付近(北東から) SG2 区 SK-100(右)・左は SK-101・102(南東から) SG2 区 SK-100 遺物出土状況(南東から) SG2 区 SK-103 遺物出土状況(南西から) SG2 区 SK-103 土層断面(南から) SG2 区 SK-1(南から) SG2 区 SK-2(南から) SG2 区 SK-36(北から)	図版一二 権現山遺跡 SG2 区 C 区流路 4 SG2 区 C 区中央部流路 4FA テフラ降下状況(西から) SG2 区 C 区浅間 C テフラ降下状況(西から) 手前は SK-103・右は流路 4 SG2 区 C 区中央部流路 4(東から) SG2 区 C 区流路 4 SP7-SP8 土層断面と FA テフラ(東から) SG2 区 C 区流路 4 SP6 北側の土層断面(南西から) 中位に FA テフラ SG2 区 C 区流路 4 SP4 北側の土層断面(南西から) 最上層に浅間 B・中位に FA テフラ SG2 区 C 区流路 4 SP2 北側の土層断面(西から) 最上層に浅間 B・中位に FA テフラ SG2 区 C 区中央部北半分流路 4 遺物出土状況(東から)
図版五	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 SG2 区 SK-3～8・SK-16(南から) SG2 区 SK-5 遺物出土状況(北から) SG2 区 SK-6 土層断面(南から) SG2 区 SK-7 土層断面(南から) SG2 区 SK-8 土層断面(南から) SG2 区 SK-8(中央)とその周辺(東から) SG2 区 SK-9 土層断面(南から) SG2 区 SK-10 土層断面(南から)	図版一三 権現山遺跡 SG2 区 C 区流路 4・D 区流路 5 SG2 区 C 区西半分流路 4 遺物出土状況(南から) SG2 区 C 区西半分流路 4 須恵器杯出土状況(南から) SG2 区 D 区流路 5 東半分 FA 層の土層断面(西から) SG2 区 D 区流路 5 東半分 FA 層上面(西から) SG2 区 D 区流路 5 東半分 FA 層上面(東から) SG2 区 D 区流路 5 東半分 FA 層上面(東から) SG2 区 D 区流路 5 東半分(東から) SG2 区 D 区流路 5 東半分土層断面(東から) 中位は FA 層
図版六	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 SG2 区 SK-11(南から) SG2 区 SK-12(左)・13(右)(南から) SG2 区 SK-12(手前)・13(左上)(西から) SG2 区 SK-15(東から) SG2 区 SK-7(中央)・16(左)(南から) SG2 区 SK-17 遺物出土状況(東から) SG2 区左奥から SK-12・13・14・18(東から) SG2 区 SK-15(中央)・18(奥)(東から)	図版一四 権現山遺跡 SG2 区 D 区・E 区・F 区 流路 5～7 SG2 区 D 区流路 5 中央部 FA 層上面(西から) SG2 区 D 区流路 5 中央部土層断面(西から) SG2 区 D 区流路 5 中央部(西から) SG2 区 D 区中央部黒色土層中の遺物集中地区(西から) SG2 区 E 区流路 7(北東から) SG2 区 E 区遺物出土状況及び流路 6(奥)(南から) SG2 区 F 区流路 7(手前)と土坑群(西から)
図版七	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 SG2 区 SK-18(南から) SG2 区 SK-19(東から) SG2 区 SK-20 遺物出土状況(西から) SG2 区 SK-24(左)・25(中央)・26(右)(南から) SG2 区 F 区 SK-26(北東から) SG2 区 SK-26(南から) SG2 区 SK-29(奥)・28a・28b(手前)(南から) SG2 区 SK-29(奥)・28a・28b(手前)(南から)	図版一五 権現山遺跡 SG5 区 航空写真 SG5 区 全景(北東上空から) SG5 区 全景(東上空から)
図版八	権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑・溝・集石遺構 SG2 区 SK-31(奥)・32(手前)(南から) SG2 区 SK-33 土層断面(南から) SG2 区 SK-34～43 付近(南東から) SG2 区 F 区 SD-46(東から) SG2 区 SX-47(南から) SG2 区 SX-47(真上から) SG2 区 SX-47(南から) SG2 区 SX-47(南東から)	図版一六 権現山遺跡 SG5 区 航空写真 SG5 区 全景(西上空から) SG5 区 全景(南上空から)
図版九	権現山遺跡 SG2 区 A 区の土層・B 区流路 1 と流路 2 SG2 区 A 区流路 1 西半分浅間 B テフラ面(左上)(南から) SG2 区 A 区流路 1 中央部土層断面(南から)	

- 図版一七 権現山遺跡 SG5 区 航空写真
SG5 区 北半部 (南上空から)
SG5 区 北半部 (南上空から)
白線は方形柵列遺構 SA-151
- 図版一八 権現山遺跡 SG5 区 航空写真
SG5 区 北半部 (東上空から)
白線は方形柵列遺構 SA-151
SG5 区 北半部 (東上空から)
SG5 区 中央部 (西上空から)
- 図版一九 権現山遺跡 SG5 区 豪族居館跡
SG5 区 SA-151 全景 (真上から)
SG5 区 SA-151 南東部 (西から)
SG5 区 SA-151 ビット土層断面 (南から)
SG5 区 SA-151 柱穴 P33 土層断面 (東から)
SG5 区居館北辺溝 SD-43 (西から、右は SD-44)
SG5 区 SD-43 遺物出土状況 (南東から)
SG5 区居館南辺溝 SD-227 (南から)
SG5 区 SD-227 遺物出土状況 (南西から)
- 図版二〇 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-1 全景 (南から)
SG5 区 SI-1 遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-1 カマド土層断面 (南から)
SG5 区 SI-1 カマド遺物出土状況 (西から)
SG5 区 SI-1 貯蔵穴掘方 (西から)
SG5 区 SI-1 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-2 全景及び遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-2 掘方 (南から)
- 図版二一 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-2 貯蔵穴 P5 (北から)
SG5 区 SI-2 P6(左)・P7(右) (東から)
SG5 区 SI-2 カマド (東から)
SG5 区 SI-3 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-3 貯蔵穴 P3 遺物出土状況 (西から)
SG5 区 SI-3 カマド土層断面 (東から)
SG5 区 SI-3 カマド土層断面 (南から)
SG5 区 SI-3 カマド全景 (南から)
- 図版二二 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-4 全景及び遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-4 張出ビット (南から)
SG5 区 SI-4 北西部遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-5 全景 (南から)
SG5 区 SI-5 遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-5 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-5 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)
- 図版二三 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-5 北部遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-5 南部遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-5 北東部遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-6 全景 (南から)
SG5 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-6 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-6 石製模造品出土状況 (東から)
SG5 区 SI-6 北東部遺物出土状況 (東から)
- 図版二四 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-6 カマド遺物出土状況 (北から)
SG5 区 SI-6 カマド土層断面 (東から)
SG5 区 SI-6 カマド (南から)
SG5 区 SI-6 カマド遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-6 カマド土層断面 (南から)
SG5 区 SI-7 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-7 掘方 (南から)
SG5 区 SI-7 カマド (南から)
- 図版二五 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物
SG5 区 SI-7 カマド掘方 (南から)
SG5 区 SI-8 掘方 (南から)
SG5 区 SI-8 全景 (東から)
SG5 区 SI-8 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-8 土層断面 (南から)
SG5 区 SI-8 遺物出土状況 (南東から)
SG5 区 SI-8 カマド (南から)
- 図版二六 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-8 貯蔵穴土層断面 (南から)
SG5 区 SI-9 全景 (南から)
SG5 区 SI-9 掘方 (南から)
SG5 区 SI-9 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-9 土層断面 (南西から)
SG5 区 SI-9 貯蔵穴遺物出土状況 (北から)
SG5 区 SI-9 貯蔵穴 P5 土層断面 (南西から)
- 図版二七 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-9 カマド土層断面 (東から)
SG5 区 SI-9 南東主柱穴 P4 上部の杯 (南から)
SG5 区 SI-10 全景 (南から)
SG5 区 SI-10 掘方 (南から)
SG5 区 SI-10 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-10 土層断面 (南から)
SG5 区 SI-10 カマド土層断面 (東から)
SG5 区 SI-10 カマド土層断面 (南から)
- 図版二八 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-11 全景 (南から)
SG5 区 SI-11 掘方全景 (南から)
SG5 区 SI-11 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-11 貯蔵穴 P5 土層断面 (南から)
SG5 区 SI-11 南東部遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-11 高杯出土状況 (南から)
SG5 区 SI-11 甕出土状況 (北から)
SG5 区 SI-11 小形壺出土状況 (北から)
- 図版二九 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-12 全景 (東から)
SG5 区 SI-12 掘方 (南から)
SG5 区 SI-12 遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-12 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)
SG5 区 SI-12 カマド (西から)
SG5 区 SI-13 全景及び遺物出土状況 (南東から)
SG5 区 SI-13 カマド (南東から)
SG5 区 SI-14 全景 (南から)
- 図版三〇 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-14 カマド遺物出土状況 (南東から)
SG5 区 SI-14 カマド西側石製玉出土状況 (南西から)
SG5 区 SI-14 貯蔵穴土層断面 (南から)
SG5 区 SI-15 全景及び遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-15 掘方 (南から)
SG5 区 SI-15 南部編物石出土状況 (北西から)
SG5 区 SI-15 カマド (南から)
SG5 区 SI-15 カマド遺物出土状況 (南東から)
- 図版三一 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-15 カマド掘方 (南から)
SG5 区 SI-16 全景及び遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-16 北半部掘方及び貼床 (東から)
SG5 区 SI-16 カマド (南から)
SG5 区 SI-16 カマド土層断面 (東から)
SG5 区 SI-17 全景及び遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-17 掘方 (南から)
SG5 区 SI-17 炬 (南から)
- 図版三二 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-17 北部遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-17 南部遺物出土状況 (北から)
SG5 区 SI-17 貯蔵穴土層断面 (南から)
SG5 区 SI-18 全景及び遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-18 掘方 (南から)
SG5 区 SI-18 貯蔵穴土層断面 (南から)
SG5 区 SI-18 カマド (南から)
SG5 区 SI-18 カマド土層断面 (南から)
- 図版三三 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-19 堀方全景 (南から)
SG5 区 SI-19 全景及び現地説明会 (南東から)
SG5 区 SI-19 カマド東側遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-19 北東部遺物出土状況 (北西から)
SG5 区 SI-19 カマド (南から)
SG5 区 SI-19 東袖付近遺物出土状況 (南から)
SG5 区 SI-20 全景 (西から)
- 図版三四 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-20 遺物出土状況 (西から)
SG5 区 SI-20 カマド (西から)
SG5 区 SI-20 カマド土層断面 (西から)
SG5 区 SI-20 カマド土層断面 (南から)
SG5 区 SI-20 南東部遺物出土状況 (西から)
SG5 区 SI-21 全景及び遺物出土状況 (西から)
SG5 区 SI-21 掘方 (西から)
SG5 区 SI-21 貯蔵穴 (西から)
- 図版三五 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡
SG5 区 SI-21 貯蔵穴 (南から)
SG5 区 SI-21 カマド遺物出土状況 (西から)
SG5 区 SI-21 カマド遺物出土状況 (北西から)
SG5 区 SI-21 カマド (西から)
SG5 区 SI-21 カマド土層断面 (西から)

	SG5 区 SI-22 全景 (南西から)	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (西から)
	SG5 区 SI-22 遺物出土状況 (西から)	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-23 全景 (南から)	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (南から)
図版三六	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (東から)
	SG5 区 SI-23 掘方 (南から)	図版四五
	SG5 区 SI-23 カマド (西から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SI-23 貯蔵穴 (南から)	SG5 区 SK-31 遺物出土状況 (東から)
	SG5 区 SI-23 貯蔵穴土層断面と FA (南から)	SG5 区 SK-34 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-24 全景及び遺物出土状況 (西から)	SG5 区 SK-35 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-24 掘方 (西から)	SG5 区 SK-47 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-24 遺物出土状況 (北から)	SG5 区 SK-51 遺物出土状況 (南から)
図版三七	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SK-51 土層断面と FA 及び遺物 (南から)
	SG5 区 SI-24 炉 (東から)	SG5 区 SK-82 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-25 全景 (南から、右は SI-23)	SG5 区 SK-86 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-25 掘方 (南から)	図版四六
	SG5 区 SI-25 貯蔵穴土層断面 (南西から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SI-26 全景 (南から)	SG5 区 SK-92 土層断面 (東から)
	SG5 区 SI-26 遺物出土状況 (南から)	SG5 区 SK-96 遺構確認状況及び遺物 (南から)
	SG5 区 SI-26 1 層除去状態とカマド (南から)	SG5 区 SK-98 (北東から、手前は SD-42)
	SG5 区 SI-26 カマド (西から)	SG5 区 SK-106 (北東から)
図版三八	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SK-106 土層断面と FA 及び遺物 (南西から)
	SG5 区 SI-26 カマド土層断面 (西から)	SG5 区 SK-110 (南から)
	SG5 区 SI-26 貯蔵穴 (西から)	SG5 区 SK-111 (南から)
	SG5 区 SI-28 全景 (南から)	SG5 区 SK-112 (南から)
	SG5 区 SI-28 掘方 (南から)	図版四七
	SG5 区 SI-28 貯蔵穴土層断面 (南から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SI-28 カマド (南から)	SG5 区 SK-121 (東から)
	SG5 区 SI-28 カマド土層断面 (南から)	SG5 区 SK-130 (南から)
	SG5 区 SI-28 カマド掘方 (南から)	SG5 区 SK-140 (南から)
図版三九	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SK-142 (南から)
	SG5 区 SI-29a・b(左下) 周辺 (南東から)	SG5 区 SK-144 (南から)
	SG5 区 SI-29a 全景 (南から)	SG5 区 SK-145 (南から)
	SG5 区 SI-29a・b 掘方 (南から)	SG5 区 SK-149 (南から)
	SG5 区 SI-29a 南東部遺物出土状況 (北から)	図版四八
	SG5 区 P-255 を SI-29a・b(左) が切る状況 (南から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SI-45 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)	SG5 区 SK-181 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-95 全景 (南西から、右上は SI-6)	SG5 区 SK-181 土層断面と軽石層 (南から)
	SG5 区 SI-95 掘方 (南から)	SG5 区 SK-185 (南から)
図版四〇	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SK-186 南 (東から)
	SG5 区 SI-99 掘方 (南から)	SG5 区 SK-186 北 (東から)
	SG5 区 SI-100 全景 (南から)	SG5 区 SK-186 北 (東から)
	SG5 区 SI-100 遺物出土状況 (南東から)	SG5 区 SK-187(左)・188(右) (南から)
	SG5 区 SI-100 遺物出土状況 (南西から)	SG5 区 SK-189 土層断面 (南から)
	SG5 区 SI-100 遺物出土状況 (南から)	図版四九
	SG5 区 SI-100 貯蔵穴土層断面 (南から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SI-100 遺物出土状況 (西から)	SG5 区 SK-190 土層断面及び遺物 (南東から)
	SG5 区 SI-107 カマド (南から)	SG5 区 SK-191 遺物出土状況 (南から)
図版四一	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SK-191 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-107 全景 (南から)	SG5 区 SK-192 (南から)
	SG5 区 SI-107 カマド土層断面 (南から)	SG5 区 SK-193 土層断面 (北から)
	SG5 区 SI-116 全景及び遺物出土状況 (東から)	SG5 区 SK-194 (南から)
	SG5 区 SI-116 掘方 (東から)	SG5 区 SK-195 土層断面と FA 及び遺物 (南から)
	SG5 区 SI-116 貯蔵穴及び遺物出土状況 (南から)	SG5 区 SK-196 遺物出土状況 (東から)
	SG5 区 SI-116 貯蔵穴土層断面 (東から)	図版五〇
	SG5 区 SI-116 貯蔵穴 (南から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
図版四二	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の竪穴建物跡	SG5 区 SK-197 (南から)
	SG5 区 SI-137 現地説明会 (西から)	SG5 区 SK-198 遺物出土状況 (南から)
	SG5 区 SI-137 全景 (西から)	SG5 区 SK-202 土層断面と遺物 (北から)
	SG5 区 SI-137 掘方 (西から)	SG5 区 SK-203 FA 及び遺物出土状況 (南東から)
	SG5 区 SI-137 カマド (西から)	SG5 区 SK-203 土層断面と FA 及び遺物 (東から)
	SG5 区 SI-137 カマド西半部土層断面 (南から)	SG5 区 SK-203 遺物出土状況 (東から)
	SG5 区 SI-137 貯蔵穴 P5 (西から)	SG5 区 SK-203 遺物出土状況 (南西から)
	SG5 区 SI-137 貯蔵穴 P6 (西から)	SG5 区 SK-203 (東から)
	SG5 区 SI-155 掘方 (南から)	図版五一
図版四三	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の溝	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SD-41 土層断面 A-A' (南西から)	SG5 区 SK-204 土層断面 (南から)
	SG5 区 SD-41 土層断面 D-D' (南から)	SG5 区 SK-205a(左)・205b(右) (北西から)
	SG5 区 SD-41・42・SI-11 トレンチ北壁 (南東から)	SG5 区 SK-205a(手前)・205b(奥) (東から)
	SG5 区 SD-42 土層断面 C-C' (西から)	SG5 区 SK-205a・b 土層断面 (南から)
	SG5 区 SD-44 東端部遺物出土状況 (南東から)	SG5 区 SK-205a・b 土層断面と遺物 (西から)
	SG5 区 SD-42 東部 (南から、手前は SK-98)	SG5 区 SK-206 (北から)
	SG5 区 SD-43(左)・44(右) (南西から)	SG5 区 SK-208 (西から)
図版四四	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の溝・遺物集中地点	SG5 区 SK-208 土層断面と FA (北から)
	SG5 区 SD-44 遺物出土状況 (南東から)	図版五二
	SG5 区 SD-101 中央部東半 (南から)	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑
	SG5 区 SX-118 全景及び遺物出土状況 (東から)	SG5 区 SK-210 遺物出土状況 (西から)
	SG5 区 SX-118 遺物出土状況 (北東から)	SG5 区 SK-218 土層断面 (北東から)
		SG5 区 SK-211 遺物出土状況 (南から)
		SG5 区 SK-212 (南から)
		SG5 区 SK-213 北 遺物出土状況 (西から)
		SG5 区 SK-219 遺物出土状況 (南から)
		SG5 区 SK-223 (北から)
		SG5 区 SK-224 (南から)
		SG5 区 SK-224 遺物出土状況 (南東から)
図版五三	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代・平安時代・中世の土坑	SG5 区 SK-247・248・249・250・251 (東から)

- SG5 区 SK-247 遺物出土状況 (東から)
 SG5 区 SK-248 遺物出土状況 (南から)
 SG5 区 SK-249 土層断面 (南から)
 SG5 区 SK-250 土層断面 (北から)
 SG5 区 SK-120 遺物出土状況 (東から)
 SG5 区 SK-120 土層断面及び遺物 (東から)
 SG5 区 SK-138 (南から)
- 図版五四 権現山遺跡 SG5 区 中世～近世の溝・時期不明の掘立柱建物跡と井戸跡**
 SG5 区 SD-133 (南から、手前は SX-118)
 SG5 区 SD-135 全景 (南から)
 SG5 区 SD-135 土層断面 (東から)
 SG5 区 SB-154 全景 (南から)
 SG5 区 SB-157 全景 (南から)
 SG5 区 SB-159 全景 (南西から)
 SG5 区 SE-114 全景 (東から)
 SG5 区 SE-127 全景 (南から)
- 図版五五 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の井戸跡・時期不明の溝状遺構**
 SG5 区 SE-136 全景 (南から)
 SG5 区 SE-136 土層断面 (東から)
 SG5 区 SE-216 土層断面 (西から、左上部は SD-135)
 SG5 区 SD-108 土層断面 (東から)
 SG5 区 SD-115 確認状況 (南から)
 SG5 区 SD-148 南西部 (南から)
- 図版五六 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑・時期不明の柱穴状土坑**
 SG5 区 SK-27 (南から)
 SG5 区 SK-33 (西から、奥は SK-34)
 SG5 区 SK-32 (南から)
 SG5 区 SK-33 (北東から)
 SG5 区 SK-36 (東から)
 SG5 区 SK-37 遺物出土状況 (東から)
 SG5 区 SK-38 (北東から)
 SG5 区 SK-39 遺物出土状況 (北東から)
 SG5 区 SK-40 遺物出土状況 (東から)
- 図版五七 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑**
 SG5 区 SK-46 (東から)
 SG5 区 SK-49 (南から)
 SG5 区 SK-50 (南から)
 SG5 区 SK-52 土層断面 (南から)
 SG5 区 SK-81 遺物出土状況 (東から)
 SG5 区 SK-83 (南から)
 SG5 区 SK-84 (南から)
 SG5 区 SK-81・83・84 (南から、中央は SK-82)
 SG5 区 SK-85 (南から)
- 図版五八 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑**
 SG5 区 SK-87 (南から)
 SG5 区 SK-88 遺物出土状況 (南から)
 SG5 区 SK-90 遺物出土状況 (南から)
 SG5 区 SK-91 土層断面 (南から)
 SG5 区 SK-94 (東から)
 SG5 区 SK-97 (南から)
 SG5 区 SK-103 遺物出土状況 (西から)
 SG5 区 SK-104 遺物出土状況 (南から)
- 図版五九 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑**
 SG5 区 SK-105 遺物出土状況 (南から)
 SG5 区 SK-109 (南から)
 SG5 区 SK-113 (南から)
 SG5 区 SK-117 遺物出土状況 (南から)
 SG5 区 SK-119 (南から)
 SG5 区 SK-123 (南から)
 SG5 区 SK-125 (西から)
 SG5 区 SK-126 (東から)
 SG5 区 SK-124 (東から)
- 図版六〇 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑**
 SG5 区 SK-128 (南から)
 SG5 区 SK-131 (手前)・132 (奥) (東から)
 SG5 区 SK-139 (南から)
 SG5 区 SK-141 (南から)
 SG5 区 SK-143 (南から)
 SG5 区 SK-146 (東から)
 SG5 区 SK-147 土層断面 (南から)
 SG5 区 SK-150 (南から)
 SG5 区 SK-152 (南から、右は SK-145)
 SG5 区 SK-153 (東から)
- 図版六一 権現山遺跡 SG5 区 低地部調査区**
 SG5 区 低地北西部 (南から)
- SG5 区 低地北部 (南から)
 SG5 区 低地南部 (南から)
 SG5 区 低地南東部 (南から)
 SG5 区 低地北部 (北から)
 SG5 区 低地中央部 SK-218 付近 (南西から)
 SG5 区 低地北端部 (西から)
 SG5 区 低地調査区北東壁の土層 (西から)
- 図版六二 権現山遺跡 SG9 区・磯岡遺跡 SG9 区 航空写真**
 SG9 区 全景 手前が磯岡遺跡・奥が権現山遺跡 (東上空から)
 SG9 区 全景 手前が権現山遺跡・奥が磯岡遺跡 (西上空から)
- 図版六三 権現山遺跡 SG9 区・磯岡遺跡 SG9 区 航空写真**
 SG9 区 全景 右が磯岡遺跡・左が権現山遺跡 (南上空から)
 SG9 区 全景 右が権現山遺跡・左が磯岡遺跡 (北上空から)
- 図版六四 権現山遺跡 SG9 区 時期不明の遺構・時期不明の土坑**
 SG9 区 SK-37 FA 堆積状況 (南東から)
 SG9 区 SK-37 (南東から)
 SG9 区 西区北部 SX-54 (南から、左は SK-59)
 SG9 区 SX-54 北西部 (東から)
 SG9 区 SX-54 (西から)
 SG9 区 SK-9 土層断面 (北西から)
 SG9 区 SK-11～14 (南から)
 SG9 区 SK-39 (西から)
- 図版六五 権現山遺跡 SG9 区 時期不明の土坑・溝**
 SG9 区 SK-57 (右)・58 (左) (北から)
 SG9 区 SK-59 (東から)
 SG9 区 SK-64 (北から)
 SG9 区 SD-7 遺物出土状況 (北西から)
 SG9 区 SD-8 (北から)
 SG9 区 SD-38 (北西から)
 SG9 区 SD-38 (南から)
- 図版六六 権現山遺跡 SG9 区 低地部調査区**
 SG9 区 中央区南東部低地と SD-7 付近 (北から)
 SG9 区 中央区南東部低地と SD-7 付近 (南から)
 SG9 区 中央区南東部低地 (南から)
 SG9 区 中央区南東部低地土層断面 A-A' (東から)
 SG9 区 中央区南東部低地土層断面 C-C' (西から)
 SG9 区 中央区南東部低地 6.5-23.5 グリッド 遺物出土状況 (南西から)
 SG9 区 中央区南東部低地土層断面 D-D' (南から)
 SG9 区 中央区南東部低地土層断面 E-E' (南から)
- 図版六七 権現山遺跡 SG10 区 航空写真**
 SG10 区 全景 (東上空から)
 SG10 区 全景 (西上空から)
- 図版六八 権現山遺跡 SG10 区 航空写真**
 SG10 区 全景 (南上空から)
 SG10 区 全景 (北上空から)
- 図版六九 権現山遺跡 SG10 区 縄文時代の竪穴建物跡・土坑**
 SG10 区 SI-63 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-63 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-63 炉・炭化物確認状況 (南から)
 SG10 区 SI-63 南東部遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-63 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-63 有孔円盤形土製品出土状況 (北東から)
 SG10 区 SI-63 炉 (南から)
 SG10 区 SK-219 (東から)
- 図版七〇 権現山遺跡 SG10 区 縄文時代の土坑・弥生時代の土坑**
 SG10 区 SK-265 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SK-307 (南から) 奥は SD-204
 SG10 区 SK-443 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-697 溝は SD-527・711 (北東から)
 SG10 区 SK-697・SD-527 土層断面 (北から)
 SG10 区 SK-699 SD-527 に切られる状況 (南から)
 SG10 区 SK-699・SD-527 土層断面 (西から)
 SG10 区 SK-544 (南から) 右は SK-543
- 図版七一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10 区 SI-2 全景 (南から)
 SG10 区 SI-2 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-2 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-2 間仕切溝 D4 (東から)
 SG10 区 SI-2 間仕切溝 D3 (上)・D2 (右) (東から)
 SG10 区 SI-2 貯蔵穴 P5 土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-2 炉 (西から)
 SG10 区 SI-6 全景 (南から)

図版七二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-6 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-6 掘方 (南東から)
 SG10 区 SI-6 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-6 貯蔵穴 P6 土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-6 間仕切溝 D3 (手前 D3・奥 D4 南から)
 SG10 区 SI-6 間仕切溝 D2 (南から)
 SG10 区 SI-9 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-9 掘方 (南から)

図版七三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-9 焼土土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-10 全景 (南から)
 SG10 区 SI-10 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-10 掘方 (南西から) 手前は SI-88
 SG10 区 SI-10 カマド (南から)
 SG10 区 SI-10 カマド掘方 (南から)
 SG10 区 SI-10 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (北から)
 SG10 区 SI-12 全景及び遺物出土状況 (南から)

図版七四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-12 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-12 カマド土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-13 (右)・SI-85 (左) 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-13・SI-85 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-13・SI-85 土層断面南部 (東から)
 SG10 区 SI-13・SI-85 土層断面北部 (東から)
 SG10 区 SI-13 貯蔵穴土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-14 全景及び遺物出土状況 (南から)

図版七五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-14 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-14 カマド (南から)
 SG10 区 SI-14 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-15 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-15 掘方 (東から)
 SG10 区 SI-15 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-15 貯蔵穴 P6 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-15 床下の間仕切溝 D1 (南から)
 SG10 区 SI-15 床下の間仕切溝 D2 (南から)

図版七六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-16 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-16 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-16 炉 (南から)
 SG10 区 SI-16 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-16 貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-16 床下の間仕切溝 D1 (南から)
 SG10 区 SI-16 床下の間仕切溝 D2 (南から)
 SG10 区 SI-18a・18b・18c 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-18a・18b 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (南から)

図版七七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-18c 貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-19a・19b 全景及び遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-19a・19b 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SI-19 掘方 (東から)
 SG10 区 SI-19b 貯蔵穴 P7 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-19a・19b 炉 3 (東から)
 SG10 区 SI-20 全景及び遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-20 掘方 (西から)

図版七八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-20 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-20 貯蔵穴土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-21a・b 全景 (東から、左は SI-19・20)
 SG10 区 SI-21a カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-21a 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-22 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-22 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-22 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)

図版七九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-23 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-23 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-23 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-23 貯蔵穴 P4 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-24 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-24 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-24 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-25 全景及び遺物出土状況 (北東から)

図版八〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-25 掘方 (南東から)
 SG10 区 SI-25 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南東から)

SG10 区 SI-25 炉 (南東から)
 SG10 区 SI-28 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-28 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-28 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-28 貯蔵穴 P6 遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-28 P7 土層断面及び遺物 (南から)

図版八一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-30 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-30 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-30 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-30 貯蔵穴 P5 周辺遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-30 炉 (北から)
 SG10 区 SI-32 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-32 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-32 南西部遺物出土状況 (南から)

図版八二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-32 カマド (西から)
 SG10 区 SI-32 貯蔵穴土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-33 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-33 北西部遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-33 北東部遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SI-33 西部土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-33 東半部土層断面 (南から)

図版八三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-33 北半部土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 南半部土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 P5 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 貯蔵穴 P6 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 炉 1 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-33 炉 2 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34a・b・c 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-34a・b・c 西側柱穴・貼床 M-M' 土層断面 (西から)

図版八四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-34a・b・c 貼床 J-J'・M-M' 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34a 北部の遺物 (南から)
 SG10 区 SI-34a カマド南側の遺物 (北東から)
 SG10 区 SI-34a 中央部遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-34a 中央部遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-34a カマド裏出土状況 (南東から)
 SG10 区 SI-34a・b 北東主柱穴 P1a・b 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34b・c 南西主柱穴 (西から、右 b 期・左 c 期)

図版八五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-34b 南西主柱穴 P3b (南から)
 SG10 区 SI-34a・b P4・P11 付近貼床土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-34b 入口ピット土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-34c 入口ピット P5c 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-34a・b・c の入口ピット P5a～c (南東から)
 SG10 区 SI-34a・b 貯蔵穴 P6a・b (北から)
 SG10 区 SI-34a 貯蔵穴南側土層断面 I-I' (東から)
 SG10 区 SI-34c 貯蔵穴 P6c 土層断面 (南から)

図版八六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-34b P7 (東から、右が新期)
 SG10 区 SI-34a P8 付近土層断面 C-C' (南東から、奥は SD-263)
 SG10 区 SI-34a・b P8a・b 遺物出土状況 (南東から)
 SG10 区 SI-34a カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-34a・b・c カマド掘方 (南から)
 SG10 区 SI-34a カマド南側の小穴断面 C-C' (南から)
 SG10 区 SI-35 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-35 カマド (南から)

図版八七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡・竪穴鍛冶遺構
 SG10 区 SI-36 全景及び土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-36 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-36 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-37 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-37 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-37 カマド (南から)
 SG10 区 SI-37 カマド袖・火床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-37 貯蔵穴 P5 土層断面 (東から)

図版八八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-38 全景 (南から)
 SG10 区 SI-38 貼床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-38 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-38 貯蔵穴土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-39 掘方 (南から)

図版八九 SG10区 SI-39 カマド(南から)
 SG10区 SI-39 貯蔵穴 P5(南から)
 SG10区 SI-40 全景及び遺物出土状況(南から)
権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10区 SI-40 掘方(南から)
 SG10区 SI-40 カマド(南から)
 SG10区 SI-40 貯蔵穴 P5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-40 貯蔵穴 P6 土層断面(南東から)
 SG10区 SI-40 床下間仕切溝 D2(南から)
 SG10区 SI-40 北西部周溝 E-E'(南から)
 SG10区 SI-45 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-45 北部遺物出土状況(東から)
 図版九〇 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-45 南部遺物出土状況(東から)
 SG10区 SI-45 カマド遺物出土状況(東から)
 SG10区 SI-45 カマド火床土層断面(東から)
 SG10区 SI-45 貯蔵穴 P5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-47 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-47 南部遺物出土状況(東から)
 SG10区 SI-47 北部遺物出土状況(南東から)
 SG10区 SI-47 貯蔵穴 P6 土層断面(西から)
 図版九一 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-47 間仕切溝 D1(南から)
 SG10区 SI-48 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-48 掘方(西から)
 SG10区 SI-48 入口ピット P7 土層断面(東から)
 SG10区 SI-48 P8 土層断面(東から)
 SG10区 SI-48 炉土層断面(西から)
 SG10区 SI-49 全景(南から、奥は SE-232)
 SG10区 SI-49 貼床土層断面(南から)
 図版九二 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-50 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-50 掘方(南から)
 SG10区 SI-50 北東区遺物出土状況(南西から)
 SG10区 SI-50 南東区遺物出土状況(南西から)
 SG10区 SI-50 北東区遺物出土状況(西から)
 SG10区 SI-50 南東区東壁遺物出土状況(南西から)
 SG10区 SI-50 北東区床下黒褐色土層(南から)
 SG10区 SI-50 入口施設及び遺物出土状況(南から)
 図版九三 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-50 南東部(北東から)
 SG10区 SI-50 貯蔵穴 P10 遺物出土状況(北から)
 SG10区 SI-50 炉 1 土層断面(南西から)
 SG10区 SI-50 炉 2 土層断面(北から)
 SG10区 SI-50 炉 3 土層断面(南から)
 SG10区 SI-50 炉 4 土層断面(南から)
 SG10区 SI-50 炉 5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-50 炉 6 土層断面(南から)
 図版九四 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-50 炉 4・5・6(南から)
 SG10区 SI-50 南西区貼床土層断面(西から)
 SG10区 SI-50 北東区貼床土層断面(東から)
 SG10区 SI-50 間仕切溝 D1a 土層断面(南から)
 SG10区 SI-50 間仕切溝 D2 土層断面(東から)
 SG10区 SI-50 間仕切溝 D3(南から)
 SG10区 SI-50 間仕切溝 D4 土層断面(南から)
 SG10区 SI-50 間仕切溝 D5a 土層断面(南から)
 SG10区 SI-50 間仕切溝 D6a 土層断面(東から)
 SG10区 SI-51b・c 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-51a・b・c 掘方(南東から)
 図版九五 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-51a・b・c 南半部土層断面(東から)
 SG10区 SI-51a 貯蔵穴 P6(南から)
 SG10区 SI-51b 貯蔵穴 P5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-51b P3 西の間仕切溝 H-H'(南から)
 SG10区 SI-53 全景及び遺物出土状況(東から)
 SG10区 SI-53 土層断面(東から)
 SG10区 SI-53 炉土層断面(南東から)
 SG10区 SI-55 全景及び遺物出土状況(南から)
 図版九六 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-55 貯蔵穴 P5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-55 炉土層断面(東から)
 SG10区 SI-55 南東部貼床中の焼土(南から)
 SG10区 SI-56 掘方(南から)
 SG10区 SI-56 貯蔵穴 P3 遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-57 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-57 土層断面及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-57 貯蔵穴 P3 遺物出土状況(南から)

図版九七 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-57 入口施設 P4 土層断面(東から)
 SG10区 SI-57 炉土層断面(北から)
 SG10区 SI-58 掘方(南から)
 SG10区 SI-58 カマド掘方(南から)
 SG10区 SI-58 貯蔵穴 P10 土層断面(東から)
 SG10区 SI-58 カマド土層断面(東から)
 SG10区 SI-58 貼床土層断面(東から)
 SG10区 SI-58 北部貼床土層断面(西から)
 図版九八 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-59 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-59 貼床土層断面(南から)
 SG10区 SI-59 貯蔵穴土層断面(東から)
 SG10区 SI-60 全景及び遺物出土状況(東から)
 SG10区 SI-60 掘方(東から)
 SG10区 SI-60 東半部遺物出土状況(北東から)
 SG10区 SI-60 西端破壊部の貼床土層断面(西から)
 SG10区 SI-60 貯蔵穴 P12 遺物出土状況(南西から)
 図版九九 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-60 炉土層断面(北東から)
 SG10区 SI-60 間仕切溝 D1・D2(西から)
 SG10区 SI-60 間仕切溝 D3(東から)
 SG10区 SI-61 全景及び遺物出土状況(東から)
 SG10区 SI-61 掘方(東から)
 SG10区 SI-61 貯蔵穴周辺遺物出土状況(南西から)
 SG10区 SI-61 貯蔵穴土層断面及び遺物(東から)
 SG10区 SI-61 炉土層断面(北から)
 図版一〇〇 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-61 間仕切溝 D2 土層断面(北から)
 SG10区 SI-61 間仕切溝 D3 土層断面(北から)
 SG10区 SI-61 間仕切溝 D5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-61 間仕切溝 D7・D8(北東から)
 SG10区 SI-64a 全景(南から)
 SG10区 SI-64a 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-64a 遺物出土状況(東半)(南から)
 SG10区 SI-64a 遺物出土状況(西半)(南から)
 SG10区 SI-64a 遺物出土状況(南端中央)(南から)
 図版一〇一 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-64a 貯蔵穴 P5 土層断面(南から)
 SG10区 SI-64a 炉土層断面(南から)
 SG10区 SI-64a 間仕切溝 D2(南東から)
 SG10区 SI-64b 掘方(北東から)
 SG10区 SI-64b P10 土層断面(北西から)
 SG10区 SI-64b 貯蔵穴 P11 土層断面(西から)
 SG10区 SI-65 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-65 掘方(南から)
 図版一〇二 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-65 カマド付近遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-65 カマド遺物出土状況(南東から)
 SG10区 SI-65 カマド袖及び火床土層断面(南東から)
 SG10区 SI-65 カマド掘方(南から)
 SG10区 SI-65 柱穴 P1 石出土状況(南から)
 SG10区 SI-66 全景(南から)
 SG10区 SI-66 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-66 掘方(南から)
 図版一〇三 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-66 遺物出土状況(北西から)
 SG10区 SI-66 貯蔵穴土層断面及び遺物(西から)
 SG10区 SI-67 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-67 掘方(南から)
 SG10区 SI-67 入口部貼床土層断面(西から)
 SG10区 SI-67 FA テフラ堆積状況(北西から)
 SG10区 SI-67 南東部遺物出土状況(北東から)
 SG10区 SI-67 貯蔵穴 P5 及び遺物(西から)
 図版一〇四 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-67 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物(西から)
 SG10区 SI-69 全景及び遺物出土状況(南から)
 SG10区 SI-69 掘方(西から)
 SG10区 SI-69 掘方及び貯蔵穴周囲の高まり(南東から)
 SG10区 SI-69 南西部遺物出土状況(北東から)
 SG10区 SI-69 入口施設 P5(左)・P7(中央)・P8(右)(東から)
 SG10区 SI-69 貯蔵穴 P6 土層断面及び遺物(南から)
 SG10区 SI-69 北カマド袖及び南カマド土層断面(南西から)
 図版一〇五 **権現山遺跡 SG10区 古墳時代の竪穴建物跡**
 SG10区 SI-69 カマド貼床土層断面(南から)
 SG10区 SI-69 北カマド(西から)

SG10 区 SI-69 南カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-70 全景 (北から)
 SG10 区 SI-70 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-70 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-70 カマド土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-70 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (東から)

図版一〇六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-70 床下の間仕切溝 D1 (東から)
 SG10 区 SI-70 床下の間仕切溝 D2 (南から)
 SG10 区 SI-72 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-72 全景 (南から)
 SG10 区 SI-72 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-72 カマド遺物出土状況 (北から)
 SG10 区 SI-72 カマド土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-72 貯蔵穴土層断面 (東から)

図版一〇七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-73 全景及び遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-73 FA テフラ確認状況 (南から)
 SG10 区 SI-73 FA より上位の遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-73 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-73 貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-73 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-73 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-74・113a・113b 全景 (西から)

図版一〇八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-74 遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-74 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-74 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-74 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-74 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-74 カマド掘方 (西から)
 SG10 区 SI-74 貯蔵穴 P5 土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-74 炭化材・焼土出土状況 (西から)

図版一〇九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-75 全景 (南から)
 SG10 区 SI-75 テフラ堆積状況 (南から)
 SG10 区 SI-75 張出ピット P5 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-76 全景及び遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-76 貼床土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-76 入口施設土層断面及び遺物 (北東から)
 SG10 区 SI-76 入口施設遺物出土状況 (南東から)
 SG10 区 SI-76 焼土土層断面 (南東から)

図版一一〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-78 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-78 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-78 カマド土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-78 貯蔵穴周辺遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-78 貯蔵穴土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-79 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-79 北西部土層断面及び遺物 (東から)
 SG10 区 SI-79 覆土上面の FA と土層断面 (南から)

図版一一一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-79 焼土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-80 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-80 貼床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-80 南東部土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-80 貯蔵穴確認状況 (東から)
 SG10 区 SI-80 貯蔵穴 P5 土層断面 (北から、右は P6)
 SG10 区 SI-80 P7 (左)・P5 (右) 間の盛土断面 (東から)
 SG10 区 SI-80 炉土層断面 (北東から)

図版一一二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-81 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-81 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-81 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-82 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-82 北東部土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-83 全景及び遺物出土状況 (北西から)
 SG10 区 SI-83 掘方 (北西から)
 SG10 区 SI-83 土層断面 (南西から)

図版一一三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-83 南部杯出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-83 南端部土層断面 A-A' (南東から)
 SG10 区 SI-83 カマド遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-83 カマド土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-83 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-83 焼土 (北西から)
 SG10 区 SI-84 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-84 炭化物・焼土出土状況 (東から)

図版一一四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-84 貯蔵穴 (東から)
 SG10 区 SI-84 南部の炭化物 (南東から)
 SG10 区 SI-85 全景 (南から、右は SI-13)
 SG10 区 SI-85 カマド遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-85 貯蔵穴 P13 遺物出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-86 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-86 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-86 FA テフラ確認状況 (東から)

図版一一五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-86 テフラ降下面 (南から)
 SG10 区 SI-86 南東部遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-86 新期貯蔵穴 P3 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-86 旧期貯蔵穴 P5 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-86 南東部床下と旧期貯蔵穴 P6 (南から)
 SG10 区 SI-86 炉土層断面 (北西から)
 SG10 区 SI-87 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-87 掘方 (南から)

図版一一六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-87 カマド遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-87 カマド土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-88 全景 (南から、奥は SI-10)
 SG10 区 SI-88 掘方 (南から、奥は SI-10)
 SG10 区 SI-88 土層断面及び遺物 (南から)
 SG10 区 SI-88 貯蔵穴付近遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-88 貯蔵穴土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-88 炉土層断面 (東から)

図版一一七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-89a・b 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-89a 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a (南から、左は P11)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a を覆う貼床土 (北東から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a 遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a 下半遺物 (北から)
 SG10 区 SI-89a 旧貯蔵穴 P5a 最下部遺物 (北から)
 SG10 区 SI-89a 新貯蔵穴 P6a 及び周辺遺物 (南東から)

図版一一八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-89a P7a 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-89a・b 炉 (東から)
 SG10 区 SI-89b 貯蔵穴 P11b 土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D2 土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D3 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D4 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-89a 間仕切溝 D5 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-101 掘方 (南から)

図版一一九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-101 北部土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-101 貼床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-101 貯蔵穴土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-101 北西部遺物 13・14 出土状況 (南西から)
 SG10 区 SI-101 北東部遺物 17 出土状況 (北から)
 SG10 区 SI-104 全景及び遺物・焼土・炭化物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-104 全景 (南東から)
 SG10 区 SI-104 掘方 (南から)

図版一二〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-104 焼土・炭化物出土状況 (西から)
 SG10 区 SI-104 貯蔵穴 P3 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-104 貯蔵穴 P4 土層断面 (西から)
 SG10 区 SI-105 全景及び遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-105 掘方 (東から、右は SI-90)
 SG10 区 SI-105 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-105 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SI-106 全景及び遺物出土状況 (南から)

図版一二一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-106 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-106 貯蔵穴 P5 土層断面及び遺物 (西から)
 SG10 区 SI-106 炉土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-108 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-108 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-108 貯蔵穴 P3 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-108 炉土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-110 全景及び遺物出土状況 (南から)

図版一二二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-108・110 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-110 南部遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-110 貯蔵穴土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-111 テフラ確認状況 (東から)

- SG10 区 SI-111 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-111 貼床土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-111 東部掘方
 (南から、地山の白色は七本桜軽石)
 SG10 区 SI-111 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-111 土層断面 (東から)
- 図版一二三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-111 南西部土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-111 北東部土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-111 土層断面 (南西から)
 SG10 区 SI-111 貯蔵穴 P3 (北東から)
 SG10 区 SI-111 貯蔵穴 P5 土層断面 (北から)
 SG10 区 SI-111 貯蔵穴 P3 (北から、手前は P4)
 SG10 区 SI-111 貯蔵穴 P3 付近 (西から)
 SG10 区 SI-111 北西部板材痕跡 (南東から)
- 図版一二四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-111 東壁板材痕跡 (南から)
 SG10 区 SI-111 南壁板材痕跡 (西から)
 SG10 区 SI-111 炉土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-113a 全景 (西から、深い竪穴は SI-74)
 SG10 区 SI-113a 東部土層断面と遺物 (南から)
 SG10 区 SI-113a 貯蔵穴 P5 土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-113a 間仕切溝 D1 土層断面 (南から)
- 図版一二五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-113a (上層)・b (下層) 西壁中央 (南から)
 SG10 区 SI-113a (上層)・b (下層) 北東部 (東から)
 SG10 区 SI-113b 掘方 (西から)
 SG10 区 SI-113b 貯蔵穴 P5 土層断面
 (南から、手前は SI-113a 貯蔵穴)
 SG10 区 SI-114 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-114 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SI-115 全景 (南から)
 SG10 区 SI-115 土層断面 C-C' (南から)
- 図版一二六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の居館外郭の溝状遺構
 SG10 区 SD-43 遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SD-43 遺物出土状況 (東から、左は SD-44)
 SG10 区 SD-43 土層断面 B-B' (東から)
 SG10 区 SD-43 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-221 全景 (西から)
 SG10 区 SD-221 全景 (東から)
 SG10 区 SD-221 遺物出土状況 (東から、奥は SD-43)
 SG10 区 SD-221 土層断面 B-B' (東から)
- 図版一二七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-221 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-41・42 全景 (南から)
 SG10 区 SD-41・42 北部遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SD-41・42 北部遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SD-41・42 遺物出土状況
 (北から、右中央は SK-216)
 SG10 区 SD-41・42 (南から、左は SI-2)
 SG10 区 SD-41・42 南部遺物出土状況 (南から)
- 図版一二八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-41・42 遺物出土状況
 (南から、右は SK-207)
 SG10 区 SD-304a・b 全景 (北西から)
 SG10 区 SD-304b 南半部 (北西から、手前は SI-64)
 SG10 区 SD-304a・b (南から、手前は SI-64)
 SG10 区 SD-304b 遺物出土状況
 (南東から、手前は SD-204)
 SG10 区 SD-304a・b 北部土層断面 C-C' (南から)
 SG10 区 SD-304b 北部土層断面 E-E' (南東から)
- 図版一二九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-304b 北部 (南から、奥は SI-64)
 SG10 区 SD-304b 南部遺物出土状況
 (北西から、SD-501 ~ 503 間)
 SG10 区 SD-304b 南端遺物出土状況
 (北西から、手前は SD-204)
 SG10 区 SD-304b 南部土層断面 H-H' (南東から)
 SG10 区 SD-305 土層断面 (南から)
- 図版一三〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-319 全景 (南から)
 SG10 区 SD-319 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SD-509 全景 (南から)
 SG10 区 SD-509 土層断面 B-B' (南から)
 SG10 区 SD-527 全景 (南から)
 SG10 区 SD-527 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SD-527 土層断面 C-C' (南から)
- 図版一三一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-527 土層断面 E-E' (南から)
 SG10 区 SD-527 土層断面 F-F' (南から)
 SD10 区 SD-527 遺物 3・6 出土状況 (南東から)
 SG10 区 SD-527 遺物 4 出土状況 (南から)
 SG10 区 SD-533・534 (東から)
 SG10 区 SD-533 土層断面 (東から)
 SG10 区 SD-534 土層断面 C-C' (東から)
- 図版一三二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-534 土層断面 B-B' (東から)
 SG10 区 SD-534(左)・535(右) (東から)
 SG10 区 SD-535 (東から)
 SG10 区 SD-535 土層断面 F-F' (東から)
 SG10 区 SD-535 土層断面 G-G' (東から)
 SG10 区 SD-540 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-540 土層断面 B-B' (東から)
- 図版一三三 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構
 SG10 区 SD-540 全景 (東から)
 SG10 区 SD-594 西部遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SD-594 FA テフラ堆積状況 (東から)
 SG10 区 SD-594 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-594 土層断面 B-B' (東から)
 SG10 区 SD-696 (南から、中央は SD-527)
 SG10 区 SD-696 (西から、中央は SD-527)
- 図版一三四 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の溝状遺構・井戸跡
 SG10 区 SD-711 (北東から、下層に SK-697・SD-527)
 SG10 区 SD-711・527・SK-697 土層断面 B-B' (西から)
 SG10 区 SD-821 全景 (南東から)
 SG10 区 SD-821 北半部 (南東から)
 SG10 区 SD-821 北端部 (南西から)
 SG10 区 SD-821 土層断面 C-C' (南東から、下半は地山)
 SG10 区 SE-552 (東から、奥は SK-553a・553b)
 SG10 区 SE-552 (南東から)
- 図版一三五 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑
 SG10 区 SK-210 遺物出土状況 (南東から)
 SG10 区 SK-216 (南から、奥は SD-41・42)
 SG10 区 SK-217 (南から)
 SG10 区 SK-550 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-551 (南東から)
 SG10 区 SK-561 (南から)
 SG10 区 SK-571 (南から)
 SG10 区 SK-571 FA テフラ堆積状況 (南から)
- 図版一三六 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑・土坑
 SG10 区 SK-621 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-674 (南から)
 SG10 区 SK-29 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-46 (南から、中央は SK-261a)
 SG10 区 SK-91 (南東から)
 SG10 区 SK-94 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-95 土層断面 (東から、両側は SI-19)
 SG10 区 SK-207 遺物出土状況 (北から)
- 図版一三七 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑
 SG10 区 SK-208 遺物出土状況 (東から、中央は SD-201)
 SG10 区 SK-220 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-222 (南から、右は SK-5)
 SG10 区 SK-233 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-261a(奥)・b(手前) (南西から)
 SG10 区 SK-266 遺物出土状況 (南東から)
 SG10 区 SK-274 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SK-275 遺物出土状況 (南から)
- 図版一三八 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑
 SG10 区 SK-286 (南から)
 SG10 区 SK-292 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-293 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-339(左)・341(手前)・P-335(右奥) (南から)
 SG10 区 SK-343 土層断面 (北東から)
 SG10 区 SK-346 土層断面及び遺物 (南から)
 SG10 区 SK-439 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-449 遺物出土状況 (南から)
- 図版一三九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑
 SG10 区 SK-456 (南から)
 SG10 区 SK-543 (南西から、左は SK-544)
 SG10 区 SK-553a(左)・553b(右) 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-553a (南から)
 SG10 区 SK-553b (南から)
 SG10 区 SK-570 確認状況 (西から)
 SG10 区 SK-570 確認状況 (北東から)
 SG10 区 SK-570 土層断面 (北西から)

- 図版一四〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑・低地調査区
 SG10 区 SK-570 FA テフラ検出状況 (南から)
 SG10 区 SK-600 (南から)
 SG10 区 SK-683 (東から)
 SG10 区 SK-803 遺物出土状況 (北西から)
 SG10 区 SK-819 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-820a・b (南西から)
 SG10 区 SK-901～910 低地調査区全景 (南西から)
 SG10 区 SK-901 遺物出土状況 (西から)
- 図版一四一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑・低地調査区
 SG10 区 SK-902 (西から)
 SG10 区 SK-903(右)・904(左) 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-906 (東から)
 SG10 区 SK-908 (北東から)
 SG10 区 SK-908 土層断面 (北東から)
 SG10 区 SK-909 土層断面 (西から)
 SG10 区 SK-910 (東から)
 SG10 区 SK-910 土層断面 (東から)
- 図版一四二 権現山遺跡 SG10 区 平安時代の竪穴建物跡
 SG10 区 SI-90 全景 (南から)
 SG10 区 SI-90 全景及び遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SI-90 掘方 (南から)
 SG10 区 SI-90 貼床土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-90 土層断面 (東から)
 SG10 区 SI-90 カマド (南から)
 SG10 区 SI-90 カマド土層断面 (南から)
 SG10 区 SI-90 カマド土層断面 (東から)
- 図版一四三 権現山遺跡 SG10 区 平安時代の竪穴建物跡・土坑・古代の道路跡
 SG10 区 SI-90 カマド掘方 (南から)
 SG10 区 SK-235 土層断面及び遺物 (南東から、周囲は SI-30)
 SG10 区 SD-250a・b 遺構確認状況 (南から)
 SG10 区 SD-250a・b 全景 (南東から)
 SG10 区 SD-250a・b 全景 (南から)
 SG10 区 SD-250a・b 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-250a・b 土層断面 B-B' (南から)
 SG10 区 SD-250a・b 土層断面 C-C' (南から)
- 図版一四四 権現山遺跡 SG10 区 中世の井戸跡
 SG10 区 SE-232 上半部 (西から)
 SG10 区 SE-232 土層断面 (南から)
 SG10 区 SE-232 底面付近の遺物 (南から)
 SG10 区 SE-232 下半部 (南東から)
 SG10 区 SE-237 上半部 (南から)
 SG10 区 SE-237 土層断面 (南から)
 SG10 区 SE-237 底面付近の遺物 (南から)
 SG10 区 SE-237 全景 (南東から)
- 図版一四五 権現山遺跡 SG10 区 中世の井戸跡
 SG10 区 SE-252 上半部 (南から)
 SG10 区 SE-252 下半部土層断面 (南から)
 SG10 区 SE-252 全景及び遺物 (南から)
 SG10 区 SE-344 上半部土層断面 (東から)
 SG10 区 SE-344 土層断面 (東から)
 SG10 区 SE-344 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SE-344 全景 (東から)
 SG10 区 SE-377 上半部 (北東から)
- 図版一四六 権現山遺跡 SG10 区 中世の井戸跡・土坑
 SG10 区 SE-377 土層断面 (北東から)
 SG10 区 SE-377 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SE-377 全景 (東から)
 SG10 区 SE-569 上半部 (南から)
 SG10 区 SE-569 土層断面 (南から)
 SG10 区 SE-569 全景及び下半部の遺物 (南東から)
 SG10 区 SK-92 全景 (北西から)
 SG10 区 SK-251 土層断面及び遺物 (南東から)
- 図版一四七 権現山遺跡 SG10 区 近世の土坑・中世～近世の溝状遺構
 SG10 区 SK-71 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SD-263 (東から)
 SG10 区 SD-263 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-263 土層断面 B-B' (東から)
 SG10 区 SD-263 土層断面 C-C' (東から)
 SG10 区 SD-201a 西辺溝 (北から)
 SG10 区 SD-201a・204 合流点付近 (東から)
- 図版一四八 権現山遺跡 SG10 区 近世の溝状遺構
 SG10 区 SD-204 全景 (南から)
 SG10 区 SD-204 西辺溝 (北から)
 SG10 区 SD-204 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-204 土層断面 B-B' 北半 (西から)
 SG10 区 SD-204 土層断面 C-C' (南から)
 SG10 区 SD-204 土層断面 E-E' (南から)
 SG10 区 SD-204 土層断面 G-G' (南から)
 SG10 区 SD-204 土層断面 K-K' (南東から)
 SG10 区 SD-204 南端部 (南から、手前は SD-42)
- 図版一四九 権現山遺跡 SG10 区 近世の溝状遺構
 SG10 区 SD-503 北部 (西から)
 SG10 区 SD-503 北東部 (北から)
 SG10 区 SD-503 北西部 (北東から)
 SG10 区 SD-503 南部 (東から)
 SG10 区 SD-503 東部 (南から)
 SG10 区 SD-503 北東部 (南東から)
 SG10 区 SD-503 南西部・SI-64 付近 (南東から)
 SG10 区 SD-503 土層断面 A-A' (北から、右は SK-561)
- 図版一五〇 権現山遺跡 SG10 区 近世の溝状遺構・時期不明の掘立柱建物跡と焼土
 SG10 区 SD-503 土層断面 D-D' (南から、右は SD-527)
 SG10 区 SD-503 土層断面 I-I' (西から)
 SG10 区 SD-503 土層断面 K-K' (西から)
 SG10 区 SD-503 土層断面 L-L' (南から、手前は SK-513 断面)
 SG10 区 SD-503 土層断面 (東から、手前は S-S'・奥が R-R'、右は撓乱溝)
 SG10 区 SB-603 全景 (東から)
 SG10 区 SB-603 全景 (北から、手前は SD-503)
 SG10 区 SX-218 (南から)
- 図版一五一 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-205 (東から)
 SG10 区 SD-205 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-224 全景 (南東から)
 SG10 区 SD-224 北半部 (北東から)
 SG10 区 SD-224 中央部土層断面 (南から)
 SG10 区 SD-224 北部土層断面 (南から)
 SG10 区 SD-283 北部 (南から、下層は SI-37)
- 図版一五二 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-283 南部 (南から)
 SG10 区 SD-283 北端部 (北から)
 SG10 区 SD-283 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-283 土層断面 B-B' (南から)
 SG10 区 SD-505(奥)・506(手前) (東から)
 SG10 区 SD-283 土層断面 E-E' (南から)
 SG10 区 SD-505(左)・506(右) 土層断面 D-D' (東から)
- 図版一五三 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-506 (南から)
 SG10 区 SD-506 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-506 土層断面 B-B' (南から)
 SG10 区 SD-506 土層断面 C-C' (東から)
 SG10 区 SD-508 (西から、手前は SD-503)
 SG10 区 SD-508 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-510 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-518 (東から、手前は SK-519)
- 図版一五四 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-521a・b (南から、奥は SD-522)
 SG10 区 SD-521a・b 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-522 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-541(手前)・542(奥)・518(左) (東から)
 SG10 区 SD-541 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-542 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-542 土層断面 B-B' (東から)
- 図版一五五 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-542 土層断面 C-C' (東から)
 SG10 区 SD-560 (南東から、奥は SK-557～559)
 SG10 区 SD-560 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-686 (南東から、奥は SI-70)
 SG10 区 SD-686 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-814 全景 (南西から)
 SG10 区 SD-814 全景 (東から)
- 図版一五六 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-814 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SD-814 土層断面 (南東から)
 SG10 区 SD-814 調査区東壁 (北西から)
 SG10 区 SD-815 全景 (南から)
 SG10 区 SD-815 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-815 土層断面 B-B' (南から)
 SG10 区 SD-815・816 (南東から)
- 図版一五七 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構
 SG10 区 SD-816 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-816 土層断面 B-B' (南から)

SG10 区 SD-817 (手前)・818 (奥) (南から)
 SG10 区 SD-817 土層断面 A-A' (東から)
 SG10 区 SD-818 土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-823 全景及び土層断面 A-A' (南から)
 SG10 区 SD-826 (南から)
 SG10 区 SD-826 土層断面 A-A' (南から)
図版一五八 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸跡
 SG10 区 SE-236 上半部 (西から)
 SG10 区 SE-236 土層断面 (東から)
 SG10 区 SE-236 全景 (東から)
 SG10 区 SE-316 上半部 (南から)
 SG10 区 SE-316 全景 (南から)
 SG10 区 SE-345 上半部 (南東から)
 SG10 区 SE-345 土層断面 (北から)
 SG10 区 SE-345 底付近の遺物 (北から)
図版一五九 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸跡
 SG10 区 SE-345 土層断面 (北から)
 SG10 区 SE-345 全景 (北から)
 SG10 区 SE-352 上半部 (東から)
 SG10 区 SE-352 土層断面 (東から)
 SG10 区 SE-352 全景 (東から)
 SG10 区 SE-455 上半部 (南から)
 SG10 区 SE-455 土層断面 (北から)
 SG10 区 SE-455 全景 (北西から)
図版一六〇 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-1 (南から)
 SG10 区 SK-5 (南から)
 SG10 区 SK-68 (南から)
 SG10 区 SK-77 (東から、奥は SK-253)
 SG10 区 SK-202 (南から)
 SG10 区 SK-203 遺物出土状況 (東から)
 SG10 区 SK-209 (南から)
 SG10 区 SK-212 (東から)
 SG10 区 SK-213 (南から)
 SG10 区 SK-214 (南西から)
 SG10 区 SK-215 (南西から)
 SG10 区 SK-223 (東から)
 SG10 区 SK-225 (南から)
 SG10 区 SK-226 (南西から)
 SG10 区 SK-228 (手前)・229 (奥) (南から)
 SG10 区 SK-230 (南から)
 SG10 区 SK-231 (西から)
 SG10 区 SK-234 (北東から)
図版一六一 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-238 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-239 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-242 (南から、中央は P-245・246)
 SG10 区 SK-243 遺物出土状況 (北から)
 SG10 区 SK-253 (東から)
 SG10 区 SK-254 (東から)
 SG10 区 SK-262 (東から)
 SG10 区 SK-264 (北東から)
 SG10 区 SK-267 (南東から)
 SG10 区 SK-271 (南東から)
 SG10 区 SK-272 (東から)
 SG10 区 SK-273 (東から)
 SG10 区 SK-276 (東から)
 SG10 区 SK-287 (南から、下層は SI-56)
 SG10 区 SK-290 (南から)
 SG10 区 SK-294 (南から)
 SG10 区 SK-297 土層断面 (東から、右は SD-263)
 SG10 区 SK-298 土層断面 (東から)
図版一六二 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-306 (南から)
 SG10 区 SK-317 (南から)
 SG10 区 SK-318 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-321 (北西から、右は P-320)
 SG10 区 SK-327 (東から)
 SG10 区 SK-328 (東から)
 SG10 区 SK-329 (東から)
 SG10 区 SK-336 (右)・337 (左) (南から)
 SG10 区 SK-338 (南から)
 SG10 区 SK-347 (南から)
 SG10 区 SK-348 (南から)
 SG10 区 SK-349 (東から)
 SG10 区 SK-351 (西から)
 SG10 区 SK-353 (東から)
 SG10 区 SK-354 (東から)

SG10 区 SK-355 (北から)
 SG10 区 SK-372 (南東から)
 SG10 区 SK-405 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-408 (南から)
図版一六三 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-447 (東から)
 SG10 区 SK-450 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-451 (南から)
 SG10 区 SK-452 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-454 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-457 遺物出土状況 (南から)
 SG10 区 SK-502 土層断面 (東から、右は SD-503)
 SG10 区 SK-511 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-512 (南から)
 SG10 区 SK-514 (南から)
 SG10 区 SK-517 (西から)
 SG10 区 SK-523 (東から)
 SG10 区 SK-524 土層断面 (南西から)
 SG10 区 SK-525 (南から)
 SG10 区 SK-526 土層断面 (南から、右は SD-304)
 SG10 区 SK-528 (東から)
 SG10 区 SK-532 (東から)
 SG10 区 SK-536 土層断面 (北から)
図版一六四 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-537 (東から)
 SG10 区 SK-545 (南から)
 SG10 区 SK-553a (南から)
 SG10 区 SK-553b (南から)
 SG10 区 SK-553a (左)・b (右) 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-554 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-555 (北東から)
 SG10 区 SK-557 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-558 (東から)
 SG10 区 SK-559 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-562 (東から)
 SG10 区 SK-563 (東から)
 SG10 区 SK-564 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-566 (南から)
 SG10 区 SK-567 (西から)
 SG10 区 SK-568 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-572 (南から)
 SG10 区 SK-573 (西から)
 SG10 区 SK-576 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-581 (東から)
 SG10 区 SK-582 土層断面 (東から)
図版一六五 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-583 (東から)
 SG10 区 SK-585 (東から)
 SG10 区 SK-592 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-595 (東から)
 SG10 区 SK-596 (東から)
 SG10 区 SK-597 (東から)
 SG10 区 SK-604 土層断面 (南から、右下は SB-603)
 SG10 区 SK-605 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-606 土層断面 (南西から)
 SG10 区 SK-612 (南から)
 SG10 区 SK-613 (南から)
 SG10 区 SK-614 (東から)
 SG10 区 SK-615 (東から)
 SG10 区 SK-616 (東から)
 SG10 区 SK-619 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-620 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-630 (南東から)
 SG10 区 SK-631 (東から)
図版一六六 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑
 SG10 区 SK-632 (南から)
 SG10 区 SK-639 (南から)
 SG10 区 SK-657 (東から)
 SG10 区 SK-673 遺物出土状況 (北東から)
 SG10 区 SK-675 遺物出土状況 (西から)
 SG10 区 SK-682 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-685 (東から)
 SG10 区 SK-694 (南から)
 SG10 区 P-805・803 と SK-804・806 (左から) (南東から)
 SG10 区 SK-804 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-806 土層断面 (東から)
 SG10 区 SK-808 (南から)
 SG10 区 SK-808・810・811・812・813 (右から) (南から)

SG10 区 SK-810 (南から)
 SG10 区 SK-811 土層断面 (南から)
 SG10 区 SK-812 (南から)
 SG10 区 SK-813 (南から)
 SG10 区 SK-822 (南から)

図版一六七 権現山遺跡 SG15 区 全景
 SG15 区 東半部 (西から)
 SG15 区 東半部 (南西から)
 SG15 区 調査区全景 (東から、手前は SK-3)
 SG15 区 西半部 (南東から、中央は流路 2)
 SG15 区 調査区西壁土層断面 (東から)

図版一六八 権現山遺跡 SG15 区 時期不明の土坑・溝
 SG15 区 SK-3 土層断面 (北から)
 SG15 区 SK-6 (右)・7 (左) (南から)
 SG15 区 SK-4 土層断面 (南西から)
 SG15 区 SK-5 (南から)
 SG15 区 SK-9 (南から)
 SG15 区 SK-8 (南から)
 SG15 区 SD-1 全景 (南から)
 SG15 区 SD-2 全景 (南から)
 SG15 区 SD-1 土層断面 A-A' (南東から)
 SG15 区 SD-1 土層断面 B-B' (南東から)

図版一六九 権現山遺跡 SG15 区 時期不明の溝・古墳時代以降の自然流路
 SG15 区 SD-1 木杭と土層断面 (南から)
 SG15 区 SD-1 木杭と土層断面 (南から)
 SG15 区 SD-2 土層断面 A-A' (北から)
 SG15 区 SD-2 土層断面 D-D' (南から)
 SG15 区 流路 1 西部 (南西から)
 SG15 区 流路 1 北半部 (西から)
 SG15 区 流路 1 南西部 (北から)
 SG15 区 流路 1 調査区南壁のテフラ層 (北から)

図版一七〇 権現山遺跡各地区 縄文時代遺物
 SG10 区 縄文・弥生時代土坑 遺物
 縄文時代の遺構外出土遺物 SG10 区 SK-307-1～3
 SG10 区 SK-219-1 SG10 区 SK-697-1・2
 SG10 区 SK-265-1 SG10 区 SK-544-1～5

図版一七一 権現山遺跡 SG10 区 縄文時代建物跡 遺物
 SG10 区 SI-63 縄文土器・有孔円盤状土製品
 SG10 区 SI-63-1 SG10 区 SI-63-10
 SG10 区 SI-63-6 SG10 区 SI-63-11

図版一七二 権現山遺跡 SG10 区 縄文時代建物跡 遺物
 SG10 区 SI-63 石器・剥片・被熱礫
 SG10 区 SI-63-13 石皿 (表面)
 SG10 区 SI-63-13 石皿 (裏面)
 SG10 区 SI-63-22 被熱礫

図版一七三 権現山遺跡各地区 古墳時代・中世・近世の金属製品
 SG5 区の鉄製品 SG5 区 X線写真
 権現山 SG9 区の銅製品 SG10 区 X線写真
 SG10 区の鉄・銅製品

図版一七四 権現山遺跡 SG5 区・SG10 区 古墳時代の鉄関連遺物
 SG5 区 SI-100-32 (右写真構成番号 26 の側面)
 SG5 区 SI-100-32・33・SD-42-12
 SG10 区の鉄関連遺物
 SG10 区の鉄関連遺物 (今回追加報告分)
 SG10 区 SI-36-52 SG10 区 SI-106-12

図版一七五 権現山遺跡 SG2 区 土師器・須恵器
 SG2 区 SK-103-1 SG2 区流路 4-36
 SG2 区 SK-103-2 SG2 区流路 4-37
 SG2 区 SK-103-3 SG2 区流路 4-38
 SG2 区流路 2-5 SG2 区流路 4-37・38
 SG2 区流路 2-7 SG2 区流路 4-41
 SG2 区流路 2-8 SG2 区流路 4-42
 SG2 区流路 2-9 SG2 区流路 4-43
 SG2 区流路 2-10 SG2 区流路 4-46 口縁部
 SG2 区流路 2-11 SG2 区流路 4-46 胴部
 SG2 区流路 2-17 SG2 区流路 4-47
 SG2 区流路 2-19

図版一七六 権現山遺跡 SG2 区 土師器・須恵器・円筒埴輪
 権現山遺跡 SG5 区 居館出土遺物
 SG2 区流路 4-50 SG5 区 SD-227-1
 SG2 区流路 4-52 SG5 区 SD-227-3
 SG2 区 A 区 -59 SG5 区 SD-227-4
 SG2 区 B 区 -62 SG5 区 SD-227-10
 SG2 区 D 区 -70 SG5 区 SD-227-36
 SG2 区 D 区 -71 SG5 区 SD-227-37
 SG2 区 D 区 -72 SG5 区 SD-227-42
 SG2 区 D 区 -73

図版一七七 権現山遺跡 SG5 区 居館・竪穴建物跡 遺物
 SG5 区 SD-227-71 SG5 区 SI-5-17
 SG5 区 SI-5-2 SG5 区 SI-5-18
 SG5 区 SI-5-6 SG5 区 SI-5-19
 SG5 区 SI-5-8 SG5 区 SI-6-1
 SG5 区 SI-5-9 SG5 区 SI-6-3
 SG5 区 SI-5-12 SG5 区 SI-6-4
 SG5 区 SI-5-14 SG5 区 SI-6-5
 SG5 区 SI-5-15 SG5 区 SI-6-8
 SG5 区 SI-5-16 SG5 区 SI-6-9

図版一七八 権現山遺跡 SG5 区 土師器・石製品・焼粘土塊
 SG5 区 SI-6-12 SG5 区 SI-10-2
 SG5 区 SI-6-13 SG5 区 SI-10-5
 SG5 区 SI-6-17 SG5 区 SI-10-3
 SG5 区 SI-6-18 SG5 区 SI-10-15
 SG5 区 SI-6-19 SG5 区 SI-11-1
 SG5 区 SI-6-41～46 SG5 区 SI-11-4
 SG5 区 SI-8-19 SG5 区 SI-11-5
 SG5 区 SI-9-1 SG5 区 SI-11-8
 SG5 区 SI-9-5 SG5 区 SI-11-9
 SG5 区 SI-9-10

図版一七九 権現山遺跡 SG5 区 土師器・須恵器・石製品
 SG5 区 SI-11-11 SG5 区 SI-13-5 底面
 SG5 区 SI-11-19 SG5 区 SI-14-7～10
 SG5 区 SI-11-22 SG5 区 SI-15-4
 SG5 区 SI-11-23 SG5 区 SI-15-14
 SG5 区 SI-11-12 SG5 区 SI-15-16
 SG5 区 SI-12-1 SG5 区 SI-15-17
 SG5 区 SI-12-4 SG5 区 SI-15-31
 SG5 区 SI-13-5 SG5 区 SI-15-32

図版一八〇 権現山遺跡 SG5 区 土師器・石製品・支脚・焼粘土塊
 SG5 区 SI-15-34 SG5 区 SI-17-16
 SG5 区 SI-15-35 SG5 区 SI-17-17
 SG5 区 SI-15-36 SG5 区 SI-17-18
 SG5 区 SI-15-37 SG5 区 SI-17-19
 SG5 区 SI-15-39・40・44・55 SG5 区 SI-17-36
 SG5 区 SI-16-2 SG5 区 SI-17-38
 SG5 区 SI-17-4 SG5 区 SI-17-43
 SG5 区 SI-17-7 SG5 区 SI-17-47・48
 SG5 区 SI-17-8 SG5 区 SI-19-1
 SG5 区 SI-17-9 SG5 区 SI-19-2

図版一八一 権現山遺跡 SG5 区 土師器・須恵器
 SG5 区 SI-19-3 SG5 区 SI-20-13
 SG5 区 SI-19-4 SG5 区 SI-20-17
 SG5 区 SI-19-8 SG5 区 SI-20-18
 SG5 区 SI-19-10 SG5 区 SI-21-4
 SG5 区 SI-20-9 SG5 区 SI-21-10
 SG5 区 SI-20-8 SG5 区 SI-21-11
 SG5 区 SI-20-8 口縁部 SG5 区 SI-21-12 上半
 SG5 区 SI-20-10 SG5 区 SI-21-12 下半

図版一八二 権現山遺跡 SG5 区 土師器・支脚
 SG5 区 SI-21-13 SG5 区 SI-22-6
 SG5 区 SI-21-14 SG5 区 SI-22-7
 SG5 区 SI-21-15 SG5 区 SI-22-8
 SG5 区 SI-21-20 SG5 区 SI-22-10
 SG5 区 SI-22-1 SG5 区 SI-22-12
 SG5 区 SI-22-2 SG5 区 SI-22-13
 SG5 区 SI-22-3 SG5 区 SI-22-14
 SG5 区 SI-22-4 SG5 区 SI-22-21
 SG5 区 SI-22-5 SG5 区 SI-22-22

図版一八三 権現山遺跡 SG5 区 土師器・陶質土器・土製品・石製品
 SG5 区 SI-22-23 SG5 区 SI-19-11・SI-24-27
 SG5 区 SI-22-26 SG5 区 SI-24-29
 SG5 区 SI-22-27 SG5 区 SI-24-31
 SG5 区 SI-22-28 SG5 区 SI-25-4
 SG5 区 SI-24-3 SG5 区 SI-25-4 正面
 SG5 区 SI-24-4 SG5 区 SI-29a-1
 SG5 区 SI-24-5 SG5 区 SI-29a-17
 SG5 区 SI-24-26 SG5 区 SI-29a-18

図版一八四 権現山遺跡 SG5 区 土師器・石製品
 SG5 区 SI-29a-21 SG5 区 SI-100-23
 SG5 区 SI-29a-22 SG5 区 SI-100-35・36
 SG5 区 SI-45-3 SG5 区 SI-116-1
 SG5 区 SI-45-3 胴部接合痕 SG5 区 SI-116-3
 SG5 区 SI-100-10 SG5 区 SI-116-4
 SG5 区 SI-100-11 SG5 区 SI-116-7
 SG5 区 SI-100-14 SG5 区 SI-116-8

	SG5 区 SI-100-16	SG5 区 SI-116-9		SG10 区 SI-14-4	SG10 区 SI-16-10
	SG5 区 SI-100-17	SG5 区 SI-116-17		権現山遺跡 SG10 区 土師器・石製品	
	SG5 区 SI-100-19		図版一九一	SG10 区 SI-16-14	SG10 区 SI-16-39
図版一八五	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代建物跡・遺物集中地点・溝遺物			SG10 区 SI-16-16	SG10 区 SI-16-41
	SG5 区 SI-116-32	SG5 区 SX-118-34 ~ 40		SG10 区 SI-16-18	SG10 区 SI-16-44
	SG5 区 SI-116-34	SG5 区 SD-41-3		SG10 区 SI-16-19	SG10 区 SI-16-46
	SG5 区 SI-116-34 内面	SG5 区 SD-41-4		SG10 区 SI-16-20	SG10 区 SI-16-56
	SG5 区 SI-116-47	SG5 区 SD-41-5		SG10 区 SI-16-21	SG10 区 SI-16-61・62
	SG5 区 SI-116-49	SG5 区 SD-41-7		SG10 区 SI-16-22	SG10 区 SI-18a-5
	SG5 区 SI-116-50	SG5 区 SD-41-15		SG10 区 SI-16-24	SG10 区 SI-18a-5 底部の白玉
	SG5 区 SI-116-51・52	SG5 区 SD-42-10		SG10 区 SI-16-32	
	SG5 区 SI-116-54	SG5 区 SD-42-11	図版一九二	SG10 区 SI-16-35	SG10 区 SI-18a-10
	SG5 区 SX-118-11	SG5 区 SD-44-6	権現山遺跡 SG10 区 土師器・焼粘土塊・石製品	SG10 区 SI-19a-1	SG10 区 SI-19a・b-24
	SG5 区 SX-118-14	SG5 区 SD-44-14		SG10 区 SI-19a-2	SG10 区 SI-19a・b-30
	SG5 区 SX-118-21			SG10 区 SI-19a-3	SG10 区 SI-20-7
図版一八六	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代溝・土坑 遺物			SG10 区 SI-19a-4	SG10 区 SI-20-9
	SG5 区 SD-101-3	SG5 区 SK-198-1		SG10 区 SI-19a-5	SG10 区 SI-20-10
	SG5 区 SD-101-10	SG5 区 SK-203-3		SG10 区 SI-19a-7	SG10 区 SI-20-11
	SG5 区 SD-101-35	SG5 区 SK-203-4		SG10 区 SI-19a-9	SG10 区 SI-20-11 底面
	SG5 区 SD-101-40	SG5 区 SK-203-7		SG10 区 SI-19a-13	SG10 区 SI-20-12
	SG5 区 SD-101-41~43	SG5 区 SK-203-9		SG10 区 SI-19a-14	SG10 区 SI-20-17
	SG5 区 SK-31-2	SG5 区 SK-203-13		SG10 区 SI-19a-17	
	SG5 区 SK-34-5	SG5 区 SK-204-1	図版一九三	権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・土玉・石製品	
	SG5 区 SK-35-1	SG5 区 SK-204-2		SG10 区 SI-20-13	SG10 区 SI-23-10
	SG5 区 SK-191-3			SG10 区 SI-20-25~28	SG10 区 SI-23-12
図版一八七	権現山遺跡 SG5 区 古墳時代土坑・低地包含層・遺構外・平安時代土坑・近世溝 遺物			SG10 区 SI-22-4	SG10 区 SI-23-25
	SG5 区 SK-204-12	SG5 区 低地包含層 -16・17		SG10 区 SI-22-8	SG10 区 SI-23-14
	SG5 区 SK-207-4	SG5 区 低地包含層 -18~22		SG10 区 SI-22-9	SG10 区 SI-23-26
	SG5 区 SK-208-1	SG5 区 古墳時代の遺構外 -1		SG10 区 SI-22-12	SG10 区 SI-23-27
	SG5 区 SK-208-3	SG5 区 古墳時代の遺構外 -3	図版一九四	SG10 区 SI-23-3	SG10 区 SI-23-28
	SG5 区 SK-215-3	SG5 区 古墳時代の遺構外 -7	権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品	SG10 区 SI-23-22	SG10 区 SI-25-11
	SG5 区 SK-218-3	SG5 区 SK-120-1		SG10 区 SI-23-29	SG10 区 SI-25-25
	SG5 区 SK-220-2	SG10 区 SD-135-1		SG10 区 SI-23-30 上半	SG10 区 SI-25-25 底面
	SG5 区 SK-224-1	SG10 区 SD-135-1 内面		SG10 区 SI-23-30 下半	SG10 区 SI-25-26
	SG5 区 SK-224-1 内面	SG10 区 SD-135-1 内底面		SG10 区 SI-23-35	SG10 区 SI-25-27
	SG5 区 低地包含層 -3			SG10 区 SI-23-37	SG10 区 SI-25-27 底面
図版一八八	権現山遺跡 SG9 区 土師器・須恵器・陶器・石製品・瓦			SG10 区 SI-24-2	SG10 区 SI-25-35
	権現山 SG9 区 SD-7-1	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -9		SG10 区 SI-25-5	SG10 区 SI-25-37
	権現山 SG9 区 SD-7-2	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -10	図版一九五	SG10 区 SI-25-6	SG10 区 SI-25-39
	権現山 SG9 区 SD-8-1	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -1	権現山遺跡 SG10 区 土師器・石製品	SG10 区 SI-25-9	SG10 区 SI-25-40
	権現山 SG9 区 SD-8-2	権現山 SG9 区 中央区微高地 -1		SG10 区 SI-25-54	SG10 区 SI-25-108
	権現山 SG9 区 SD-38-1	権現山 SG9 区 中央区微高地 -2		SG10 区 SI-25-54 杯部内面	SG10 区 SI-25-111
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -1	権現山 SG9 区 中央区微高地 -2		SG10 区 SI-25-56	SG10 区 SI-25-115
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -2	権現山 SG9 区 中央区微高地 -3		SG10 区 SI-25-58	SG10 区 SI-25-115 脚内面
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -3	権現山 SG9 区 中央区微高地 -7		SG10 区 SI-25-85	SG10 区 SI-25-116
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -4	権現山 SG9 区 中央区微高地 -7 底面		SG10 区 SI-25-87	SG10 区 SI-28-5
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -6	権現山 SG9 区 西区遺構外 -2		SG10 区 SI-25-87 脚内面	SG10 区 SI-28-16
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -8 上半	権現山 SG9 区 西区遺構外 -5	図版一九六	SG10 区 SI-25-88	SG10 区 SI-30-1
	権現山 SG9 区 中央区南東部低地 -8 下半	権現山 SG9 区 西区遺構外 -6	権現山遺跡 SG10 区 土師器	SG10 区 SI-25-94	SG10 区 SI-30-12
				SG10 区 SI-25-97	SG10 区 SI-30-35・36
				SG10 区 SI-25-103	
図版一九九	権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品			SG10 区 SI-32-8	SG10 区 SI-34a-7
	SG10 区 SI-2-1	SG10 区 SI-6-1		SG10 区 SI-32-8 底面	SG10 区 SI-34a-10
	SG10 区 SI-2-4	SG10 区 SI-6-3		SG10 区 SI-33-4	SG10 区 SI-34a-11
	SG10 区 SI-2-6	SG10 区 SI-6-8		SG10 区 SI-33-6	SG10 区 SI-34a-12
	SG10 区 SI-2-8	SG10 区 SI-2-14		SG10 区 SI-33-9	SG10 区 SI-34a-13
	SG10 区 SI-2-10	SG10 区 SI-6-18		SG10 区 SI-33-9 杯部内面	SG10 区 SI-34a-14
	SG10 区 SI-2-12	SG10 区 SI-6-19		SG10 区 SI-34a-1	SG10 区 SI-34a-16
	SG10 区 SI-2-15	SG10 区 SI-6-24		SG10 区 SI-34a-2	SG10 区 SI-34a-17
	SG10 区 SI-2-16・17	SG10 区 SI-6-29		SG10 区 SI-34a-4	SG10 区 SI-34a-22
	SG10 区 SI-2-28	SG10 区 SI-6-32		SG10 区 SI-34a-5	SG10 区 SI-34a-23
	SG10 区 SI-2-34			SG10 区 SI-34a-6	
図版一九〇	権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品		図版一九七	権現山遺跡 SG10 区 土師器・羽口・支脚・石製品	
	SG10 区 SI-6-44a	SG10 区 SI-15-2		SG10 区 SI-34a-24	SG10 区 SI-36-1
	SG10 区 SI-6-44b	SG10 区 SI-15-8		SG10 区 SI-34a-25	SG10 区 SI-36-3
	SG10 区 SI-6-45・46	SG10 区 SI-15-21		SG10 区 SI-34a-26	SG10 区 SI-36-4
	SG10 区 SI-9-15	SG10 区 SI-16-1		SG10 区 SI-34a-30	SG10 区 SI-36-17
	SG10 区 SI-10-15	SG10 区 SI-16-2		SG10 区 SI-34a-33	SG10 区 SI-36-21 上面
	SG10 区 SI-10-15 底部	SG10 区 SI-16-3		SG10 区 SI-34a-34	SG10 区 SI-36-21 下面
	SG10 区 SI-13-4	SG10 区 SI-16-4		SG10 区 SI-34a-38	SG10 区 SI-36-22
	SG10 区 SI-14-1	SG10 区 SI-16-9		SG10 区 SI-34a-46	SG10 区 SI-37-11
				SG10 区 SI-34a-63	SG10 区 SI-37-14~16
				SG10 区 SI-34a-66~68	

図版一九八 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・土玉・石製品
 SG10 区 SI-40-15 SG10 区 SI-47-10
 SG10 区 SI-40-18 SG10 区 SI-47-17・18
 SG10 区 SI-45-1 SG10 区 SI-49-6
 SG10 区 SI-45-1 底面 SG10 区 SI-49-9
 SG10 区 SI-45-2 SG10 区 SI-49-10
 SG10 区 SI-45-7 SG10 区 SI-50-3
 SG10 区 SI-45-12~14 SG10 区 SI-50-4
 SG10 区 SI-45-15 SG10 区 SI-50-7
 SG10 区 SI-47-4 SG10 区 SI-50-8
 SG10 区 SI-47-8 SG10 区 SI-50-9
図版一九九 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品・鉄滓
 SG10 区 SI-50-10 SG10 区 SI-50-67
 SG10 区 SI-50-12 SG10 区 SI-50-68
 SG10 区 SI-50-13 SG10 区 SI-50-71
 SG10 区 SI-50-14 SG10 区 SI-50-72
 SG10 区 SI-50-19 SG10 区 SI-50-73
 SG10 区 SI-50-49 SG10 区 SI-50-74
 SG10 区 SI-50-44 SG10 区 SI-53-1
 SG10 区 SI-50-59 SG10 区 SI-53-2
 SG10 区 SI-50-60 SG10 区 SI-53-4
図版二〇〇 権現山遺跡 SG10 区 土師器・石製品
 SG10 区 SI-53-4 杯部底面 SG10 区 SI-59-4
 SG10 区 SI-55-10 SG10 区 SI-59-10
 SG10 区 SI-55-12 SG10 区 SI-59-14
 SG10 区 SI-55-15 SG10 区 SI-59-15・16
 SG10 区 SI-56-1 SG10 区 SI-59-17
 SG10 区 SI-57-1 SG10 区 SI-60-7
 SG10 区 SI-57-10 SG10 区 SI-60-22
 SG10 区 SI-57-14 SG10 区 SI-61-2
 SG10 区 SI-59-1 SG10 区 SI-61-19
 SG10 区 SI-59-3 SG10 区 SI-64a-1
図版二〇一 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品
 SG10 区 SI-64a-6 SG10 区 SI-65-16
 SG10 区 SI-64a-10 SG10 区 SI-66-1
 SG10 区 SI-64a-32 SG10 区 SI-66-3
 SG10 区 SI-64a-33 SG10 区 SI-66-4
 SG10 区 SI-64a-49 SG10 区 SI-66-5
 SG10 区 SI-64a-50・51 SG10 区 SI-66-10
 SG10 区 SI-64a-52 SG10 区 SI-66-17
 SG10 区 SI-64a-53~55 SG10 区 SI-66-29
 SG10 区 SI-64a-56 SG10 区 SI-66-30
 SG10 区 SI-64a-58 SG10 区 SI-66-31
 SG10 区 SI-65-1
図版二〇二 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・羽口・石製品
 SG10 区 SI-66-38・39 SG10 区 SI-67-19
 SG10 区 SI-66-40 SG10 区 SI-70-1
 SG10 区 SI-67-2 SG10 区 SI-70-10
 SG10 区 SI-67-3 SG10 区 SI-70-11
 SG10 区 SI-67-4 SG10 区 SI-70-12
 SG10 区 SI-67-6 SG10 区 SI-70-13
 SG10 区 SI-67-7 SG10 区 SI-70-15
 SG10 区 SI-67-10 SG10 区 SI-70-15 送風口
 SG10 区 SI-67-16 SG10 区 SI-70-16
 SG10 区 SI-67-17 SG10 区 SI-70-16 内面
 SG10 区 SI-67-18
図版二〇三 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品
 SG10 区 SI-70-17 SG10 区 SI-72-12
 SG10 区 SI-72-1 SG10 区 SI-72-13
 SG10 区 SI-72-2 SG10 区 SI-72-14
 SG10 区 SI-72-5 SG10 区 SI-72-23・24
 SG10 区 SI-72-7 SG10 区 SI-73-2
 SG10 区 SI-72-7 内面 SG10 区 SI-73-4
 SG10 区 SI-72-8 SG10 区 SI-73-7
 SG10 区 SI-72-10 SG10 区 SI-73-14・15
 SG10 区 SI-72-11
図版二〇四 権現山遺跡 SG10 区 土師器・石製品
 SG10 区 SI-74-1 SG10 区 SI-76-1
 SG10 区 SI-74-2 SG10 区 SI-76-1 底面
 SG10 区 SI-74-3 SG10 区 SI-78-1
 SG10 区 SI-74-11 SG10 区 SI-78-2
 SG10 区 SI-75-4 SG10 区 SI-78-3
 SG10 区 SI-75-6 SG10 区 SI-78-4
 SG10 区 SI-75-12 SG10 区 SI-78-5
 SG10 区 SI-75-13 SG10 区 SI-78-6
 SG10 区 SI-75-14 上面 SG10 区 SI-78-8
 SG10 区 SI-75-14 下面

図版二〇五 権現山遺跡 SG10 区 土師器・石製品・玉
 SG10 区 SI-78-11 SG10 区 SI-84-1
 SG10 区 SI-78-13 SG10 区 SI-84-2
 SG10 区 SI-78-14 SG10 区 SI-84-3
 SG10 区 SI-78-15 SG10 区 SI-84-4
 SG10 区 SI-78-19 側面・破面 SG10 区 SI-84-8
 SG10 区 SI-80-6 SG10 区 SI-84-10
 SG10 区 SI-81-18・19 SG10 区 SI-86-1
 SG10 区 SI-83-2 SG10 区 SI-86-8
 SG10 区 SI-83-3 SG10 区 SI-86-18
図版二〇六 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品・土玉
 SG10 区 SI-86-21 SG10 区 SI-88-2
 SG10 区 SI-87-1 SG10 区 SI-88-3
 SG10 区 SI-87-2 SG10 区 SI-88-4
 SG10 区 SI-87-3 SG10 区 SI-88-5
 SG10 区 SI-87-3 内面 SG10 区 SI-88-16
 SG10 区 SI-87-4 SG10 区 SI-88-18
 SG10 区 SI-87-5 SG10 区 SI-88-19
 SG10 区 SI-87-6 SG10 区 SI-88-23
 SG10 区 SI-87-10 側面・破面 SG10 区 SI-89a-1
 SG10 区 SI-88-1
図版二〇七 権現山遺跡 SG10 区 土師器・石製品・金床石
 SG10 区 SI-89a-2 SG10 区 SI-101-17 上半
 SG10 区 SI-89a-3 SG10 区 SI-101-17 下半
 SG10 区 SI-89a-14 SG10 区 SI-101-18
 SG10 区 SI-89a-16 SG10 区 SI-101-19 ~ 22
 SG10 区 SI-89a-19 SG10 区 SI-105-7b
 SG10 区 SI-101-1 SG10 区 SI-106-12 左側面
 SG10 区 SI-101-4 SG10 区 SI-106-12 表面
 SG10 区 SI-101-7 SG10 区 SI-106-12 右側面
 SG10 区 SI-101-13 SG10 区 SI-106-12 裏面
 SG10 区 SI-101-14 SG10 区 SI-106-12 下面
図版二〇八 権現山遺跡 SG10 区 土師器・須恵器・石製品
 SG10 区 SI-106-7 SG10 区 SI-111-1
 SG10 区 SI-106-9 SG10 区 SI-111-4
 SG10 区 SI-108-2 SG10 区 SI-111-7
 SG10 区 SI-108-3 SG10 区 SI-111-8
 SG10 区 SI-108-5 SG10 区 SI-111-9
 SG10 区 SI-110-1 SG10 区 SI-111-10
 SG10 区 SI-110-2 SG10 区 SI-111-13
 SG10 区 SI-110-8 SG10 区 SD-43-9
 SG10 区 SI-110-9 SG10 区 SD-43-25
 SG10 区 SI-110-28
図版二〇九 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代溝 土師器
 SG10 区 SD-43-34 SG10 区 SD-41・42-32
 SG10 区 SD-221-10 SG10 区 SD-41・42-33
 SG10 区 SD-41・42-8 SG10 区 SD-41・42-40
 SG10 区 SD-41・42-9 SG10 区 SD-41・42-46
 SG10 区 SD-41・42-25 SG10 区 SD-41・42-46 底面
 SG10 区 SD-41・42-26 SG10 区 SD-41・42-47
 SG10 区 SD-41・42-27 SG10 区 SD-41・42-53
 SG10 区 SD-41・42-30 SG10 区 SD-41・42-54
 SG10 区 SD-41・42-31 SG10 区 SD-41・42-59
 SG10 区 SD-41・42-31 底面 SG10 区 SD-41・42-61
図版二一〇 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代溝 土師器・須恵器・羽口・石製品
 SG10 区 SD-41・42-62 SG10 区 SD-319-3
 SG10 区 SD-41・42-63 SG10 区 SD-527-1
 SG10 区 SD-41・42-64 SG10 区 SD-527-4
 SG10 区 SD-41・42-65 SG10 区 SD-527-6
 SG10 区 SD-41・42-71~73 SG10 区 SD-527-7
 SG10 区 SD-41・42-74~76 SG10 区 SD-527-11
 SG10 区 SD-41・42-77 SG10 区 SD-527-20
 SG10 区 SD-304b-4 SG10 区 SD-527-21
 SG10 区 SD-304b-6 SG10 区 SD-527-22
 SG10 区 SD-319-2
図版二一一 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代溝・土坑 土師器・須恵器・石製品
 SG10 区 SD-527-27 SG10 区 SK-207-1
 SG10 区 SD-594-3 SG10 区 SK-207-2
 SG10 区 SD-594-4 SG10 区 SK-222-2
 SG10 区 SD-594-5 SG10 区 SK-222-4
 SG10 区 SD-821-1 SG10 区 SK-222-4 底面
 SG10 区 SD-821-2・3 SG10 区 SK-266-2
 SG10 区 SK-621-15 SG10 区 SK-274-1
 SG10 区 SK-210-2 SG10 区 SK-346-4
 SG10 区 SK-46-2 SG10 区 SK-346-4 底面
 SG10 区 SK-46-7

- 図版二一二 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代土坑・遺構外・平安時代
建物跡・中世井戸の遺物**
 SG10 区 SK-439-3 SG10 区 SI-90-2
 SG10 区 SK-801-5 SG10 区 SI-90-3
 SG10 区 SK-803-1 SG10 区 SI-90-3 底面
 SG10 区 SK-903-7 SG10 区 SI-90-4
 SG10 区 低地遺物包含層
-24 SG10 区 SE-237-1
 SG10 区 古墳時代の遺構外
-14・17 SG10 区 SE-237-3
 SG10 区 古墳時代の遺構
外 -21 SG10 区 SE-252-1
 SG10 区 SI-90-1 SG10 区 SE-252-3・4
 SG10 区 SE-344-1
 SG10 区 SE-377-2
- 図版二一三 権現山遺跡 SG10 区 中世井戸の木製品**
 SG10 区 SE-569-1 側板 SG10 区 SE-569-3~5
 SG10 区 SE-569-1 底板 SG10 区 SE-569-6a・6b・7・8
 SG10 区 SE-569-2
- 図版二一四 権現山遺跡 SG10 区 中世井戸・土坑・遺構外と近世
土坑・溝および時期不明土坑の遺物**
 SG10 区 SE-569-9 SG10 区 SD-201a-2
 SG10 区 SE-569-10 SG10 区 SD-201a-3・4
- SG10 区 SE-569-11 SG10 区 SD-201a-5
 SG10 区 SK-92-1 SG10 区 SD-201a-6
 SG10 区 P-425-1 SG10 区 SD-201a-7
 SG10 区 P-640-1a・1b SG10 区 SD-201a-8・9
 SG10 区 中世遺構外 -1 SG10 区 SD-201a-13
 SG10 区 中世遺構外 -2 SG10 区 SK-254-1
 SG10 区 中世遺構外 -4 SG10 区 SK-272-1
 SG10 区 SK-71-1 SG10 区 SK-532-1
 SG10 区 SK-71-4
- 図版二一五 権現山遺跡 SG15 区 土師器・近世陶器
磯岡遺跡 SG10 区 土師器**
 SG15 区 SD-1-1 磯岡 SG9 区 SI-49a-1
 SG15 区 流路 2 北方 -2 磯岡 SG9 区 SI-49a-2
 SG15 区 流路 2 北方 -4 磯岡 SG9 区 SI-49a-4
 SG15 区 流路 2 北方 -6 磯岡 SG9 区 SI-49b-5
 磯岡 SG9 区 SI-49b-6
- 図版二一六 権現山遺跡 SG5 区・SG10 区 航空写真**
 上部 SG10 区 2000 年 2 月 10 日撮影
 下部 SG5 区 1998 年 7 月 28 日撮影
 合成写真 上方が北

権現山遺跡南部 遺構一覧・検索表 (第2分冊)

権現山遺跡 SG2 区

古墳時代の土坑 2 基 (SK-100・103) は第 144 表 (p.445) を参照。

古墳時代の自然流路

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
流路 1	X12 ~ 13.5 Y20 ~ 22	流路 2 と同時存在	3.5 ~ 11.0	0.16 ~ 0.46	SG15 区の流路 2 に連続?	446 ~ 459
流路 2	X11.5 ~ 13.5 Y19.5 ~ 21	流路 1 と同時存在、流路 4 に合流	2.4 ~ 7.5	0.26 ~ 0.64	同上	447 ~ 460
流路 3	X11.5 ~ 13 Y18.5 ~ 19.5		5.0 ~ 13.1	0.32		447 ~ 460
流路 4	X11 ~ 12 Y19 ~ 21.5	流路 2 が合流	5.7 ~ 9.5	0.40 ~ 0.64	SX-47 が西端部底面にあり	447 ~ 462
流路 5	X10 ~ 11 Y19 ~ 21.5		1.2 ~ 3.9	0.19 ~ 0.34		454 ~ 462
流路 6	X9 ~ 10 Y19.5 ~ 21		7.5 ~ 8.7	0.19 ~ 0.45		454 ~ 462
流路 7	X8.5 ~ 10 Y20 ~ 22		2.3 ~ 8.5	0.10 ~ 0.14		457 ~ 462

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-46	8.5-20.5	SK-11・15 と重複	0.49 ~ 0.70	0.07 ~ 0.12		462 ~ 463

時期不明の集石遺構

	グリッド	重複関係	径 (m)	高さ (m)	その他	掲載ページ
SX-47	11.0-19.0	流路 4 の As-C 層下	約 0.80	0.03 ~ 0.22		463

時期不明の土坑 49 基 (SK-1 ~ 45・101・102) は第 147 表 (p.464 ~ 466) を参照。

権現山遺跡 SG5 区

古墳時代の居館 (居宅) 関連施設 区画溝

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-43	16-16・17	SI-100 → SD-43 → SD-44	1.00 ~ 2.10	0.26 ~ 0.60	SG10 区に連続 居館北側区画溝	486 ~ 491
SD-227	13-16・17	SD-227 → SD-101 → SI-20・21	1.23 ~ 1.93	0.44 ~ 0.66	居館南側区画溝	492 ~ 498

古墳時代の居館 (居宅) 関連施設 方形柵列遺構

	グリッド	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SA-151	14-16・17、15-17、16-16・17	P6・P7 → SK-35 → SK-36、SI-18・137 (?) より古、SD-41・101 より古 (推定)	東辺 22 間 (47.1m)、北辺 12 間 (24.7m) 以上、南辺 9 間 (18.1m) 以上	0.40 ~ 1.04	SG5 区 SD-43 と SG10 区 SD-221 が北側に、SD-227 が南側に平行する区画溝として伴う	498 ~ 504

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模 (m)	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-1	19-15	東西 (残) 1.75 × 南北 4.85		カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	508 ~ 509
SI-2	19-15・16	(推定) 東西 7.44 × 南北 7.54	SI-45 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	509 ~ 511
SI-3	18-15	東西 4.96 以上 × 南北 6.91		カマド 1 (北)	貯蔵穴 1、入口施設	511 ~ 513
SI-4	18-16	東西 (推定) 7.10 × 南北 7.05	SG10 区 SI-18 より新? SG10 区 SI-21 より古?	不明	張出土坑 1	514 ~ 516
SI-5	17-15、18-15	東西 3.75 以上 × 南北 8.51		不明	貯蔵穴 1	516 ~ 519
SI-6	17-15・16	東西 7.09 × 南北 6.95	SI-95 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	519 ~ 525
SI-7	16-16、17-16	東西 4.04 × 南北 3.35	SI-100 より新	カマド 1 (北)		525 ~ 529
SI-8	15-16、16-16	東西 2.74 以上 × 南北 5.03	SI-12 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	529 ~ 532
SI-9	15-16、16-16	東西 4.68 × 南北 4.90		カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	532 ~ 535
SI-10	16-16	東西 3.89 × 南北 3.99		カマド 1 (北)	貯蔵穴?1、入口施設	535 ~ 537
SI-11	15-17、16-17	東西 7.67 × 南北 7.37	SI-11 → SD-42 → SD-41	不明	貯蔵穴 2	537 ~ 541
SI-12	15-16	東西 2.51 以上 × 南北 4.80 (推定)	SI-8 より古	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	541 ~ 544
SI-13	15-16	東西 2.34 以上 × 南北 4.96 以上	SD-148 より古?	カマド 1 (東)		544 ~ 545
SI-14	15-16	東西 6.91 × 南北 6.95	SI-14 → SK-132 → SK-131、SI-15・SK-87・88 より古、SD-148 と重複	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	545 ~ 548
SI-15	15-16	東西 5.53 × 南北 5.25	SI-14 → SK-132 → SK-131、SI-15 より新、SD-148 より新?、SK-88・90 より古	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	548 ~ 554

SI-16	15-16	東西 1.85m 以上×南北 4.71	SI-17 より新	カマド 1 (北)		554 ~ 556
SI-17	14-16、15-16	東西 4.75 以上×南北は 6.47	SI-16 より古	炬 1 (北)	貯蔵穴 1	556 ~ 561
SI-18	14-17、15-17	東西 4.71 ×南北 4.65	SA-151 より新	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	561 ~ 564
SI-19	14-16・17	東西 6.83 ×南北 6.04	SK-96 と重複	カマド 1 (北)	貯蔵穴 2 (内 1 基は張出土坑)	564 ~ 567
SI-20	14-17・18	東西 4.25 ×南北 4.20	SD-101・SK-106 より新	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	567 ~ 571
SI-21	13-17、14-17	東西 5.23 ×南北 5.28	SD-101 より新	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	571 ~ 575
SI-22	14-17・18	東西 4.35 ×南北 5.84	SI-107 より古	不明	貯蔵穴 1	575 ~ 579
SI-23	13-16・17	東西 5.90 ×南北 5.61	SI-25 → SI-23 → SK-110	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	579 ~ 581
SI-24	13-17・18	東西 8.57 ×南北 8.01	SD-108 より古	炬 1 (北)	貯蔵穴 1	581 ~ 585
SI-25	13-16	東西 (推定) 5.09 ×南北 5.18	SI-25 → SI-23 → SK-110	不明	貯蔵穴 2	586 ~ 587
SI-26	12-16、13-16	東西 3.91 以上×南北 4.88	SK-117 より古	カマド 1 (東)	貯蔵穴 1	587 ~ 589
SI-28	12-16・17	東西 6.25 ×南北 6.00	P-255 → SI-29b → SI-29a → SI-28、SB-159 と重複	カマド 1 (北)	貯蔵穴 1	589 ~ 590
SI-29a	12-17	東西 5.53 ×南北 5.63	P-255 → SI-29b → SI-29a → SI-28、SB-159 と重複	不明	貯蔵穴 1 ~ 2?	591 ~ 595
SI-29b	同上	同上	同上	不明	貯蔵穴 1 ~ 2?	591 ~ 593
SI-45	19-15・16	(推定) 東西 5.50 ×南北 5.50	SI-2 より古	不明	張出土坑 1	595 ~ 596
SI-95	17-15・16	東西 6.42 ×南北 6.12	SI-6 より古	炬 1 (北)	貯蔵穴 1?	597 ~ 598
SI-99	12-16・17、13-16・17	東西 4.14 ×南北 4.62		不明		598 ~ 599
SI-100	16-16、17-16	東西 7.63 ×南北 7.67	SI-7・SD-43・44 より古	不明	貯蔵穴 1 ~ 2?	599 ~ 603
SI-107	14-17・18	東西 3.80 ×南北 2.78	SI-22 より新	カマド 1 (北)		604
SI-116	14-16	東西 3.20 以上×南北 6.85	SI-116 → SK-130 → SD-101	不明	貯蔵穴 1	605 ~ 610
SI-137	13-17、14-17	東西 6.10 ×南北 6.05	SA-151 より新	カマド 1 (東)	貯蔵穴 2	611 ~ 613
SI-155	13-17	東西 (推定) 4.33 ×南北 3.57 以上	SD-108 より古	不明	入口施設	613 ~ 614

古墳時代の遺物集中地点 (祭祀遺構)

グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SX-118	10-17	隅丸方形	SD-133 より古	東西 2.35 ×南北 (推定) 2.26	0.05 ~ 0.13 614 ~ 618

古墳時代の性格不明遺構

グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (cm)	掲載ページ
SX-129	8-18	不整形	長径 8.26 以上×短径 3.64	0.13 ~ 0.28	618

古墳時代の溝状遺構

グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ	
SD-41	13 ~ 15-16、15-16・17、16-17	SI-11 → SD-42 → SD-41、SD-101・SA-151 と重複	0.96 ~ 1.80	0.40 ~ 0.55	SG10 区 SD-41 に連続	619 ~ 621
SD-42	15-17・18、16-17	SI-11 → SD-42 → SD-41・SK-98	1.26 ~ 3.76	0.52 ~ 0.55	SG10 区 SD-42 に連続	622 ~ 623
SD-44	16-16・17	SI-100 → SD-43 → SD-44	0.96 ~ 1.70	0.27 ~ 0.57	SG10 区に連続	623 ~ 626
SD-101	13-16・17、14-16・17	SI-116・SK-130・SD-227 → SD-101 → SI-20・21 と SD-108 SD-41・SA-151 と重複	1.06 ~ 1.76	0.43 ~ 0.53	12 世紀以降の溝が重複していた可能性もある	626 ~ 630

古墳時代の土坑 71 基 (SK-31・34・35・47・51・82・86・92・96・98・106・110 ~ 112・121・130・140・142・144・145・149・181・185 ~ 200・202 ~ 208・210 ~ 215・217 ~ 226・247 ~ 253) は第 199 表 (p.631 ~ 640) を参照。

平安時代の土坑

グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-120	9.5-17.5・18.0	長楕円形	長径 2.09 ×短径 0.55	0.38	668 ~ 669

中世~近世の土坑

グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-138	15.0-16.5	隅丸長方形	長径 1.45 ×短径 1.12	0.19	669

中世~近世の溝状遺構

グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ	
SD-133	10.0-17.5・18.0	SX-118 より新	0.22 ~ 0.34	0.06 ~ 0.11	SD-134 に合流する	669 ~ 670
SD-134	10.0-17.5・18.0		0.63 ~ 1.41	0.23 ~ 0.34	SD-133 が合流する	670
SD-135	10.5-17.5・18.0	SE-136・216 より新	1.69 ~ 2.04	0.24 ~ 0.59		670 ~ 671

時期不明の掘立柱建物跡

グリッド	形状	重複関係	長さ	幅	掲載ページ	
SB-154	15-16・17	長方形	SD-41 と重複	桁行 4 間 (6.00m)	梁行 2 間 (3.42m)	671 ~ 672
SB-157	13-17	方形	SE-136・216 より新	桁行 2 間 (3.55 ~ 3.66m)	梁行 2 間 (3.48m)	672
SB-159	12-17	ほぼ方形	SI-28・29 より新	桁行 2 間 (5.27 ~ 5.42m)	梁行 2 間 (5.06 ~ 5.34m)	672 ~ 673

時期不明の柵列

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SA-158	12-17	コの字状	SI-28・29と重複	東西3間 (6.23m)、南北1間 (西側1.90、東側1.76m)	0.12～0.35	673～674

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-108	13-16～18	SI-24・155・SD-101・SK-109より新	1.02～2.06	0.55～0.94		674～675
SD-115	11-17、12-17	SB-159と重複	0.35～0.95	0.10～0.12		674～675
SD-148	15-16・17、16-17	SK-146・150より古、SI-11・14・15と重複	0.38～0.78	0.25～0.32		675～676

時期不明の井戸跡

	グリッド	形状	重複関係	口径 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SE-114	12-16	円形		1.90	2.80	676～677
SE-127	9.0-18.0	円形	SK-126より古	1.80	不明	677
SE-136	10-17	円形	SD-135より古	3.05	1.02	677～678
SE-216	10-17	楕円形	SD-135より古	1.90×1.40	1.58	677～678

時期不明の土坑 46基 (SK-27・30・32・33・36～40・46・49・50・52・81・83～85・87・88・90・91・94・97・103～105・109・113・117・119・122～126・128・131・132・139・141・143・146・147・150・152・153) は第214表 (p.678～682) を参照。

時期不明の柱穴状土坑 74基 (P-53～80・160～167・170・172～180・182～184・234～246・255～257・260～267) は第216表 (p.683～687) を参照。

権現山遺跡 SG9 区

古墳時代の土坑

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SK-37	6.5-23.0	円形	SD-7より古	長径1.15×短径1.05cm	0.19	688～690

時期・性格不明遺構 (通路状遺構?)

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ
SX-54	12.0-18.5	連続する凹凸面		南北幅1.60～1.70程度	0.09～0.22	690～691

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-7	7.0-23.0	SK-37より新	1.28～1.43	0.12～0.15	SD-8と連続?	691～693
SD-8	7.5-22.5、8.0-22.5	SK-39と重複	1.16～2.64	0.11～0.21	SD-7と連続?	692～693
SD-34	8.0-21.0、8.5-21.0		0.36～0.51	0.01～0.05		693～694
SD-35	8.0-20.0		0.59～1.02	0.14～0.43		693～694
SD-38	7-22、8-22		1.26～1.94	0.08～0.17		693～695

時期不明の土坑 20基 (SK-9～14・16～22・33・39・53・57～59・64) は第220表 (p.695) を参照。

権現山遺跡 SG15 区

古墳時代以降の自然流路

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
流路1	15.0-21.5・22.0	SD-1・SK-3より古	12.2以上	約0.56		703～705
流路2	14.5-20.0、15.0-20.0		2.8～11.0	約0.40		706～708

時期不明の土坑 7基 (SK-3～9) は第225表 (p.708) を参照。

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-1	15-21.5	流路1より新	0.47～0.69	0.05～0.09		709
SD-2	15-20.5・21		0.48～0.70	最大0.70	SG2区の流路1に連続?	709～710

磯岡遺跡 SG9 区

古墳時代の竪穴建物跡

	グリッド	規模 (m)	重複関係	火処	付属施設	掲載ページ
SI-49a	6.5-24.5	(推定) 1 辺 4.5 前後	SD-48 と重複	炉 1 (北)	貯蔵穴 1	711 ~ 714
SI-49b	同上	同上	同上	同上	同上	711 ~ 714

時期不明の溝状遺構

	グリッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ
SD-40	6.0-24.0、6.5-24.0 7.0-24.0		2.00 ~ 2.30	0.27 ~ 0.50	権現山 SG9 区 SD-8 と関連?	714 ~ 715
SD-48	6.5-24.0	SI-49a・b を切る可能性あり	0.20 ~ 0.26	0.05 ~ 0.08		715

時期不明の焼土集中地点

	グリッド	形状	重複関係	規模 (m)	厚さ (m)	掲載ページ
SX-50	7.0-24.5			長径 0.74 × 短径 0.56	0.06	716

時期不明の土坑 5 基 (SK-41・42・44・47・52) は第 229 表 (p.716) を参照。

第6章 権現山遺跡 SG2 区

権現山遺跡 SG2 区は、河内郡上三川町大字磯岡字西谷 407-1・407-2・408-1・408-2・408-5・409-1・409-2・410-1 に所在し、「西谷田」の低地部に立地する。権現山遺跡 SG5 区の集落部から東側の低地へ降りた部分である。SG2 区的位置は北緯 36° 28′ 53″、東経 139° 54′ 22″（世界測地系）である。権現山遺跡 SG2 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.1～79.2m、東側の磯岡遺跡台地部（標高 80.0～80.2m）との比高が約 1.0m、西側の権現山遺跡 SG5 区台地部（標高 80.0～80.5m）との比高が約 0.9～1.4m である。SG2 区の範囲は南北 100m × 東西 70m で、調査面積は 7,000m²。権現山遺跡 SG2 区の北側には SG15 区が隣接し、南側には SG9 区が続く。

東西方向のベルト 5 本と南北方向のベルト 1 本を「キ」の字状に残して調査を行った。東西方向のベルト 5 本の北側には、幅 2m の試掘トレンチ（1994 年度に設定した TX11・TX12・TX13 と 1995 年度の TX9・TX10）がそれぞれ位置している。

東西方向のトレンチ 5 本で土層堆積状況を観察した後に、A 区～F 区の各小地区ごとに直線状の攪乱溝（後世の暗渠）を掘り下げ、また必要に応じてサブトレンチも設けて、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラの降下面を断面で確認した。テフラ層を参考にして古墳時代水田遺構の確認を目指したが、水田は認められなかった。群馬県域のように厚いテフラが降下した状況ではないので、水田にテフラが降下しても耕作ですぐに攪乱されることが予想できる。したがって、Hr-FA が薄層として残っている SG2 区は、古墳時代中・後期の水田に利用されなかったのであろう。As-B テフラは薄層として部分的に確認できたが、C 区などでは面的な広がり認められなかった部分もある。各小地区で認められた旧流路跡 7 箇所および F 区の土坑群を調査した。流路 1 から流路 7 までは河川跡で、いずれも人為的な溝ではないと判断されている。

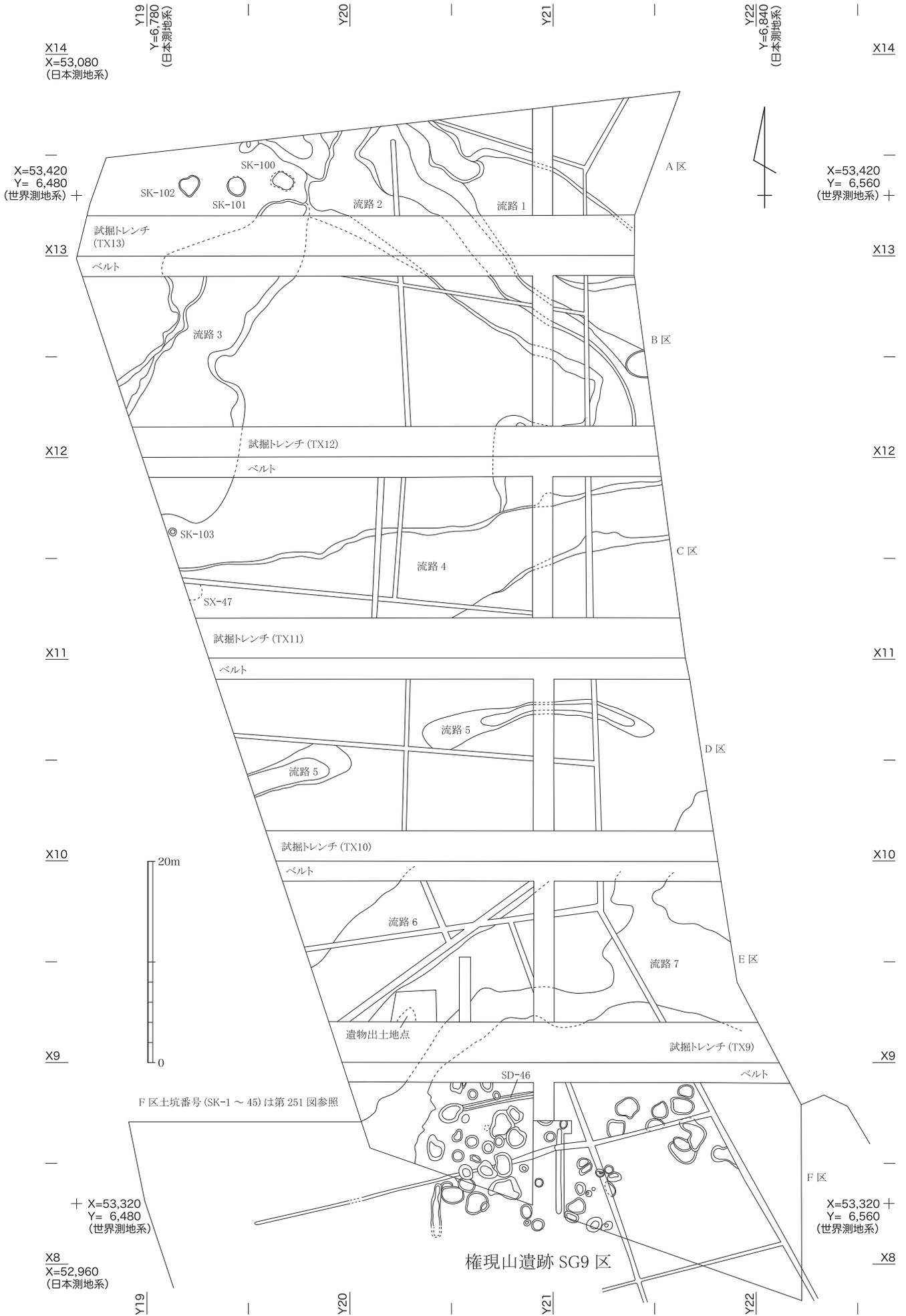
各地区ともに、地山の白色粘土層が出る面まで掘り下げて調査を行なった。試掘トレンチ（TX9～TX13）では、さらに下の砂層および砂礫層まで掘り下げた部分がある。TX13 トレンチでは、As-C 軽石よりも下層まで掘り下げて、13-21 グリッド付近から自然木が出土した。

SG2 区の南端部は、1999 年度調査の権現山遺跡 SG9 区でも重複して調査を行った部分があり、SG2 区で調査済の土坑を再度確認している。この時に、SG2 区中央部南端で南北ベルト下に隠れていた土坑 4 基・溝 1 条の調査を実施できた（SG9 区 SK-19～22 と SD-34）。

第1節 古墳時代の土坑（第 240 図、写真図版 4・175）

古墳時代と考えられる土坑は SG2 区の北部にあり、SK-100・103 の 2 基を調査した。各土坑の詳細を第 144 表に示す。SK-100 は袋状にオーバーハングする土坑で、弱くくびれる平面形で東半部底面がわずかに低いので、東半部を掘り広げた可能性が現地調査時に指摘されている。

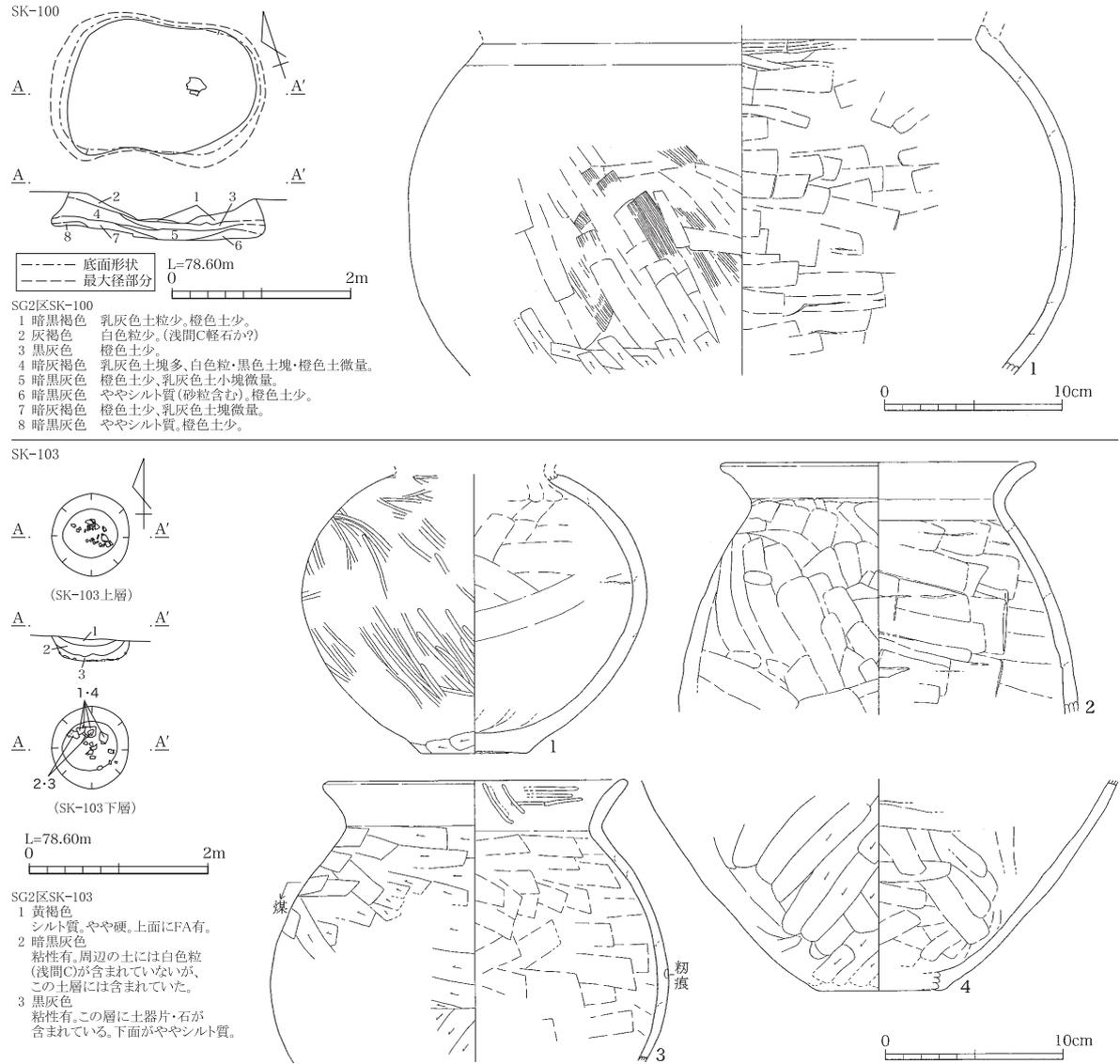
古墳時代と判断した根拠は出土土器だけでなく、後期初頭に降下した Hr-FA テフラと古墳前期に降下した浅間 C 軽石（As-C）がある。ただし両土坑のテフラを屈折率などで同定したものではない。Hr-FA 火山灰が上面にある SK-103 の場合は、覆土下層で出土した中期末の土師器と矛盾しない。SK-103 の覆土中位と SK-100 の 2 層中にある白色粒は現地調査時に As-C と判断されている。SK-100・103 の東方 40m（試掘トレンチ TX13 の 13-21 グリッド：第 241 図）で確認された Hr-FA 層および As-C 層と対比して As-C と判断したものである。両土坑覆土の軽石は白色粒として少量含まれる程度なので、古墳前期に降下したテフラが古墳中期前葉～中葉の土坑へ流入したと考えることが適切であろう。SK-103 の稲稈圧痕がある土師器の類例は、SG2 区では遺構外 A 区の杯と流路 2 の甕にもあり、他地区では SG10 区 SI-50 などにある。



第 239 図 権現山遺跡 SG2 区 全体図 (1/500)

第144表 権現山遺跡 SG2区 古墳時代の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-100	13.0-19.5	不整楕円形	重複なし(拡張あり?)	2.08	1.44	0.53	N-72°-W	白色粒あり(As-C?)
壁がオーバーハングする。埋没しかけた土坑を東側へ掘り広げた可能性が現地調査時に考えられている。遺物は土師器大形甕の口~胴部片、初期模倣杯、鉢、壺甕片が出土。土坑壁面の地山は水成堆積の乳白色粘土で、土坑底面の地山は砂礫層。								
SK-103	11.5-19.0	円形	重複なし	0.88	0.87	0.28		上面にFA、中に白色粒(As-C)
覆土上層にFAあり。遺物は土師器甕(3)と中形壺(1)の2個体および別個体(2・4)の破片の一部が出土。土坑壁面と底面の地山には礫を多く含む。								



第240図 権現山遺跡 SG2区 SK-100・103 遺構・遺物

第145表 権現山遺跡 SG2区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG2区 SK-100				
1 土師器 甕	高 残 19.7 最大 復 37.3	外面は胴部ナメハケ後にナメヘラナデ、下位ナメヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ後、胴下位に浅いヨコハケ。内面が暗褐色に汚れるが、破片化した後に付着したように見られる。	10YR5/2 灰黄褐 緻密 白・黒粗~細粒多、赤・透明粗~細粒やや多 やや硬質	底上 26cm 頸 1/12周、胴 1/6周 A区 SK-100
SG2区 SK-103				
1 土師器 壺	高 残 15.7 底 6.0 最大 復 19.3	外底面はヘラケズリでわずかに凹底状。外面胴下端にヨコヘラナデまたはヨコヘラケズリ、外面胴部に密なナメヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に横~斜位のヘラナデ、肩部ユビオサエ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 透明細粒やや多、 白・黒・赤粗~細粒少 やや硬質	底上 8cm。C区 FA 下層 の3片も接合 胴 1/2周、底全周 1、C区西側 FA 下

第6章 権現山遺跡 SG2 区

2 土師器 甕	口 復 17.0 高 残 14.2 最大 復 22.4	外面の胴部はナナメヘラナデで、非常に浅いハケメのようにも見える。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の胴部はヨコヘラナデ。外面胴部に 20cm 大の黒斑あり。外面の口縁部が暗褐色に汚れる部分もあるが、破片化してから二次的に付着した疑いがある。 [注記]2、C 区西側 FA 下、C 区西 5、C 区西 7	7.5YR4/3 褐 やや粗い 白・灰色礫～細粒多、 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	C 区西部の 26 片と SK-103 底上 11cm の小片 5 点が接合 口 2/3 周、胴 1/2 周 注記は左欄
3 土師器 甕	口 16.9 高 残 15.9 最大 22.3	やや薄い。外面は胴下半に斜位と上半に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後、内面に少しだけヨコヘラミガキ。内面の胴部にヨコヘラナデ。外面に稲穂痕が 1 箇所現れている。外面の中位以下に煤が明瞭に付着する。 [注記]2、3、B 区西、C 区、C 区西側 FA 下、C 区西 11、C 区浅間 C 中～F	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多、白礫少 軟質	底上 11cm。底上 9cm や C 区西部の破片少数も接合 口全周、肩 11/12 周 注記は左欄
4 土師器 甕	高 残 11.9 底 7.5 最大 残 26.6	器の大きさに対してやや薄い。外底面は外周部をヘラケズリ。外面は胴部ナナメヘラケズリ。内面は底部に多方向ヘラケズリ、胴部に斜～横位ヘラナデ。 [注記]1 C 区、C 区西 4、C 区西 5、C 区西 8、C 区西 10、C 区西側 FA 下、C 区浅間 C 中～下	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・灰色・透明粗～細粒多、白・灰色礫少 やや軟質	C 区西部の 31 片と SK-103 底上 8cm の 1 片が同一個体 底 1/3 周 注記は左欄

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

SG2 区の調査区は、北から順に A～F 区と呼称している。この各地区で、流路 1～7 を調査した。南へ傾斜する地形にあるので、各流路は南東方向および南西方向へ流れていたと考えられる。

1995 年 3 月に調査した試掘トレンチ TX11～13 の断面図が作成されているので、第 241 図に示した。遺跡の有無を確認する目的で設けたトレンチなので、特徴が記録されていない個別土層もある。この付近の低地堆積土全体に対して、I 層（耕作土）から X 層（砂層）および XI 層（砂礫層）までの共通記号を与え、それに該当する層の説明が記録されている。IV 層が 1108 年に降下した浅間 B 軽石（As-B）、VI 層が古墳後期初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）、VIII 層が古墳前期の浅間 C 軽石（As-C）である。

流路 1 と流路 2 のプラント・オパール分析では、古墳時代層からイネが検出されていない（第 7 章第 3 節）。SG2 区のすぐ北側に隣接する試掘トレンチ TX14 内 14-20 グリッドの低地堆積層でも、古墳前期に降下した浅間 C 軽石の直下層でプラント・オパール分析を行い、やはりイネは検出されなかった。古墳時代層でイネ珪酸体が確認されるのは、SG2 区から SG15 を隔てて北方へ 50m の地点にある試掘トレンチ TX16 内の流路覆土（16-19 グリッドの Hr-FA 下層）まで離れている。SG2 区周辺には古墳時代の水田が営まれていなかったと考えられる。

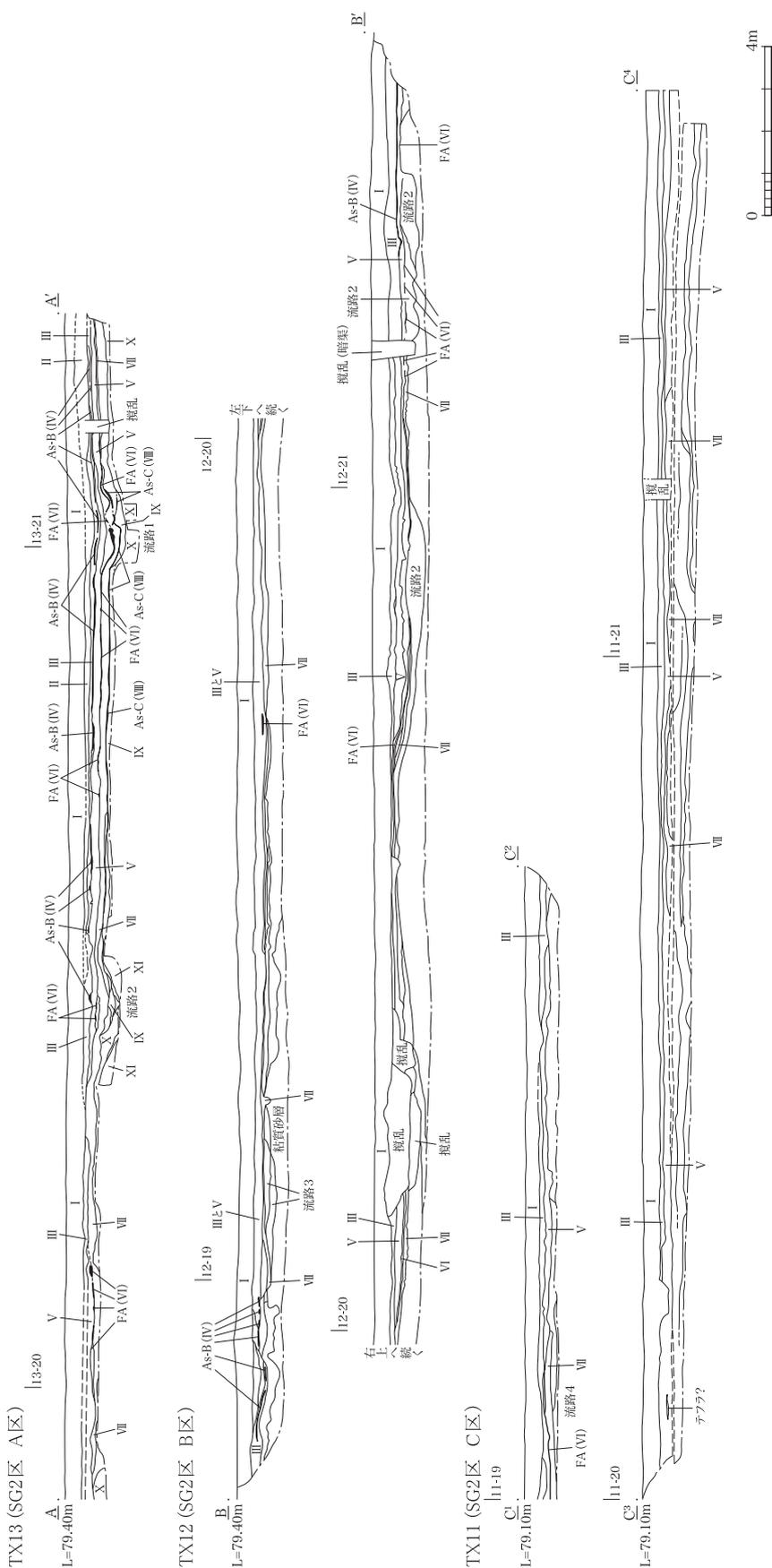
SG2 区 A 区・B 区 流路 1（第 241～244 図、写真図版 9・10）

A 区と B 区にまたがり、北と東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はない。西側の流路 2 と同時に存在し、流路 2 が流路 1 よりも少し早く埋没したと考えられる。流路 1 と流路 2 が、北方 25m にある権現山遺跡 SG15 区の「流路 2」に連続することも想定できる。幅は 3.5m（北西部）～11.0m（南東部）。東西両岸からの深さを断面図 A-A' で計測すると、古墳前期の As-C 降下時点で 32～46cm、Hr-FA 降下時点で 32～36cm、As-B 降下時には 16～20cm ほどの落ち込みで、埋没して浅くなるのがわかる。流路底（X 層上面）の標高は 78.86m。

覆土は自然埋没で、古墳前期の浅間 C 軽石（As-C）、古墳後期初めの榛名渋川テフラ（Hr-FA）、1108 年の浅間 B テフラ（As-B）が認められた。これらについて、13-21 グリッドでテフラ検出分析を実施した（第 7 章第 2 節）。古墳前期から後期までの流路で、古代末にはほとんど埋没していたことがわかる。

A 区では Hr-FA（VI 層）よりも下位で自然木が出土した。試掘トレンチ TX13 内の 13-21 グリッドでは、As-C 軽石を含む VIII 層と、少し下位の IX 層から、流路中に埋没した自然木が出土した。これに続く南側の B 区でも複数の自然木がある。古墳前期以前には、洪水時などに流木が堆積する環境にあったことがわかる。これらの自然木の出土状況は、写真で記録されている（写真図版 9・10）。

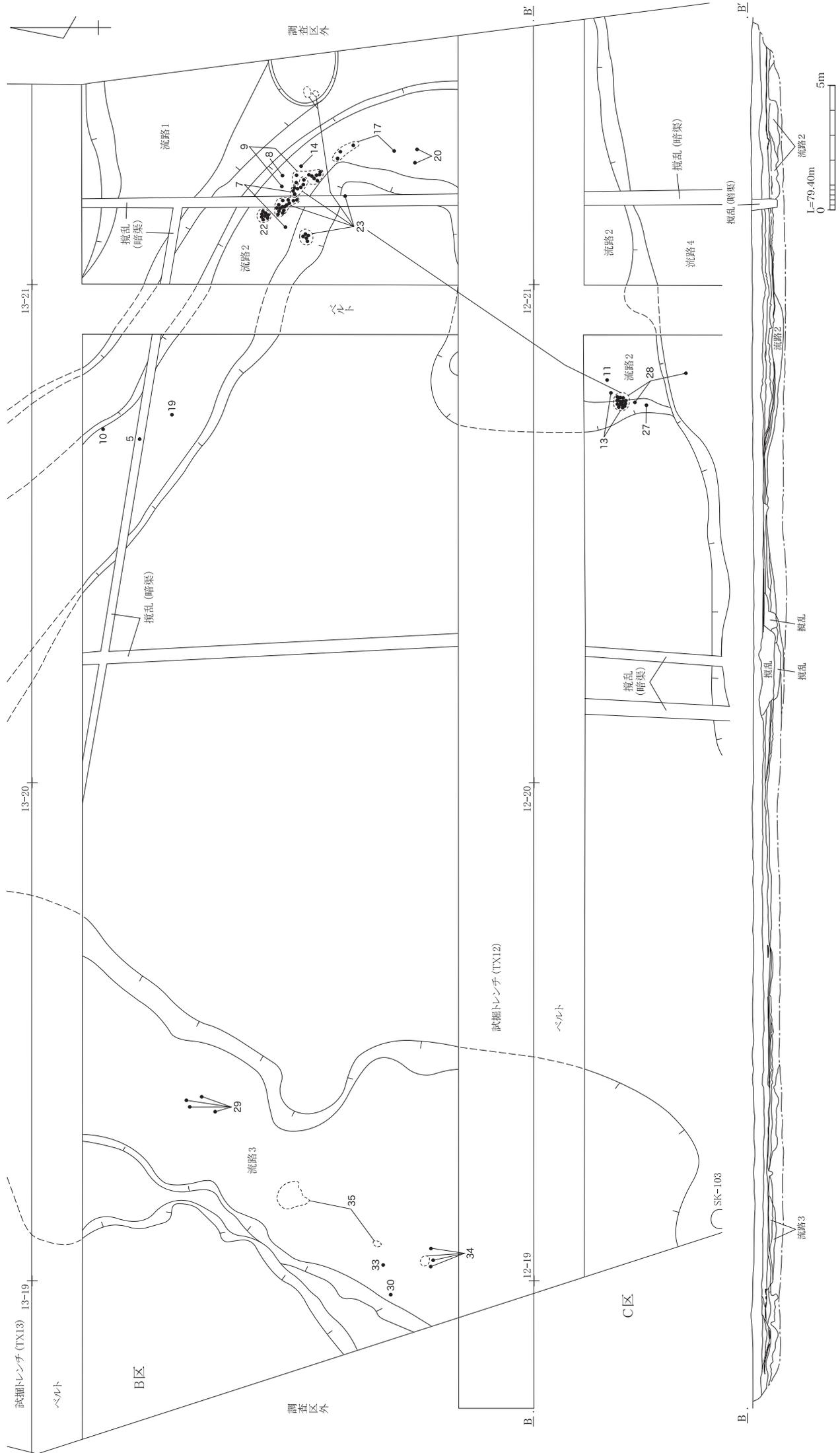
流路 1 埋没土の花粉およびプラント・オパール分析を、13-21 グリッドで実施した（第 7 章第 2・3 節）。花粉分析結果によると、As-C 降下以前では周辺に落葉広葉樹林や小規模な湿地が分布していたことと、Hr-FA 直下では森林が減少して水の循環が悪く水田にあまり適さない湿地環境が推定されている。プラント・オパール分析の結果では、Hr-FA 直下層から As-C 下位層までの試料でイネが検出されなかった。遺物は少なく、古墳中期後葉の土師器杯（第 244 図 1）や、中期末頃の須恵器甕片（4）を含む。



第 241 図 権現山遺跡 SG2 区 流路 1~4・試掘トレンチ TX11~13 断面図 (1/160)

SG2区流路1~4および試掘トレンチTX11~13
 水田耕作土、粘性、しまりに大く、植物の根に吸着した鉄分が見られる。乾燥すると礫化する。
 I 暗褐色
 II 暗褐色
 III 黒褐色
 IV 暗灰色
 V 明褐色
 VI 褐色・黒灰色
 VII 黒褐色
 VIII 青灰色
 IX 褐色
 X 砂層
 XI 砂礫層

As-B や As-A 等のテフラ粒を含む。粘性、しまりにやや富む。
 As-C はほとんど黒色土のみで構成され、テフラ粒・砂粒・ローム粒等を含むところもある。やや粘性に富み、しまりに欠ける。
 赤灰色テフラ粒。幾何形礫石(As-B)。1108年層下。
 白色テフラ粒(FA)の多少を含む。やや粘性に欠け、しまりに富む。
 FA(6世紀初頭層下)礫石。礫石と黒灰色の礫石からなる。粘性、しまりに欠ける。厚いところで幅2cmの層をなす。
 テフラ粒ほとんど含まない。III層と比べてシルト質の細かい礫石により構成される。VI層下に堆積。
 FA(6世紀初頭層下)礫石。見砂に見え、粘性、しまりに欠け、厚いところで幅2cmで堆積。VII層の下面および下位を中心に堆積。
 テフラをなす。粘性、しまりに富む。
 砂が層をなして含まれる。
 いくつかの層に細分できる場合もある。
 いくつかの層に細分できる場合もある。



第 243 図 権現山遺跡 SG2 区 B 区 流路 1~3 (1/200)

SG2 区 A・B・C 区 流路 2 (第 241～245 図、写真図版 10・11・175)

SG2 区北部の A 区と B 区にまたがり、南の C 区で流路 4 に合流する。北と東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はなく、東側の流路 1 と同時に存在する。古墳前期の As-C や後期初めの Hr-FA テフラの入り方からみて、流路 2 が流路 1 より少し早く埋没したと考えられる。流路 1 と流路 2 が、北方 25m にある権現山遺跡 SG15 区の流路 2 に連続することも想定できるが、中間にある TX14 では確認できていない。幅 2.4m (B 区東部)～7.5m (A 区中央部)で、流路の東西両側からの深さは、A 区の断面図 A-A' で 62cm (X 層上面)あるいは 42～52cm (XI 層上面)、B 区の断面図 B-B' では 64cm だが FA テフラ降下時には埋没して 26cm。底面は南へ低くなるように傾斜する。底面標高は A 区断面図 A-A' の XI 層上面で 78.02m、B 区北端で 77.92～77.99m、B 区南東部で 77.77m、B 区断面図 B-B' で 77.98m、C 区中央部北端では 78.09～78.15m である。

覆土は自然埋没で、試掘トレンチ TX12 の南壁面で土層断面を観察すると、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラを覆土上位に薄い層で確認できる (B 区断面図 B-B' の VI 層)。C 区の 11-20 グリッド北東部では、Hr-FA 下位で浅間 C 軽石 (As-C テフラ、B 区断面図 B-B' の VIII 層) を含む黒色土の分布範囲を除去した結果、流路 2 の南端部を確認できた。以上のテフラからみて、古墳前期に存在していた流路 2 の大半が古墳後期初頭までに埋没したことがわかる。12-21 グリッドでテフラ検出分析と屈折率測定を実施し (第 7 章第 2 節)、As-C (古墳前期) と Hr-FA (古墳後期初) と As-B (1108 年) の他に、1128 年に降下した浅間粕川テフラ (As-Kk) も認められた。

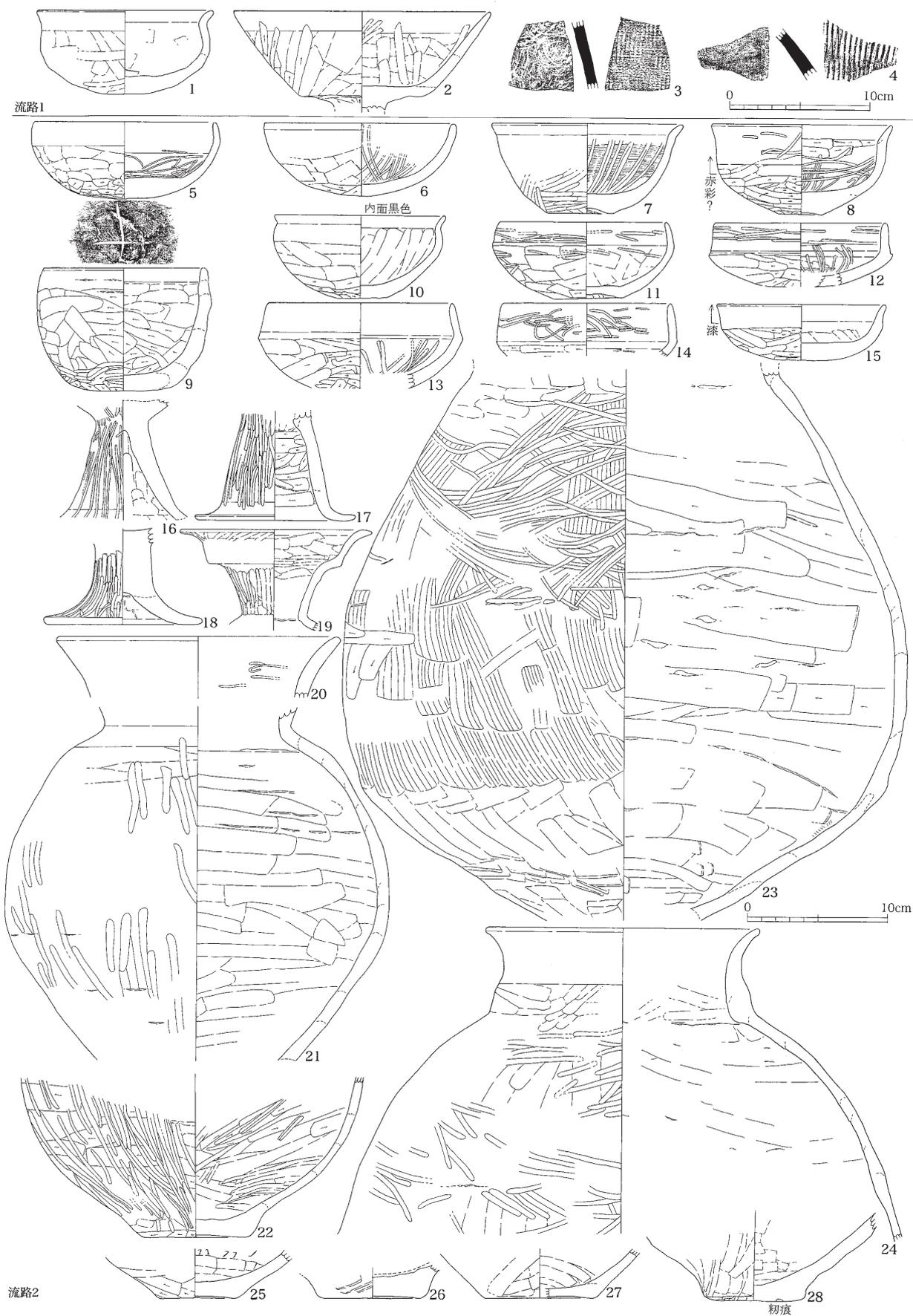
また、12-21 グリッドで、流路 2 埋没土 As-Kk 直上層から Hr-FA 直下層までのプラント・オパール分析を実施した (第 7 章第 3 節)。その結果、As-B 直下層において、低い値 (1,400 個/g) ではあるがイネが検出され、12 世紀初めに近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。As-Kk 直上層にもイネがあるが、低い値 (800 個/g) であった。古墳時代層からはイネが検出されていない。

一定量の遺物が出土した。古墳中期後葉から中期末の土師器が多い。A 区・B 区では中期後葉の土師器が多く、C 区では中期末の土師器・須恵器杯などが多い。磨滅・剥落した土器も少量含む (6・7・10)。しかし、残存度の高い杯や甕も多いので、水で流されてきた遺物とみるよりも、付近で使用・廃棄したものが多いと考えられる。杯類のうち 7 は外面のミガキや内面のハケメ調整が異質で、他地域の土器かもしれない。8 を赤彩、10 の内面を炭素吸着で黒色処理しているならば、中期後葉では珍しい事例である。中期末の遺物も多い (11～14)。鉢 (9) の外面を密に磨く箇所は、焼成前に生じた亀裂を補修した可能性がある。補修痕跡のある土師器は、SG5 区 SI-21 や SG10 区 SI-6 などにある。20・23・24 はかなり大形の壺。稲糞圧痕がある土師器 (28) の類例は、SG2 区 SK-103 などにある。

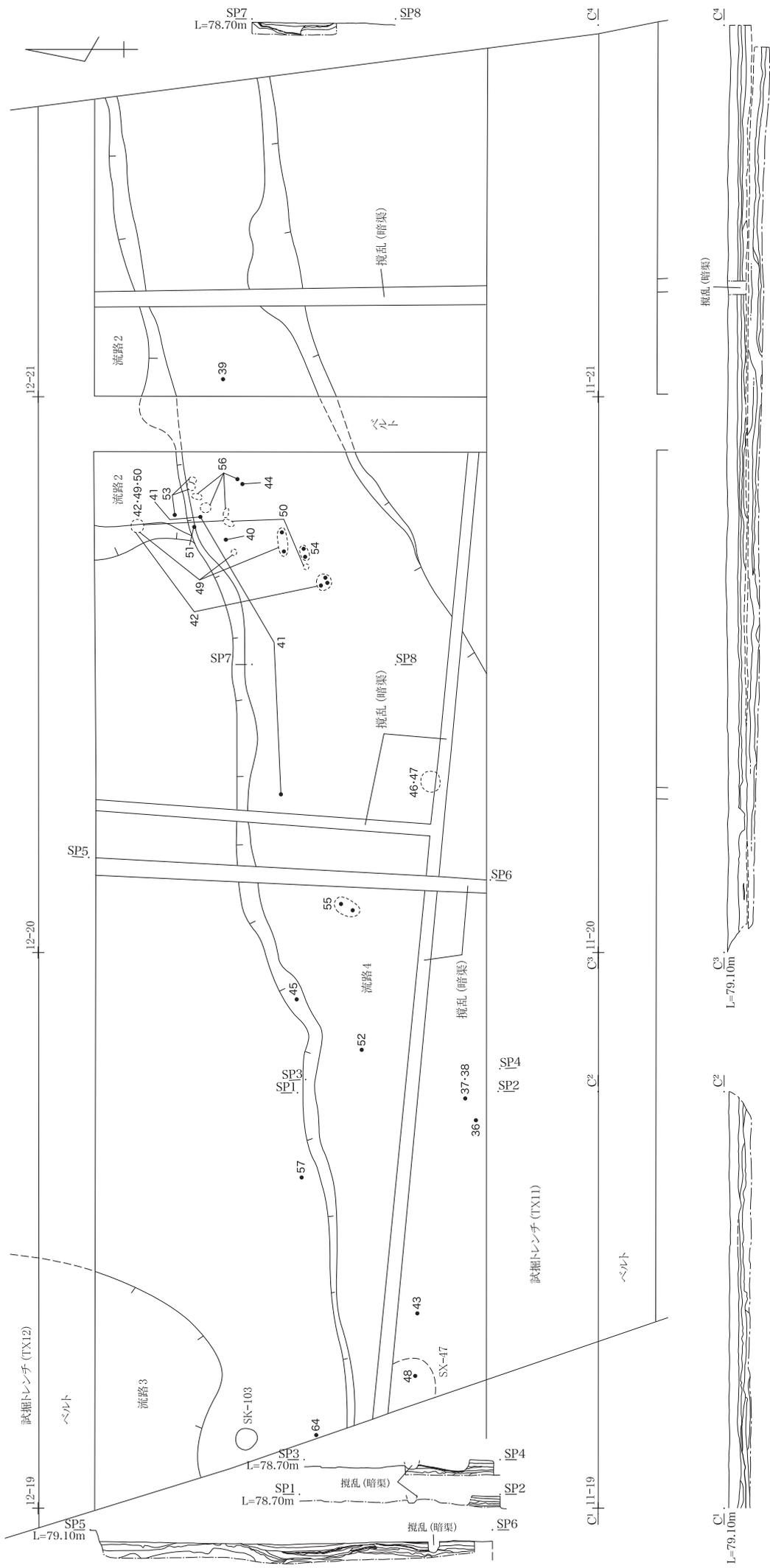
古墳前期後葉の二重口縁壺 (19) の類例は、砂田姥沼遺跡 2 区 SI-1 にある (『東谷・中島地区遺跡群』11)。図示以外に古墳後期前葉の土師器片が A 区・B 区にごく少量ある。A 区の流路 2 北端には終末期中葉の杯 (15) がある。SG2 区の B 区東半には縄文中期の加曾利 E 式土器片もある (『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 39 図 227)。

SG2 区 A・B・C 区 流路 3 (第 241～243・245・246 図、写真図版 10・11)

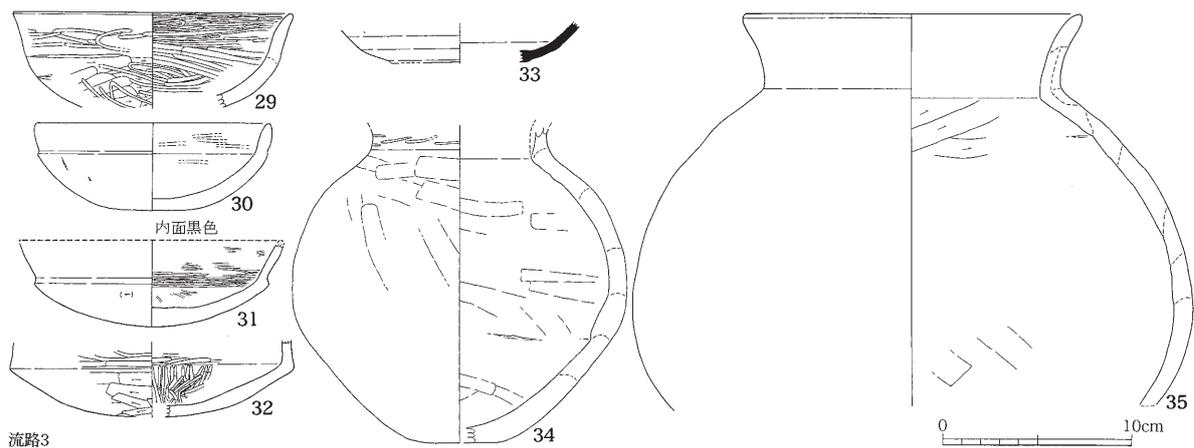
B 区の西部を中心として、A 区西部から C 区北西部にかけて確認した。重複する遺構はない。幅 5.0m (A 区)～13.1m (B 区南西部)で、確認面からの深さは B 区断面図 B-B' で 32cm。底面が南へ傾斜する可能性があるが不詳な部分が多い。B 区断面図 B-B' で流路 3 の底面標高が 78.26～78.28m、VII 層下面が 78.39m である。A 区では流路 3 内に FA テフラ層 (VI 層) がなく、V 層と VII 層が認められた。B 区の土層断面 B-B' で覆土上層に Hr-FA テフラ (VI 層) が載る部分がある。ただし FA テフラを面的に確認したわけではないので、B 区の遺物 (29・30・33・34・35) と FA の上下関係は遺物出土レベルから判断した。C 区西部では流路 3 の上部で Hr-FA テフラを面的に確認した (写真図版 11)。A 区に古墳中期末・後期前葉 (32)・



第244図 権現山遺跡 SG2区 流路出土遺物 (1) 流路1・流路2



第 245 図 権現山遺跡 SG2 区 C 区 流路 2~4 (1/200)



第246図 権現山遺跡 SG2区 流路出土遺物(2) 流路3

後期後葉(31)の土師器が少量あり、B区に古墳中期後葉～末の土師器がある(29・30)。磨滅・剥落した土器も少量含む(30・31)。31は内面の炭素吸着が特徴である。また、縄文土器や石器もごく少量ある。C区の流路3には遺物がない。

SG2区C区 流路4(第241・245・247・248図、写真図版11～13・175・176)

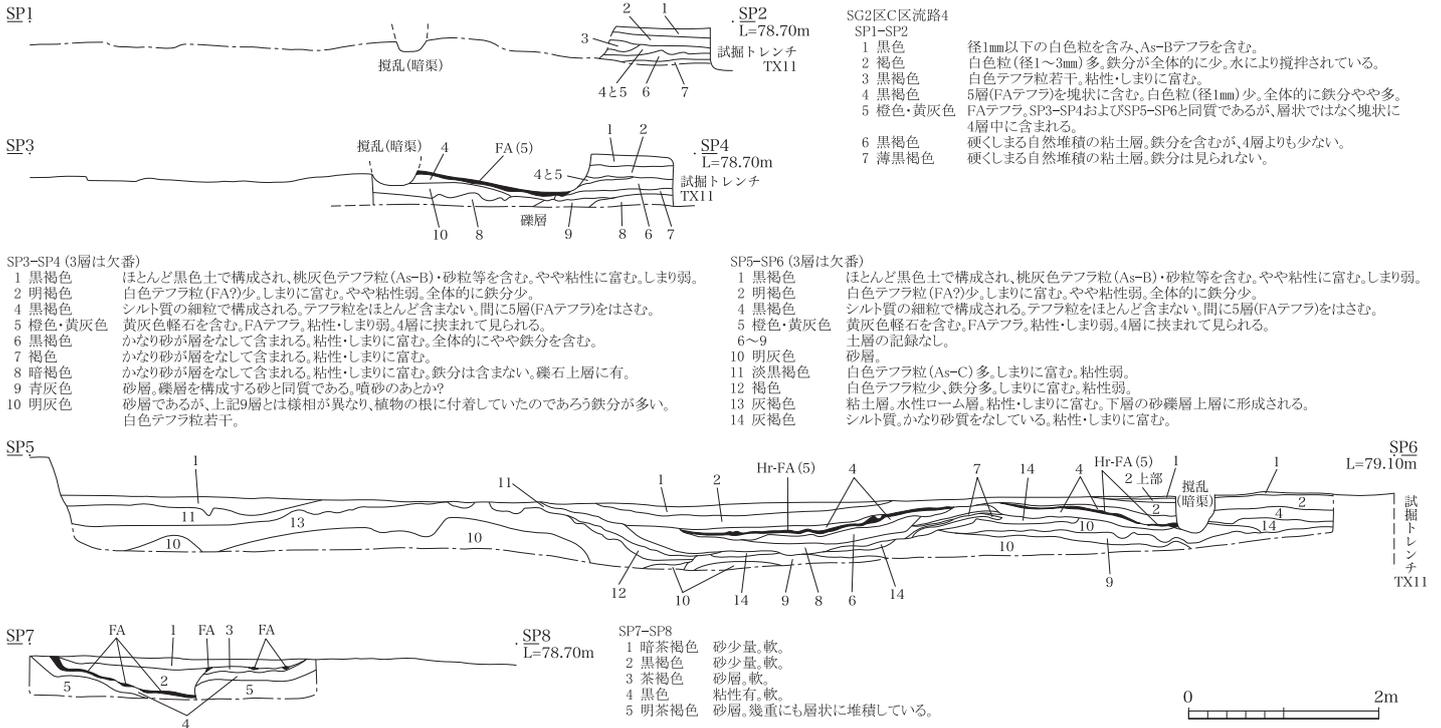
C区で確認した。時期不明の集石遺構SX-47が調査区西端部の底面に作られている。流路は幅5.7m(東端部)～9.5m(中央部)で、確認面からの深さは40～64cm。SG2区の所在する低地全体が南へ低くなる地形なので、北東側から南西方向へ流れていたと考えられる。ただし底面標高値は77.9～78.2m前後で、東西どちらかへの明確な傾斜を読み取れない。底面の標高値は、調査区西端で78.1～78.2m。西部のSP1-SP2付近で78.24～78.53m、SP3-SP4付近で78.13～78.16m。中央部のSP5-SP6付近で77.92～78.27m、SP7-SP8付近で78.10m。

C区全域の流路4内(SP1-2とSP3-4とSP5-6)で、1108年のAs-Bと考えられる桃灰色テフラ粒を1層中に含むが、層状のテフラとしては確認できない。古墳後期初頭のHr-FAテフラは面的に確認できた(写真図版12)。C区の東西土層断面図C1-C2で覆土中位にHr-FAテフラ(VI層)があり、またC3-C4の西部にも性格不詳のテフラが記録されている。東西土層断面図C3-C4は、階段状に壁面を残して図化したセクションを一枚の断面図に合成したので、上段と下段の図の間が欠落している部分もある(第241図下の破線部)。流路4に直交する土層断面のうち3箇所(SP3-4、SP5-6、SP7-8)をみると、黒褐色土である4層の断面中に、FAテフラ(5層)の塊が断続的な層状に連なって認められた。FAテフラが流路4の中位に降下した古墳後期初頭には、流路内が不規則に埋没していたことが分かる。流路4の中央部にFAテフラが分布しているので、その部分にSP7-SP8ラインを設定した結果として、溝の南北縁にかからない中央部にSP7-SP8ラインがある。SP5-SP6の11層には古墳前期に降下した浅間Cと考えられる白色テフラ粒が多く、純層ではなくて層中に拡散していた。

遺物は、流路2が流路4に合流する付近に多く、FAテフラ層よりも下位にある(写真図版11)。流路4の最下部で出土した縄文中期の深鉢大破片(写真図版11、『東谷・中島地区遺跡群10』第39図214)は阿玉台IV式で、流路4が縄文中期から存在していた可能性を示している。11-20グリッド流路4のFAテフラより下層で、身に蓋を被せて正位で出土した完形の須恵器杯(37・38)は、杯身が砂層に載り、杯蓋は黒色土層と砂層の境界部にあった。37・38の内部は空洞で内面に汚れはないが、ごく少量の褐色物が残っていた。近くの同じレベルに須恵器蓋もある(36)。47と48の付近には少量の炭片が伴っていた。

FAテフラ下で出土した須恵器蓋(36)と、セットの蓋杯(37・38)はTK23型式。土師器杯をみると

第6章 権現山遺跡 SG2 区



第 247 図 権現山遺跡 SG2 区 C 区 流路 4 断面図

古墳中期後葉のものが最も多く (42・43)、中期末の遺物も多い (40・41)。接合復原できる個体が多いので、数個体の土器が各時期に遺棄または廃棄された状況が考えられる。磨滅・剥落した土器はごく少ない (45)。鉢 (44) は緻密な胎土で、焼成時に生じた亀裂に沿って破損した可能性があり、焼成前の修理ヘラミガキ痕跡などは見られない。小形壺のうち 47 と 48 は丁寧な薄い製品。42 と 46 は煤や被熱痕からみて火災にあったかのようなのである。土器器壺類は、口縁部片をみると図示した 49～56 以外に 2 個体分ほどがあるが、小破片ばかりなので図示していない。炉で使った痕跡のある甕類が多い (49～54)。

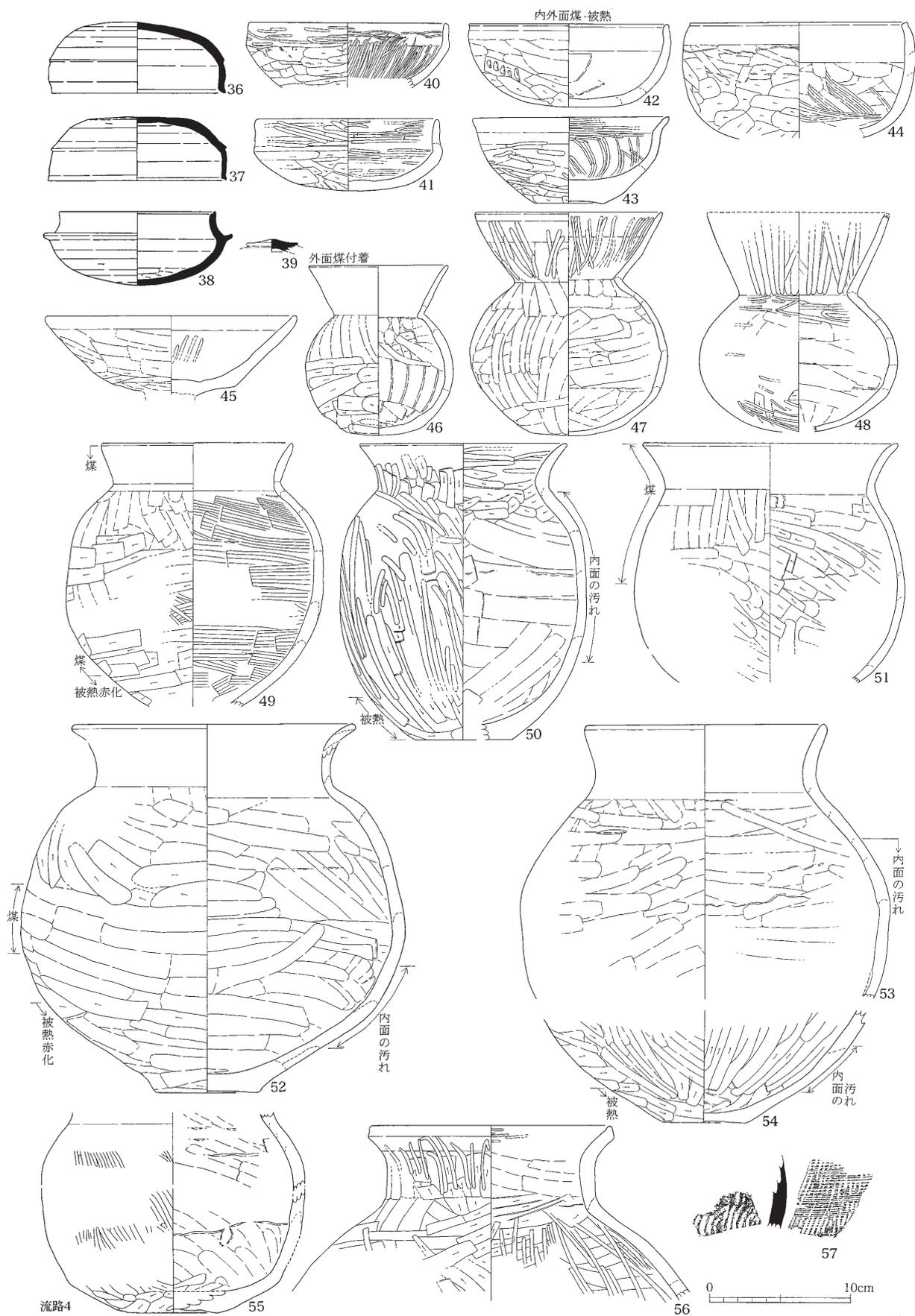
C 区西部では FA 層より上にも土器器が若干あるが小片で図示できない。縄文土器は上述の阿玉台 IV 式の他に加曾利 E 式があり、弥生中期後半の土器もある (『東谷・中島地区遺跡群 10』第 39 図 229、第 42 図 19)。

SG2 区 D 区 流路 5 (第 249・250 図、写真図版 13・14)

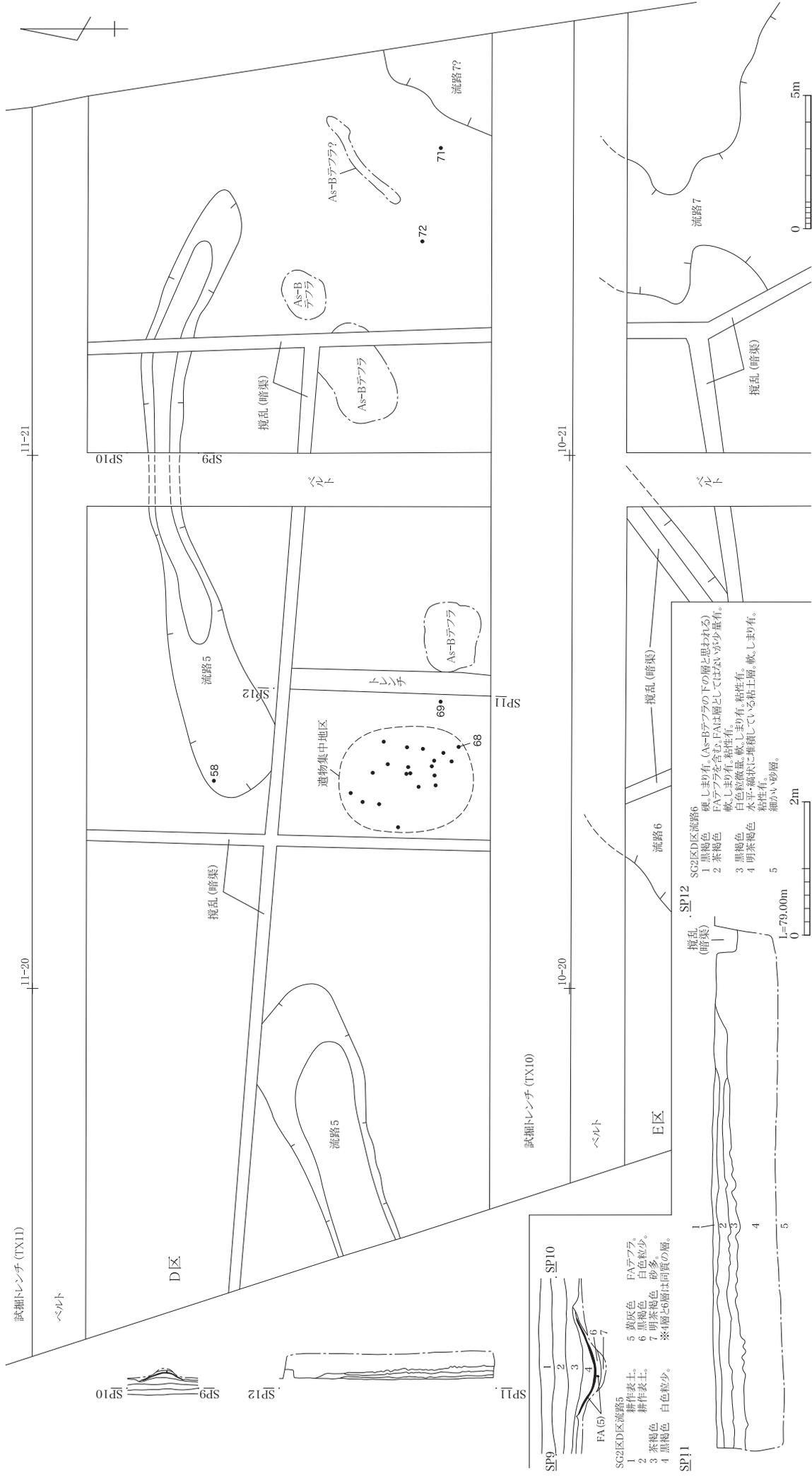
D 区だけで確認した。西は調査区外まで伸びる。東側は確認面より浅くなって消滅するが、さらに伸びていたものと考えられる。また、中央部も確認面より浅くなって途切れている。重複する遺構はない。幅 1.2～3.9m、確認面からの深さは、底面の範囲を図示した部分で計測すると 19～34cm。途中で確認面よりも浅くなるので、底面が一定方向へ傾斜していないことがわかる。底面標高は東端で 78.39m、中央部で 78.48m、西端で 78.61m。埋土は自然埋没で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラが覆土中位に層として認められた。溝を FA 層上面まで掘り下げた段階で写真を撮ったん撮影して FA 層上面レベルを計測し、その後に溝底面まで掘り下げた。FA 層上面と溝底面のレベル差は 6～16cm 程である。遺物は、図示した古墳後期末の杯 (第 250 図 58) の他に、古墳中期後葉の土器器杯と高杯が各 1 片出土した。

SG2 区 D 区・E 区 流路 6 (第 239・249 図、写真図版 14)

流路 6 はわずかな窪み状の浅い流路跡である。流路 6 の平面形は E 区で確認され、幅 7.5～8.7m、確認面からの深さは 19～45cm (断面 SP11-SP12 における 1～3 層の厚さ)。D 区では流路 6 の平面形が確認されていないが、流路 6 が北東に延びる方向に沿って D 区で 12 世紀初頭の As-B テフラが 4 箇所認められ (標高 78.45～78.69m)、As-B よりも下層には古墳後期初頭の Hr-FA テフラおよび白色粒を少量含む (断



第248図 権現山遺跡 SG2区 流路出土遺物(3) 流路4



第 249 図 権現山遺跡 SG2 区 D 区 流路 5~7 (平面図 1/200・断面拡大図 1/80)

- SP9
- 1 黄灰色 FAテフラ
 - 2 耕作表土 白色極少。
 - 3 赤褐色 砂多。
 - 4 黒褐色 白色極少。

- SG2区D区流路6
- 1 黒褐色 FAテフラを含む。FAは層としては少ないが少量有。
 - 2 赤褐色 軟しまり有。粘性有。
 - 3 黒褐色 白色粉微量。軟しまり有。粘性有。
 - 4 明赤褐色 水平・凝状に堆積している粘土層。軟しまり有。粘性有。
 - 5 黒褐色 細かい砂層。

- SP11
- 1 黒褐色 FAテフラ
 - 2 赤褐色 砂多。
 - 3 明赤褐色 粘性有。
 - 4 黒褐色 粘性有。
 - 5 黒褐色 粘性有。

- SP12
- 1 黒褐色 FAテフラを含む。FAは層としては少ないが少量有。
 - 2 赤褐色 軟しまり有。粘性有。
 - 3 黒褐色 白色粉微量。軟しまり有。粘性有。
 - 4 明赤褐色 水平・凝状に堆積している粘土層。軟しまり有。粘性有。
 - 5 黒褐色 細かい砂層。

面図 SP11-SP12 の 2～3 層)。これらのテフラが流路 6 の痕跡を反映している可能性がある。遺物は出土しなかった。テフラを参考にすると、古墳時代から古代までの流路跡と考えられる。

SG2 区 D 区・E 区・F 区 流路 7 (第 239・249・251 図、写真図版 14)

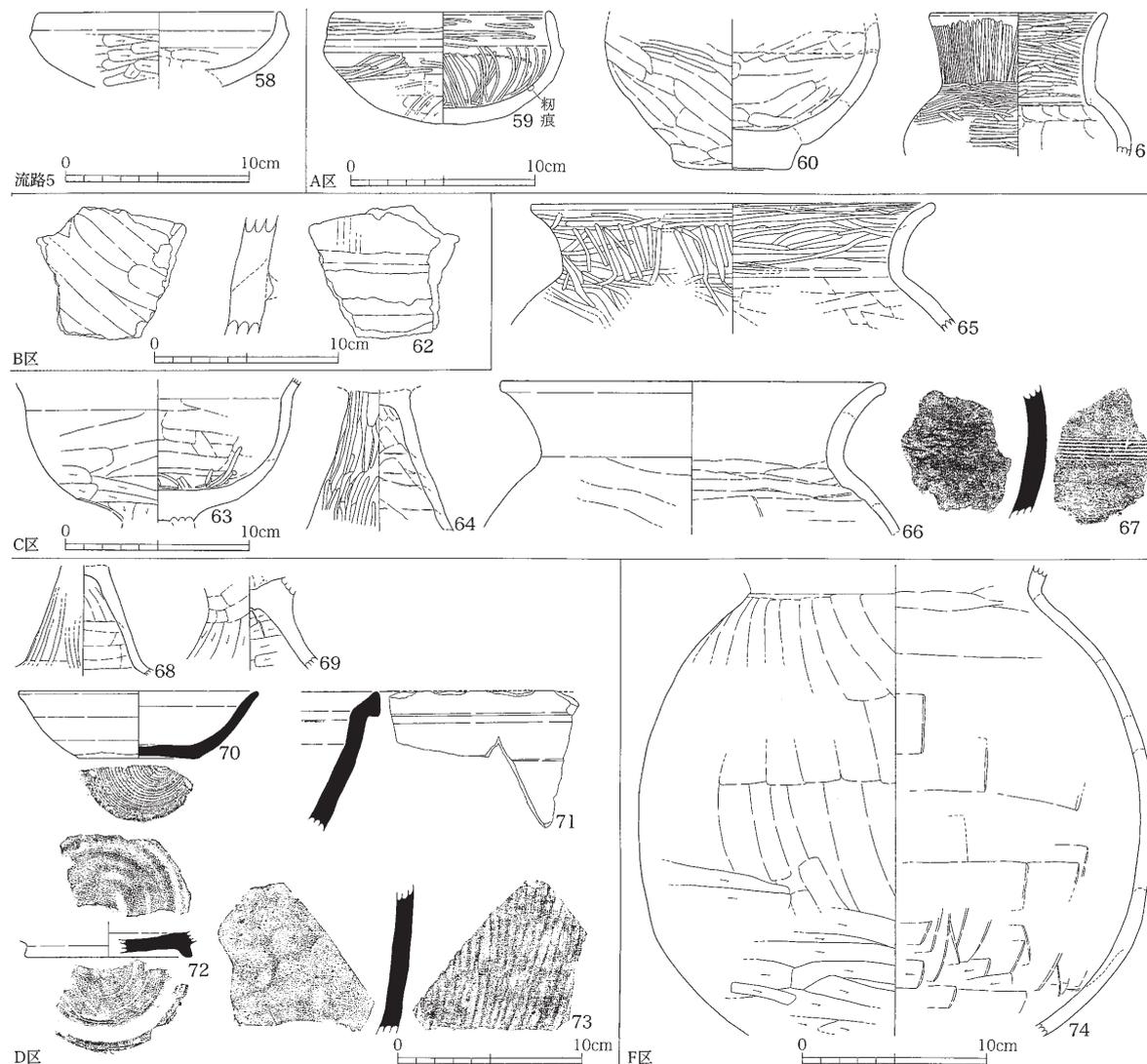
流路 7 はわずかな窪み状の浅い流路跡で、テフラ集中部なども認められなかった。E 区東側および F 区西側の調査区外へ伸びている。また、北に分かれた部分は D 区の南東隅へ伸びていた可能性がある。東部で幅 7.9～8.5m、北へ分かれて伸びる部分で幅 5.0m、F 区へ伸びる西部で幅 2.3～5.8m。確認面からの深さは非常に浅く、F 区へ伸びる西部で計測すると深さ 10～14cm、底面標高 78.41～78.44m。底面の傾斜方向は不詳である。流路 7 の土層断面図は作成されていない。遺物は出土しなかった。火山灰や遺物から時期を限定できないが、流路 1～6 と同様に古墳時代から古代までの流路跡と判断した。

遺構不明および遺構外出土の遺物 (第 250 図 59～74、写真図版 176)

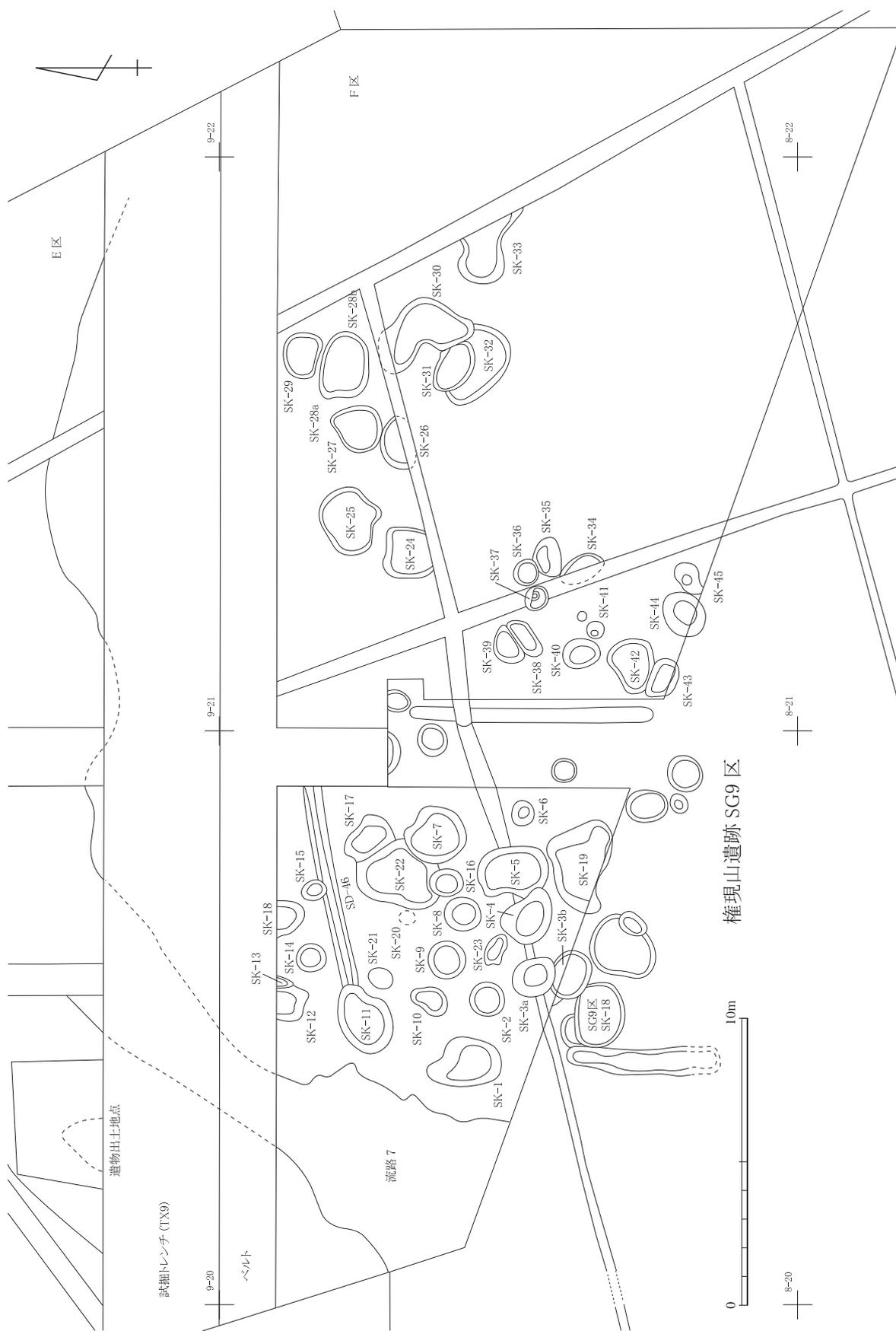
A 区～F 区の流路およびその周辺で出土したが、遺構外および帰属遺構不明の遺物を示した。

[A 区] 59 は古墳中期末葉の杯で、流路 2 に伴う可能性がある。稲粃圧痕がある土師器は、SG2 区 SK-103 などにある。60 は粗雑な調整の小形甕。61 は胎土の特徴からみて古墳後期後半または終末期の壺。

[B 区] 62 は古墳中期の円筒埴輪で、西方 700m の東谷笹塚古墳(今平 2012) から持ち込まれたものだろう。B 区には弥生土器と石器も少量ある(『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 42 図 31、第 47・48 図 35・41)。



第 250 図 権現山遺跡 SG2 区 流路出土遺物 (4) 流路 5・流路周辺の遺構外 A～F 区



第251図 権現山遺跡SG2区F区(1/200)

[C区] 63～66は残存度の大きな古墳中期の土師器破片。

[D区] 古墳前期の土師器高杯と台付甕(68・69)は、D区の10-20グリッドにある遺物集中地点で、SP11-12断面図の3層、つまりFAテフラより下層にある。古墳前期の台付甕は、南に連続するSG9区の南東部低地でも出土している。70～73は8～9世紀の須恵器。

[E区] 全体図に記入した遺物出土地点があるが、すでに報告した縄文後期と弥生中期の土器片(『東谷・中島地区遺跡群』10の第40図266・269と第42・43図63・64・89)の他は、土師器壺甕類4片・須恵器3片(杯2・甕胴部1)・自然礫3点だけで、図示できる遺物がない。

[F区] 74は、土坑群集中地区の遺構外で出土した土師器甕破片を図上復原したものである。

第146表 権現山遺跡SG2区 流路1～5および流路周辺の遺構外A～F区 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
流路1				
1 土師器 杯	口 復12.5 高 6.0	外面は底部がナデで丸底の頂部がやや平面気味、体部は横～斜位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は体～底部ヘラナデで、体部はヨコヘラナデが多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・灰色・透明粗～ 細粒やや多、白・赤粗～細粒少 やや軟質	FAテフラ下5cm 口2/3周 B区東6
2 土師器 高杯	口 復18.2 高 残7.1 底 8.6	外面は底部タテヘラケズリ。外面の杯体部に斜位のヘラナデとヘラミガキを口縁部ヨコナデの前と後に行う。内面の杯体部に横～斜位と縦位のヘラナデをやはり口縁部ヨコナデの前と後に行う。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗～細粒少 軟質	浅間Bテフラ下34cm 口3/4周、杯底全周 A区西101
3 須恵器 甕		外面は木目直交の縦位平行溝を彫った叩き板で擬格子叩き、内面はやや浅い同心円文当具痕。破面は暗赤灰色。	5Y5/1 灰 緻密 白細粒少 硬質	浅間Bテフラ下35cm 胴部1片 A区西102
4 須恵器 甕		外面は縦位の平行叩き目。内面はおそらく磨り消しにより無文。	10YR4/1 灰 やや緻密 白粗～細粒やや多 硬質	1994年度試掘トレンチ 13-21グリッド 胴部1片 TX13-21
流路2				
5 土師器 杯	口 13.1 高 5.5 最大 13.4	底部が厚く体部が薄い。外面は中位にナデと下位～底部に円周方向のヘラケズリ。外底面中央に焼成前の刻線「十」あり。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の体～底部にナデ後、底部に不定方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。	10YR7/2 にぶい黄橙 緻密 白・赤粗～細粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	底上31cm 口3/4周 B区西133
6 土師器 杯	口 復13.6 高 残5.2	外面は体部ヘラナデ、底部多方向ヘラケズリ。内外面の口縁部はヨコナデと思われるが不明確。内面に放射状および斜位のヘラミガキ。内外面の全体が磨耗して調整が不明瞭。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 白・灰色礫と黒・透明細粒少 やや軟質	FA層下 口1/12周、体3/4周 A区西104、FA下
7 土師器 杯	口 復13.6 高 6.4 底 4.6	外底面は強いナデ後に少しヘラミガキする。外面は体部下位に斜～横位ヘラミガキ。内外面の体部上位は磨滅して調整不明。内面の中～下位にヨコハケ後放射状ヘラミガキ。 [注記]B区東102、107、B区FA下	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・透 明細粒少 やや軟質	底直上～底上31cm (FA 層下) 口1/3周、体～底全周 注記は左欄
8 土師器 杯	口 12.6 高 6.4 最大 3.0 底 最大12.8 重 残258.7	口～体部境の稜が内面で明瞭。外底面は円周方向のヘラケズリで凹底状。外面は中位ナデ、下位ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に少しヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ、体部ナデ後に上位ヨコヘラケズリと放射状の後横方向の疎らなヘラミガキ。外面口縁部と内面全体に赤色(10R4/8)の鉄分が付着し、赤彩している可能性もある。	2.5YR6/6 橙 緻密 白・黒粗～細粒と透明細 粒少 やや硬質	底上4cm (FA層下) 口11/12周、体～底全周 B区101
9 土師器 鉢	口 11.5 高 8.7 底 6.8 最大 12.4	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ後、体～底部の境界付近に密なヘラミガキを行う部分があり、焼成前に生じた亀裂を補修したのかもしれない。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は上半ナデ、下半に横位と底部に1方向のヘラケズリ。	5YR7/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒やや多、 白・黒細粒少 軟質	底上35～39cm (FA下 4～9cm) 口1/2周、底全周 B区東105、108
10 土師器 杯	口 12.0 高 5.9 底 3.8 最大 12.1	外底面は円周方向のヘラケズリで平底。外面は中位に横～斜位ナデ、下位ヨコヘラケズリ、口縁部と肩部にヨコナデ。内面は体部ナメナメナデ、口縁部ヨコナデ。内面全体が炭素を吸着して黒色。重量226.4g。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 透明粗～細粒多、 白・黒粗～細粒と赤細粒少 やや硬質	ほぼ完形 B区西132
11 土師器 杯	口 11.7 高 5.5 底 4.8 最大 12.8	外面の口～体部境に浅い段あり。外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面は体部ヨコヘラケズリ後に上部ヨコヘラミガキ。内外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に斜～横位ヘラナデ後に少しヘラミガキ。 残存重量222.7g。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤・透明粗～細 粒と黒細粒少 やや硬質	底上11cm 口1/3周、底全周 C区61-A
12 土師器 杯	口 復12.0 高 残4.6 最大 復13.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部をヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面は体部をヘラナデ後に横位および放射状のヘラミガキ。 [注記]A区FA下、A区西104、TX13-20～21 S11	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・赤粗～細粒と黒・透 明細粒少 硬質	FA下(浅間B下28cm と94年度試掘トレンチ TX13の各1片も同一個 体) 口1/4周 注記は左欄
13 土師器 杯	口 復12.9 高 残6.1 最大 復14.5	外面は中位にナデと下位にヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。口～体部の境に浅い段あり。内面は体部をナデ後にナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・透 明細粒少 やや軟質	底上2～3cm 口1/3周 C区62-A、63
14 土師器 杯	口 復12.0 高 残3.8 最大 復12.7	外面の口～体部に浅い段あり。外面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部と内面体部にヨコナデ後、横～斜位のヘラミガキ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒と白・黒・透 明細粒少 やや軟質	FA層上3cm 口1/3周 B区東8
15 土師器 杯	口 11.9 高 4.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリで、削る前の底部に木葉痕があったのかもしれない。内外面口縁部にヨコナデ、内面底部に1方向のヘラナデ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。	10YR7/2 にぶい黄橙 緻密 白・透明細粒多、黒細粒 少 軟質	A区流路2北端 口7/12周、体2/3周 A区西105
16 土師器 高杯	高 残6.5 脚裾 復11.2	外面は脚柱部タテヘラケズリと脚裾部ヨコナデの後に脚全体をタテヘラミガキ。杯内面の調整は磨耗して不明。脚内面は上位ナデ、中位ヨコヘラナデ、裾部ヨコナデ。流路3出土遺物の可能性もある。 [注記]TX13-20、TX13-20 S10	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒やや多 やや軟質	1994年度試掘トレンチ の13-20グリッド 脚柱3/4周、脚裾5/12 周 注記は左欄

第6章 権現山遺跡 SG2区

17 土師器 高杯	高 残 7.7 脚裾 復 11.4	長く太い脚部が特徴的。外面はナデと裾部ヨコナデ後に脚柱部タテヘラミガキ。内面は裾部ヨコナデ、脚柱部ヨコヘラケズリ。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・透明粗～細粒多、 赤細粒少 やや硬質	底直上と底上 11cmが接 合 (FA より下) 脚柱～脚裾 1/2 周 B 区東 112、121
18 土師器 高杯	高 残 7.8 脚裾 復 11.2	外面全体をナデ後にタテヘラミガキ。脚内面は上部にタテナデ、裾近くに斜～横位のヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明細粒少 硬質	VII層付近 (FA より下) 脚柱 3/4 周 脚裾 5/12 周 A 区西 103
19 土師器 壺	口 13.6 高 残 7.1	やや薄く軽い。外面が頸部にやや光沢のあるタテヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に上半をナメナデ。内面はヨコナデ後に口縁部の受口状部分をやや光沢のあるヨコヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・透明礫～細粒や や多、赤・黒粗～細粒少 やや軟質	底上 20cm 口 5/6 周、頸全周 B 区西 134
20 土師器 壺	口 復 19.8 高 残 4.4 最大 復 20.2	やや厚手。口縁部の内外面をヨコナデ。内面に少しヨコヘラミガキを行う。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒多、灰色 粗～細粒少 やや軟質	FA 上 1～3cm 口 1/4 周 B 区東 125、128
21 土師器 壺	高 残 25.3 最大 復 27.2	外面胴部は粘土積み上げ痕が少し残る程度のナデ後に、縦位の太いヘラミガキ。内外面の口～頸部ヨコナデ。内面胴部はヨコヘラナデで、胴上位に積み上げ痕をやや多く残す。外面肩部に 6～13cm 大の黒斑がある。被熱使用痕や付着物は見られない。 [注記]A区FA下、TX13-20 2、3、4、5、TX13-20～21 S11	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・灰色・透明粗～ 細粒多、白・灰色礫と赤・黒粗 ～細粒少 やや硬質	A 区 FA 層下と 1994 年 度試掘トレンチ TX13 の FA 下 IX 層 頸 1/12 周、胴 1/4 周、 胴下端 1/6 周 注記は左欄
22 土師器 壺	高 残 11.4 底 7.4 最大 残 24.2	外底面は円板状に突出した底面をナデた後、1方向ヘラナデで平底状にする。外面胴部は下位ナデと中位および下端ヨコヘラケズリの後タテヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデおよびヘラケズリ。内面全体が炭素を吸着して黒色。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒多、 赤・灰色粗～細粒少 やや硬質	底上 21cm (FA 下 26cm) 胴下半全周、底全周 B 区東 103
23 土師器 大形壺	高 残 39.2 最大 復 40.1	おそらく円板状の底部が接合面で剥かれた状態。外面は下位に雑なヘラナデ→中位以上に浅いタテハケ→上位ナメヘラミガキ。頸部はタテヘラナデ。内面はヨコヘラナデで、積み上げ止痕が厚くなっている部分をヨコヘラケズリで薄くする。被熱痕や煤は見られない。 [注記]A区、A区西 106、B区東 7、103、106、107、109、111、130、131、B区FA下、B区西FA下、C区63	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 白・黒・灰色・透明 粗～細粒多、白・灰色礫と赤粗 粒少 やや硬質	底上 2～31cm (FA 層下 1～5cm) 頸 1/12 周、胴 1/4 周、 底 2/3 周 注記は左欄
24 土師器 大形壺	口 復 19.4 高 残 22.1	大形で頸部が特に厚い。外面は胴部をタテヘラナデ後に横～斜位の太いミガキ、頸部に雑なヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、頸部ナメナデ。26と同一個体の可能性が高い。 [注記]A区、A区SK-100、A区西 104、A区FA下、B区西FA下、TX12B区22、TX13-20、TX13-20 1、TX13-20～21 11	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・透明粗～細粒多、 白・灰色礫と赤・黒・灰色粗～ 細粒少 やや軟質	FA 層下 口 1/24 周、頸 2/3 周、 胴上半 1/2 周 注記は左欄
25 土師器 大形壺	高 残 3.5 底 5.4	外底面は円周方向のヘラケズリでわずかに凹面状。外面は斜位のヘラケズリ後ヘラナデ。内面は円周方向の丁寧なヘラナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・灰色・透明粗粒と 白・黒・赤細粒多 やや硬質	1994 年度試掘トレンチ 内の流路 2 底全周 TX13-20～21 S11
26 土師器 大形壺	高 残 2.3 底 7.0	外底面が円板状に突出する形で、底面は 1 方向ヘラケズリにより少し凹面状になる。外面はタテヘラナデ。内面は剥落のため調整不明。24 と同一個体の可能性が高い。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・灰色・透明粗～細粒 多、白・灰色・透明礫と赤・黒 粗～細粒少 硬質	FA 層下 底 5/6 周 B 区西 FA 下
27 土師器 甕	高 残 3.5 底 復 7.8	薄く軽い。外底面は 1 方向ヘラケズリでわずかに凹底状。内外面の胴部にナメヘラナデ、内面底部に 1 方向または多方向のヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 粗い 白・黒粗～細粒多、赤・ 透明粗～細粒やや少 やや硬質	底上 7cm 底 1/3 周 C 区 65
28 土師器 甕	高 残 6.5 底 7.2	外底面はおおよそ 1 方向のヘラケズリで、稲柄圧痕が 1 箇所ある。外面胴部タテヘラナデ。内面は底部に多方向と胴部に横～斜位のヘラナデ。内面が黒褐色または暗褐色に汚れる。	7.5YR6/4 にぶい橙 粗い 灰色礫～粗粒と白・透明 粗～細粒多、赤・黒粗～細粒や や多 やや軟質	底上 2～23cm 底全周 C 区 63、64、75
流路 3				
29 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 5.0	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後、全体をやや疎らなヨコヘラミガキ。内面は密なヨコヘラミガキ。	5YR6/6 橙 緻密 白・透明細粒多、赤粗～ 細粒と黒細粒少 やや軟質	B 区 VII 層 (FA 層下) 口 2/3 周 TX12B 区 50～53、 TX12-19B 区、B 区西
30 土師器 杯	口 復 12.4 高 4.6	全体が磨耗し、外面調整は不明。内面は口縁部と体部にヘラミガキの痕跡がわずかに残る。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒・透明細粒や や少、赤細粒少 やや軟質	B 区 III～V 層 (FA 層より 上) 口 1/4 周 TX12B 区 16、B 区西
31 土師器 杯	口 復 13.8 高 復 4.6	外面は口縁部ヨコナデで、体部は磨滅が著しいため調整不詳だが、おそらくヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向、体部と口縁部に横位の密なヘラミガキ。内面は炭素吸着の黒色処理。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 黒・透明粗～細粒多、 白粗～細粒と赤細粒少 やや硬質	A 区 V 層または VII 層 口 1/5 周、体 5/12 周 A 区西 106
32 土師器 杯	高 残 4.0 最大 復 15.0	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は口縁部に横位と体部に放射状の密なヘラミガキ。漆仕上げは認められない。	10YR4/1 褐灰 やや緻密 白粗粒と白・透明細 粒多、赤・黒細粒少 やや硬質	A 区 V 層または VII 層 体 1/6 周 A 区西 107
33 須恵器 杯	高 残 2.1 最大 復 12.5	破片が小さいので復原径は参考値。内外面ヨコナデ (ロクロ右回転?) の後に、外面底部をヘラ切り離し後ナデ。	N5/(B) 灰 緻密 白細粒少 硬質	B 区 III～V 層 (FA 層より 上) 体 1/12 周 TX12 23
34 土師器 壺	頸 復 9.1 高 残 16.8 最大 復 17.6	小さい平底で、胴部と底部の境界が不明瞭。外面は底部と胴部全体をナデまたはヘラナデし、ヘラミガキも行っているかもしれないが、外面全体が磨耗気味なので不明瞭。外面頸部はヨコヘラミガキ。内面は胴部下位に積み上げ止痕を残し、全体を横位と斜位のヘラナデ。	5YR7/6 橙 緻密 黒粗～細粒やや多、白・ 赤粗～細粒と透明細粒少 やや硬質	B 区 III～V 層 (FA 層より 上) 頸 1/4 周、底 5/12 周 TX12B 区 11～13、 17、22、B 区西
35 土師器 壺	口 復 17.7 高 残 20.7 最大 復 29.6	外面は磨耗が激しく調整不明。内面は胴部下位ナメヘラナデ、肩部ナメヘラケズリ、口～頸部ヨコナデ。 [注記]TX12B区27、31、40～47、50、TX12-19B区、TX12-19B区南、B区西	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白・黒・透明粗～細 粒やや多、赤細粒少 やや軟質	B 区 III～V 層 (FA 層より 上) 口 1/2 周、頸 3/4 周 注記は左欄
流路 4				
36 須恵器 杯蓋	口 12.2 高 5.1 最大 12.4 重 残 164.3	外面の肩部に明瞭な段、内面の口縁端に明瞭な斜面を持つ。内外面の回転ヨコナデと倒立して外面天井部の回転ヘラケズリは、ともにロクロ右回転 (時計回り)。	N4/0 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	断面図 C-C' の V 層より 下、SP1-2 の 7 層 (FA 下) ほぼ完形 口 11/12 周 C 区西側 60
37 須恵器 杯蓋	口 12.6 高 4.5 重 184.7	口縁端部に明瞭な段を持つ。上向きでロクロナデ時、伏せて天井部を回転ヘラケズリする時ともにロクロは左回転 (反時計回り)。	5B4/1 暗青灰 緻密 白・灰色礫少 硬質	FA 層下 (SP1-2 の 7 層 下で砂層上面) 完形 C 区西側 54

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

38 須恵器 杯	口 11.0 高 5.2 最大 13.3 重 190.8	口縁端部に明瞭な段を持つ。上向きでロクロナデ時、伏せて天井部を回転ヘラケズリする時ともにロクロは左回転(反時計回り)。内面底部中央に不規則なナデを軽く行う。	5Y5/1 灰 緻密 灰色粗粒と白粗～細粒少 硬質	FA層下(SP1-2の7層下で砂層上面) 完形 C区西側55
39 須恵器 蓋	鈕径 3.6 高 残 0.9	蓋内面中央には、らせん状に凹むような強い凹凸が少し残る。ロクロ回転方向は不明。鈕の上面に自然釉が薄く被って白く発色している。	7.5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒少 硬質	FA層上 4cm 鈕全周 C区ツマミ
40 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.6 最大 復 14.4	外面は体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後、やや疎らなヨコヘラミガキ。内面は体部にナデまたはヘラナデ後、密な放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 灰色・透明粗粒と白粗～細粒やや少、赤・黒・透明細粒少 やや硬質	底上 14cm (FA層下) 口 1/4 周 C区 80
41 土師器 杯	口 12.8 高 5.1 最大 13.3	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部にヘラナデ後ヨコヘラミガキ、底部に1方向または多方向のヘラミガキ。外面の体部全体に黒斑あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	FA層下(底上26cm)。 西方でSP5-6の2層にも1片あり 口5/6周、体2/3周 C区西26、C区70
42 土師器 杯	口 14.0 高 5.9	丁寧な作りで、外面の口縁部端を外へ短く曲げる。外面は体部上半ヨコヘラナデまたはヨコナデ、体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は体部に横位と底部に多方向のヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内外全面に不規則な被熱痕と煤が明瞭。 [注記]C区63、C区西100～102、C区西側	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	底付近。流路2の底上2cmも1片接合(FA層下) 口2/3周 注記は左欄
43 土師器 杯	口 13.7 高 6.1 底 4.9 重 残 306.5	底部が厚く重い。外底面は凹底状で、幅広いミガキできれいに仕上げる。外面は体部上半ヨコヘラナデと下半ヨコヘラケズリ後、疎らなヨコヘラミガキ。口縁部内外面にヨコナデ後、内面ヨコヘラミガキ。内面は体部に多方向ヘラナデ後、斜放射状のヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 赤・黒・灰色粗粒と白・黒・透明細粒少 硬質	底付近(FA層下) 口7/12周、頸5/6周、底全周 C区西57
44 土師器 鉢	口 復 15.4 高 残 8.1 最大 復 16.4	丁寧な作りで、外面の口縁部端を外へ短く曲げる。外面は体部ヨコヘラナデで、粘土積み上げ痕をよく残り、中位以下にヨコヘラケズリ。内面は体部ナデ後、中位以下に斜放射状の浅いハケム。内外面の口縁部にヨコナデ。現存部下端の破面は、接合痕または焼成時に生じた亀裂の可能性がある。	5YR6/6 橙 緻密 白細粒やや少、赤・黒・透明細粒少 やや軟質	底上 4cm (FA層下) 口5/12周 C区 77
45 土師器 高杯	口 17.6 高 残 5.7 最大 17.8	外面は杯底部に斜放射状のヘラナデ、杯体部ナメヘラナデ後に下半ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面はかなり磨耗して不明なところが多いが、口縁部ヨコナデと杯体部ナメヘラミガキをかわらうして確認できる。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・灰色礫～粗粒多、白・黒細粒やや多、白・灰色粗粒少 やや軟質	FA下(SP5-6の2層または11層) 口5/6周 C区西17
46 土師器 小形壺	口 9.8 高 12.0 底 4.0 最大 10.4	薄く軽い。外底面は円周方向ヘラケズリ後にヘラナデ。体部はタテヘラナデ後に中～下位ヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面は中位以下に反時計回りのヨコヘラナデ、上位にヨコヘラケズリとユビオサエ後ナメヘラナデ。外面全体に煤が付着し、被熱部は認められない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色粗～細粒やや多、赤・黒・透明粗～細粒少 やや軟質	FA層下(SP5-6の10層付近) 口3/4周、頸1/6周、体3/4周 C区西側24
47 土師器 小形壺	口 13.2 高 15.9 最大 13.9	薄く軽い。外面は体部をおそらくヘラケズリ後に全体を丁寧なナメヘラナデ。内外面の頸部にヘラナデと口縁部ヨコナデ後、頸部の内面に密で外面に疎らなタテヘラミガキ。内面は体部にナメヘラナデと肩部にユビオサエ後、中位にナメヘラケズリ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、白・赤粗粒と黒細粒少 やや硬質	FA層下(SP5-6の10層付近) 口3/4周、頸11/12周、体5/6周 C区西側24
48 土師器 小形壺	口 復 12.7 高 推 15.6 最大 復 14.0	外面は体部ヘラナデと底部ヘラケズリの後に疎らなヘラミガキ、頸部タテヘラナデ後タテヘラミガキ。内面は底部に斜放射状と体部に横位のヘラナデ、肩部にナデ後ヨコヘラミガキ、頸部にナメヘラナデ後タテヘラミガキ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、黒・灰色・透明粗～細粒やや多、白礫と赤細粒少 やや軟質	底付近(FA層下) 頸5/12周、体2/3周 C区、C区西59
49 土師器 小形甕	口 復 13.4 高 残 18.7 最大 復 18.2	外面は肩部タテヘラナデの後、胴部をヨコヘラケズリし、胴中位にヨコヘラミガキをする部分もある。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の胴部全体に浅いヨコハケ。外面の胴下位が被熱赤化し、胴中位から口縁部までに少しずつ煤が付着する。 [注記]C区63、81、86、C区西87	2.5YR6/8 橙 粗い 白・黒・赤・透明粗～細粒多、白・赤・灰色礫少 やや硬質	底上2～15cm。流路2の底上2cmでも2片出土(FA層下) 口1/3周、頸3/4周 注記は左欄
50 土師器 小形甕	口 14.6 高 残 21.0 底 復 6.8 最大 復 17.3	外底面はやや雑な多方向ヘラナデ。外面口縁部ヨコナデと頸部および胴部タテヘラケズリ後、胴部タテヘラミガキ。内面は底部に多方向、胴部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヘラミガキと頸部ヨコヘラケズリ。外面の胴下端が弱く被熱し、内面の頸部から胴中位までに暗褐色の汚れが見られる。 [注記]C区63、73、79、C区西91、99	7.5YR6/3 にぶい褐 やや緻密 透明粗～細粒多、白・黒・赤・灰色粗～細粒少 やや硬質	底直上～底上20cm。流路2の底上2cmでも1片出土(FA層下) 口5/6周、頸全周、胴2/3周、底5/12周 注記は左欄
51 土師器 甕	口 復 17.8 高 残 17.0 最大 復 19.0	やや薄い。外面は胴下半にナメヘラケズリ、胴上半に斜～縦位ヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面胴部はヘラナデ後、上～中位にナメヘラケズリ。外面上半部に煤が多く付着する。 [出土状態]流路2の底上2cmと流路4の底上11cmが接合(FA層下)	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・透明粗～細粒多、赤・黒粗～細粒少 やや軟質	出土状態は左欄 口1/3周、頸1/2周 C区63、69、C区西側
52 土師器 甕	口 復 20.1 高 推 26.1 底 7.4 最大 27.2	口縁部と頸部の間で接合できないので器高は推定値。外底面は多方向ヘラナデ。外面胴下端ヨコヘラケズリ後に胴部全体をヘラナデし、肩部と胴下位の厚い部分にヘラケズリ。内面は主に横位のヘラナデ後、胴下位の積み上げ止部をヨコヘラケズリ。内外面の口縁部をヨコナデ。外面の胴下位と底面が被熱し、胴中位に煤が多い。内面の胴下位に暗褐色の汚れが付着する。	10YR5/2 灰黄褐 粗い 白粗～細粒多、黒・灰色・透明粗～細粒やや多、白礫と赤粗～細粒少 やや硬質	FA層下 口1/3周、頸3/4周、底全周 C区西58
53 土師器 甕	口 復 16.7 高 残 19.4 最大 復 26.2	外面は胴部にタテヘラケズリ後ヨコヘラナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ後に少しナデも行う。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面の中位以下が暗褐色に少し汚れ、外面は口縁部から胴部までの所々に煤が少し付着する。外面肩部に7cm以上の黒斑が残るので、強く被熱するような使い方はしていない。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白粗～細粒多、黒・透明細粒やや多、白礫と赤粗～細粒少 やや軟質	流路2の底上7cmと流路4の底上17～20cmが接合(FA層下) 口1/9周、頸1/3周 C区67、73、74、TX12
54 土師器 甕	高 残 8.2 底 6.0	外底面は1方向ヘラケズリ後にナデで少し凹底状。外面胴部は主に横方向のヘラケズリ後、全体をナメヘラナデ。内面は底部に1方向ヘラナデ後、胴部にナメヘラケズリ。内外面の底部および周辺が被熱し、それより少し上の内面に暗褐色の汚れが付着する。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、灰色粗粒と黒細粒少 やや硬質	底付近(FA層下) 底全周 C区西92、93
55 土師器 壺	高 残約 14 底 6.3 最大 復 18.6	外底面は多方向ナデで少し凹底状。外面は体部下位ナメヘラケズリ、中～上位ナメヘラミガキ、頸部ヨコナデ。内面は主に斜位の丁寧なナデとヘラナデで、粘土積み上げ痕を少し残す。薄く剥がれるように細片化して接合できない部分が多いため、外面調整は不明なところが多く、肩部破片と体部破片の位置関係も想定による。	5YR6/6 橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒少 軟質	FA層下(SP5-6の14層付近) 体1/3周、底全周 C区西側22、23、C区西側FA下
56 土師器 壺	口 復 17.4 高 残 12.4 最大 残 28.0	外面は肩部ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラケズリとタテヘラミガキ。内面は肩部ヨコヘラケズリ後に疎らなタテヘラケズリ、頸部ヨコヘラナデ後に下端ナメヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。被熱痕・汚れや黒斑は見られない。 [注記]C区71、72、76、78、西側、西側32、西33	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒粗～細粒と透明細粒多、白・灰色礫～粗粒と赤粗～細粒やや多 硬質	底上5～27cm(FA層下)。FAより上層の2片も接合 口1/3周、頸全周 注記は左欄

第6章 権現山遺跡 SG2 区

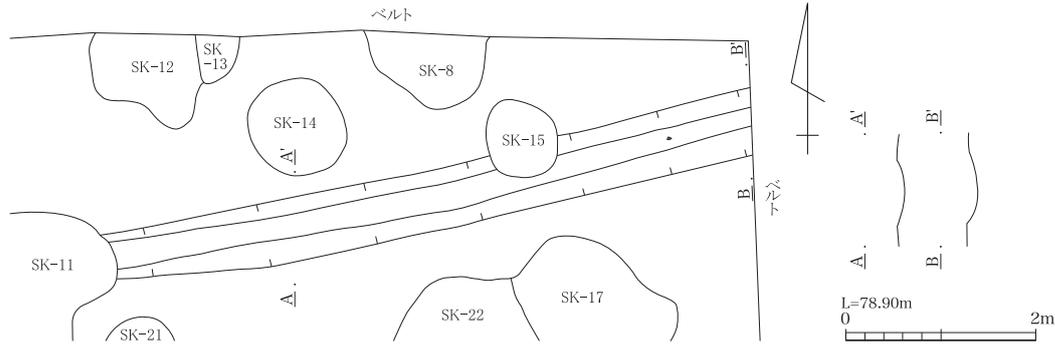
57 須恵器 甕	高 残 5.4	外面は縦位の平行叩き後カキメ。内面は同心円文当具痕。	5Y6/1 灰 緻密 灰色・透明粗～細粒と 白・黒細粒少 やや硬質	浅間 C テフラより上 胴部 1 片 C 区西 16
流路 5				
58 土師器 杯	口 復 13.1 高 残 4.0 最大 復 14.0	外面は体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の体部にヘラナデまたはナデ。内面を漆仕上げしていたかもしれないが不明瞭。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗～細粒やや少、透明粗～細 粒と白・黒細粒少 軟質	底付近 口 1/12 周、体 1/6 周 TX10-20D 区 5
流路周辺の遺構外 A～F 区				
59 土師器 杯	口 11.6 高 6.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、体部に少しヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部にヨコヘラナデ後、斜放射状のヘラミガキ。稲籾の痕跡が内面体部に 1 箇所ある。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・赤・透明粗 ～細粒やや多 硬質	試掘トレンチ内 13-20 杭付近 (流路 2?) 口 1/3 周、体 5/6 周 TX13、951207
60 土師器 小形甕	高 残 8.2 底 6.2 最大 残 14.8	外底面は軽い 1 方向ヘラケズリ。外面体部はナメヘラナデで、体部中部の積み上げ休止部付近にナメヘラミガキを行う部分もある。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラナデ後、積み上げ休止部付近にナメヘラケズリ。積み上げ休止部で接合部が剥がれたと、厚さ 1mm 程のヘラ状工具で刻みを入れて接合部を強化したことがわかる。外面全体が被熱している可能性あり。	10YR5/3 にぶい黄褐 粗い 白礫と白・黒・赤・ 灰色・透明粗～細粒多 軟質	FA 層下 胴下半 2/3 周、底全周 A 区 FA 下
61 土師器 壺	口 9.3 高 残 7.7 最大 復 12.3	外面全体と内面口～頸部に密なヘラミガキ。内面肩部に横位の軽いユビオサエおよびナデ。古墳後期後半～終末期の杯類に用いられるのと同じ精良な胎土で製作する。おそらく、水の作用で裏面と破面に褐色の鉄分が薄く付着する。	10YR8/3 にぶい黄橙 緻密 白・黒・赤・透明細粒極少 やや硬質	流路 1～3 周辺 口全周、肩 3/4 周 A 区旧河道
62 円筒埴輪	厚 残 2.3	外面調整は磨耗して詳細不明で、突帯よりも上はタテハケの可能性が高い。内面はナメナデ。突帯は裾部だけを残して大半が剥落している。	7.5YR8/3 浅黄橙 やや粗い 白礫～細粒と灰色粗 粒多、赤・透明粗～細粒と黒細 粒少 硬質	試掘トレンチ内 12-20 グリッド (流路 2?) 胴部 1 片 TX12-20 B 区
63 土師器 高杯	高 残 6.6 最大 復 15.4	外底面から脚柱部にタテヘラケズリ。外面は体部ヨコヘラナデ後に下位ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面の体部下位から底面を主に放射状の密なヘラミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・透明粗～細 粒多、白礫と黒粗～細粒少 やや硬質	流路 3・4 付近の FA 層下 頸 1/12 周、杯底全周 C 区西側 FA 下
64 土師器 高杯	高 残 7.4 底 残 8.0	薄くて丁寧な製品。外面はナデ後にタテヘラミガキ。内面は積み上げ痕をナメナデで丁寧に消しているが、まだ少し残っている。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明粗～細粒多、 赤・灰色粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	流路 3・4 間の VII 層付近 (As-C と FA の間) 脚上半全周 C 区西側 56
65 土師器 甕	口 復 21.8 高 残 7.0	外面は肩部に斜位のヘラナデ後ヘラミガキ。内外面の口～頸部ヨコナデ後、外面に横位と縦位、内面に横位のヘラミガキ。内面の肩部にヨコヘラナデ。[注記] C 区西側 FA 下、11-21 C 区表採	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤・透明粗 ～細粒多、白・灰色礫少 硬質	流路 2・4 付近との西部 FA 層下の各 1 片が接合 口 1/2 周、頸 1/3 周 注記は左欄
66 土師器 甕	口 復 20.4 高 残 8.3	外面は肩部ヨコヘラナデ。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面肩部はヨコヘラナデで、ヘラの側縁が器面を引きずった痕跡の浅い段が目立つ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 黒細粒多、白・ 灰色・透明礫～細粒やや多 軟質	流路 3・4 付近 口 5/12 周、頸 2/3 周 C 区西側
67 須恵器 甕	高 残 7.9	外面は 7 歯の工具で横位のカキメまたは横描直線文。内面は非常に浅い当具痕で、木製当具の年輪がわずかに同心円状に見える。	N4/(B) 灰 やや緻密 白粗～細粒やや少、白礫少 硬質	流路 2・4 付近の暗渠攪 乱中 胴部 1 片 C 区暗渠内覆土
68 土師器 高杯	高 残 5.9 最大 残 7.5	薄く軽い。外面は脚柱部をタテヘラナデおよびタテナデの後にタテヘラミガキ。脚内面は上部タテナデ後に下部ヨコヘラナデ。内外面の脚裾部にヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・灰色・透明 粗～細粒多、赤粗粒少 やや軟質	10-20 グリッド遺物集 中地区 SP11-12 の 3 層 脚上半全周 D 区 33
69 土師器 台付甕	高 残 5.0 最大 復 6.8	外面は脚台部タテヘラケズリ後に胴～脚台の中間部を丁寧なヘラナデ。胴内面底部はナデで、底面中央が深く凹む。脚内面はヨコヘラケズリで、内面を円錐形に近く削る。脚内面は炭素を多く吸着して黒色。	2.5Y4/1 黄灰 やや粗い 白・灰色・透明粗粒 と白・黒・透明細粒多 やや硬質	10-20 グリッド遺物集 中地区 SP11-12 の 3 層 脚上半全周 D 区 17
70 須恵器 杯	口 復 12.8 高 3.7 底 復 6.4	ロクロ右回転(時計回り)で回転ヨコナデ後に回転系切り離し。外面体部下端のヨコナデがやや粗雑。三義窯産。	2.5Y6/1 黄灰 緻密 白礫～細粒やや少、黒・ 透明細粒少 やや硬質	D 区南東部遺構外 口 1/4 周、底 5/12 周 D 区東側表採
71 須恵器 鉢	口 復 31～ 35 高 残 7.6	内外面ロクロナデで、口縁部は外面側に垂直な面をなす。外面の口縁部から下 3.7cm のレベルで胴部に浅い段がある。益子窯産の奈良～平安時代遺物。	N4/(B) 灰 やや粗い 白粗～細粒多、白礫 少 硬質	D 区南東部遺構外 口 1/12 周 TX10-21 D 区 2
72 須恵器 有台杯	高 残 1.4 底 復 8.9	外底面は倒立してロクロ右回転(時計回り)で、ヘラケズリ後に高台を貼り付けてその周囲を回転ヨコナデ。内底面は使用によってかなり滑らかに磨耗している。	N6/(B) 灰 やや緻密 白粗～細粒やや多、 透明細粒少 硬質	D 区南東部遺構外 底 1/3 周 TX10-21 D 区 4
73 須恵器 甕	高 残 8.1	外面は粗い平行叩き。内面は無文当具痕または有文当具痕をナデ消した痕。破面は暗赤灰色(10R4/1)。権現山 SG9 区 SD-38 の甕と似た調整だが、色調や焼成は異なる。	5PB5/1 青灰 やや粗い 白細粒多、白礫～粗 粒やや少 硬質	流路 5・7 周辺 胴部 1 片 D 区東半表採
74 土師器 甕	高 残 25.5 最大 復 27.9	外面は胴部タテヘラナデ後に下位をヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部をヨコナデし、外面の頸～胴部間が小さな段をなす。内面は胴部がヨコヘラナデで、胴部下位の接合休止部を薄くするようにヘラケズリと強いヘラナデを繰り返している。被熱痕や内面の汚れは見られない。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・透明粗～細 粒やや多、白・灰色礫少 硬質	SK-30 南側の 2 片と SK- 37・40 間の 8 片が接合 頸 1/6 周、胴 1/4 周 F 区東 16、41

第3節 時期不明の溝・集石遺構

SG2 区 SD-46 (第 252 図、写真図版 8)

SG2 区南端の F 区で 8.5-20.5 グリッドにある時期不明の溝。東端はベルト内で終わる。西端と中央部で時期不明の SK-11・15 と重複するが、新旧関係は不明である。現地調査時には遺構番号を与えられず、整理作業時に「SD-46」と命名した。この事情からみて、遺構ではなくかなり新しい時期の溝あるいは攪乱の可能性はある。

幅 49～70cm、残存する深さは 7～12cm。底面は東部が僅かに高い傾向を持ち、底面標高は東端で



第 252 図 権現山遺跡 SG2 区 SD-46 遺構

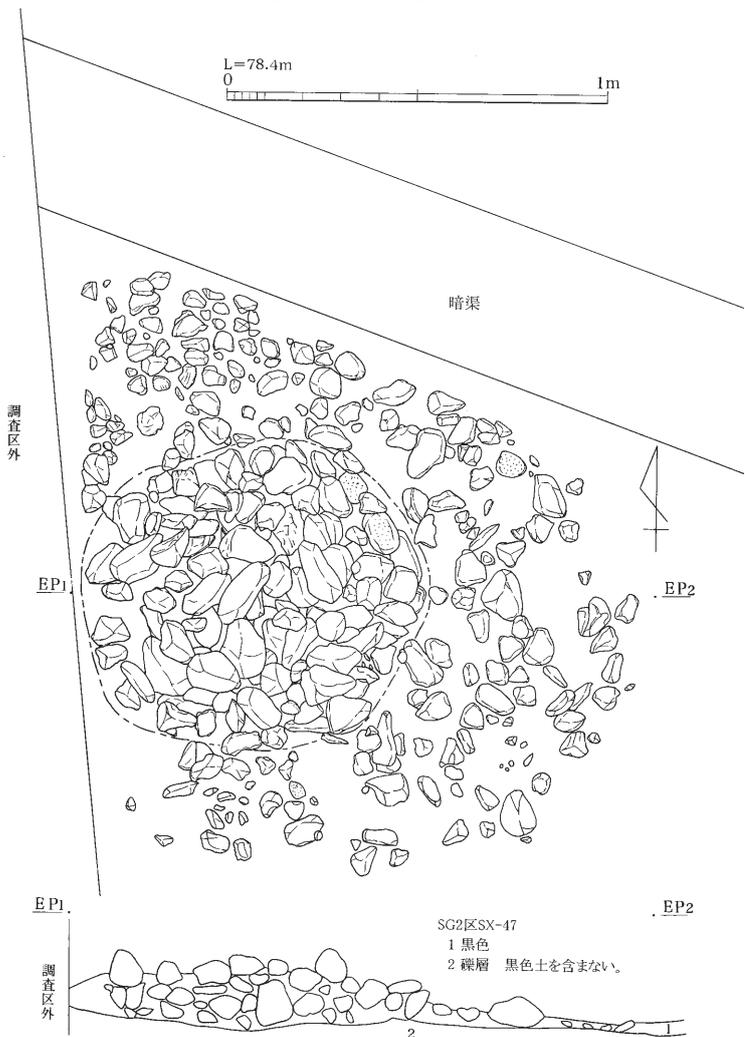
78.51m、西部で 78.47m。現地調査時に、おそらく新しい時期の溝と判断されたため、埋土の特徴が記録されていない。遺物は土師器 3 片（高杯 1 片と壺甕類 2 片）だけで、図示できる遺物はなく、遺構の時期も特定できない。

SG2 区 SX-47（第 253 図、写真図版 8）

SG2 区中央西端で、C 区の 11.0-19.0 グリッドにある時期不明の集石遺構。西側は調査区外へ少し続く。北端が、近代以降の暗渠で少し壊されていると考えられる。集石遺構の下部に土坑などは認められなかった。現地調査時には「C 区石積」の遺構名で、整理作業時に「SX-47」へ改称した。

古墳中期遺物や Hr-FA テフラ層が覆土中にある流路 4 の底面（礫層直上）に作られているので、古墳中期以前の遺構である。古墳前期の浅間 C 軽石と SX-47 の関係を示す土層は観察できていないが、流路 4 の埋積土中に浅間 C 軽石があることからみて、SX-47 が浅間 C 降下より古い可能性がある。流路 4 東部の底面付近で縄文中期阿玉台 IV 式の大形破片もあり（写真図版 11）、加曾利 E 式や弥生中期後半の土器片も流路 4 で出土しているので、縄文・弥生時代まで遡る可能性もある。

中央部では径約 80cm の範囲に最大径 15cm 以下程度の礫が密度高く積み、集石の高さは最大 3～22cm。その範囲より外は径 5～10cm ほどの小礫がやや疎らに分布する。図にドットを記入した礫は、実測原図でも描き分けている石で、表面が荒れた石質であろう。礫を覆う土層および礫の間を埋める土は黒色土である。礫が置かれている下面是標高 78.12～78.16m で、自然礫層である。遺物は出土しなかった。



第 253 図 権現山遺跡 SG2 区 SX-47 遺構

第4節 時期不明の土坑 (第254・255 図、写真図版4～8)

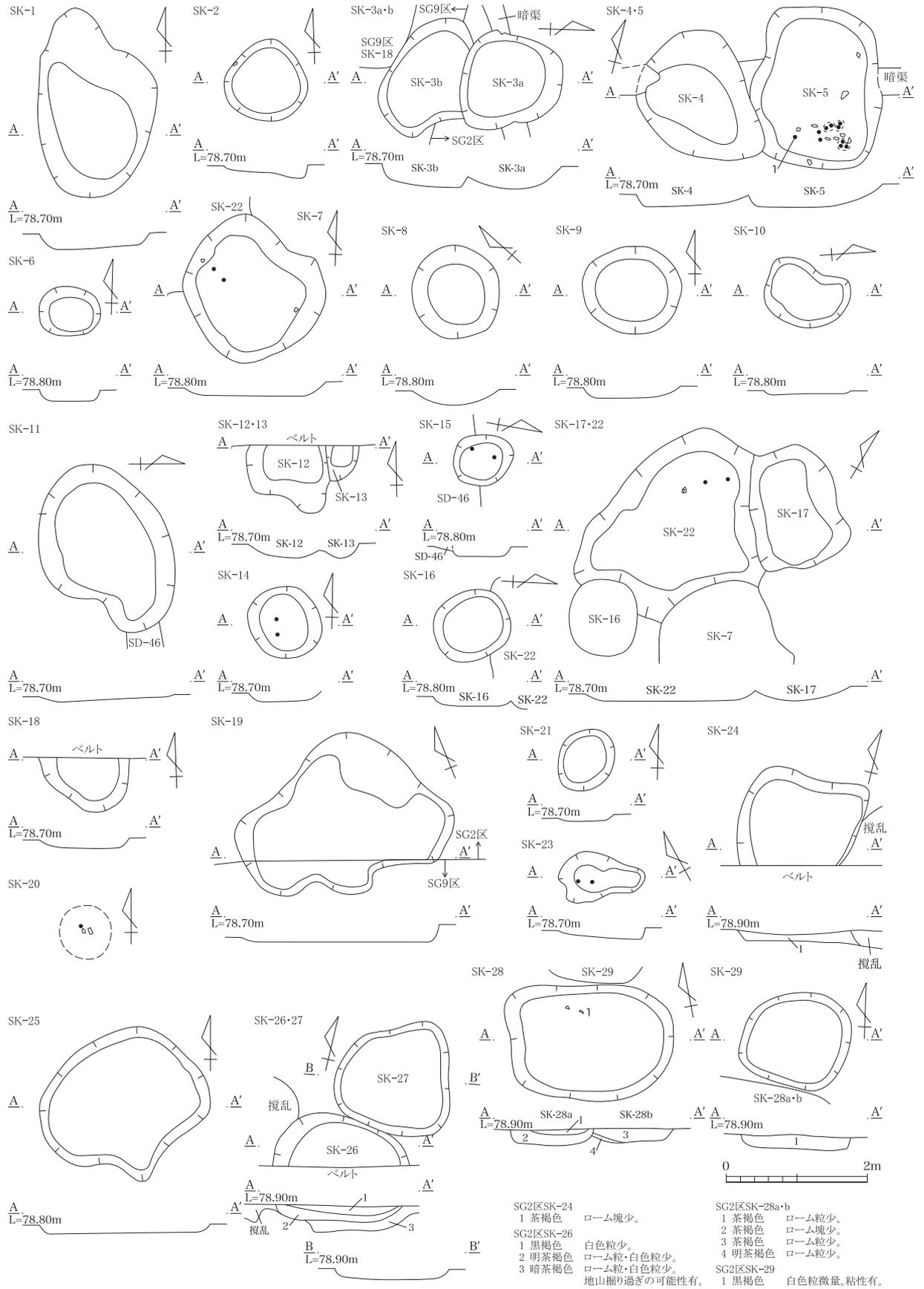
時期不明の土坑は SG2 区で合計 49 基を確認した。SG2 区北部の A 区と C 区に SK-101・102 があり、南部の F 区には SK-1～45 (SK-3 と SK-28 はそれぞれ a・b の 2 基) がある。F 区土坑群の続きは、南側の SG9 区にも見られる。SG2 区 SK-1～20 と 101・102 の遺構番号は現地で調査時に与えたものであり、SK-21～45 の番号は整理作業時に命名した。各土坑の詳細を第 147 表に示す。

土層断面の記録がある土坑は少ない。SK-26・29 にはテフラの可能性のある白色粒を含む。SK-102 には榛名山から噴出した八崎軽石 (Hr-HP、5.0 万年前) の塊および粒を含むことが肉眼観察で記録されているが、テフラ検出分析や屈折率測定で確定された所見ではない。試掘トレンチ調査時に実施した周辺土層のテフラ検出分析でも八崎軽石は確認されていない (第7章第2節)。SG2 区 SK-28a・31 には、権現山遺跡 SG9 区中央区微高地の遺構外出土品 (第384 図 10) と同一個体の破片がある。胴部上～中位がカキメ、下位が真格子叩き調整をおこなう古墳終末期～奈良時代初めの須恵器甕で、三毳窯製品かもしれない。SK-28a・31 は古墳時代または奈良時代の可能性があるといえる。

第 147 表 権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸線	覆土
SK-1	8.5-20.0	不整楕円形	重複なし	2.72	1.70	0.20	N-5° -W	黒褐色土+ローム塊 (写真)
遺物は土師器壺甕片 2 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-2	8.5-20.5	円形	重複なし	1.19	1.18	0.11		褐色土+ローム塊多 (写真)
遺物は土師器甕片 1 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-3a	8.0-20.5	不整円形	SK-3b と重複	1.54	1.36	0.33	N-18° -W	記録なし
中央を暗渠に切られる。SK-3b と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-3b	8.0-20.5	不整楕円形	SK-3a・SG9 区 SK-18 と重複	1.82	残 1.02	0.34	N-32° -E	黒褐色土+ローム塊と白粘土少 (写真)
SK-3a および SG9 区 SK-18 と重複するが新旧不明。南端は SG9 区で調査。遺物なし。								
SK-4	8.0-20.5	不整楕円形	SK-5 と重複	2.06	1.60	0.36	N-67° -W	記録なし
中央を暗渠に切られる。SK-5 と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-5	8.0-20.5・8.5-20.5	楕円形	SK-4 と重複	2.34	1.88	0.29	N-13° -W	黒褐色土+ローム小塊 (写真)
中央を暗渠に切られる。SK-4 と重複するが新旧不明。縄文時代のスクレイパー 1 点と弥生土器片が多数出土したが、土師器も混じっているため、弥生時代の遺構ではない。								
SK-6	8.0-20.5	円形	重複なし	0.85	0.70	0.19		黄褐色土+黒褐色少 (写真)
遺物なし。								
SK-7	8.5-20.5	不整円形	SK-22 と重複	2.10	2.00	0.20	N-6° -W	暗褐色土+ローム粒少 (写真)
SK-22 と重複するが新旧不明。遺物は土師器壺甕片 4 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-8	8.5-20.5	円形	重複なし	1.33	1.31	0.22		暗褐色土 中位にローム塊 (写真)
遺物なし。								
SK-9	8.5-20.5	円形	重複なし	1.38	1.29	0.14		暗褐色土 西半にローム塊 (写真)
遺物なし。								
SK-10	8.5-20.5	不整楕円形	重複なし	1.23	0.90	0.04	N-9° -E	暗褐色土+ローム塊 (写真)
遺物なし。								
SK-11	8.5-20.0・8.5-20.5	不整楕円形	SD-46 と重複	2.52	1.83	0.10	N-74° -E	暗褐色土+綿状ローム (写真)
時期不明の SD-46 と重複するが新旧不明。遺物は土師器壺甕小片 1 点のみ。								
SK-12	8.5-20.5	不整形	SK-13 と重複	1.12 以上	0.99	0.20	N-11° -E	暗褐色土+ローム塊少 (写真)
SK-13 と重複するが新旧不明。北側はベルトのため調査区外。遺物なし。								
SK-13	8.5-20.5	楕円形?	SK-12 と重複	0.52 以上	0.47	0.21	N-16° -E	暗褐色土+ローム塊多 (写真)
SK-12 と重複するが新旧不明。北側はベルトのため調査区外。遺物なし。								
SK-14	8.5-20.5	円形	重複なし	1.09	1.03	0.17		記録なし
遺物は土師器小形壺 2 点。弥生土器片 1 点も出土したが、他から混入の可能性あり。								
SK-15	8.5-20.5	円形	SD-46 と重複	0.88	0.76	0.14		暗褐色土 (写真)
時期不明の SD-46 と重複するが新旧不明。遺物は土師器壺甕片 1 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-16	8.5-20.5	円形	SK-22 と重複	1.11	1.01	0.13		記録なし
SK-22 と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-17	8.5-20.5	不整楕円形	SK-22 と重複	1.73	1.35	0.20	N-47° -W	記録なし
SK-22 と重複するが新旧不明。遺物は弥生土器片と土師器壺甕片各 1 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-18	8.5-20.5	不整形	重複なし	0.79 以上	0.37	0.14	N-88° -W	黒褐色土 (写真)
北半はベルトのため調査区外。遺物なし。								
SK-19	8.0-20.5	不整形	重複なし	3.12	2.32	0.24	N-18° -E	暗褐色土+ローム塊?(写真)
南端は SG9 区で調査。遺物は弥生土器片 1 点のみで、他からの混入の可能性あり。								
SK-20	8.5-20.5	円形	重複なし	-	-	推 0.16 以上		記録なし
現地調査時に掘り込んでいないと記録されている。遺物は弥生土器片 1 点と土師器片 2 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-21	8.5-20.5	円形	重複なし	0.95	0.79	0.08		記録なし
遺物なし。								
SK-22	8.5-20.5	不整形	SK-7・16・17 と重複	2.71	2.21	0.17	N-35° -E	記録なし
SK-7・16・17 と重複するが新旧不明。遺物は弥生土器片 3 点と土師器片 3 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-23	8.5-20.5	不整楕円形	重複なし	1.24	0.72	0.14	N-61° -W	記録なし
遺物は弥生土器片 2 点と土師器片 1 点のみ。時期を特定できるものではない。								
SK-24	8.5-21.0	不整形	重複なし	2.07	残 1.57	0.15	N-49° -E	
南端を暗渠に切られる。遺物なし。								

第4節 時期不明の土坑



第254図 権現山遺跡 SG2区 時期不明の土坑 (1) 遺構

第6章 権現山遺跡 SG2 区

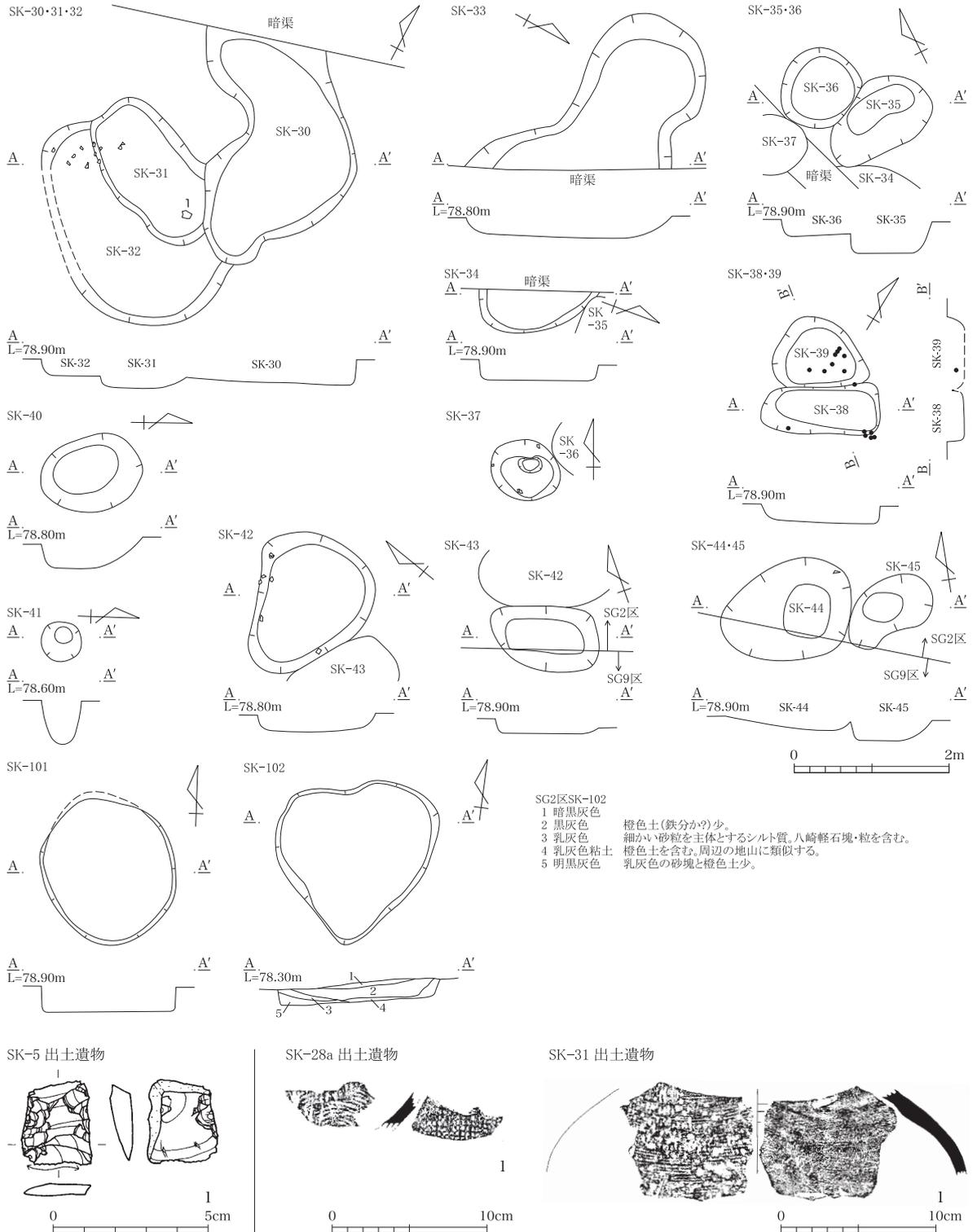
SK-25	8.5-21.0	不整形	重複なし	2.40	2.18	0.12	N-80° -E	記録なし
南側に別の土坑となる可能性がある浅い凹みあり。遺物なし。								
SK-26	8.5-21.5	楕円形	SK-27と重複	1.91	残0.73	0.35	N-77° -E	
SK-27と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-27	8.5-21.0・8.5-21.5	不整形	SK-26と重複	1.61	1.51	0.16	N-18° -W	記録なし
SK-26と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-28a	8.5-21.5	楕円形?	SK-28bより新	2.30	1.65	0.25	N-79° -W	
SK-28bを切る。遺物は土師器片と古墳終末期～奈良時代初めころの須恵器器片各1点のみで、遺構の時期を特定できるものではない。								
SK-28b	8.5-21.5	円形?	SK-28aより古	2.30	1.65	0.25	N-79° -W	
SK-28aに切られる。断面図の記録から、遺物はSK-28aから出土したものと思われる。								
SK-29	8.5-21.5	円形	重複なし	1.47	1.38	0.24		単層
遺物なし。								
SK-30	8.5-21.5	不整形	SK-31・32と重複	残2.93	1.76	0.37		記録なし
北側は暗渠に切られる。SK-31・32と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-31	8.5-21.5	楕円形	SK-30・32と重複	2.07	1.12	0.35	N-57° -W	黒褐色土(写真)
SK-30・32と重複するが新旧不明。遺物は土師器片と古墳終末期～奈良時代初めころの須恵器器片1点のみで、遺構の時期を特定できるものではない。								
SK-32	8.5-21.5	楕円形	SK-30・31と重複	2.92	1.21	0.21	N-57° -W	暗褐色土(写真)
SK-30・31と重複するが新旧不明。遺物はごくわずかで、時期を特定できるものではない。								
SK-33	8.0-21.5・8.5-21.5	ひょうたん形	重複なし	残2.12	2.67	0.24	N-81° -W	黒褐色土 下部にローム塊(写真)
東側は暗渠に切られる。遺物なし								
SK-34	8.0-21.0	楕円形	SK-35と重複	1.56	残0.55	0.28	N-20° -W	記録なし
SK-35とわずかに重複するが新旧不明。西半は暗渠に切られる。遺物なし。								
SK-35	8.0-21.0	楕円形	SK-34・36と重複	1.42	0.95	0.40	N-75° -E	記録なし
SK-34とわずかに重複しSK-36と重複するが、ともに新旧不明。遺物なし。								
SK-36	8.0-21.0	円形	SK-35と重複	1.05	1.04	0.22		記録なし
SK-35と重複するが新旧不明。SK-37と接する。遺物なし。遺物なし。								
SK-37	8.0-21.0	円形	重複なし	0.91	0.78	0.45以上		記録なし
SK-36と接する。中央を暗渠に切られる。調査時にレベル値を計測しなかったため、断面図はない。遺物は弥生土器片の他、土師器片が少量で、時期を特定できるものではない。								
SK-38	8.0-21.0	長方形	SK-39と重複	1.52	0.60	0.25	N-67° -E	記録なし
SK-39と重複するが新旧不明。遺物は弥生土器片2点と土師器片4点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-39	8.0-21.0・8.5-21.0	不整形	SK-38と重複	1.25	0.92	0.22以上	N-68° -E	記録なし
SK-38と重複するが新旧不明。遺物は弥生土器片1点と土師器片3点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-40	8.0-21.0	楕円形	重複なし	1.32	1.00	0.41	N-8° -W	記録なし
遺物なし								
SK-41	8.0-21.0	円形	重複なし	0.52	0.51	0.58		記録なし
礫層まで掘り込む。遺物なし。								
SK-42	8.0-21.0	楕円形	SK-43と重複	1.90	1.63	0.26	N-84° -E	記録なし
SK-43と重複するが新旧不明。遺物は弥生土器片3点、土師器小形壺1片、高杯1片のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-43	8.0-21.0	楕円形	SK-42と重複	1.37	0.84	0.19	N-66° -W	記録なし
SK-42と重複するが新旧不明。南端はSG9区で調査。遺物なし。								
SK-44	8.0-21.0	楕円形	重複なし	1.68	1.32	0.18	N-82° -W	記録なし
重複なし。南端はSG9区で調査。遺物は土師器小形壺片1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-45	8.0-21.0	不整形楕円形	重複なし	1.20	0.70	0.25	N-65° -E	記録なし
南端はSG9区で調査。遺物なし。								
SK-101	13.0-19.0	楕円形	重複なし	1.99	1.72	0.34	N-5° -W	記録なし
遺物なし。								
SK-102	13.0-19.0	不定形	重複なし	2.18	2.14	0.30	N-6° -E	黒色土あり 自然埋没状
不定形だが、円形土坑が崩れてこの形になった可能性もある。1層はA区西半全体を覆う黒色系の土。3層と5層は西側から流入。遺物なし。								

※覆土の(写真)はカラー写真による観察内容

第148表 権現山遺跡 SG2 区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG2区 SK-28a				
1 須恵器 甕	高 残 2.3	外面は真格子叩き、内面は浅い同心円文当具痕。SG2区 SK-31 および権現山遺跡 SG9区中央区微高地 8-21 グリッド出土の須恵器甕と同一個体。三 義窯産の可能性あり。	2.5Y7/2 灰黄 緻密 白・灰色・透明粗～細粒 少 軟質	胴部1片 F区東37
SG2区 SK-31				
1 須恵器 甕	高 残 5.4 最大 復 26.8	残存破片が小さいので復原径は参考値。外面はカキメで頸部近くでは浅く、 肩部では深い。内面は回転ヨコナデ。SG2区 SK-28a および権現山遺跡 SG9区中央区微高地 8-21 グリッド出土の須恵器甕と同一個体。三義窯産 の可能性あり。	2.5Y8/1 灰白 やや緻密 白・灰色・透明粗～ 細粒少 軟質	肩1/12周 F区東40

第4節 時期不明の土坑



第255図 権現山遺跡 SG2区 時期不明の土坑(2) 遺構・遺物

第7章 権現山遺跡南部 SG2 区・SG10 区・SG15 区周辺の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

東谷・中島地区南部に所在する権現山・杉村・磯岡遺跡の低地部で、1994年度確認調査トレンチの土層試料を分析した。ここでは権現山遺跡南部の分析結果を報告する。権現山遺跡北部と杉村遺跡は北部の報告書『東谷・中島地区遺跡群』10の第7章、磯岡遺跡は『東谷・中島地区遺跡群』6の巻末で分析結果をすでに報告した。これら周辺遺跡の分析結果や考古資料の状況を含めたコメントを以下で述べる。

[縄文時代の埋没樹木層] SG2区流路2付近では、古墳前期のAs-Cよりも下層で自然木が出土している。同様な事例として、権現山 SG9 区の南に続く県道調査区で低地部の自然堆積層中に縄文晩期ころの埋没樹木層を確認し、放射性炭素年代は $2,660 \pm 60$ 年 BP である（正式報告未刊、とちぎ生涯学習文化財団 2000）。洪水時には流木が自然流路内や低地部に堆積するような環境を示している。西側の台地上では SG10 区に大洞 C2 式期の竪穴建物があり、SG5 区にも C2 式期の有孔円盤状土製品が 3 点ある（第 10 図）。

[完新世の指標テフラと堆積環境] 権現山 SG2 区、SG10 区北・東側、SG15 区南・北側でテフラを分析した。

権現山 SG2 区北東部（12-21G と 13-21G）・SG15 区周辺（14-20G と 16-19G）・SG10 区東側（18-22G）で、古墳前期の As-C 軽石から 12 世紀の As-B と As-Kk までを確認した。As-C は流路内に堆積層が確認できない場合もあるが、古墳後期初頭の Hr-FA 層は埋没した自然流路埋土の上部で多くの土層断面に認められる。中期・後期には前期よりも流路の埋没が進み、安定した堆積層が形成されたことがわかる。As-C より上層には、洪水を示すような砂礫層や流木もない（第 241・383 図）。SG10 区北側（26-18G）だけは古墳時代テフラを確認できず、杉村 SG1 区の古代道路遺構（推定東山道）を設置するような後世の土地利用で改変された可能性がある。

[古墳前期～中期の植生] As-C 下位から Hr-FA 直下層までの森林植生は落葉広葉樹のコナラ亜属が主で、ハンノキ属の湿地林がしだいに減少した。権現山遺跡北部にある 2 区東側（39-13G）と同様の分析結果である。SG2 区北東部と SG15 区北側の Hr-FA 直下層は、樹木が減りヨシ属やカヤツリグサ科などが繁茂する湿地環境で、水田にあまり適さない。SG2 区北半部と SG15 区北側には古墳中期の土師器を伴う自然流路があり、SG2 区では自然流路脇に中期の土坑もあるので、水田耕作以外の活動を低地で行ったことがわかる。

[古墳時代の稲作] 権現山遺跡南部の分析地点では、SG15 区北側（16-19G）だけが Hr-FA 直下層にイネ植物珪酸体を含み、古墳後期初頭以前の稲作を周辺で推定できる。ただし、珪酸体は 1,500 個/g で少なく、水田遺構も不明で、古墳中期の流路をトレンチで確認しただけである（第 390 図）。北方の杉村遺跡周辺で古墳後期初めころの稲作が推定されるが、水田遺構は未確認である。杉村遺跡は GN1 区で FA 上層と FA 混層にイネ植物珪酸体を 2,000～2,300 個/g、北関東自動車道調査区 TX33 西で FA 混層に 4,700 個/g を含む。

権現山 SG2 区北東部・SG15 区南側・SG10 区東側では、古墳前期や後期初頭のテフラ直下層にイネ植物珪酸体がない。権現山遺跡南部の低地がほとんど水田化していないことがわかる。SG2 区と SG9 区は古墳時代土坑や、土器を廃棄した網状流の自然流路群が水田関連遺構であるとは、考古学的にも考えにくい。

[古代の稲作] 権現山 SG2 区北東部（12-21G）の As-B 直下層と、SG10 区北側（26-18G）の As-Kk 直下層および As-B 下層にイネ植物珪酸体を含むので、12 世紀前半頃の稲作を周辺に推定できる。ただし、珪酸体の量が最も多い As-B 直下層でもそれぞれ 1,400 個/g および 2,200 個/g で、いずれも低い値である。

北方の杉村遺跡 GN1 区の東端と北端（43-21 と 45-20G）では 1108 年降下の As-B 混層にイネ珪酸体が多い（3,000～6,200 個/g）が、水田遺構は確認されていない。周辺の稲作は、SG5 区の分析結果（第 8 章第 10 節）でもふれる。古環境研究所に委託して実施したテフラ・花粉・植物珪酸体分析結果を以下に掲載する。



第256図 権現山遺跡・磯岡遺跡周辺の古環境分析実施地点 (1/4,000)

第2節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区のテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

宇都宮市域には、日光火山群男体火山をはじめ、浅間火山や榛名火山などの噴火に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が分布している。これらテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされており、それらとの層位関係を求めることで遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代がわかる示標テフラがある。

東谷中島遺跡の発掘調査では、低地部や台地部の土層断面中にテフラの層や粒子の濃集層が検出された。そこで地質調査を行い土層の層序を記載することになった。そしてテフラおよび土壌の試料などを対象にテフラ検出分析を行って、噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出同定を行い、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。さらに屈折率測定を行って、示標テフラとの同定の精度を向上させた。

調査分析の対象とした地点は、12-21 グリッド、13-21 グリッド、14-20 グリッド、16-19 グリッド、18-22 グリッド、26-18 グリッドの6地点である。

2. 土層の層序

(1) 12-21 グリッド〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

低地部に位置するこの地点では、下位より灰色砂層（層厚 25cm）、黒褐色土（層厚 3cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 1cm）、黒褐色土（層厚 14cm）、白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚 9cm）、黒褐色土（層厚 2cm）、成層したテフラ層、黒褐色土（層厚 0.3cm）、灰色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）、黒褐色砂質土（層厚 21cm）、暗灰色作土（層厚 4cm）、作土（層厚 12cm）が認められる（第 257 図上）。

これらのうち成層したテフラ層は、下部の褐色粗粒火山灰層（層厚 2cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）から構成されている。

(2) 13-21 グリッド〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

低地部に位置する本地点では、下位より黒泥層（層厚 3cm）、葉理の発達した灰色砂層（層厚 5cm）、木本類の大型植物遺体を含む灰色がかった暗褐色泥層（層厚 12cm）、白色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、黒灰色粘質土（層厚 9cm）、白色粗粒火山灰混じり黄色細粒火山灰層（層厚 2cm）、暗灰色粘質土（層厚 8cm）、白色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚 11cm）、白色粗粒火山灰混じり灰色土（層厚 13cm）、暗灰色土（層厚 2cm）、成層したテフラ層、黒灰色砂質土（層厚 7cm）、暗灰色砂質土（層厚 18cm）、灰色土（層厚 23cm）、作土（層厚 18cm）が認められる（第 257 図上）。

これらのうち成層したテフラ層は、下部の黄褐色粗粒火山灰層（層厚 1cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚 0.5cm）から構成されている。

(3) 14-20 グリッド〔権現山遺跡 SG15 区南側低地〕

低地部に位置するこの地点では、下位より灰色砂礫層（層厚 44cm、礫の最大径 74mm）、灰色砂質土（層厚 15cm）、砂混じり暗灰色土（層厚 14cm）、灰白色粗粒火山灰層（層厚 2cm）、暗灰色土（層厚 4cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）、灰褐色砂質土（層厚 3cm）、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚 16cm）、暗褐色土（層厚 18cm）、作土（層厚 18cm）が認められる（第 257 図上）。

(4) 16-19 グリッド〔権現山遺跡 SG15 区北側低地〕

ここで検出された溝の覆土は、下位より黒色粘質土（層厚 8cm）、灰色砂の薄層を挟む黒灰色土（層厚 19cm）、黒褐色土（層厚 14cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 1cm）、白色粗粒火山灰混じり暗黄灰色土（層厚 20cm）、暗灰色粘質土（層厚 4cm）、黒灰色粘質土（層厚 6cm）、黄褐色粗粒火山灰層（層厚 0.4cm）、黒色土（層厚 3cm）、砂混じり黒褐色土（層厚 15cm）、灰褐色土（層厚 16cm）、作土（層厚 21cm）から構成される（第 257 図上）。これらの土層のうち、下位より2層目の黒灰色土からは、古墳時代中期の土器

が検出されている。

(5) 18-22 グリッド〔権現山遺跡 SG10 区東側低地〕

低地部に位置するこの地点では、下位より暗灰色土（層厚 12cm 以上）、灰色粗粒火山灰層（層厚 0.8cm）、暗灰色土（層厚 3cm）、暗灰色砂質土（層厚 3cm）、ラミナ状に灰色砂層を挟む暗灰色土（層厚 18cm）、黄色細粒火山灰層（層厚 0.6cm）、白色粗粒火山灰混じり灰褐色砂質土（層厚 13cm）、暗灰色砂質土（層厚 8cm）、暗灰色砂質土（層厚 23cm）、灰色砂質土（層厚 12cm）が認められる（第 257 図下）。

(6) 26-18 グリッド〔権現山遺跡 SG10 区北側低地にある杉村遺跡 SG1 区〕

低地部と台地部の中間点に位置するこの地点では、灰褐色粘質土（層厚 22cm 以上）、暗褐色土（層厚 1cm）、成層したテフラ層、暗褐色土（層厚 0.3cm）、灰色細粒火山灰層（層厚 1.2cm）、黄色シルト層（層厚 1cm）、黒色土（層厚 0.8cm）、褐色粗粒火山灰混じり灰色土（層厚 26cm）、灰色土（層厚 8cm）、暗灰色表土（層厚 17cm）が認められる（第 257 図下）。これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下部の褐色粗粒火山灰層（層厚 1.5cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚 0.4cm）から構成されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

前述した地点において認められたテフラ層およびテフラの濃集層について、示標テフラの検出同定を行うためにテフラ検出分析を行った。また示標テフラの降灰が期待された土壌についても、基本的に 5cm ごとに採取された試料のうちの 5cm おきの試料を対象にテフラ検出分析を試みた。分析の対象とした試料の合計は、43 点である。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80 ° C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

1) 12-21 グリッド〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

この地点では、試料番号 3 に白色で比較的良好に発泡した軽石（最大径 2.7mm）が比較的多く認められる。この軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。このテフラは、軽石の特徴さらに淘汰が良くないことなどから Hr-FA に由来するものと考えられる。したがって試料番号 3 のテフラ層は、Hr-FA に由来する可能性が大きいと考えられる。

試料番号 2 には、淡褐色で発泡の良い軽石がとくに多く認められた。この軽石の最大径は 1.3mm で、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から As-B に由来すると考えられ、試料番号 2 のテフラ層は As-B に同定される。さらに試料番号 1 には、淡褐色（ごく少量の褐色軽石を含む）で発泡の良い軽石が多く認められた。この軽石の最大径は 1.3mm で、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 1128（大治 3）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ層（As-Kk, 早田, 1991, 1994）に由来すると考えられる。層相を合わせると、試料番号 1 のテフラ層は As-Kk に同定される。

2) 13-21 グリッド〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

ここでは、試料番号 2 に As-C に由来する灰白色軽石（最大径 2.0mm）がとくに多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 2 のテフラ層は As-C に同定される。また試料番号 1 には Hr-FA に由来すると考えられる白色軽石（最大径 2.0mm）が比較的多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 1 のテフラ層は、Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。なお試料番号 1 より上位にある成層し

たテフラ層は、層相から As-B に同定される。

3) 14-20 グリッド〔権現山遺跡 SG15 区南側低地〕

試料番号 1 には、As-C に由来する灰白色軽石（最大径 2.1mm）がとくに多く含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 1 のテフラ層は、As-C に同定される。またその上位の黄色細粒火山灰層は、層相や層位などから Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。

4) 16-19 グリッド〔権現山遺跡 SG15 区北側低地〕

この地点の試料番号 1 には、Hr-FA に由来すると思われる白色軽石（最大径 1.9mm）が少量含まれている。層相を合わせて考えると、試料番号 1 のテフラ層は、Hr-FA に同定される可能性が大きいと考えられる。またその上位の黄褐色粗粒火山灰層は、層相や層位などから As-B に同定されるものと考えられる。

5) 26-18 グリッド〔権現山遺跡 SG10 区北側低地にある杉村遺跡 SG1 区〕

試料番号 1 の黄色シルト層には、下位の As-Kk に由来すると思われる淡褐色と褐色の軽石（最大径 1.1mm）がごく少量認められた。それ以外に特徴的なテフラ粒子は認められなかったことから、試料番号 1 の洪水が何らかの火山活動によって引き起こされたものとは考えにくいようである。なおその下位の 2 層のテフラについては、層相から下位より As-B と As-Kk に各々由来していると考えられる。

なお分析の対象としなかった 18-22 グリッド〔権現山遺跡 SG10 区東側低地〕の 2 層のテフラ層は、層相から各々下位より As-C と As-B に同定されるものと考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

As-C に同定された 14-20 グリッド試料番号 1、Hr-FA、As-B に同定された 12-21 グリッドの試料番号 3 および 2 の 3 試料について位相差法（新井，1972）による屈折率の測定を行い、示標テフラとの同定の精度を向上させることにした。

(2) 測定結果

屈折率の結果を第 150 表に示す。14-20 グリッド試料番号 1 には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は、1.513-1.519 である。また斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.707-1.711 である。これらの特徴は As-C のそれと一致する。

また 12-21 グリッド試料番号 3 には角閃石のほか斜方輝石や磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は 1.500-1.502、斜方輝石の屈折率（ γ ）は 1.710 ±、角閃石の屈折率（ n_2 ）は 1.672-1.680 である。これらの重鉱物の組合せや屈折率は Hr-FA の特徴と一致する。さらに試料番号 2 には、斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱が含まれている。火山ガラスの屈折率（n）は 1.525-1.530、斜方輝石の屈折率（ γ ）は 1.708-1.710 である。これらの重鉱物の組合せや屈折率は、As-C の特徴と一致する。以上のように、屈折率測定の結果、テフラ検出分析によるテフラ同定の結果を支持している。

第149表 権現山遺跡SG2区・SG10区・SG15区
テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
12-21G	1	+++	淡褐	1.3
	2	++++	淡褐	1.3
	3	++	白	2.7
13-21G	1	++	白	2.0
	2	++++	灰白	2.0
14-20G	1	++++	灰白	2.1
16-19G	1	+	白	1.9
26-18G	1	+	淡褐	1.1

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最大径の単位は，mm.

第150表 権現山遺跡SG2区・SG15区
屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	屈折率
14-20 グリッド	1	opx.cpx,mt	gl (n) :1.513-1.519
			opx (γ) :1.707-1.711
12-21 グリッド	2	opx.cpx,mt	gl (n) :1.525-1.530
			opx (γ) :1.708-1.710
	3	ho>opx,mt	gl (n) :1.500-1.502
			opx (γ) :1.710 ±
			ho (n_2) :1.672-1.680

屈折率の測定は、位相差法（新井，1972）による。

gl：火山ガラス，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石。

5. まとめ

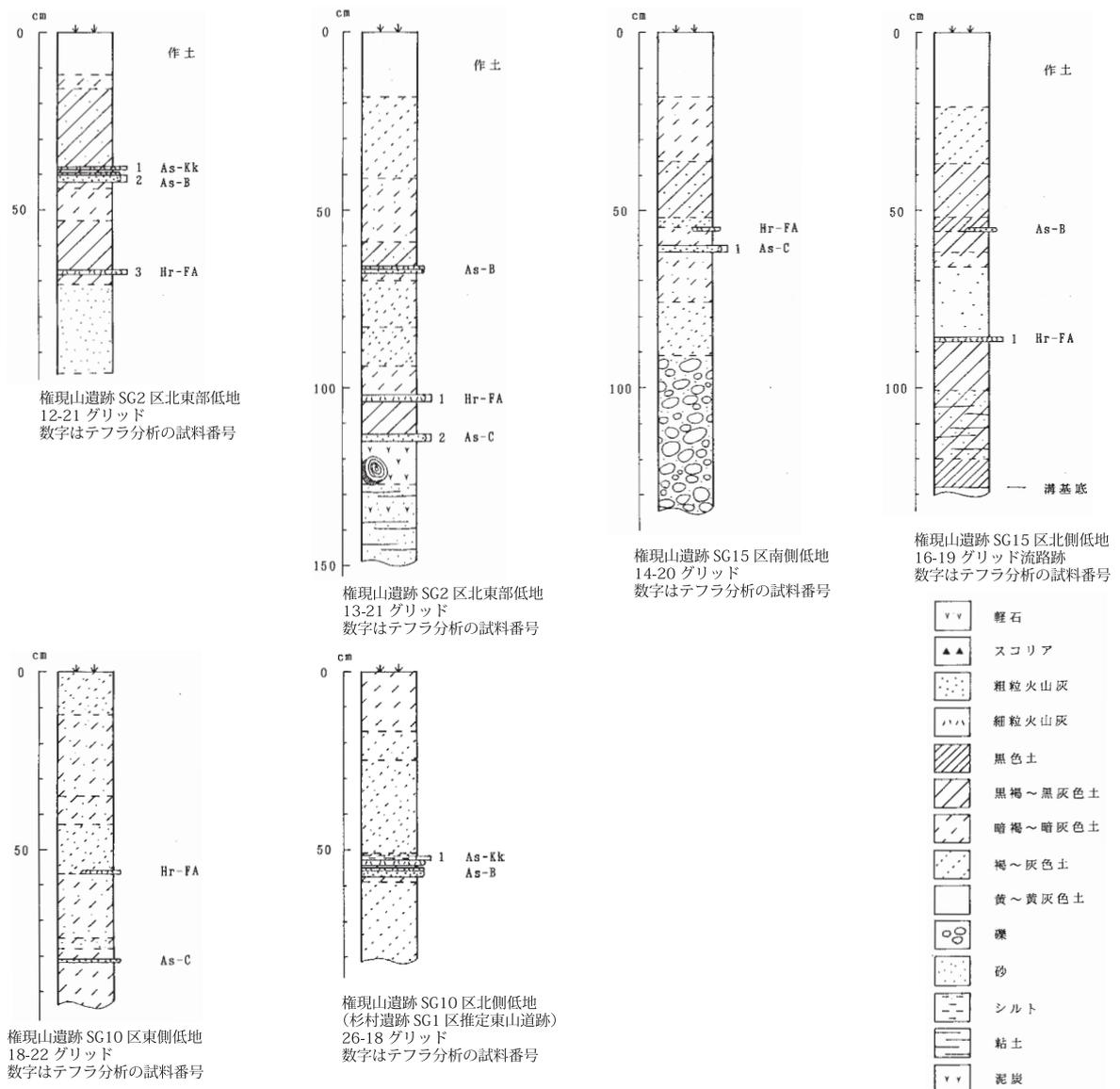
東谷中島遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より男体七本桜軽石 (Nt-S, 約 1.2 ~ 1.3 万年前)、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約 6,300 年前)、浅間C軽石 (As-C, 4 世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108 年)、浅間粕川テフラ (As-Kk, 1128 年) に同定されるテフラ層またはそのテフラ粒子が検出された。

[報告書編者註：男体七本桜軽石と鬼界アカホヤ火山灰は杉村遺跡 GN1 区の 45-20 グリッドで検出され、今回掲載した分析結果には登場しない。45-20 グリッドの分析結果は『東谷・中島地区遺跡群』10 の 162 ページに掲載した。]

文献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラ起源の広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.



第 257 図 権現山遺跡 SG2・SG10・SG15 区の土層柱状図とテフラ分析試料

第3節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、12-21 グリッドで 6 点、13-21 グリッドで 5 点、14-20 グリッドで 1 点、16-19 グリッドで 4 点、18-22 グリッドで 2 点、26-18 グリッドで 4 点の計 22 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105°C ・24 時間)
- 2) 試料約 1g を秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 $40\ \mu\text{m}$ 、約 0.02g)
※電子分析天秤により 1 万分の 1g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W ・ 42KHz ・10 分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\ \mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は 2.94 (種実重は 1.03)、8.40、6.31、1.24 である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は 0.48、クマザサ属は 0.75 である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 151 表および第 258 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、39-13 グリッドと 20-25 グリッドを除く地点については、水田跡の探査が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族 (ススキ属など)、タケ亜科 (おもにネザサ節) の主要な 5 分類群に限定した。〔報告書編者註：上記の 39-13 グリッドは『東谷・中島地区遺跡群』10, p.169 で報告した権現山遺跡 2 区、20-25 グリッドは『東谷・中島地区遺跡群』6, p.308 で報告した磯岡遺跡 3 区を指す。〕

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族 (ヒエ属など)、ヨシ属、ウシクサ族 (ススキ属やチガヤ属など)、ジュズダマ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型 (大型)、くさび型、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、

第151表 権現山遺跡 SG2・SG10・SG15区 植物珪酸体分析結果

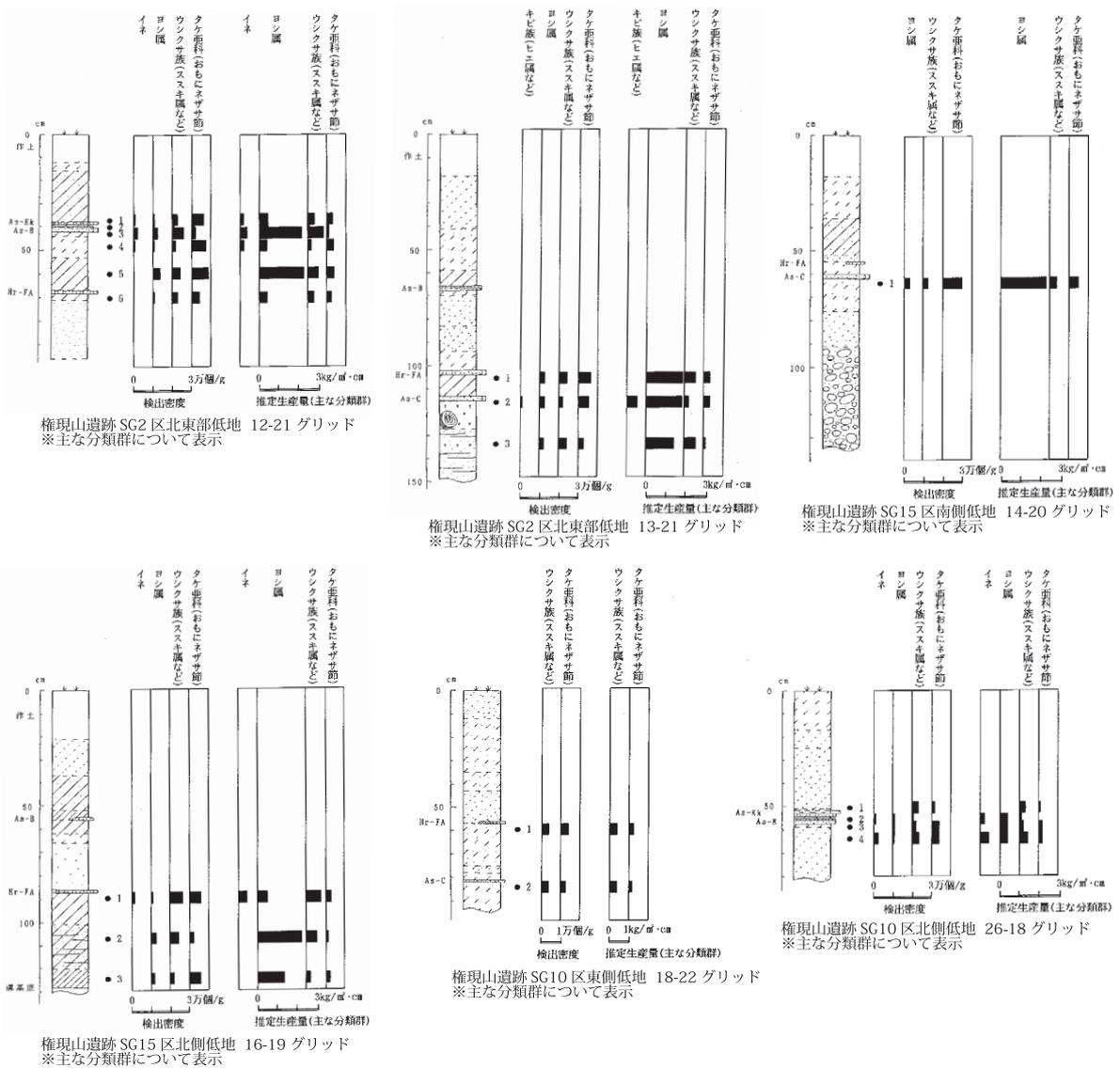
※主要な分類群について計測
検出密度 (単位: ×100 個/g)

分類群 \ 試料	権現山遺跡 SG2区 北東部低地 12-21 グリッド						権現山遺跡 SG2区 北東部低地 13-21 グリッド						権現山遺跡 SG15区 南側低地 14-20 グリッド	権現山遺跡 SG15区 北側低地 16-19 グリッド				権現山遺跡 SG10区 東側低地 18-22 グリッド		権現山遺跡 SG10区 北側低地 (杉村遺跡 SG1区 推定東山道地区) 26-18 グリッド								
	1	2	3	4	5	6	1	1'	2	2'	3	1	1	1'	2	3	1	2	1	2	3	4						
イネ	8		14		8								16	15										7				22
キビ族 (ヒエ属など)									8																			
ヨシ属	8	7	36	8	38	8	31	31	30	7	23	38	8	30	37	22							7	7			7	
ウシクサ族 (ススキ属など)	31	7	65	15	45	30	46	46	23	30	45	31	64	22	45	22	37	38	31	7	22		36				36	
タケ亜科 (おもにネザサ節)	63	15	22	85	91	45	69	46	61	45	30	99	64	45	22	52	44	30	15				44				44	

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	0.23	0.43	0.23						0.64				0.47	0.44										0.22			0.64
キビ族 (ヒエ属など)																											
ヨシ属	0.50	0.47	2.28	0.49	2.38	0.48	1.94	1.95	1.92	0.47	1.43	2.41	0.50	1.88	2.36	1.42	0.46	0.47					0.47	0.46		0.46	
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.39	0.09	0.81	0.19	0.56	0.37	0.57	0.58	0.28	0.37	0.56	0.38	0.79	0.28	0.56	0.28	0.21	0.14	0.38	0.09	0.27		0.27	0.45		0.45	
タケ亜科 (おもにネザサ節)	0.30	0.07	0.10	0.41	0.44	0.22	0.33	0.22	0.29	0.22	0.14	0.48	0.31	0.21	0.11	0.25	0.21	0.14	0.07				0.21	0.21		0.21	

※試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出。



第258図 権現山遺跡 SG2・SG10・SG15区の植物珪酸体分析結果

クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

5. 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料 1g あたりおよそ 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) 12-21 グリッド（第 258 図上段左）〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

As-Kk 直上層（試料 1）から Hr-FA 直下層（試料 6）までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk 直上層（試料 1）と As-B 直下層（試料 3、4）からイネが検出された。このうち、As-B 直下層（試料 3）では密度は 1,400 個 /g と比較的低い値であるが、直上を As-B 層で覆われていることから上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の試料では、1,000 個 /g 未満と低い値である。

(2) 13-21 グリッド（第 258 図上段中）〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

Hr-FA 直下層（試料 1）から As-C の下位層（試料 3）までの層準について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 14-20 グリッド（第 258 図上段右）〔権現山遺跡 SG15 区南側低地〕

As-C 直下層（試料 1）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

(4) 16-19 グリッド（第 258 図下段左）〔権現山遺跡 SG15 区北側低地〕

Hr-FA 直下層（試料 1）から溝基底（試料 3）までの層準について分析を行った。その結果、Hr-FA 直下層（試料 1、1'）からイネが検出された。密度は約 1,500 個 /g と比較的低い値であるが、直上を Hr-FA 層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(5) 18-22 グリッド（第 258 図下段中）〔権現山遺跡 SG10 区東側低地〕

Hr-FA 直下層（試料 1）および As-C 直下層（試料 2）について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(6) 26-18 グリッド（第 258 図下段右）〔権現山遺跡 SG10 区北側低地にある杉村遺跡 SG1 区〕

As-Kk 直上層（試料 1）から As-B の下層（試料 4）までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk 直下層（試料 2）と As-B の下層（試料 4）からイネが検出された。このうち、As-B の下層（試料 4）では密度が 2,200 個 /g と比較的低い値であり、As-Kk 直下層（試料 2）でも 1,000 個 /g 未満と低い値であるが、それぞれ直上層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、各層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

以上のように、43-21 グリッドの As-B 混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12-21 グリッドの As-B 直下層や 16-19 グリッドの Hr-FA 直下層、26-18 グリッドの As-B 下層、45-20 グリッドの As-B 混層と Hr-FA 混層などでも稲作が行われていた可能性が認められたが、密度は比較的低い値である。その原因としては、1) 稲作が行われていた期間が短かったこと、2) 洪水などによって耕作土が流出したこと、3) 土層の堆積速度が速かったこと、4) 採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、5) 稲の生産性が低かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

6. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ

類が含まれる)やキビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはキビ族とジュズダマ属が検出された。

キビ族は、13-21グリッドのAs-C直下層(試料2)、45-20グリッドのHr-FA混層(試料3)、43-21グリッドのAs-B下層(試料3)、39-13グリッドの泥炭層(試料3)から検出された。キビ族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、ここでヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は低いと考えられる。

ジュズダマ属は、39-13グリッドのAs-C下層(試料1、2)と最下層(試料4)から検出された。同属には野草のジュズダマの他に栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別するのは困難である。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、各層準でハトムギが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

7. 植物珪酸体分析からみた植生・環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

As-Cより下位では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、ヨシ属やウシクサ族(ススキ属など)、タケ亜科なども少量検出された(第258図)。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。

おもな分類群の推定生産量(各図の右側)によると、As-Cより下位ではヨシ属が卓越しており、As-C混層からHr-FA直下層にかけても多くの地点でヨシ属が優勢となっていることが分かる。

これらの結果から、Hr-FAより下位の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境が継続されていたものと考えられ、Hr-FA直下層の時期に調査区の一部でそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

8. まとめ

以上のように、43-21グリッドの浅間Bテフラ(As-B, 1108年)混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、12-21グリッドのAs-B直下層や16-19グリッドの榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下層、26-18グリッドのAs-B下層、45-20グリッドのAs-B混層とHr-FA混層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA直下層の時期に調査区の一部でそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

[報告書編者註] 上記「8. まとめ」等で述べられている39-13と43-21と45-20グリッドは『東谷・中島地区遺跡群』10のp.167-168で報告済の権現山遺跡2区と杉村遺跡GN1区を指す。

参考文献

杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号: p.27-37
杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学, 20:p.81-92.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9:p.15-29.
藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17:p.73-85.



第 259 図 権現山遺跡 SG2・SG10・SG15 区の植物珪酸体の顕微鏡写真

第 4 節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、13-21 グリッドで 3 点、16-19 グリッドで 3 点の計 6 試料である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村 (1973) を参考にし、以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：1 濃硫酸のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2 分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるとい
う操作を 3 回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉
(1973) および中村 (1980) を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、
亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。
なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属
に関しては、中村 (1974、1977) を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比
して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結果

分析の結果、樹木花粉 29、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 26、シダ植物孢子 2 形態の計
60 分類群が同定された。花粉遺体一覧を表に示し、花粉数が 100 個以上の試料は樹木花粉および花粉総数
を基数とする花粉組成図を作成した。以下に同定された分類群を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科ー
イヌガヤ科ーヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハンバミ属、クマシデ属ーアサ
ダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ーム
クノキ、キハダ、カエデ属、トチノキ、シナノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、ニ
ワトコ属ーガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

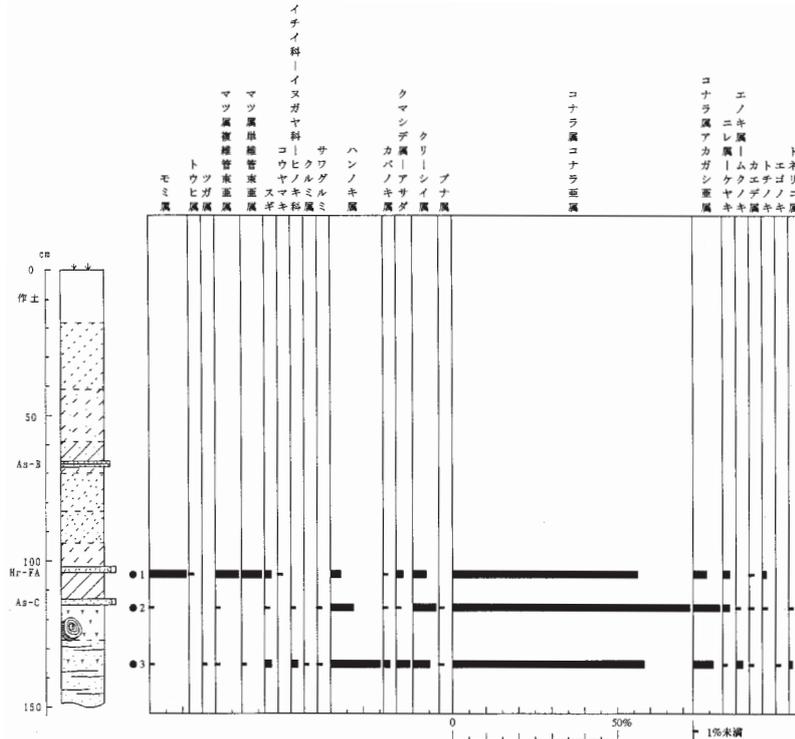
ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、
ミズアオイ属、イボクサ、タデ属サナエタデ節、ギンギシ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、
キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、セリ科、シソ科、ナス科、
オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

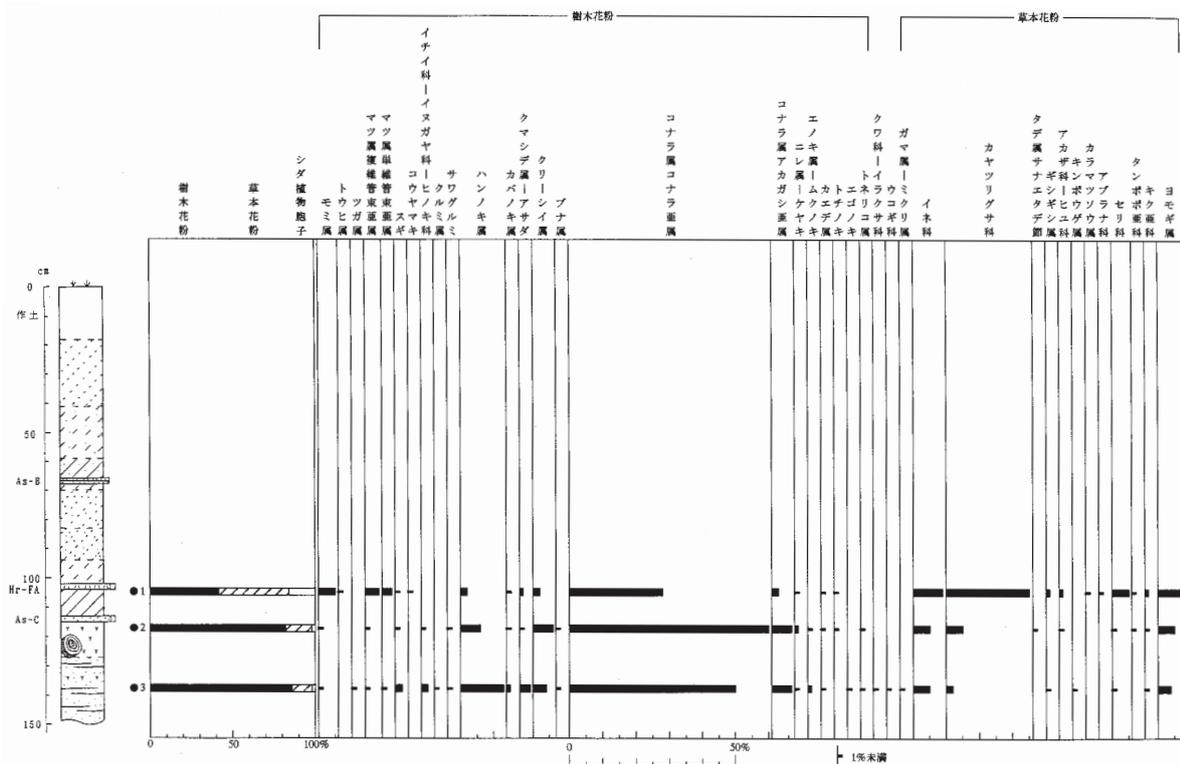
単条溝孢子・三条溝孢子

(1) 13-21 グリッド (第 260・261 図) 〔権現山遺跡 SG2 区北東部低地〕

試料 3 では草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハ
ンノキ属、クリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。ハンノキ属は、湿地林を形成するハンノ
キとみなすのが妥当である。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が主に出現するが低率であり、
ガマ属ーミクリ属も出現する。試料 2 も試料 3 と傾向が類似し、草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。
樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、クリーシイ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属が主に伴わ
れる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現するが低率である。試料 1 では草本花

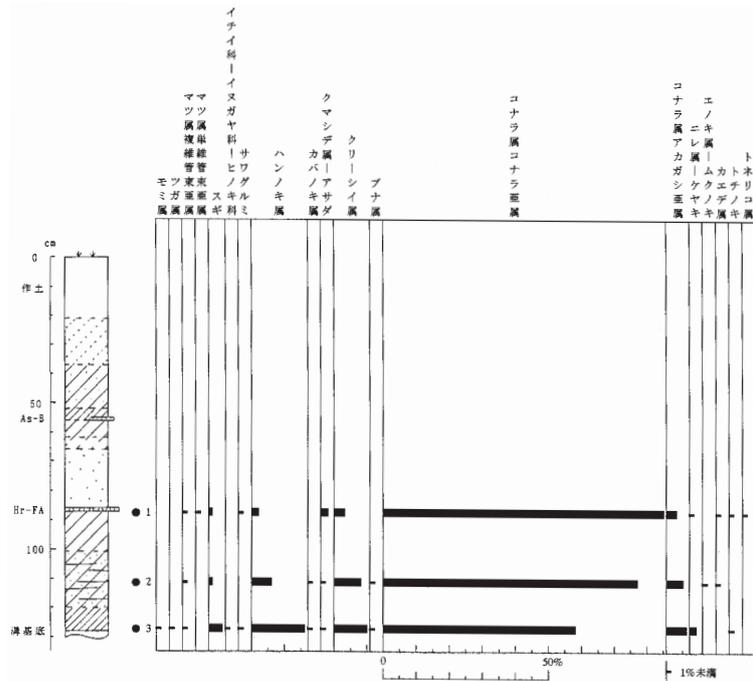


第 260 図 権現山遺跡 SG2 区 13-21 グリッドにおける樹木花粉組成図

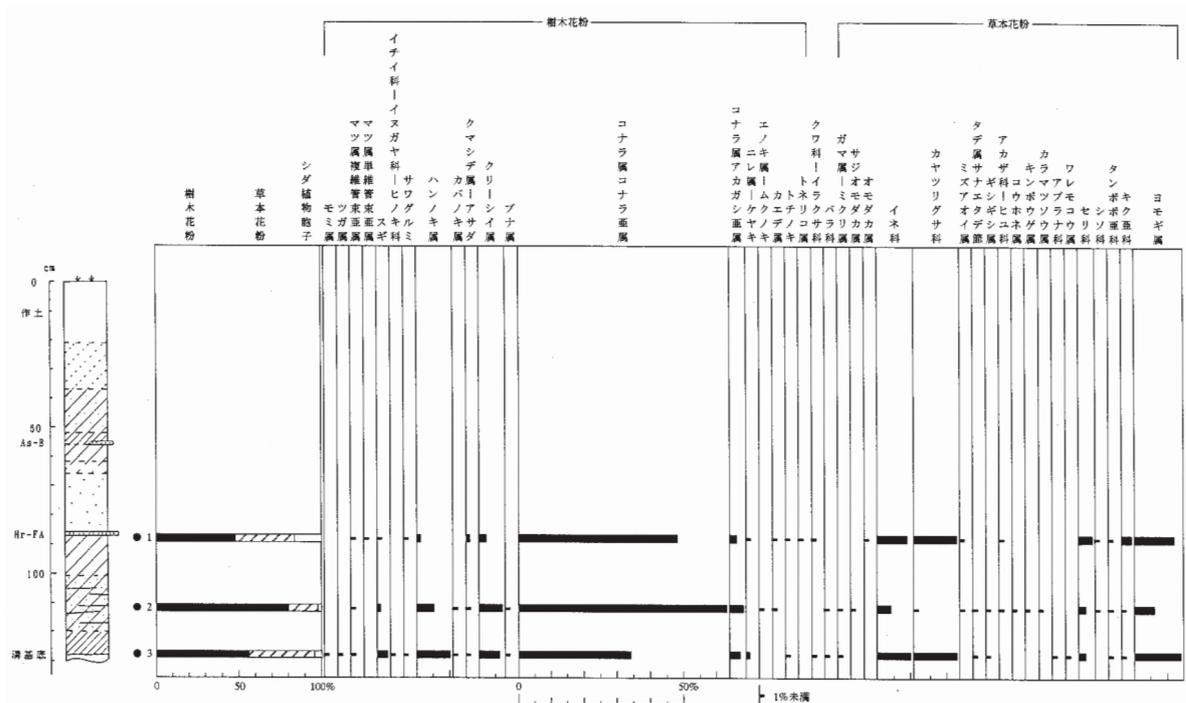


第 261 図 権現山遺跡 SG2 区 13-21 グリッドにおける花粉組成図(花粉総数が基数)

粉の占める割合が増加し、樹木花粉と同程度となる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、モミ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属の針葉樹とハンノキ属、クリーシイ属の広葉樹が伴われる。草本花粉ではカヤツリグサ科が高率であり、イネ科、ヨモギ属、セリ科などが伴われる。



第 262 図 権現山遺跡 SG15 区北側低地 16-19 グリッドにおける樹木花粉組成図



第 263 図 権現山遺跡 SG15 区北側低地 16-19 グリッドにおける花粉組成図(花粉総数が基数)

(2) 16-19 グリッド (第 262・263 図) [権現山遺跡 SG15 区北側低地]

試料 3 では樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、ハンノキ属、クリーシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉ではヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科が主に出現する。試料 2 では樹木花粉の占める割合が高くなる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占し、クリーシイ属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属が主に伴われる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが出現するが低率であり、ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属が出現する。試料

第152表 権現山遺跡 SG2・SG15区 花粉分析結果

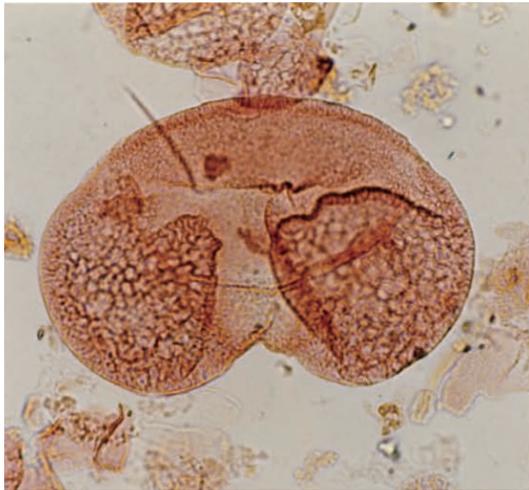
学名	和名	SG2区北東部低地			SG15区北側低地		
		13-21グリッド			16-19グリッド		
		1	2	3	1	2	3
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Abies</i>	モミ属	20	1	2			1
<i>Picea</i>	トウヒ属	1					
<i>Tsuga</i>	ツガ属			1			1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	13	1	1	1	1	1
<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属	11		1	2		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3	1	7	3	4	15
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1					
Taxaceae-Cephalotaxaceae	イチイ科-イヌガヤ科		1	7			1
	-Cupressaceae						
	-ヒノキ科						
<i>Juglans</i>	クルミ属			2			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1	3	1		2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	6	24	59	6	19	56
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1	6		1	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属						
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	4	1	15	6	2	2
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	7	25	20	7	26	36
<i>Fagus</i>	ブナ属		2	2		2	3
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	101	250	226	213	246	204
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	7	26	25	7	16	20
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	3	6	1	2		7
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		3	6		1	
<i>Acer</i>	カエデ属	1	1	2	1	1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	2	2		1		2
<i>Styrax</i>	エゴノキ属			1			
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		2	4	2		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1	2		1
Rosaceae	バラ科					2	1
Araliaceae	ウコギ科			1			
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属			1		1	2
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属					1	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				2		
Gramineae	イネ科	34	20	23	38	15	60
<i>Oryza type</i>	イネ属型				3		2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	91	20	9	59	2	79
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属				1	1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		2			1	1
<i>Rumex</i>	ギンギン属	4		1		1	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	5	1		3	1	
<i>Nuphar</i>	コウホネ属					1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			1		1	
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	2				2	
Cruciferae	アブラナ科	2					1
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属						1
Umbelliferae	セリ科	17	1	4	16	9	14
Labiatae	シソ科		1		4	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1		4	2	1
Asteroideae	キク亜科	4	1	4	11	3	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	26	19	16	53	25	85
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	71	5	1	79	10	24
Trilate type spore	三条溝胞子		1	1	4	1	5
Arboreal pollen	樹木花粉	181	348	391	252	319	353
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	2	2	2	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	186	66	59	194	67	250
Total pollen	花粉総数	367	414	452	448	388	605
Unknown pollen	未同定花粉	3	2	7	4	4	1
Fern spore	シダ植物胞子	71	6	2	83	11	29



1 モミ属



2 マツ属複維管束亜属



3 トウヒ属

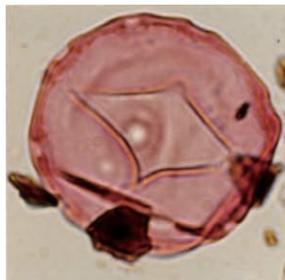
1・3  90μm



4 マツ属単維管束亜属



5 スギ



6 クルミ属



7 サワグルミ属



8 コナラ属コナラ亜属



9 ハンノキ属



10 カバノキ属



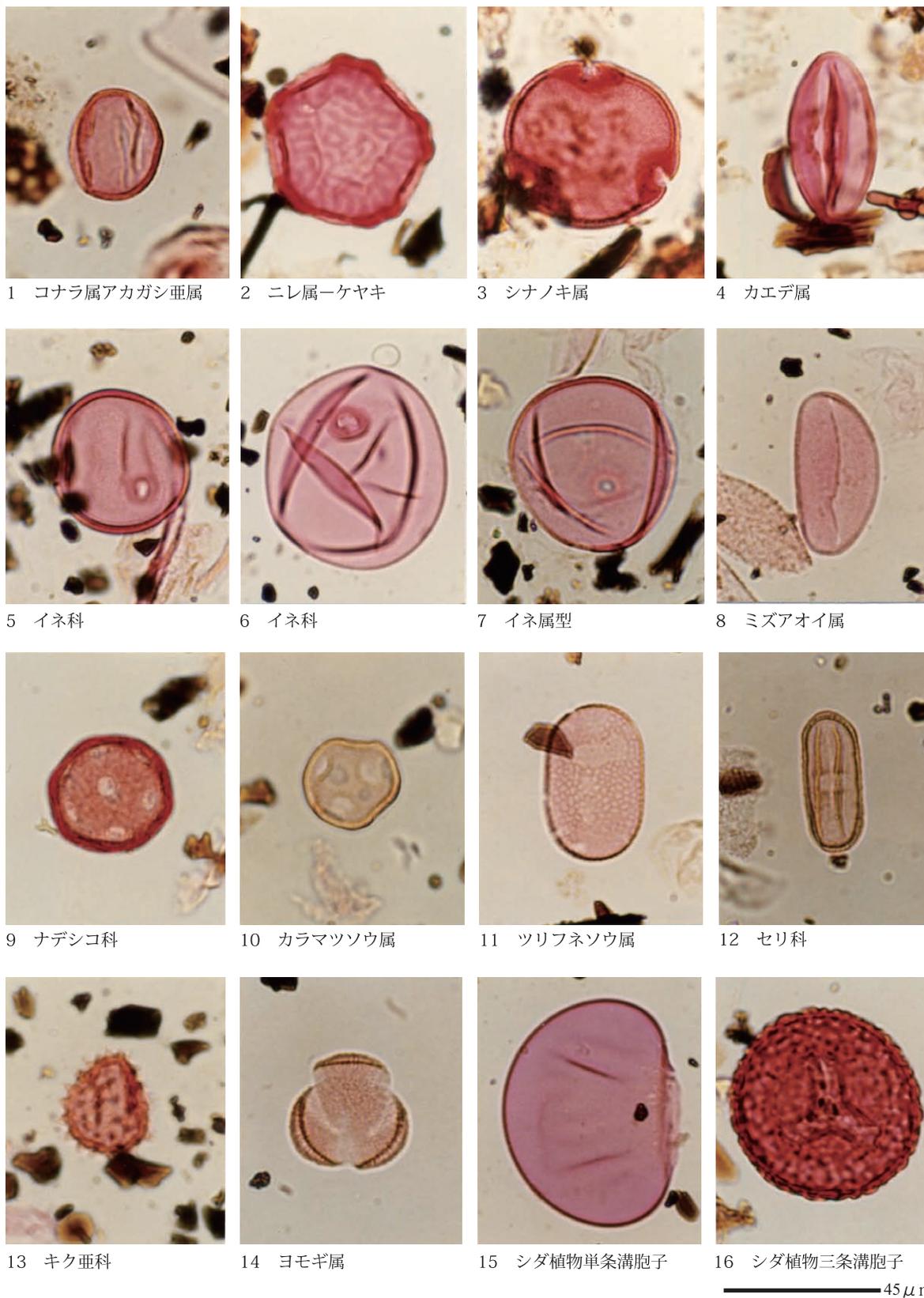
11 クマシデ属アサダ



12 クリーシイ属

 45μm

第264図 権現山遺跡各地区および磯岡遺跡3区の花粉・孢子遺体(1)



第 265 図 権現山遺跡各地区および磯岡遺跡 3 区の花粉・胞子遺体 (2)

1 では草本花粉の占める割合が増加し、樹木花粉と同程度となる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占する。草本花粉ではカヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科を主に出現し、オモダカ属、ミズアオイ属も出現する。

4. 花粉分析からみた植生・環境・農耕

(1) 13-21 グリッド (第 260・261 図) [権現山遺跡 SG2 区北東部低地]

As-C より下位 (試料 2、3) の堆積当時は、周辺にはコナラ属コナラ亜属を主としてクリーシイ属、クマシデ属—アサダなども見られる落葉広葉樹林が分布していたと推定される。また、周囲にはハンノキの湿地林も分布していたと考えられるが、気候の乾燥化などによってしだいに減少したものと推定される。コナラ属アカガシ亜属は低率であり、やや遠方で森林を形成していたと考えられる。

草本は少なく、イネ科、カヤツリグサ科、ガマ属—ミクリ属が主に繁茂する小規模な水湿地が分布していたと推定される。また、その周囲のやや乾燥したところにはヨモギ属が繁茂していたと考えられる。

Hr-FA の直下 (試料 1) の時期では、森林が減少し、草本の繁茂する湿地が拡大したと推定される。カヤツリグサ科が主に繁茂する湿地であり、水の循環が悪く、水田にはあまり適さない環境であったと推定される。周辺地域には、コナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林や、モミ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属などの針葉樹が分布していたと考えられる。

(2) 16-19 グリッド (第 262・263 図) [権現山遺跡 SG15 区北側低地]

試料はすべて Hr-FA の下位の時期である。周囲はコナラ属コナラ亜属を主とする森林がやや多く分布し、クリーシイ属なども構成要素であったと考えられる。下部 (試料 3) ではハンノキ (ハンノキ属) の湿地林も分布していたと考えられるが、気候の乾燥化などによってしだいに減少したものと推定される。

溝の中はカヤツリグサ科、イネ科、ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが繁茂する水湿地の環境であったとみなされる。溝の周囲にはヨモギ属の繁茂するやや乾燥した日当たりの良いところも分布していたと推定される。

5. 小結

浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉) より下位から榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭) 直下層にかけては、森林植生としてはコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が優勢であり、周辺にはハンノキ属 (ハンノキ) の湿地林が広がっていたと考えられる。Hr-FA 直下層では、樹木が減少してイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が増加したと考えられ、やや開けた景観を呈していたと推定される。

参考文献

中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院。

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本 第 10 巻 古代資料研究の方法, 角川書店。

日本第四紀学会編 (1993) 第四紀試料分析法, 東京大学出版会。

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集。

中村純 (1980) 日本産花粉の標徴, 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集。

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究 13。

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学 第 10 号。

第8章 権現山遺跡 SG5 区

権現山遺跡 SG5 区は、宇都宮市東谷町字杉村 912-1・912-2、東谷町字下原 7・8・9・10 に所在し、「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地する。権現山遺跡の中心部と考えられる首長層居館跡 2 基のうち南側居館の東半部をとりまく遺構集中地区である。SG5 区の位置は北緯 36° 28′ 55″、東経 139° 54′ 20″（世界測地系）、発掘調査前の現況地形は台地部標高 79.7～80.5m、東側の低地部（標高 79.1～79.5m）との比高が約 0.6～1.1m である。SG5 区の範囲は南北長 240m×東西幅 10～40m で、調査面積は 7,000m²。

権現山遺跡 SG5 区の北東側は、SG10 区の遺構密集地区へ続く。ただし、SG5 区北端部から SG10 区西部にかけての部分は、地山ローム層までおよぶ土取痕で攪乱されていて、遺構のほとんどが消滅している。SG5 区の西側隣接地は、2012 年 9 月に新潟大学考古学研究室が調査して SA-151 や SD-227 の続きを確認している。SG5 区から未調査部分を中間にはさんで 90～250m 西側には、北関東自動車道建設に伴って調査した権現山遺跡 A 区（谷中・大島編 2001）がある。SG5 区の東側低地部には、権現山遺跡 SG2 区・SG9 区・SG15 区の土坑群と流路跡が隣接する。

第1節 古墳時代の居館（居宅）関連施設

方形柵列遺構（SG5 区 SA-151）の北側と南側に区画溝を伴う遺構である。北側の区画溝は SG5 区 SD-43 と SG10 区 SD-221 で、その中間は陸橋状に途切れる。南側の区画溝は SG5 区 SD-227 が該当する可能性を持つが、東側が SD-101 に切られているために不明な部分が多い。SD-101 と同様に SD-227 も北側へ向かってカーブする溝であったと想定した場合には、北側区画溝が南へ向かってカーブすることと対応していたと考えることもできる。

SG5 区 SD-43（北側区画溝）（第 269・270 図、写真図版 19）

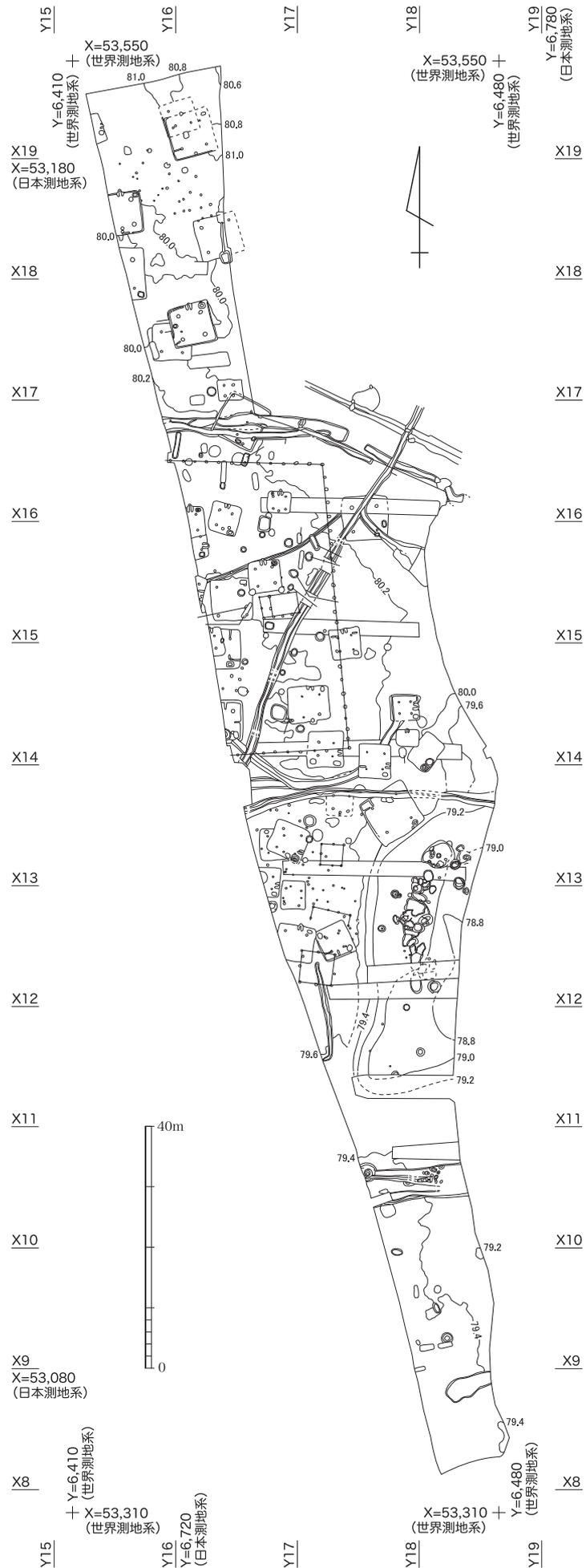
〔位置〕 SG5 区中央北寄りの 16-16・17 グリッドにあり、SG10 区まで延びる。東端部は SG10 区 SD-43 として調査を行った（第 159 図）。古墳中期中～後葉の SI-100 を切り、ほぼ平行する古墳後期の SD-44 に切られる。西側は調査区外となる。

〔規模と形状〕 約 3.6m の間（陸橋？）をあけて東側にある SG10 区 SD-221 と対応して、方形柵列遺構を中心とした居館の北側を区画する溝の可能性がある。東端部は SG10 区 SD-43 として調査を行ったので、SG5 区と SG10 区の両者を接続した図面を、第 269 図上段に示した。ほぼ東西方向に直線的に伸び、長さは SG5 区で 22.8m、SG10 区を含めると 30.3m である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦な部分が多い。幅は 1.00～2.10m、底面の幅は 0.70～1.60m、深さは 0.26～0.60m である。

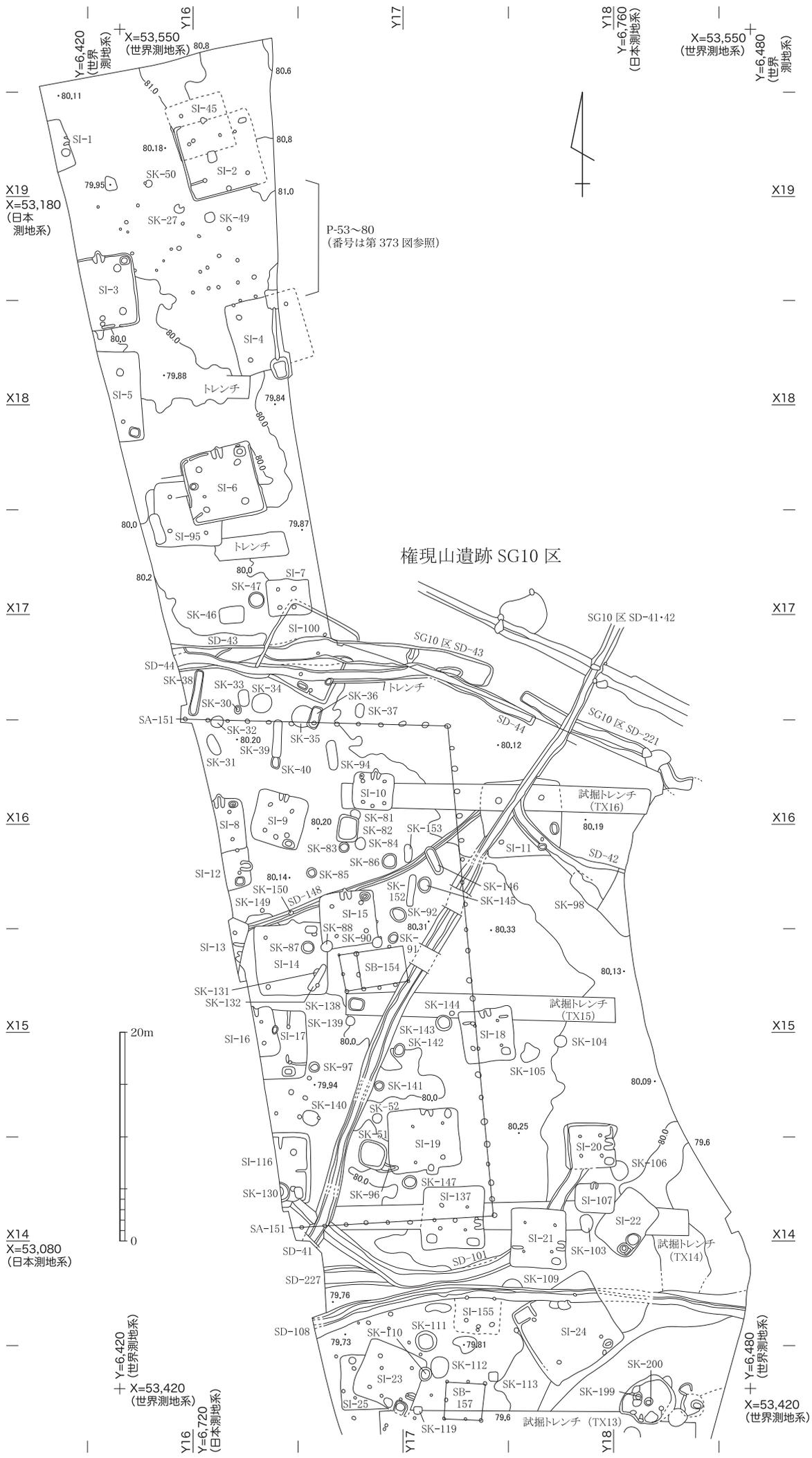
〔覆土〕 レンズ状の自然堆積である。最上層に白色粒子（火山灰か）を多く含む。断面図 F-F′ に示した位置で、古墳中期の SI-100 と、SI-100 を切る SD-43・44 の埋土を採取してテフラ検出分析を実施した（SI-100 の土層断面 C-C′ および本章第 2 節を参照）。その結果によると、SD-43 の上層部で確認された白色軽石が、古墳後期初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）である可能性が高い。

〔遺物出土状況〕 古墳中期中～後葉の SI-100 を切るのので、SI-100 から多くの遺物が流入した可能性がある。「SD-43・44」出土として取り上げた土師器椀形杯・高杯・壺甕類・甕が 2 袋分あり、ほとんどが SD-43 の時期と考えられたので、SD-43 出土として扱った。ただし、これにも SI-100 の遺物が混入している可能性はある。

〔出土遺物〕 溝としては遺物が多い。高杯が多いのが特徴的で、杯・甕・鉢が次いで多い。小形壺・鉢はごくわずかである。杯・鉢・小形壺の外面に煤が少量付着したものがある。高杯は脚上半で見ると 6 個体あり、10 と 13 はややハの字に開く形状である。脚の中程がふくらむ 9 と 14 はやや古い特徴なので、SI-100 か



第 266 図 権現山遺跡 SG5 区 全体図 (1/1,000・等高線主曲線 20cm)

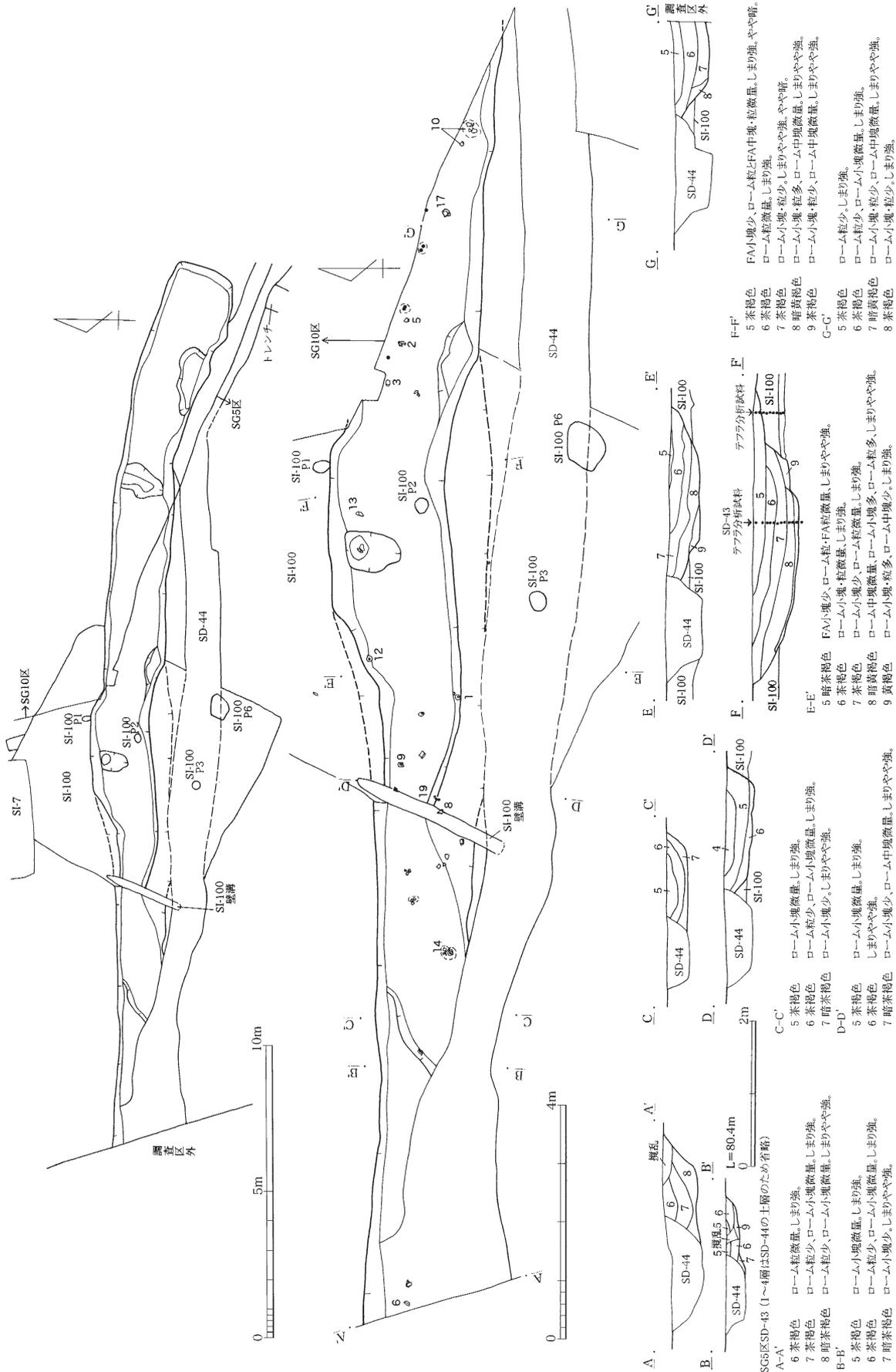


第 267 図 権現山遺跡 SG5 区 北半部全体図 (1/500・等高線主曲線 20cm)

第1節 古墳時代の居館(居宅)関連施設



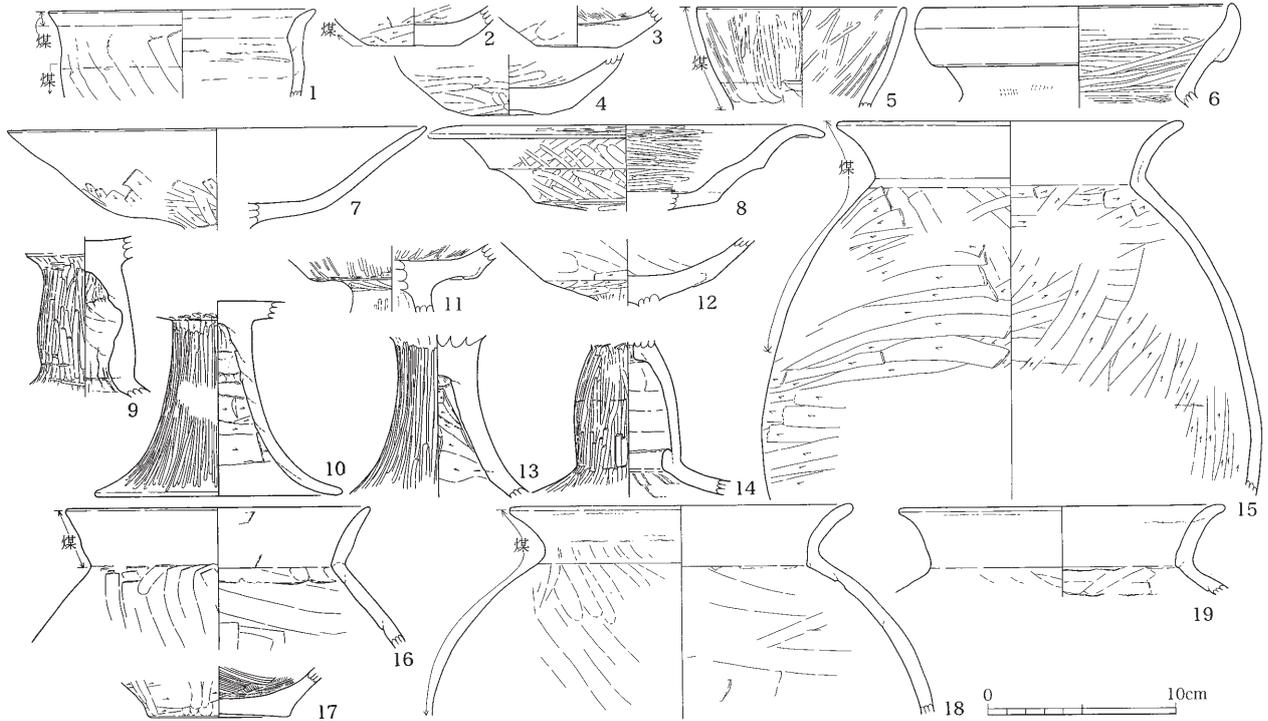
第268図 権現山遺跡SG5区南半部全体図(1/500・等高線主曲線20cm)



第269図 権現山遺跡 SG5 区 SD-43 (1) 遺構

らの混入品も含む可能性がある。受口状口縁の壺(6)は、5区ではSD-227などにある。図化以外の大形壺甕類は底部で数えて4~5個体(上げ底1点、他は平底)がある。図示以外の土師器は合計494片・5,966gで、内訳は杯鉢類83片・664g、高杯50片・964g、小形壺8片・166g、壺甕類353片・4,172g。

古墳中期末~後期中葉頃の杯などが少数混じっているが、遺物総体の時期は古墳中期後葉とみられる。古相の特徴を持つ遺物はSI-100から流入したものかもしれない。その場合には、SD-43よりも古いSI-100を中期後葉の古相と考えることになる。



第270図 権現山遺跡SG5区SD-43(2)遺物

第153表 権現山遺跡SG5区SD-43出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復14.1 高 残4.6	内斜口縁で、口縁端部はさらに外反する。外面口縁部ヨコナデ、体部斜位のヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデのちわずかにミガキ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。外面口縁部および体部下半に煤が付着しており、ややくびれて頸部状になる体部上半には煤が付着しない。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・透明細粒少、赤・灰色微塵微量 やや硬質	底上32cm 口~体1/3周 27、4-B
2 土師器 鉢	高 残2.1 底 4.7	外面体~底部ケズリ。底部平底。内面体~底部丁寧なナデ。外面体部一部黒色物質(煤か?)付着。	5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 砂細粒少、白・赤細粒と砂微塵微量 やや硬質	底上15cm 底完存 21
3 土師器 鉢	高 残2.2 底 4.2	外面体部下~底部ナデ。底部平底。内面底部密な多方向のミガキ。外面体部下~底部は表面が細かく剥落しており、調整不明な部分が多い。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・赤・灰色細粒微量 硬質	東部底上10cm 体下半~底完存 19
4 土師器 鉢	高 残3.2 底 4.0	外面体部下~底部ナデのち光沢のあるナデ。底部は中央部がくぼむ。内面体部下~底部光沢のあるナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗~細粒少、白・砂粗~細粒微量 やや硬質	体下半~底3/4周 SD-43、44 覆土
5 土師器 小形壺	口 復11.0 高 残5.4	外面口縁部下端ナデのち口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデのち斜め方向の疎らなミガキ。外面残存部全体に黒色物質(煤か?)付着。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 赤・砂粗粒少、白粗~細粒微量 やや硬質	底上23cm 口1/4周 22
6 土師器 壺	口 復17.0 高 残5.4	粘土貼付による複合口縁で、口縁端部は内彎する。外面口縁部下半5本/1cmのハゲのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのちミガキ、胴部上端5本/1cmのハゲ。口縁端部は細かな欠損・剥落・磨滅が著しい。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明細~微粒少、白・黒粗粒微量 硬質	底上23cm 口1/3周 1
7 土師器 高杯	口 復22.0 高 残5.3	外面杯部口縁~体部ヨコナデのち体~底部ケズリ。内面口縁~体部ヨコナデ、底部ナデ。口縁端部はわずかに内彎する。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白細粒少、白粗粒と黒細~微粒微量 硬質	杯口~底1/4周
8 土師器 高杯	口 復20.8 高 残4.5	杯部は二重口縁状。外面杯部口縁~体部ヨコナデのち幅広いミガキ。ミガキは体部中央の稜の上下とも稜杉風に施される。底部ナデのち疎らな幅広いミガキ。内面杯部口縁~体部ヨコナデ・体~底部ナデのち口縁~底部密なミガキ。内面のミガキは単位が不明瞭。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗~細粒と白・透明細粒少、白・砂粗粒微量 硬質	底上20cm 口1/12周 杯底1/6周 13

第8章 権現山遺跡 SG5 区

9 土師器 高杯	高 残 8.5	脚部上半エンタシス状。外面脚部上半縦方向のケズリのち縦方向のミガキ。脚柱部中位および下半にミガキの窠の当たりが残る。脚柱部上下端には、わずかに横方向のミガキあり。内面杯部底部ケズリのちわずかにミガキ、脚部上半軽いナデで、上下両端部付近にしばり目が顕著。脚部下半ヘラナデ。脚柱部上端径 4.2cm。	2.5Y8/2 灰白 やや緻密 赤粗粒多、白粗粒少、 白・赤礫と砂粗～細粒微量 やや軟質	底上 28cm 脚柱完存 30
10 土師器 高杯	高 残 10.3 脚 復 13.0	外面脚部上半縦方向のケズリ、下半ヨコナデのち脚部縦方向の密なミガキ。杯部底部には、ミガキを施す工具の当たりが楕円形に残る。内面杯部底部密なミガキ。脚部上端ナデ、中位ヘラナデのち下半ヨコナデ。上半～中位は紐積痕が顕著に残る。脚部上端径 4.2cm。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明細粒少、 砂礫～粗粒と白・赤粗粒微量 硬質	底上 41cm 脚上半完存、下半 1/4 周 24、25
11 土師器 高杯	高 残 3.5	円盤状の底部に粘土を貼って杯部を作っている。荒い作りのため歪みあり。外面杯部体部ナデのち縦方向の疎らなミガキ。底部外縁には粘土接合面が明瞭に残る。外縁部分はケズリのち横方向の疎らなミガキ。杯部底部～脚部上端ナデのちわずかにミガキ。脚部と杯部底部との境に横方向のミガキ、脚部は縦方向のミガキ。内面杯部体～底部ナデのち放射状の疎らなミガキ。脚部上端ナデ。脚部上端径 4.1cm。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白細粒微量、赤粗～ 細粒多 やや硬質	杯底 2/5 周 SD-43、44 覆土
12 土師器 高杯	高 残 3.6	外面杯部体部ナデ、底部ケズリ。内面体～底部ナデ。内面は表面の細かな剥落が著しい。脚部上端ナデ。杯部は円盤状の底部に粘土を貼り、体部および縁を作り出している。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒と白粗～ 微粒と透明微粒少 やや硬質	底上 22cm 杯体 1/3 周、底 1/2 周 16
13 土師器 高杯	高 残 8.5	外面脚部縦方向のナデのち縦方向の密なミガキ。内面脚部上端ナデ、上半ケズリのち下半ヨコナデ。脚部上端径 4.3cm。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗粒少、白・赤・ 砂粗粒微量 やや硬質	底上 23cm 脚上半完存 18
14 土師器 高杯	高 残 8.2	脚部上半エンタシス状。外面脚部上半密なミガキ。柱状部下半にミガキの窠の当たりが残る。内面脚部上半横方向のナデ、脚部下半ヘラナデ。脚柱部下端の粘土接合痕が明瞭に残る。脚柱部上端の様子から、ソケット状に突出させた杯部底部を脚部に挿入する高杯と推定される。脚部上端径 3.3cm。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤、砂細～微粒 少 やや硬質	底上 3cm 脚柱完存 4
15 土師器 甕	口 18.2 高 残 19.9 最大 復 26.3	外面胴部上半斜位のナデのち胴部上端横方向のナデのち胴部上半～中位横方向のケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上半～中位横方向のナデのち縦方向主体のケズリ。外面口縁～胴部上半一部煤付着。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・赤粗～細粒、砂 礫～細粒少 硬質	口～胴上半 2/3 周 SD-43、44 sec D-D'、SD-44 覆土、 SD-43 No.31、C
16 土師器 甕	口 復 16.0 高 残 7.5	外面胴部上半ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ・胴部上半ヘラナデ。胴部上端紐積痕残る。外面口縁部煤付着。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 白礫～微粒少、赤粗 粒微量 硬質	口～胴上半 1/3 周 SD-43、44 セク B-B'
17 土師器 壺か甕	高 残 2.7 底 7.4	外面胴部下端ケズリのち一部縦方向のナデ、底部ケズリ。底部はやや突出する平底で、全体に浅くくぼむ。内面底部 6 本 / 1cm のハケ。	7.5YR7/6 橙 粗い 白礫～細粒と透明細粒少 やや硬質	底上 45cm 底完存 23
18 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 11.1	外面胴部上半ナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。外面口縁～胴部上半煤付着。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 砂細～微粒少、白・ 赤・砂粗粒微量 硬質	口ほぼ完存、胴上半 1/6 周
19 土師器 甕	口 復 17.2 高 残 4.7	外面胴部上端ナデのち口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ナデで、紐積痕残る。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 白・赤・砂粗粒少 硬質	底上 22cm 口～胴上端 1/4 周 14

SG5 区 SD-227 (南側区画溝) (第 271・272 図、写真図版 19・173・176・177)

[位置] SG5 区中央西寄りの 13-16・17 グリッドに位置する。

SD-101 に東側を切られ、西側は調査区外へ続く。古墳中期中葉～後葉の SD-227 を、古墳時代(中期中葉～後葉?)の可能性のある溝 SD-101 が合流するように切り、東側部分では SD-101 が SD-227 を掘り直すようになる(土層断面 C-C')。SD-227 → SD-101 → 古墳後期の SI-21 という順序で重複する。

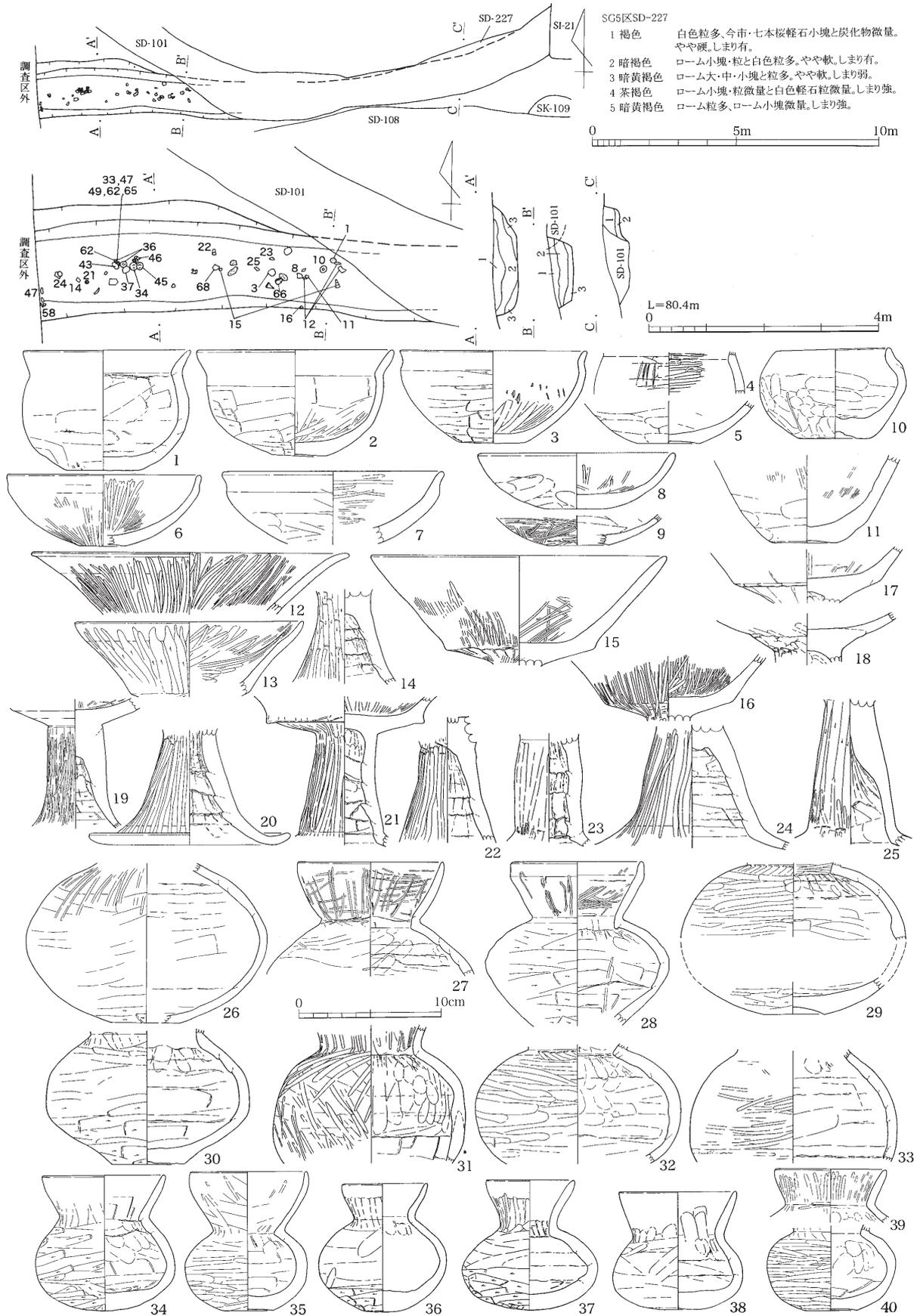
[規模と形状] 方形柵列跡 SA-151 南辺の南側に沿って伸びるので、居館の南辺を区画する溝の可能性はある。長さは確認できる部分で 16.8m 以上である。西半部は直線的で、東半部は北へ向かって少し曲がり、SD-101 に破壊された北側に SD-227 が少し残る(断面 C-C')。底面が平坦な逆台形状の断面形で、幅 1.23～1.93m、底面幅 0.95～1.18m、深さ 0.44～0.66m である。

[覆土] 主に 1～3 層で、レンズ状に自然堆積する。2 層に多量の白色粒子を含むのが特徴的で、火山灰(古墳後期初頭の Hr-FA)の可能性もある。

[遺物出土状況] SD-101 に破壊されなかった西半部の 13.5-16.5 グリッドに遺物が多い。溝底面のものから、底面より 30～40cm 浮いた遺物までみられる。「SD-101 表採 13.5-16.5 (SD-101 南)」などとして取り上げた遺物も少量あり、SD-227 出土品と接合したものは SD-227 の遺物として扱った(20・29・30・35・44・64・71)。SD-227 との接合品以外は、SD-227 の遺物と決める根拠がないので、表採品として扱った。SD-101 出土遺物にも SD-227 からの流入品を含むとも考えられるが、両遺構間での接合例はほとんどない。

[出土遺物] 壺・小形壺・高杯が主体だが杯も多い。4 は外面に刻線がある。6～8 は初期の模倣杯。7 は内面の横位ヘラミガキが特徴で、SG10 区 SI-16 の 1 に似る。小形壺は口頸部が長い 35 もあるが、短いものが多い。土師器の臚(54)は SD-227 に対応する居館北側区画溝(SG10 区 SD-43)や、SG5 区 SX-118、SG9 区西区遺構外にもある。63 は口縁部が内彎する壺。貼付口縁壺(67)は 5 区 SI-100 など、受口状口

第1節 古墳時代の居館（居宅）関連施設



第271図 権現山遺跡 SG5区 SD-227 (1) 遺構・遺物

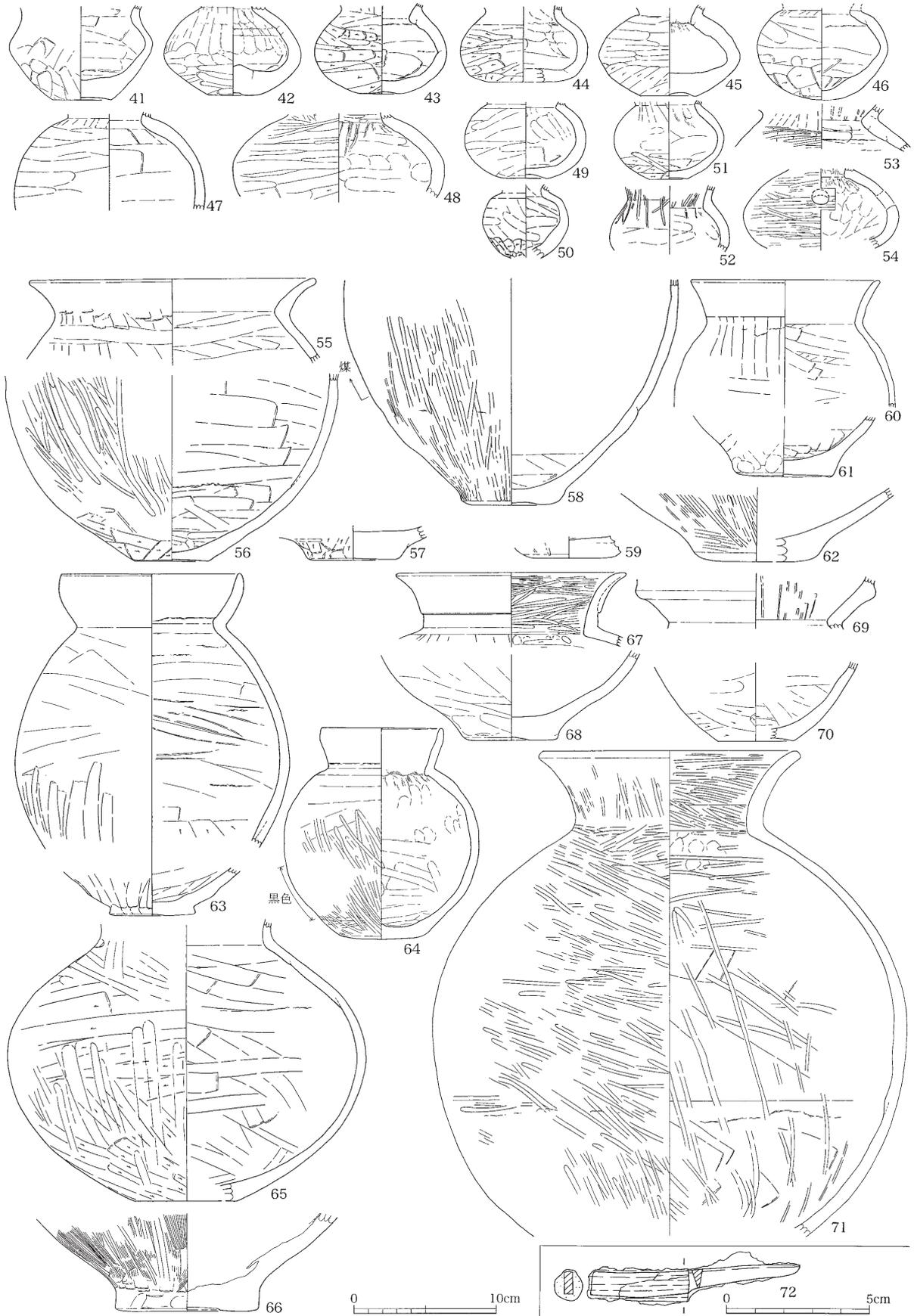
第8章 権現山遺跡 SG5 区

縁壺 (69) は 5 区 SD-43 などにある。図示以外の土師器は合計 684 片・6,486g で、内訳は杯 156 片・799g、高杯 48 片・541g、鉢 34 片・398g、小形壺 46 片・308g、壺甕類 400 片・4,440g。72 は刃部が減った鉄製品の刀子。

古墳中期後葉の遺物が主体で、中期中葉的な遺物も少量含む (1・35)。中期末葉の土器はほとんどない。浅身の椀形杯が多い SD-101 は SD-227 より少し新しい特徴を示すようにも見える。壺・小形壺・高杯が主体の SD-227 に対し、SD-101 は小形壺が少なく、椀形杯・高杯・壺・甕が同量ずつある。SI-116 と SD-227 (古墳中期中～後葉) → SD-101 (中期後葉?) → SI-20 と SI-21 (後期初頭) の順序が考えられる。

第 154 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-227 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.7 高 8.4 底 4.8	内斜口縁。軟質なため表面が磨滅している部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。底部平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。体部には紐痕が部分的に残り、体部上端に顕著。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗 ～細粒微量 やや軟質	底上 21cm 口～体 2/3 周、底完存 4、一括、SD-227 覆土
2 土師器 杯	口 復 13.8 高 7.4 底 3.7	内斜口縁。外面口縁～体部上端ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。底部平底で、わずかに浅くぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち疎らに放射状主体の丁寧なケズリ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・灰色礫～細粒と 赤・黒細粒少 硬質	口～体 1/3 周、底完存
3 土師器 杯	口 復 13.0 高 6.5 底 4.4	薄手。外面口縁部ヨコナデのち体～底部丁寧なケズリ。底部は平底だが、中央が突出するため安定はしない。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち放射状のヘラナデ。体部には、調整用の工具を突き刺したような穴や窪の当たりあり。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白微粒少、白・赤粗粒微量 やや硬質	底上 19cm 口～体 1/3 周、底完存 16
4 土師器 杯	高 残 3.0	内外面とも丁寧な調整。外面体部上半丁寧なナデで、線刻 4 本あり。長さは左から 1.4cm、1.2cm、1.7cm、1.7cm。幅は 1～1.5mm、深さ 0.5mm。ナデによって一部消えてしまっている部分があり、焼成前に刻まれたことがわかる。内面口縁部下半～体部上半ヘラナデのち横方向の密なミガキ。	7.5YR5/3 にぶい褐 緻密 赤粗粒と白細粒微量 硬質	体一部
5 土師器 杯	高 残 3.0 底 4.2	外面体～底部丁寧なナデ。底部は全体が浅くぼむ。内面体～底部ナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 やや硬質	体 1/2 周、底完存
6 土師器 杯	口 復 13.6 高 5.0 底 復 3.0	口縁部は外傾気味に直立し、外面口縁部中央がわずかにくぼむ。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち縦方向のミガキ。底部ケズリのちミガキで、全体がくぼむ。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁～底部放射状のミガキ。須恵器杯蓋模倣か。	10YR8/6 黄橙 やや緻密 赤細粒少、白・透明細粒微量 やや軟質	口～底 1/6 周
7 土師器 杯	口 復 15.4 高 残 5.1	歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体部疎らなナデで、無調整部分あり。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち口縁～体部疎らなミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 砂粗～細粒微量 やや硬質	口～体 1/5 周
8 土師器 杯	口 復 13.8 高 3.9 底 4.3	全体に成形・調整が甘く、歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのち荒いナデ。底部はナデで、平底。内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち体～底部疎らなミガキ。内面は表面の磨滅のため調整不明な部分多い。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗 ～細粒微量 やや軟質	底上 24cm 口～体 1/2 周、底完存 9、SD-229 覆土、SD- 101 Na 17
9 土師器 杯	高 残 2.2 底 4.4	精緻な作り。外面体～底部ナデのち体部ミガキ。底部は全体がくぼむ。内面体～底部ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 微量 やや硬質	体～底 1/2 周
10 土師器 鉢	口 7.7 高 6.3 底 5.1 最大 10.2	成形はやや雑であり、手捏ね風。外面体～底部ナデ。体部には工具が当たったことによる沈線 1 本あり。底部は平底で、中央が不整形にくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ、内面体～底部ナデで、底部は指頭圧痕が残るため平滑ではない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒微量 硬質	底上 25cm 完形 5
11 土師器 鉢	高 残 6.2 底 4.2	内外面とも表面が剥落しており、特に内面が顕著。外面胴部下半ナデのち一部ミガキ、底部はナデと見られ、わずかに全体がくぼむ平底。内面胴部下半～底部縦方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～微粒と白・砂 細～微粒多、白・砂粗粒少、赤 礫微量 やや硬質	底上 15cm 体下半～底完存 7
12 土師器 高杯	口 復 22.2 高 残 4.3	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部ミガキ。内面口縁～体部ヨコナデ・ナデのちミガキ。	7.5YR6/3 にぶい褐 緻密 白・赤・砂粗～細粒 少、赤・砂礫微量 軟質	底上 8～20cm 杯口～体 1/2 周 2、3、6、一括
13 土師器 高杯	口 復 15.9 高 残 5.2	外面杯部口縁部ヨコナデのち口縁～体部光沢のあるケズリ。内面杯部口縁部ヨコナデのち体部光沢のあるケズリのち口縁～体部斜め方向のミガキ。外面口縁～体部一部黒色物質(煤か)付着。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒少 やや硬質	杯口～体 1/5 周
14 土師器 高杯	高 残 6.6	外面脚部上半縦方向の丁寧なケズリのち中位以下に疎らなミガキ。内面脚部上半軽いナデで、紐痕顕著。残存部上下端とも、人為的な欠損の可能性あり。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 硬質	底上 9cm 脚上半完存 34
15 土師器 高杯	口 復 20.6 高 残 7.7	外面杯部口縁部ヨコナデ、体部 5 本 /1cm のハケのち軽い横方向のナデのち疎らな縦方向のミガキ。底部 5 本 /1cm のハケのち稜を形成するための連続する強いナデ。内面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち縦方向主体のミガキ。内外面とも表面が磨滅している部分あり。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と砂細粒 少、砂粗粒と白細粒微量 やや硬質	底上 13～16cm 口 1/6 周、杯底 2/3 周 1、20
16 土師器 高杯	高 残 4.5	外面杯部体部縦方向のケズリ・底部外周横方向のケズリ・底部中央ナデのち体～底部ミガキ。内面杯部体～底部密なミガキ。内面のミガキは、体部縦方向主体、底部は一方主体。	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 赤・白礫～細粒微量 やや硬質	底上 24cm 杯体～底 1/3 周 10
17 土師器 高杯	高 残 3.8	内外面とも表面の磨滅が著しく、調整不明な部分多い。外面杯部体～底部ナデ。内面杯部体～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と砂細粒 少、白細粒微量 やや硬質	杯体～底 3/4 周
18 土師器 高杯	高 残 3.5	外面杯部体～底部ナデ。杯部は円盤状の底部に体部以上を積み上げて作るもので、円盤状部分の外縁が継ぎ目ない段差として残る。脚部上端ミガキ。内面杯部体部ヨコナデ、底部ナデ。ミガキの可能性あるが、表面の磨滅のため不明。脚部上端ナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤粗粒と白細粒微量 やや軟質	杯体 1/3 周、底完存



第272図 権現山遺跡SG5区SD-227(2)遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

19 土師器 高杯	高 残 9.0	柱状脚。外面杯部底部ナデ、脚部上半縦方向のナデのち縦方向の細いミガキ。脚部上端は沈線状にくぼむ。内面杯部底部ケズリのち多方向のミガキ。脚部上半ヘラナデで、上端は調整荒い。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤・砂粗～細粒多、 白粗～細粒微量 硬質	SD-101 東半部の破片と接合 杯底一部、脚上半完存 SD-101 No.48
20 土師器 高杯	高 残 8.1 脚裾 14.0	外面脚部上半丁寧なナデ・下半ヨコナデのち脚部縦方向のやや疎らなミガキ。内面脚部上半は組積痕としぼり目を明瞭に残す。下半ヘラナデのちヨコナデ。組積は、下から見て時計回りに螺旋状に積み上げている。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・ 砂粗～細粒微量 やや硬質	SD-101 付近の破片と接合 脚一部欠 13.5-16.5 SD-101 南
21 土師器 高杯	高 残 10.5	杯部底部に明確な稜を作る。柱状脚。外面杯部体部下端ヘラナデのち稜を含めた部分の横方向のナデ。底部～脚部上半縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキ。内面杯部底部ケズリのち放射状の密なミガキ。脚部上半ナデ、中位ヘラナデで、組積痕顕著に残る。粘土粗は下から見て時計回りに上へ積み上げており、図の下から3段目で紐が一且切れる。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒・灰色粗～細 粒少、白・灰色礫微量 やや硬質	底上 36cm 杯底～脚上半完存 32
22 土師器 高杯	高 残 8.8	外面脚部上端ケズリ・上半丁寧なナデのち脚部上半縦方向のミガキ。内面杯部底部ケズリのち疎らなミガキ。脚部上半軽いナデで、しぼり目と組積痕が残る。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 少 硬質	底上 12cm 脚上半完存 22
23 土師器 高杯	高 残 7.9	柱状脚。外面脚部上半縦方向のナデのち下半部分的にミガキ。工具を強く当てたためか、ミガキの頭部に円形のくぼみが形成される。内面脚部上半軽いナデで、組積痕顕著。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒 少、白・砂礫微量 硬質	底上 21cm 脚柱完存 12
24 土師器 高杯	高 残 8.6	脚部上半太い。外面脚部上半丁寧なナデ、下半ヨコナデのち脚部縦方向の疎らなミガキ。内面脚部上半ケズリで、組積痕残る。下半ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 少、白・灰色礫微量 やや硬質	底上 47cm 脚上半完存 33
25 土師器 高杯	高 残 10.2	外面脚部上半丁寧な縦方向のケズリのち中位以下に疎らな縦方向のミガキ。内面脚部上半縦方向のナデで、ナデのち上方を絞って成形したらしく、上端は確認できないほど狭く尖る。下寄りには横方向のナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・透明・砂粗粒多 硬質	溝底面 脚上半完存 17、床面
26 土師器 小形壺	高 残 11.2 底 復 5.0	外面胴部上半ナデのち縦方向のミガキ、胴部下半ナデのち下端ケズリ。底部ナデで、平底。内面胴部上半ナデで、組積痕残る。胴部中位～底部ヘラナデで、胴部下半に積み上げ休止による接合面あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白粗～微粒少 やや軟質	胴 1/2 周、底一部
27 土師器 小形壺	口 復 10.2 高 残 8.0	口縁部は短く内彎する。外面口縁部縦方向のヘラナデのちヨコナデのち縦・横両方向の疎らなミガキ。胴部縦および斜め方向のヘラナデのちナデ。内面口縁部上半ヨコナデ・下半ヘラナデのち口縁部縦・横両方向の疎らなミガキ。脚部上半軽いナデで、組積痕顕著。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、砂粗 ～細粒微量 やや硬質	口～胴上半 1/3 周
28 土師器 小形壺	口 復 8.6 高 残 11.5 最大 復 12.8	外面口縁～胴部上端ヨコナデのち口縁部縦方向の細い疎らなミガキ、胴部ケズリ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち横方向の細い疎らなミガキ。胴部ヘラナデで、上端にしぼり目残る。下半には積み上げ休止による接合面あり。	5YR4/3 にぶい赤褐 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 白・砂礫微量 硬質	口 1/3 周、胴 1/4 周
29 土師器 小形壺	高 残 8.0 底 復 4.2 最大 復 15.6	外面胴～底部ケズリ状の幅広いミガキ。底部は大きくくぼむ。内面頸部ミガキ、脚部上半ナデのちヘラナデで、指頭圧痕・しぼり目残る。胴部中位～底部ヘラナデ。内面は残存部ほぼ全体が黒褐色。外面頸部径 6.4cm。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細粒少、白粗粒と 赤細粒微量 やや硬質	SD-101 付近の破片と接合 胴部上半、胴部下端～底 部 1/3 SD-101 付近表探、16.5- 13.5、SD-101 南
30 土師器 小形壺	高 残 9.5 底 5.1 最大 復 14.1	外面胴部上半～中位ナデ、胴部下半丁寧なケズリ。底部は平底だが、雑なケズリにより作出されるため、凹凸あり。内面口縁部下半ヨコナデ、胴部上半軽いナデで、組積痕明瞭に残る。胴部中位～底部ヘラナデで、底部は強く施される。頸部復元外径 7.8cm。	10R5/6 赤 やや緻密 赤粗～細粒多、白粗 ～微粒微量 やや硬質	SD-101 付近の破片と接合 胴上半～中位 1/3 周、 胴下半～底一部欠 16.5-13.5 SD-101 南
31 土師器 小形壺	高 残 9.6 胴 13.8	外面口縁部下半ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。胴部ナデのちやや幅広く疎らなミガキ。ミガキは強く施されるため、ミガキの部分は溝状にくぼむ。内面口縁部下半ナデのち縦方向の疎らなミガキ。胴部上半～中位ナデで、指頭圧痕としぼり目が残る。胴部下半はヘラナデで、積み上げ休止による接合面がある。接合面より上の部分は、下よりも白い粘土を使っているため、接合面を境に表面の色調が若干異なる。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白粗～ 微粒少 やや軟質	頸～胴 1/2 周
32 土師器 小形壺	高 残 8.4 最大 復 14.2	外面胴部上端ヨコナデ、胴部ナデのち胴部幅広いミガキ。内面頸部ヨコナデのち横方向の幅広いミガキ。胴部上半ナデで、指頭圧痕・しぼり目・組積痕顕著。胴部下半横方向のナデで、積み上げ休止による接合痕あり。外面頸部径 6.8cm。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤細～微粒少、砂粗 粒と白細粒微量 やや硬質	胴一部欠
33 土師器 小形壺	高 残 7.8	内外面とも表面が磨滅しており、調整不明な部分多い。外面胴部ナデのち横方向のミガキ。内面胴部ナデ・ヘラナデで、胴部上半に組積痕残る。胴部下半には積み上げ休止による接合痕があり、内外面ともこの部分で角度が変化する。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・ 透明細粒微量 やや軟質	底上 38cm 胴 1/3 周 31
34 土師器 小形壺	口 復 8.6 高 9.5 最大 9.7	丸い体部。外面口縁部縦方向のヘラナデのち上半主体のヨコナデ。体～底部ナデのち体部下半～底部主体に丁寧なケズリ。丸底。内面口縁部横方向のヘラナデのち上半主体のヨコナデ。体部上半ナデで、指頭圧痕と組積痕残る。体部下半～底部ヘラナデ。底部には、1.3 × 0.9cmの楕円形の押圧痕が連続する部分あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・透明・砂粗 ～微粒少、赤・砂礫微量 硬質	底上 40cm 口 1/4 周、体～底一部 欠 26
35 土師器 小形壺	口 復 8.2 底 3.3 最大 8.5	内外面とも表面の磨滅により調整不明な部分あり。外面口縁部上端ヨコナデ・口縁部ナデのち縦方向のミガキ。ミガキの疎密不明。頸部ヘラナデで、ハケ状になる部分あり。体～底部密なミガキ。底部は平底で、わずかにくぼむ。内面口縁部上半ヨコナデ・下半ナデのち口縁部縦方向のミガキ。ミガキの疎密不明。体～底部ヘラナデで、体部上端にしぼり目残る。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白礫～細粒多、赤・ 砂粗～細粒少 やや硬質	SD-101 付近の破片と接合 口 1/4 周、体上半 1/2 周、体下半～底完存 SD-101 付近表探
36 土師器 小形壺	口 復 6.0 高 9.0 底 2.5	丸い体部。外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半～体部上端ヘラナデ、体部上半～中位ナデ、体部下半～底部ケズリ。底部は丸味を持つ平底。底部は点で接地するのみだが、底部を厚く作っているため、起き上がり小法師状に正立を保つ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部はナデ・ヘラナデと見られるが、表面の剥落と完形であることから観察できない。体部上半指頭圧痕残る。外面頸部径 4.2cm。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤・白・砂粗～細粒少 やや硬質	底上 38cm 口 1/3 周、体～底完存 29、31
37 土師器 小形壺	口 復 6.2 高 9.1 最大 9.4	扁平な体部。外面口縁部上半ヨコナデのち下半ヘラナデ。体部上半ナデのち体部下半～底部ケズリ。丸底。内面口縁部下半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。体部上半～中位ナデで、組積痕残る。底部ヘラナデ。外面頸部径 4.0cm。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 灰色礫微量、白・赤・ 砂粗～細粒少 やや硬質	底上 39cm 口 1/4 周、体～底完存 28

第1節 古墳時代の居館（居宅）関連施設

38 土師器 小形壺	口 復 8.2 高 8.2 底 4.4 最大 9.0	下ぶくれな体部。外面頸部縦方向のヘラナデのち口縁部ヨコナデ・体～底部ナデ。底部は丸味を持つ平底で、中央がわずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデのち一部ナデ、体～底部ナデで、指頭圧痕と紐積痕残る。底部中央はやや高く残される。	7.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗～細粒微量 やや軟質	口1/3周、体～底一部欠
39 土師器 小形壺	口 復 7.8 高 残 3.7	口縁部内外面ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミガキは弱く施されるため、痕跡はわずか。外面胴部ナデで、ミガキの可能性あり。内面胴部ナデで、指頭圧痕がわずかに残る。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 砂細～微粒少、赤粗～細粒微量 硬質	口～胴上端1/2周
40 土師器 小形壺	高 残 6.0 底 3.8 体 復 9.0	丸く偏平な体部。外面頸部～体部上端ヘラナデ・体部下～底部ケズリのち体部ミガキ。底部平底で、全体に浅くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体部上半ナデで、指頭圧痕わずかに残る。体部下～底部ヘラナデ。外面頸部復元径 5.4cm。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白粗～細粒少、赤・砂粗～細粒微量 やや軟質	胴～底1/2周
41 土師器 小形壺	高 残 6.6 底 4.1	外面体部上半ヨコナデのち体部下～底部ヘラナデ。工具先端が荒れているためか、ハケ状に見える。底部は平底で、浅くくぼむ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、体～底部ヘラナデ。頸部外面復元径 8.2cm。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と砂粗粒微量 硬質	胴1/4周、底完存
42 土師器 小形壺	高 残 6.2 底 3.6 体 復 9.6	そろばん玉に近い体部形状。外面体部上半ヘラナデ、体部中位ナデ、下半強いナデ。底部ナデで平底だが、中央に径約1cm、深さ約2mmのくぼみあり。内面体部上半ナデで、紐積痕残る。体部下～底部ヘラナデ。底部は外周がヘラナデされることで、中央が高く残されている。また、一部に工具先端によると見られる連続した刺突・線刻がある。調整行為の一種か。外面頸部復元径 4.4cm。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤粗～細粒・砂細～微粒少 やや硬質	胴1/4周、底3/4周
43 土師器 小形壺	高 残 6.3 底 3.5 体 復 9.2	丸くやや偏平な体部。外面頸部ヘラナデのち横方向のナデのち体～底部ケズリ。底部は不整な平底で、中央の径約1.8cmの部分がかくぼむ。内面口縁部下半ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下～底部ヘラナデ。体部上半紐積痕残る。外面頸部径 5.6cm。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 砂粗粒多、砂粗粒と白・赤粗粒微量 硬質	底上42cm 頸～底完存 30
44 土師器 小形壺	高 残 5.3 底 復 4.8 体 8.8	下ぶくれな体部。外面頸部～体部上端ヨコナデ、体部ナデのち下半中心に丁寧なケズリ。底部はケズリで、平底。内面頸～底部ナデ。外面頸部径 5.2cm。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白細粒微量 やや硬質	SD-101 付近の破片と接合体上半3/4周、体下半1/2周、底1/6周 SD-101 付近表採
45 土師器 小形壺	高 残 6.3 底 4.0 体 復 9.8	小形でそろばん玉状の体部。外面体部上半なのでち下半ケズリ。底部ナデで平底だが、中央から片寄った位置に径 2.2cm、深さ 0.3cmのくぼみあり。内面口縁～底部ナデと見られるが、体～底部の詳細な観察はできない。体部上半しぼり目が顕著に残る。頸部外径 4.4cm。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・砂粗粒少 硬質	底上40cm 体～底完存 25
46 土師器 小形壺	高 残 6.3 底 9.1	体部は丸く、底部がやや突出する形状。外面体部上端ヘラナデのち体部上半～中位ナデのち体部下～底部ケズリ。底部は丸底だが、中央の径約2cmの部分は比較的平坦な面となり、底部を厚く作っていることもあってか、起き上がり小法師状に正立する。内面胴部上半ナデで、紐積痕残る。胴部下半～底部ヘラナデ。外面頸部径 5.4cm。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、赤礫と白細粒微量 やや硬質	底上39cm 体～底完存 27
47 土師器 小形壺	高 残 6.8 胴 復 13.2	被熱のためか、内外面とも表面が赤紫色に変色している。外面は表面が磨滅、内面はクレーター状に剥落している。外面胴部上半～中位ナデ。ミガキの可能性あり。内面頸部下半ヨコナデ、胴部上半～中位ヘラナデ。	7.5R5/1 赤灰 緻密 赤粗～細粒少、砂礫微量 やや硬質	底上38cm 胴上半～中位1/4周 31
48 土師器 小形壺	高 残 6.0 胴 復 14.6	外面胴部ケズリのち胴部上半～中位幅広いミガキ。内面頸部横方向のミガキ、胴部ナデで指頭圧痕としぼり目が残る。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白細粒微量 やや硬質	胴上半～中位1/2周
49 土師器 小形壺	高 残 5.3 底 3.0 体 復 8.4	体部やや偏平で丸い。外面体部上端ヨコナデ・体部下～底部ケズリのち体部ナデ。底部は全体にくぼむ。内面口縁部ナデ、体部上半ナデで、しぼり目わずかに残る。体部下～底部ヘラナデ。内外面とも赤褐色粒があるところがクレーター状に剥落する。外面頸部復元径 5.4cm。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白細粒微量 硬質	底上38cm 体1/2周、底ほぼ完存 31
50 土師器 小形壺	高 残 5.2 底 復 6.0	小形。外面体部ナデのち体部下ケズリ。内面頸部下半～体部ナデ。	7.5YR8/8 黄橙 やや緻密 砂礫と白細粒微量 やや硬質	口下半～体1/3周
51 土師器 小形壺	高 残 5.4 底 復 2.6 体 復 7.6	丸い体部。外面頸部～胴部上半ヘラナデ、胴部中位は成形時のナデのみ、体部下丁寧なケズリ。底部ケズリで、浅くくぼむ。内面頸部ヨコナデ、体部上半軽いナデ、体部下ヘラナデ。外面頸部復元径 4.5cm。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 赤・白・砂細～微粒少 硬質	胴1/3周、底1/2周
52 土師器 小形壺	高 残 4.5 底 復 8.4	外面口縁部下半～体部上端ヨコナデ・体部ナデのち口縁部下半～体部上半縦方向の疎らなミガキ。内面口縁部下半ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ、体部ナデで、しぼり目残る。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤・砂粗～細粒微量 やや硬質	口下半～胴1/4周
53 土師器 小形壺	高 残 3.3	外面頸部～胴部上半ヘラナデのち胴部上半横方向の疎らなミガキ。内面頸部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ、胴部上半ナデで、紐積痕明瞭に残る。外面頸部径 8.0cm。	5YR6/4 にぶい橙 緻密 砂細～微粒少、白細粒微量 硬質	頸～胴上半2/3周
54 土師器 甕	高 残 5.7 最大 復 10.8	胴部最大径部分よりやや上に、器壁にほぼ直交する孔あり。径 1.2cm。外面胴部ナデのち横方向のミガキ。内面頸部ナデのち縦方向のミガキ。胴部ナデで、上半にはしぼり目や指頭圧痕が残る。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白細～微粒微量 やや硬質	胴2/3周
55 土師器 甕	口 復 20.0 高 残 6.0	外面口縁～胴部上半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ・胴部上半軽いナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。外面口縁～胴部上半煤付着。外面口縁部表面の剥落著しい。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・黒・赤・砂微粒多、白礫～粗粒と赤・砂粗粒微量 硬質	口～胴上半1/5周
56 土師器 甕	高 残 13.1 底 5.0	外面胴部下半ケズリのち粗いナデのち疎らなミガキ。底部ケズリで、全体にわずかにくぼむ平底。内面胴部下半ヘラナデのち底部ナデ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、内面にわずかな粘土の継ぎ目として残る。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂細粒多、砂粗粒と白・赤細粒微量 やや硬質	胴下半1/4周、底1/3周
57 土師器 甕	高 残 2.2 底 6.4	外面胴部下端ケズリのちミガキ、底部ナデ。底部は突出する平底。内面は表面の剥落が著しく、調整不明。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色・透明細粒微量 硬質	底完存
58 土師器 甕	高 残 15.8 底 7.2 最大 復 23.2	外面胴部下半ケズリ・ナデのち密な縦方向のミガキ、底部ケズリ・ナデのち一方のミガキ。底部は突出する平底で中央のみわずかにくぼむ。底部外縁は使用のためか表面が磨滅する。内面胴部下半～底部ヘラナデ。内面は表面がクレーター状に剥落するため、調整不明な部分が多い。外面胴部中位付近煤付着。器壁は内面は平滑だが、外面胴部下半は紐積時の凹凸を残す。	2.5Y4/2 暗灰黄 やや緻密 白・透明細～微粒多、白・透明粗粒微量 やや硬質	底上19cm 胴下半1/4周、底完存 37

第8章 権現山遺跡 SG5 区

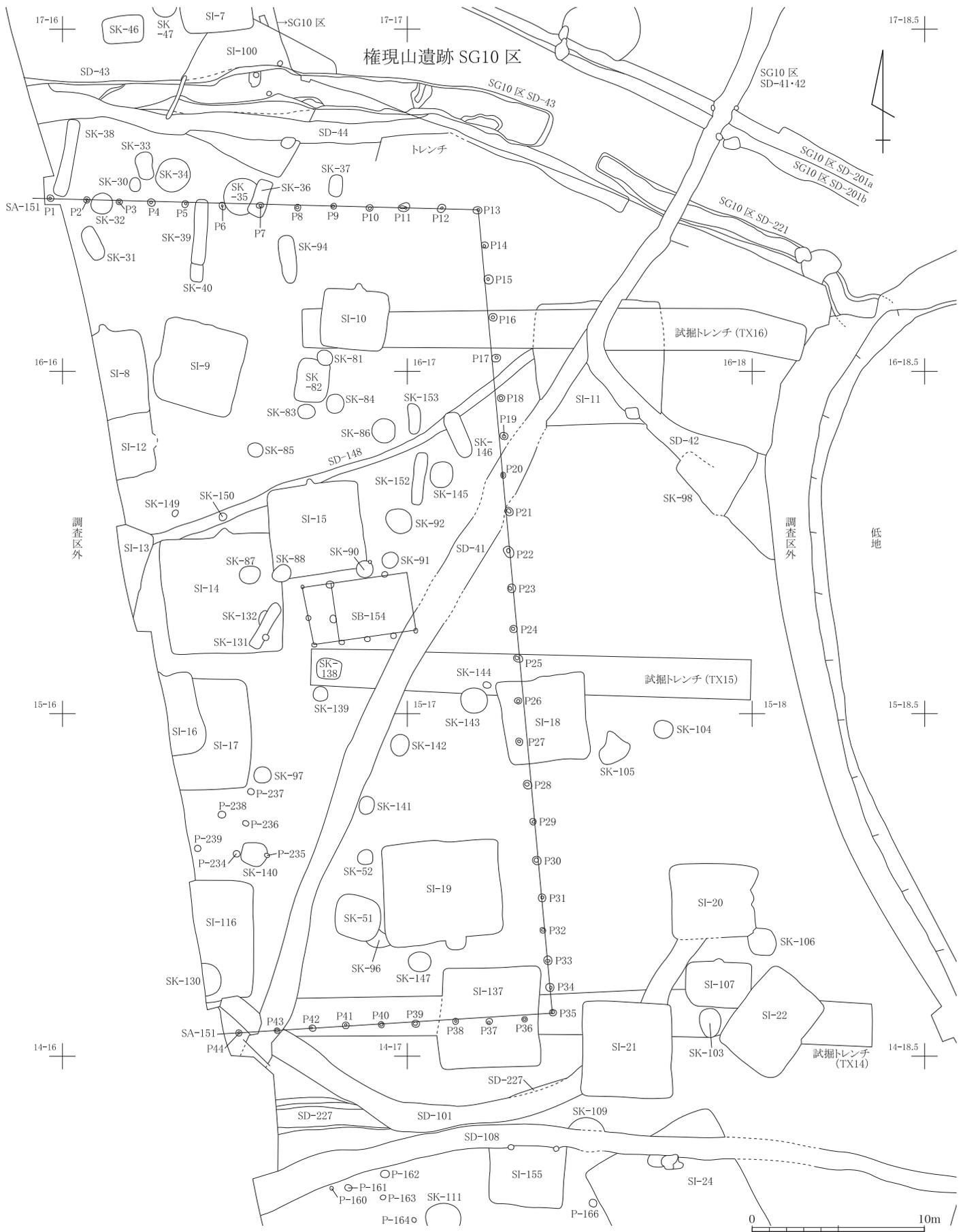
59 土師器 甃	高 残 1.7 底 6.6	外面胴部下端～底部ナデのち胴部下端わずかにミガキ。底部丸味を持つ平底。内面底部強いナデのち疎らな多方向のミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白礫 ～細粒と黒細粒微量 やや硬質	底完存
60 土師器 甃	口 復 13.2 高 残 8.9 最大 復 15.4	薄手。外面胴部上半ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデで、一部ケズリあり。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 白細～微粒少、白礫 と赤粗粒微量 硬質	口～胴上半 1/6 周
61 土師器 甃	高 残 4.2 底 6.8	整形・調整ともやや雑で、手捏ねのような作り。外面胴部下半～底部ナデ。底部は平底で、外周に小粘土塊が多数貼り付いている。内面底部強いナデのち胴部下半ヘラナデ。	2.5YR7/4 浅黄 やや緻密 赤粗～細粒と白細粒 少、白・透明粗粒微量 硬質	胴下半一部、底ほぼ完存
62 土師器 甃	高 残 5.3 底 復 8.8	外面胴部下半密なミガキ、底部丸味を持つ平底で、磨滅により調整は不明。内面胴部下半～底部丁寧なナデ。外面胴部下半は黒褐色を呈する。	7.5YR6/8 橙 やや粗い 白細～微粒多、白礫 ～粗粒少 やや硬質	底上 38cm 胴下半～底 1/4 周 31
63 土師器 壺	口 復 12.3 底 復 6.0	外面胴部丁寧なナデのち胴部下半光沢のある縦方向のナデ。底部ナデで、突出する平底。口縁部内外面ヨコナデで、内彎する。内面口縁部下端には、胴部側からの粘土のめくれがある。胴～底部ヘラナデ。胴部下半には積み上げ休止による接合痕があり、内面にわずかな段差として残る。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂細粒少、白・黒粗 ～細粒微量 硬質	口～底 1/2 周
64 土師器 壺	口 復 8.6 高 14.7 底 5.6 最大 復 13.6	小形。接合しない各部分を図上で復元したもの。外面口縁～胴部上端ヨコナデ、胴部横方向のナデのち中位～下半中心に縦方向のミガキ。底部ケズリのち疎らなミガキで、丸味を持つ平底。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデで、指頭圧痕としばり目が残る。胴部下半～底部ナデで、底部は荒く施される。胴部外面に明瞭な黒斑あり。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・砂粗粒と白・黒・ 砂微粒少、白・砂礫微量 硬質	SD-101 付近の破片と接合 口 1/6 周、胴 1/2 周、 底一部欠 SD-101 覆土、13.5-16.5 SD-101 南
65 土師器 大形壺	高 残 19.7 底 復 6.8 胴 復 25.0	外面頸部ヨコナデ、胴部中位～下半ケズリのち胴部上半縦ないし斜め方向のナデ、中位～下半縦方向の疎らなナデ。底部ケズリで平底と見られる。内面頸部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胴部上半に積み上げ休止による接合痕があり、内面に接合痕、外面には角度の変化として表れる。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 砂粗～細粒多、白礫 ～細粒と赤粗～細粒微量 硬質	底上 28cmとSD-101 頸～底 1/2 周 31
66 土師器 大形壺	高 残 6.8 底 10.0	大形。胴部下半 8 本 /1cm のハケのち軽いヘラナデのち疎らなミガキ。胴部下端～底部ナデのち底部外周ケズリ。突出する平底で、中央の径約 4.5cm の部分がくぼむ。内面は残存部全面が激しく剥離しており、調整不明。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 砂粗～細粒少 硬質	溝底面 胴下半 2/3 周、底完存 14
67 土師器 大形壺	口 復 16.0 高 残 5.2	粘土貼付による複合口縁。外面胴部上端ナデのち口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、胴部上端ナデのち一部ケズリで、指頭圧痕残る。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂粗～細粒少、白・ 赤粗～細粒微量 硬質	口 2/3 周、胴上端 1/3 周
68 土師器 大形壺	高 残 6.2 底 6.6	中形。精良な胎土で、調整も丁寧。外面胴部下半丁寧なナデ、底部ケズリのちナデ。底部は突出する平底で、中央の径約 2.5cm の部分はケズリによりくぼむ。内面胴部下半～底部はヘラナデと見られるが、表面の剥落が著しく、詳細は不明。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 粗砂粒少、砂礫と白・ 赤粗粒微量 やや硬質	底直上 胴下半～底完存 21
69 土師器 大形壺	口 復 19.0 高 残 3.7	複合口縁状または受口状になるものと見られる。外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 透明・砂微粒多 やや硬質	口～頸 1/6 周
70 土師器 壺か甃	高 残 5.5 底 復 5.2	外面胴部下半ナデのち胴部下端～底部ケズリ。底部くぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 白・透明粗～細粒少、 黒粗粒微量 やや硬質	胴下半～底 1/3 周
71 土師器 大形壺	口 復 18.2 高 残 34.0 最大 復 33.0	単口縁で、口縁端部は外向きの面となる。大形。外面口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ、胴部ナデのち斜め方向のミガキ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち横方向の密なミガキ。胴部ヘラナデのち疎らな太いミガキ。ミガキは胴部上半横方向、下半は縦方向主体。胴部下半には積み上げ休止による接合痕があり、外面はわずかな継ぎ目として、内面は部分的な継ぎ目と段差として残る。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白礫～細粒と赤粗～ 細粒と砂細粒少 硬質	SD-101 付近の破片と接合 口～胴 2/5 周 13.5-16.5 SD-101 南
72 鉄製品 刀子	長 7.3 厚 0.3 重 7.15	刃部は断面三角形で、茎部よりも幅が狭くなるので、砥ぎ減りしていると思われる。茎部末端面は茎部の主軸にやや斜交する形で終わり、断面は長方形。柄木の木目が減り、断面図を示した位置では柄木の丸味も少し認められる。刃部長 39mm、刃部幅 7.6 × 厚 2.8mm、茎部長 33mm、茎部幅 8.0 × 厚 3mm。		完形

SG5 区 SA-151 (方形柵列遺構) (第 273 ～ 277 図、写真図版 19)

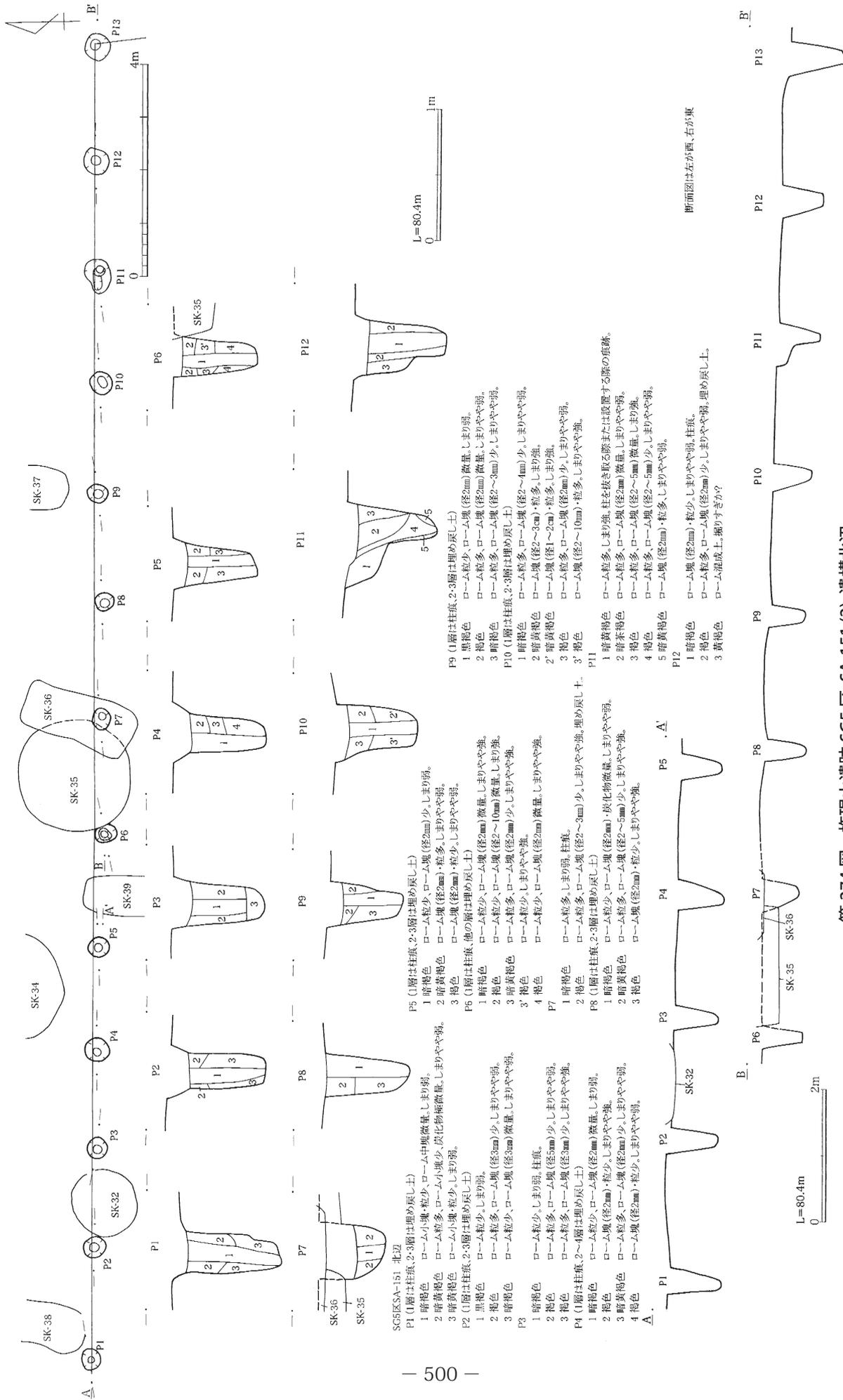
居館跡の柵列と考えられる。南北辺の一部と、東辺を調査した。

[位置] SG5 区中央西寄りの 14-16・17、15-17、16-16・17 グリッドに位置する。北辺の北側に 4m 離れて平行する SD-43 と、その東に続く SG10 区 SD-221、南辺に平行して南側 4m で確認された SD-227 の各溝が、本柵列跡と同一の居館を構成し、外側の南北を区画する溝の可能性がある。東辺中央の西 4m にある時期不明の SB-154 がこの居館に含まれるかもしれないが、SB-154 は柱痕部埋土のしまりが弱いのでそれほど古くはないとも考えられる。P-16・25・35・39 ～ 42 は確認調査時のトレンチに削られる。

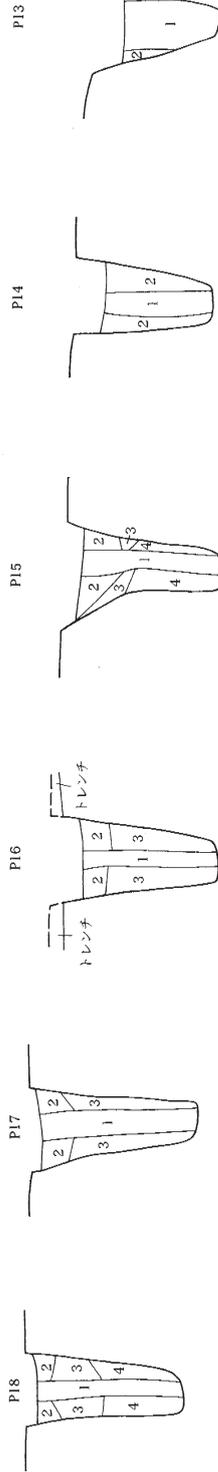
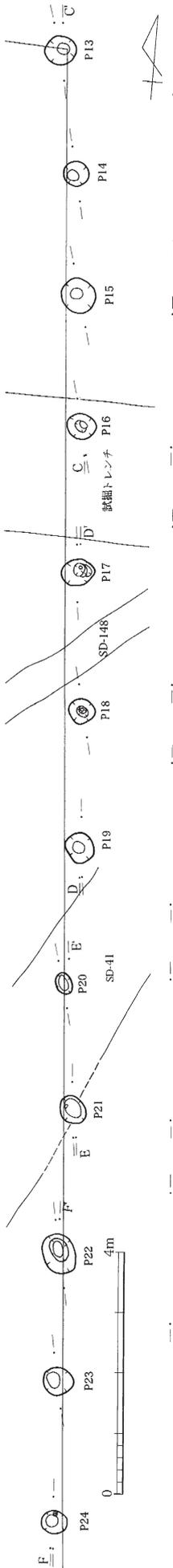
P-26・27 と P-36 ～ 38 が古墳後期の SI-18・137 に切られる。試掘トレンチに削られるので SI-137 との重複関係は不確定だが、SI-18 に切られることは確実である。北辺では P6 と P7 →古墳時代土坑 SK-35 →時期不明土坑 SK-36 の順に重複する。P-20・21・43 が古墳後期の SD-41 と重複し、P-43 が古墳時代中期 (?) の SD-101 と重複する状況は、土層断面の記録を確認できないが、各ピットがおそらくこれらの溝に切られると推定される。



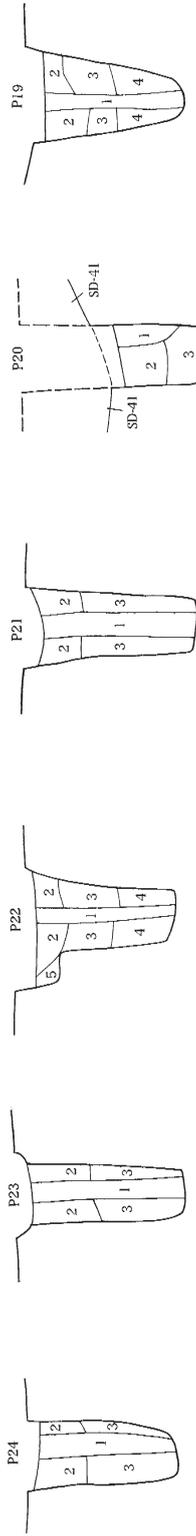
第 273 図 権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (1) 遺構全体図 (1/300)



第 274 図 権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (2) 遺構北辺



断面図は左が南、右が北



SG5区SA-151 東辺北半

- P13
 1 黒褐色 ローム粒多、ローム塊(径2mm)少、しまりやや弱。
 2 暗褐色 ローム塊(径2mm)少、しまりやや弱。
 3 暗黄褐色 ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや弱。
- P14
 1 褐色 ローム塊(径2mm)粒少、しまり強、やや黒い。
 2 暗褐色 ローム塊(径2~5mm)少、しまり強、埋め戻し土。
 3 暗褐色 ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや弱。
 4 暗褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~5mm)少、しまりやや強。
 5 暗褐色 ローム塊(径2mm)粒多、しまり強。
- P15 (1層は柱痕、2~4層は埋め戻し土)
 1 黒褐色 ローム粒少、ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや強。
 2 暗黄褐色 ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや強。
 3 暗褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~5mm)少、しまりやや強。
 4 暗褐色 ローム粒少、ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや強。

P16 (1層は柱痕、2~3層は埋め戻し土)

- 1 褐色 ローム粒少、しまり強、やや黒い。
 2 褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~3mm)少、しまりやや強。
 3 暗黄褐色 ローム塊(径2~5mm)少、しまりやや弱。
 4 暗褐色 ローム塊(径2~3mm)少、しまり強、やや黒い。
- P17 (1層は柱痕、2~3層は埋め戻し土)
 1 褐色 ローム塊(径2~5mm)粒少、しまり強。
 2 暗褐色 ローム塊(径2mm)粒少、しまり強。
 3 褐色 ローム粒多、ローム塊(径2mm)少、しまり強。
 4 暗黄褐色 ローム塊(径2mm)粒多、ローム塊(径2mm)粒多、しまり強。
 5 暗褐色 ローム塊(径2~3mm)粒多、しまり強。

P19 (1層は柱痕、2~4層は埋め戻し土)

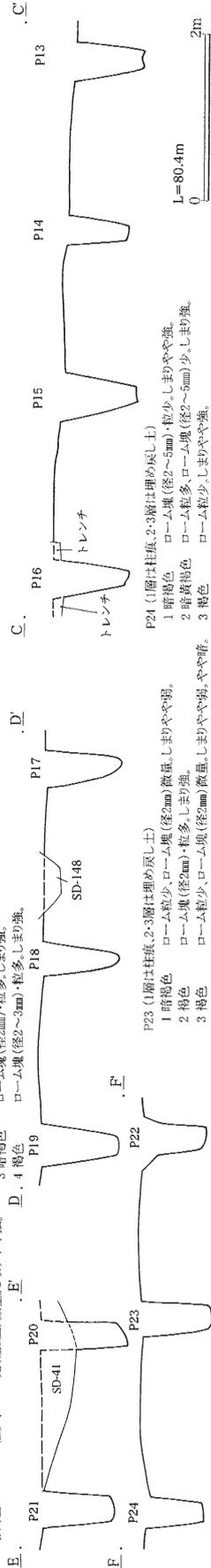
- 1 褐色 ローム粒少、しまりやや弱、やや黒い。
 2 褐色 ローム塊(径2mm)粒少、しまりやや強。
 3 暗黄褐色 ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや強。
 4 暗褐色 ローム塊(径2mm)少、しまりやや弱。
- P20
 1 暗褐色 ローム粒多、ローム塊(径5mm)粒多、しまりやや弱、柱痕。
 2 褐色 ローム塊(径2~5mm)粒多、しまりやや弱、埋め戻し土。
 3 暗黄褐色 ローム塊(径5~10mm)粒多、しまりやや弱。

P21 (1層は柱痕、2~3層は埋め戻し土)

- 1 褐色 ローム粒少、しまりやや弱、やや黒い。
 2 褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~3mm)少、しまりやや強。
 3 暗褐色 ローム粒少、ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや強。
 4 暗褐色 ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや強。
 5 暗褐色 ローム塊(径2~5mm)粒多、しまりやや弱。

P22 (1層は柱痕、2~4層は埋め戻し土)

- 1 褐色 ローム粒少、ローム塊(径2~5mm)粒多、しまりやや弱。
 2 褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~5mm)少、しまりやや強。
 3 暗黄褐色 ローム塊(径2mm)粒多、ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや強。
 4 暗褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~5mm)少、しまりやや強。
 5 暗褐色 ローム塊(径2~5mm)粒多、しまりやや弱。



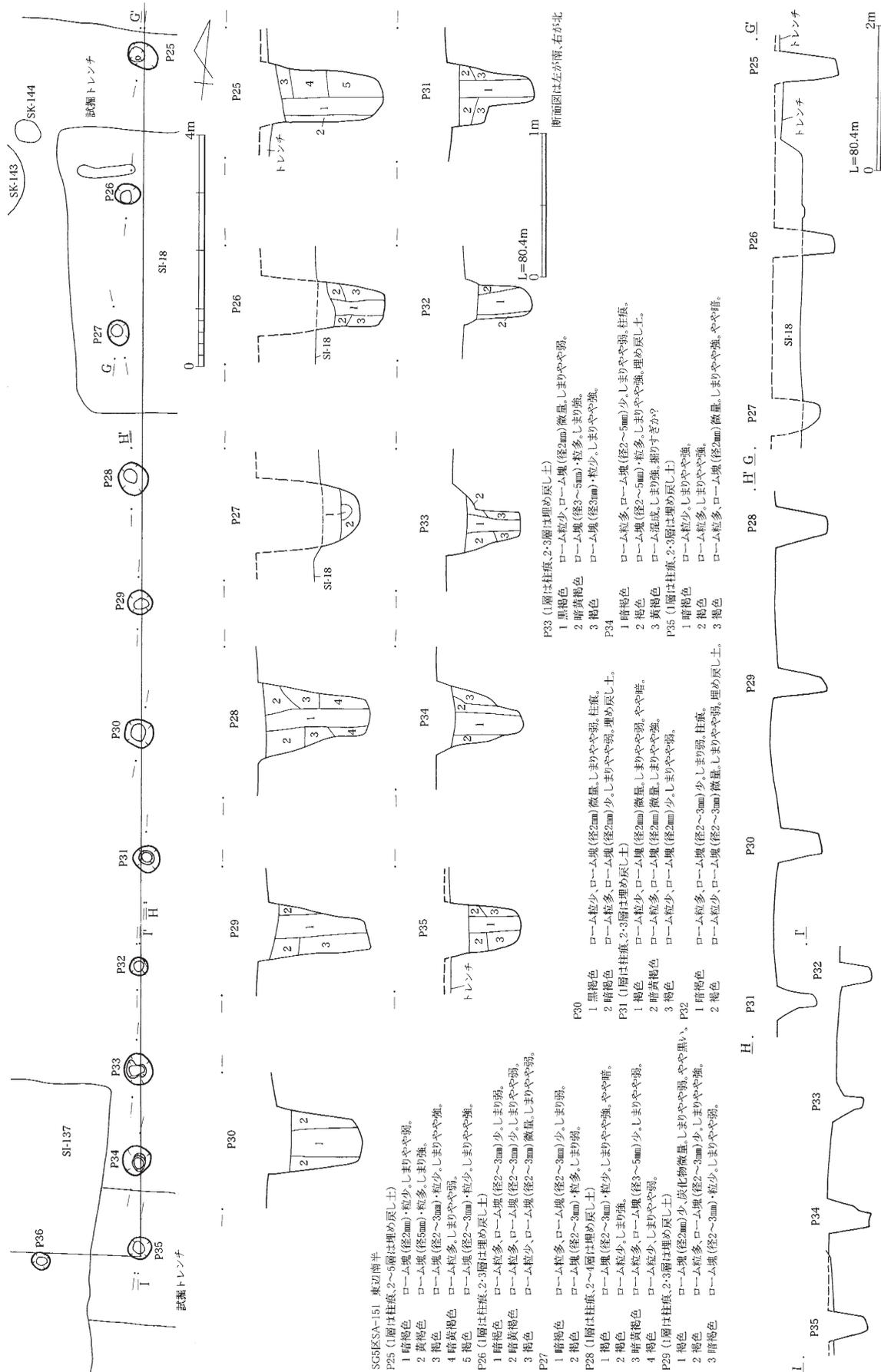
P23 (1層は柱痕、2~3層は埋め戻し土)

- 1 暗褐色 ローム粒少、ローム塊(径2mm)粒多、しまりやや弱。
 2 暗褐色 ローム塊(径2mm)粒多、しまり強。
 3 褐色 ローム粒少、ローム塊(径5mm)粒多、しまりやや強、やや暗。

P24 (1層は柱痕、2~3層は埋め戻し土)

- 1 暗褐色 ローム塊(径2~5mm)粒少、しまりやや強。
 2 暗黄褐色 ローム粒多、ローム塊(径2~5mm)少、しまり強。
 3 褐色 ローム粒少、しまりやや強。

第275図 権現山遺跡SG5区 SA-151 (3) 遺構東辺北半部



第 276 図 権現山遺跡 SG5 区 SA-151 (4) 遺構東辺南半部

SG5区SA-151 東辺南半

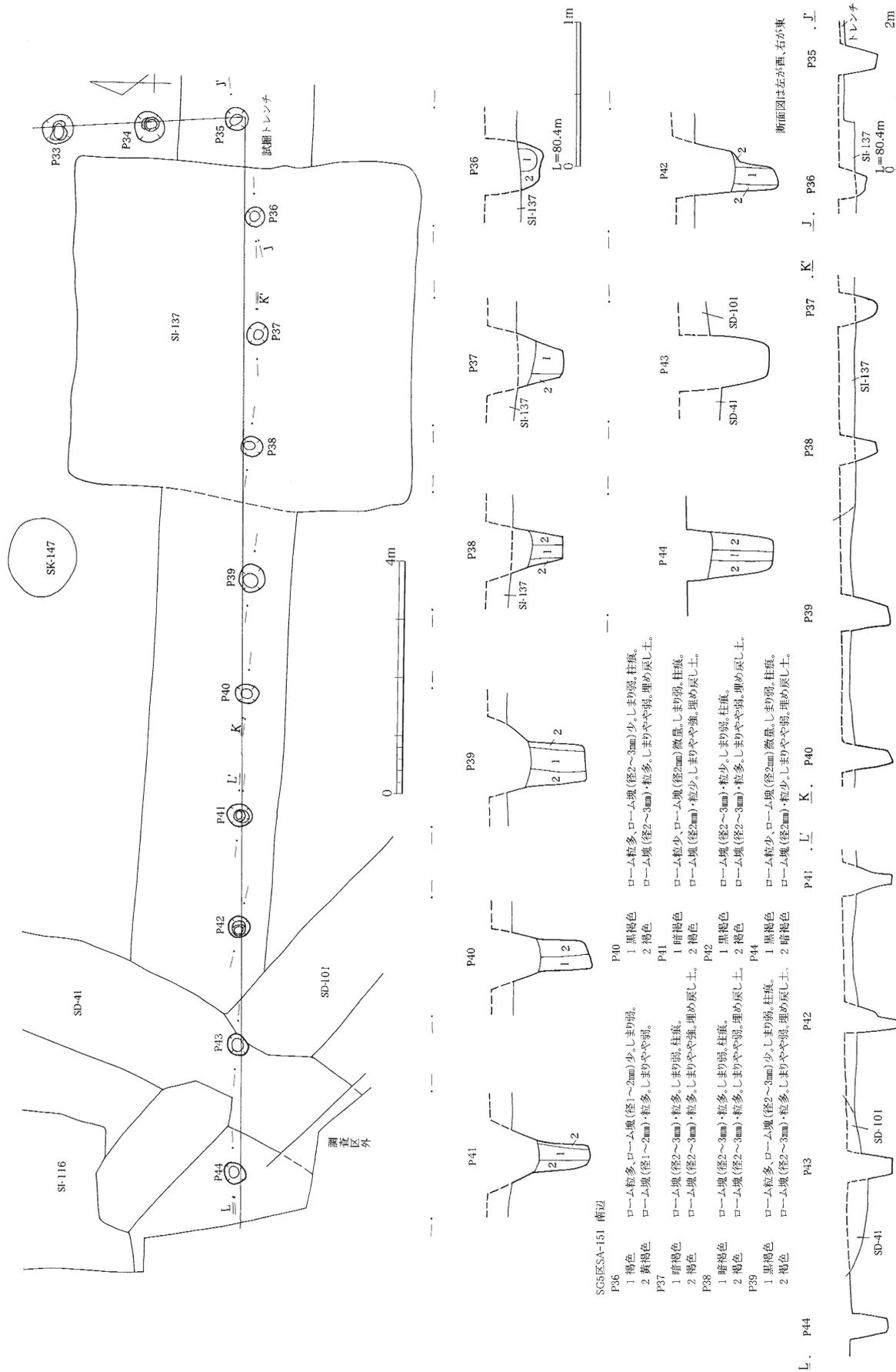
- P25 (1層は柱痕, 2~5層は埋め戻し土)
 - 1 暗褐色 ローム塊 (径2mm)・粒少, しまりやや弱。
 - 2 黄褐色 ローム塊 (径5mm)・粒多, しまり強。
 - 3 褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒少, しまりやや強。
 - 4 暗黄褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒少, しまりやや強。
 - 5 褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒少, しまりやや弱。
- P26 (1層は柱痕, 2, 3層は埋め戻し土)
 - 1 暗褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2~3mm) 少, しまり弱。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2~3mm) 少, しまりやや弱。
 - 3 褐色 ローム粒少, ローム塊 (径2~3mm) 微量, しまりやや弱。
- P27
 - 1 暗褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2~3mm) 少, しまり弱。
 - 2 褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒多, しまり強。
- P28 (1層は柱痕, 2~4層は埋め戻し土)
 - 1 褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒少, しまりやや強, やや暗。
 - 2 褐色 ローム粒少, しまり強。
 - 3 暗黄褐色 ローム粒多, ローム塊 (径3~5mm) 少, しまりやや弱。
 - 4 褐色 ローム粒少, しまりやや弱。
- P29 (1層は柱痕, 2, 3層は埋め戻し土)
 - 1 褐色 ローム塊 (径2mm) 少, 炭化物微量, しまりやや弱, やや黒い。
 - 2 褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2~3mm) 少, しまりやや強。
 - 3 暗褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒少, しまりやや弱。

- P30
 - 1 暗褐色 ローム粒少, ローム塊 (径2mm) 微量, しまりやや弱, 埋め戻し土。
 - 2 暗褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2mm) 少, しまりやや弱, 埋め戻し土。
- P31 (1層は柱痕, 2~3層は埋め戻し土)
 - 1 褐色 ローム粒少, ローム塊 (径2mm) 微量, しまりやや弱。
 - 2 暗黄褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2mm) 微量, しまりやや強。
 - 3 褐色 ローム粒少, ローム塊 (径2mm) 少, しまりやや弱。
- P32
 - 1 暗褐色 ローム塊 (径2~3mm) 少, 炭化物微量, しまりやや弱, やや黒い。
 - 2 褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2~3mm) 少, しまりやや強。
 - 3 暗褐色 ローム塊 (径2~3mm)・粒少, しまりやや弱。

- P33 (1層は柱痕, 2, 3層は埋め戻し土)
 - 1 黒褐色 ローム粒少, ローム塊 (径2mm) 微量, しまりやや弱。
 - 2 暗黄褐色 ローム塊 (径3~5mm)・粒多, しまり強。
 - 3 褐色 ローム塊 (径3mm)・粒少, しまりやや強。
- P34
 - 1 暗褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2~5mm) 少, しまりやや弱, 柱痕。
 - 2 褐色 ローム塊 (径2~5mm)・粒多, しまりやや強, 埋め戻し土。
 - 3 黄褐色 ローム混成, しまり強, 埋め戻し土。
- P35 (1層は柱痕, 2, 3層は埋め戻し土)
 - 1 暗褐色 ローム粒少, しまりやや強。
 - 2 褐色 ローム粒多, しまりやや弱。
 - 3 褐色 ローム粒多, ローム塊 (径2mm) 微量, しまりやや強, やや暗。

断面図は左が南、右が北
L=80.4m
1m

L=80.4m
0 2m



第277図 権現山遺跡SG5区SA-151(5)遺構南辺

- SG5区SA-151 南辺
- P36 1 褐色
2 黄褐色
 - P37 1 暗褐色
2 褐色
 - P38 1 暗褐色
2 褐色
 - P39 1 黒褐色
2 褐色
 - P40 1 黒褐色
2 褐色
 - P41 1 暗褐色
2 褐色
 - P42 1 黒褐色
2 褐色
 - P43 1 黒褐色
2 褐色
 - P44 1 黒褐色
2 褐色
- ローム粒多、ローム塊(径1~2mm)少、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径1~2mm)粒多、しまりやや弱、埋め戻し土。
- ローム粒多、ローム塊(径2~3mm)粒多、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや強、埋め戻し土。
- ローム粒少、ローム塊(径2mm)微量、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2mm)粒少、しまりやや弱、埋め戻し土。
- ローム塊(径2~3mm)粒多、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや弱、埋め戻し土。
- ローム粒多、ローム塊(径2~3mm)少、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや弱、埋め戻し土。
- ローム粒少、ローム塊(径2mm)微量、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2mm)粒少、しまりやや弱、埋め戻し土。
- ローム粒多、ローム塊(径2~3mm)少、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2~3mm)粒多、しまりやや弱、埋め戻し土。
- ローム粒少、ローム塊(径2mm)微量、しまり弱、柱痕。
ローム塊(径2mm)粒少、しまりやや弱、埋め戻し土。

[規模と形状] 調査した部分では東辺 22 間 (47.1m)、北辺 12 間 (24.7m)、南辺 9 間 (18.1m) である。東辺軸線は N-2° -W である。柱間は北辺が 1.81m (P2-P3 間) ~ 2.21m (P6-P7 間)、東辺が 1.45m (P34-P35 間) ~ 2.53m (P27-P28 間)、南辺は 1.71m (P35-P36 間) ~ 2.33m (P38-P39 間) で、1.90m 前後の部分が多い。径 8 ~ 14cm 程の柱痕を残すものも多く、P30 の柱痕は特に太く、径 20cm である。抜き取り穴は見られない。

[覆土] P10・15・39 でテフラ検出分析を行った結果は、柱痕や裏込から古墳前期の As-C を検出し、後期初頭の Hr-FA テフラが見られない (本章次節)。周辺に古墳前期の遺構がないので、古墳中期の柵列と考えられる。

[遺物および出土状況] 遺物はほとんど出土しなかったため、図示できるものはない。P21 に土師器壺または甕の胴部が 1 片あり、丸みがあることから長胴ではなく球胴気味の器形と考えられる。この他に、P24 で流紋岩の自然礫が 1 片出土した。

第 155 表 権現山遺跡 SG5 区 SA-151 柱穴の規模

番号	径	深さ	番号	径	深さ	番号	径	深さ	番号	径	深さ
P1	42 × 36	80	P12	52 × 45	69	P23	49 × 44	89	P34	53 × 49	59
P2	44 × 38	76	P13	51 × 47	82	P24	43 × 37	80	P35	39 × 38	53
P3	40 × 37	69	P14	41 × 38	74	P25	56 × 43	86	P36	34 × 32	40
P4	47 × 45	70	P15	57 × 52	92	P26	42 × 34	87	P37	39 × 37	53
P5	39 × 38	64	P16	50 × 44	91	P27	42 × 36	71	P38	36 × 33	53
P6	40 × 30	64	P17	55 × 45	90	P28	56 × 50	78	P39	47 × 43	67
P7	40 × 33	54	P18	41 × 40	92	P29	43 × 41	77	P40	41 × 33	69
P8	36 × 34	63	P19	51 × 45	92	P30	51 × 47	64	P41	43 × 38	69
P9	37 × 33	57	P20	35 × 27	104	P31	45 × 44	59	P42	37 × 35	73
P10	44 × 40	61	P21	50 × 38	92	P32	32 × 31	47	P43	40 × 31	63
P11	66 × 47	68	P22	71 × 50	85	P33	53 × 47	51	P44	33 × 34	59

(単位は cm)

第 2 節 古墳時代遺構とテフラとの関係

8.2.1 テフラ分析の視点と考古学的評価

SG5 区で確認した古墳時代の居館と考えられる方形柵列遺構 SA-151 の年代を、テフラとの関係から絞り込むことが、この分析の第 1 の目的である。次に、その周辺にある古墳時代溝・建物跡で確認されている白色粒子と古墳時代テフラとの対応関係を確定することが第 2 の目的である。古墳時代の遺構としては、古墳時代居館の北側区画溝である可能性を持つ SD-43 と、SD-43 に先行する古墳中期の建物跡 SI-100 と、SD-43 を切る古墳後期の溝 SD-44 を選択した。この他に選択した SI-116 は古墳中期の建物跡で、調査区西壁の土層断面から、古墳時代の土坑 SK-130 および古墳時代の可能性がある溝 SD-101 との関係を検討することができた。

結果として、古墳時代の居館に係わる方形柵列 SA-151 が古墳前期の As-C 以後で、古墳後期初頭の Hr-FA 以前であることが示された。また、居館北側区画溝の可能性のある SD-43 などについては、古墳前期の As-C → SI-100 と SD-43 → 古墳後期初頭の Hr-FA → SD-44 という順序が考えられた。これらの結果は、SA-151 が古墳後期の建物に切られているという考古学的所見や、SI-100 および SD-43 の出土遺物とよく整合している。方形柵列 SA-151 と北側区画溝 SD-43 を伴う居館が古墳中期の遺構である可能性が高いといえる。

SI-116 の堆積土層と SD-101 との関係においては、考古学的所見とテフラ検出状況の間で矛盾が生じている。SD-101 は古墳中期の SK-130 と SI-116 を切り、古墳後期の SI-20・21 に切られる。土層および遺構の前後関係は、SI-116 の中層 → SK-130 → SI-116 の上層 → SI-116 の埋土上部を覆う B 層 → SD-101 である。この B 層において、12 世紀初頭 (1108 年) に降下した As-B テフラが検出された。SD-101 と B 層の前後関係が確実で、またテフラの混入がなければ、SD-101 が 12 世紀以降の溝になる可能性が、火山灰年代学の立場から示されたことになる。この所見は、古墳後期の SI-20・21 が SD-101 を切るという考古学的所見

と矛盾する点に問題がある。古墳時代の竪穴建物を12世紀以降の溝が切っている状況を2棟の竪穴建物の堆積層で同時に誤認する可能性は低いことが考古学の立場からは言えるので、現地所見を尊重してSD-101を古墳時代の溝として報告している。ただし、古墳後期のSI-20・21をSD-101が切ると解釈する(SI-20・21の断面図中にSD-101を読み取る)ことも可能かもしれない。また、SI-116の調査区西壁土層断面において、SD-101が古墳時代の遺構としてはかなり上位のレベルから掘り込まれていることが図示されている点にも、不自然さが感じられる。SD-101の遺物は大半が古墳時代中期であるが、内面漆仕上げで白色気味の胎土の奈良時代杯1片、古代の常総型甕破片、中世以後の常滑産甕1片も混入している。したがって、古墳時代の溝に12世紀以後の遺構が重複していたと考える余地も残る。将来、SG5区の西側でSD-101が調査される機会があれば、この問題が検証されるであろう。

古環境研究所に委託して実施したテフラ検出分析および屈折率測定の結果を以下に掲載する。

8.2.2 栃木県、権現山遺跡 SG5 区の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

栃木県域完新世に形成された火山灰土中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な遺構が検出された権現山遺跡 SG5 区においても、遺構覆土のテフラ検出分析と屈折率測定を行い、示標テフラとの層位関係から遺構の年代に関する資料を収集することになった。

2. 土層の層序

(1) 116号住居

116号住居の覆土は、下位より黄褐色土ブロック混じり暗褐色土(層厚3cm)、暗褐色土(層厚9cm)、黒褐色土(層厚12cm)、若干色調の明るい黒褐色土(層厚21cm)、暗褐色土(層厚15cm)、黒褐色土(層厚12cm)、黒褐色表土(層厚15cm)からなる(第278図1)。

(2) 100号住居Fライン

100号住居の覆土は、下位より黄灰色土ブロック混じり黒褐色土(層厚9cm, 12層)、黒褐色土(層厚24cm, 11層)、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土(層厚4cm)、白色粗粒火山灰混じり灰色細粒火山灰層(層厚1cm)、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土(層厚2cm, 以上5層)からなる(第278図2)。

(3) SD-43 Fライン

SD-43の覆土は、下位より黒褐色土(層厚5cm)、黄灰色土ブロック混じり暗褐色土(層厚13cm)、黄色土粒子混じり黒褐色土(層厚17cm)、黒褐色土(層厚15cm)、灰色細粒火山灰層ブロック混じり黒褐色土(層厚12cm)からなる(第278図3)。

(4) SD-44 Fライン

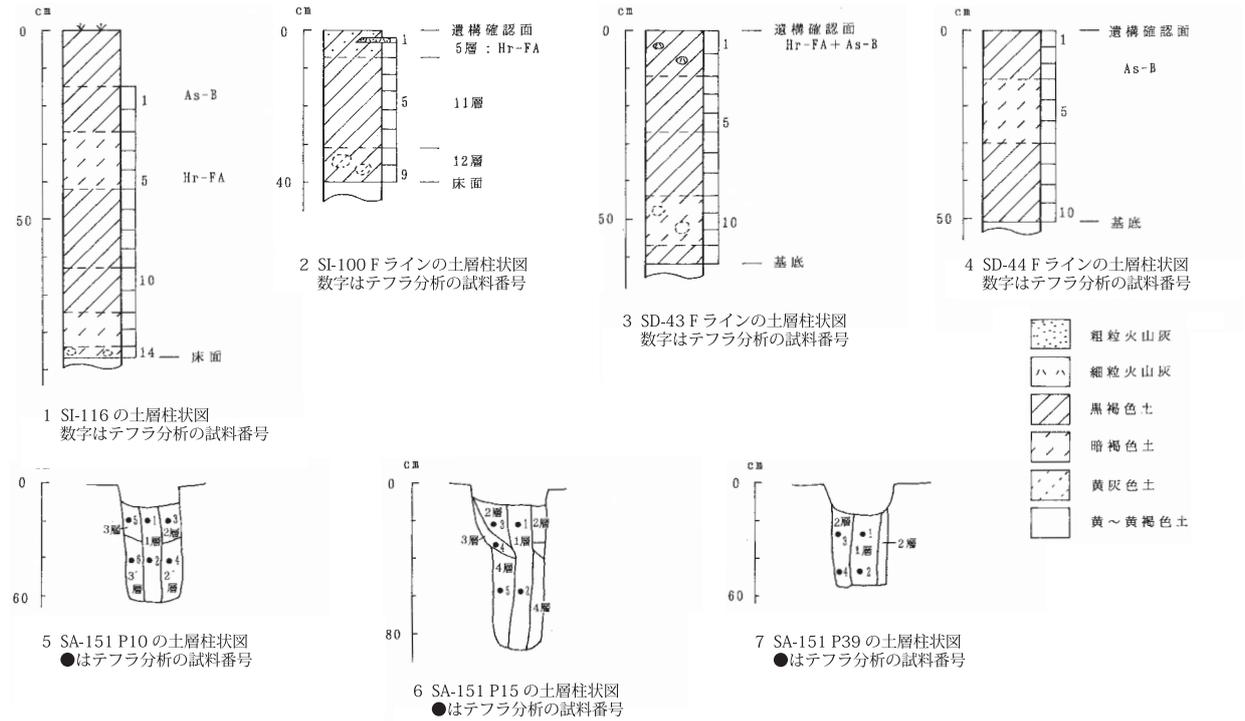
SD-44の覆土は、下位より黒褐色土(層厚21cm)、暗褐色土(層厚17cm)、黒褐色土(層厚13cm)からなる(第278図4)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

上述4地点のほか、SA-151P10(第278図5)、SA-151P15(第278図6)、SA-151P39(第278図7)から採取された合計40点の試料を対象にテフラ検出分析を行った。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 278 図 権現山遺跡 SG5 区 竪穴建物跡と居館関連遺構の土層柱状図・断面図とテフラ分析試料

- 1) 試料 10g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80 ° C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 156・157 表に示す。分析を行った結果、3 種類の軽石が検出された。もっとも下位にある軽石は、スポンジ状に比較的良好に発泡した灰白色軽石（最大径 2.0mm）で、班晶に斜方輝石と単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 4 世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石（As-C, 新井, 1979）に由来すると考えられる。その上位にある軽石は、あまり発泡のよくない白色軽石（最大径 3.0mm）で、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から 6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）または 6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）に由来すると考えられる。最上位の軽石は、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径 1.1mm）で、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石については、その特徴から 1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ（As-B, 新井, 1979）に由来すると考えられる。

116 号住居址では、試料番号 14 から 3 にかけて、As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 5 以上の試料に、Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が比較的多く含まれている。さらに試料番号 1 には、As-B に由来する軽石も比較的多く認められた。100 号住居址 F ラインでは、試料番号 9 から 3 にかけて As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 1 には、とくに Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が多く含まれている。

SD-43 F ラインでは、試料番号 12 から 5 にかけて、As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 3 および 1 に Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が含まれている。さらにこれらの試料には、As-B に由来する軽石も多く含まれている。SD-44 F ラインでは、試料番号 9 から 5 にかけて As-C に由来する軽石が認

第 156 表 権現山遺跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果 (1)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
116号	1	++	淡褐>白	1.1,1.3
住居址	3	++	白>灰白	1.2,1.3
	5	++	白>灰白	1.8,1.2
	7	++	灰白	1.2
	9	++	灰白	1.3
	11	++	灰白	1.5
	13	+	灰白	1.1
	14	+	灰白	1.1
100号	1	+++	白	3.0
住居址	3	++	灰白>白	1.1,1.0
	5	++	灰白	1.2
Fライン	7	++	灰白	1.2
	9	++	灰白	1.3
	11	++	灰白	1.2
SD-43	1	+++	淡褐>白	1.2,1.2
Fライン	3	++	淡褐>白	1.2,1.1
	5	++	灰白	1.1,1.0
	7	++	灰白	1.4
	9	++	灰白	1.3
	11	++	灰白	1.2
	12	++	灰白	1.4
	SD-44	1	+++	淡褐>白
Fライン	3	++	淡褐>白	1.1,2.0
	5	++	灰白>白	1.2,1.4
	7	++	灰白>白	1.6,1.3
	9	++	灰白, 白	1.3,1.3

++++:とくに多い, ++++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない. 最大径の単位は mm.

第 157 表 権現山遺跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果 (2)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SA-151 P10	1層上部	++	灰白	1.1
	1層下部	++	灰白	1.3
	2層	+	灰白	1.2
	2'層	++	灰白	2.0
	3層	+	灰白	1.2
	3'層	+	灰白	1.1
SA-151 P15 (柵列)	1層上部	++	灰白	1.1
	1層下部	++	灰白	1.2
	2層	++	灰白	1.2
	3層	++	灰白	1.2
SA-151 P39	4層	++	灰白	1.3
	1層上部	+	灰白	1.1
	1層下部	+	灰白	1.2
	2層上部	+	灰白	1.1
	2層下部	+	灰白	1.2

++++:とくに多い, ++++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない. 最大径の単位は mm.

第 158 表 権現山遺跡 SG5 区における屈折率測定結果

地点	ライン	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	屈折率
100号	F	1	1.501-1.503	ho>opx(cpx)	opx(γ) :1.708-1.711
住居址					ho (n ₂) :1.671-1.677

opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石.

重鉱物の ○ は量の少ないことを示す.

屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による.

められた。また、試料番号9以上のいずれの試料からも、Hr-FA または Hr-FP に由来する軽石が検出された。さらに試料番号3および1には、As-B に由来する軽石が比較的多く認められた。

SA-151 の P10 の覆土については、いずれの土層からも As-C に由来する軽石が検出された。また柵列の一部と考えられている SA-151 の P15 の覆土についても、いずれの土層からも As-C に由来する軽石が検出された。さらに SA-151 の P39 の覆土についても、いずれの土層からも As-C に由来する軽石が検出された。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

含まれる軽石の特徴から、Hr-FA または Hr-FP の一次堆積層と考えられた 100 号住居址 F ライン 5 層中のテフラ (試料番号 1) について、示標テフラとの同定精度を向上させるために屈折率測定を行った。測定は、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972) による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を第 158 表に示す。試料番号 1 に含まれる火山ガラス (n) の屈折率は、1.501-1.503 である。また、この試料には重鉱物として角閃石や斜方輝石が含まれており、ほかに単斜輝石もわずかに認められる。斜方輝石 (γ) と角閃石 (n₂) は、各々 1.708-1.711 と 1.671-1.677 である。本遺跡の位置やテフラの分布を考慮すると、このテフラは Hr-FA の可能性の方がより大きいと思われる。

5. 考察—遺構の年代について

116 号住居址では、最下位の試料から上位で As-C に由来する軽石が認められた。また、試料番号 5 付近に Hr-FA の降灰層準のある可能性が考えられた。したがって、その年代は As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と考えられる。

100 号住居址も、最下位の試料番号 9 から As-C に由来する軽石が検出され、5 層中に Hr-FA と思われるテフラ層が認められた。したがって、この住居址の年代も As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と考えられる。

SD-43 では、最下位の土層中より As-C に由来する軽石が認められた。また試料番号 3 付近に Hr-FA と As-B の降灰層準があると考えられた。したがって、この SD-43 の年代は、As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と考えられる。また SD-44 では、最下位の土層中より As-C と Hr-FA に由来する軽石が認められた。このことか

ら、SD-44 については、Hr-FA 降灰後の可能性も考えられる。

SA-151 の P10、P15、P39 のいずれの遺構についても、覆土から As-C に由来する軽石のみが認められた。したがって、これらの遺構の年代については、As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と考えられる。

6. まとめ

権現山遺跡 SG5 区において、テフラ検出分析と屈折率測定を行った。その結果、遺構の覆土から、浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭)、浅間 B テフラ (As-B) に由来する可能性が高いテフラ粒子を検出することができた。そして、分析の対象となった遺構のほとんどの年代は、As-C 降灰後で Hr-FA 降灰前と推定された。ただし SD-44 のみ、ほかの遺構よりも新しい可能性が指摘された。

文献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.

第 3 節 古墳時代の竪穴建物跡

SG10 区では古墳時代の竪穴建物跡を 37 棟調査した。この集計値は、建て替えのある SI-29a と SI-29b を 2 棟の建物として数えている。また、SG5 区と SG10 区の境界にある建物 2 棟 (SG5 区 SI-4 と SI-100) を 37 棟の中に含んでいる。

SG5 区 SI-1 (第 279 図、写真図版 20)

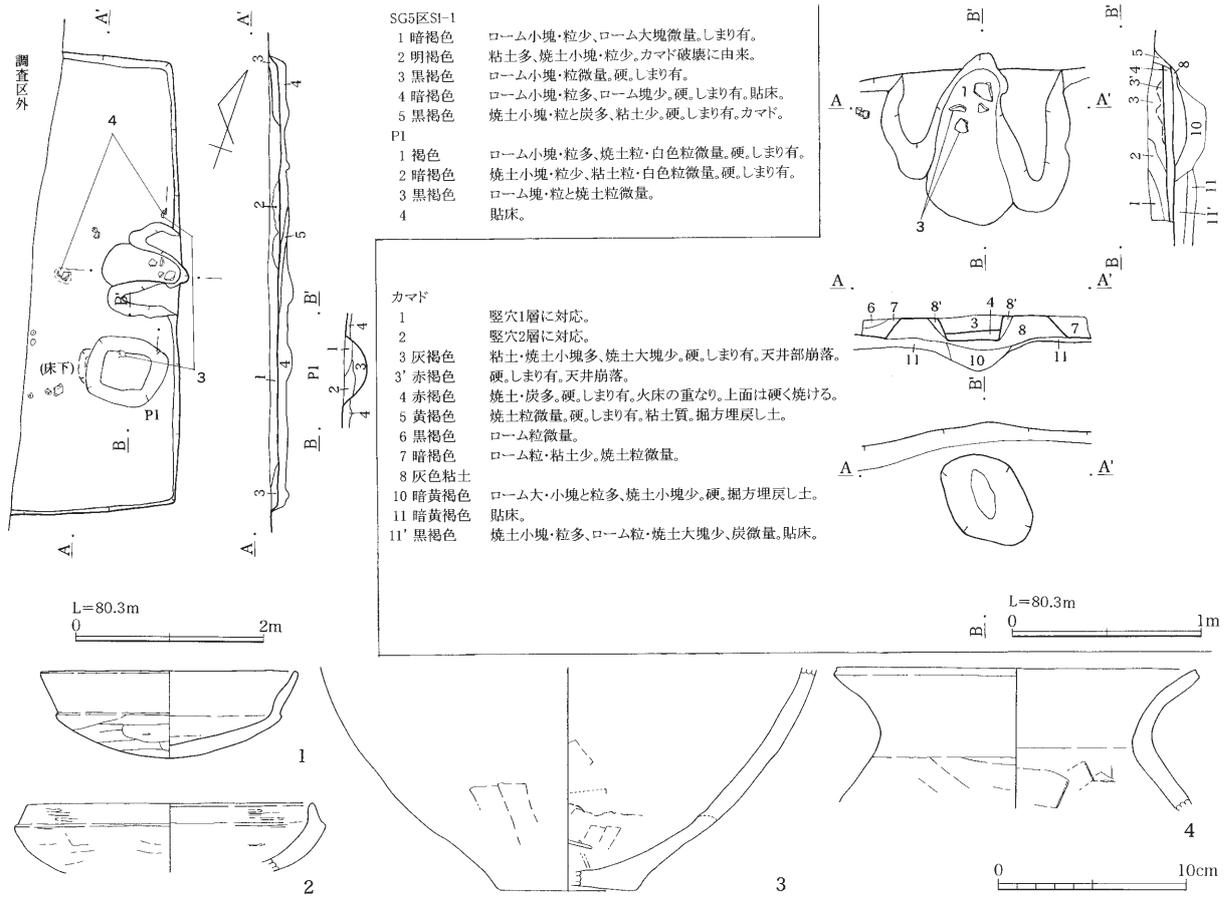
[位置] SG5 区北部、19-15 グリッド。古墳後期の建物は東に SI-2、南に SI-3 がある。東壁から 1.5m ほどだけを調査し、大半は調査区外。重複する遺構はない。

[規模と形状] 方形と予想され、南北の中軸線は N-71° -W である。東西長は最大残存の南壁で 1.75m、南北長 4.85m。残存壁高は 6～9cm である。床面はほぼ平坦で、全体に締まっている。ローム粒・塊の多い暗褐色土で貼床する。掘方は床面から深さ 5～14cm で、底面に細かな凹凸が著しい。カマド部の下方と、貯蔵穴 P1 の西側で、竪穴掘形に浅い凹みが認められた。柱穴は調査区内からは確認されていない。カマド南側に隣接して検出された貯蔵穴は 82 × 75cm の略方形で、床面からの深さ 24cm、底面は鍋底状となる。覆土は 3 層に分層される。1・2 層は掘方とほぼ同じ厚さで、ローム粒・塊が 3 層より多く、硬くしまることから、建物廃絶時には閉口していた可能性もある。

[カマド] 東壁際中央やや南寄りにある。両袖幅 97cm、煙道先端から袖先端まで 90cm。袖部は灰色粘土の 8 層で構築し、内壁は被熱で赤変する。火床面付近は、床面より約 15cm 不整楕円形に掘ったのちローム塊が多い 10 層で、さらに袖部から連続して灰色粘土を火床面の下層にも 10cm ほどの厚さで整地層として敷き、火床面とする。火床面上には 6～8cm の厚さで焼土と炭化物の多い赤褐色土が水平に堆積し、上面がカチカチに硬化していることから新期火床面に用いた可能性がある。天井部粘土が崩れたと考えられる 3 層が堆積する。煙道は北壁を約 15cm 「U」字状に掘り、煙道奥壁部を 5 層で埋め戻している。

[遺物および出土状況] 遺物はわずかで、カマドとその西側に見られる。口縁部外面まで磨く身模倣杯 (2) は後期中頃以前に多い。図示した杯 2 点と甕 1 点のほかは、ごくわずかな破片しかない。図示以外の土師器 61 点・564g の内訳は杯 7 片・24g、壺甕類 43 片・456g、甌 11 片・84g。須恵器・石・礫は出土しなかった。

第3節 古墳時代の竪穴建物跡



第279図 権現山遺跡 SG5 区 SI-1 遺構・遺物

第159表 権現山遺跡 SG5 区 SI-1 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.65	外面口縁部、内面口縁～体部丁寧なヨコナデ。内面底部はナデで、くぼむ。外面体部はケズリで、口縁部直下に無調整部分あり。内外面とも強く被熱しており、表面がクレター状に剥落する。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤微粒微量 硬質	カマド内床直上 1cm 口 1/3 周、体～底 1/2 周 1、2、K
2 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 3.6 最大 復 16.4	胎土、表面とも黒褐色。口縁部内外面はヨコナデのち横方向のヘラミガキ。体部外面はヘラナデと見られるが、こまかく剥落しているため不明確。体部内面はヘラナデのち円周方向のミガキ。	10YR3/1 黒褐 やや粗い 黒粗～細粒やや多、 白細粒と砂微粒少、透明微粒微 量 やや硬質	口～体 1/4 周 K、中央上 K
3 土師器 甗	高 残 11.8 底 復 7.4	外面胴部下半縦方向のヘラナデ、胴部下端は横方向のヘラナデ、底部ヘラケズリのちヘラナデ、ややくぼむ。外面はクレター状の剥落が著しく、調整不明瞭。一部に灰白色粘土が付着する。内面胴部下半～底部ヘラナデ。底部付近には、ヘラの端部が当たってできたと見られるヘラミガキ状の調整がわずかに見られる。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒粗～細粒やや多、 白細粒少、灰色礫微量 やや軟質	カマド内床直上 2片、北 東壁際床直上、貯蔵穴 P1 内 胴下半一部 3、4、13、14、K
4 土師器 甗	口 復 18.9 高 残 7.4	外面口縁部ヨコナデのち、胴部ナデ。口縁部には、わずかな凹線がある。内面口縁部ヨコナデのち、胴部ヘラナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白・黒粗粒少、白・ 黄褐色・灰色礫微量 やや硬質	中央部床直上と北東壁際 床直上が接合 口～胴上半 1/4 周 10、13

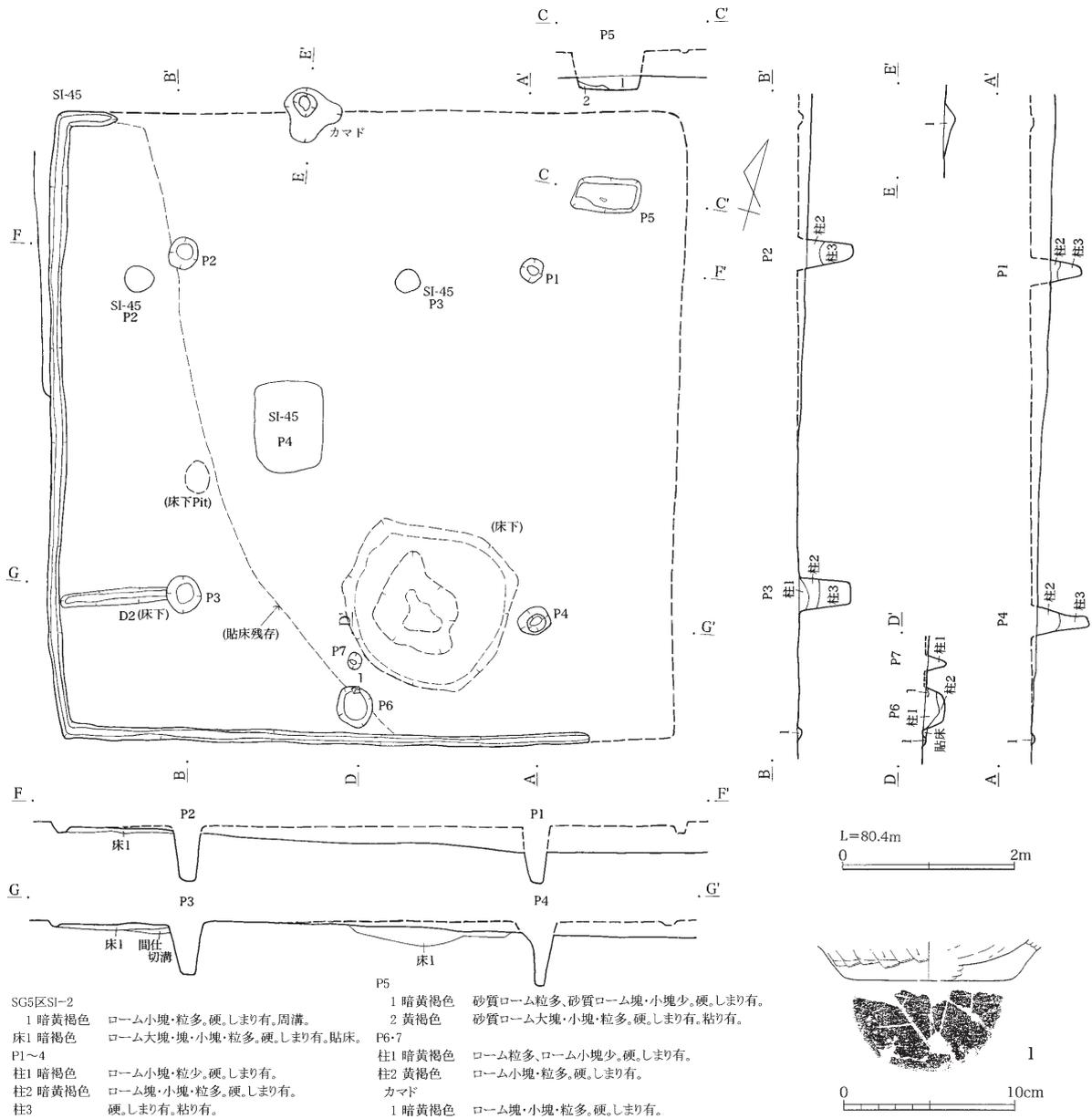
SG5 区 SI-2 (第280図、写真図版20・21)

[位置] SG5 区北部の 19-15・16 グリッド。西に古墳後期の SI-1・3 があり、東側は SG10 区の前古墳時代遺構群がある。北半で古墳中期の SI-45 を切ると思われるが、土層断面では確認できなかった。

[規模と形状] 中央より東の部分は床面まで削平されて消滅している。ほぼ方形と思われる。中軸線は西壁から推定して N-16°-W、推定規模は東西 7.44 × 南北 7.54m。確認面が低かったためか壁や床面は残っていない。残存する西壁際から推定すると、外区で掘方から 6～10cm の厚さでローム塊・粒の多い暗褐色土の貼床 1 層で埋め戻し、硬く締まる。南西部しか明らかでないが、掘方は内区より外区が 5～10cm 深い。中央南寄り、188 × 182cm のほぼ円形で、掘方底面から最深 24cm の土坑状の掘方を確認した。

主柱穴 4 本は、P1 は径 27 × 25 × 深さ 35cm (推定床面から 58cm)、P2 は 36 × 35 × 深さ 55cm (推定床面から 63cm)、P3 は 41 × 39 × 深さ 59cm、P4 は 37 × 31 × 深さ 61cm (推定床面から 66cm)。柱間は P1-P2 間が 4.02m、P3-P4 間が 4.06m、P1-P4 間が 4.07m、P2-P3 間が 3.98m でほぼ同一であり、主柱穴を方形に配置する。南壁際中央にある P6 は入口ピットの可能性があり径 48 × 41cm、深さ 21cm (推定床面から 24cm) である。また、南壁に直交して P6 の北 20cm にある P7 も規模は小さいが入口関連ピットと見られ、径 19 × 17cm、深さ 22cm (推定床面から 25cm) である。残存部の壁際に周溝 D1 があり、本来は全周していたと推定される。貼床下の掘方底で 1 本確認した間仕切溝 D2 は P3 に付随して西壁に接し、断面「U」字状で長さ 120cm、幅 15 ~ 19cm、残存する深さ 6cm。貯蔵穴 P5 は東西軸の長方形・平底で、壁が外傾する。かなり削平されているが、確認面で 75 × 38 × 深さ 15cm (推定床面から深さ 44cm)。P5 の 1・2 層に砂質ローム塊・粒が目立つ。

[カマド] カマド付近は竪穴とともに削平され、カマド掘方の下部を反映する 66 × 62cm の不整形の凹みだけが残されていた。



第280図 権現山遺跡 SG5 区 SI-2 遺構・遺物

[覆土] 最も残りの良い西側でも、確認面がほぼ床面であるため覆土は不明。

[出土遺物] 遺物のごくわずかで、図示以外の土師器 37 片・182g の内訳は杯 16 片・64g、高杯 5 片・24g、壺甕類 16 片・94g。杯破片は半球状のみで漆仕上げをし、須恵器杯身模倣の破片はない。棒状脚の高杯片がある。古墳後期でも古い時期かもしれない。

第 160 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-2 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	高 残 2.3 底 復 9.0	平底。外面胴部下端は縦方向のヘラケズリ。底面には木葉痕があり、被熱のためか赤変している。内面胴部下端～底部はヘラナデと見られるが、表面が磨滅しているため不明確。	2.5YR6/6 橙 粗い 白・黒・赤粗粒多、白・黒・赤礫少 軟質	P6 付近 底 1/2 周 1

SG5 区 SI-3 (第 281・282 図、写真図版 21)

[位置] SG5 区北部の 18-15 グリッドにあり、西側約 1/3 は調査区外となる。東に後期の SI-4、南に中期の SI-5 がある。重複する遺構はない。

[規模と形状] ほぼ方形と推定され、南北方向の中軸線は N-9° -W である。南北長 6.91m、東西長は確認できる部分で 4.96m 以上。壁は外傾し、残存高 5 ～ 18cm。床面はほぼ平坦だが、東及び南側外区が中央より 2 ～ 5cm ほど低く、全体が締まる。掘方は床面から深さ 6 ～ 16cm で底面に小さな凹凸がある。ローム粒・塊を少量含む暗黄褐色土の 3 層で全体を貼床する。

主柱穴と推定される P1 と P2 を東側で確認した。西側調査区外に 2 本推定され、4 本主柱であろう。P1 は径 74 × 68 × 深さ 83cm、P2 は径 69 × 63 × 深さ 84cm、柱間は 4.00m。床面での掘方は径 65 ～ 70cm と大きい、下方の柱根部は径 20 ～ 30cm である。

南壁際中央、壁から 30cm 離れた P5 と、その 10cm 北にある P4 が入口ピットと思われる。P4 は径 51 × 46 × 深さ 41cm、P5 が径 50 × 42 × 深さ 37cm である。南壁西側以外で確認した壁溝 D1 は断面 U 字状で幅 14 ～ 22cm、床から深さ 5 ～ 10cm。南側では長 130 × 幅 18 ～ 20 × 深さ 6cm の壁溝が壁から 5cm ほど離れる。

北東隅にある貯蔵穴 P3 は東西軸の長方形で、95 × 84 × 床面から深さ 38cm。開口部は蓋をするために 8 ～ 20cm 幅で 2 ～ 5cm の浅い段があり、底面は略方形のほぼ平坦面で、壁は直線的に外傾する。貯蔵穴の覆土 1 層は微量の炭・焼土粒を含み、2・3 層にローム塊・粒が多い。

[覆土] 1 層は微量の白色粒子 (テフラ?)、2 層はローム塊を少量含み、いずれも硬くしまる。3 層は焼土・粘土粒の多いカマド崩落土である。

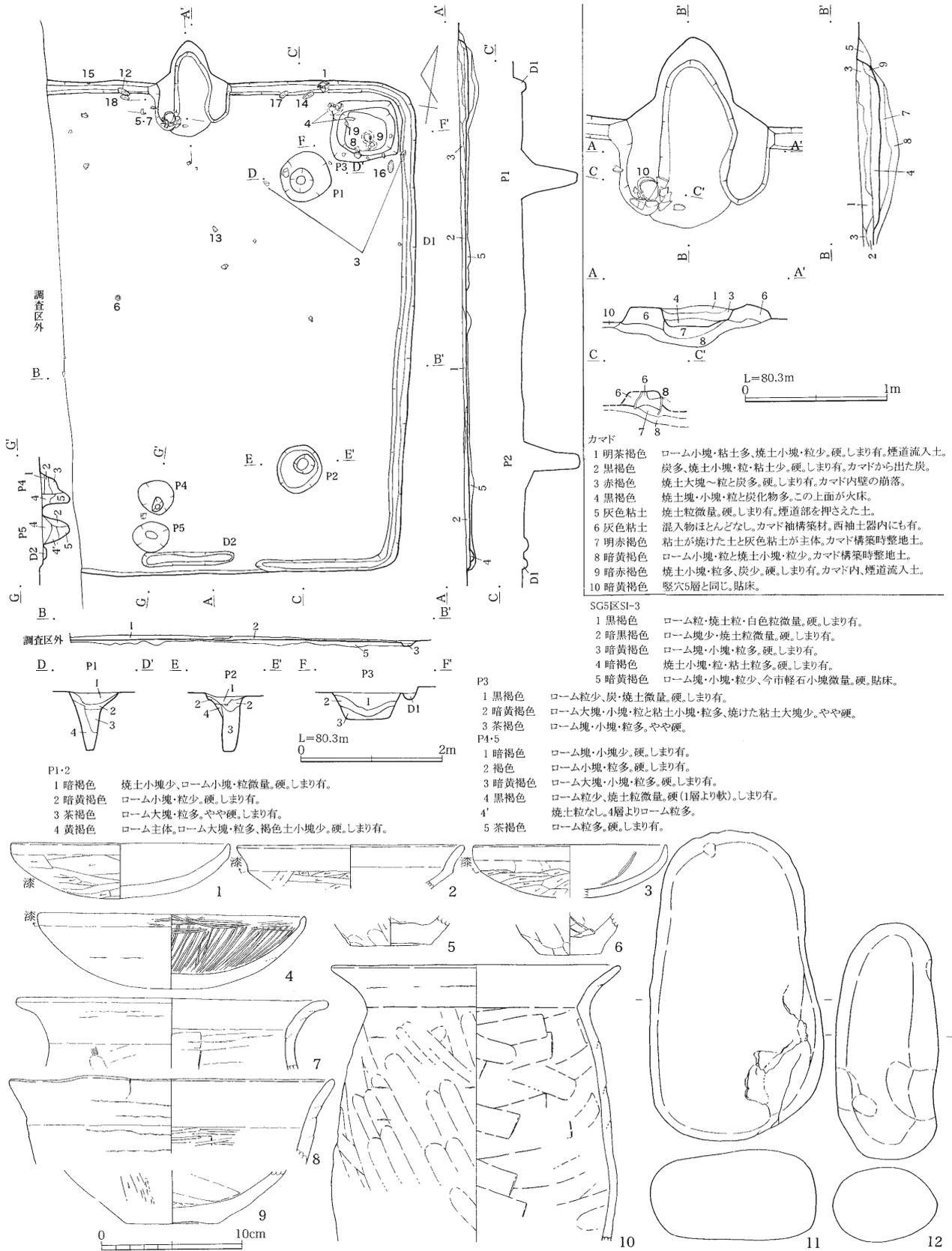
[カマド] 北壁際中央やや東寄りにある。両袖幅 105cm、煙道先端から焚口部掘り込みまで 135cm。掘方を埋め戻した 8 層上に灰色粘土の 6 層で袖を構築する。西袖先端に土師器甕 (10) を倒立している。燃烧部は床面より若干窪み、8 層の上に灰色粘土を敷く。火床はほぼ平坦で、被熱して焼土化が著しい。煙道は北壁より 80cm ほど U 字状に掘り、周囲を灰色粘土の 5 層で補強している。粘土が多い 1 層は煙道側からの崩落流入土、3 層が焼土主体の天井・内壁崩落土と思われる。炭化物の多い 4 層が煙道と焚口から流入し、この上面を火床に使ったと推定できる。

[遺物および出土状況] 遺物はカマドと貯蔵穴の周辺に多い。遺物量は比較的あり、杯・甕・編物石が多く、高杯・壺・小形土器が混じる。1 ～ 4 は後期後葉の漆仕上げ杯。9 は厚さ 1.7cm 位の厚い壺底部。図示以外の土師器と土製品合計 144 点・1,570g の内訳は杯 48 片・401g、高杯 10 点・115g、壺甕類 82 片・1,020g、甌 2 片・28g、焼粘土塊 2 点・6g。大形壺甕類底部 1 片、半球状杯 3 片、口縁が内傾する杯 1 片を含む。

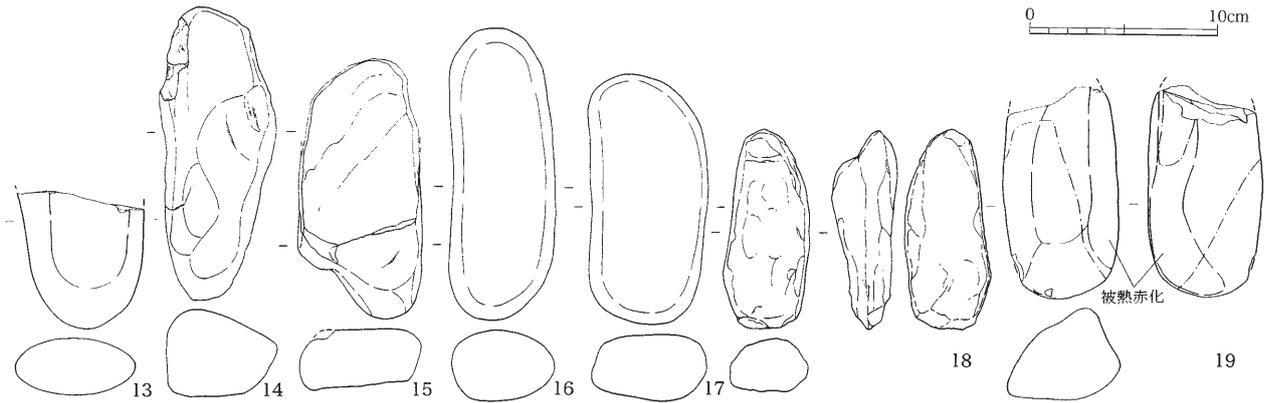
第 161 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-3 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.4 高 3.9	外面体～底部ヘラケズリ。内面底部ナデ。口縁部内外面および内面体部コナデ。内面全体漆仕上げ。	10YR6/2 やや緻密 灰黄褐 赤粗粒と白細粒と黒 微粒微量 やや軟質	北東壁溝底上 4cm 口～体 1/2 周、底完存 18

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 281 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-3 (1) 遺構・遺物



第 282 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-3 (2) 遺物

2 土師器 杯	口 復 16.0 高 残 3.1	外面体部ヘラケズリ。口縁部内外面、体部内面ヨコナデ。外面口縁部および内面口縁～体部漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 細砂粒微量 やや硬質	口縁部破片 E
3 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 3.7	外面体～底部ナデのちヘラケズリ(光沢あり)。口縁部内外面および内面体～底部ヨコナデ。内面にヘラ描き1本あり。外面口縁部～体部上半、内面全面漆仕上げ。	5YR6/8 橙 やや緻密 黒細粒と細砂粒少、 白粗粒微量 硬質	北東壁際床土10cmと北東部床土7cmが接合 口～底1/2周 33、43
4 土師器 杯	口 復 18.8 高 残 5.2	外面体～底部ヘラナデと見られるが、磨滅のため不明確。口縁部内外面と体部内面ヨコナデのち体部一部ナデのち内面放射状のヘラミガキ。口縁部内外面は横方向のヘラミガキ。内面全体と外面口縁部漆仕上げ。	2.5Y7/3 浅黄 緻密 白細粒多、白礫微量 やや硬質	貯蔵穴P3付近床土1cmとP3底土12cmが接合体～底完存 20、22、貯蔵穴
5 土師器 小形土器	高 残 2.0 底 残 5.5	外面体部荒いナデのち一部ヘラケズリ。底部は荒いヘラケズリで、ややくぼむ。内面体～底部荒いナデ。	5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗粒と白・黒・赤 微粒多 硬質	中央部床土2cm 体一部、底完存 4
6 土師器 小形土器	高 残 2.0 底 残 4.3	外面体～底部ナデ。外面の調整はわずかで、粘土の継ぎ目が残る部分も多く、表面は平滑ではない。内面体～底部ナデのちヘラケズリ。外面同様のナデが内面にも施される。ケズリも雑でヘラ痕は明瞭。3.5mmほどの厚さで削られる部分もある。	10YR6/2 灰黄褐 やや緻密 白微粒少、赤礫と 白・赤・透明細粒微量 やや硬質	中央部床土1cm 体下半～底完存 37
7 土師器 甕	口 復 22.0 高 残 4.9	口縁部内・外面ヨコナデ。外面胴部上端はナデだが、ごく一部にナデに先行する10本/1cmのハケが見られる。内面胴部上端はヘラナデ。口縁部内・外面に、灰白色粘土と煤が付着する。	2.5Y5/1 黄灰 やや粗い 白・透明細砂粒多、 赤・黒礫～粗粒少 やや軟質	北西部床土2cm 口1/5周 4
8 土師器 甌	口 復 22.9 高 残 6.1	土器片全体が、被熱により赤変している。外面胴部上端ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。外面は口縁～胴部上端に粘土の紐積痕が残る。口縁部にヒビが入っている部分はやや歪んでおり、整作時に変形してしまった部分を強制的に修正した結果、焼成時にヒビを生じさせてしまったものと見られる。胴部上端内面はヘラナデのち横方向のヘラミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒と白・黒・赤微粒微量 やや軟質	P3底土17cm 口1/5周 26
9 土師器 壺	高 残 3.7 底 残 6.8	外面は被熱により著しく赤変し、表面のほとんどが剥落している。外面胴部は縦方向のケズリのち縦方向のミガキ。底部は剥落のため調整不明、わずかにくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 白・黒細粒多、砂礫微量 硬質	貯蔵穴P3底土7cmとP3付近床土1cm 胴下半～底完存 20、23
10 土師器 甕	口 20.4 高 残 19.5	外面胴上半は一部縦方向のヘラケズリのち全体に斜め方向のナデ。粘土の継ぎ目はほぼ消えているが、削っていないため表面には紐積みの様子を示す円周方向の凹凸が残る。口縁部内外面はヨコナデ、内面胴部上半はヘラナデ。内面は、外面とは異なり、平滑に仕上げられる。内・外面とも、部分的に灰白色粘土が付着する。口縁部の一部は、被熱のためか赤変し、表面がクレター状に剥落する。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白粗～細粒多、白礫 と赤粗粒微量 やや硬質	カマド西袖底土8cm、逆 てで出土 胴上半完存 1
11 礫	長 20.0 幅 12.2 厚 6.4	扁平な直方体状の礫。河原石。一部に黒色物質付着。部分的に被熱している可能性あり。重量2797.3g。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや粗い 礫岩	P3内 完形 P3
12 石器 編物石	長 16.7 幅 7.3 厚 5.3	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量1038.3g。	N6/ 灰 やや粗い 安山岩	北壁際床土1cm 完形 7
13 石器 編物石	長 残 7.4 幅 残 6.8 厚 3.0	薄い棒状の礫と見られる。河原石。左上部に、わずかに被熱のため赤変している部分がある。残存重量189.7g。	5Y6/2 灰オリーブ やや緻密 流紋岩	中央部床直上 約1/2周残存 12
14 石器 編物石	長 15.5 幅 6.1 厚 5.5	厚い棒状の礫。河原石。側面に剥離あり。剥離のための打撃は1回のみと見られる。重量594.5g。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや粗い 礫岩	北壁際床直上 完形 17
15 石器 編物石	長 残 13.7 幅 6.1 厚 3.1	薄い直方体状の礫。河原石。上半の大部分が節理面から欠損する。残存重量358.1g。	N5/ 灰 緻密 砂岩	北壁際床土8cm 一部欠 42
16 石器 編物石	長 15.4 幅 5.3 厚 3.8	河原石。加工の痕跡なし。重量556.3g。	5Y5/2 灰オリーブ やや緻密 安山岩	北東部床直上 完形 32
17 石器 編物石	長 13.3 幅 6.2 厚 3.5	薄い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量502.9g。	10YR5/6 黄褐 緻密 流紋岩	北壁際床土2cm 完形 16
18 石器 編物石	長 10.3 幅 4.6 厚 2.8	厚い棒状の礫。河原石。加工した痕跡なし。上下両端がわずかつ欠損しているように見えるが、人為的なものではないと推定する。重量193.8g。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 ホルンフェルス	北壁際床直上 ほぼ完形 8
19 石器 編物石	長 残 10.7 幅 6.0 厚 4.7	厚い棒状の礫。河原石。残存する部分の2/3ほどが被熱により赤変している。残存重量457.2g。	5Y5/1 灰 やや緻密 流紋岩	貯蔵穴P3底土11cm 一部欠 21

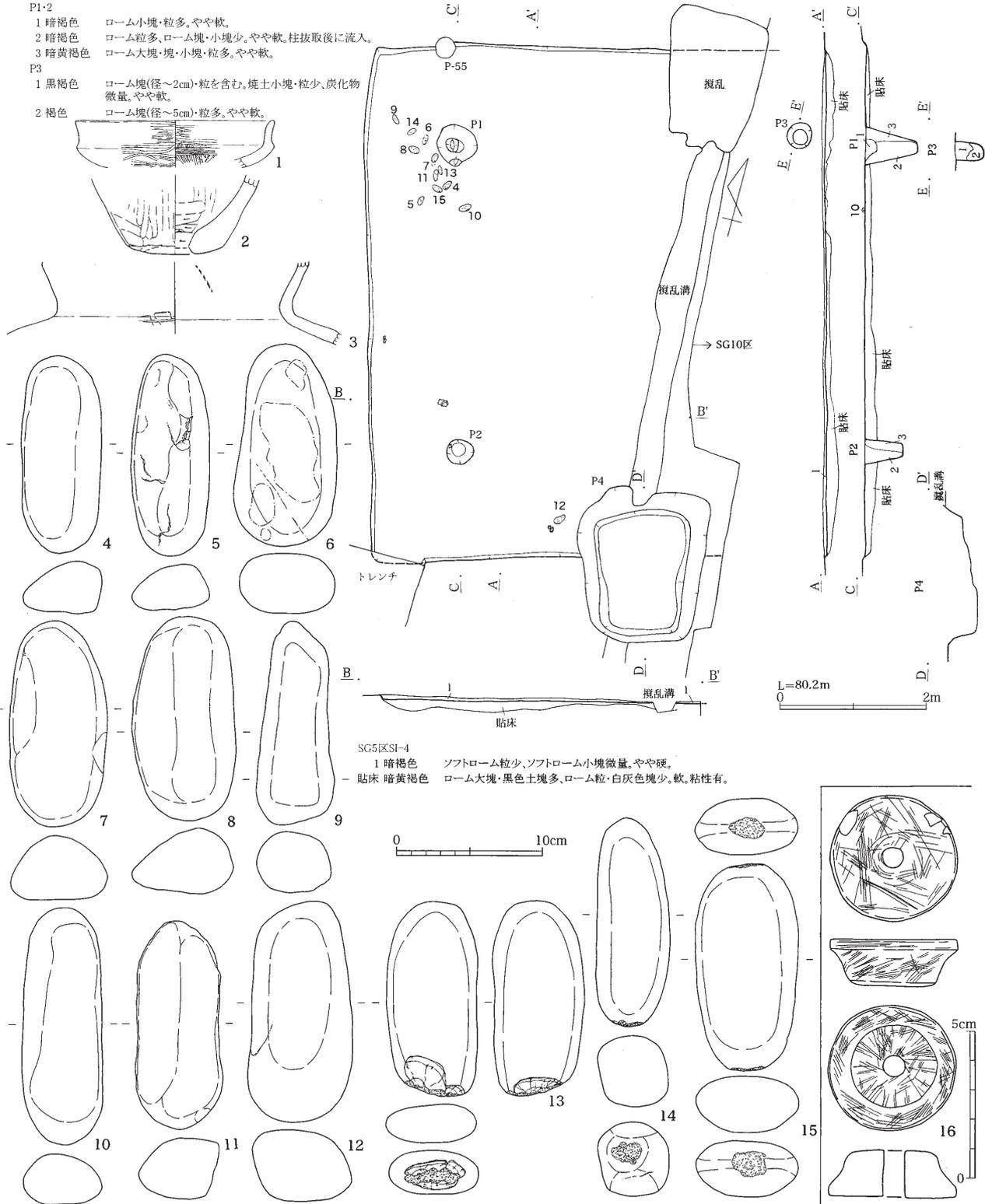
第8章 権現山遺跡 SG5 区

P1-2

- 1 暗褐色 ローム小塊・粒多。やや軟。
- 2 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少。やや軟。柱抜取後に流入。
- 3 暗黄褐色 ローム大塊・塊・小塊・粒多。やや軟。

P3

- 1 黒褐色 ローム塊(径~2cm)・粒を含む。焼土小塊・粒少、炭化物微量。やや軟。
- 2 褐色 ローム塊(径~5cm)・粒多。やや軟。



SG5区SI-4

- 1 暗褐色 ソフトローム粒少、ソフトローム小塊微量。やや硬。
- 貼床 暗黄褐色 ローム大塊・黒色土塊多、ローム粒・白灰色塊少。軟、粘性有。

第 283 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-4 遺構・遺物

SG5 区 SI-4 (第 283 図、写真図版 22)

[位置] SG5 区北部の 18-16 グリッドにあり、東側 1/3 は SG10 区に入る。古墳後期の建物は北に SI-2、西に SI-3、南に SI-6 がある。建物中央を南北方向の長方形攪乱坑と溝に切られる。また、東側の SG10 区では SI-4 東半部壁は確認されていない。明確でないが、古墳中期の SG10 区 SI-18 →後期の SG5 区 SI-4 →後

期末のSG10区SI-21という重複関係が想定される。北辺が重複する時期不明のSG5区P-55との新旧関係は不明。

〔規模と形状〕 ほぼ方形と推定され、南北の中軸線はN-14°-W。南北長7.05m、支柱穴から東西壁までの距離を約1.2mと仮定した場合の東西推定長は7.1m。東西残存長は5.09m。残存壁高は3～7cm。床はほぼ平坦で、硬化部はないが全体に締まる。ロームと黒色土の混じった暗黄褐色土でほぼ全面に厚さが3～16cmの貼床を施す。掘方は外区が内区より若干深い。支柱穴は4本と推定されるが、実際に確認できたのはP1～P3の3本で、南東支柱穴は不明である。北東支柱穴P3はSG10区SI-18調査時に確認した。柱間は東西4.70m、南北4.14m。床面からの深さはP1=69cm、P2=51cm、P3=51cm。P3の上部は攪乱で削られている。

南壁際ほぼ中央のP4は、発掘調査時には別の土坑（旧名称はSG5区SK-48）としたが、位置や形態などから本建物の張出ピットである。212×146×深さ40cmの南北に長い方形で、南辺より北辺が少し長い。南壁から115cm張り出す。底面は152×102cmで開口部と相似形で、北西部はなだらかに15～20cm高くなる。壁は急傾斜で、床面から深さ10～20cmでなだらかになる。土層断面図はないが、確認面ではローム塊・粒を少量含む暗褐色土であった。張出ピットはSG5区SI-19・45にあり、SG10区SI-72などにも見られる。

〔火処〕 確認されなかった。遺物の時期からみて、北壁にカマドを持っていたことが想定できる。

〔覆土〕 覆土は1層だけが残る。

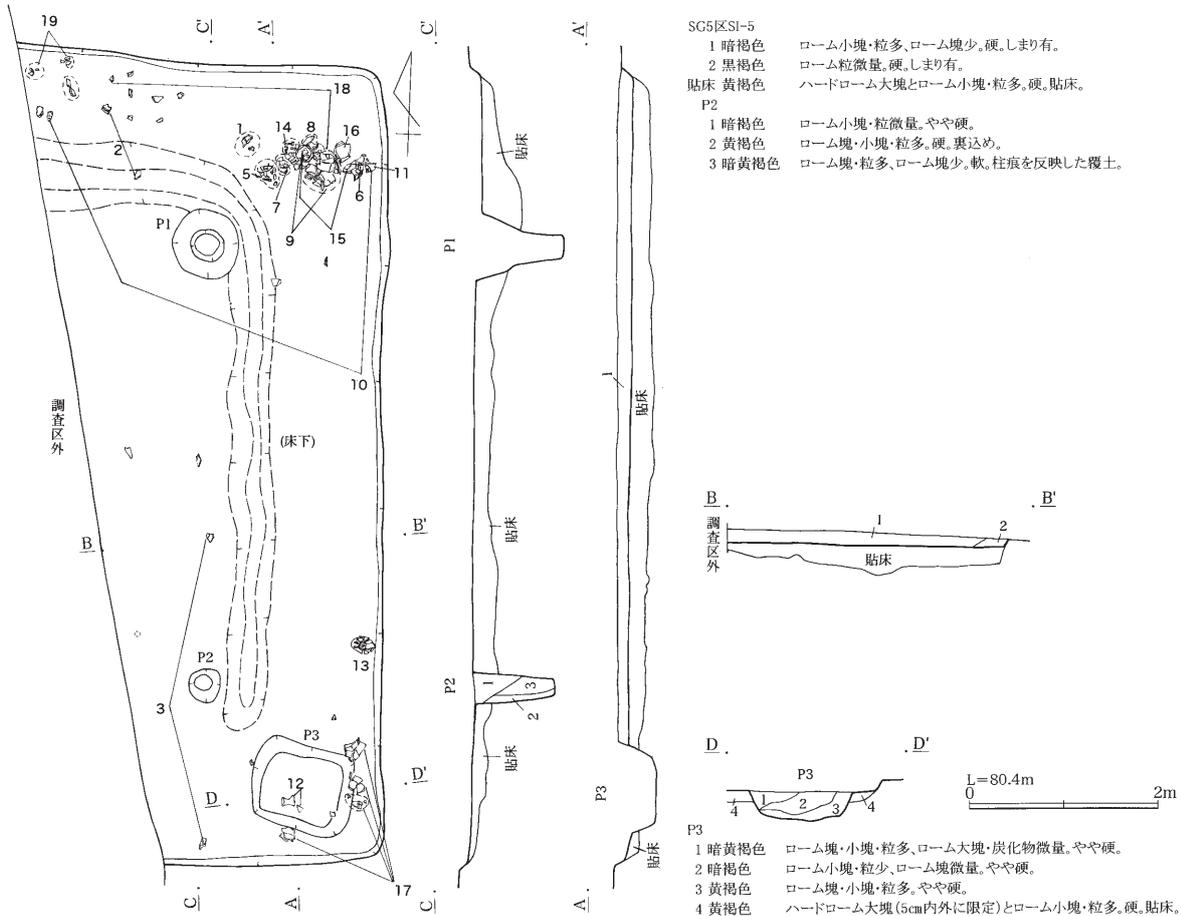
〔遺物および出土状況〕 北西の支柱穴周辺に編物石・敲石がまとまる。遺物はごくわずかで、図示以外の土師器合計52片・528gの内訳は杯・鉢16片・148g、壺甕類35片・370g、甌1片・10g。このうち張出ピット（調査時名称SK-48）の遺物は計35片で、杯・壺・甌のほか、口縁部形が身模倣形土師器杯に類似した鉢片がある。竪穴覆土で出土した杯類は、有稜の古墳後期の模倣杯や、中期末頃の杯がある。覆土中の土器では時期を確定できないが、張出ピットP4の土器により古墳後期前半と考えられる。SG5区ではSI-4・15に紡錘車があり、紡錘車状土製品がSI-24にある。SG10区ではSI-59などに紡錘車がある。紡錘車が孔外周の接線方向に擦痕を持つ点は、補助具で回転させた痕跡であると指摘されている（大倉2002）。

第162表 権現山遺跡SG5区SI-4 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 3.2	胎土、表面とも黒色。外面体部はナデのち乱雑なミガキ。外面口縁部はヨコナデのち横方向の密なミガキ、内面口縁～体部ヨコナデのち体部放射状の密なミガキのち口縁～体部上半密な横方向のミガキ。	5Y4/1 灰 やや緻密 白粗粒と白・砂微粒 微量 やや硬質	P4 内 口～体一部 SK-48
2 土師器 甌	高 残 5.4 底 復 6.6	外面胴部下半縦方向の粗いナデ。底部荒いナデ。総じて外面の整形は荒く、底部では粘土の継ぎ目も消さないままとなっている。胴部はそれよりは入念だが、平滑とは言えない。内面胴部下半～底部ヘラケズリのち一部ナデ。底部一孔あり。ヘラケズリで整形される。孔径は復原で約2cm。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤細粒多、赤粗 粒少 硬質	P4 内 胴下半～底 1/4 周 SK-48
3 土師器 壺	高 残 6.4	内・外面とも、表面が剥落している部分が多い。外面頸部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデのちヘラミガキ。内面頸部ヘラナデのちヨコナデのちヘラミガキ。内面胴部上端ナデ。	10YR8/3 浅黄橙 やや粗い 赤粗粒少、砂礫微量 やや硬質	P4 内 頸～胴上端一部 SK-48
4 石器 編物石	長 13.4 幅 5.4 厚 3.6	やや厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量332.7g。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 安山岩	北西部床上2cm 完形 10
5 石器 編物石	長 13.5 幅 5.3 厚 3.0	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量404.5g。	7.5Y6/1 灰 やや粗い 流紋岩	北西部床上3cm 完形 8
6 石器 編物石	長 13.8 幅 7.0 厚 4.2	やや厚い棒状の礫。河原石。表面には黒色物質が付着するが、裏面にはなし。加工の痕跡なし。重量580.4g。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 安山岩	北西部床上2cm 完形 4
7 石器 編物石	長 14.0 幅 6.6 厚 4.4	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量599.7g。	N5/ 灰 やや緻密 安山岩	北西部床上2cm 完形 5
8 石器 編物石	長 14.0 幅 6.9 厚 4.5	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量658.2g。	5Y7/1 灰白 やや緻密 安山岩	北西部床上2cm 完形 3
9 石器 編物石	長 13.9 幅 5.3 厚 4.2	厚い棒状の礫。角柱状。河原石。加工の痕跡なし。重量479.8g。	5Y7/1 灰白 緻密 安山岩	北西部床上2cm 完形 1
10 石器 編物石	長 16.2 幅 5.5 厚 3.7	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量490.2g。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 安山岩	中央部床上4cm 完形 11

第8章 権現山遺跡 SG5 区

11 石器 編物石	長 幅 厚	14.2 5.9 4.1	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量 563.0g。	7.5Y6/1 灰 やや緻密 流紋岩	北西部床上 4cm 完形 6
12 石器 編物石	長 幅 厚	15.1 7.2 4.4	厚い棒状の礫。河原石。加工の痕跡なし。重量 852.1g。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 流紋岩	南東部床上 1cm 完形 12
13 石器 編物石	長 幅 厚	13.3 6.2 3.0	薄い棒状の礫。河原石。下端に敲打痕と、敲打に伴う剥離あり。重量 371.7g。	5Y6/1 灰 やや粗い 安山岩	北西部床上 4cm 完形 7
14 石器 編物石	長 幅 厚	14.1 4.9 4.8	厚い棒状の礫。河原石。下端に敲打痕あり。重量 593.3g。	10Y6/1 灰 やや緻密 安山岩	北西部床上 2cm 完形 2
15 石器 編物石	長 幅 厚	14.1 7.0 3.9	やや薄い棒状の礫。河原石。上下両端に敲打痕あり。左右両側縁にも敲打痕がある可能性があるが、磨滅のため不詳。重量 620.7g。	5Y6/2 灰オリーブ やや粗い 安山岩	北西部床上 4cm 完形 9
16 石製品 紡錘車	径 厚 重	4.3 1.6 44.17	上面に欠損と見られる小さな剥離 2ヶ所あり。載頭円錐形で、上下面はともに平坦、側面はくぼむ。上面には、円周方向の直線と弧線、および孔付近のみにある浅い円弧を描く擦痕あり。側面は、中央のくぼんだ部分に製作時のものと見られる横位の研磨痕が集中。上・下端は擦痕などなく、光沢を持つ。使用による磨耗か？下面は光沢があり、軸へ巻きつく方向の擦痕が多い。孔径は上端 6.94mm、中央 6.84mm、下端 7.23mmで、中央がややふくらみ、下端の方が幅広になっている。孔径からみると、下から穿孔した可能性がある。	2.5GY2/1 黒 緻密 滑石片岩 硬質	P4 内 ほぼ完形 SK-48



第 284 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-5 (1) 遺構

SG5 区 SI-5 (第 284・285 図、写真図版 22・23・177)

[位置] SG5 区北部の 17-15、18-15 グリッドにあり、西側約 2/3 は調査区外となる。北と南東に古墳後期の SI-3・6 がある。重複する遺構はない。

[規模と形状] 方形と推定され、中軸は N-4° -E。東西長 3.75m 以上、南北長 8.51m。壁はほぼ垂直で残存高 9～13cm。ローム塊の多い暗黄褐色土で全体を平坦に貼床し、硬化部はないが全体が締まる。床から深さ 6～35cm の掘方底は細かな凹凸が著しい。北側と東側の掘方底で、支柱穴の外側を結んで内・外区を区画するような溝状掘り込みがあるが、旧建物の付属施設が確認できないことや土層断面から、これが旧建物の壁溝である可能性は低い。支柱穴 2 本は P1-P2 間が 4.63m。P1= 径 75 × 70 × 深さ 92cm、P2= 径

35 × 33 × 深さ 86cm で、P1 は底面上 45cm から円錐状に開く。南東隅の貯蔵穴 P3 は長軸が南壁より14°ほど北に振れる長方形で、中央が若干窪む鍋底状で壁が外傾し、104 × 91 × 床面から深さ 32cm。

[火処] 不明であるが、調査区外側に炉を持つことが想定される。

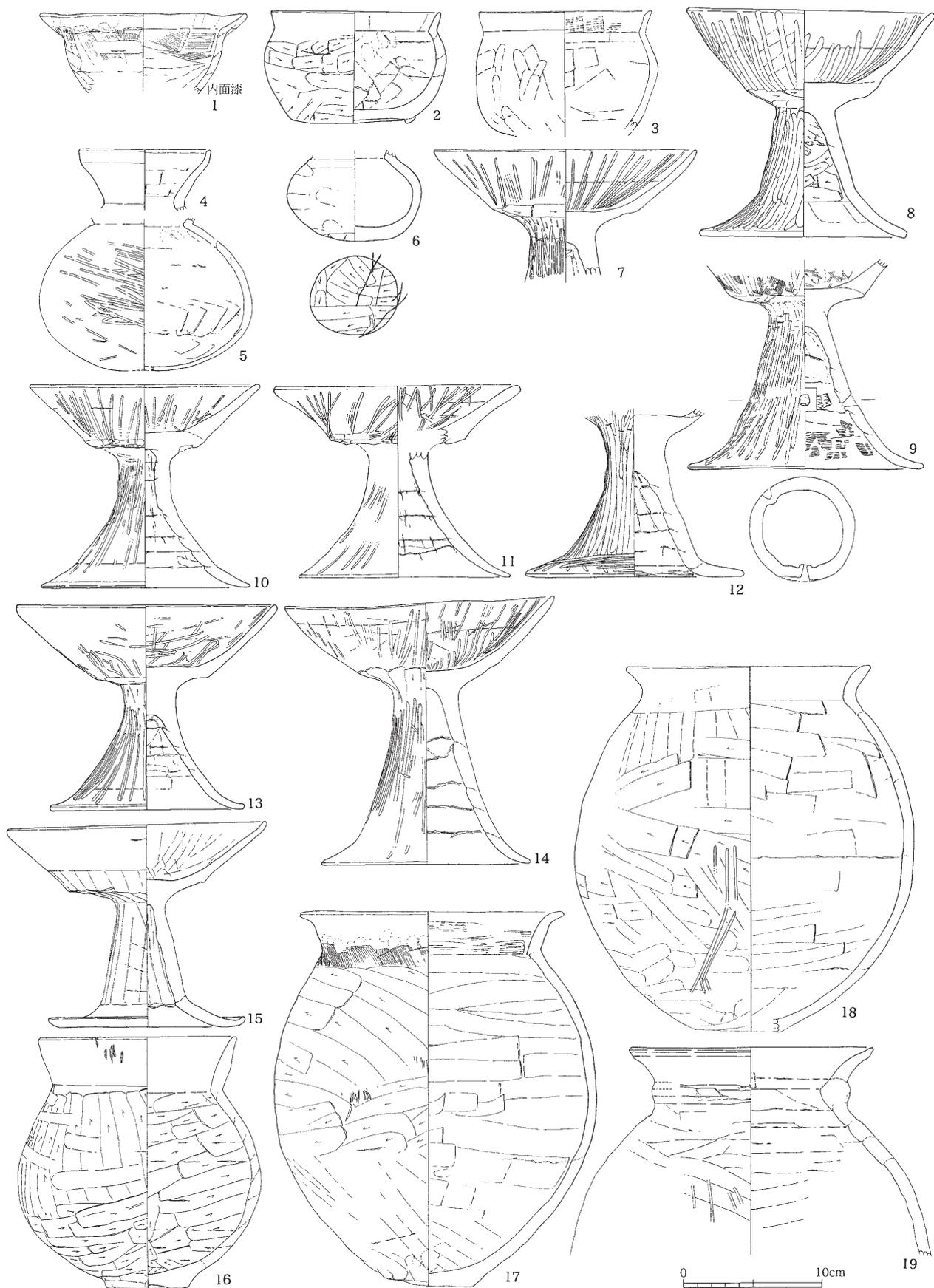
[覆土] 東壁際の2層をのぞくと、ローム粒・塊が多い1層で埋まる。貯蔵穴1層に微量の炭粒があり、1・3層にローム塊・粒が多い。

[遺物出土状況] 北東部と南東部にあり、東壁際に多い。北東部の土師器群は、床面との間に少量の覆土をはさむので、建物が廃絶した少し後でまとめて廃棄されたものとみられる。

[出土遺物] 比較的多い。高杯が多く、小・中・大形の壺甕類や杯も含む。図化以外に上げ底状の杯底部と口縁が内彎する椀形杯が各1点ある。1は漆仕上げの杯として初期の例。高杯は出土個体の大半を図示したが、別個体破片も少しある。低めの八字状脚が多く、屈折脚(12・15)もある。9は脚部に貫通孔と非貫通孔を持つ。高杯の非貫通孔はSG5区SI-15・116などにあり、SG10区SI-25に貫通孔と非貫通孔がある。10と11はよく似る。17は底面がやや突出する。底が凸面状の甕はSG10区SI-16などにある。図示以外の土師器合計207片・1,523gの内訳は、杯64片・299g、高杯42片・425g、壺甕類101片・799g。

第163表 権現山遺跡SG5区SI-5出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 5.7	全体に歪みあり。外面口縁部は複合口縁状にわずかな段差を持つが、9本/1cmのハケによりなだらかな傾斜とされる部分も多い。ハケのち軽いヨコナデが施されるが、指頭圧痕、ハケ調整の痕跡が残る。体部ハケのち軽いナデ。内面口縁部ヘラナデ(ハケの可能性あり)のちヨコナデ、体部ヘラナデのち上半9本/1cmのハケのち下半強いナデ。内面全体漆仕上げ。漆仕上げの初期の1例。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗粒多 やや硬質	北部床上9cm 体1/3周 11
2 土師器 鉢	口 復 12.1 高 8.0 底 7.0 最大 復 13.0	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ、底部はややくぼみ、ケズリのちナデ。底部外縁に0.85 × 0.7 × 0.25mmの粘土塊を意図的に貼ったと見られる。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、体部上半軽いナデで、組積痕・指頭圧痕が残る。体部中位～底部ヘラナデ。体部下半～底部が被熱赤変、口縁部および体部中位～下半煤付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒と白・赤・半透明粗粒微量 やや硬質	北部床直上～床上5cmが 接合 体上半1/3周、下半1/2 周 18、20、C一括
3 土師器 鉢	口 復 12.3 高 残 8.8 最大 12.9	歪みあり。外面口縁ヨコナデ、体部ナデ。ナデは軽く、粘土の皺が残る。内面口縁7本/1cmのハケ後ヨコナデ、体部ヘラナデ。外面口～体部に煤付着し、体部上半は少ない。体部下端被熱赤変あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗～細粒少、細砂粒微量 やや硬質	中央床上5cmと南部床上 3cmが接合 口一部、体 1/2周 27、37
4 土師器 小形壺	口 復 9.4 高 残 4.3	外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半～頸部ヨコナデの可能性あるが、表面磨滅のため不詳。内面口縁部下半ヘラナデのち口縁部全体ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白・黒・赤・灰色粗 ～細粒多、白礫微量 やや硬質	口1/2周
5 土師器 小形壺	高 残 11.0 胴 15.2	球脚で丸底。外面黒斑あり、表面は磨滅しているところが多いが、黒斑部分では調整が良く残っている。内面は胴部下半で、クレーター状に剥落しているところあり。外面胴部上半ナデのち密なミガキ。胴部中位～底部ケズリのち密なミガキ。内面胴部上半ナデ。組積痕と指頭圧痕残る。胴部中位～底部ヘラナデ。粘土の積み上げ休止による接合痕残る。全体に薄手で、特に底部付近が薄い。	5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と細 ～微砂粒少、黒粗～細粒微量 やや軟質	北東部床上2cm 頸1/3周、体全周 10
6 土師器 小形壺	高 残 6.5 胴 9.6	外面胴部上端ヨコナデ、胴部ナデ、底部は丸底で、荒いケズリ。線刻あり。内面はほぼ全面が厚く剥落するため調整不詳。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 やや硬質	北東部床上6cm 頸～底はぼぼ完存 2
7 土師器 高杯	口 18.6 高 残 9.5 最大 18.6	外面杯体部ナデ、口縁ヨコナデ後口～体部疎らなタテミガキ。底～脚上半タテケズリ後底外周ケズリ、脚部密なタテミガキ。内面杯部ナデ→口縁ヨコナデ→疎らな放射状ミガキ。脚部荒いタテナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤細粒少、白礫～粗粒微量 やや軟質	北東部床直上 口完存、脚上半5/6周 9
8 土師器 高杯	口 17.7 高 16.2 脚 14.8	厚手、硬質。外面杯部口縁部ヨコナデのち体部斜位のヘラナデ、底部外周横方向のケズリのち底部ナデ、および口縁～体部幅広く疎らな縦方向のミガキ。脚部上半ヘラケズリ・ヘラナデ、脚部下半ヨコナデのち脚部全体に縦方向の幅広いミガキ。ミガキは光沢のないものが先に密に施されたのち光沢を持つものがやや疎らに施される。内面杯部体～底部ヘラナデのち口縁部ヨコナデのち口縁～体部放射状の疎らな幅広いミガキ。底面は多方向の密なミガキ。底部と体部の接合の継ぎ目明瞭。脚部上半ナデのち横方向のケズリ、下半ヘラナデのちヨコナデ。脚部上半に組積痕あり。杯部口縁部は、斜面を持つ。脚部下端にも、面を持つような形状あり。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白礫～粗粒少、砂礫 と粗～細砂粒少 硬質	北東部床上3cm 杯口3/4周、杯体～脚 上半完存、脚下半3/4 周 6
9 土師器 高杯	高 残 15.1 脚 16.8	外面杯部体部8本/1cmのハケのち縦方向の太いミガキ、底部ヘラナデのちナデ。脚部上半ヘラナデ、下半ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミガキは上半は密、下半はやや疎ら。脚部上端にヘラの当たりあり。内面杯部体部ヘラナデのち疎らな多方向のミガキ。底部ヘラナデのち密な多方向のミガキ。脚部上端ナデ。指の痕跡明瞭。中位以下の組積以前のナデである。中位ナデのち一部横方向のハケ(8本/1cm)。組積痕明瞭。下半横方向の8本/1cmのハケのちヨコナデ。脚部の下端上約5cmのところ孔2ヶ所あり。一方は外面径9.2mm内面径3.6mmで、器面にほぼ垂直にあげられる。もう一方は、貫通していない孔で、貫通する孔とは約125°のズレがある。外面径は約7mm、深さは約7.5mmで、器面にほぼ垂直である。工具は鉛筆状のものを使用したと見られ、工具を回転させながら外面から内面方向へと孔を開けようとしている。内面には、穿孔に伴う粘土の盛り上がりがある。粘土の盛り上がりは全く調整されておらず、土器全体の整形が終了したのちに穿孔されたことが知られる。	5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・黒粗粒やや少、透明細粒少、赤礫微量 やや軟質	北東部床直上～床上4cm が接合 杯体1/4周、杯底3/4 周、脚一部欠損 7、8



第 285 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-5 (2) 遺物

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

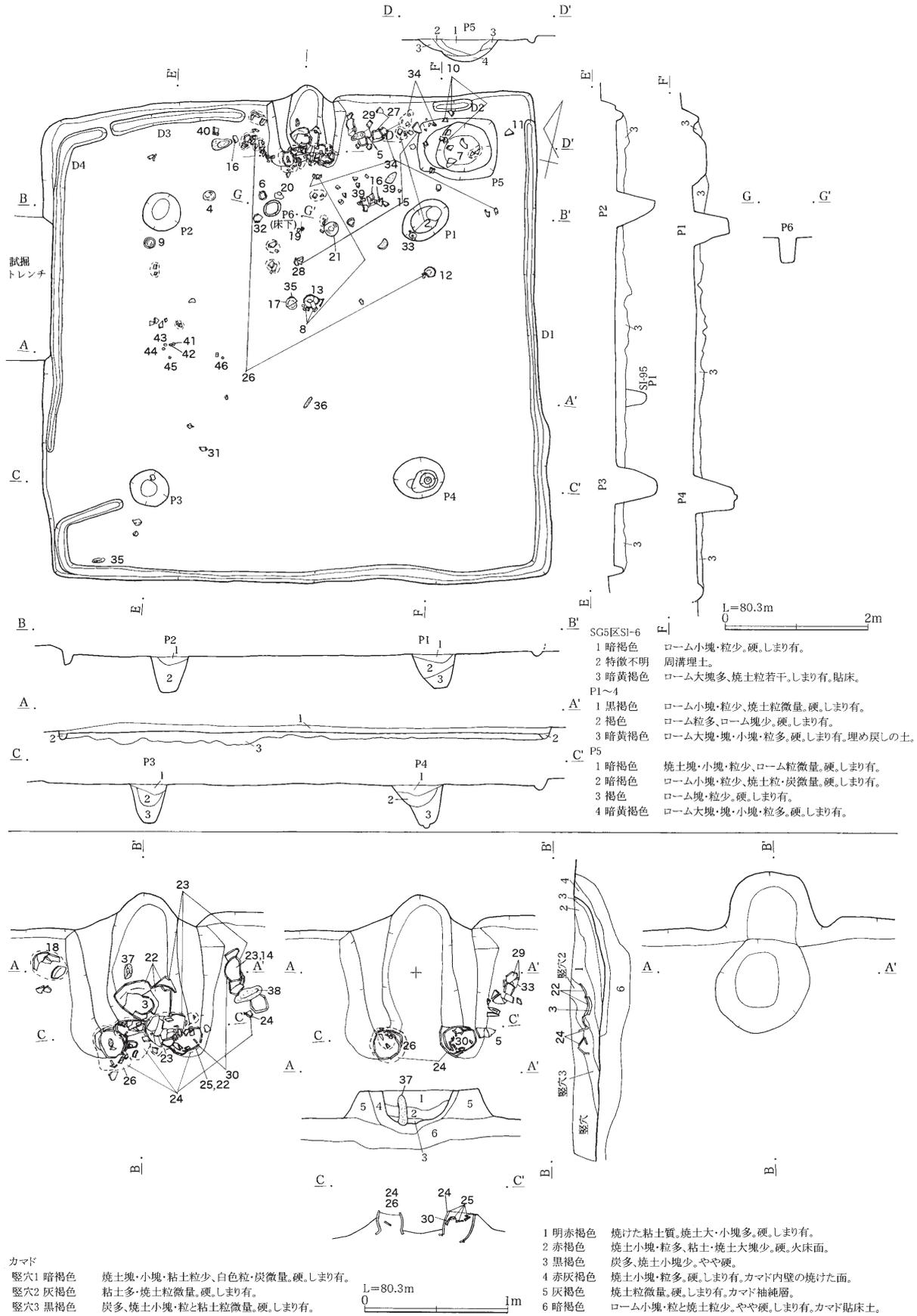
10 土師器 高杯	口復 16.4 高 14.5 脚復 15.0	白色土と赤褐色土がマーブル状に混じる部分あり。外面杯部口縁ヨコナデ、体部ナデ後規則的で疎らな縦のミガキ。口縁端部丸味を持つ方形に面取りあり。杯部底部～脚部上半は縦・横両方向のミガキ。脚部ナデ、下端ヨコナデ後タテミガキが上半で密、下半で疎ら。内面杯口縁～体部ヨコナデ後縦の疎らなミガキ。底部はナデ後ミガキと見られるが、表面磨滅し不明瞭。脚部軽いナデで、下半一部ヘラナデ。組積痕、粘土の絞り目明瞭。下端ヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白礫粗～細粒少 軟質	北東部床上 8cmと北西部床直上が接合 杯口～体 1/3 周、底～脚上半一部欠、脚中位～下半 1/3 周 1、24
11 土師器 高杯	口復 17.5 高 復 13.8 脚 15.0	10に類似する胎土、技法の高杯。軟質な胎土で、やや歪みあり。杯部口縁～体部ヨコナデ、体部下ナデのち疎らなやや斜め方向のミガキ。底部ヘラケズリ。脚部上半ナデ、下半ヨコナデのち縦方向のミガキ。磨滅しているところが多いが、上半は密、下半は疎らなものである。内面口縁ヨコナデ、体～底部荒いヘラケズリ後疎らな縦方向のミガキ。脚部上半～中位軽いナデ、中位わずかにヘラナデ。組積痕明瞭で粘土の絞り目も残る。下端ヘラナデ後ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒多、白礫と粗～細粒少、赤礫微量 軟質	北東部床上 8cm 杯口～底 1/3 周、脚上半一部欠、下半 1/2 周 1
12 土師器 高杯	高 残 12.5 脚 15.5	全体に、やや歪む。外面杯底面～脚下半ナデ・ヘラナデ後密なタテミガキ。杯部底部にヘラ痕あり。脚下端は大きく開いており、ヨコナデのち横方向の密なミガキ。杯部底部はヘラナデのちミガキと見られるが、剥落し、不明瞭。杯部体部と底部の接合痕が残る。脚部軽いナデのみ。組積痕と縦に入る粘土の絞り目が明瞭。下端はヘラナデ→ヨコナデ→一部ケズリ、ミガキ。歪みを修正したものか。	2.5YR6/6 黄 やや緻密 黒微粒多、赤細粒少 やや硬質	貯蔵穴 P3 底上 5～10cmが接合 杯底～脚上半完存、脚下端 1/2 周 38、39、C一括
13 土師器 高杯	口 18.5 高 14.7 脚 復 13.8	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち荒く疎らなタテミガキ、杯底面ヨコケズリ。脚上半タテケズリ、下半ヨコナデのちタテミガキ。隙間あり。内面杯部体～底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのちミガキ。ミガキは底部一方向のち、口縁～体部門周方向に上から見て五角形状のミガキを反時計まわりに施す。全体に疎らで底部付近のみやや密。脚部上半軽いナデ、上端に大きな段差の組積痕、中位に3本の粘土組積痕残る。下半ヘラナデのちヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤細粒多、砂礫少、赤礫微量 やや硬質	東壁際床上 2cm、床面より浮いた状態 杯～脚上半完存、脚下半 1/3 周 30
14 土師器 高杯	口 19.1 高 19.2 脚 14.8	やや軟質なため、表面の磨滅で調整不詳。外面杯部ヘラナデ後口縁部ヨコナデ後疎らなタテミガキ。杯部底面～脚部ヘラケズリ、脚部下端ヨコナデ後タテミガキ。ミガキは、上半では密だが、下半は開いた形のため、やや疎らに見える。内面杯体～底部ナデ、口縁ヨコナデ後放射状ミガキ。脚部はナデで、組積痕が顕著。下端ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、粗砂粒少、白細粒少、黒細粒と礫微量 やや軟質	北東部、床面に接した状態 ほぼ完形 8
15 土師器 高杯	口 18.6 高 14.7 脚 14.0	柱状脚。外面杯部縦方向のヘラナデのち口縁～体部ヨコナデ。脚柱部縦方向のヘラナデのち横方向のナデ、脚部下半ヨコナデ、端部は上方に反りかえる。内面杯部はヘラナデのち口～体部ヨコナデのち粗く軽い放射状ナデ。底部は丁寧なナデ。脚柱部は軽いナデで、縦方向の粘土の絞り目が顕著。下半ヨコナデで、下端にはヨコナデ後に付着した粘土が残存。杯部口縁～体部と脚下半に黒斑。	5YR7/8 橙 やや緻密 白細砂粒多、粗砂粒微量 硬質	北東部床上 2～4cmが接合 杯口～底 1/2 周、脚柱完存、脚下半 1/2 周 3、7
16 土師器 小形甕	口 14.6 高 18.0 底 5.9 最大 17.3	外面胴部上半縦方向のケズリのち下半やや右上がりのケズリ。このあと、胴部上半には、わずかに横方向のナデが施される。底部はやや突出し、ドーナツ状にくぼむ。ナデのち底面外周のみ軽いケズリ。口縁部外面 6本/1cmのハケのちヨコナデ。胴部にも、ケズリの前にハケが施されていた可能性あり。口縁部上面・外面にヘラの当たりあり。意図してつけられたものではないと推測する。胴部外面にも一部あり。内面は胴～底部ヘラナデのち胴部右上がりのケズリ。粘土の組積痕が消されずに残っているところが多い。口縁部内面ヨコナデ。外面胴部下半～口縁部煤付着。胴下半一部被熱赤変。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、白・赤礫少 やや硬質	北東部床上 3cm 口～胴 2/3 周、底完存 4
17 土師器 甕	口 復 18.7 高 26.9 底 6.0 最大 23.0	外面胴部は 8本/1cmのハケ→胴部上半斜め方向のケズリ→胴部中位の横方向のケズリ→胴部下半の斜め方向のナデ。ハケは上から見て反時計まわりで、頸部に明瞭に残る。胴部中位には、粘土積み上げ休止による継ぎ目があり、休止後に積み上げた部分の整形を目的に横方向のケズリが施されていると見られる。下半のナデは丁寧。底部はケズリのち軽いナデで平底だが、外周寄りが多く削られるため、やや凸状。口縁部は軽いヨコナデで、ハケ、指頭圧痕が残る。内面胴～底部ヘラナデ。中位に粘土積み上げ休止痕。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・半透明粗粒と細砂粒多、黒粗粒少、黒礫微量 硬質	南東部床直上～床上 4cmが接合 胴上半 1/3 周、胴中央 2/3 周、胴下半 4/5 周 33、34、35、36、C一括
18 土師器 甕	口 17.4 高 26.3 底 6.2 最大 24.1	外面は胴部上半は縦のヘラナデのち疎らなミガキ、胴部下半～底部はケズリのちナデ。平底の底部にミガキのような浅い線があるが、意図して施されたものとは考えられない。口縁部内外面はヨコナデ、内面胴部はヘラナデで、下半、中位、上半の3ヶ所に粘土積み上げ休止によると見られる継ぎ目がある。外面胴部中位より上には煤が付着しており、特に中位(底部上7～16cmの位置)に顕著。内面は底部から底部上7cm程の部分が黒褐色に変色。コゲか?	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白粗～細粒多、白・赤礫微量 やや硬質	北東部床上 4cmと北西部床上 8～10cmが接合 口ほぼ完存、胴～底 4/5 周 5、12、19
19 土師器 壺	口 復 17.4 高 残 14.9	外面胴部上半ナデ→疎らな縦のミガキ。頸外面の突帯は粘土貼付けではなく、頸部の粘土積み上げ時に、すでに作られていたものと見られる。突帯はヘラで荒く成形されたのち、口縁部とともにヨコナデされる。ヘラ痕は明瞭に残る。内面胴部上半はヘラナデ。特に上端は粘土の継ぎ目が明瞭。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。ミガキが施されている可能性はあるが、表面磨滅のため不詳。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗粒多 やや硬質	北壁際床上 4～11cmが接合 口一部、胴上半 1/6 周 23、25、C一括

SG5区 SI-6 (第286～288図、写真図版23・24・177・178)

〔位置〕 SG5区北部の17-15・16グリッド。古墳後期のSI-4が北東に、中期のSI-5が北西にある。南西部で古墳中期のSI-95を切る。西壁中央を試掘トレンチに削られる。

〔規模と形状〕 東西7.09×南北6.95mの方形で中軸線はN-13°-W。壁は直線的に外傾し、残存壁高は2～21cm。床面はほぼ平坦でローム粒・塊の多い暗黄褐色土で床全体を貼床し、硬化部はないが全体に締まる。掘方は床面から深さ6～18cmで、底面に緩い凹凸がある。写真を見ると、SI-95を切る部分の床は、他部分より黒色土の比率が多い。

主柱穴はP1～P4の4本。P1は径47×67×深さ49cm、P2は径52×54×深さ51cm、P3は51



第286図 権現山遺跡 SG5 区 SI-6 (1) 遺構

× 56 × 深さ 58cm、P4 は径 57 × 70 × 深さ 61cm。P1-P2 間が 3.83m、P3-P4 間が 3.88m、P1-P4 間が 3.80m、P2-P3 間が 3.89m の方形配置。カマド前面の貼床下で確認した P6 は径 22 × 25 × 掘方底面から深さ 36cm で、土層は不明。

壁溝 D1 ~ D4 がほぼ全周し、北壁際と西壁南部で一部途切れる。断面 U 字状で幅 13 ~ 22cm、深さは床面から 5 ~ 13cm。西壁に対して直角にならないが、壁溝 D1 が P3 方向に折れる部分は間仕切溝の可能性もある。

北東隅の貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形で 96 × 111 × 深さ 32cm。底面は皿状、壁はなだらかで西側に緩い段がある。覆土はレンズ状に自然堆積し、1・2 層に炭や焼土粒を少し含む。

[カマド] 北壁中央にある。両袖幅 110cm、煙道先端から袖先端まで 125cm。暗褐色貼床土の 6 層で掘方を 10 ~ 20cm 埋め戻した上に灰褐色粘土の 5 層で袖を構築し、内面は被熱で焼土化が著しい (4 層)。両袖先端に土師器甕を各 1 個倒立させ (25・26)、口縁部東向きに入れ子状に差し渡して焚口天井を作った別の甕 2 個 (24・30) がそのままゆっくりと崩れた可能性がある。西袖先端に倒立した甕 26 は底部を割ったように観察され、東側の甕 25 と高さを揃えるため加工した可能性がある。両袖先端の甕内部にはしまりのない均質な土を人為的に入れ、堅く突き固めてはいない。西袖の甕内部は焼土小塊・粒と土師器片を少量含む黒色土、東袖の甕内部はローム粒の多い暗褐色土であった。

火床はほぼ平坦で、煙道にかけて焼土化が著しい (4 層)。架口部には、中軸より若干西側に寄って長 20cm の河原石の支脚が直立する。南側にある土師器甕 22 を掛けていたかもしれない。煙道は北壁より 40cm ほど U 字状に掘り、貼床と同じ土層で埋め戻して整形後は 20cm ほど壁外に出る。炭化物多量と焼土塊少量を含む黒褐色土の 3 層が火床直上に薄く流入堆積し、その上の焼土化が著しい 2 層が天井内壁、焼土化した粘土主体の 1 層が天井崩落土と思われる。

[覆土] 覆土はしまりのあるローム粒・塊を少量含む暗褐色土。2 層 (壁溝埋土) は整理作業時に与えた土層番号で、詳細な特徴は不明。現地調査時の図面では壁溝のうち片方だけが貼床よりも下層として図化されていて不合理なため、断面図を修正した。

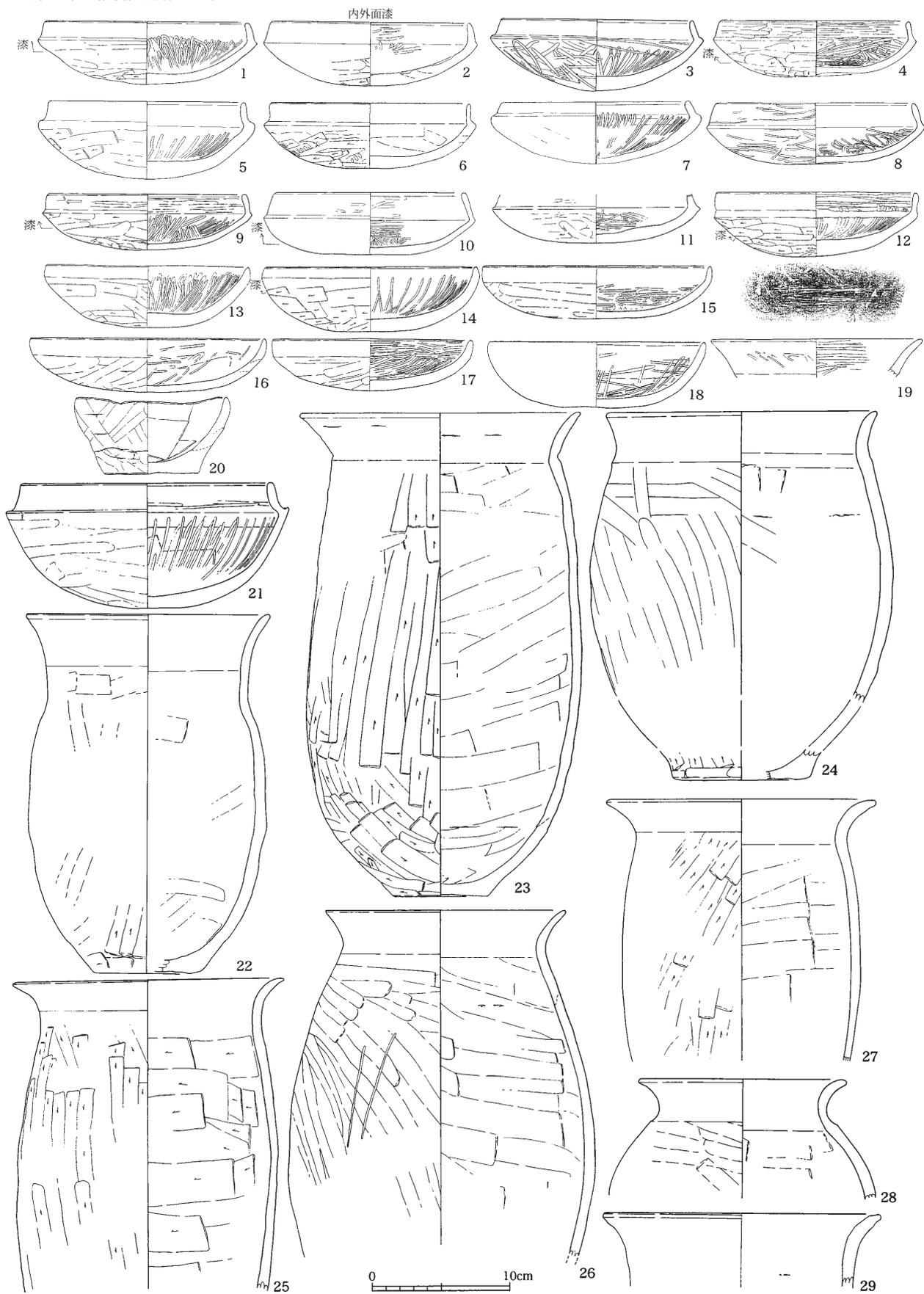
[遺物出土状況] カマド・貯蔵穴とその南側付近に遺物が多い。北西部にも安置状態の土器や石製白玉がある。11 の杯は北東部の貼床下で出土した。

[出土遺物] 遺物量が多い。身模倣形杯・半球形杯・長胴甕が主体で、壺・鉢・小形土器などが少量ずつある。古い時期の遺物もあり、重複する SI-95 から混入した可能性があるが、遺構間で接合できたものはなかった。図化以外に甕が底部で数えて 6 個体分あり、そのうち 3 個体程度が長胴甕である。杯は図化以外に身模倣形が 2 個体、半球形杯が 7 個体位ある。図化以外の土師器 1,357 片・11,118 g の内訳は杯 272 片・2,328g、高杯 48 片・518g、甕壺類 1,033 片・8,185g、甌 4 片・87g。粘板岩製の白玉と剥片がある。粘板岩製品は SG5 区では SI-14 と低地部古墳時代包含層に白玉、SI-17 に砥石、SI-25 に模造品、SI-116・137 に剥片がある。また、SG10 区では SI-20 などに白玉、SI-47 などに模造品がある。

第 164 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-6 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 4.5 最大 15.6	外面口縁部ヨコナデ、体~底部ケズリのち体部光沢を持つナデ。内面口縁~体部ヨコナデのち体~底部放射状の密なミガキ。内面クレーター状の剥落あり。内面全体・外面口縁~体部漆仕上げ。口縁端部の大部分が磨滅・欠損している。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・灰色礫と白微粒 少、透明礫微量 やや硬質	カマド西側床上 4cm 口~体一部欠 94
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 4.6 最大 15.3	外面口縁部ヨコナデ、体~底部ケズリのち体部ナデ。内面口縁~体部ヨコナデのち口縁部横方向のミガキ、体~底部多方向の密なミガキ。組積の面などから薄く剥がれやすい土器であり、内面多くは剥落のため失われている。内外面全面漆仕上げ。	2.5Y8/2 灰白 緻密 灰色礫と白・黒細粒と粗 砂粒微量 やや硬質	P1 付近床上 6cm と北部 床上 6cm 口~体 1/5 周、底一部 欠損、内面剥落 11、46、貯穴
3 土師器 杯	口 13.7 高 5.1 最大 15.2	外面口縁部ヨコナデ、体~底部ケズリのち疎らな多方向のミガキ。内面ヨコナデのち体~底部放射状の規則的な疎らなミガキのち体部横方向の数本のミガキ。口縁部付近を中心に、被熱のため赤変、表面剥落あり。口縁~体部一部灰白色粘土付着、口縁端部の大部分が磨滅・欠損している。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明微粒 少、砂礫微量 硬質	カマド内 口~体 2/3 周、底完存 カマド 3

第8章 権現山遺跡 SG5 区



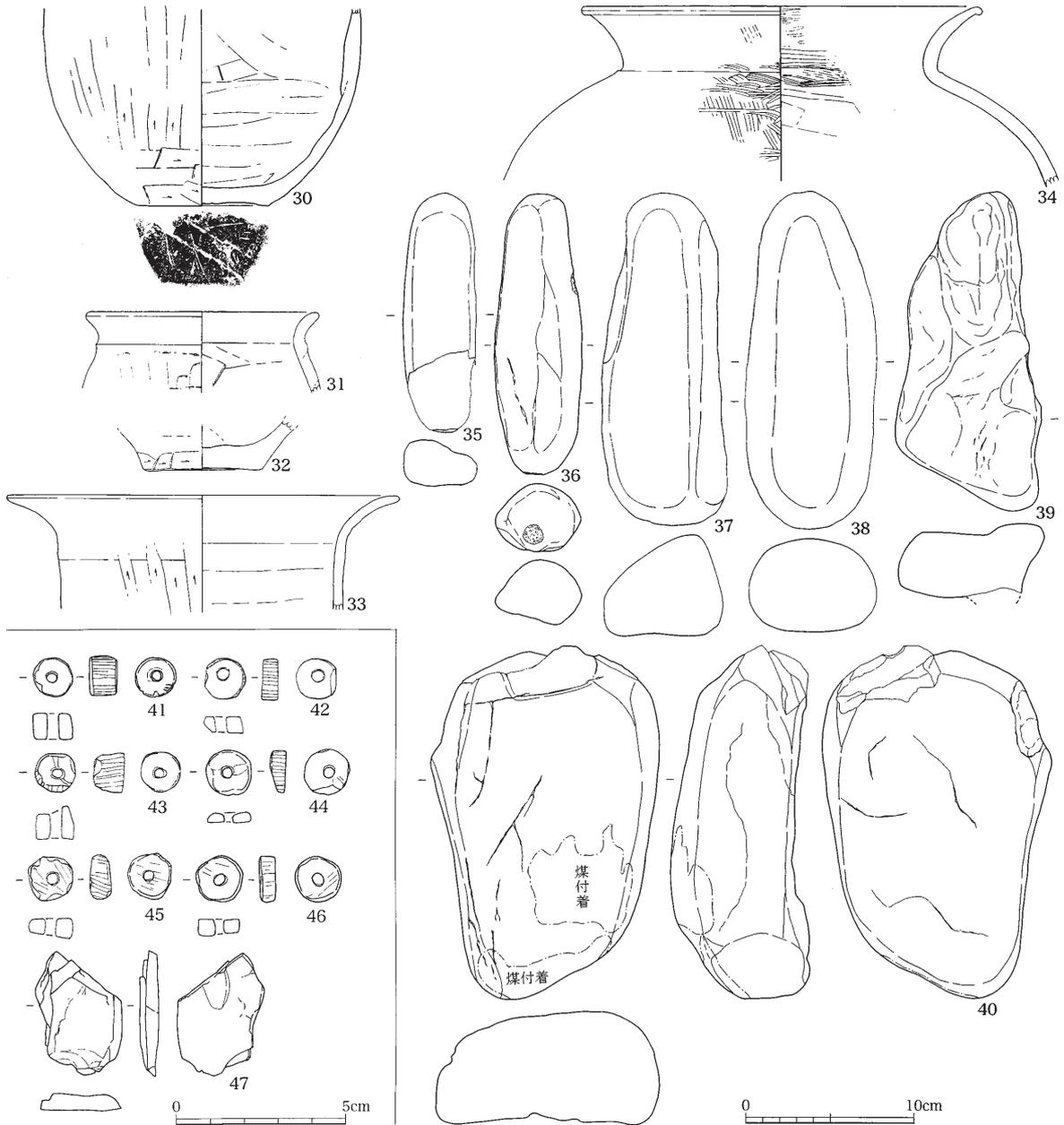
第 287 图 権現山遺跡 SG5 区 SI-6 (2) 遺物

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

4 土師器 杯	口 13.3 高 4.0 最大 14.3	外面口縁部ヨコナデのち太めのミガキ、体～底部ケズリのち体部光沢を持つナデ。いびつな丸底。内面ヨコナデのち体部上端～口縁部横方向のミガキ、体部多角形状、底部一方のいずれも密なミガキ。内面でミガキが施されない部分はほとんどない。痕跡は少ないが、内面全体、外面口縁～体部漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 白礫微量、黒・透明粗粒と粗砂粒微量 硬質	北西部床上 7cm ほぼ完形 2
5 土師器 杯	口 14.0 高 5.5 最大 15.5	外面口縁部ヨコナデ、体部上端ナデ。体～底部ナデのちケズリ。内面体～底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのち体～底部放射状の規則的な疎らなミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・透明細粒少、赤粗粒微量 硬質	カマド東側床直上とカマド東袖底上 2cm 口一部欠 51、118
6 土師器 杯	口 復 14.2 高 残 4.7 最大 復 15.2	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのちケズリ、クローラー状のケズリ痕。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 微砂粒少、白粗～細粒微量 硬質	北部床上 9cm 口～底 1/4 周 82、表採
7 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.4 最大 15.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ほぼ全面が細かく剥落しているが、ケズリと見られる。内面ヨコナデのち体～底部放射状の密なミガキ。口縁端部の大部分は磨滅し、内側に傾斜する面となっている部分が多い。体～底部は、外面は全体に細かく剥落、内面はクレーター状に剥落。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細粒多、白・透明礫微量 硬質	貯蔵穴 P5 上方の床レベル 口～底 1/2 周 32
8 土師器 杯	口 14.1 高 4.4 最大 15.6	薄手・硬質な杯。外面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキ。体～底部ケズリのち密な主に横方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコナデ、体部下半～底部ヘラナデのち底部一方の密なミガキ、体部は多角形状の密なミガキ。内・外面漆仕上げ。	10YR2/1 黒 やや緻密 黒粗～細粒多、白・透明細粒少 やや硬質	中央部床上 7cmとカマド南側 5cm 口 2/3 周、体一部欠 4、6、77
9 土師器 杯	口 14.2 高 4.1 最大 15.0	外面口縁部ヨコナデのちわずかに横方向のミガキ。稜は鋭利。体～底部ケズリのち光沢を持つナデ。内面ヨコナデのち口縁部横方向の疎らなミガキ、底～体部多角形状の密なミガキ。内面全体、外面口縁～体部漆仕上げ。	10YR4/1 褐灰 緻密 透明細粒多、白微粒少、赤粗粒極微量 硬質	北西部床上 4cm逆位 完形 1
10 土師器 杯	口 復 13.7 高 4.5 最大 復 15.1	外面口縁部ヨコナデのちヨコミガキ、表面は細かく剥落し、ミガキの密度は不明。体～底部ケズリ、表面は細かく剥落しており、調整不詳。内面ヨコナデのち体～底部放射状を基本とした多方向の密なミガキのち口縁～体部横方向のミガキ。体～底部のミガキは精緻で、単位をとらえにくい。内面全体、外面口～体部漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・透明・砂粒多、白・黒・透明粗粒微量 硬質	貯蔵穴 P5 床上 21cmと D2 付近床上 5cm 口～体 1/6 周、底完存 37、38、132、P5 貯穴
11 土師器 杯	高 残 3.5 最大 14.8	胎土・表面とも黒褐色。外面口縁部ヨコナデのちわずかに横方向のミガキ。体部ケズリのちナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部多方向のミガキ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白細粒少、粗～細砂粒微量 やや軟質	北東部壁際床下 口～底 1/4 周 131
12 土師器 杯	口 14.3 高 4.7 最大 14.6	外面口縁部強いヨコナデ、体～底部ナデのち横方向の光沢を持つミガキ。体～底部外面には、鉄器を研いだかと思われる擦痕。内面ヨコナデのち口縁部疎らな横方向のミガキのち体～底部放射状のミガキ。比較的密だが、体部は磨かない部分も残る。ケズリが不十分なためか底は厚く、外面が平底気味のところあり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 黒細粒と細砂粒少、赤礫微量 やや軟質	東部床上 8cm 口～体 2/3 周、底完存 10
13 土師器 杯	口 14.5 高 4.6 最大 14.8	器壁厚く、重い。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのちケズリ。丸底だが、底部付近のケズリはやや荒く、いびつな平底のようにになっている。内面ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのち放射状のミガキ。ミガキは密だが、ミガキの間には明確に隙間ができていて、口縁部表面の磨滅・剥落著しい。口縁～体部内外面一部煤付着。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白細粒と粗～細砂粒少、透明細粒微量 やや硬質	中央部床上 4cm ほぼ完形 5
14 土師器 杯	口 復 15.2 高 4.6 最大 復 15.6	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのちケズリ。内面ヘラナデのちヨコナデのち放射状の規則的に疎らなミガキ。外面口縁～体部、内面全体漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・透明微粒多、粗～細砂粒少 やや硬質	カマド東側床上 4cm 口～底 2/3 周 108
15 土師器 杯	口 復 16.2 高 3.8 最大 復 16.4	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち光沢を持つナデ。内面ヘラナデのちヨコナデのち体部横方向・底部一方の密なミガキ。ミガキの痕跡は薄く、ミガキの方向が判明しない部分も多い。口縁～体部外面一部煤付着。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、黒細粒少、白礫微量 硬質	貯蔵穴 P5 付近床上 12cmと中央部床上 5cm 口～底 1/3 周 43、58
16 土師器 杯	口 16.8 高 3.9	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち丁寧なナデ。内面ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのちやや密なミガキ。ミガキは横方向を基本とした多方向のものと見られるが、1本の単位がつかめないほど痕跡はわずかであるため、不明確。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 黒粗粒多と白・透明細粒多、半透明粗粒少 やや硬質	北部床上 3cmとカマド西側床上 17cm 体～底 2/3 周 63、64、87、表採
17 土師器 杯	口 14.1 高 4.2 最大 14.4	口縁端部が細かく欠損する。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち光沢を持つナデ。内面ヨコナデのち口縁部横方向のミガキのち体～底部一方の密なミガキ。外面口縁～体部煤付着。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 粗砂粒少、白・透明・黒粗粒微量 硬質	中央部床上 5cm ほぼ完形 7
18 土師器 杯	口 15.6 高 4.7	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデと思われるが、ほぼ全体が細かく剥落しているため不詳。内面ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのちミガキ。内面も剥落、磨滅しているところが多いため調整は明確にしないが、ミガキは全体に疎らで、放射状のものと横方向のものが施されていると見られる。胎土は白色土と明褐色土がマーブル状になるもの。内面黒色処理。漆仕上げの可能性もある。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗粒多、細砂粒少 やや軟質	カマド西側床上 3～13cm 体～底完存 115
19 土師器 杯	口 復 15.2 高 残 2.8	外面口縁部ヨコナデのち疎らな斜め方向のミガキ、体部ナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向の密なミガキ。内面黒色処理。	2.5Y5/2 暗灰黄 緻密 白細粒多、白・透明粗粒微量 硬質	中央部床上 10cm 口 1/4 周 56
20 土師器 小形土器	口 10.8 高 5.5 底 6.7 最大 11.2	鉢形。口縁上端歪みあり。外面口縁～体部荒いナデ。組積痕顕著に残る。底部ナデ、平底。内面ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄褐 やや緻密 白細～微粒と透明細粒少、透明礫微量 硬質	北部床上 6cm 口～体 1/2 周、底完存 81
21 土師器 鉢	口 17.8 高 9.0 最大 20.2	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのちナデ。体部のケズリ、ナデは横方向、底部付近は多方向。内面口縁部ヨコナデのち一部横方向のミガキ。体部ヨコナデのち体～底部ヘラナデのち放射状の規則的なミガキ。内面底部はクレーター状に剥落して調整不詳。	5YR / 明赤褐 やや緻密 細～微砂粒少、赤・黒礫と白・黒細粒微量 やや硬質	中央部床上 4cm 完形 3
22 土師器 甕	口 復 17.4 高 復 25.9 底 7.8	胎土は砂っぽく、もろい。内外面とも、表面の剥落著しい。口縁部内外面ヨコナデ。胴部は主に縦方向のケズリで、上端と下端のみ横方向のケズリ。底部ケズリ。平底だが、少しくぼむ。内面胴部～底部ヘラナデ。胴部下半～底部では、被熱により赤変しているところあり。口縁～底部外面の各所に灰白色粘土付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 細～微砂粒多、白・黒礫少 やや軟質	カマド内床上 4cmとカマド東袖 胴上半 1/4 周、胴下半 1/3 周 K2、カマド 1、カマド 2、カマド 9
23 土師器 甕	口 20.0 高 34.9 底 6.8	胴部最大径は 19.6cmで、口縁部径よりわずかに小さい。口縁部内外面ヨコナデ。「く」の字に外反する。胴部縦方向のケズリのち胴下半斜め方向のケズリ。底部ケズリのち軽いナデ。平底で、わずかにくぼむ。内面胴～底部ヘラナデ。胴部外面一部に灰白色粘土付着。胴部内外面一部、クレーター状に剥落。 [注記]108、カマド 1、カマド 8、カマド	5YR6/8 橙 やや緻密 白・半透明・透明粗～細粒少、赤粗～細粒微量 やや軟質	カマド東袖底上 16cm焚口天井部を構成し横位出土、カマド東床上 4cm、火床上 4cm 上半 1/2 周、胴中位～底ほぼ完存 注記は左欄

第8章 権現山遺跡 SG5 区

24 土師器 甕	口 復 19.2 高 復 26.5 底 復 9.8 最大 復 21.4	砂質の胎土のため、内・外面の磨滅が著しく、調整不明瞭な部分多い。外面胴部ナデで、上半は横、中位は斜め方向。胴部下端ケズリ。底部ナデで、ドーナツ状に浅くくぼむ平底。口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部ヘラナデ、底部ナデ。外面胴部には、各所に灰白色粘土付着。外面口縁部一部に煤付着。[遺存度]口～胴上半 4/5 周、胴下半一部、底 1/4 周 [注記]7、114、143、カマド7、カマド9、カマド10	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤礫～微粒多 やや硬質	カマド西袖確認面より 17cm下～床上 15cm、26 の上から横位の状態、カ マド東袖と中央部床上 5cm 遺存度・注記は左欄
25 土師器 甕	口 19.4 高 残 22.5	外面胴部タテケズリ。組積単位の凹凸が胴部に残る。内面胴部ヘラナデ、胴部調整後口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面中位以下は、被熱赤変し表面剥落が著しい。内外面は部分的に灰白色粘土が付着。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 半透明粗～細粒多、白礫と細～微粒少、赤粗粒微量 やや硬質	カマド東袖 口～胴上半一部欠、胴中 位 1/3 周 9、137、138、K9
26 土師器 甕	口 17.1～ 17.8 高 残 24.9 最大 復 21.8	口縁部内外面ヨコナデ、外面胴部斜め方向の強いナデ。中位にヘラ痕 2 本あり。内面胴部ヘラナデ。胴部外面全体に灰白色粘土付着。カマドに使用した粘土か。 [遺存度]口～胴上半ほぼ存、胴中位 1/2 周 [注記]10、96、134、143、K10、表採、カマド	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・砂礫と白・黒・半透明・透明細～微粒微量 やや硬質	カマド西袖確認面より 6 ～17cm下で底部を割つ た形で逆位出土、中央部 床上 8cmと北部床上 4cm 遺存度・注記は左欄
27 土師器 甕	口 復 19.2 高 残 19.0	口縁部内外面ヨコナデ。外面胴部縦方向のケズリ。ケズリの一部は、ヨコナデ後に施される。内面胴部ヘラナデ、胴部中位被熱により赤変。	7.5YR6/6 橙 粗い 細砂粒・透明細粒少、砂礫と白・黒・赤粗粒微量 やや軟質	北壁際床直上と北部床上 2cm 口～胴 1/4 周 52、90
28 土師器 甕	口 復 15.0 高 残 8.5	口縁部内外面ヨコナデ、外面胴部上半一部ヘラナデのちナデ。内面胴部ヘラナデ。口縁部内面上半は、表面の剥落著しい。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 灰色・透明礫少と白・黒粗粒少 やや硬質	中央部床上 5cm 口～胴上半 1/4 周 58
29 土師器 甕	口 復 20.0 高 残 5.3	内外面とも口縁部ヨコナデ。口縁部一部に灰白色粘土付着。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 黒細粒多、砂礫と白・赤粗～細粒微量 やや硬質	カマド東側床上 2～3cm 口 1/3 周 107、120、126、表採
30 土師器 甕	高 残 11.6 底 7.8 最大 復 18.6	外面胴部タテケズリのち下端ヨコケズリ。底部木葉痕のちヘラナデ。中央がわずかにくぼむ。内面胴～底部ヘラナデ。胴部に積み上げ休止痕あり。休止後の積み上げはやや雑で、休止前に比べ器壁は厚くなる。休止後の粘土は、前のものに比べ黒味が強い。胴部外面が被熱赤変。クレター状の剥離あり。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 粗～細砂粒多、砂礫と赤粗粒微量 やや軟質	カマド東側床上 4cmとカ マド東袖 胴下半～底 2/3 周 108、141、142、K9
31 土師器 甕	口 復 13.6 高 残 4.8	緻密な胎土であり、甑となる可能性もあろう。口縁部内外面ヨコナデ、外面胴部ナデのち縦方向の疎らな光沢を持つヘラナデ。組積痕わずかに残る。内面胴部ヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗～細粒少 やや硬質	南部床上 8cm 口～胴上半 1/3 周 84
32 土師器 甕	高 残 2.8 底 7.0	外面胴部下端ナデのちケズリ、底部ケズリで、中央ややくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。内面表面の剥落著しい。	7.5YR5/6 明褐 やや粗い 半透明粗粒多、白・透明粗粒と粗砂粒少、黒粗粒微量 やや硬質	中央部床上 1cm 底ほぼ存 59
33 土師器 甕	口 復 23.0 高 残 6.7	外面胴部縦方向のケズリのち口縁部ヨコナデのち胴部縦方向の疎らなナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。内面は表面の剥落が著しく、ミガキの有無は確認できない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・砂礫多、白粗粒と黒粗～細粒微量 やや軟質	カマド南東部床上 9cm、 カマド東側床上 2cmと P1 付近床上 6cm 口～胴上半 1/6 周 11、72、121、表採
34 土師器 壺	口 復 23.6 高 残 10.6	外面口縁部一部に 5 本/1cmのハケのちヨコナデ、胴部上半 5 本/1cmのハケのち疎らな横方向のミガキ、内面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ。胴部上半 5 本/1cmのハケのち横方向のミガキ、胴部上半ヘラナデ。口縁部内面は、ハケのちヨコナデの可能性あり。内面は、表面から胎土まで、黒色処理をしたような黒色。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明粗～細粒少、白粗～細粒と粗～細砂粒微量 やや硬質	北東部床上 7～14cm 胴上半 1/4 周 30、39、45、48、76、 カマド
35 石器 編物石	長 14.2 幅 4.3 厚 2.6	特に加工の痕跡なし。残存重量 218.9g。	5Y6/2 灰オリーブ やや粗い 安山岩	南壁際床上 5cm 一部欠 86
36 石器 編物石	長 16.6 幅 5.1 厚 3.8	先端と側面の 2ヶ所に敲打痕あり。このほか図下半の両側縁は表面が荒れており、わずかに敲打されている可能性がある。重量 322.9g。	7.5Y6/1 灰 やや粗い 安山岩	中央部南寄り床上 4cm 完形 26
37 石器 支脚	長 19.6 幅 7.0 厚 6.0	特に加工の痕跡なし。全体に褐色を呈しており、表面全体が被熱していると思われる。重量 1272.7g。	5Y6/1 灰 やや緻密 流紋岩	カマド内床上 18cm 完形 カマド 13
38 石器 編物石	長 20.0 幅 7.7 厚 5.6	特に加工の痕跡なし。重量 1314.8g。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 安山岩	カマド東側床上 2cm 完形 112
39 石器 編物石	長 18.6 幅 8.7 厚 6.6	特に加工の痕跡なし。残存重量 1008.1g。	2.5Y7/3 浅黄 粗い 礫岩	北部床上 5cm 一部欠 68
40 礫	長 20.7 幅 13.4 厚 6.7	一部煤付着。残存重量 2940.2g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 礫岩	カマド西側床上 16cm ほぼ完形 88
41 石製機造品 白玉	径 1.18～ 1.12 厚 0.80～ 0.79	表裏両面は節理に沿った剥離面と見られ、研磨される。側面は穿孔と同方向の切削加工痕をそのまま残す。表裏面の孔径の差から、片面穿孔と見られる。重量 1.51g。孔径 0.33～0.30mm。	N5/ 灰 緻密 粘板岩(軟質)	西部床上 5cm 完形 18
42 石製機造品 白玉	径 1.21～ 1.18 厚 0.48～ 0.39 重 0.86	表裏両面は節理に沿った剥離面と見られ、表面は丁寧に、裏面はわずかに研磨。加工度の違いから、本来は 41 のように厚かったものを欠損後再生したか、あるいは加工中に薄くなってしまったものをそのまま完成品としたとも推測される。側面は穿孔と平行する切削加工痕をそのまま残すほか、表から裏に向かう剥離面が一面。表裏面の孔径差から、片面穿孔。孔径 0.34～0.33mm。	5B5/1 青灰 緻密 粘板岩(軟質)	西部床上 13cm 完形 19
43 石製機造品 白玉	径 1.16～ 1.10 厚 0.94～ 0.74 重 1.40	表裏両面は節理に沿った剥離面と見られるが、表面は段差を持って、裏面は凹面となって剥離する。研磨は表面がやや丁寧に、裏面はわずかに施される。側面は、穿孔と同方向の切削加工痕をそのまま残す。表裏面の孔径差から、片面穿孔。孔径 0.34～0.30mm。	2.5GY7/1 明オリーブ灰 緻密 粘板岩(軟質)	西部床上 12cm 完形 20
44 石製機造品 白玉	径 1.37～ 1.28 厚 0.42～ 0.25 重 0.80	表裏両面は節理に沿った剥離面と見られ、表面は段差を持って、裏面は平坦に剥離。表面は比較的丁寧に研磨されるが、裏面はごくわずかに施される程度で、42 のように、欠損品の再生か、加工中に薄くなってしまったものを完成品とした可能性がある。側面は穿孔と平行する切削加工痕をそのまま残すほか、裏面からの小さな剥離がある。薄いため孔径の差は見いだせないが、他の白玉から推測すれば、片面穿孔の可能性が高い。孔径 0.29～0.27mm。	N5/ 灰 緻密 粘板岩(軟質)	西部床直上 完形 21



第288図 権現山遺跡 SG5 区 SI-6 (3) 遺物

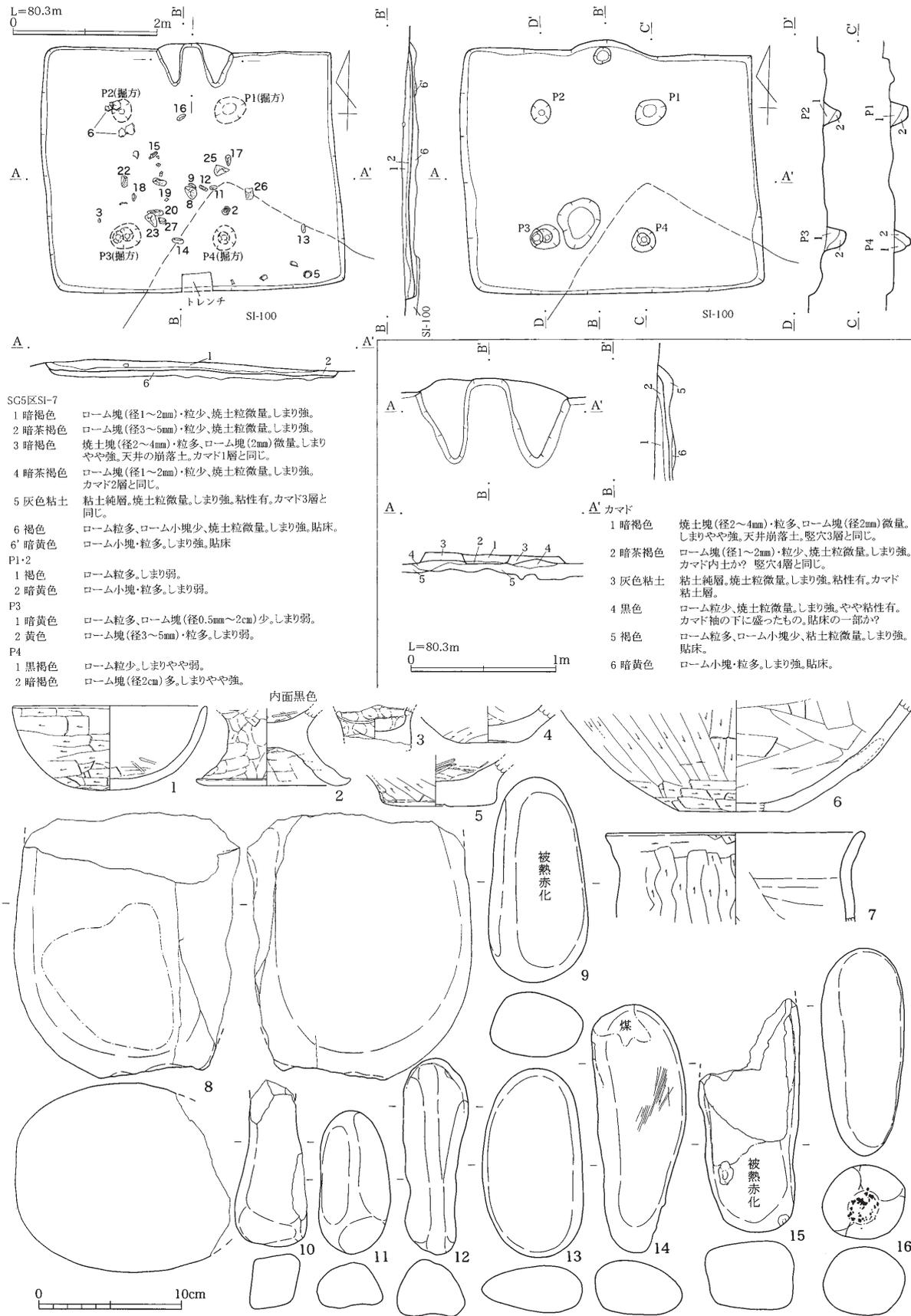
45 石製模造品 白玉	径 1.39 ~ 1.28 厚 0.61 ~ 0.37	表裏両面は節理に沿った剥離面と見られ、両面ともほぼ同様に研磨される。側面は切削加工痕と、切削に伴う小さな剥離面とが残る。表裏面の孔径の差から、片面穿孔と見られる。重量 1.26g。孔径 0.30 ~ 0.29mm。	5B6/1 青灰 緻密 粘板岩 (軟質)	西部床上 8cm 完形 22
46 石製模造品 白玉	径 1.34 ~ 1.29 厚 0.53 ~ 0.37	上下両面は節理に沿った剥離面と見られ、両面ともほぼ同様に研磨される。側面は切削加工痕と、切削に伴う小さな剥離面とが残る。表裏面の孔径の差から、片面穿孔と見られる。重量 1.08g。孔径 0.31 ~ 0.30mm。	N4/ 灰 緻密 粘板岩 (軟質)	西部床上 6cm 完形 23
47 石器 剥片	長 3.2 幅 2.4 厚 0.5	節理面に沿って剥離されたもの。加工痕は全く見られない。石製模造品の素材だろうか。重量 4.55g。	N5/ 灰 緻密 粘板岩 (硬質)	北部床上 8cm 完形

SG5 区 SI-7 (第289・290図、写真図版24・25)

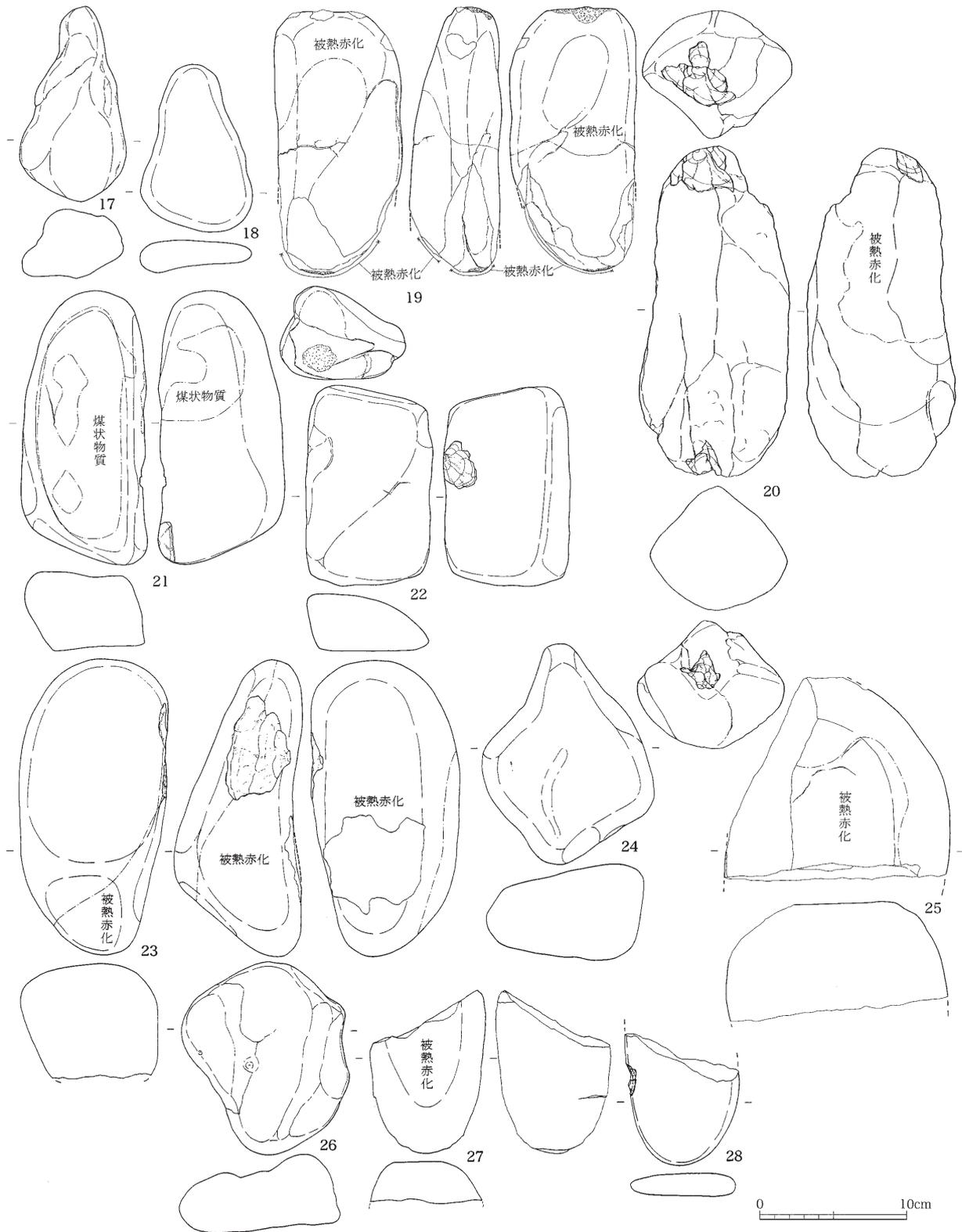
[位置] SG5 区北部の 16-16、17-16 グリッドに位置する。古墳時代の円筒形土坑 SK-47 が西側に近接する。南東で古墳中期の SI-100 を切る。

[規模と形状] 東西 4.04 × 南北 3.35m の東西に長い長方形で中軸は N-3° -W。壁はなだらかに外傾し、残

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第289図 権現山遺跡 SG5 区 SI-7 (1) 遺構・遺物



第290図 権現山遺跡 SG5区 SI-7(2)遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

存高は 6～13cm。床はほぼ平坦で、東側が少し低い。床面下 4～11cm の掘方底に細かな凹凸があり、ローム粒・塊を含む褐色土で全体を貼床する。P3 の東で 75×58cm×掘方から深さ 15cm の楕円状窪みを確認した。

主柱穴 P1～P4 は床面で確認できず、貼床下の掘方で確認した。P1= 径 44×35×深さ 25cm、P2=32×27×深さ 23cm、P3=40×34×深さ 31cm、P4=34×31×深さ 24cm (いずれも掘方からの深さ)。P1-P2 間が 1.48m、P3-P4 間が 1.34m、P1-P4 間が 1.77m、P2-P3 間が 1.71m で、南北柱間が東西柱間よりやや長い方形配置である。

[カマド]北壁中央にある。両袖幅 106cm、煙道先端から袖先端まで 60cm。貼床上に黒色土の 4 層を敷いた後、灰色粘土の 3 層で袖部を作る。火床面付近はほぼ平坦で、煙道は北壁より若干掘り込む程度である。1 層は焼土塊・粒が多く、天井内壁の崩落土と考えられる。

[覆土] 下層よりも上層に径 3～5mm 大のロームが多く混じる。

[遺物および出土状況] 建物中央部に編物石と礫が多い。土師器は少なく、甕が主体で杯または鉢などが少し混じり模倣杯(?) は 1～2 片だけみられた。2 は古墳時代終末期に極小化する以前の、後期後半の内面炭素吸着する高杯。土師器壺甕類は図化以外に底部が 3 個体分あり長胴甕はほとんどない。7 は内外面を磨かない甕。編物石と被熱礫が多い。緻密硬質なホルンフェルスの砥石(28) は、SG5 区では SI-7,15,22,29,100,116 と SD-101・SK-218 にあり、SG10 区 SI-12 などにもある。ホルンフェルス剥片は SG5 区 SK-141,143 にある。図化以外の土師器 176 片・1,754g の内訳は、杯 30 片・205g、高杯 1 片・14g、小形土器 3 片・42g、甕壺類 140 片・1,478g、甕 2 片・15g。SI-100 から混入した古い時期の遺物を少量含むかもしれない。

第 165 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-7 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.5 高 復 5.8	全体に精緻な調整。赤褐色土と白色土がマール状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデのち口縁～底部ケズリ。口縁部はほとんど削られており、口縁部のヨコナデは、ごくわずかししか残らない。内面体～底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのち体～底部わずかな多方向のミガキ。ミガキの単位は不明瞭だが、光沢は明瞭。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細粒少、白粗粒と赤細粒微量 やや硬質	口～底 1/2 周
2 土師器 高杯	高 残 5.3	外面脚部縦方向のケズリのちナデ。脚部上半は、縦方向のケズリのため、細かく面取りされたようになっており、ナデによっても消されずに残っている。内面杯部ナデ・ヘラナデのち疎らなミガキ。ミガキは円周方向に施されるものが多い。脚上端ナデ、脚中位～下半ヘラナデ後ヨコナデで、中位に組積痕が顕著。杯内面黒色処理。	5YR6/8 橙 やや緻密 白礫～微粒少、黒・透明礫微量 やや硬質	中央部床上 8cm 杯底～脚上半完存、脚下半 1/6 周 27
3 土製品 小形土器	高 残 2.6	浅い鉢形になるものと見られる。外面口縁～体部ナデ。指頭圧痕顕著。内面ナデで、指頭圧痕顕著。体～底部の整形のち、口縁部を新たに貼り付けたものと見られ、内面には組積痕が明瞭に残る。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 赤・黒・半透明粗粒多、白・透明粗粒少 やや硬質	西部床上 7cm 胴 1/3 周、底内面のみ 完存 9
4 土師器 壺	高 残 2.3 底 4.2	白色土がマール状に混じる胎土。外面胴部下端ケズリ、底部は荒いナデで、粘土の継ぎ目も残る。くぼみ底。内面胴部下端～底部強いヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂細～微粒少、白・黒・透明粗～細粒微量 やや軟質	胴下半～底完存
5 土師器 甕	高 残 3.2 底 7.8	外面胴部下端粗いケズリ、底部ナデ。底部は突出する平底で、中央がへこむ。内面底部ヘラナデ。一部にミガキ様のヘラ痕あり。外面一部煤付着。内面底部全体にコゲ付着。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 白粗～微粒少、黒礫微量 硬質	南壁際 底完存 14
6 土師器 甕	高 残 7.7 底 復 7.4	外面胴部下半～底部ケズリ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。胴部の粘土積み上げ休止による接合痕はケズリとヘラナデによりほとんど消せているが、休止前後の胴部の傾きが異なること、休止後に貼りつけた粘土の剥落、断面に見る接合痕などに表れている。外面胴部一部煤付着。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・赤・透明・砂微粒少、白・砂礫～細粒微量 やや硬質	P2 付近床上 7cm と P2 南側床上 6cm 胴下半 1/2 周 2、3
7 土師器 甕	口 17.8 高 残 6.2	外面口縁部ヨコナデのち胴部ケズリ、口縁部外面組積痕あり。内面口縁部ヨコナデのち胴部ナデ。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白・黒・透明微粒多、黒細粒微量 硬質	口～胴上半 1/6 周
8 石器 砥石	長 18.4 幅 15.5 厚 13.0 重 5.2kg	本来は、棒状の大礫であって、残存するのは 1/3 くらいかと推定される。表面中央付近が平滑な砥面であり、現存する礫表面の中央にあたることから、欠損後砥石として使用されたものと見られる。裏面中央にも平滑な面があるが、こちらは表面と比べるとやや荒く、砥面とまでは言えない。	5Y7/2 灰白 緻密 安山岩	中央部床上 9cm 完形 20
9 石器 編物石	長 14.1 幅 6.8 厚 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。ほぼ全体が被熱によりわずかに赤変している。重量 671.4g。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 流紋岩	中央部床上 5cm 完形 21
10 石器 編物石	長 残 11.1 幅 4.8 厚 3.5 重 残 315.6	河原石。特に加工の痕跡なし。表面の色の変化はほとんどないが、下半側の欠損は焼けはじけとも見られるため、全体に被熱している可能性がある。上半の欠損も被熱によるものかもしれない。	7.5Y7/1 灰白 緻密 安山岩	一部欠
11 石器 編物石	長 9.8 幅 4.8 厚 3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 223.4g。	2.5Y6/1 黄灰 やや緻密 安山岩	中央部床上 10cm 完形 23

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

12 石器 編物石	長 幅 厚	13.3 4.5 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 405.1g。	10BG3/1 やや緻密 流紋岩	中央部床上 8cm 完形 22
13 石器 編物石	長 幅 厚	13.0 6.9 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 412.7g。	5Y6/2 灰オリーブ やや緻密 安山岩	南東部 完形 29
14 石器 編物石	長 幅 厚	17.0 6.0 4.8	河原石。表面に一部擦痕あり。砥石として使用か？上端に煤のような黒色物質付着。重量 691.7g。	10Y5/2 オリーブ灰 緻密 ホルンフェルス	南部床上 6cm 完形 28
15 石器 編物石	長 幅 厚	残 15.9 6.0 4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。広い範囲が被熱により赤変しており、焼けはじけも 2ヶ所見られる。上半の欠損も被熱によるものかもしれない。残存重量 688.5g。	7.5Y5/2 灰オリーブ やや緻密 安山岩	中央部床上 6cm 一部欠 16
16 石器 編物石	長 幅 厚	14.3 5.7 5.1	河原石。下端は黒色物質が付着するほか、表面の磨滅が著しく、擦痕も見られる。素材の形状が変わるほどの敲打はないが、敲打として使用されたことがあったと推測される。全体が被熱変色？	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 安山岩	北部床上 8cm 完形 15
17 石器 編物石	長 幅 厚	13.1 7.1 4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 431.7g。	7.5Y7/1 灰白 緻密 礫岩	中央部 完形 24
18 石器 編物石	長 幅 厚	11.3 7.5 2.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 239.8g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 安山岩	中央部 完形 18
19 礫	長 幅 厚	17.8 8.5 5.3	河原石。上下両端に敲打あり。全体に強く被熱していると思われる、上半に著しい赤変、中位にヒビが入るほか、全体に表面の剥落が著しい。重量 1256.0g。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 流紋岩	中央部床上 3cm ほぼ完形 19
20 礫	長 幅 厚	22.4 10.1 8.7	大形。上下両端に敲打による剥離あり。裏面に被熱によると見られる赤変あり。重量 2195.3g。	2.5Y5/3 黄褐 粗い 流紋岩	中央部床上 6cm 完形 30
21 礫	長 幅 厚	18.5 8.3 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。一部煤のような黒色物質付着。赤変してはいるが、被熱しているのかもしれない。重量 1462.9g。	5Y6/2 灰オリーブ やや緻密 流紋岩	完形
22 礫	長 幅 厚	13.5 8.6 3.5	河原石。側面からの剥離 1枚あり。全体が、被熱により変色している可能性あり。重量 852.7g。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや緻密 流紋岩	中央部床上 5cm 完形 17
23 礫	長 幅 厚	20.0 10.0 7.5	裏面を中心に広い範囲が被熱・赤変しており、裏面には焼けはじけも見られる。カマドに使用されていた可能性あり。側面の剥離は被熱後のもの。重量 2215.3g。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 礫岩	中央部床上 6cm ほぼ完形 31
24 礫	長 幅 厚	14.8 11.6 6.9	河原石。特に加工の痕跡なし。一部黒色物質(煤か?)付着。重量 1308.3g。	5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 安山岩	完形 一括
25 礫	長 幅 厚	残 13.8 14.8 残 7.3	大形の礫の破片。表面中央の平坦面が被熱のためか赤変している。残存重量 1855.0g。	10YR8/2 灰白 やや緻密 花崗岩	中央部床上 9cm 破片 25
26 礫	長 幅 厚	13.1 11.3 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 868.6g。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 礫岩	中央部床上 10cm 完形 26
27 礫	長 幅 厚	残 11.0 残 7.5 残 2.7	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は被熱により著しく赤変している。残存重量 268.3g。	2.5YR4/3 にぶい赤褐 やや緻密 流紋岩	中央部床上 6cm 破片 32
28 礫	長 幅 厚	残 7.8 残 7.4 1.6	河原石。左側縁に、敲打によるものとも見られる剥離 1ヶ所あり。また、表面左側縁付近は、それ以外の部分に比べて平滑になっている。砥石として使用された可能性あり。残存重量 149.2g。	5Y5/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	一部欠 一括

SG5 区 SI-8 (第 291・292 図、写真図版 25・26・178)

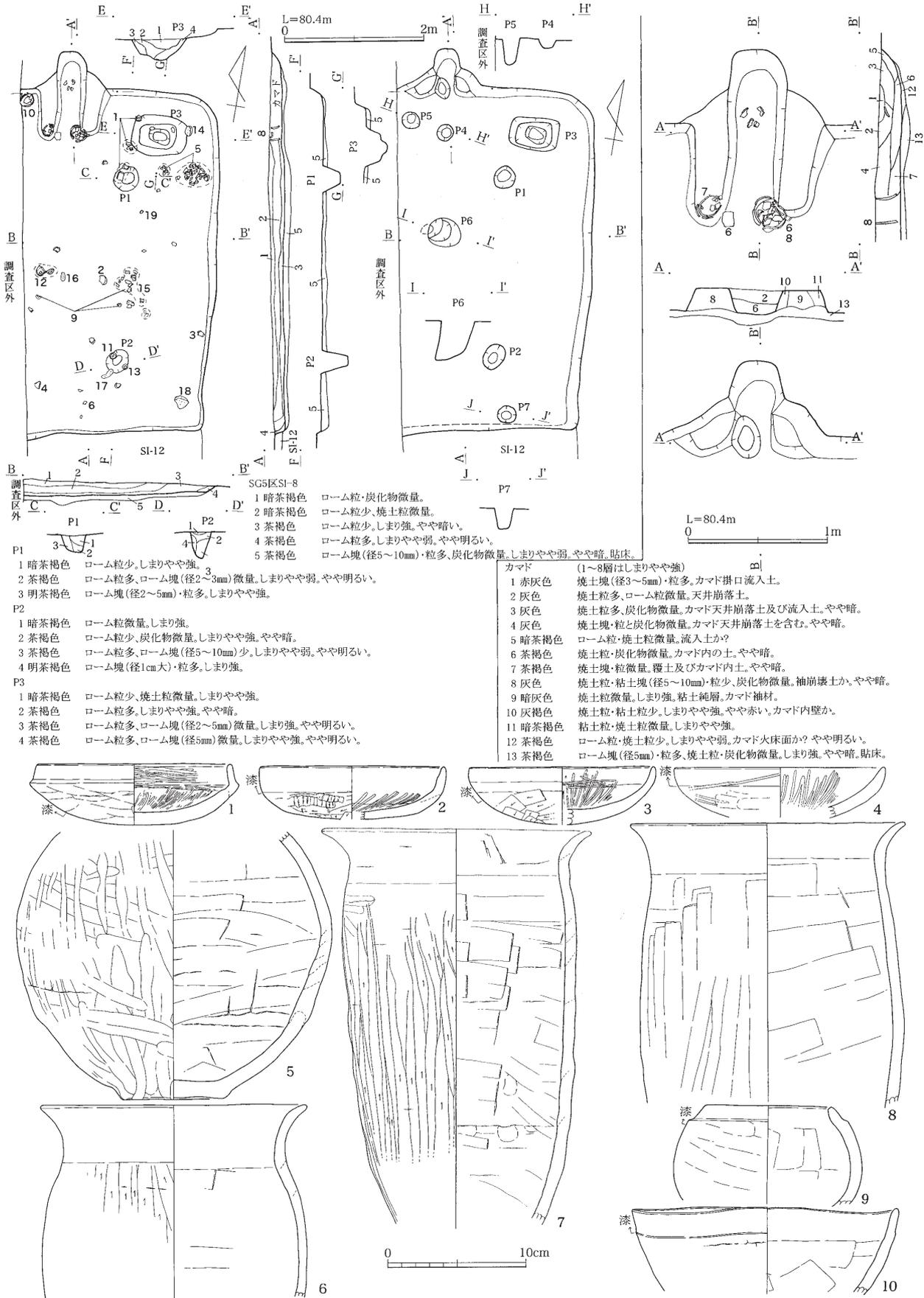
【位置】 SG5 区中央部北寄りの 15-16、16-16 グリッドに位置する。東に古墳中期末～後期初めの SI-9 が近接する。西半は調査区外。古墳中期末の SI-12 を南側で切る。

【規模と形状】 西半は調査区外となるが、平面方形と予想される。中軸線は N-10°-W。南北長 5.03m で、東西長は 2.74m 以上。壁は直線的に外傾し、残存高は 7～17cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。床面から掘方底面までの深さは 2～14cm で、ローム粒・塊の多い暗褐色土で全体を貼床する。

本来は 4 本主柱穴で、東側柱穴と推定される P1・P2 を調査した。P1 は径 35 × 37 × 深さ 26cm、P2 は径 30 × 34 × 深さ 38cm で、P1-P2 間は 2.63m。貼床除去後、カマド前面で P4・P5、中央で P6、南東隅で P7 の計 4 本を確認した。P4 は径 23 × 24 × 深さ 13cm、P5 は径 24 × 26 × 深さ 39cm、P6 は径 40 × 48 × 深さ 55cm、P7 は径 24 × 27 × 深さ 31cm で、P6 は斜めに掘られる。北東隅の貯蔵穴 P3 は壁が緩く外傾する東西軸の隅丸長方形で 52 × 79 × 床面から深さ 32cm。底面中央の 22 × 30 × 深さ 5cm が窪む。P3 覆土は自然埋没でローム粒が多い。

【カマド】 北東主柱穴の位置から判断して、北壁中央やや東よりに位置する。両袖幅 95cm、煙道先端から焚口まで 128cm。貼床整形後に灰褐色粘土主体の 8～11 層で袖部を構築し、両袖先端に倒立した土師器甕 7・8 で焚口部を補強する。東側の土師器甕 8 が中央寄りの位置にあることがやや不自然で、現地調査時の所見ではカマド崩落時にずれたと考えている。カマドを人為的に壊して甕を動かしたと考えることになるであろうが、そのように断定できるかどうかは不明瞭である。5～7 層は焼土が多く天井内壁崩落土及び流入土、焼土粒が多い粘土の 2・3 層が天井崩落土と考えられる。煙道は北壁から凸字状に 108cm 突出し、火床面

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第291図 権現山遺跡 SG5 区 SI-8 (1) 遺構・遺物

からなだらかに上がる。なお、掘方整形段階で、両袖基部に高さ3～5cmの地山を掘り残している。

〔覆土〕 レンズ状の自然堆積で、下層にローム粒が多く、第1・2層に炭・焼土を若干含む。

〔遺物出土状況〕 全域にある。東袖先端の甕(8)周辺に甕(6)、貯蔵穴の南東に潰れた丸甕(5)がある。

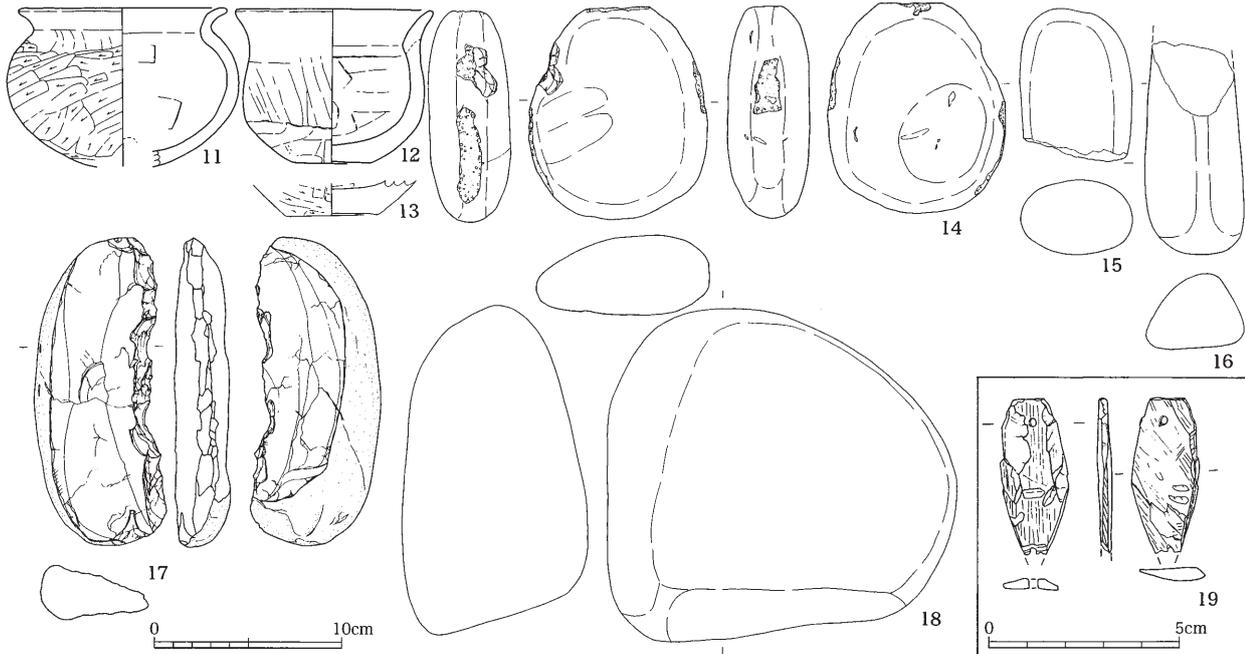
〔出土遺物〕 遺物は少ない。土師器は杯と甕が主体で、甑・鉢を少し含む。杯は漆仕上げが主体で、外面のミガキが衰退するが口縁部内面に横位ミガキが少し残る古墳後期中葉～後葉のもの。古墳中期後葉(本遺跡編年3段階)頃かと思われる混入遺物があり、重複するSI-12からの混入品も含むかもしれない。土師器鉢の一部(11・12・13)と剣形石製模造品19は中期の混入遺物。滑石製模造品がSG5区SI-8・100・116とSD-44(混入品)・SX-118およびSG10区SI-30・64aなどにあり、粘板岩製模造品はSG5区SI-6などにある。図化以外の土師器168片・1,281gの内訳は、杯64片・387g、甕壺類103片・869g、甑1片・25g。

第166表 権現山遺跡SG5区SI-8出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.8 高 4.4	外面口縁部ヨコナデ。体部丁寧なナデで、組積痕残る。内面体～底部放射状の密なミガキのち、口縁～体部上端横方向の密なミガキ。口縁～体部外面・内面全体漆仕上げ。内面体～底部クレター状に剥落する。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 白・赤・砂粗～微粒と透 明微粒微量 やや硬質	P3付近床土8～16cmと P1付近床土8cm 口2/3周、体～底完存 4、5、6
2 土師器 杯	口 復13.2 高 3.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面体～底部ナデ、口縁～体部ヨコナデのち体～底部疎らな放射状のミガキ。口縁部外面・内面全体漆仕上げと見られるが、良好に残るのは口縁部内外面のみ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 砂礫と赤・砂細粒微 量 硬質	中央部床土9cm 口～体1/4周 23
3 土師器 杯	口 復13.4 高 4.1	褐色土と白色土がマーブル状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキのち口縁部横方向の疎らなミガキ。外面口縁～体部、内面全体漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤礫～粗粒と白・赤 細～微粒少 硬質	東壁際床土1cm 口～体1/6周 33
4 土師器 杯	口 復15.0 高 残3.6	外面口縁部ヨコナデのち強いミガキのような沈線施文。体部ケズリのちナデのち強いミガキのような沈線施文。内面ヨコナデのち放射状の疎らなミガキ。外面口縁部、内面全体漆仕上げ。口縁部端は磨滅著しい。	2.5YR4/4 にぶい赤褐 やや緻密 黒細粒と白微粒と細 砂粒多 硬質	南部床土4cm 口～体1/6周 37
5 土師器 甕	高 残19.2 底 7.5 胴 22.5	褐色土と白色土がマーブル状に混じる胎土。外面胴部上半横方向のナデ、下半縦方向のケズリのち胴部全体縦方向の光沢のあるナデ。胴下半に粘土紐積み上げ休止による接合痕あり。底部ナデ。内面ヘラナデで、組積痕残す。全体に整形が甘く、接合部分は明瞭なうえ、組積の単位が器面の凹凸として残っている。	10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 白細粒多、黒・砂粗 粒少、赤粗粒微量 やや軟質	北東部床土3～5cm 胴上半1/2周、胴下半 ～底ほぼ完存 10、12
6 土師器 甕	口 復19.0 高 残13.9	外面胴部軽いナデのち縦方向の軽いケズリ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。全体にもろく、内面は剥落著しい。外面および口縁部内面にはわずかに灰白色粘土が付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂礫と白・黒・半透 明粗粒多 やや軟質	カマド東袖付近床土1cm と南部床土7cm 胴上半1/3周 3、35、K、3K、41K
7 土師器 甕	口 29.2 高 残28.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部軽いナデのち縦方向の光沢を持つケズリ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部ヘラナデで組積痕、指頭圧痕残る。全体の整形はやや荒く、組積みの単位が、胴部の凹凸として残っている。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明礫と白細粒 と白・黒・透明微粒少 硬質	カマド西袖底直上で逆位 口～胴下半完存 K、K40
8 土師器 甕	口 19.4 高 残20.0	外面胴部縦方向のヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラナデ。胴部外面一部に被熱による赤変あり。	7.5YR7/8 黄橙 やや粗い 白・黒細～微粒多、 白粗粒少 やや硬質	カマド東袖付近床土1cm で逆位 胴上半一部欠 K、K41
9 土師器 鉢	口 9.0 高 残7.2 最大 13.4	褐色土と白色土がマーブル状に混じる胎土。外面体部ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ヘラナデ。口縁部は内向きの面となっているが、これは磨滅による変形の可能性あり。口縁部外面・内面全体漆仕上げと見られるが、残存部分は少ない。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・透明細粒と 砂細粒少、赤粗～細粒微量 やや軟質	中央部床土4～14cm 口完存、体1/2周 18、22、27
10 土師器 鉢	口 19.0 高 残6.2	口縁部が外傾する横椀杯類似の口縁部形状。外面体部ナデ、組積痕わずかに残る。口縁部内外面ヨコナデのち内面体部ヘラナデ。外面口縁部および内面全体漆仕上げ。薄く剥かれるように欠損する。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤・砂粗～細粒少、 砂礫微量 やや硬質	カマド西側床土3cm 口～体上半ほぼ完存 1
11 土師器 鉢	口 復11.0 高 残8.4 最大 復12.2	小形壺のような土器。口縁部内外面ヨコナデ。外面体部軽いナデのち斜め方向のケズリ。内面体部ヘラナデ。内面クレター状の剥落著しい。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤・黒細粒と白・赤 微粒多、赤礫少 やや軟質	P2付近床土5cm 口～胴下半1/3周 30
12 土師器 鉢	口 復10.4 高 8.1 底 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体部下半ケズリのち体部全体縦方向のナデのち体部中位横方向のナデ。体部下半はナデによる粘土のはみ出し、ケズリ時の表面の荒れがそのまま残るなど、調整は雑。底部ナデ、わずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。頸部に組積痕残る。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・半透明粗粒少、黒・ 赤粗粒多 やや軟質	西部床土1cm 胴上半1/4周、胴下半 1/2周、底完存 26
13 土師器 鉢	高 残1.8 底 5.0	小形壺ないし小形甕の可能性あり。外面胴部下端～底部ケズリ、底部はわずかにくぼむ。ケズリは荒く、底部はいびつな円となる。内面底部ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒少、砂礫 と白・透明粗粒と砂微粒微量 やや硬質	P2付近床土6cm 底完存 31
14 石器 磨石	長 11.1 幅 9.3 厚 4.3	表面左側中央に溝状の2本の研磨痕、裏面右下に楕円形の研磨痕あり。ともに凹面。周縁に敲打痕と、それに伴う剥離あり。重量425.0g。	2.5Y7/2 灰黄 粗い 安山岩	貯蔵穴P3付近床土7cm 完形 13
15 石器 編物石	長 残8.0 幅 5.9 厚 3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量284.4g。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 安山岩	中央部床土4cm 一部欠 21

第8章 権現山遺跡 SG5 区

16 石器 編物石	長 残 11.0 幅 5.2 厚 4.0	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 322.9g。	10YR5/1 褐灰 緻密 安山岩	中央部床上 3cm 一部欠 25
17 石器 礫器	長 17.2 幅 6.9 厚 2.9	扁平、棒状の河原石を素材とし、両面を大きく剥離したのち、刃部を作出する。両面調整だが、調整は表面に集中する。重量 410.4g。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 ホルンフェルス(泥岩起源)	P2 付近床上 6cm 完形 38
18 礫	長 18.4 幅 17.4 厚 9.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 4400g。	5Y7/2 灰白 緻密 安山岩	南東部床上 3cm 完形 39
19 石製 構造品 剣形	長 残 4.1 幅 1.8 厚 0.35 重 残 4.0	全体に荒いつくりで、表面左右と裏面の大部分に剥離面を残す。光沢の弱い条線状の研磨痕で、表面は縦に、裏面は斜めに研磨される。側縁は上端が辺に直交する研磨、両側縁上半は素材のために鋭い縁辺となり、両側縁下半は辺に平行する研磨が施される面となる。孔径から表面からの穿孔と見られ、孔径は表側 2.15mm裏側 2.38mmである。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 滑石	中央部床上 14cm 一部欠 14



第 292 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-8 (2) 遺物

SG5 区 SI-9 (第 293・294 図、写真図版 26・27・178)

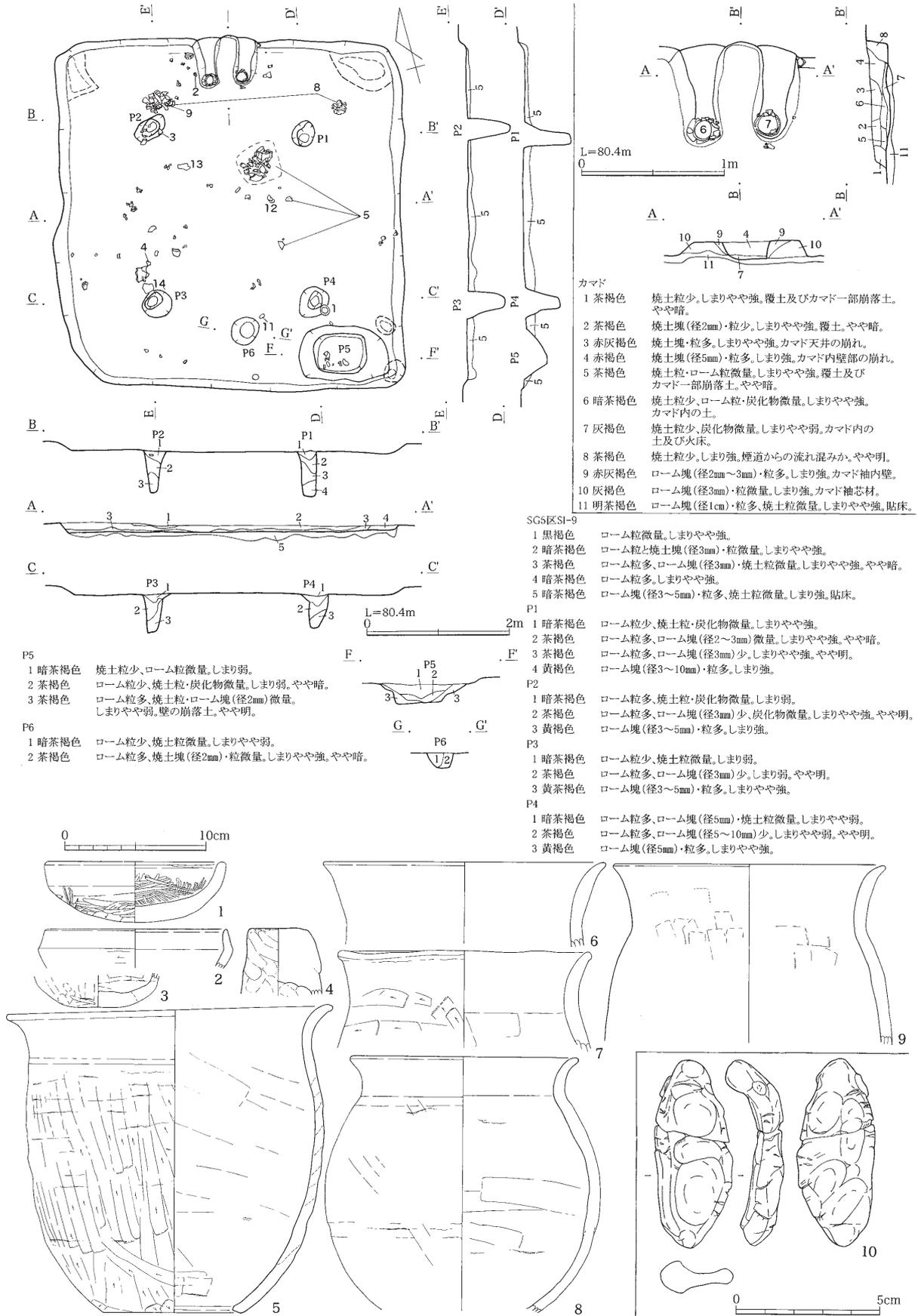
【位置】 SG5 区中央部北寄りの 15-16、16-16 グリッド。西に古墳後期の SI-8 と中期の SI-12、東と南東に古墳後期の SI-10・15 がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 東西 4.68 × 南北 4.90m のほぼ方形で、南北の中軸線は N-16-E。壁は直線的に外傾し、残存高は 4～14cm。床はほぼ平坦で、全体が堅く締まる。掘方は床面から深さ 2～14cm で底に緩い凹凸があり、北西と北東の隅がやや深い。ローム粒・塊の多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。支柱穴 4 本は、P1 が径 36 × 30 × 深さ 64cm、P2 は径 39 × 29 × 深さ 59cm、P3 は径 42 × 38 × 深さ 54cm、P4 は径 46 × 38 × 深さ 46cm で、北側の柱穴がやや深い。柱間は P1-P2 間が 2.14m、P3-P4 間が 2.26m、P2-P3 間が 2.44m、P1-P4 間が 2.26m で、ほぼ方形に配置する。南中央の壁から 50cm 北にある入口ピット P6 は径 41 × 35 × 深さ 22cm。

南東隅にある貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形で、124 × 73 × 床面から深さ 28cm。床面から約 15cm 下には東西で幅 20～30cm、南北で幅 8～10cm の平坦面が全周する。平坦面内側の規模は 73 × 56cm。平坦な長方形底面から壁がやや外傾して上がり、平坦面となってからやや急に立ち上がり床に至る。P5 の覆土は下層ほどローム粒が多く、各層に少量の焼土を含む。

【カマド】 北壁ほぼ中央に、貼床整形後に構築している。削平され、床面から 10～15cm ほどだけが残る。両袖幅 85cm、煙道先端から焚口部まで 73cm。灰褐色粘土主体の 9・10 層で構築した両袖の先端には、西に 6、東に 7 の土師器甕を倒立して補強している。内壁の 9 層は燃焼による焼土化が著しい。火床はほぼ平坦で、

第3節 古墳時代の竪穴建物跡



第293図 権現山遺跡 SG5区 SI-9(1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

竪穴床面よりわずかに下がる。焼土と炭化物を含む流入土の6・7層、その上に天井内面が崩れた3・4層が堆積する。煙道先端は北壁ラインとほぼ同じで、直線的に上がる。

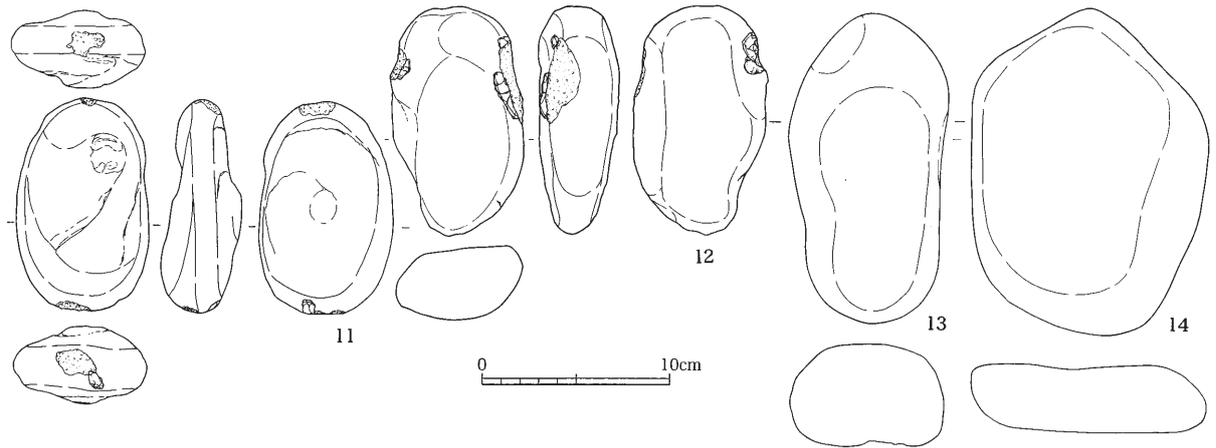
〔覆土〕自然堆積で、全体的にしまりが良く、3・4層にはローム粒が多い。

〔遺物出土状況〕カマド南方の床付近に甗(5)が潰れている。カマド南西の床付近にも土師器甗の胴部破片がまとまっているが、復原・図示はできなかった。ここには甗8と9の破片が混在している。1は完形の杯で、床から少し浮くが正位で出土した。貯蔵穴P5の底付近に土器片が入っていた。南西部の遺物は床から浮くものが多いが、14は床面に置いた自然石で、作業用の台石に使ったとも考えられる。

〔出土遺物〕遺物は少ない。杯と甗・壺類の破片が主体で、杯の個体数が多い。漆仕上げの杯は少なめである。胎土が黒色で漆仕上げの身摸倣形杯や半球形杯は一定数が接合できたが、口縁部が無いため図示できなかった。小形壺は図示した3の他に同様の破片が1点ある。土製支脚(4)は、SG5区SI-15とSG10区SI-37にも例がある。10は指頭痕が目立つ焼粘土塊。図化以外に球胴に近い砂質胎土の甗1点、大形壺底部(平底)1点、長胴甗片などがある。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計306片・2,228gで、内訳は杯84片・394g、高杯1片・11g、壺甗類214片・1,709g、甗3片・92g、小形土器2片・11g、焼粘土塊2点・11g。

第167表 権現山遺跡 SG5 区 SI-9 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.6 高 4.2	やや雑な作り。外面体部ナデ、底部ケズリのち体部ヘラ状工具の端部によると見られる疎らなナデ。工具の角度の違いか、ミガキ状になるところと条線のようになるところあり。口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデのち口縁部わずかな横方向のミガキ、体～底部上から見て三角形となる密なミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤粗粒多、 砂礫微量 やや硬質	P4 付近床上 4cmで正位 ほぼ完形 2
2 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 3.8 最大 復 13.5	外面体部ケズリ、口縁部ヨコナデ、内面口縁～体部ヨコナデ。漆仕上げの可能性はあるが、不詳。	2.5Y4/2 暗灰黄 やや粗い 白細粒多、砂粗～細 粒少 硬質	カマド西側床上 3cm 口～体一部 59
3 土師器 小形壺	高 残 2.5 底 3.4	外面胴部下半～底部ナデ。丸味を持つ平底。内面胴下半～底部ヘラナデ。底部中央に、焼成時の混和材の膨張による亀裂あり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白微粒多、砂細粒少 やや硬質	P2 付近床上 7cm 胴下半～底 3/4 周 48、SI-12 覆土
4 土製品 支脚	上面 4.2 高 残 4.6	外面体部ナデ、上面ヘラナデ。内面ナデ。上面が平坦に仕上げられる以外は内外面とも調整が荒く、形もいびつ。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白粗 粒少 やや軟質	南西部床上 4cm 上半ほぼ完存 15
5 土師器 甗	口 23.0 高 21.5 底 9.8	外面胴部縦方向のケズリ。胴下半には、積み上げ休止による接合痕があり、この部分で角度が変化する。胴部上半には紐積痕が良く残る。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデのち胴部ヘラナデ。胴部には、紐積痕がわずかに残る。底部は直線的に面取りされるが、焼成後に削られて作出された部分もあるように見られる。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 粗～細砂粒多、赤粗 ～細粒微量 やや軟質	中央部床上 2～3cmと南 部床上 2cm 胴 3/4 周、底完存 6、23、24、30、74、 一括
6 土師器 甗	口 復 19.6 高 残 5.7	砂を多量に含む胎土のため、表面の磨滅が著しく、調整を明確にしえないところが多い。口縁部内外面ヨコナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 砂粗～細粒多、砂礫 少、白・透明細粒微量 やや軟質	カマド西袖底直上で逆位 口 2/3 周 64
7 土師器 甗	口 17.6 高 残 7.1	外面口縁部ヨコナデのち胴部上端ケズリ、内面胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。口縁部外面被熱による赤変あり。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 黒微粒多、白・黒・ 灰色粗粒と砂粗～細粒多、砂礫 微量 やや硬質	カマド東袖底上 4cmで逆 位 口完存 66
8 土師器 甗	口 復 15.8 高 残 17.8 最大 復 19.0	外面は細かく剥落、内面はクレーター状に剥落しており、調整は不明確。外面胴部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部下半に粘土積み上げ休止による接合痕があり、内画面に継ぎ目、器厚の変化が認められる。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒細粒と砂礫少、 赤粗～細粒微量、 やや硬質	北部床直上～床上 4cm 口～胴下半 1/2 周 49、51
9 土師器 甗	口 18.8 高 残 12.6	砂を多量に含む胎土のためか、表面の磨滅が著しく、調整を明確にしえないところがある。外面胴部縦方向のヘラナデ、もしくはケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ。胴部外面被熱により赤変しているところあり。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂粗～細粒多、砂礫 と白・透明粗粒微量 やや軟質	北部床直上 口～胴上半 1/3 周 49
10 土製品 焼粘土塊	長 6.5 幅 2.7 厚 1.1 重 15.9	白色土と褐色土とがマール状に混じる胎土。表面には、指頭圧痕と、それと同時に生じた粘土の亀裂が目立つ。	7.5YR6/8 橙 緻密 赤細粒微量 やや軟質	完形
11 石器 敲石	長 11.2 幅 7.0	河原石。上下両端に敲打痕あり。重量 388.4g。	5B6/1 青灰 やや緻密 安山岩	南部床上 3cm 完形 6
12 石器 編物石	長 12.0 幅 6.9 厚 4.2	河原石。上半両側面に敲打集中。敲石の可能性もあるが、敲打面が凹面となり、紐をかけることを意識しているように見られることから、編物石とした。重量 469.3g。	10Y6/1 灰 緻密 安山岩	中央部床上 3cm 完形 26
13 礫	長 16.3 幅 8.3 厚 6.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1098.9g。	7.5YR6/1 褐灰 やや緻密 安山岩	中央部床上 3cm 完形 43
14 礫	長 17.1 幅 12.4 厚 3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1338.7g。	5Y7/2 灰白 緻密 玢岩	P3 付近床直上 完形 12



第 294 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-9 (2) 遺物

SG5 区 SI-10 (第 295・296 図、写真図版 27・178)

〔位置〕 SG5 区中央部北寄りの 16-16 グリッド。西に古墳中期末～後期初めの SI-9、南西に時期不明の SK-81 と古墳時代の SK-82 がある。試掘トレンチで中央が削られる。

〔規模と形状〕 東西 3.89 × 南北 3.99m。隅部がやや丸い方形で、南北の中軸線は N-4° -E。壁は直線的に外傾し、残存高は 13 ～ 17cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方底面は四隅が床面より 6 ～ 10cm 窪み、ローム粒が多い明褐色土で貼床を施す。

主柱穴 4 本は P1= 径 25 × 30 × 深さ 30cm、P2=32 × 35 × 深さ 35cm、P3=27 × 29 × 深さ 46cm、P4=30 × 32 × 深さ 46cm で、南の P3・4 が深い。P1-P2 間 =1.96m、P3-P4 間 =2.05m、P2-P3 間 =2.05m、P1-P4 間 =2.00m の方形配置。南壁際中央の入口ピット P6 は径 29 × 34 × 深さ 34cm。

北西隅の P5 が貯蔵穴と考えられている。ただし、大きさ・形状・主軸方向・覆土状況からみて貯蔵穴とするにはやや疑問も残る。P5 は南北軸の隅丸長方形で、南と北は北西主柱穴と壁に近接する。南北 55 × 東西 35 × 深さ 22cm の底面椀状で、壁はなだらかに上がり、覆土 1 ～ 3 層にローム粒の混入が目立つ。

〔カマド〕 北壁中央にあり、貼床整形後に構築する。両袖幅 92cm、煙道先端から焚口まで 102cm。袖は灰褐色粘土主体の 8 ～ 10 層で構築し、内壁の 10 層は被熱で焼土化が著しい。東袖先端に土師器甕 (5) を倒立して焚口を補強する。火床はほぼ平坦で、竪穴床よりわずかに窪む。燃烧部は流入土 3 ～ 7 層の上に天井の崩れた 1・2 層が堆積する。煙道は北壁より 45cm 突出し、火床面からなだらかな段をもって上がる。

〔覆土〕 レンズ状自然堆積で、1 ～ 3 層に焼土粒微量と遺物多数を含む。下層の 4・5 層はローム粒が多い。

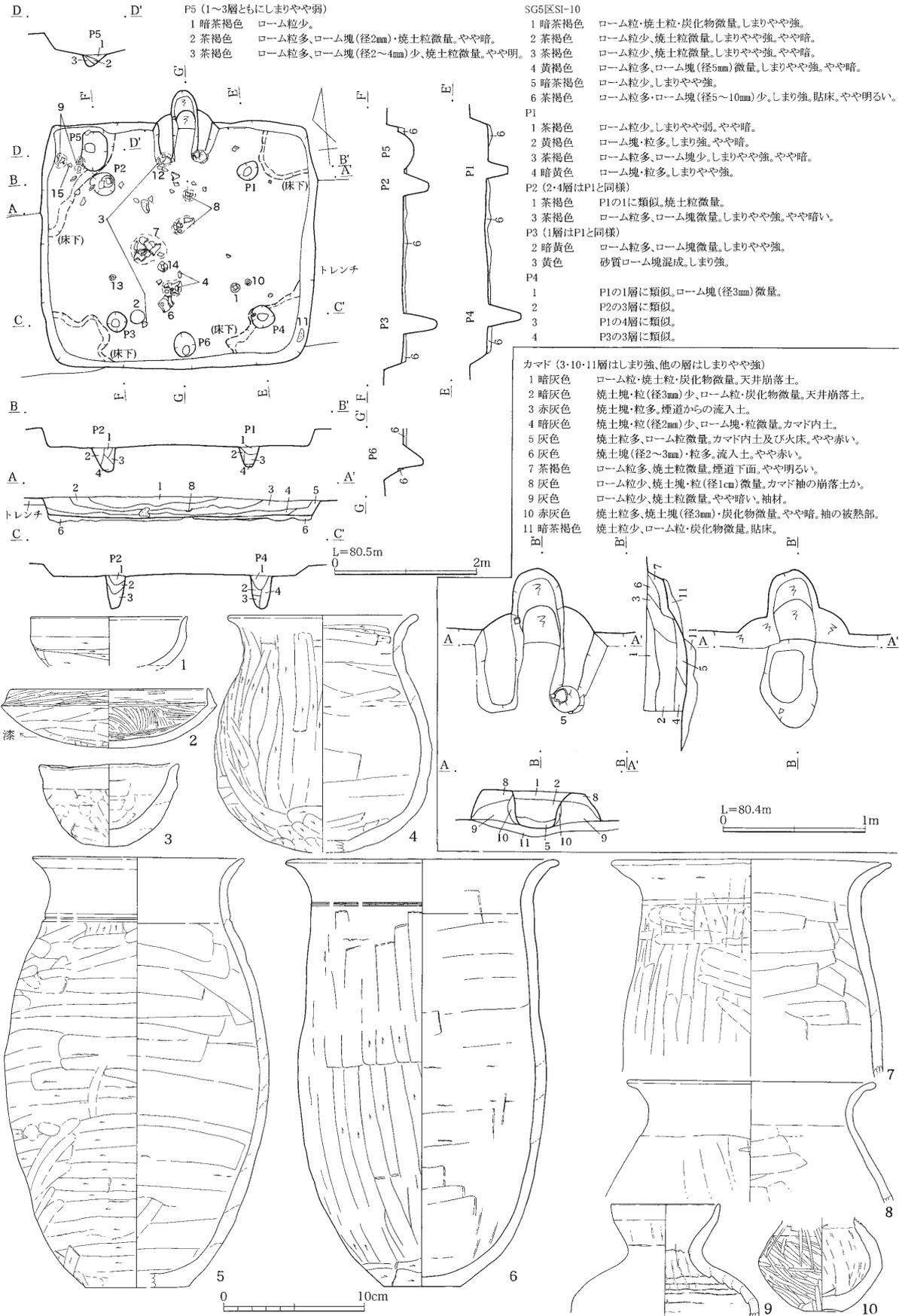
〔遺物出土状況〕 中央部に多い。一般に貯蔵穴周辺に土器が多いので、北西の P5 周辺にも土器が多い点は、やや不整形な P5 を貯蔵穴とみなす根拠になるかもしれない。1 と 10 は床から浮いて正位で出土した。

〔出土遺物〕 やや少ない。身模倣形杯 (2) が少なく、不掲載破片中にもほとんどない。甕がやや多く、杯と甕も目立つが、甕破片は復原図示できなかった。図示しなかった小形土器の 1 点は、土製支脚の上部破片の可能性もある。焼粘土塊は特に大きな 1 点を図示した (15)。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計 146 片・1,629g で、内訳は杯 36 片・324g、高杯 3 片・85g、壺甕類 71 片・693g、甕 30 片・481g、小形土器 2 片・33g、焼粘土塊 4 点・13g。混入遺物は中期末頃の椀形杯・小形壺・高杯などがある。確認調査時のトレンチ TX16 で出土した土師器粗製杯・高杯・大形甕は、SI-10 に伴う可能性もある (第 356 図 3・6・7)

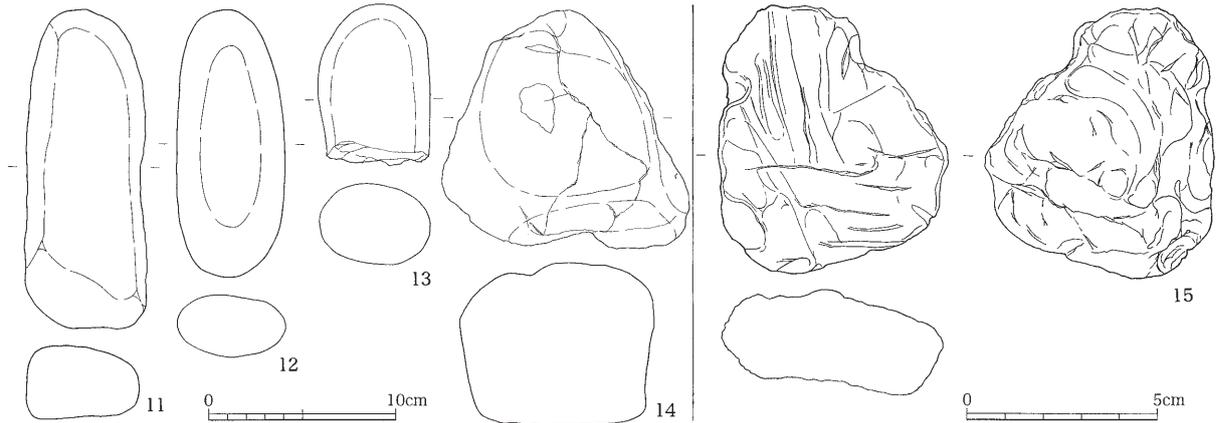
第 168 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-10 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.0 高 残 3.5	外面体部ケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ。内面は小さなクレーター状に剥落しているところが多い。下半は、紐積のつなぎ目から欠損していると見られる。	7.5YR7/6 橙 緻密 赤・黒細粒と白微粒少 やや軟質	南東部床上 7cm 正位 口～体ほぼ完存 4

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第295図 権現山遺跡 SG5 区 SI-10 (1) 遺構・遺物



第296図 権現山遺跡 SG5区 SI-10(2) 遺物

2 土師器 杯	口 13.8 高 4.1 最大 15.0	外面体~底部ケズリのち体部ナデ、口縁部ヨコナデのち密なミガキ。内面ヨコナデのち体~底部多方向のミガキのち口縁~体部横方向のミガキ。内面のミガキはやや疎らで、口縁部上半にはミガキがない。口縁部ほぼ全周が欠損するが、磨滅してはいない。外面口縁~体部、内面全体漆仕上げ。漆はわずかしが残存していない。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・砂粗~細粒少、 砂礫微量 やや硬質	南部床上 12cm逆位 ほぼ完形 1
3 土師器 小形土器	口 9.8 高 5.8 底 3.4	荒いつくり。外面体~底部荒いナデ。指頭圧痕・粘土の皺顕著。底部はいびつな平底。内面体~底部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 細砂粒多、透明細粒微量 やや軟質	カマド西袖付近床上 17cmと南部床上 11cm ほぼ完形 20、33
4 土師器 甕	口 13.4 高 残 16.5 最大 15.2	外面口縁部ヨコナデのち体~底部ケズリ。組積を示す器面の凹凸が顕著で、継ぎ目も部分的に残る。底部は丸底だろう。内面体~底部ヘラナデ、口縁部ヘラナデのちヨコナデで、ごく一部に横方向のケズリがある。外面は、部分的に表面の剥落あり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白細~微粒と透明細粒多、白礫と黒細粒と赤粗粒微量 やや硬質	中央部南寄り床上 7~12cm横位 口~胴上半ほぼ完存、胴下半~底 3/4 周 3、8
5 土師器 甕	口 14.8 高 底 30.3 底 復 7.2 最大 18.4	外面胴部上半縦方向のケズリのち横方向のナデ、下半横方向のケズリのち部分的にナデ。器壁には、組積の痕跡である凹凸が残るほか、粘土の継ぎ目も部分的にある。底部はケズリで、平底。口縁部ヨコナデで、下端の胴部との境は沈線状にへこむ。内面胴~底部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面胴部上半~中位の約 1/2 に煤付着。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗粒と白細~微粒と黒微粒多 硬質	カマド東袖底上 25cmで逆位 底一部欠損 41
6 土師器 甕	口 19.0 高 復 30.0 底 5.4	口縁~胴上半と胴下半~底部はそれぞれ接するところがないが、調整や径などから器高を復原した。外面胴部縦方向のケズリのち上半のみ縦方向のヘラナデ、底部はナデで、平底。口縁部ヨコナデ。内面口縁~底部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。胴部外面には、灰褐色粘土が薄く付着する。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒・赤粗粒多、 砂礫少 やや軟質	南部床上 4cm横位 口~底一部欠 2、UT-TN-SG TX16-16SI、UT-TN-SG TX16-16 No.2
7 土師器 甕	口 19.5 高 残 15.3	口縁部が最大径となる。外面胴部縦方向のケズリのち胴部上端横方向のナデ、上半~中位縦方向のナデ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのち胴部ヘラナデ。外面胴部中位一部に白色粘土付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い 白・黒・赤礫と砂粗粒多 硬質	中央部床上 9cm 口~胴上半ほぼ完存 6
8 土師器 甕	口 復 17.2 高 残 8.4	器厚薄い。外面胴部縦方向のナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部ヘラナデ。被熱によると見られる赤変、表面の剥落が一部にあり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白細粒多、透明細粒少 やや硬質	中央部床上 10~13cm横位 胴上半 1/6 周 11、12、UT-TN-SG TX16-16SI
9 土師器 壺	口 復 7.6 高 残 8.0 最大 復 13.0	外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半~胴部上半丁寧なナデ。口縁部下半には、しぼり目のような粘土の皺と、ヘラの当たりあり。内面胴部上半ナデで、組積痕顕著。口縁部ヨコナデ。古墳中期の遺物が混入。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒細粒多、赤粗~細粒少 やや軟質	P5 付近床上 9cmと北西部床上 19cm 口~胴上半 1/3 周 29、31、UT-TN-SG TX16-16SI
10 土師器 小形壺	口 残 6.0 高 残 6.6 底 2.5	外面胴~底部ナデ・胴部上端ヨコナデのちやや密なミガキ。胴部は斜め方向のち部分的に縦方向のミガキを施す。底部小さくくぼむ。内面頸部ヨコナデ、胴~底部ヘラナデで、上半は軽く、下半は丁寧に施される。古墳中期の遺物が混入。	2.5YR7/8 橙 やや緻密 白細粒と赤粗~細粒少 やや軟質	南東部床上 5cm 胴~底ほぼ完存 5
11 石器 編物石	長 16.8 幅 6.5 厚 4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 895.1g。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	東壁付近底上 11cm 完形 37
12 石器 編物石	長 14.1 幅 5.6 厚 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 450.9g。	5Y6/1 灰 やや緻密 安山岩	カマド西側床上 17cm 完形 39
13 石器 編物石	長 残 8.5 幅 5.8 厚 4.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 349.3g。	5Y7/1 灰白 やや粗い 安山岩	中央部南寄り床上 9cm 一部欠 34
14 礫	長 12.5 幅 13.0 厚 9.1	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は全体的に被熱のためかわずかに赤変しており、特に図の左端付近が顕著。表面の数ヶ所に焼けはじけと見られる小さな欠損あり。残存重量 1863.6g。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 安山岩	中央部床上 1cm ほぼ完形 35
15 土製品 焼粘土塊	長 7.0 幅 6.0 厚 2.3 重 68.5	表面は皺が顕著である。整形はナデと見られるが、図の表面側は、ヘラ状工具によると見られる直線状の工具痕が残る。表面の 1/2 ほどは焼成時に炭素を吸着したためか、黒っぽく変色している。	10YR8/4 浅黄橙 粗い 赤粗粒と砂細粒少、白細粒と砂微粒微量 軟質	北西部床上 1cm 完形 30

SG5区 SI-11 (第297・298図、写真図版 28・43・178・179)

[位置] SG5区中央部北よりの 15-17、16-17 グリッドに位置する。西側 9m に古墳後期の SI-10 がある。古墳後期の溝 SD-41 と中期の溝 SD-42 が中央を「人」の字状に切り、SI-11 → SD-42 → SD-41 の順になる。

第8章 権現山遺跡 SG5 区

時期不明の SD-148 に北西部を切られる可能性もあるが、試掘トレンチが入っているため前後関係は不明。

【規模と形状】 東西 7.67 × 南北 7.37m の方形で、南北の中軸線は N-3° -W。壁は外傾し、残存高は 20 ～ 28cm。床面はほぼ平坦で、全体的に硬くしまる。掘方は床面から深さ 2 ～ 18cm で底面に緩い凹凸があり、ローム粒・塊の多い明黄色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴 P1 ～ P4 のうち P1・P2 はトレンチ、P4 は SD-42 に上部を切られる。P1 は径 36 × 46 × 深さ 63cm (床面から推定 76cm)、P2 は径 50 × 54 × 深さ 60cm (床面から推定 71cm)、P3 は径 45 × 46 × 深さ 61cm、P4 は径 38 × 42 × 深さ 30cm (床面から推定 62cm) で、南側の P3・P4 に比べ北側の P1・P2 の方が深い。P1-P2 間が 3.97m、P3-P4 間が 3.87m、P1-P4 間が 3.94m、P2-P3 間が 3.95m でほぼ同じく、柱穴を方形に配置する。

貼床除去後、南西主柱穴 P3 の 40cm 北で 25 × 25 × 掘方から深さ 15cm の P7 を確認した。貼床除去後に南部で確認した幅 23 ～ 30cm ・長約 5m の壁溝 D1 は、床面では確認できなかった。貼床除去後、南壁中央で壁に直交して確認した間仕切溝 D2 は長 123 × 幅 19 ～ 24cm で、深さは不明(10cm 程度?)である。

貯蔵穴は 2 箇所、南東隅から北 2m の P5 と西 1.5m の P6 である。P5 は南北軸の隅丸長方形で、鍋底状底面から壁が緩く上がり、63 × 118 × 床面から深さ 29cm。P6 は東西軸の隅丸長方形で、平底で壁が直線的で、58 × 80 × 床面からの深さ推定 47cm。P5 は上層に焼土、下層にローム粒が多い。P6 の最上層に炭粒を含む。SG5 区では SI-11・19・25・29・100・137 に 2 箇所の貯蔵穴があり、SI-28 もその可能性を持つ。本書掲載の他地区では、SG10 区 SI-6 や磯岡 SG9 区 SI-49 などが複数貯蔵穴を持つ。

【火処】 確認できなかった。古墳中期後葉なので炉が想定できるが、SD-41・42 か確認調査トレンチに壊されたと思われる。

【覆土】 覆土は概ね自然堆積で、壁周辺の 3・4 層に焼土粒や炭化物を含み、焼土塊も所々確認されている。火災建物の可能性がある。火災建物は SG10 区 SI-66 などがある。

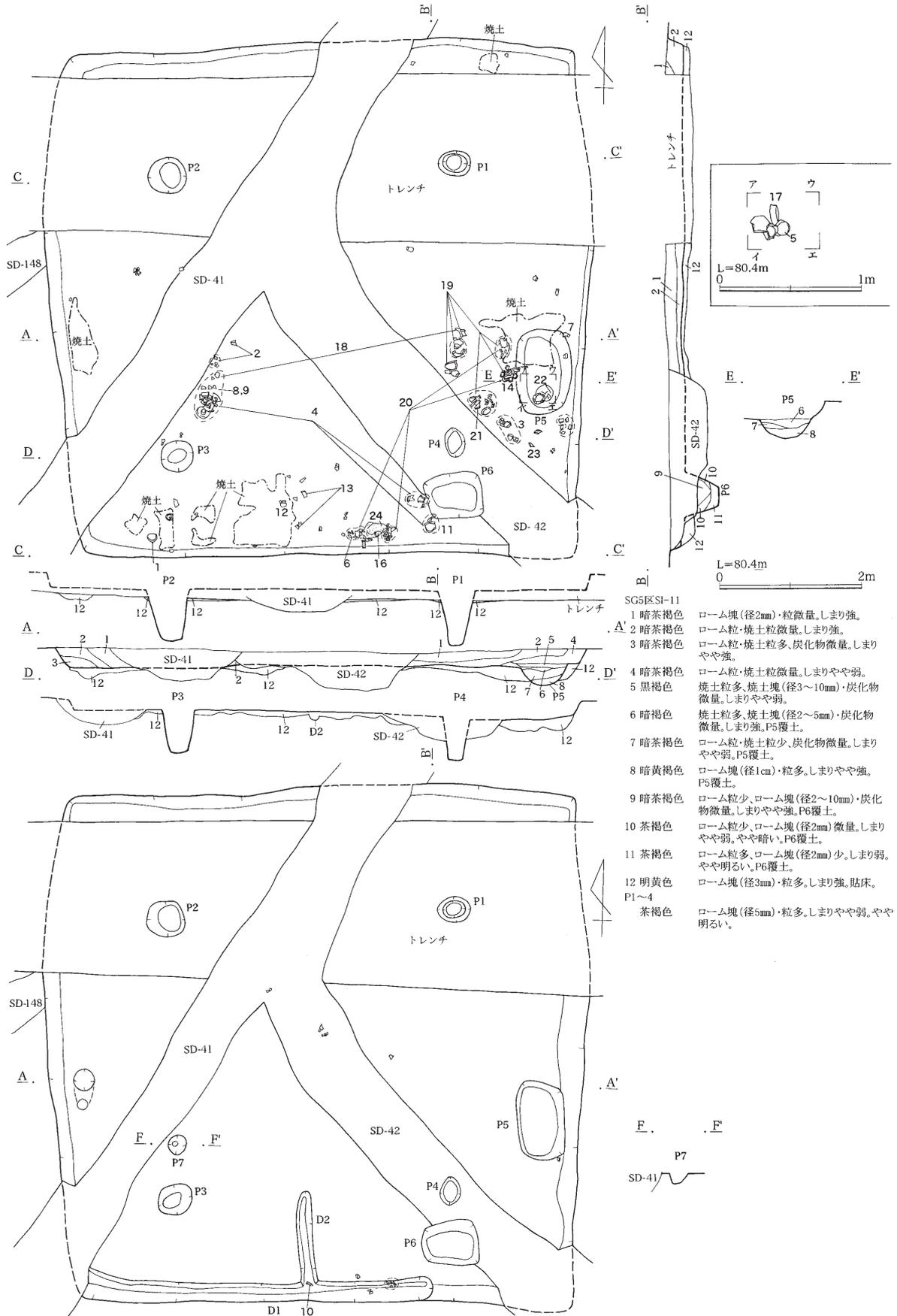
【遺物出土状況】 2 箇所ある貯蔵穴の周囲に多い。南西主柱穴 P3 の北東では、床上 6cm のレベルで立てた状態の高杯 2 個 (8・9) の杯部が破損・落下していた。

南部では、口を北に向けた完形の小形壺 (12) が、焼土混じり覆土層中に倒れている。南部の大きな自然礫 (24) は出土レベルの記録がないが、写真をみると周囲にある 6・16・20 などの破片と同様の高さで出土した。東側の貯蔵穴 P5 では、底面から 5 ～ 7cm 浮いて完形の甕 (22) と杯・壺 (5・17) がある。北側はトレンチで破壊されたため遺物が不明である。

【出土遺物】 杯類は椀形杯で、模倣杯はない。5 は内面形が内傾口縁の椀形杯であるが、外面形は模倣杯に近づいている。12 は須恵器を模倣した可能性もある有段口縁の小形壺。大形甕は破片もない。口縁に細突線を持つ壺 (23) は細片化して不明な点が多いが、SG5 区 SD-42 にあるような細突線を持つ陶質土器の可能性も残る。遺物量は多めで、図示以外の土師器合計 523 片・4,207g の内訳は、杯 84 片・76g、高杯 146 片・1,060g、壺甕類 293 片・3,071g。図化以外に、内斜口縁の椀形杯は 3 個体以上、高杯は脚柱部で見ると 3 個体、大形・単口縁の甕壺類口縁部が 2 個体分ある。壺は大形・中形・小形品の破片がある。

第 169 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-11 出土遺物

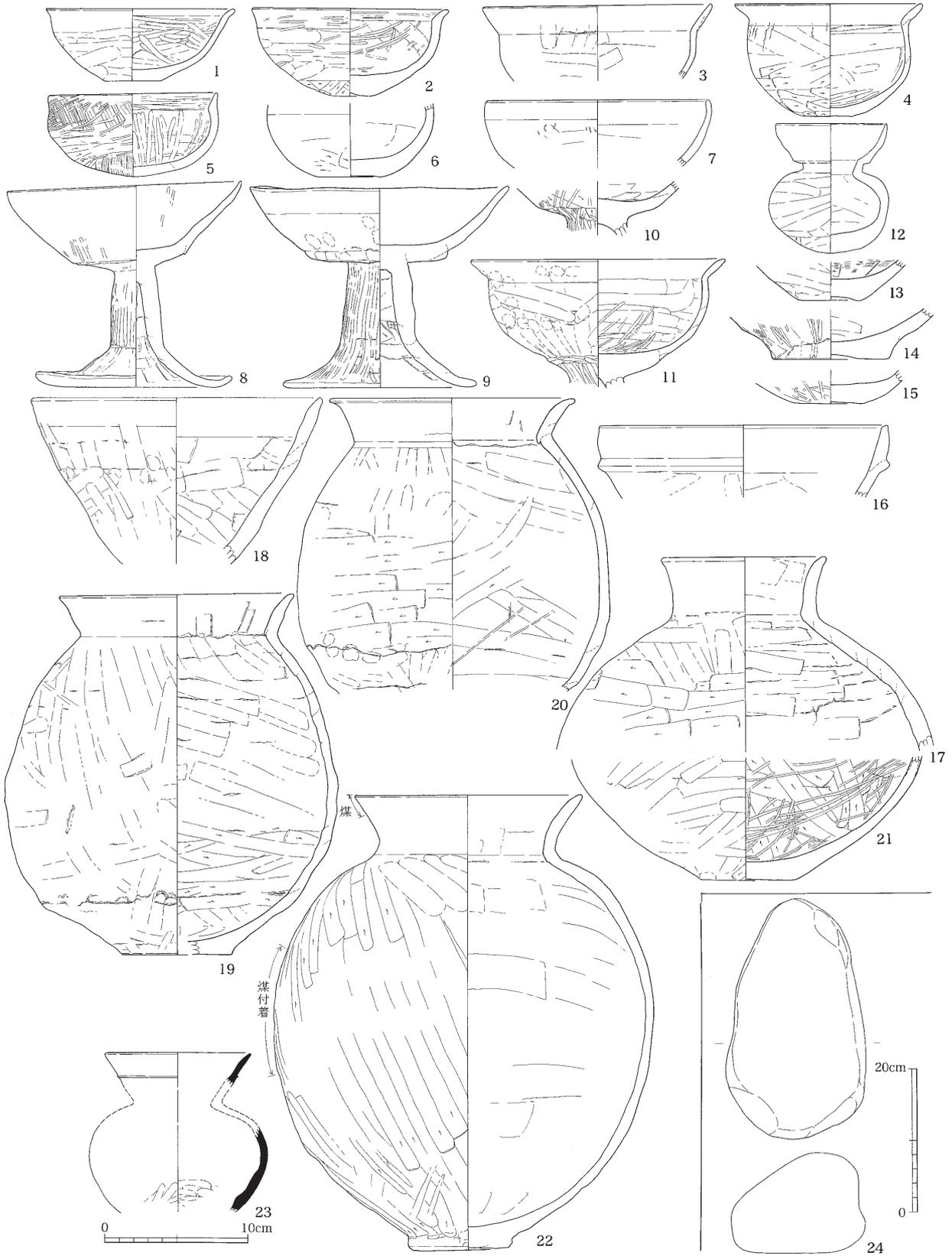
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.9 高 5.0 底 3.7 ～ 4.6	やや歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち軽いナデ。底部は平底で、外周を荒く削られることで作出されるため、不整な楕円形となっている。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち体部横方向で疎らな太いミガキ。	10YR8/8 黄橙 やや緻密 砂粗～細粒少、砂礫 微量 やや硬質	南壁際床上 12cm 口～体 2/3 周、底完存 1
2 土師器 杯	口 13.5 高 6.0 底 3.0	外面体部中位～下半ケズリのち体部上半～中位ナデ・口縁部ヨコナデのち口縁～体部疎らな横方向のミガキ。底部ケズリのちナデで、中央が小さくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～底部疎らなミガキ。口縁～体部は横方向、底部は多方向と見られる。内面体～底部クレター状の剥落あり。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 砂粗～細粒と白微粒 多、白礫と赤・透明細粒少 やや硬質	中央部床上 8cm 口～体 1/6 周、底完存 45、46
3 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 5.1	外面口縁部ヨコナデのち体部上半ナデ、体部下ケズリのちナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白細粒少 やや硬質	南東部床直上 口～体 1/6 周 12



第297図 権現山遺跡 SG5 区 SI-11 (1) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区

4 土師器 杯	口 12.8 高 7.8 底 3.2	薄手で、歪みあり。外面体部軽いナデのち口縁部ヨコナデ、体部下半～底部ケズリ。底部は平底だが、ごくわずかにくぼむ。粘土積み上げ後に体部上端をすぼめたらしく、体部上半には、しぼり目が残る。体部上半内面にはケズリがあるが、これはしぼり目をなくすための調整だろう。内面体部ケズリのち体部下半～底部ヘラナデのち疎らなナデ。口縁部ヨコナデ。	2.5YR4/6 赤褐 やや緻密 白粗粒と白・赤・砂 細粒多、砂礫少 やや硬質	P6 付近床上 2～4cmと 中央部床上 6cm 口～体一部欠損、底完存 3、5、16
5 土師器 杯	口 復 11.6 高 5.7 最大 11.8	口縁端部のほとんどが細かく欠損している。外面体～底部ケズリのち口縁～体部斜め方向・底部一方方向の 5 本 /1cm のハケのち口縁部ヨコナデのち口縁～体部疎らな横ないし斜め方向のミガキ。内面口縁部 5 本 /1cm のハケのち軽いヨコナデのち横方向のミガキ。体～底部ヘラナデのち放射状のミガキ。内面体～底部は磨滅のため調整がやや不明瞭であり、底部のミガキの疎密などは不詳。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 透明粗～細粒多、 白・黒粗～細粒やや多 やや硬質	P5 底上 7cm 口～体一部欠損 56
6 土師器 杯	高 残 5.1 底 復 4.4 体 復 11.5	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのちナデ。底部荒いナデで、わずかにくぼむ。内面口縁部調整不明。体～底部ヘラナデ。内外面に部分的にターレット状の黒色物質付着。断面にも一部付着しており、欠損後に付着したものと見られる。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・赤粗～細粒 多、透明細粒少 やや軟質	南壁際床上 9cm 体下半～底一部 14
7 土師器 杯	口 復 15.2 高 残 4.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。被熱により、全面が赤変している。	10R6/6 赤橙 やや緻密 黒 粗粒微量、白・透明細粒微量、 赤細粒少 やや軟質	P5 付近床上 6cm 口～体 1/4 周 24
8 土師器 高杯	口 16.1 高 14.2 脚 13.5	表面は全体に磨滅し、調整不明瞭。外面杯口縁ヨコナデ、体～底部ナデのち口～底部ミガキ。脚上～中位ナデ、下端ヨコナデのち脚部全体に縦方向のミガキ。内面口縁ヨコナデ、体～底部ナデのち口～底部ミガキ。脚上半～中位ナデで、組積痕、絞り目顕著。下半ヘラナデのち下端ヨコナデ。ミガキは全体に密に施したと見られる。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤粗～微粒 少、白・赤・砂粗粒微量 やや軟質	中央部床上 6cm ほぼ完形 5
9 土師器 高杯	口 17.6 高 13.8 脚 13.2	外面杯部口縁ヨコナデ、体～底部ナデ、指頭圧痕顕著。脚上～中位ナデ、下端ヨコナデのち脚全体タテミガキ。内面杯部磨滅し、調整不明瞭。口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ・ヘラナデ。ミガキの有無は確認できず。脚上半～中位ヘラケズリで、組積痕は中位で顕著。下半ヘラナデのち下端ヨコナデ。内外面全体に黒色物質少量。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂微粒少、白粗粒と 赤粗～細粒と砂粗粒微量 やや軟質	中央部床上 6cm ほぼ完形 5
10 土師器 高杯	高 残 3.7	外面体～底部ケズリのち軽いナデのち疎らなミガキ。脚部上端ケズリのち密なミガキ。内面杯部体～底部ヘラナデ。ミガキの有無確認できず。脚部上端荒いナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 砂粗～細粒と白細～ 微粒多、砂礫微量 やや硬質	D2 底上 7cm 杯体一部、底完存 57
11 土師器 脚付椀	口 復 17.4 高 残 8.9	外面杯部口縁部軽いヨコナデ、体～底部軽いナデのち底部幅広いミガキ。体部には、指頭圧痕・組積痕目立つ。内面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。脚部上端ナデ。口縁部外面一部煤付着。	7.5YR7/3 にぶい橙 やや粗い 白・半透明粗粒多、 白・半透明礫少、黒礫微量 硬質	P6 付近床上 4cm 胴下半 1/3 周、底～ 脚上端完存 3
12 土師器 小形壺	口 7.6 高 8.9 最大 8.3	須恵器製の横倣か。外面口縁～胴部上端ヨコナデ、胴～底部ケズリのちナデ。丸底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ナデ。口縁部は幅 3.2cm、高さ 1.2cm の半円形の部分が欠損するが、欠損面はやや磨滅しており、欠損後使用したものと考えられる。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒 少、砂礫微量 やや硬質	南部焼土内床上 7cm ほぼ完形 2
13 土師器 大形壺	高 残 2.8 底 4.2	外面胴部強いナデ、底部はケズリのちナデで、くぼむ。内面胴～底部強いヘラナデ。工具であるヘラの一部分はハケ状になっているらしく、ヘラナデの中に、7 本 /1cm のハケが見られる。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、砂礫 と白粗粒微量 やや硬質	南部床上 8～9cm 胴下半 1/3 周、底完存 36、38
14 土師器 大形壺	高 残 3.5 底 7.8	外面胴部下端ケズリのちナデのち疎らなミガキ。底部ケズリで、ドーナツ状にくぼむ。内面ヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 透明粗～細粒多、 白・黒・赤粗～細粒少 やや硬質	P5 付近床上 7cm 胴下端～底 1/2 周 11
15 土師器 大形壺	高 残 2.4 底 4.6	外面胴部下端ナデのち疎らなミガキ。底部ナデで、わずかにくぼむ。内面ナデ。内面一部黒色物質付着。外面一部被熱により赤変。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒 多 やや軟質	胴下端～底完存
16 土師器 大形壺	口 復 20.0 高 残 5.0	有段口縁状。口縁部は段より上が内外面ともヨコナデ、下は丁寧なナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明細粒と砂粗 ～細粒少 やや硬質	南壁際床上 9cm 口 1/10 周 28
17 土師器 大形壺	口 11.2 高 残 13.5	白色土と褐色土がマーブル状に混じる胎土。外面胴部上半縦方向のナデのち下寄りのみ横方向のケズリ。口縁部ヨコナデ。内面胴部上半ナデ。疎らなヘラナデ。組積痕顕著。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少 やや軟質	P5 底上 7cm 口～胴上半 3/4 周 55
18 土師器 鉢	口 復 20.0 高 残 11.5	作りはやや雑。外面口縁部ヨコナデのち体部軽いナデ。指頭圧痕顕著。体部上半に積み上げ休止に伴う接合痕があり、内外面に継ぎ目が残るほか、器壁の角度と器厚が変化する。内面口縁部ヨコナデ、体部下半斜め方向のヘラナデのち体部上半横方向のヘラナデ。 [注記]8、SD-42 No.5、SD-42 No.6、SD-42 17.5-15.5	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 砂礫と砂粗～微粒と 赤粗粒微量 やや軟質	中央部床上 6cm と東部床 上 8cm 口～体 1/2 周 注記は左欄
19 土師器 費	口 16.0 高 25.0 底 7.5 最大 22.8	外面胴部ナデ、組積痕目立つ。胴下半の積み上げ休止による接合痕明瞭。底部はケズリ、平底。口縁部ヨコナデ。内面胴部も組積痕が目立ち、下半の接合痕もある。ヘラナデで、接合痕部分のみケズリが施される。底部ヘラナデ。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。外面口縁部煤付着、外面胴部一部に煤付着。内面口縁部一部煤付着。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 白礫～細粒多、砂粗 粒少、赤粗粒微量 硬質	東部床上 3～10cm 口ほぼ完存、胴～底 1/2 周、6、7、8、9、10、11
20 土師器 費	口 16.8 高 残 20.3 最大 21.4	19 に極似する。外面胴部ナデのち中位横方向のケズリ。胴下半の積み上げ休止による接合痕明瞭。口縁部ヨコナデ。内面胴部ヘラナデで、沈線状のヘラ痕数ヶ所あり。胴下半にはケズリに近いナデもあり。口縁部ヘラナデのちヨコナデ。外面胴部一部煤付着。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 白礫と赤・半透明礫 ～粗粒多 やや硬質	東部床上 3～7cm と南部 床上 4～9cm 胴 1/4 周 10、11、14、15、29
21 土師器 費	高 残 8.5 底 6.5	胴部下半の粘土積み上げ休止面で欠損していると見られ、欠損部分直下の内外面には接合に伴う粘土の継ぎ目が残る。外面胴部荒いナデのち疎らな光沢を持つナデ。底部外周には一部にケズリあり。底部はケズリで、わずかにくぼむ。内面胴下半～底部ケズリのち疎らなミガキ。底面周辺の外面がは被熱している可能性あり。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・黒・砂微粒少、 砂礫と白・黒・砂粗粒微量 やや硬質	南東部床上 7cm 胴下半 1/3 周、底完存 9、SD-42
22 土師器 費	口 15.5 高 31.6 底 6.8 最大 26.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部斜め方向のケズリのち上半一部ナデ、底部はナデで、ドーナツ状にくぼむ。内面口縁部はヘラナデのちヨコナデ、胴～底部ヘラナデで、上半は強く施される。外面胴部中位、口縁部上半煤付着。内面胴下半コゲ付着。内面胴部中位はクレーター状に剥落するため調整不明瞭。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、白礫 と黒・透明粗～細粒少 やや硬質	P5 底上 5cm ほぼ完形 No.4 ①、No.4 ②
23 須恵器 壺	口 復 10.0 高 残 8.3 最大 復 12.2	口縁部内外面ロクロナデ、胴部内外面ロクロナデのち外面下半ナデ、内面下半は棒状工具で突いた痕が集中している。口縁部内面、胴部上半に自然釉付着。	5Y5/1 灰 緻密 白粗粒微量 硬質	南東部床上 2cm 口・胴一部 20
24 礫	長 33.1 幅 19.2 厚 13.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 12.4g。	5Y7/2 灰白 やや粗い 礫岩	南壁際床直上 完形 13



第298図 権現山遺跡SG5区SI-11(2)遺物

SG5区SI-12(第299図、写真図版29・179)

[位置] SG5区中央部北寄りの15-16グリッド。西半は調査区外。古墳中期末～後期初めのSI-9が北東に

近接し、古墳後期後半の SI-8 に北辺を切られる。

【規模と形状】西半は調査区外で、北側を SI-8 に切られて明確ではないが、ほぼ方形と予想される。中軸線は N-8° -W。P1 ～北壁間と P2 ～南壁間をともに 1.3m と仮定すると、南北推定長は約 4.8m。調査範囲で東西長 2.51m 以上、南北残長 3.51m、残存壁高 2 ～ 6cm。床面はほぼ平坦で傾斜しない。カマド左右の北東隅及び東隅を除き、硬化が著しい。カマド左右の北東隅及び南東隅の床面は、現地調査時の図・写真を見ると窪んでいるが、誤って掘りすぎた部分と考えられる。掘方は床面から厚さ 5 ～ 30cm で底面に凹凸があり、ローム粒・塊の多い 5 ～ 8 層で全体に貼床を施す。カマド北袖下に 100 × 50cm のダルマ形の浅い窪みが、竪穴中央に 128 × 92cm の不整形で掘方底面から最深 42cm の掘り込みが認められた。

方形の建物ならば、調査区外に西側の 2 本が存在し、4 本主柱の可能性が高い。掘方で確認した P1 と P2 が東側主柱穴と推定される。P1 は径 33 × 35 × 掘方から深さ 29cm (床から推定深さ 46cm)、P2 は径 29 × 31 × 掘方から深さ 45cm (床から推定 73cm) で、南側の P2 が深い。P1-P2 間は 2.15m。P1・P2 は貼床下で確認したため調査時に主柱穴と断定していないが、床面の写真で P2 を確認できる。P1 は SI-8 に切れ、写真の撮影角度も悪いので床面での掘り込みは不詳だが、位置関係から北東主柱穴と判断した。

掘方で調査区境北側に P4 (径 22 × 35 × 深さ 26cm)、貯蔵穴北西に P5 (径 48 × 60 × 深さ 26cm) を確認した。

南東隅にある貯蔵穴 P3 は長軸が南壁とほぼ平行する隅丸長方形で、71 × 92cm × 床面から深さ 49cm。ほぼ平底で、壁は垂直気味。P3 覆土の最上層に焼土・炭粒と遺物が多い。

【カマド】東壁南部にある。両袖幅 93cm、煙道先端から焚口まで 100cm。掘方を埋めた 12・13 層と貼床 11 層上に、厚さ約 10cm でローム粒と粘土塊を少量含む 10 層を袖基部とし、ロームの混じる 9 層を載せて作る。両袖先端に 9 と 13 の甕を倒立する。燃烧部は床より少し低い。煙道は東壁より 15cm ほど U 字状に掘り、掘方埋土と同じ 13 層で周囲を補強する。天井と内壁が崩れた 1・2 層は焼土と粘土が主体。

【覆土】1 ～ 4 層はいずれも焼土を含む。特に中央の床面直上の 3 層は焼土粒・塊が多い。

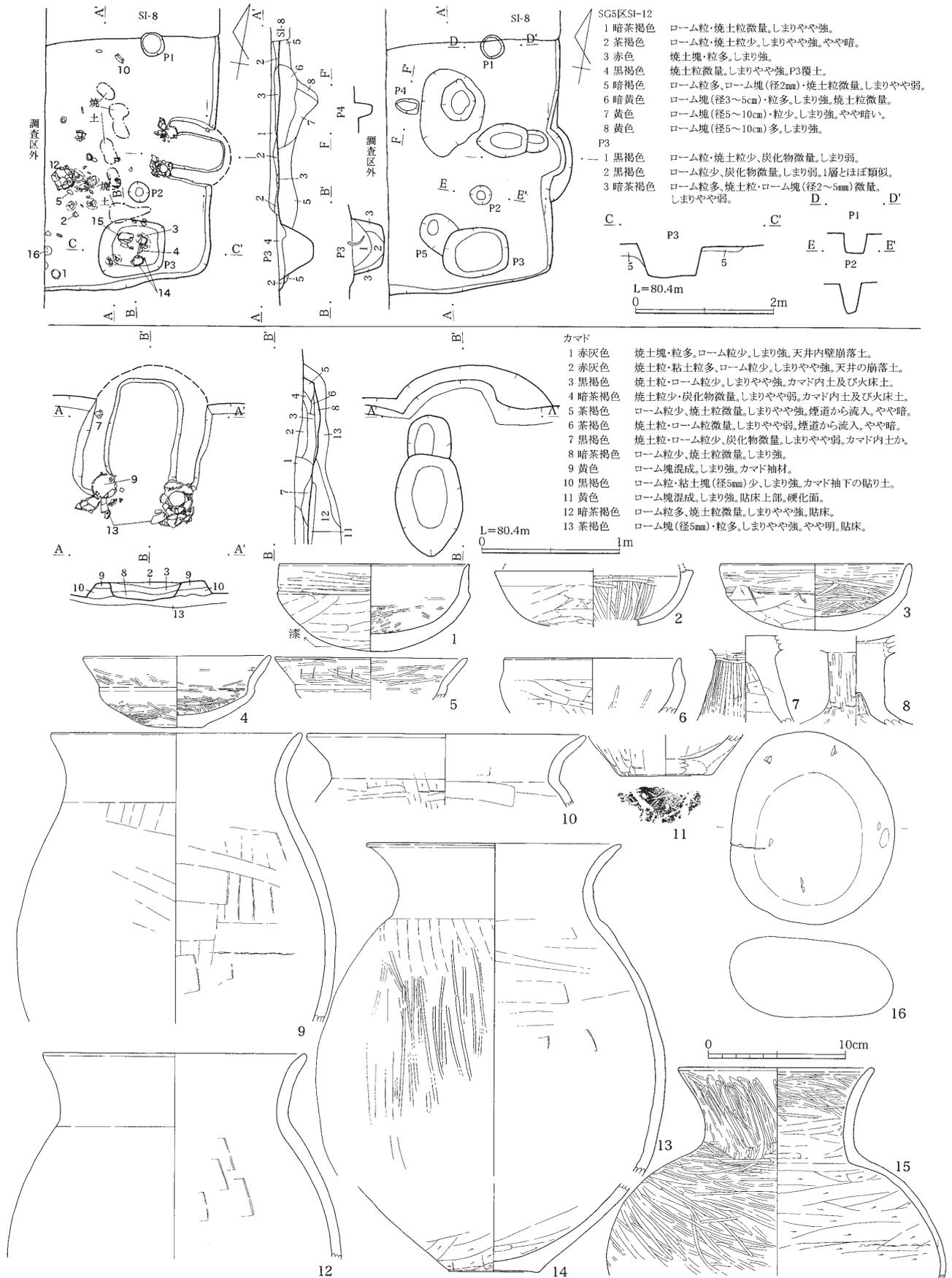
【遺物出土状況】貯蔵穴とその北西に遺物が多い。中央部では 12 の甕が潰れる。建物入口が推定される南側に完形の杯と窪んだ礫がある (1・16)。残存度の高い杯 3・4 と大形壺 15 は貯蔵穴上層にある (断面 B-B')。

【出土遺物】遺物はやや少なめで、壺甕類と杯が多く、高杯は少ない。中期末の短脚高杯 (8) と、少し脚が伸びた高杯 (7) がある。図示以外に、9・13・15 と同個体の可能性もある甕または壺の底部があるが、接合できない。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計 255 片・1,525g で、内訳は杯 43 片・241g、高杯 5 片・93g、壺甕類 204 片・1,174g、焼粘土塊 3 点・17g。甕破片は確認できなかった。

第 170 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-12 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.6 高 6.3 最大 13.8	丸底。外面体～底部ケズリのち丁寧なナデ。口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。内面体～底部は円周方向を基本とする密なミガキ。内面はクレター状の剥落が著しく、調整不明確なところ多い。外面底部付近を除くほぼ全面が漆仕上げ。漆仕上げの古い例の一つ。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・黒微粒多 やや硬質	南壁際床上 2cm ほぼ完形 18
2 土師器 杯	高 残 4.0 最大 復 14.1	外面体部上半ヨコナデ、下半ケズリのち体部下位にヨコヘラナデ。体部全体ナデ。内面体部ナデのち放射状のやや密なミガキ。体部上端に横方向のミガキあり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒粗～細粒と透 明細粒少 硬質	中央部南寄り床上 3cm 体 1/6 周 24
3 土師器 杯	口 復 13.7 高 4.9 底 4.5 ～ 4.9	外面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ。体部上半ナデ・体部下半～底部ケズリのち体～底部光沢を持つナデ。底部は平底で、外周を荒く削られることによって作るため、不整形。内面ヨコナデ後、円周方向の密なミガキ。わずかにクレター状に剥落。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 白・黒・砂細粒少 やや軟質	P3 底上 32cm 口 1/3 周、体～底完存 36
4 土師器 杯	口 13.5 高 5.2 底 4.1	外面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ。体～底部ナデのち体部疎らなミガキ。体部は組積の凹凸を残す。いびつな平底。内面ヨコナデ後円周方向のミガキ。口縁部はわずかで、底部は密に施される。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・砂礫～ 粗粒少 やや軟質	P3 底上 25cm 完形 37
5 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 3.0	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部疎らな横方向のミガキ。内面口縁～体部ヨコナデのち円周方向のやや疎らなミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少 硬質	中央部床上 6cm 口 1/5 周 29
6 土師器 杯	口 復 12.7 高 残 4.0 最大 復 13.2	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち疎らな放射状のミガキ。ミガキの間隔は 25° くらいであるため、全周では 14 ～ 15 本のミガキが施されていたと見られる。	2.5Y5/2 暗灰黄 緻密 白・透明・砂微粒少 やや硬質	口～体 1/6 周

第3節 古墳時代の竪穴建物跡



第299図 権現山遺跡 SG5 区 SI-12 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

7 土師器 高杯	高 残 6.3	外面脚部上半縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキ、脚部上半にわずかに横方向のミガキあり。内面杯部底部ミガキ、脚部上半ナデのちケズリ、上端に粘土の皴残る。	5YR6/6 明赤褐 やや緻密 赤粗粒多、黒細粒少 やや硬質	カマド北袖底上 8cm 杯底～脚上半完存 41
8 土師器 高杯	高 残 6.4	外面脚部縦方向のケズリ、脚部下半ナデのち脚柱部～下半縦方向のミガキ。内面杯部ナデのち密なミガキで、平滑に仕上げられる。脚柱部はナデで、粘土の皴あり。下半は表面剥落のため不明。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少 やや軟質	脚柱完存、脚下半一部 K
9 土師器 甕	口 18.2 高 残 20.8 最大 23.0	砂質の胎土のため表面の磨滅著しく、調整が確認しにくい。接合も困難。外面胴部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒粗～細粒多、 砂礫少 やや軟質	北袖底上 3～5cm 口～胴上半 1/2 周 K、K43
10 土師器 甕	口 復 20.0 高 残 5.3	外面胴部上半縦方向のケズリのち横方向のナデ。口縁部ヨコナデ、内面胴部ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒細～微粒多、 白粗粒少 硬質	北部床上 7cm 口 1/4 周 21
11 土師器 甕	高 残 3.0 底 復 6.4	外面胴部下端軽いナデのち縦方向のケズリ、底部木葉痕で、粘土接合痕が顕著。内面底部ヘラナデ。外面は被熱により赤変しており、煤も付着する。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂細礫多、半透明粗 粒少 硬質	胴下端～底 1/3 周
12 土師器 甕	口 復 19.1 高 残 14.8 最大 残 24.1	砂質の胎土のために表面の磨滅著しく、調整不明なところ多い。外面胴部ナデ。ミガキの可能性あり。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂細～微粒多、白・ 黒細粒少、白礫微量 やや軟質	中央部床上 8～29cm 口 3/4 周、胴上半 1/4 周 26、31、38、K
13 土師器 甕	口 18.3 高 残 24.1 最大 25.2	砂質の胎土のために表面がやや磨滅しており、調整が不明確なところがある。外面胴部ヘラナデのち縦方向のミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部～胴部外面一部煤付着。 〔注記〕K42、K43、K、貯	7.5YR7/6 橙 やや緻密 黒 細粒と白微粒と砂多、白礫～粗 粒微量 やや軟質	カマド南袖床面～5cmと 北袖床上 3～5cm 口～ 胴上半ほぼ完存、胴下半 1/6 周 注記は左欄
14 土師器 甕	高 残 6.4 底 6.3	砂質の胎土のため表面が磨滅し、調整が不明瞭な部分あり。外面胴部下半ナデ、胴部下端～底部ケズリ。底部は平底で、外周を除く全体がわずかにくぼむ。内面ヘラナデ。外面胴部～底部は被熱により赤変し、白色粘土が付着。12か13の底部の可能性高い。	2.5YR5/6 明赤褐 やや緻密 砂細～微粒少、砂礫 と白粗粒微量 やや軟質	P3 底上 1cm 口～胴下半～底完存 12
15 土師器 大形壺	口 14.1 高 残 15.3 最大 24.4	単口縁。外面口縁部下半縦方向のケズリ・胴部上半横方向のケズリのち口縁部上半ヨコナデ・頸部のみ横方向の軽いナデのち口縁部縦方向のミガキのち胴部上半斜め方向のミガキ。内面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半ナデのち横方向のミガキ。胴部上半横方向のケズリ。胴部上半内面は、クレター状の剥落著しい。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 砂粗粒多、白粗粒 少、白礫と赤細粒微量 やや硬質	P3 底上 4cm 口～胴上半完存 14
16 礫	長 14.0 幅 11.7 厚 5.8	多孔質の安山岩質溶岩の河原石。加工痕はないが、表側は面的にくぼんでおり、石皿のようにも見える。裏側および上端に、淡赤褐色土が入り込んでいる。一部に黒色物質付着。重量 875.2g。	2.5Y5/1 黄灰 やや緻密 安山岩質溶岩	南西部床上 9cm 完形 20

SG5 区 SI-13 (第 300 図、写真図版 29・179)

〔位置〕 SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッドに所在する。同じく古墳中期の建物は北と南に SI-12・16 がある。調査区西壁断面 A-A' で SI-13 を切る「攪乱」が SD-148 かと推定されるので、時期不明の SD-148 に切られる可能性がある。

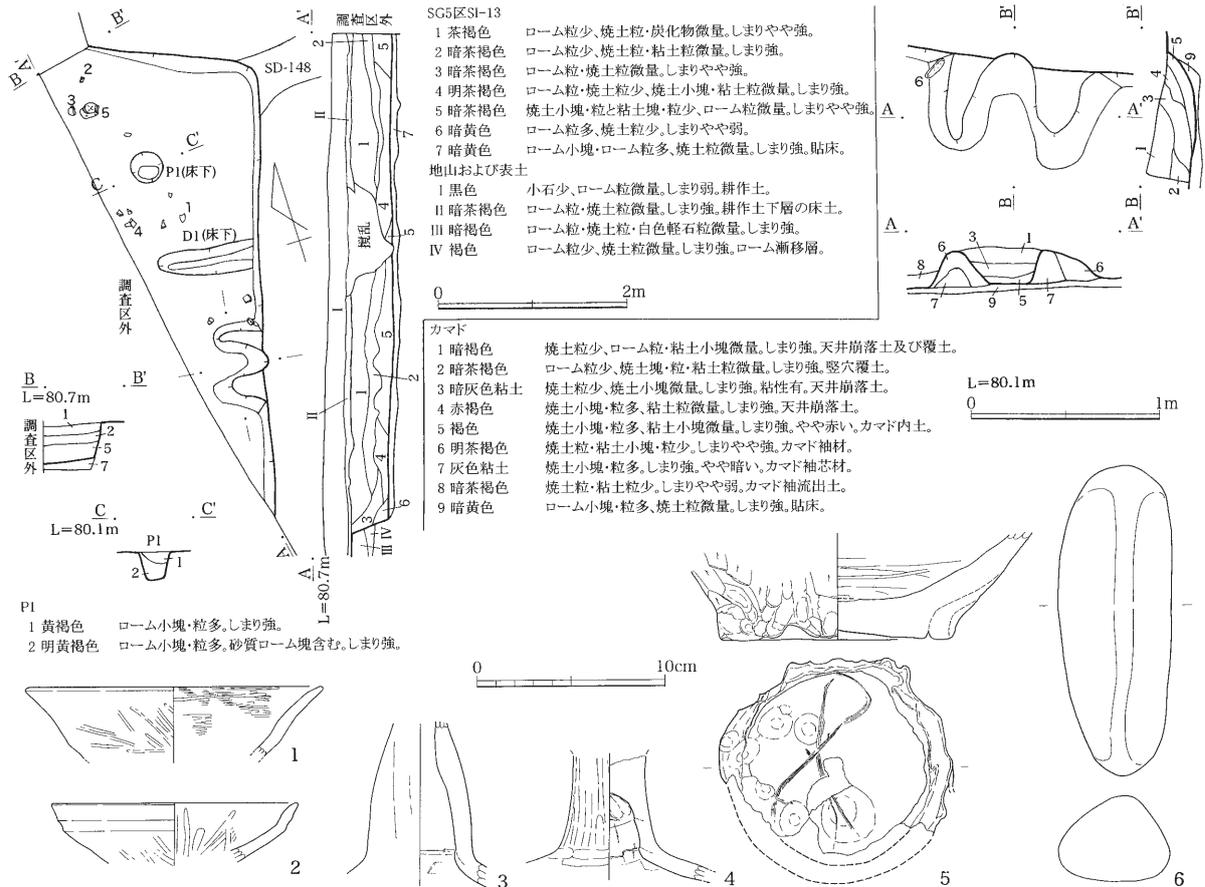
〔規模と形状〕 建物の北東部だけを確認し、大部分は調査区外のため不明だが、ほぼ方形と推定される。南北の中軸線は N-24° -E。調査した部分で、南北長 4.96m 以上、東西長 2.34m 以上。壁は外傾し、残存高は 37cm 前後。床はほぼ平坦で、硬化面は特にない。北東支柱穴と推定される P1 (径 33 × 34cm、床面から深さ 41cm) は貼床除去後に確認したので、断面図 C-C' では柱穴の深さが約 30cm になっている。床面の写真をみるとわずかに黒いので、本来は床面に開口していたとも考えられる。カマド北側壁に直交して貼床下で確認した間仕切溝 D1 は長 102 × 幅 20 ～ 30cm で、深さは記録されていないが写真から判断すると掘方底から深さ 10cm 未満と見られる。貯蔵穴は確認できず、調査区外にあるとみられる。

〔カマド〕 東壁ほぼ中央に位置し、貼床整形後に構築されている。両袖幅 98cm、煙道先端から焚口部まで 57cm。灰褐色粘土主体の 6・7 層で袖を構築する。火床はほぼ平坦で、床面よりわずかに下がる。燃焼部に流入した 5 層の上に天井が崩れた 1・3・4 層が堆積する。煙道先端は東壁から僅かに突出し、なだらかに上がる。

〔覆土〕 自然埋没状で、下部の 4～6 層に焼土粒がやや多い。

〔遺物出土状況〕 カマドの北側と北東支柱穴 P1 周辺で、床面より少し浮いたレベルで少量の土師器杯・高杯・壺甕類が出土した。

〔出土遺物〕 内外面をよく磨く薄手の杯破片がある (1・2)。1 は内斜口縁椀形杯の口縁部が外に開いて浅身になったものか、または高杯の杯部かもしれない。明確な模倣杯・漆仕上げ杯や大形甗の破片は見られない。高杯の脚部はすべて柱状脚で、長い 3 と短縮化した 4 がある。大形壺 (5) は指頭圧痕・植物繊維圧痕がある。図示以外の遺物は土師器破片と焼粘土塊が合計 77 片・951g で、内訳は杯 21 片・196g、高杯 14 片・195g、壺甕類 40 片・548g、焼粘土塊 2 点・12g。



第300図 権現山遺跡 SG5 区 SI-13 遺構・遺物

第171表 権現山遺跡 SG5 区 SI-13 出土遺物

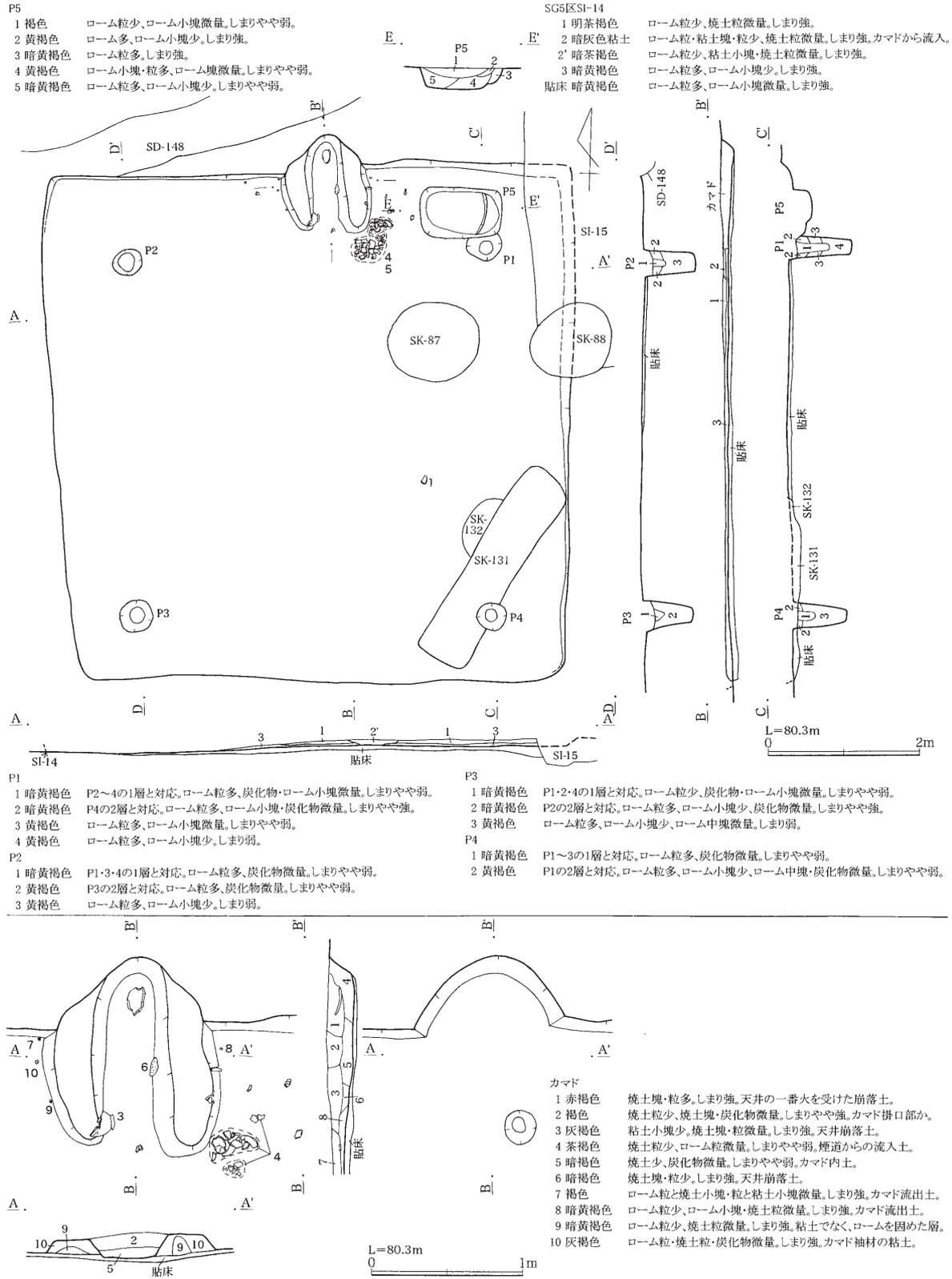
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.6 高 残 3.7	高杯杯部の可能性あり。外面口縁部ヨコナデ・体部ケズリのち疎らなミガキ。内面ヨコナデのち横方向のミガキ。	5YR6/6 橙 緻密 赤粗粒微量 やや軟質	中央部床上 10cm 口～体 1/6 周 6
2 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 3.5	外面口縁部ヨコナデ。中央にわずかな段差があり、下半は半截竹管の沈線のように丸くくぼむ。体部ナデのちミガキ。内面ヨコナデのちやや疎らなミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒少、半透明粗粒微量 やや軟質	北部床上 16cm 口～体 1/6 周 1
3 土師器 高杯	高 残 8.8	内外面ともに表面の磨滅が著しく、調整痕不明瞭。外面脚柱部ナデ、脚部下半横方向のナデ、内面脚柱部ナデ、下半貼り付け後ヘラナデ。接合痕顕著。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白細粒微量 やや軟質	北部床上 21cm 脚上半 1/3 周 2
4 土師器 高杯	高 残 5.5	外面脚柱部縦方向のナデ、下端屈曲部は横方向のナデ。内面脚柱部上半ナデのち下半ヘラナデ。脚柱部調整後に脚部下半を貼り付け、ヘラナデで調整する。接合痕顕著。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・砂微粒少、白・黒・赤細粒微量 やや硬質	中央部床上 3cm 脚柱完存 8
5 土師器 大形壺	高 残 5.6 底 12.2	平底の底部で、底部外周に荒く粘土を貼り付けている。外面胴部下端荒いナデのちケズリ。指の痕跡顕著。底部ナデで、指頭圧痕・植物繊維の圧痕あり。内面ナデ。内面底部中央剥離あり。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・砂粗～細粒と白・黒微粒多、白礫少 やや硬質	北部床上 23cm 胴下端～底一部欠 3、床下
6 石器 編物石	長 16.4 幅 6.0 厚 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 744.9g。	2.5Y7/3 浅黄 緻密 安山岩	カマド北側床上 5cm 完形 13、K

SG5 区 SI-14 (第301・302図、写真図版 29・30・179)

[位置] SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッド。西に古墳後期の SI-12・16 がある。同じ古墳後期末の SI-15 に北東部を、時期不明の SK-87・88・131・132 に東部を切られ、SI-14 → SK-132 → SK-131 の順になる。南端が試掘トレンチに切られる。時期不明の SD-148 とは、重複部が僅かなため前後関係が不明。

[規模と形状] 東西 6.91 × 南北 6.95m の方形で、中軸線は N-3°-W、残存壁高 3 ~ 13cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。床面下 2 ~ 10cm の掘方底に緩い凹凸があり、ローム小塊・粒を含む暗黄褐色土で全体を

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第301図 権現山遺跡 SG5 区 SI-14 (1) 遺構

貼床する。

主柱穴は4本で、P1と貯蔵穴P5の上端が接する。P1=径40×46×深さ71cm、P2=35×40×深さ67cm、P3=41×45×深さ65cm、P4=35×38×深さ71cm。西側のP2・P3より東側のP4・P1が少し

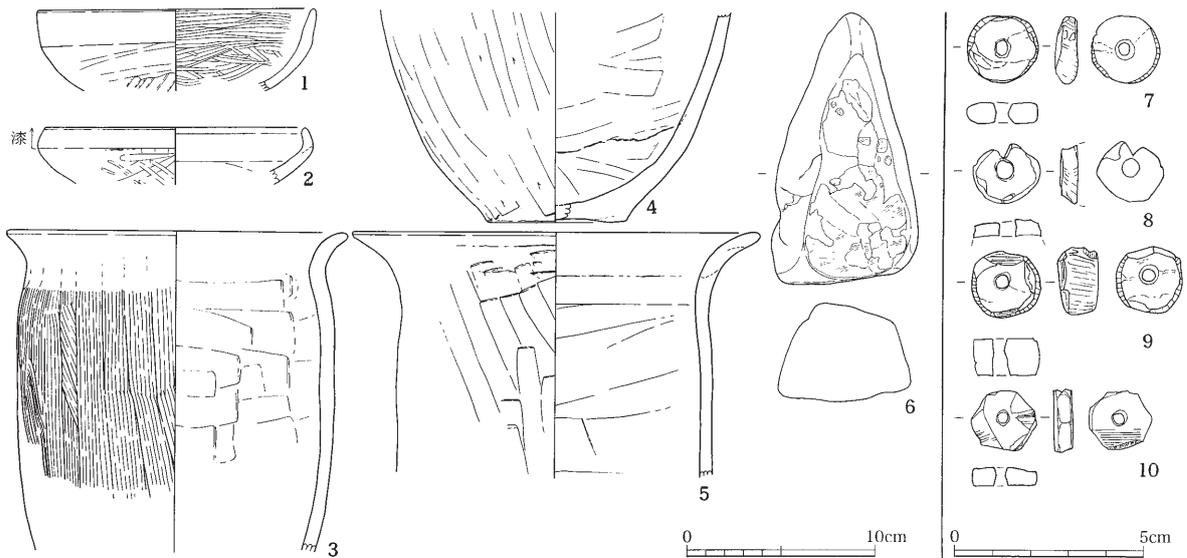
深い。柱間はP1-P2間が4.73m、P3-P4間が4.65m、P1-P4間が4.88m、P2-P3間が4.66mで、ほぼ方形に配置する。

北東隅にある貯蔵穴P5は東西軸の長方形で、南東部でP1と接続する。南北64×東西108×床面から深さ30cm。平底で壁が外傾し、東側は底面から8cmほど上に段を持つ。この段の部分の覆土である3層にローム粒が多く、ローム塊を少量含む締まりの弱い暗黄褐色土であることから、壁の崩落とも考えられる。
[カマド] 北壁中央から少し東に寄る。両袖幅115cm、煙道先端から焚口まで132cm。貼床整形後に、ローム主体の暗黄褐色土である9層を固めて袖の心とし、灰褐色粘土の10層で覆う。西袖先端は土師器甕破片(3)で補強し、東袖の南東側にも甕破片がある(4・5)。袖撤去後に東袖先端下で認められた径25×深さ3cmほどの浅い窪みが、土師器甕を埋めた痕かもしれない。火床はほぼ平坦で、床面より少し下がる。燃烧部には、煙道と架口から流入した4・5層、焚口付近に天井の崩れた6・8層が堆積する。1・3層は焼土化が著しい天井崩落土で、2が架口部の堆積土と想定する。煙道先端は壁から45cm出てなだらかに上がる。

[覆土] 最下層の3層にローム粒が多く、ローム塊も少量含む。

[遺物出土状況] 南東部に杯(1)がある以外は、カマド周辺にまとまっている。カマド内に自然礫がある(6)。

[出土遺物] 遺物は少ない。図示以外の身模倣形土師器杯は口縁部が短く退化している。甕破片は不掲載品もすべて長胴甕で、3はハケ調整。粘板岩製白玉が出土する遺構としては最も新しい時期であろう。SG5区ではSI-6などに粘板岩製品がある。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計156片・1,434gで、内訳は杯28片・139g、高杯20片・238g、壺甕類102片・707g、甌5片・333g、焼粘土塊1点・17g。



第302図 権現山遺跡SG5区SI-14(2)遺物

第172表 権現山遺跡SG5区SI-14出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復14.6 高 残4.3	外面口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ。体部下半ヘラナデで、平行する段状痕跡あり。内面ヨコナデのち横方向主体の密なミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 赤粗粒と砂細粒微量 やや軟質	中央東寄り床上2cm 口～体1/4周 22
2 土師器 杯	口 復13.6 高 残3.0 最大 復14.4	外面口縁部ヨコナデ、体部わずかなナデのち疎らなミガキ。内面体部ナデのち口縁部ヨコナデ。外面口縁部、内面口縁～体部漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・半透明細粒多、白・透明細粒少、赤細粒微量 硬質	口～体1/6周
3 土師器 甕	口 復18.0 高 残16.8	外面胴部5本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。外面胴部中位被熱のため赤変。外面口縁～胴部上半わずかに煤附着。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・透明・砂細粒多、砂礫と白・黒・灰色粗粒微量 硬質	カマド西袖床上9cm 口～胴中位1/3周 4
4 土師器 甕	高 残11.1 底 7.4	外面胴部下半縦方向のヘラケズリ、底部ナデ。底部は丸底の本体にドーナツ状に粘土を貼り付けて作られており、中央の本体部分がくぼんでしまっている。内面ヘラナデで、粘土積み上げ休止による接合痕あり。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 白・砂粗～微粒少、白・赤礫微量 やや硬質	カマド南東側床上1～6cm 胴下半～底1/2周 12、13、16、21、カマド

第8章 権現山遺跡 SG5 区

5 土師器 甕	口 高	復 21.3 残 12.8	外面やや斜めとなる強いヘラナデのち口縁部軽いヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、粗積痕あり。胴部上半ヘラナデ。内外面ともヘラナデの工具先端が平端でないため、浅いハゲのようになっている。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・砂微粒少、 白礫と白・砂粗粒微量 硬質	カマド南側床上 1cm 口～胴上半 1/5 周 21、表採
6 碟	長 幅 厚	14.2 7.7 5.1	河原石。特に加工の痕跡なし。表裏面に、わずかに薄く剥落するところあり。重量 692.9g。	2.5Y6/2 灰黄 緻密 ホルンフェルス	カマド東袖付近床上 1cm 完形 5
7 石製品 白玉	径 厚 重	1.70～ 1.81 0.60 2.40	両面とも節理に沿った剥離面のままで研磨はないが、わずかに磨滅する。節理面は表裏とも風化した面である。側面は孔と平行する方向の切削時の工具痕と、切削に伴う剥離痕が残る。孔径は表側 3.65mm、裏側 4.86mm、中央最狭部 3.19mm で、両面穿孔と見られる。	10G4/1 暗緑灰 緻密 粘板岩	カマド西側床上 7cm 完形 3
8 石製品 白玉	径 厚 重	残 1.40 ～ 1.77 残 0.45 残 1.06	裏面側が節理面から欠損する。表側は節理に沿ったやや風化した節理面で研磨はなく、わずかに磨滅する。側面は切削に伴う剥離面が多く、孔と平行する方向の切削時の工具痕もわずかに見られる。孔径は表側 4.53mm、欠損部分で 4.33mm で、穿孔方向は不明である。	10G4/1 暗緑灰 緻密 粘板岩	カマド東側床上 7cm 一部欠損 15
9 石製品 白玉	径 厚 重	1.72～ 1.69 1.00 4.05	両面とも節理に沿った剥離面のままで、研磨なし。表側の節理面は、やや風化している。側面も研磨はなく孔と平行する方向の切削時の工具痕と、切削に伴う剥離痕が残る。図の上側には大きな剥離がある。孔径は表側 3.60mm、裏側 4.20mm、中央最狭部は 3.25mm であり、裏側からの穿孔主体の両面穿孔と見られる。	10G4/1 暗緑灰 緻密 粘板岩	カマド西側床上 7cm 完形 1
10 石製品 白玉	径 厚 重	1.45～ 1.64 0.45 1.52	両面とも節理に沿った剥離面のままで研磨はないが、突出した部分のみわずかに磨滅する。側面は切削に伴う大小の剥離面がほとんどで、わずかに孔と平行する方向の切削時の工具痕がある。図の下面は風化した節理面がそのまま側面となっている。孔径は表側 3.97mm、裏側 3.80mm、中央最狭部 3.20mm で、両面穿孔と見られる。	10G4/1 暗緑灰 緻密 粘板岩	カマド西側床上 7cm 完形 2

SG5 区 SI-15 (第 303～305 図、写真図版 30・31・179・180)

[位置] SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッド。南に時期不明の SB-154 が近接する。同じく古墳後期末の SI-14 を南西部で切る。南西と南東の隅を時期不明の SK-88・90 に切られる。また、北西部で時期不明の SD-148 を切る可能性がある。床はほぼ平坦で、ほとんど傾斜しない。

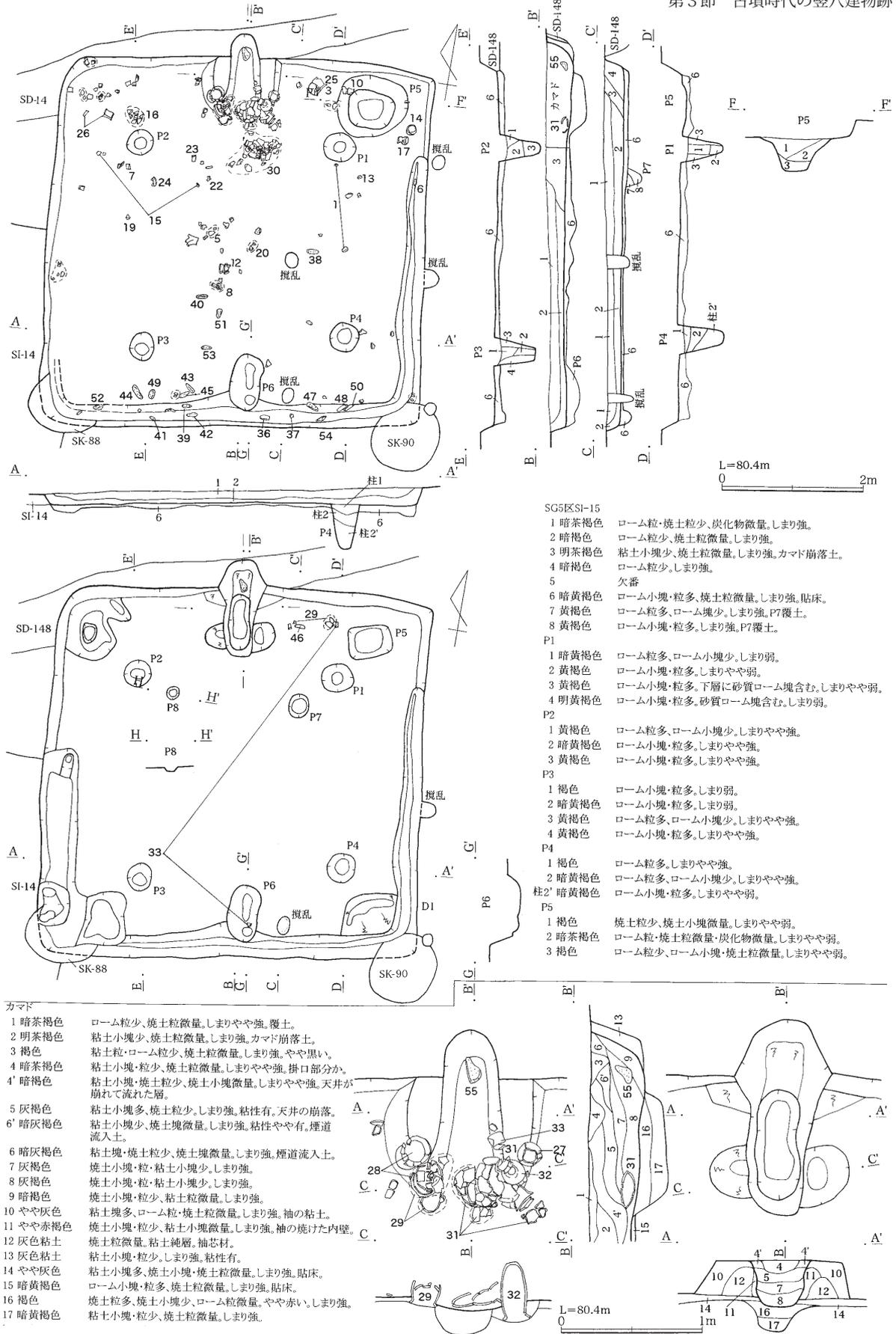
[規模と形状] 東西 5.53 × 南北 5.25m のほぼ方形で、中軸線は N-9° -W。壁は直線的に外傾し、残存高 14～32cm。掘方は床面から深さ 4～15cm で、北東隅を除く三隅が 10～15cm 深い。底面に凹凸が目立ち、ローム塊・粒の多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は 4 本で、P1= 径 40 × 45 × 深さ 58cm、P2=36 × 39 × 深さ 58cm、P3=34 × 40 × 深さ 57cm、P4=40 × 42 × 深さ 66cm。他の 3 本より P4 が 8cm ほど深い。P1-P2 間が 2.80m、P3-P4 間が 2.85m、P1-P4 間が 2.66m、P2-P3 間が 2.92m の方形配置で P1-P4 間が少し狭い。北側主柱穴 P1・P2 の内側の掘方底で P7・P8 を確認し、P7= 径 24 × 32 × 掘方底面から深さ 23cm、P8=18 × 20 × 掘方底面から深さ 8cm、P7-P8 間は 1.80m。

掘方調査時に南壁際中央で検出した南北に長い楕円形の P6 は、入口ピットの可能性がある (41 × 80 × 掘方底面から深さ 19cm)。底面の状況から 2 基のピットが重複したと想定でき、少なくとも 1 基が本来床面に開口した可能性がある。掘方調査時に南壁と東西壁際南半で確認した壁溝は、幅 30～50cm、掘方底面から深さ 3～11cm で、本来は床面に開口した可能性がある。北東隅の貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形で 86 × 100 × 床面から深さ 48cm。平坦な底面から壁が外傾し、床面下 10～15cm で緩くなる。P5 の上層ほど焼土が多い。

[カマド] 北壁際中央にある。両袖幅 110cm、煙道先端から焚口部まで 120cm。貼床整形後、両袖の手前側と奥側にそれぞれ土師器甕を立てる。奥の甕は袖内部に埋め込んだと考えられる。西袖は奥の 28 が正立し、手前の 29 が倒立する。東袖は奥の 27 と手前の 32 が倒立する。遺物・石・焼土・ロームなどを含まずしまりが弱い均質な暗褐色土を 32 の中に詰めてから倒立していた。焚口天井に甕 31 を差し渡す。袖は灰色粘土主体の 12 層を心とし、純度の低い灰色粘土の 10・11 層で覆う。11 層は焼土化が著しい。火床はほぼ平坦で、焚口から煙道へ若干傾く。焼土粒・塊を少量含む 8・9 層が煙道～燃焼部に流入・堆積し、天井部が崩れた粘土粒・塊の多い 4～7 層がその上に堆積する。煙道先端は北壁より 80cm ほど U 字状に掘り、粘土主体の 13 層を貼る。貼床除去後、焚口～火床下に 87 × 40 × 掘方から深さ 20cm の楕円形掘り込みを確認した。16・17 層で堅く埋め、貼床 (14 層) とともに粘土や焼土を含むので、カマドを作り替えたと考えられる。

第3節 古墳時代の竪穴建物跡



第303図 権現山遺跡SG5区SI-15(1)遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区

[覆土] カマド崩落土の3層を含め自然埋没状に堆積する。

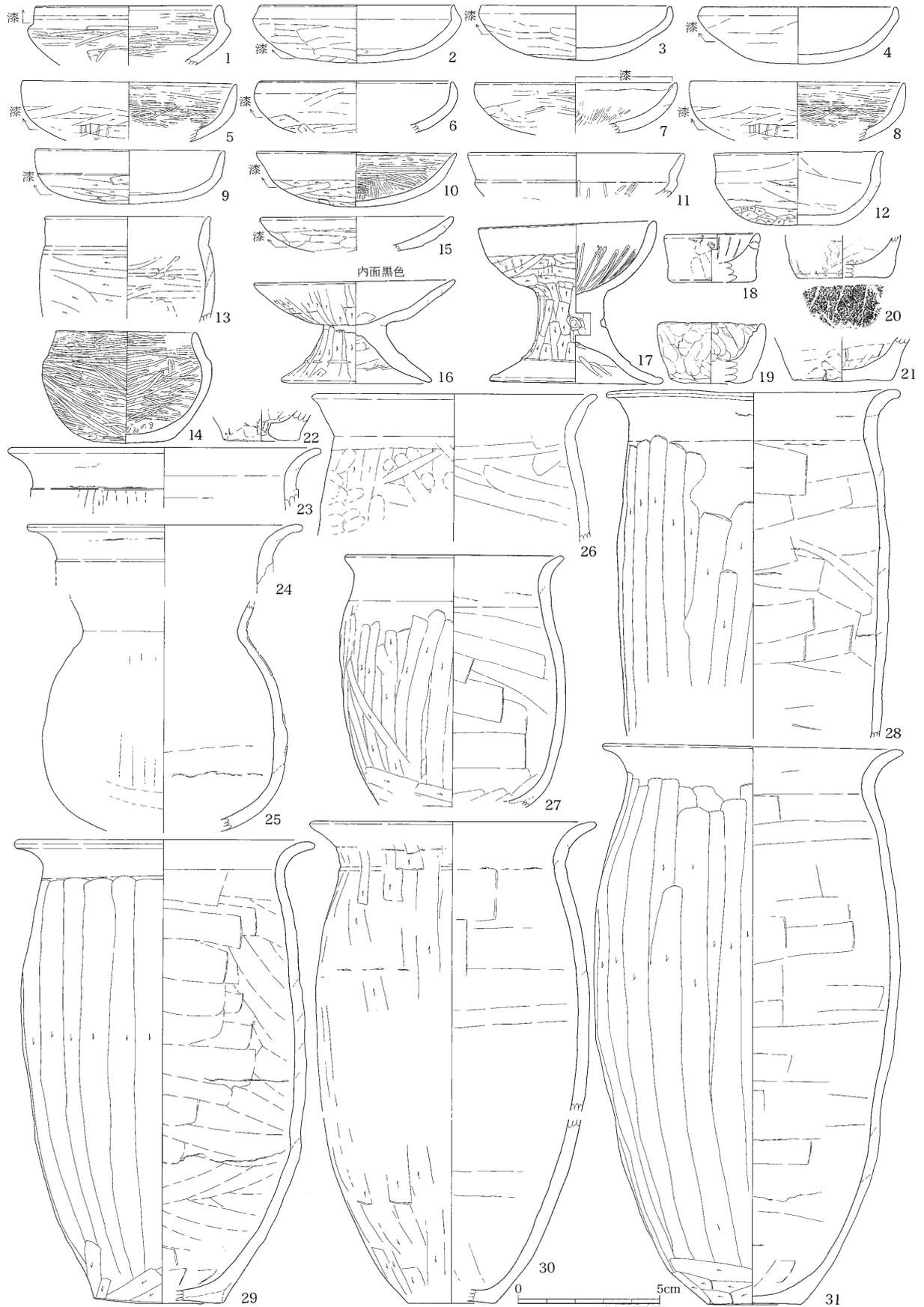
[遺物出土状況] カマド周辺の甕はカマドの項で述べた。床面にカマド南方の甕(30)と、貯蔵穴周辺の杯(3)・高杯(17)・鉢(14)・壺(25)があり、南壁付近に編物石多数・砥石(36)・紡錘車(37)がある。

[出土遺物] 遺物が多く、各器種の破片が混在する。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計1,353片・11,734gで、内訳は杯292片・1,960g、高杯53片・549g、鉢25片・362g、壺甕類925片・8,016g、甌41片・600g、小形土器13片・202g、焼粘土塊4点・45g。この他に須恵器2片・9gがある(杯身片と杯?小片が各1点)。

土師器杯は半球形が主体で、5のように直立口縁の蓋模倣杯も一定量があり、身模倣形杯は僅かである。杯と鉢は漆仕上げが多く、磨かないものが多い。16は内面黒色処理の高杯。内面ミガキ+黒色処理の高杯はSG10区SI-23や高速道路調査A区SI-022(谷中・大島2001)にある。図示以外の鉢は杯身模倣形口縁が1点、内斜口縁2点、椀状の1点がある。古墳後期高杯の非貫通孔(17)は珍しい。中期のSG5区SI-5・116やSG10区SI-25などに少量ある。図化品以外の遺物は甕破片が主体で、底部でみると8個体以上のうち5点前後が長胴甕。甌(22～24)は全形を復原できなかった。図化以外に大形甌1点、単口縁鉢形小形甌2点、ほぼ直立口縁の甌1点がある。カマド支脚は煙道の自然礫55と、出土地点不詳の土製支脚34がある。土製支脚はSG5区SI-9にある。ホルンフェルスの砥石(36)はSG5区ではSI-7などにある。紡錘車はSG5区ではSI-4などにあり、孔外周の接線方向に擦痕がある点も共通する。

第173表 権現山遺跡 SG5 区 SI-15 出土遺物

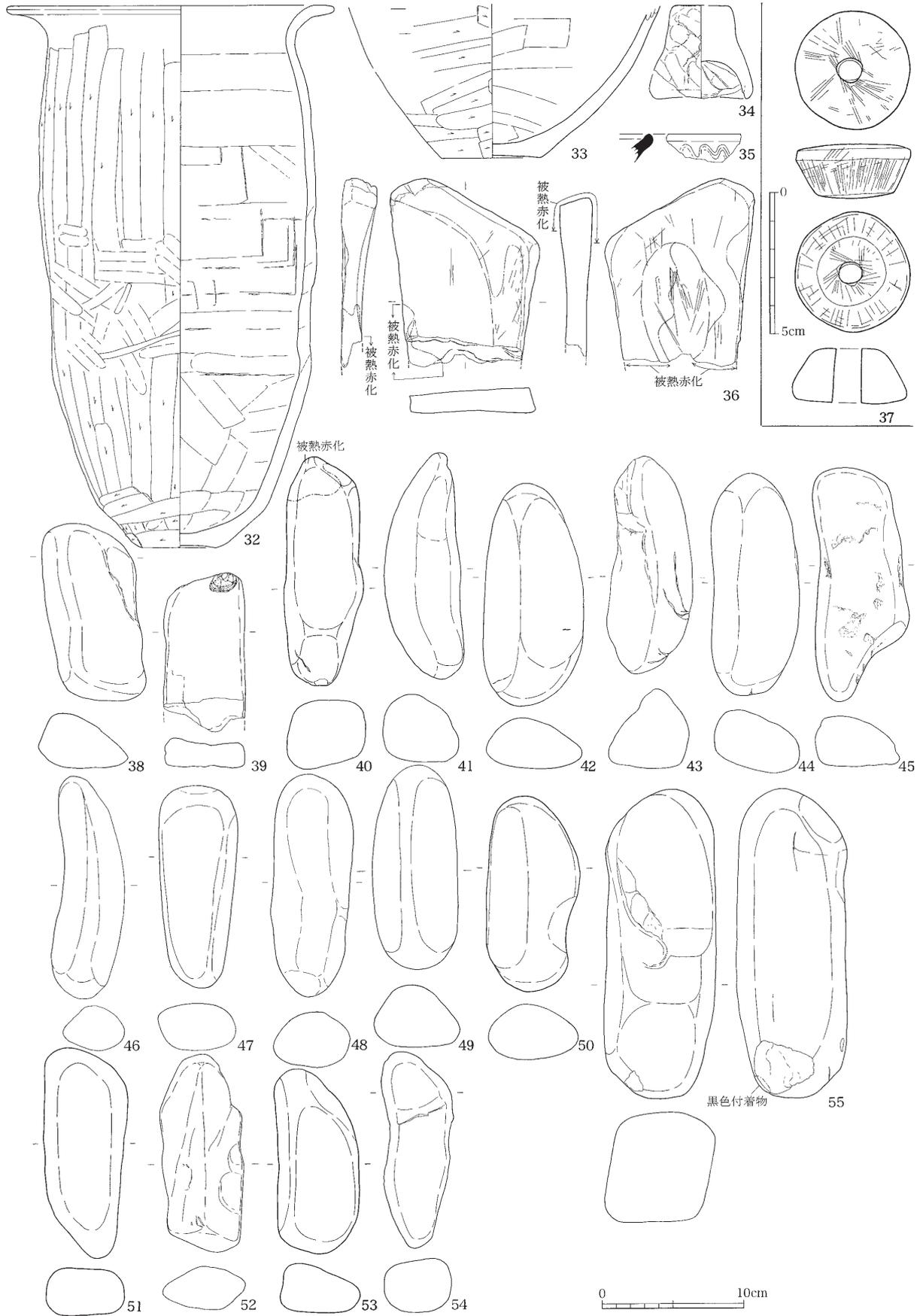
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.2 最大 復 14.2	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのち疎らなミガキ。内面ヨコナデのち口縁部疎らなミガキ、体部密なミガキ。口縁端部の磨滅著しい。径の歪みあり。	5Y7/3 浅黄 緻密 黒細粒少、透明ガラス質 細～微粒微量 やや硬質	中央部東寄り床直上～床 上 9cm 口～体 1/2 周 48、52
2 土師器 杯	口 復 13.7 高 4.1 最大 復 14.6	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのちナデ。内面底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデ。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白粗～細粒少 やや軟質	口～底 1/3 周
3 土師器 杯	口 13.3 高 3.9 最大 13.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデで、一部無調整部分あり。底部ケズリ。内面ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白細～微粒微量 やや硬質	北壁際床直上 口～底 1/2 周 86
4 土師器 杯	口 13.5 高 4.0 最大 14.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのちナデと見られるが、ほぼ全面が小さいクレーター状に剥落しており、調整不明瞭。内面ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。漆は比較的良く残存する。口縁端部磨滅著しい。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・黒・赤細～微粒微量 硬質	ほぼ完形 貯蔵穴
5 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.5 最大 復 12.5	精良な胎土で、硬質。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ、内面ヨコナデのち体部多方向のミガキのち口縁～体部円周方向のミガキ。内面のミガキは1本の幅が狭いもので、密に施されており、表面は極めて平滑。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒微量 硬質	中央部床上 13cm 口～体 1/6 周 43
6 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 3.7 最大 復 14.2	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち体部下ケズリ。内面ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。漆は比較的良好に残存する。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 砂細～微粒微量 やや硬質	東壁溝底上 16cm 口～体 1/4 周 79
7 土師器 杯	口 復 14.2 高 残 3.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち口縁～体部ミガキ。磨滅している部分多く、ミガキの疎密は不詳。内面は大部分が剥落するが、放射状の密なミガキと見られる。内面全体漆仕上げ。漆はわずかに残存するのみ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 白・透明微粒多 やや硬質	中央部西寄り床 15cm 口～体 1/4 周 59
8 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 4.1	外面口縁部ヨコナデのち体部ナデのち体部下ケズリ。内面口縁～体部に円周方向主体の密なミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。内面口縁部に磨滅部分多い。	2.5Y7/3 浅黄 緻密 砂微粒微量 やや硬質	中央部南寄り床 20cm 口～体 1/4 周 33
9 土師器 杯	口 復 13.2 高 3.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。内面底部ナデのち口縁～体部ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 黒細粒多 やや硬質	口 1/3 周、体 1/4 周、 底 1/4 周 貯蔵穴
10 土師器 杯	口 復 14.0 高 3.9	外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリ。内面密なミガキ。体～底部は一方方向のミガキ主体、口縁部は円周方向のミガキ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 赤・黒細粒と白微粒少 硬質	P5 付近の床面と同レベル 口～底 1/2 周 83
11 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 3.1	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面ヨコナデのち体部放射状のミガキ。漆仕上げの可能性あり。	10YR5/3 にぶい黄褐 緻密 赤粗粒と白・黒細粒微量 やや硬質	口 1/5 周
12 土師器 杯	口 復 12.0 高 5.1 底 5.2	粗雑な作りで、全体に歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、抜き痕あり。柔軟なヘラ状工具で施されているらしく、凹面となる外面には2～3cmおきに工具を止めた痕跡が明瞭。体～底部ケズリだが、体部は無調整部分多い。底部は丸味を持つ平底で、入念なケズリにより作出される。内面底部ヘラナデのち体～口縁部ヨコナデ。口縁部には外面と近い位置に抜き痕あり。外面の工具を止めた痕跡に相当する部分には、工具痕はないが、ヨコナデを止めたわずかな痕跡が見られる。	10YR5/2 灰黄褐 やや緻密 白細粒少、砂礫と赤 細粒微量 やや硬質	中央部床上 18cm 口 1/2 周、体一部欠、 底完存 35



第304図 権現山遺跡 SG5区 SI-15(2) 遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

13 土師器 鉢	口 復 11.7 高 残 7.4 最大 復 12.3	外面体部ケズリのち口縁部ヨコナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部ヘラナデ。体部上半には、幅の狭いヘラナデが多く施される。内面全体黒色処理。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 微粒少 やや硬質	北東部床上 3cm 口～体 1/5 周 51
14 土師器 鉢	口 9.8 高 7.9 底 5.8 最大 11.8	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち全体密なミガキ。底部は丸味を持つ。体～底部小さなクレーター状の剥落多い。内面は全体が極めて密なミガキで、口縁部は横方向、体部は横ないし斜め、底部は一方である。内面は黒斑により黒褐色となる部分が多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤礫と白・赤細粒と白・黒微粒微量 硬質	東壁際床直上 ほぼ完形 81
15 土師器 高杯	口 復 13.6 高 残 2.4	外面口縁部ヨコナデのち体部強いナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒少、赤細粒微量 やや硬質	中央部西寄り床上 9～17cm 口～体 1/4 周 53、62
16 土師器 高杯	口 14.0 高 7.4 脚 10.5	外面杯部口縁部・脚部下半強いヨコナデのち杯部体～底部・脚部ケズリ。ヨコナデの縁は段差となるが、ケズリにより失われる部分が多い。内面杯部口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。脚部下半ヨコナデのち上半ナデのちヘラナデ。杯部内面のみ炭素吸着による黒色処理。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂礫と赤・黒・灰色・透明粗粒と砂細粒少 やや軟質	北西部床上 1cm ほぼ完形 66
17 土師器 高杯	口 12.4 高 11.5 脚 12.1	外面杯部口縁部・脚部下半ヨコナデのち杯部体部横方向のケズリ、脚部中位下へのケズリのち杯部底部～脚部上半上へのケズリ。ケズリは光沢を持つ部分多い。脚部中位に、棒状工具の刺突によると見られる径 7～8.5mm、深さ 3.5mm の貫通しない孔あり。ケズリの前に穿孔される。内面杯部ヨコナデのち放射状の疎らなミガキ。杯部上半ナデのち一部ヘラナデ、下半ヨコナデ。中位に太いミガキ状の線が数本施される。残存部分は少ないが、ほぼ全面が漆仕上げされていたと見られる。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 黒・赤微粒多 やや硬質	東壁際床直上 裾部一部欠損 80
18 土師器 小形土器	口 復 6.8 高 3.4 底 復 5.7	浅い鉢形。外面口縁～体部軽いナデ。底部は平底で、表面剥落のため調整は不明。内面ヘラナデ。口縁部には貫通する孔があるが、断面形は直線ではなく断面内でふくらんでおり、意図的に穿たれたものかどうか明確にしない。混和材が抜けおちた穴とも見られる。孔径外側 3.0～5.5mm、内側 1.5～2.5mm。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白細～微粒少、赤細粒微量 やや硬質	口～底 1/6 周
19 土師器 小形土器	口 復 7.6 高 4.2 底 復 5.6	浅い鉢形。整形は荒い。外面口縁～体部軽いナデ。底部平底でほぼ無調整であり、植物繊維のような線状の圧痕がわずかに残る。内面口縁～底部強いナデで、ナデの単位ごとに明瞭にくぼむ。外面口縁部・内面全体黒斑のためか黒褐色を呈する。	5YR6/6 橙 やや緻密 半透明粗粒少、白・黒・赤粗粒微量 硬質	中央部西寄り床上 6cm 口～底 1/4 周 31
20 土師器 小形土器	高 残 3.1 底 復 6.5	粗雑な作り。外面体部わずかにナデ、粘土の皺あり。底部木葉痕。内面体～底部強いヘラナデ。	10YR6/6 明黄褐 やや緻密 白粗粒少、砂礫と赤・黒粗粒微量 やや硬質	中央部床上 12cm 体～底 1/2 周 38
21 土師器 小形土器	高 残 3.1 底 7.0	精良な胎土だが、調整は粗雑。底部が広い鉢形となるものだろう。外面体～底部ナデ、内面体～底部ヘラナデ。	2.5Y7/4 浅黄 緻密 赤細粒微量 やや軟質	体～底 1/2 周
22 土師器 甌	高 残 2.1 底 復 5.4	底部 1 孔で、孔径は 1.1cm。外面胴部下端～底部ナデ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。孔の面取りは上位および中位がケズリで、下位はナデでなされる。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白微粒多 やや軟質	中央部床上 15cm 底 1/2 周 54
23 土師器 甌	口 復 22.0 高 残 4.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上端ナデ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上端ヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・砂微粒少、黒・砂細粒微量 やや硬質	中央部北寄り床上 15cm 口 1/4 周 57
24 土師器 甌	口 復 19.4 高 残 4.3	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は組積の接合面から欠損する。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒・透明微粒微量 やや硬質	中央部西寄り床上 13cm 口 1/4 周 58
25 土師器 壺	高 残 16.1 最大 17.2	表面の剥落が著しく、調整が不明なところが大部分を占める。外面胴部下ナデ。表面は平滑であり、ミガキの可能性もある。内面ナデ、胴部下半に接合痕あり。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 白・黒粗粒と白・黒・赤細～微粒微量 やや軟質	カマド東の床直上 口下半、胴一部欠 86
26 土師器 甕	口 復 19.9 高 残 10.5	外面胴部上半縦方向のケズリのち口縁部ヨコナデのち胴部上半ナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 粗い 白・黒・灰色礫と砂粗粒多 硬質	北西部床上 8cm 口～胴上半 1/3 周 64、65
27 土師器 甕	口 15.4 高 残 17.6 最大 15.6	外面口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のケズリのち下端横方向のケズリ。ケズリは乱雑で、隙間多く、胴部上端には無調整部分が残る。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤・砂粗粒多、白・黒・赤・砂細粒少、赤・黒・砂礫微量 硬質	東袖奥に倒立、床上 4cm 口完存、胴一部欠 94
28 土師器 甕	口 20.5 高 残 24.6	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリ。ケズリの上端は一定しておらず、胴部上端が無調整のままとなる部分もある。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 粗い 白・黒・赤粗粒多、砂礫少 やや硬質	西袖奥に正立、床上 5～26cm 口～胴上半ほぼ完形 91、92
29 土師器 甕	口 21.0 高 32.8 底 9.2	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリのち胴部下端斜め方向のケズリ、底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胴部下半には接合痕があり、内面には粘土の継ぎ目が残る、ヘラナデは強く施される。外面には器形の歪みが表れるのみで、調整の変化はない。胴部全体に部分的に白色～淡褐色粘土付着。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白・透明粗粒少、白・黒・赤・半透明粗粒多 硬質	西袖先端に倒立、床上 7cm 口完存、底 1/2 周、胴上位完存、中位 2/3 周、下位 1/3 周 92、93、K
30 土師器 甕	口 復 20.0 高 復 34.0 (残 33.5) 底 復 6.0	外面口縁部ヨコナデ・胴部下半縦方向の下へのケズリのち胴部中位～口縁部下半縦方向の上へのケズリ。口縁部と胴部の境にある段差は、ケズリにより失われるところあり。底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	5YR6/6 橙 粗い 砂粗～細粒多、砂礫・赤粗粒少 やや硬質	中央部北寄り床直上 口～胴 2/3 周、底一部 88、K
31 土師器 甕	口 21.0 高 39.6 底 6.4	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリのち胴部下端横方向のケズリ。底部は一方のケズリで、ほぼ平底。内面口縁部ヨコナデ。胴～底部ヘラナデ。組積痕あり。胴部中位～下半外面に褐色粘土がわずかずつ所々に付着している。 [注記 97、98、99、100、K、カマド]	10YR8/6 黄橙 粗い 砂礫～粗粒多 硬質	焚口天井構築材、床上 3～28cm ほぼ完形 注記は左欄
32 土師器 甕	口 22.8 高 38.0 底 5.6	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリのち胴部下ナデ、胴部下端横方向のケズリ、底部多方向のケズリ。胴部下半のナデが施される部分は接合痕と見られ、胴部上半と、それと比較して径が大きすぎる胴下半部を接合させている。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胴部には組積痕が部分的に残る。接合部分は器厚が厚く、組積痕は顕著。外面胴部中位やや上に、帯状に白色粘土付着。	5YR7/8 橙 粗い 白・黒・透明粗～細粒多、白・黒礫と赤礫～粗粒少 やや硬質	東袖先端に倒立、床上 7cm ほぼ完形 96



第305図 権現山遺跡 SG5区 SI-15(3)遺物

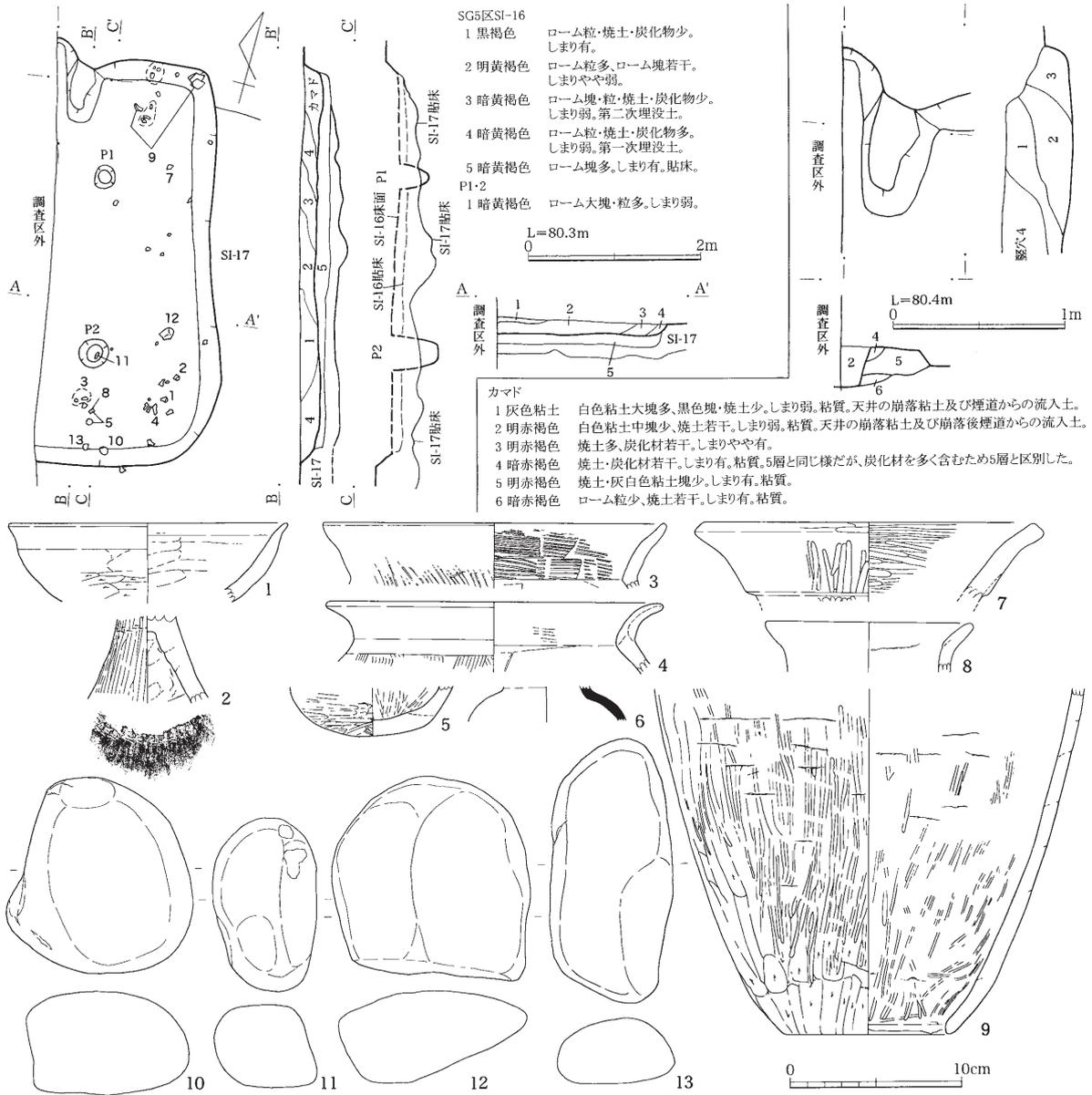
第8章 権現山遺跡 SG5 区

33 土師器 甕	高底 残 10.6 7.0	胴部下半横方向のケズリ、底部多方向のケズリ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 粗い 白・赤・砂粗粒多、砂礫少 硬質	カマド東側床上 14～25cm 胴下半～底ほぼ完存 94、95、15K、貯蔵穴
34 支脚	高 6.5 上面 4.0 下端 復 7.2	調整は荒く歪み、粘土の皸などが顕著。外面上面および側面軽いナデ。内面は強いナデで、中心から外へと粘土を押し出している。下端はナデの単位ごとに突出するため、花弁状になる。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白微粒多、赤粗粒微量 やや硬質	1/3 周
35 須恵器 甕		内外面口縁部ロクロナデのち外面櫛波状文施文。軟質のため表面の磨滅著しい。	2.5Y8/3 淡黄 緻密 灰色粗～細粒少 やや軟質	口一部
36 石器 砥石	長幅厚 残 13.2 10.5 2.3 重 残 413.4	縦長、板状の砥石。表裏両面が砥面であり、側面と上面は無調整の切断面のまま、やや磨滅する。表側は全体に平滑で、中央は使用により明瞭にくぼむ擦痕あり。周囲には、切削加工時の剥離痕がわずかに残る。裏面は図の左辺中央が最もくぼんでおり、本来はより大きな砥石であったことがわかる。表裏ともくぼんでいるところ以外が被熱により赤変する。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	南壁溝底上 11cm 一部欠 13
37 石製品 紡錘車	径 4.0～4.2 厚 1.9 重 44.5	上面は凸面で、丁寧な研磨ののち、軸に巻き付く方向の擦痕が残る。側面は縦位に切削したのち、上端の幅 4cmほどの部分と下端の稜付近は研磨ないしは使用のため平滑となっている。側面には、ヘラケズリに似た切削時の工具痕が残る。下面はわずかに凸面で平滑に研磨されており、上面と同様軸に巻き付く方向の擦痕が残る。孔径は上面で 7.54～8.56cm、下面で 7.54～8.25cmであり、明確な差はない。両面穿孔かどうかは不明。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 滑石	南壁溝底上 28cm 完形 14
38 石器 編物石	長幅厚 12.3 6.3 3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 432.5g。	7.5Y6/1 灰 やや粗い 安山岩	中央部東寄り床直上 完形 46
39 石器 編物石	長幅厚 残 11.2 5.7 2.1	河原石。上端に剥離あり。残存重量 87.8g。	5Y6/3 オリーブ黄 やや緻密 流紋岩	南壁溝底上 14cm 一部欠 10
40 石器 編物石	長幅厚 16.0 5.5 5.7	河原石。特に加工の痕跡なし。上端被熱により赤変。重量 654.4g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 流紋岩	南部床直上 完形 29
41 石器 編物石	長幅厚 15.8 5.3 4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 547.2g。	N7/ 灰 緻密 安山岩	南壁溝底上 14cm 完形 6
42 石器 編物石	長幅厚 15.5 7.1 3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 559.3g。	7.5Y7/2 灰白 緻密 安山岩	南壁溝底上 15cm 完形 9
43 石器 編物石	長幅厚 15.2 5.4 6.1	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 690.4g。	N6/ 灰 やや粗い 玢岩	南壁際床直上 完形 12
44 石器 編物石	長幅厚 15.5 6.2 4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 577.8g。	5Y7/2 灰白 やや粗い 流紋岩	南壁際床直上 完形 4
45 石器 編物石	長幅厚 16.3 6.5 3.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 499.2g。	5Y6/2 灰オリーブ やや緻密 安山岩	南壁際床直上 完形 11
46 石器 編物石	長幅厚 15.6 5.6 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 378.7g。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 安山岩	カマド東側床 26cm 完形 91
47 石器 編物石	長幅厚 14.1 6.5 3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 435.0g。	5Y6/3 オリーブ黄 緻密 安山岩	南壁溝底上 33cm 完形 16
48 石器 編物石	長幅厚 10.5 5.7 3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 524.9g。	10YR6/6 明黄褐 やや粗い 流紋岩	南壁溝底上 11cm 完形 18
49 石器 編物石	長幅厚 14.2 6.0 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 556.3g。	N6/ 灰 緻密 安山岩	南壁際床直上 完形 5
50 石器 編物石	長幅厚 13.6 6.4 3.8	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 474.4g。	2.5Y7/1 灰白 やや緻密 安山岩	南壁溝底上 11cm 完形 19
51 石器 編物石	長幅厚 14.7 5.8 3.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 453.3g。	2.5Y7/2 灰黄 粗い 礫岩	南部床直上 完形 28
52 石器 編物石	長幅厚 13.6 5.7 3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 328.3g。	5B4/1 暗青灰 緻密 ホルンフェルス	南壁溝底上 12cm 完形 2
53 石器 編物石	長幅厚 12.9 5.6 3.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 384.6g。	5Y6/2 灰オリーブ やや粗い 流紋岩	南部床直上 完形 27
54 石器 編物石	長幅厚 13.7 4.7 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 403.8g。	2.5GY6/1 オリーブ灰 やや粗い 玢岩	南壁溝底上 24cm 完形 15
55 石器 カマド支脚	長幅厚 21.8 7.8 7.7	河原石。特に加工の痕跡なし。ほぼ全面が被熱により赤変しているが、裏面より表面の方がより赤変している。図下端に黒色物質の付着と焼けはじけあり。残存重量 878.2g。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 流紋岩	カマド煙道底上 8cm 一部欠 89

SG5 区 SI-16 (第 306 図、写真図版 31・180)

[位置] SG5 区中央部北寄りの 15-16 グリッド。西半は調査区外。同じく古墳中期の建物は北に SI-13 がある。古墳中期の SI-17 を切る。

[規模と形状] 南東隅が丸いがほぼ方形と想定され、南北の中軸線は N-13° -W。東西長は 1.85m 以上、南



第306図 権現山遺跡 SG5区 SI-16 遺構・遺物

北長 4.71m。壁は外傾し、残存高 14～18cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。

SI-17の床面より上方に、ローム粒が多い暗黄褐色土で厚さ 4～15cmの貼床を施す。貼床除去中に、東側支柱穴と推定される P1・P2 を検出した。P1 は径 27×25×床面から深さ 34cm、P2 は径 35×33×床面から深さ 46cm。P1-P2 の柱間は 2.04m。

[カマド] 支柱穴の位置などから北壁中央より少し東に位置すると思われる。カマド西半は調査区外。両袖幅は推定 80～90cm、煙道先端から焚口部まで 100cm。袖は灰褐色粘土主体の 4～6層で構築する。火床はほぼ平坦で、床面より少し窪む。煙道～燃焼部に、焼土多量と炭化材若干を含む流入土の 3層、その上に天井の崩れた灰褐色粘土塊が多い 1・2層が堆積する。煙道先端は北壁より 25cm 突出し、急に上がる。

[覆土] 自然埋没で、各層ともさほど締まらない。初期堆積土の 4層にローム・焼土・炭粒が多い。

[遺物出土状況] 全域に見られる。床面からかなり浮く破片が主体で、杯 (1)・高杯 (2)・甌 (9) と、礫・編物石 (10～13) が床に近い。潰れた大きな土器は甌 (9) だけで、他はあまり大きくない破片である。

先行する SI-17 の遺物が多く混入している可能性があり、貼床出土遺物は特にその可能性が高い。甕 (3)

第8章 権現山遺跡 SG5 区

も SI-17 と遺構間接合しているの混入の疑いがある。

[出土遺物] 遺物は少ない。高杯はハ字状脚部だけが見られた(2)。6は初期須恵器または古式須恵器の甕。貼付口縁の壺(7)は、SG5区ではSI-100などにある。大形甕(9)は図示した以外の破片がほとんどない。図示以外の土師器と焼粘土塊は小破片ばかりで合計360片・2,500g。その内訳は杯53片・272g、高杯5片・48g、壺甕類295片・2,138g、甕3片・23g、焼粘土塊4点・19g。図化以外の遺物では、椀形杯は内彎口縁と内斜口縁の破片が見られ、模倣杯はない。約3本/1cm程度の粗いハケで調整した甕片がある。

第174表 権現山遺跡 SG5 区 SI-16 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 復 16.0 高 残 4.6	外面杯部口縁部ヨコナデ、体部上半無調整。体部下半は光沢を持つケズリ。内面は口縁部ヨコナデ。体部は強いナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・赤細粒多、白礫 ～粗粒微量 やや硬質	南東部床上 3cm 杯口～体 1/6 周 23
2 土師器 高杯	高 残 5.0	外面脚部上半縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキのち上端に連続するヘラ痕。内面は荒いナデで、残存部の下端にヘラナデが見える。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤・黒細粒微量 やや硬質	南東部床上 2cm 脚上半 2/3 周 20
3 土師器 甕	口 復 19.8 高 残 3.9	外面口縁部 4 本/1cmのハケのちヨコナデ。内面口縁部 4 本/1cmのハケのち軽いヨコナデ。胴部上端はわずかに残存しており、調整はヘラナデ。外面口縁部煤付着。	7.5YR5/3 にぶい褐 やや粗い 白細粒多、白礫～粗 粒少 やや硬質	南部床上 5cm と SI-17 中 央部東寄り床上 17cm 口～頸 1/6 周 35、87
4 土師器 甕	口 復 19.4 高 残 4.1	外面胴部上端 5 本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。	10YR3/1 黒褐 やや緻密 砂粗～細粒と白細粒 少、砂礫微量 やや硬質	南東部床上 11cm 口 1/6 周 25
5 土師器 鉢	高 残 2.9 底 6.7	丸底だが、体部との境で角度が変化する。外面体～底部ケズリのち荒く太いミガキ。内面ヘラナデのち密で荒く太いミガキ。	10YR4/2 灰黄褐 やや粗い 白・黒・半透明粗粒 多、黒礫微量 硬質	南部床直上 体下半 1/2 周、底完存 32、33
6 須恵器 甕	高 残 2.1	胴部上半内外面ともロクロナデ。外面は灰白色の降灰を薄くかぶる。破面は暗赤色。	10Y6/1 灰 緻密 白・黒細粒微量 硬質	胴上半一部
7 土師器 壺	口 復 20.0 高 残 4.6	口縁部外面に粘土貼り付けによる段を持つ複合口縁。外面口縁～頸部ヨコナデのち縦方向のミガキ。内面口縁上端～頸部ヨコナデのち横方向のミガキ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤礫と黒・ 透明・砂微粒微量 やや硬質	東部床上 16cm 口 1/8 周 9
8 土師器 壺	口 復 12.0 高 残 2.8	外面口縁部ヨコナデ、内面頸部ナデのち口縁部ヨコナデ、内面に接合痕残る。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 白微粒と赤・黒細粒少 やや硬質	南部床直上 口 1/6 周 33
9 土師器 甕	高 残 20.0 底 9.6	無底式。胴部内外面には、組積みの凹凸が残る。内外面とも、磨滅のため調整不明瞭な部分あり。外面胴部縦方向のケズリのち縦方向のミガキ。内面ヘラナデのち縦方向の密なミガキ。底部ヘラナデにより面取りされる。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 砂細～微粒少、赤粗粒微 量 やや硬質	北東隅床上 8cm と北東部 床直上 胴中位～底 1/5 周 1、3
10 礫	長 11.3 幅 10.9 厚 6.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1098.1g。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	南部壁際床上 2cm 完形 30
11 礫	長 10.0 幅 6.0 厚 5.3	河原石。特に加工の痕跡なし。右上に発掘調査時のものと見られる欠損あり。重量 416.6g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 安山岩	床面レベル下 1cm の P2 内 ほぼ完形 19
12 礫	長 11.5 幅 11.4 厚 5.3	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 919.2g。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 チャート	東部床上 5cm 完形 16
13 石器 編物石	長 15.2 幅 7.1 厚 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 599.2g。	10YR6/2 灰黄褐 緻密 安山岩	南壁際床上 3cm 完形 31

SG5 区 SI-17 (第 307・308 図、写真図版 31・32・180)

[位置] SG5 区中央部北寄りの 14-16、15-16 グリッド。西半は調査区外。同じく古墳中期の建物は北と南に SI-13・116 がある。古墳中期の SI-16 に北側を切られる。

[規模と形状] 方形と想定され、南北の中軸線は N-2° -W。東西長は 4.75m 以上、南北長は 6.47m。壁は外傾し、残存高 20～42cm。床は平坦で、柱穴 P1-P2 ラインよりも西側が踏み固められて特に硬化する。掘方は床面から深さ 6～18cm で底面に緩い凹凸があり、ローム粒・塊の多い暗黄褐色土ではほぼ全体を貼床する。

東側支柱穴と推定される P1 は径 39 × 29 × 深さ 50cm、P2 は径 34 × 32 × 深さ 60cm、P1-P2 の柱間は 3.32m。貼床除去後に確認した間仕切溝 D1～D3 は、北壁と P1 を結ぶ D1 が長 110 × 幅 12～21cm、その延長上で P2 の西にある D2 は長 78 × 幅 18～21cm、東壁と P2 を結ぶ D3 は長 128 × 幅 17～26 × 深さ 9cm。

南東隅の貯蔵穴 P3 は東西軸で 117 × 94 × 床から深さ 53cm。開口部は幅 10～20cm で床から約

第8章 権現山遺跡 SG5 区

10cm 浅く掘り、下部は 82 × 61cm で直立壁・平底の長方形。上層に焼土・炭を含み、3 層に壁の崩れたローム塊が多い。

[炉] 中央部北側にあり、長径 85 × 短径 56m、床面からの深さ 5cm で浅く掘り込む。SI-16 の掘形による攪乱は免れたが、北～西部プランは明瞭に把握できなかった。南端の 40 × 20cm の範囲は特に焼土が顕著に堆積して非常に硬化し、北部はあまり焼けていない。炉周囲の床面に炭化物が多く堆積していた。

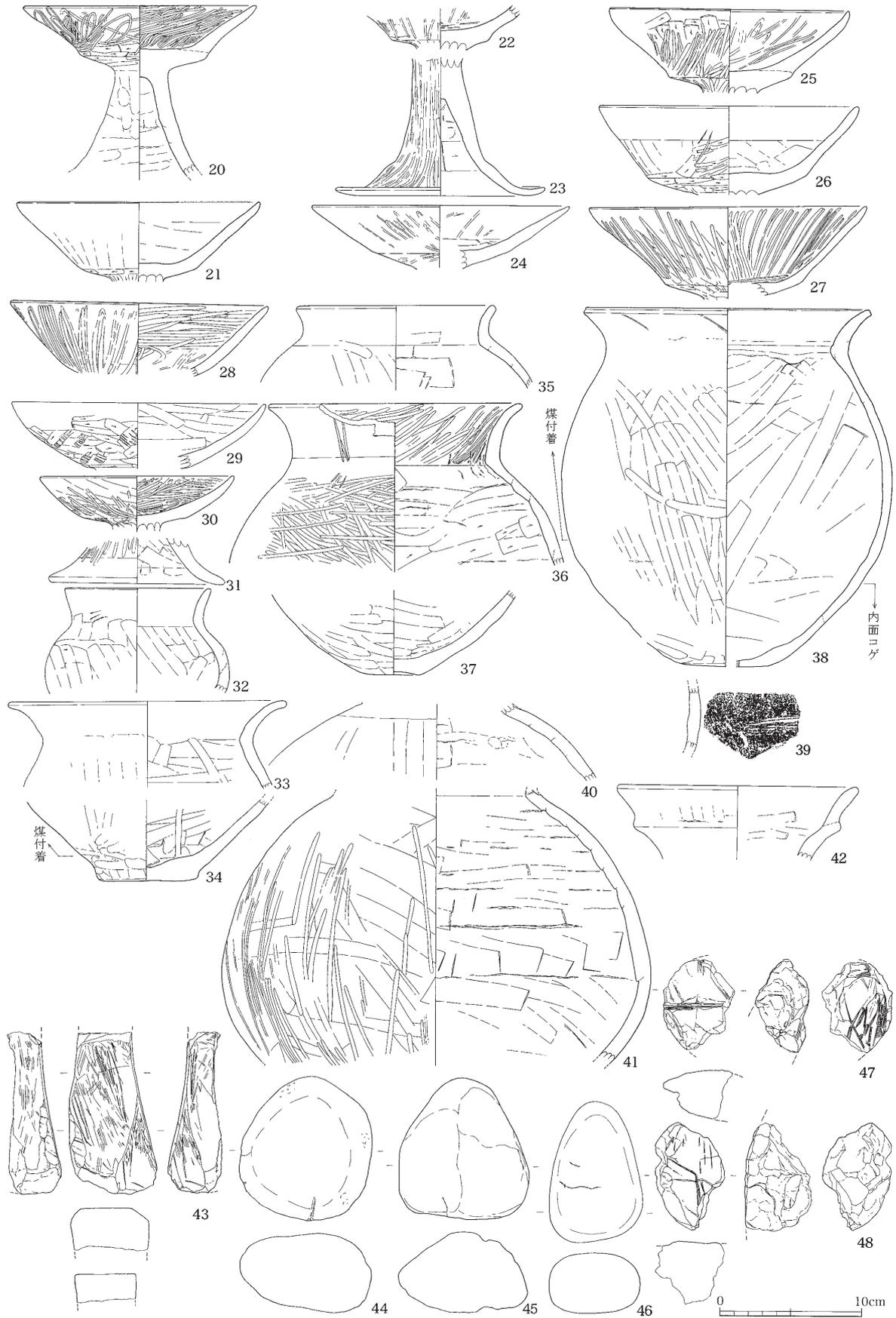
[覆土] 自然埋没で、最下層に焼土が混じる。

[遺物出土状況] 床面近くから上へ 20cm 以上まで、高低差を持って遺物が多く出土した。貯蔵穴西側の堅穴南壁寄りに多い。15・32・41 が床付近にある。P3 付近の遺物は周囲の床面より上方にある。

[出土遺物] 遺物が特に多い。椀形杯と高杯が主体で、浅く開いた椀形杯を含み、模倣杯 (10・11) はごく少ない。高杯はやや器高が低いが、短脚高杯はない。小形壺は、偏球 (算盤玉) 形で小さな体部が目立つ。36 は頸部に刻線が。壺甕類の破片が多い中に、胴部が少し伸びた甕 (38) はあるが、典型的な長胴甕はない。1cm あたり 3～4 本の粗いハケ調整甕の破片が少し見られた。大形甕はない。42 は崩れた二重口縁状。図示以外の土師器と焼粘土塊合計 1,243 片・11,302g の内訳は杯 541 片・3,169g、高杯 217 片・2,749g、小形壺か鉢 39 片・404g、壺甕類 443 片・4,941g、焼粘土塊 3 点・39g。図化以外の遺物には、脚柱部や杯底部で見ると高杯が 7 個体、杯・鉢は底部が 9 個体 (内訳は上底状 6・平底 2・突出する底部 1)、大形壺・甕は底部が 2 個体ある。43 は粘板岩製品の砥石。SG5 区では SI-6 などに粘板岩製品がある。

第 175 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-17 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.1 高 残 6.3 最大 復 12.2	外面口縁部ヨコナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。体部下半ケズリ。体部下表面の剥落著しく、調整不明瞭。内面口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラナデのち口縁～体部縦方向のミガキ。口縁～体部上半は疎ら、体部下半はやや密に施される。内面クレーター状に剥落。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・砂微粒少、 黒礫～粗粒と赤粗粒微量 やや硬質	中央部東寄り床上 24cm 口～体 1/5 周 90、貯蔵穴
2 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 5.5	外面口縁～体部上半ヨコナデ、体部下半ケズリのちナデ。体部中位ヨコナデ直下に無調整部分あり。内面体部ナデのち口縁～体部ヨコナデのち口縁部横方向、体部斜位の疎らなミガキ。内面は外面口縁～体部一部煤付着。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・半透明細粒多、 半透明粗粒少、赤粗粒微量 やや硬質	北壁際床上 12～13cm 口～体 1/2 周 120、121、貯穴
3 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 5.3	外面口縁部ヨコナデ・体部丁寧なケズリのち口縁～体部斜位の規則的な疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部強いヘラナデ。内面体部はヘラナデ後さらにヘラ状工具によりナデつけられたらしく、調整により高くなった部分のみ光沢がある。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白・赤・半透明細粒 微量 硬質	貯蔵穴底上 73cm 口～胴上半 1/6 周 124
4 土師器 杯	口 13.0 高 7.7 底 3.0	外面口縁部ヨコナデのち体～底部光沢を持つケズリ。底部は小さくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、底部ケズリのち体部ヘラナデ。体部下半に接合痕あり。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 赤粗粒多、白・砂粗 粒少 やや軟質	東壁際床上 7cm ほぼ完形 106
5 土師器 杯	口 復 10.7 高 5.4 底 4.8 最大 10.9	器体整形、器面調整とも粗く、小形土器に近い。また、軟質のため調整が不明瞭な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ、底部磨滅しているが、ケズリのちナデと見られる。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。 [注記]80、88、98、SI-16 ベルト	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤微粒少、 白・黒細粒微量 軟質	東部床上 13cm と中央部 床上 5～9cm 口～体 1/4 周、底 3/4 周 注記は左欄
6 土師器 杯	口 復 13.2 高 6.0 底 復 4.0	外面口縁～体部上半ヨコナデ、体部中位ナデのち下半ケズリ。底部ケズリのちナデで、くぼむ。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ナデで、指頭圧痕、接合痕が残る。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白細～微粒多、赤・ 黒細粒少 やや硬質	南部壁際床上 11cm 口～底 1/4 周 137
7 土師器 杯	口 13.8 高 6.3 底 7.0	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのちミガキ。底部ケズリのちミガキで、ややいびつな平底。内面口縁部ヨコナデ。体～底部ナデのち放射状の荒いミガキ。ミガキは内外面とも太い。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・灰色・透明砂粒 少、赤粗～細粒微量 硬質	北壁際床上 9cm 口～体 2/3 周、底完存 117、貯蔵穴
8 土師器 杯	口 14.6 高 5.6 底 5.8	磨滅のため、調整不詳のところがある。胎土中に白色土をブロック状に含む。外面口縁部ヨコナデ、体部下半ケズリのち体部わずかなナデのち疎らなミガキ。底部はケズリのちミガキで、大きくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのちミガキ。体部は斜位で疎ら、底部は一方方向で密に施される。器体の調整が悪く、全体の歪み、器面の凹みなどあり。9 に類似。	5YR6/8 橙 やや緻密 透明粗粒少、赤・黒 細粒と白微粒少 やや軟質	南部床上 9～11cm と貯 蔵穴底上 73cm 口～体 4/5 周、底完存 45、50、51、124、135
9 土師器 杯	口 15.2 高 4.1 底 4.6	胎土中に、白色土がマーブル状ないしブロック状に混じる。磨滅のため、調整不詳の部分がある。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち横方向の太いミガキ、底部ケズリのちミガキで、大きくくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。器体の調整が悪く、全体の歪み・器面の凹みなどあり。8 に類似。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤礫～細粒と白・ 黒・赤・砂微粒少 やや軟質	貯蔵穴底上 55cm ほぼ完形 31、貯蔵穴
10 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.0	表面の磨滅著しい。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ・ナデのち放射状のミガキ。ミガキは本来密に施されていた可能性あり。	5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒と砂細粒少 やや軟質	南部床上 9cm 口～体 1/3 周 45
11 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 5.5	外面口縁～体部 8 本/1cm のハケのち口縁～体部上端軽いヨコナデ。体部上半軽いナデ・体部下半ケズリのち体部中位～下半やや疎らなミガキ。内面口縁部上面の平坦面のみヨコナデ。体～底部ヘラナデのちミガキ。内外面ともミガキは光沢を持つが、単位不明瞭。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白細～微粒と黒微粒 多 硬質	口～体 1/4 周



第308図 権現山遺跡SG5区SI-17(2)遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

12 土師器 鉢	高 残 1.3 底 5.5	外面は表面が磨滅しているため、調整が不明確なところが多い。外面体部下半～底部ケズリのちナデ。底部はくぼんでおり、中央の径 1.2cmほどの部分がさらにくぼむ。内面ケズリのち光沢を持つナデ。円盤状に底部のみが完存しており、接合面から欠損したものと見られる。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗粒多、白・砂粗粒少、透明粗粒微量 やや軟質	北東部床上 3cm 底完存 109
13 土師器 鉢	口 復 13.0 高 7.6 底 6.4	やや粗製の土器。外面口縁部ヨコナデ、体部はわずかなナデで、細かな粘土の皺が残る。底部ナデ。底部の器厚は厚く大きく突出する平底で、中央がややくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち太い放射状のミガキ。	7.5YR7/8 黄橙 緻密 赤粗～細粒と白微粒少 やや硬質	東部床上 13cmと D3 付近 口一部、体 1/3 周、底 1/2 周 80、129
14 土師器 小形壺	口 復 12.8 高 残 5.4	外面口縁部上半ヨコナデ・下半ケズリのち丁寧なナデ。ミガキの可能性があるが、単位はつかめない。内面口縁部ヨコナデのち一部ナデのち疎らなミガキ。	5YR6/6 橙 緻密 白礫～細粒と黒粗～細粒微量 やや硬質	口 1/6 周
15 土師器 小形壺	高 残 6.9 底 2.9～3.7 最大 9.8	外面口縁部下半ミガキ、胴部上半縦方向のミガキのち胴部横方向の光沢のあるケズリ。底部ケズリで、楕円形にくぼむ。内面口縁部下半ナデのちミガキ、胴部上半軽いナデで、粘土の皺顕著。粗積痕あり。胴部下半～底部ヘラナデ。	5YR7/8 橙 やや緻密 黒細粒少、白・赤細粒微量 やや硬質	中央部床上 4～25cm 口下半～底一部欠 93、111、123、SI-16 掘り方
16 土師器 高杯	口 22.6 高 18.6 脚 17.0	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデ・体部下端～底部ケズリのち口縁～体部疎らな縦方向のナデ。脚部上半縦方向の密なミガキ、脚部下半ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面杯部口縁～底部ヘラナデのち口縁部軽いヨコナデのち放射状のやや疎らなミガキ。脚部上半ナデ、下半ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細粒多、砂礫少 やや硬質	南部床上 4～13cmと貯蔵穴底上 43～55cm 口～脚 2/3 周 22、50、53、59、124、125、136、貯蔵穴
17 土師器 高杯	口 16.7 高 13.7 脚 14.3	内外面とも、ミガキは使用されない。外面杯部体～底部縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ、体～底部の稜付近ケズリ。体部に調整後の軽い指の当たりあり。脚部縦方向のナデのち脚端部ヨコナデ。内面杯部体～底部横方向のヘラナデのちナデのち口縁部ヨコナデ。脚部上半ナデで、粗積痕・粘土のしぼり目顕著。下半ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 半透明粗粒多、赤粗粒と砂礫少 やや硬質	南部床上 9～12cm 口・脚端部一部欠 48、51、53、59、貯蔵穴
18 土師器 高杯	口 17.4～ 高 17.7 脚 13.9 脚 13.6	杯部はナデのみで調整される。外面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ナデ。脚部下半軽いヨコナデのち脚部全体縦方向のミガキ。ミガキは強く施されており、上半は密に下半はやや疎らとなる。内面杯部口縁部軽いヨコナデのち口縁～底部ナデ。口縁端部は内側に面を持つように調整される。脚部上半縦方向のナデ、下半ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、白・赤礫微量 やや硬質	南部床上 3～12cm 杯口 4/5 周、杯体～脚上半完存、脚下半 1/4 周 38、48、50、51、53、63、貯蔵穴
19 土師器 高杯	口 復 16.0 高 13.2 脚 13.0	外面杯部体部縦方向のナデ・底部ナデのち口縁部ヨコナデ・体部下端～底部光沢のあるケズリ。ケズリは稜を明確にするように施されており、一部体部の張り出した部分にも及ぶ。脚部丁寧なナデのち下半ヨコナデ。内面杯部口縁～体部ヨコナデのち底部ナデ。脚部上半軽いナデで、粗積痕・しぼり目顕著。脚部下半ヘラナデのちヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 砂粗～細粒少、白・赤粗粒微量 硬質	南部床上 7cmと北部床上 5cmと SI-16 の何片か 杯口～体 1/2 周、底～脚上半完存、脚下半 2/3 周 60、97、貼床、SI-16 覆土
20 土師器 高杯	口 復 16.2 高 残 11.9	外面杯部体部縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ・体部下端～底部ケズリのち口縁～体部乱雑な斜め方向のミガキ。脚部上半ナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部は斜め、底部は一方方向のミガキ。外面全体、杯部内面に煤付着。	2.5YR5/4 にぶい赤褐 緻密 白微粒多、白粗～細粒と赤・黒細粒微量 硬質	中央部床上 7cm 杯口～体 1/3 周、底～脚上半完存 84、SI-16 No.22
21 土師器 高杯	口 復 17.0 高 残 5.6	杯部口縁～体部の磨滅著しい。外面体部縦方向のナデ、口縁部ヨコナデ、底部縦方向の丁寧なケズリのち稜付近に横方向のケズリ。内面体～底部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白細粒少、赤粗～細粒と黒細粒微量 やや硬質	南壁際床上 11cm 杯口～体 1/4 周、底 1/2 周 56
22 土師器 高杯	高 残 3.2	杯部内面磨滅著しく、調整不明確。外面杯部体部ナデのち縦方向の疎らなミガキ。底部縦方向のナデのち横方向のナデのち一部体部から続くミガキ。内面ヘラナデのちミガキ。密なミガキと思われるが、不明瞭。	5YR6/8 橙 やや粗い 黒細粒と白細～微粒多 やや硬質	北部床上 11～12cm 杯体下半 3/4 周、底完存 113、121、貯蔵穴
23 土師器 高杯	高 残 9.6 脚 復 14.5	外面脚部下半ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミガキは上半～中位は密で、下半はやや疎らとなる。内面杯部上半ケズリ、下半ヨコナデ。上半のケズリは、上端にまで達する。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・砂微粒少、白・黒・赤粗粒微量 やや軟質	D3 付近床上 10cm、貯蔵穴底上 62cmが接合、P2 付近床上 10cmと中央部床上 18cm 脚 1/3 周 29、34、75、85
24 土師器 高杯	口 復 17.9 高 残 4.5	杯部内外面とも表面の磨滅著しい。外面体～底部ナデ、口縁～体部上半ヨコナデのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部は疎ら、底部はやや密と見られる。内面口縁～体部ヨコナデ、底部ヘラナデのちミガキ。ミガキはわずかにしか認められないが、本来は密に施されていたものと推測される。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 赤粗粒と砂粗～細粒少、白・黒粗粒微量 軟質	南部床上 9cm 杯口～底 1/4 周 59、貯蔵穴
25 土師器 高杯	口 復 16.6 高 残 5.8	外面口縁部ヨコナデのち体～底部縦方向主体のケズリのちミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち縦方向主体のやや疎らなミガキ。ミガキは放射状主体で、底部は密に施される。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂細粒少、白・赤粗～細粒微量 やや軟質	杯口～体一部、底 1/2 周 貼床
26 土師器 高杯	口 18.0 高 残 6.2	外面杯部体～底部縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ・底部外周の稜付近を中心に横方向のケズリ。体部のごく一部にケズリあり。底部の胎土は他の部分よりも白いものであり、杯部と脚部で異なる胎土としていた可能性がある。内面杯部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。全体に作りは雑で、歪みあり。口縁部はわずかに内彎する。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤粗粒と白細粒少、砂礫微量 やや硬質	南壁際床上 15cm 杯部一部欠 54
27 土師器 高杯	口 19.2 高 残 6.5	外面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち体部疎らなミガキ。ケズリは体部は疎ら、底部は丁寧に施される。内面体～底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのち口縁～体部やや疎らな縦方向・底部密な 1 方向のミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤礫～粗粒多、白細粒少 やや硬質	北部床上 8cm 杯一部欠 118
28 土師器 高杯	口 復 17.9 高 残 5.0	外面杯部口縁部ヨコナデ、体部下端ヘラナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。内面杯部口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのち口縁～体部上半縦方向のミガキ、体部下端疎らな多方向のミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 赤細粒と白微粒微量 硬質	D3 付近床上 10cmと南部床上 12cm 杯口～体 1/4 周 34、67、貼床
29 土師器 高杯	口 17.6 高 残 4.6	外面口縁部ヨコナデのち体～底部丁寧なケズリ。クローラー痕あり。内面口縁～底部ヘラナデ。口縁部付近はヨコナデがあったと思われるが、ヘラナデにより全く確認できない。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 黒細～微粒少、赤粗粒微量 硬質	貯蔵穴底上 62cmと P2 上の床付近と貼床中 口～体 4/5 周 29、131、142、貯蔵穴
30 土師器 高杯	口 13.4 高 残 3.9	硬質・精緻な調整の高杯。外面口縁部ヨコナデのち体～底部丁寧なケズリのち疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～体部横方向、底部一方方向のミガキ。ミガキは密だが、痕跡がわずかなため単位がつかみにくい。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・赤細粒微量 硬質	北東部床上 1cm 杯部ほぼ完存 103

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

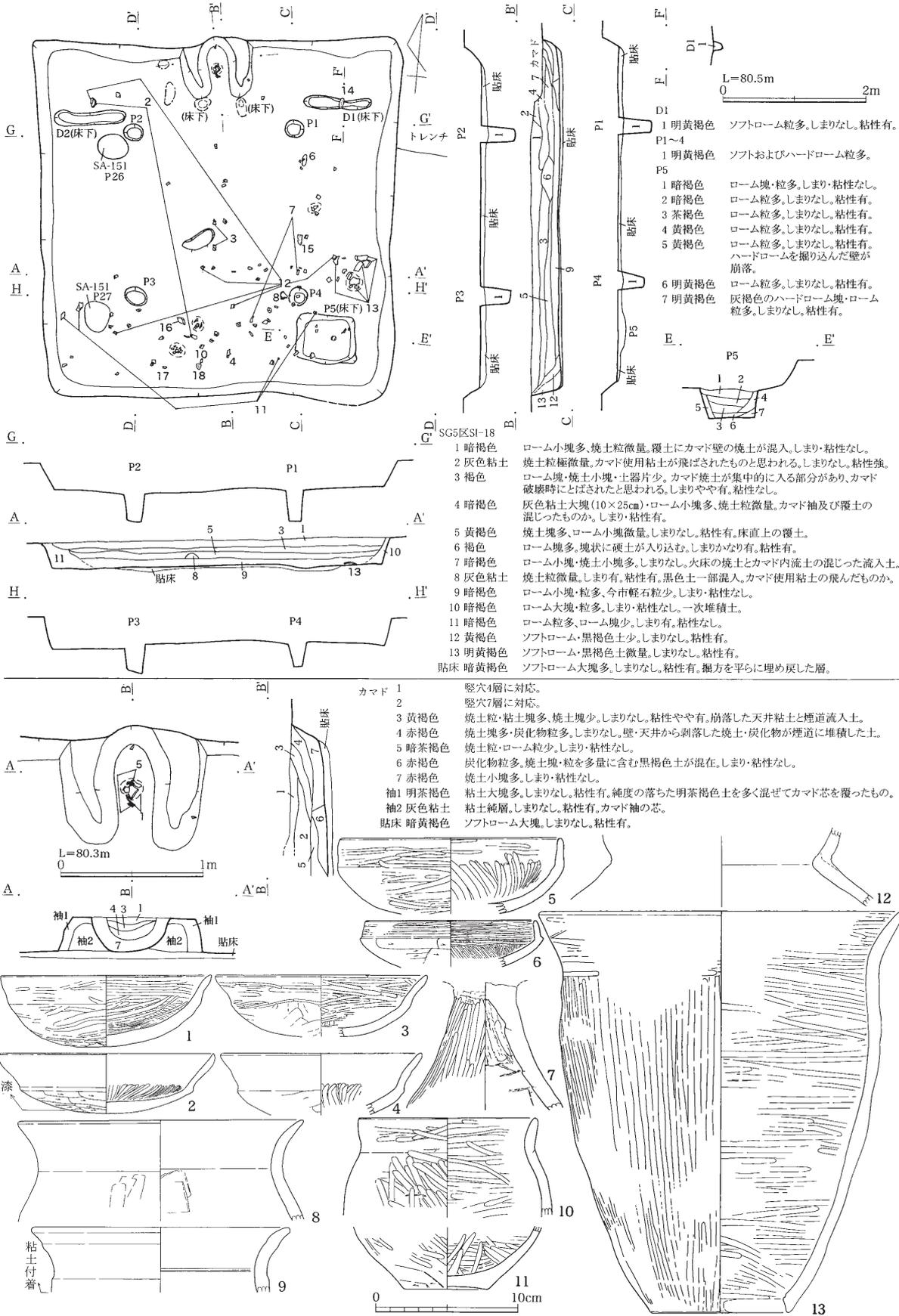
31 土師器 高杯	高 残 3.2 脚 12.0	外面脚部下半粗いナデのち下端ヨコナデのち疎らな縦方向のミガキ。内面脚部下半強いヘラナデのち下端ヨコナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 砂粗～細粒少、黒礫 と白・赤粗粒微量 やや硬質	中央部床上 17～24cm 脚下半完存 86、90
32 土師器 小形甕	口 復 10.2 高 残 7.4 最大 復 12.8	器体の歪みが目立つ。外面口縁～胴部上半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデで、粘土の皸あり。外面口縁～胴部上半・内面口縁部上半煤付着。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒と白細粒 少、砂礫微量 やや硬質	東部床上 4cm 口～胴上半 1/4 周 105
33 土師器 甕	口 復 19.4 高 残 6.2	外面口縁部ヨコナデ、胴部上端縦方向の丁寧なヘラナデ。内面口縁部ヨコナデのち胴部上端強いナデ。外面口縁～胴部上端は煤付着するほか、表面に細かなヒビが入っている。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白細粒多、白礫～粗 粒微量 硬質	北部床上 26cm 口～胴上端 1/6 周 102
34 土師器 甕	高 残 5.7 底 7.0	外面胴部下半ナデ、底部ケズリで、突出する平底。内面胴部下半～底部ヘラナデのち一部ナデ。外面胴部下半には煤が付着するほか、表面に細かなヒビが入っている。表面の特徴は、33の甕に類似しており、同一個体の可能性があろう。内面胴部下半～底部薄くコゲ付着。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・砂礫～細粒と黒 粗～細粒少 やや硬質	炉付近床上 5cmと炉東側 の床上 5cm 胴下半一部、底完存 98、101
35 土師器 甕	口 復 13.8 高 残 5.9	外面胴部上半縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上半強いヘラナデ。外面口縁～胴部上半煤付着。	5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗粒と白細粒微量 硬質	中央部南寄り床上 15cm 口～胴上半一部 70
36 土師器 甕	口 17.6 高 残 11.3	外面口縁部上半ヨコナデ、下半強いヨコナデ。胴部上半ナデのちミガキ。口縁部には、3本の線刻がある。上から下へと工具を動かしたらしく、胴部にわずかな線刻が付けられている。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち疎らな斜め方向のミガキ。胴部上半はケズリで、上端はヘラナデとなる。頸部には、しぼり目と見られる粘土の皸が目立つ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤粗粒少、礫と 透明粗粒と白・黒・赤粗粒微量 やや硬質	南部床上 9cm 口完存、胴上半 1/2 周 68
37 土師器 甕	高 残 6.0 底 3.8	外面胴部下半荒いヘラナデ、底部は小さい上げ底で、ナデ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。外面胴部下半～底部煤付着、内面胴部下半～底部コゲ付着。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 白・透明・砂粗粒多 やや硬質	中央部床上 24cm 胴下半～底完存 83、SI-16 No.36
38 土師器 甕	口 20.0 高 24.9 底 6.5 最大 23.0	外面口縁部ヨコナデで、ミガキのような工具痕 2本あり。胴部丁寧なナデ。底部はケズリで、丸味を持つ平底。底部付近は被熱のためか磨滅著しい。内面口縁部ヨコナデで、整形時に逆位に置いていたためか、端部は平坦面となっている。口縁部下半には緩やかな段あり。胴～底部は強いヘラナデで、下寄りほど強く施される。底部薄い。胴部下半には接合痕があるが、器形と外面のわずかな継ぎ目としてのみ表れている。外面全体煤付着。内面胴下半～底部コゲ付着。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白・黒・砂粗粒多 硬質	中央部床上 4～17cm、 南部床上 2～22cmと北 部床上 8～13cm 口完存、胴～底 1/2 周 42、43、50、55、58、61、 62、78、87、115、119、 141
39 土師器 甕	長 残 6.6 幅 4.5 厚 0.8	甕胴部片を研磨具に転用したもの。表側に一方の擦痕あり。左端は欠損していると見られる。残存重量 26.3g。	7.5YR4/3 褐 やや緻密 白・透明細粒微量 硬質	南部床上 9cm 一部欠 65
40 土師器 大形壺	高 残 5.2	外面胴部上半縦方向のナデのち上端ヨコナデ。内面胴部上半ナデのち一部ヘラナデ。粗積痕顕著。外面はミガキの可能性あるが、全体に磨滅しているため不詳。	10YR7/2 にぶい黄橙 やや粗い 赤・黒粗粒多、半透 明粗粒と礫少 やや硬質	南東部床上 4～11cmと 貯蔵穴底上 43cm 胴上半完存、胴中位～下 半一部 21、22、23、24、25、125、 貯蔵穴
41 土師器 大形壺	高 残 19.0 最大 復 30.0	外面胴部ヘラナデ・ナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面ヘラナデで、中に接合痕あり。接合痕より下は平滑だが、上は粗積痕が顕著に残る。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白礫～粗粒少、赤礫 と白細粒微量 やや硬質	SI-16 内と北部床上 2cm が接合 胴 1/4 周 1、2、3、10、17、122、 貼床、床直
42 土師器 大形壺	口 復 16.8 高 残 5.2	二重口縁。外面口縁部上半縦方向のナデのち軽いヨコナデ。下半ヨコナデ。内面ヘラナデのち軽いヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒少、透明細粒 と砂礫微量 硬質	口一部 貼床
43 石器 砥石	長 残 11.3 幅 残 5.5 厚 残 2.9	角柱状の砥石と見られる。表・両側面が使用により平滑になっており、長軸方向の擦痕が多い。表面左下には、切削時の加工痕が残る。下端は割れ面のまま。残存重量 302.6g。	N4/ 灰 緻密 粘板岩	中央部床上 7cm 破片 82
44 礫	長 10.0 幅 9.3 厚 5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。表面に鉄分由来すると見られる褐色の付着物あり。重量 698.3g。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 安山岩	中央部床上 26cm 完形 94
45 礫	長 9.8 幅 9.0 厚 5.6	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 621.6g。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや緻密 チャート	中央部 (SI-16 内) 完形 7
46 礫	長 9.7 幅 6.3 厚 4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 446.8g。	2.5Y7/2 灰黄 緻密 安山岩	中央部 (SI-16 内) 完形 11
47 土製品 焼粘土塊	長 残 6.3 幅 残 4.9 厚 残 3.7	大きな粘土塊の破片。48と同一個体の可能性あり。左図左側に縁辺が残り、表・裏・側面とも表面には草木の圧痕がある。裏面に顕著。残存重量 60.4g。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤微粒少、白・ 赤粗粒微量 やや軟質	中央部 (SI-16 内) 破片 20
48 土製品 焼粘土塊	長 残 7.6 幅 残 4.8 厚 残 4.4	大きな粘土塊の破片。左図の平坦面が残存する表面で、草木の圧痕がある。他はすべて欠損面。残存重量 84.5g。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細粒 少 やや軟質	中央部床直上 破片 81

SG5区 SI-18 (第309・310図、写真図版32)

[位置] SG5区中央の14-17、15-17グリッド。同じく古墳後期の建物は南西にSI-19がある。北辺が確認調査時のトレンチに切られる。古墳中期の柵列SA-151を切る。SI-18の貼床を除去した後にSA-151のP-26・27を確認したので、SA-151がSI-18より古いことは、ほぼ確実である。

[規模と形状] ほぼ方形で中軸はN-12°-W。東西4.71m、南北4.65m。壁は直線的に外傾し、残存高22～42cm。床面はほぼ平坦で傾斜しない。床面から2～4cmの厚さで、ほぼ全体に貼床を施す。

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第309図 権現山遺跡 SG5 区 SI-18 (1) 遺構・遺物

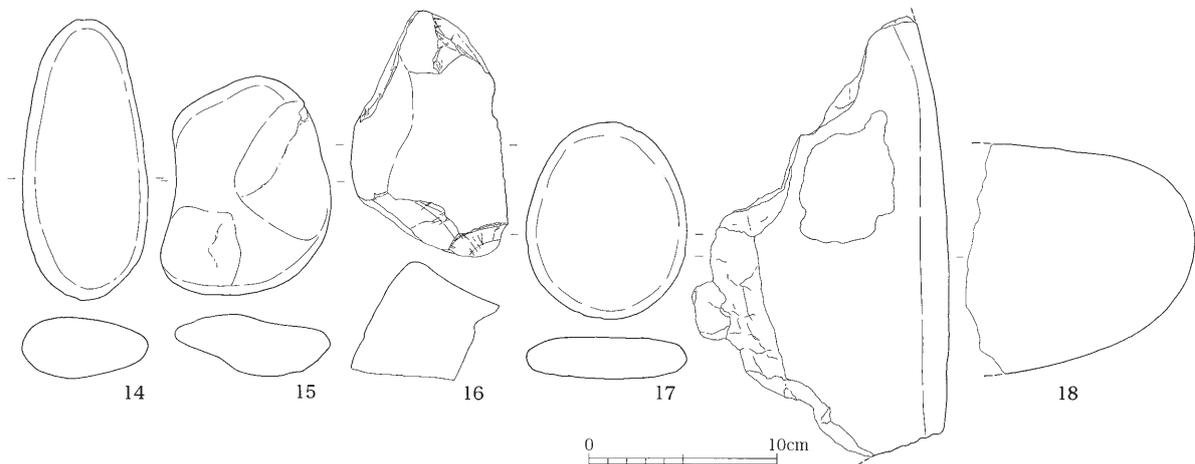
主柱穴4本はほぼ同大で、P1=径24×25×深さ45cm、P2=24×27×深さ49cm、P3=27×32×深さ42cm、P4=26×27×深さ37cm。柱柱間はP1-P2間が2.23m、P3-P4間が2.28m、P1-P4間が2.36m、P2-P3間が2.30mで方形に配置する。貼床を除去してから確認した間仕切溝D1とD2は深さ8～16cmで、東壁とP1を結ぶD1が長93×幅12～19cm、延長上でP2の西にあるD2は長98×幅16～21cm。南東隅にある貯蔵穴P5は東西軸の長方形で、63×83×床面から深さ42cm。ほぼ平底で、壁は急角度で直線的。調査時の所見では貼床下でP5を検出したが(断面図C-C')、埋め戻したのではなく自然埋没と思われる(断面図E-E')。自然埋没後に上を貼床で覆ったか、または床面で見つけにくい状況だったので貼床除去時まで確認できなかったのだろう。

【カマド】北壁際中央にある。両袖幅102cm、煙道先端から焚口部まで86cm。煙道先端は、北壁ラインより僅かに突出し、急傾斜で上がる。カマド掘方は竪穴部の掘方にくらべて平坦である。貼床整形後、袖部は灰色粘土を心とし、純度の低い灰色粘土で覆う。火床は床面とほぼ同じ高さでほぼ平坦。焼土塊と炭化材の多い4層が煙道から、2層が焚口からの流入土。粘土塊が多い3層は天井が崩れた土で、燃烧部壁が崩れた7層が火床面に堆積したと考えられる。6・7層上面を新期の火床面にした可能性もある。カマド袖先端の床下で竪穴掘方がくぼむので、土器や粘土を設置して焚口を補強した時期があったことも想定できる。

【覆土】壁が崩落した三角堆積土が明瞭で、ローム塊・粒が多い。5・7層にカマド関連の焼土が多い。

【遺物出土状況】南半に多く、また東半が目立つ。カマド内には少ない(1・5)。1と13は残存度の高い破片が床付近にある。礫のうち15・17・18が東部と南部の床面にある。

【出土遺物】遺物は少なく、甕片が主体で杯・鉢などが混じり、高杯・甕も少量ある。身模倣形の杯は6だけである。杯類は外傾口縁・蓋模倣形・身模倣形ともに外面や口縁までよく磨く。口縁部のミガキを省略した2と4は、古墳後期後葉の混入遺物であろう。長胴甕は破片だけ出土し(8・9)、ハケ調整甕片もある。(同一個体の可能性がある鉢10・11や大形甕13も、外面口縁部までよく磨く。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計474片・3,661gで、内訳は杯141片・875g、高杯15片・314g、壺甕類315片・2,446g、焼粘土塊3点・26g。縄文・弥生土器片も多く混入している(『東谷・中島地区遺跡群』10, pp.69,88)。



第310図 権現山遺跡SG5区SI-18(2)遺物

第176表 権現山遺跡SG5区SI-18出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 5.0	外面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ。体部ナデ、底部ケズリのち体～底部横方向のやや疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち密なミガキ。ミガキは口縁部横方向、体部四角形状、底部一方向。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・赤細粒微量 やや硬質	カマド内7層上面 口1/2周、体～底3/4周 3、4、98、掘り方

第8章 権現山遺跡 SG5 区

2 土師器 杯	口復 15.0 高 4.2	白色土と明褐色土がマーブル状に混じる胎土。内外面とも丁寧な調整が施される。外面口縁部ヨコナデ、体～底部光沢のある丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部密な放射状のミガキ。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。内面の漆は良く残るが、外面はわずか。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 黒細～微粒と赤細粒と砂・白微粒微量 やや硬質	北西部床上 12cmと南部床上 17cm 口一部、体～底 1/2 周 66、96
3 土師器 杯	口 14.6 高 残 4.3	外面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキ。体～底部光沢を持つナデ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部密なミガキ。体～底部は横方向、底部は一方方向のミガキと見られる。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤細粒微量 硬質	中央部床上 18～19cm 口 1/3 周、体 1/2 周 79、80
4 土師器 杯	口復 14.0 高 残 4.3	白色土と明褐色土がマーブル状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデ、体部光沢のある丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部放射状の密なミガキ。内外面口縁～体部漆仕上げ。口縁端部は、大部分が欠損している。	7.5YR8/3 浅黄橙 緻密 黒粗粒少、白粗粒微量 やや軟質	南部床上 5cm 口～体 1/6 周 51
5 土師器 杯	口復 15.4 高 残 5.3 最大 復 15.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのち口縁～体部横方向の疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち口縁部疎らな横方向のミガキ。体部放射状の密なミガキ。体部のミガキは強く施されるため、端部で粘土が盛り上がる。	5YR6/8 橙 緻密 赤・黒細粒と白微粒微量 やや硬質	カマド内 7 層上面 口 1/4 周、体 1/3 周 2、4
6 土師器 杯	口復 11.8 高 残 3.2 最大 復 12.6	褐色土と白色土がマーブル状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデのち横方向の密なミガキ、体部光沢のあるケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部やや斜め方向となる放射状の密なミガキのち口縁部密な横方向のミガキ。内外面ともミガキは細い。内面全体黒色処理。	2.5Y5/3 黄褐 やや緻密 赤粗～細粒と白細～微粒微量 硬質	東部床上 19cm 口～体 1/3 周 39、TR-15
7 土師器 高杯	高 残 9.0	外面脚部上半縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキ。内面脚部上半ナデで、しぼり目と見られる縦方向の粘土の皺あり。中位はヘラナデで、紐積痕顕著。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤細粒多、白・黒・半透明細粒少 やや硬質	中央部南寄り床上 19～20cm 脚上半 2/3 周 29、48、49
8 土師器 甕	口復 19.7 高 残 7.0	内外面とも、表面の磨滅のため、調整不明瞭なところ多い。外面胴部上端縦方向のヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部上端ヘラナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 透明細粒と白細～微粒多、白粗粒微量 やや硬質	南東部床上 7cm 口～胴上端 1/6 周 20
9 土師器 甕	口復 18.0 高 残 4.6	外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部上半には、ヨコナデによるわずかな段あり。口縁端部は外方へ引き出されるため、突出する。内面頸部の沈線はヨコナデによるものであり、意図して施されたものではないと見られる。内外面全体各所に、カマドに使用されたと見られる淡褐色粘土が付着する。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白微粒多、白・黒礫少 やや硬質	口 1/8 周
10 土師器 鉢	口復 12.4 高 残 7.0	11 と同一個体の可能性あり。外面体部ナデ、口縁部ヨコナデのちやや密なミガキ。口縁部は横方向、体部は斜め方向のミガキ。内面体部横方向のナデ、口縁部ヨコナデのち口縁～体部横方向のやや密なミガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗～細粒少、砂礫微量 硬質	南部床上 15cm 口～体 1/5 周 65
11 土師器 鉢	高 残 4.4 底 5.8	10 と同一個体の可能性あり。外面体部下端光沢のあるケズリのち疎らなミガキ。底部一方方向のケズリで、中央浅くくぼむ。内面体～底部ナデのちやや疎らな太いミガキ。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・黒粗粒少、透明粗粒と赤細粒微量 硬質	南部床上 4～23cm 体～底 3/4 周 11、15、93、94
12 土師器 大形壺	高 残 5.5	内外面とも表面の剥落が著しく調整不明。口縁部は内彎する。同一個体と見られる口縁部片から、二重口縁となる可能性が高い。 [注記]27、53、72、87、97、床下、一括	5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒細～微粒少、赤・透明粗粒と透明微粒微量 やや硬質	南西部床上 3cm、中央部床上 13～20cm 口一部、頸～胴上端 1/2 周 注記は左欄
13 土師器 甌	口復 25.2 高 28.1 高底 復 9.6	無底式。精良な胎土。外面胴部ナデ・口縁部ヨコナデのち胴部縦方向の密なミガキのち口縁部横方向のやや密なミガキ。胴部には、紐積に由来する緩やかな凹凸が残る。内面胴部ナデ、口縁部ヨコナデのち口縁～胴部横方向の密なミガキ。底部ケズリのちナデ。	5YR6/8 橙 緻密 白・赤粗～細粒微量 やや軟質	東部床上 4～12cm 口一部、胴～底 1/3 周 104
14 石器 編物石	長 14.8 幅 6.6 厚 3.2	河原石。特に加工の痕跡なし。表面に小さなクレター状の凹みが数多くあり、その中に鉄分酸化によると見られる赤褐色土が入り込んでいる。重量 378.1g。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 安山岩	D1 底上 13cm 完形 98
15 礫	長 11.5 幅 8.8 厚 3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 475.9g。	2.5Y7/4 浅黄 緻密 砂岩	東部床直上 完形 32
16 礫	長 残 13.0 幅 残 8.3 厚 残 6.2 重 残 707.7	河原石。裏面を中心に大きく欠損しており、原形は不明。各欠損面は打撃による剥離のように見えるが、剥離には不自然なところが多く、焼けはじけなど、剥離以外の要因によって欠損したものと推定される。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	南部床上 19cm 破片 75
17 礫	長 10.4 幅 8.4 厚 2.3	河原石。特に加工・使用の痕跡なし。重量 262.3g。	N5/ 灰 やや粗い 多孔質安山岩	南部床直上 完形 73
18 礫	長 残 23.2 幅 残 13.4 厚 残 12.2	大形の河原石と見られる。左側は大きく欠損しており、原形は不明。表面が剥落する部分は、被熱による可能性がある。残存重量 4250.0g。	2.5Y6/2 灰黄 やや緻密 安山岩	南部床直上 破片 62

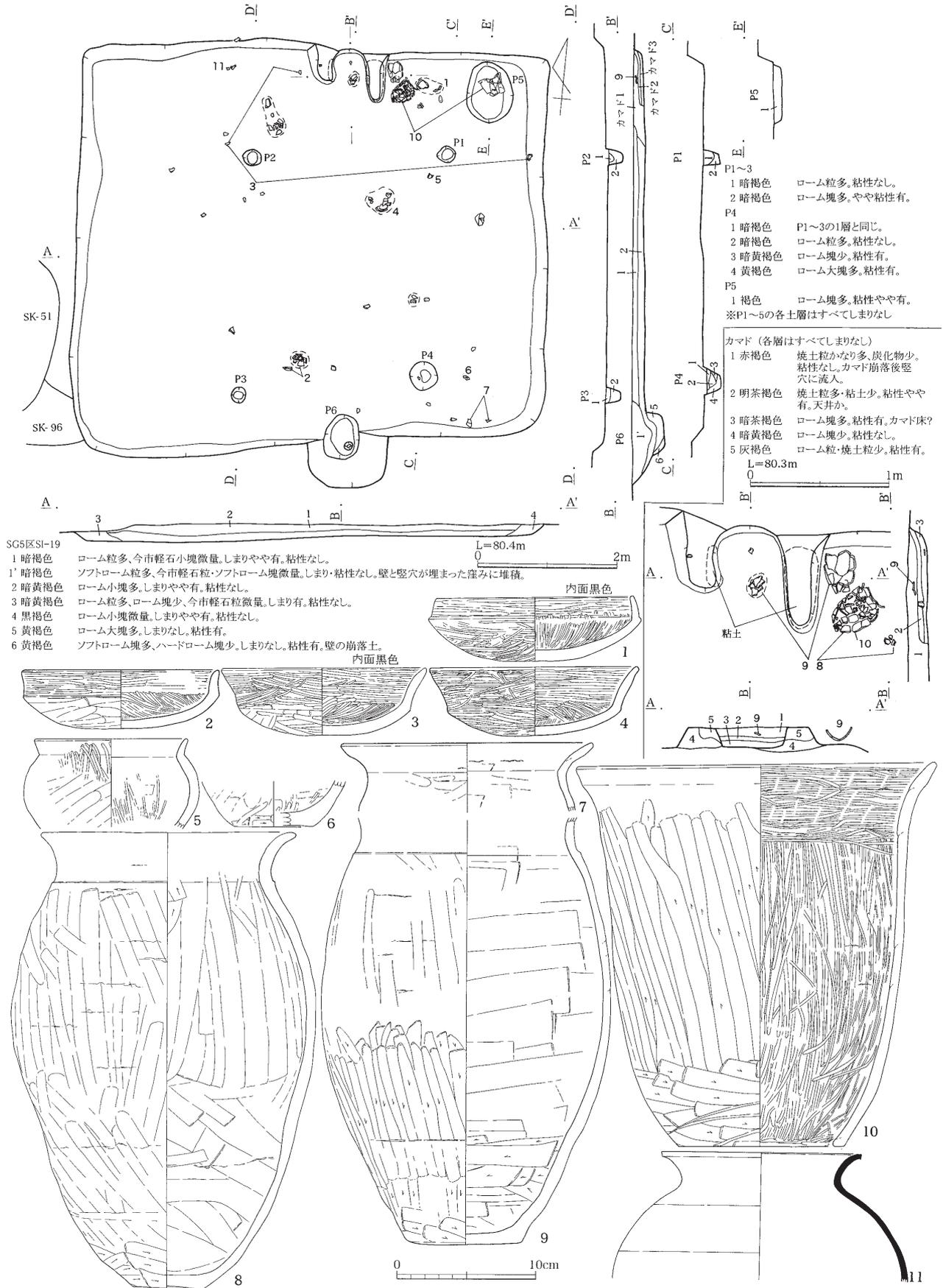
SG5 区 SI-19 (第 311 図、写真図版 33・180・181・183)

[位置] SG5 区中央の 14-16・17 グリッド。同じく古墳後期の SI-18・137 が北東と南にある。南西隅にある古墳時代の SK-96 を SI-19 調査後に調査しているため、SK-96 が古いと思われるが、断定はできない。

[規模と形状] 東西に長い方形で東西 6.83 × 南北 6.04m、中軸線は N-5° -W。壁はなだらかで残存高 12～27cm。床は平坦で、傾斜しない。地山ローンを平坦にして床面とし、掘方・貼床はないと記録されている。しかし、写真では東側と西壁際の床に黒いシミが見られ、掘方や貼床があったのではないと思われる。

支柱穴 4 本は、P1 が径 24 × 26 × 深さ 25cm、P2 は径 25 × 26 × 深さ 25cm、P3 は径 20 × 23 × 深さ 23cm、P4 は径 39 × 40 × 深さ 25cm。柱間は P1-P2 間が 2.78m、P3-P4 間が 2.60m、P1-P4 間が 3.21m、P2-P3 間が 3.42m。南北間が東西間より広く、若干歪んだ方形である。

南壁中央の東寄りにある P6 は、形・大きさ・深さが定型的な張出ピットと少し異なるが、カマドに相對



第311図 権現山遺跡 SG5 区 SI-19 遺構・遺物

11は第320図27を再掲載

第8章 権現山遺跡 SG5 区

する位置にあるので、本建物の張出ピットの可能性が高い。P6 の周囲は幅 105cm × 南壁から約 70cm の隅丸方形に張り出し、壁はなだらかである。P6 は東西 48 × 南北 64 × 床面から深さ 28cm の楕円形で、壁が外傾し、平坦な底面に径 10 × 深さ 10cm のピットがある。張出ピットのある建物は、SG5 区 SI-4 などがある。

北東隅の貯蔵穴 P5 は東西 65 × 南北 89 × 床面から深さ 12cm の楕円形・平底で、壁が直線的に外傾し、覆土はローム塊の多い単層である。貯蔵穴(張出ピットを含む)が 2 箇所の建物は、SG5 区 SI-11 などがある。
[カマド] 北壁の東寄りにある。両袖幅 125cm、煙道先端から焚口まで 78cm。灰褐色粘土にロームを少量含む 4・5 層で袖を作る。灰褐色粘土(5 層)の範囲を平面図に破線で示した。火床は床面とほぼ同じ高さで平坦。天井内壁に関連する粘土・焼土が 1・2 層に多い。煙道先端は北壁と一致し、奥壁は急傾斜である。
[覆土] 1 層は張出ピット上方の窪みに堆積した最終埋没土である。焼土・炭化物を多く含むカマド 1 層が、カマドから南側へ流出している。

[遺物出土状況] ほぼ完形の土師器甕(8)がカマド東側の床面にある。もう一つの甕(9)はカマド東側床面とカマド内に分かれて出土した。北東隅貯蔵穴 P5 の底面にある甕(10)も、カマド東側の破片と接合している。カマド東側の杯(1)は上向きで、床から少し浮く。

[出土遺物] 遺物は少なく、接合・図示した杯・甕・甌など以外の破片はわずかである。杯と鉢は外面までよく磨き、1 と 3 の内面は炭素吸着の黒色処理。図示した以外に形のわかる杯片はほとんどなく、小破片ばかりである。内斜口縁杯(5)と陶質土器(11)は古墳中期の混入遺物。11 は肩部 1 片が SI-19 で出土し、同一個体と考えられる格子叩き調整の胴部下半が SI-22 などにある。図示以外の土師器は合計 151 片・1,135g で、内訳は杯 15 片・67g、高杯 5 片・73g、小形壺 2 片・10g、壺甕類 129 片・985g。

第 177 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-19 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.0 高 4.6 最大 15.1	歪み少なく、精緻な作りで、全体にミガキが密に施される。外面口縁部ヨコナデのちミガキ。体～底部ケズリのちミガキ。体～底部のミガキは、体部上半に多角形状に施されたのち、底部中心に一方方向のミガキ。図には表れないが、底部中央付近に径約 1.5cm の浅いくぼみあり。内面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキのち体～底部放射状の密なミガキ。内面全体黒色処理。	2.5YR8/3 淡黄 やや緻密 白・透明細～微粒多、 黒細粒少 やや硬質	カマド東側の床上 8cm ほぼ完形 39
2 土師器 杯	口 14.1 高 4.2	外面口縁部ヨコナデのちミガキ、体～底部ケズリのち光沢のあるミガキ。ケズリは下位ほど多く施される。内面口縁部ヨコナデのちミガキ、体～底部ヘラナデのちミガキ。底部は一方方向、体部は円周方向の斜めのミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗粒と白・黒細粒 少、砂礫微量 やや硬質	南部床上 11～14cm 口～底 3/4 8、9
3 土師器 杯	口 14.8 高 4.8	4 に形態が類似する。ミガキは外面体～底部を除き、密に施される。外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体～底部光沢を持つケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁部横方向、体部斜め方向、底部一方方向のそれぞれミガキ。内面全体黒色処理。	5YR6/8 橙 やや緻密 黒粗～細粒と白細粒 少、赤細粒微量 やや硬質	東壁際床上 7cm と中央部 床上 3cm とカマド西側の 床上 7cm ほぼ完形 22、24、26、入口 P
4 土師器 杯	口 14.8 高 4.9	形態は 3 に類似するが、黒色処理は施されない。ミガキは全体に密に施される。外面口縁部ヨコナデのちミガキ、体～底部ケズリのち太いミガキ。体部のミガキは横方向、底部は一方方向。内面口縁部ヨコナデのちミガキ、体～底部ヘラナデのちミガキ。体部のミガキはやや斜めな横方向、底部は一方方向。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・半透明粗粒と 白・黒・透明細粒多 硬質	中央部床上 5cm 口～底 5/6 周 17
5 土師器 鉢	口 復 11.0 高 残 6.4 最大 復 12.4	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。内面は表面の磨減著しい。口縁部ヨコナデ、体部ナデのち放射状のミガキ。磨減のため疎密は不明だが、少なくとも体部下半以下は密に施されていると見られる。内面は平滑。外面体部下半・口縁部上半煤付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤礫～微粒と黒粗～ 微粒と白・透明微粒微量 やや硬質	中央部床上 8cm 口～体 1/5 周 16
6 土師器 鉢	高 残 3.3 底 復 5.6	外面胴部下半ナデ、胴部下端～底部ケズリ。底部は平底で、わずかにくぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。内面は平滑に仕上げられる。外面胴部下半一部煤付着。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白細粒少、砂礫と赤 細粒微量 硬質	南東部床上 11cm 胴下半～底 1/3 周 6
7 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 4.9	外面胴部上半軽いナデ、口縁部ヨコナデ。内面胴部上半ヘラナデのちナデ、口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白細粒少、砂礫微量 硬質	南壁際床上 9～14cm 口～胴上半 1/4 周 1、2
8 土師器 甕	口 18.2 高 33.0 底 5.0 最大 21.8	外面胴部ヘラナデのち下端ケズリ。底部より約 10cm 上に積み上げ休止による接合面があり、部分的にケズリが施される。上下の径が合わないため、器体は接合面付近で凹むように歪む。底部はケズリで、中央がややくぼむ平底である。内面口縁部ヨコナデのち胴～底部ヘラナデ。胴部下半の接合面付近はケズリとなるところあり。ヘラナデは胴部上半が縦方向、下半が横方向主体。胴部下半片面煤付着、片面被熱によりやや赤変。	7.5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒・透明細～微 粒多、白礫～粗粒少 硬質	カマド東側の床直上 胴一部欠 33、34、36

9 土師器 甕	高 残 30.8 底 8.0 最大 20.6	外面口縁部下半ヨコナデ、胴部上半軽いナデのち胴部下半縦方向のケズリのち下端横方向のケズリ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、外面には段差として残る。底部ケズリで、平底。内面口縁部下半ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胴部下半の接合面付近のみ厚くなっており、ケズリが施される。外面胴部下半被熱により赤変。下位ほど度合いは大きく、胴部下端では表面が剥落する部分も目立つ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・砂微粒少、白礫 ～粗粒と黒・砂粗粒微量 硬質	カマド東側の床直上とカマド火床上 8cm 頸部～胴 1/3 周、底完 存 32、33、K
10 土師器 甗	口 25.6 高 27.6 底 11.7	外面口縁部ヨコナデのち胴部タテケズリのち下端ヨコケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデのち胴部縦方向のミガキのち口縁部横方向のミガキ。ミガキは密だが、胴部にわずかに紐積痕が残る。底部はケズリのちナデで、丁寧に面取りされている。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂粗～細粒少、白・ 黒・透明粗粒微量 やや硬質	P5 底直上とカマド東側 の床直上 ほぼ完形 34、40
11 陶質土器 壺	口 復 14.3 高 残 9.1 最大 復 21.0	内外面口縁部ヨコナデ。薄く、硬質で、断面は赤灰色。SI-20・22やSK-106出土の下半部と同一個体と考えられるが接合できない。古墳中期の遺物が混入。	N5/ 灰 やや緻密 白細～微粒少、白粗 粒微量 硬質	北部床上 9cm、低地出 土の 4 片および SI-24 の 1 片と接合 口 1/8 周、頸 1/4 周 28

SG5 区 SI-20 (第 312・313 図、写真図版 33・34・181)

[位置] SG5 区中央の 14-17・18 グリッド。同じく古墳後期の SI-107・21 が南にあり、中期の SI-22 も近接する。東側は低地へと傾斜しはじめる。古墳時代の SK-106 と SD-101 を、南東隅と南西隅で切る。

[規模と形状] 周溝を含む床面部分では東西 4.25 × 南北 4.20m のほぼ方形。上端での平面形は、西壁の崩れにより若干東西が長い東西 5.15 × 南北 4.43m の方形に見える。中軸線は N-10° -W。残存壁高は 23 ～ 27cm で、西壁は崩落して緩く傾斜し、南北壁はほぼ垂直。床はほぼ平坦で傾斜しない。ローム粒が多い暗黒褐色土で、ほぼ床全体を 2 ～ 4cm の厚さで貼床する。

主柱穴 4 本は、P1 が径 28 × 31 × 深さ 54cm、P2 は径 25 × 32 × 深さ 35cm、P3 は径 29 × 38 × 深さ 60cm、P4 は径 27 × 32 × 深さ 41cm。P1・P3 が P2・P4 より 15 ～ 20cm 深い。P1-P2 間が 1.90m、P3-P4 間が 1.94m、P1-P4 間が 1.85m、P2-P3 間が 1.87m で、ほぼ方形に配置する。南西隅の P6 と、西側主柱間の東寄りの P7 はともに不整形の小穴で、貼床除去後に確認した。ただし P6 が P1 ～ P4 と同じ覆土なので、貼床で埋めたのではなくて調査時に床面で見落としたものと推定される。P6 は径 42 × 45 × 深さ 54cm、P7 は径 35 × 42 × 深さ 24cm。

カマド北側 (D1) と西・北壁際 (D2・D3) にある壁溝は幅 15 ～ 20 × 深さ 2 ～ 5cm。D1 はカマド北側で北東主柱穴 P1 方向に折れ、間仕切溝の可能性がある。南東隅の貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形 (63 × 91 × 深さ 37cm) で、ほぼ平底で壁が急傾斜。西から流入した自然堆積状で (D-D')、上方に甑も流れ込んでいる (E-E')。

[カマド] 東壁中央にある。両袖幅 115cm、煙道先端から焚口部まで 105cm。掘方上に、ロームを主体とした 6 層を基礎として、粘土主体にロームが混入した 8 ～ 11 層で覆って袖部を作る。左袖は 6 層と 8 ～ 11 層の間にローム小塊と粘土の混じる 7 層を挟む。掘方を暗黒褐色土の 5 層で床面とほぼ同じ高さで平坦に埋め戻している。5 層に焼土と炭を含むので、旧期カマドから作り替えたことも想定できる。11 層は焼土化が著しい内壁部。焼土塊と炭化粒が多い 4・3 層が流入土及び天井内壁に関連する層で、煙道～燃焼部に堆積する。ただし、調査時の所見では、被熱変色して見える 4 層上面を火床と判断している。粘土が多い 1・2 層は天井崩落土であろう。煙道先端は、東壁から僅かに突出する程度で、奥壁はなだらかに上がる。

カマド図は、写真を参考に、現地作成図を若干修正した。6 層は地山削り出しかもしれないが、仮にそうであれば 5 層で窪みを埋めたものと解釈できる。右袖は 9 層が床下まで達するので、カマド袖の後に貼床を構築したことになる。左袖は 7 層が貼床の可能性もあるが、貼床とは別の層として判断した。断面写真 (図版 34) ではすでに貼床をはずしているため関係が不明だが、7 層の上端線が貼床より少し上にあると判断されたからである。

[覆土] レンズ状の自然堆積で 4 ～ 6 層はローム塊・粒が多い。中央部南半にある 1 層がやや不自然なので、SD-101 が SI-20 を切っているのではないかと疑われるが、SI-20 が新しいという現地所見を尊重した (この点については SD-101 の項で説明する)。

第8章 権現山遺跡 SG5 区

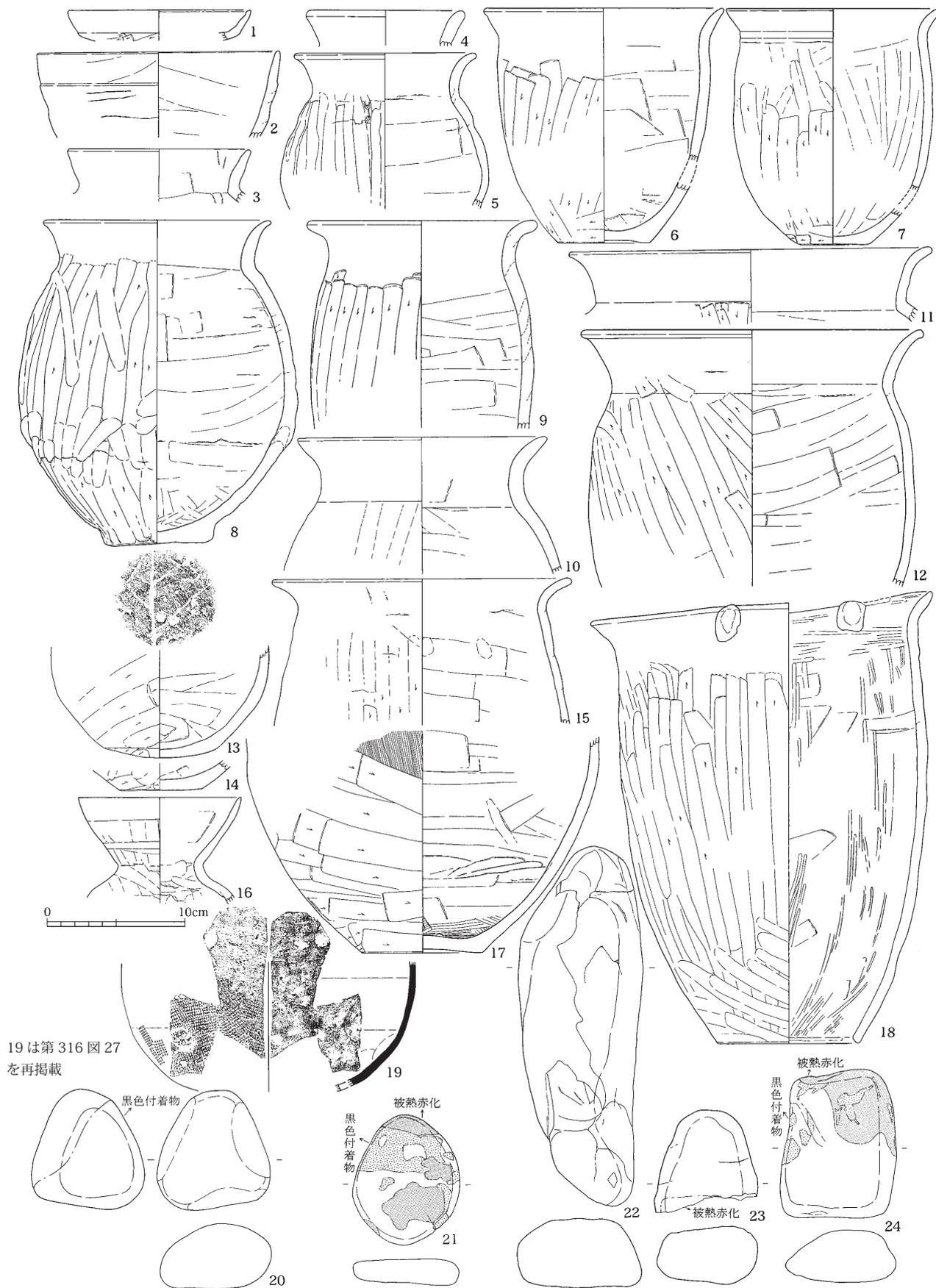


第312図 権現山遺跡 SG5 区 SI-20 (1) 遺構

〔遺物出土状況〕北北部で床から10cm以上浮いた遺物が多い。床面近くで出土した17は各破片の位置が離れていて、カマド拡大図に示したとおり袖南側の床面にもある。貯蔵穴埋土の上方にも甑(18)と複数個体の小形甕(5・8・13)の破片がある。

〔出土遺物〕比較的多い。杯・高杯はほとんどなく、1は口縁部1/8周の小片なので確実に伴うとは言い切れない。土師器甕が最も多く、少し長胴の甕が多い。大形壺・甑(18)・鉢(2)も少量ある。口径より胴径が大きい後期前葉的な甕と、口径と胴径がほぼ同じ後期中葉的な甕がある。大形甑(18)にある不自然な粘土貼り付けは、焼成前の補修痕かもしれないが詳細不明。補修痕のある土師器は、SG5ではSI-21など、SG10区ではSI-6などにある。図化品以外は、個体数を推定できる破片がほとんど無く、図示した土器の破片とみられるものが多い。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計351片・4,449gで、内訳は杯12片・123g、高杯2片・60g、小形壺3片・24g、壺甕類331片・4,181g、甑2片・39g、焼粘土塊1点・22g。

擬格子ではない格子叩き調整の陶質土器(19)は、SI-22・24などに同一個体の下半部および上半部破片がある。SI-22と同じく下半部の破片が出土した。土師器小形壺(16)とともに、古墳中期の混入遺物であろう。縄文早期のスタンプ形石器2点と礫器1点も混入していた(第1分冊の第10図5・6・9)。



19は第316図27
を再掲載

黒色付着物

被熱赤化

黒色付着物

被熱赤化

黒色付着物

被熱赤化

第313図 権現山遺跡SG5区SI-20(2)遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

第 178 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-20 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 2.2	外面体部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。内面黒褐色を呈する。	10YR5/2 灰黄褐 緻密 赤細粒微量 硬質	中央部床上 16cm 口 1/8 周 26
2 土師器 鉢	口 復 17.4 高 残 6.2	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半軽いナデで、組積痕残る。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面口縁～胴部上半黒色処理。	10YR6/2 灰黄褐 やや緻密 砂粗粒少、白・黒・赤粗粒微量 やや硬質	P1 底上 50～68cm 口～胴上半 1/6 周 46
3 土師器 小形甕	口 復 13.0 高 残 3.8	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端強いヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白微粒少、白礫～細粒と赤細粒微量 やや硬質	中央部床上 19cm 口 1/4 周 23、貯
4 土師器 小形甕	口 復 11.4 高 残 2.5	口縁部内外面ヨコナデ。歪みあり。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤・砂粗粒と白・黒・赤・透明・砂微粒少、赤・透明礫微量 硬質	P4 付近床上 8cm 口 1/3 周 10、54
5 土師器 小形甕	口 復 12.9 高 残 11.2 最大 復 14.8	球胴。外面口縁部ヨコナデ、胴部タテ方向のケズリのちタテ方向のナデ。ケズリは下半に重点的に施され、胴部上半は組積による凹凸が残る。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。外面口縁部～胴部下半スス付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗粒多、赤・砂粗粒少、黒粗粒微量 やや硬質	南部床上 1～14cmと P5 底上 48cmとカマド内 口 1/4 周、胴 1/2 周 5、7、16、61
6 土師器 小形甕	口 復 17.2 高 復 16.5 高 残 15.0 底 6.4	外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向のケズリ。底部一方のケズリで、広くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。内外面とも表面はほぼ全面が黒褐色。	2.5Y3/1 黒褐 粗い 赤礫～粗粒多、砂礫～粗粒少 硬質	中央部床上 23cm 口一部、胴～底 1/2 周 31
7 土師器 小形甕	口 復 15.2 高 復 17.0 高 残 15.4 底 4.8	丁寧な調整。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデのち胴部中位～下半ケズリ、底部ケズリで、中央ややくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 黒粗粒と白細粒と砂粗～細粒多 やや硬質	中央部床上 16～22cm 口～胴 1/4 周、底 1/2 周 26、28、29
8 土師器 小形甕	口 16.2 高 23.5 底 7.7 最大 19.8	胴部下半に積み上げ休止による接合面があり、内外両面に段差、粘土の継ぎ目などとして明瞭に残る。外面口縁部ヨコナデのち胴部縦方向の荒いケズリのち接合面ナデ。底部は突出する平底で、木葉痕あり。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデのち底部ナデ。外面口縁～胴部上半一部煤付着。外面胴部下半～底部被熱により赤変している部分多い。	10YR5/4 にぶい黄褐 粗い 白・黒・灰色礫と白・灰色粗粒多、砂粗～細粒少 やや硬質	P5 底上 32～34cm 口 3/4 周、胴 1/2 周、 底完存 17、18、62
9 土師器 甕	口 16.4 高 残 15.0	外面口縁部ヨコナデのち胴部上半縦方向のケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。全体に歪みが大きく、口縁部よりも胴部が突出する部分もある。	7.5YR7/6 橙 粗い 砂粗～細粒多、白・赤・透明・砂礫と白細粒少 硬質	中央部床上 11～16cm 口 3/4 周、胴上半 1/2 周 25、30、46、47
10 土師器 甕	口 復 17.7 高 残 9.9	外面胴部上半ナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。最大径は胴部にあると見られる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明粗粒多、黒粗粒少、白礫～粗粒と砂粗粒微量 やや軟質	北部床上 20cmと中央部 床上 11cm 口～胴上半 1/4 周 30-1、41、41 力
11 土師器 甕	口 復 25.8 高 残 5.3	外面胴部上端ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ。内外面口縁部一部黒色物質付着。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや粗い 白・黒・赤・砂礫と白・黒・砂粗～細粒少 硬質	中央部床上 9cm 口 1/6 周 44
12 土師器 甕	口 復 24.4 高 残 18.5	胎土に砂を多く含むためか、内外面とも表面が磨滅している部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い 砂粗～細粒と白微粒多、白礫～細粒と黒・透明細粒微量 やや硬質	北部床上 20cm 口 1/6 周、胴上半～中 口 1/4 周 41、41 力
13 土師器 甕	高 残 8.1 底 8.0	外面磨滅のため調整不明瞭。胴部～底部ケズリ。底部は丸味を持ち、胴部との境は稜となる。内面胴部下半～底部ヘラナデ。胴部内外面は被熱による赤変が著しい。外面胴部下半一部煤付着。内面底部中央は明褐色で、その周囲に黒色物質付着。さらにその上には、粘土のような白色土が付着する。位置は内面底部上 2.5～5.2cmの帯状の部分。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・半透明粗粒多、砂粗～細粒少、黒粗粒微量 硬質	P7 付近床上 19cmと東部 床上 18～19cmと P5 底 上 48cm 胴下半 1/4 周、底完存 16、28、33、48
14 土師器 甕	高 残 2.0 底 5.8	砂っぽい胎土のため、表面はやや磨滅する。外面胴部下端ケズリのちナデ。ミガキの可能性もあり。底部丁寧なナデで、平底。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 砂粗～細粒多、白・黒・赤・透明・砂微粒少 やや硬質	西部床上 6cm 胴下端～底完存 35
15 土師器 甕	口 復 21.2 高 残 10.3	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半縦方向のケズリのち横方向のナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤・砂礫～粗粒と白・砂微粒少 硬質	東部床上 19cm 口～胴上半 1/5 周 48
16 土師器 小形壺	口 復 11.6 高 残 7.6	外面口縁部縦方向の軽いナデのち頸部ヘラナデ・口縁部上半ヨコナデ。口縁部下半には、しぼり目と見られる縦方向の浅い粘土の皺が多く見られる。胴部上半ナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ・胴部上半軽いナデのち頸部強いナデ。胴部上半内面には組積痕と指頭圧痕が残る。古墳時代中期の遺物が混入。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・砂微粒少、白・黒・赤礫～細粒微量 やや硬質	東部床上 5～19cm 口～胴上半 1/3 周 12、20、23、29、K
17 土師器 壺か甕	高 残 15.6 底 8.5	外面胴部中位 8 本/1cmのハケのち胴部下半横方向のケズリ。底部多方向のケズリで、全体にくぼむ。内面胴部下半ヘラナデで、底部より上 7cm付近に積み上げ休止による接合面があり、内面にわずかな段差と荒いナデ調整痕として残る。胴部下端～底部 3～5 本/1cmのハケのち底部中央のみナデ。	10YR3/1 黒褐 やや粗い 白・透明微粒多、黒礫と赤細粒微量 やや硬質	カマド南側の床直上と南 部床上 1cmと北部床上 4 cm 底ほぼ完存、胴下半 1/5 周 6、49、60
18 土師器 甕	口 23.5～ 26.0 高 30.4～ 32.5 底 10.0～ 11.0	無底式。歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、胴部ケズリのち下半ナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデのち胴部縦方向のミガキ、口縁部横方向のミガキ。胴部下端はケズリのちミガキ。口縁の相対する 2ヶ所に粘土の貼付けあり。外面に図示したものは外面主体、もう 1つの内面に図示した方は内面主体に粘土貼付。厚みは最大 3.5mm。用途不明。外面胴部斑状に煤付着。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、白・灰色礫少 やや軟質	P5 底上 32cmと P5 付近 床上 8cm 口～胴上半 2/3 周、胴 下半～底ほぼ完存 18、53

19 陶質土師 壺	高 残 9.1	胴部下半～底部の破片。外面は下半部格子目タタキ、上半部ロクロナデ。外面には、焼成時のものと見られる 1.5 × 1cm の黒色物質が付着。内面ナデで、凹凸著しい。内面に、わずかに褐色の自然袖付着。外面図左の 1 片が SI-20 出土で、他の 3 片は SI-22 と SK-106 で出土。古墳中期の遺物が混入。SI-19・24 や低地グリッド出土の上半部と同一個体と考えられるが接合できない。	N5/(B) 灰 緻密 白礫～細粒少 硬質	SI-20 の中央部床上 16 cm と SI-22 の 2 片と SK- 106 の 1 片が接合 胴下半～底部片一部 26
20 礫	長 8.3 幅 8.1 厚 4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。裏面に黒色物質付着。重量 471.1g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 安山岩	完形
21 礫	長 9.4 幅 7.6 厚 2.1	河原石。特に加工の痕跡なし。全面に斑状に黒色物質の付着と被熱による赤変がある。重量 208.1g。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 安山岩	完形
22 礫	長 25.9 幅 8.9 厚 16.0	河原石。特に加工の痕跡なし。ほぼ全面が被熱により赤変している。重量 1996.5g。	5YR6/2 灰褐 緻密 ホルンフェルス	北部床上 8cm 完形 38
23 礫	長 残 6.5 幅 7.2 厚 4.2	河原石。特に加工の痕跡なし。下半は欠損している。SI-20 からはスタンブ形石器が出土しているが、この礫の下面は欠損によるものと判断した。ごく一部にわずかに被熱による赤変あり。残存重量 266.7g。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 流紋岩	SI-20 の南側の床上 26cm 破片 1
24 礫	長 10.6 幅 8.4 厚 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。被熱により赤変する部分、黒色物質が付着する部分あり。重量 551.5g。	5Y7/3 浅黄 やや緻密 玢岩	中央部床上 12cm 完形 32

SG5 区 SI-21 (第 314・315 図、写真図版 34・35・181・182)

【位置】 SG5 区中央の 13-17、14-17 グリッド。同じく古墳後期の竪穴建物は東と西に SI-107・137 があり、東と南に中期の SI-22・24、南西に詳細時期不明の SI-155 がある。南側は低地へと傾斜し始めている。北壁から西壁に向かう古墳時代の SD-101 を切る。中央部の不自然な土層をみると、SD-101 が SI-21 を切るのではないかと疑われるが、SI-21 が新しいという現地所見を尊重した（この点については SD-101 の項で説明する）。南壁中央上部を切る落ち込みが断面図 B-B' にあるが、遺構名・平面図・遺物の記録はなく、攪乱と判断した。北半は試掘トレンチに切られる。

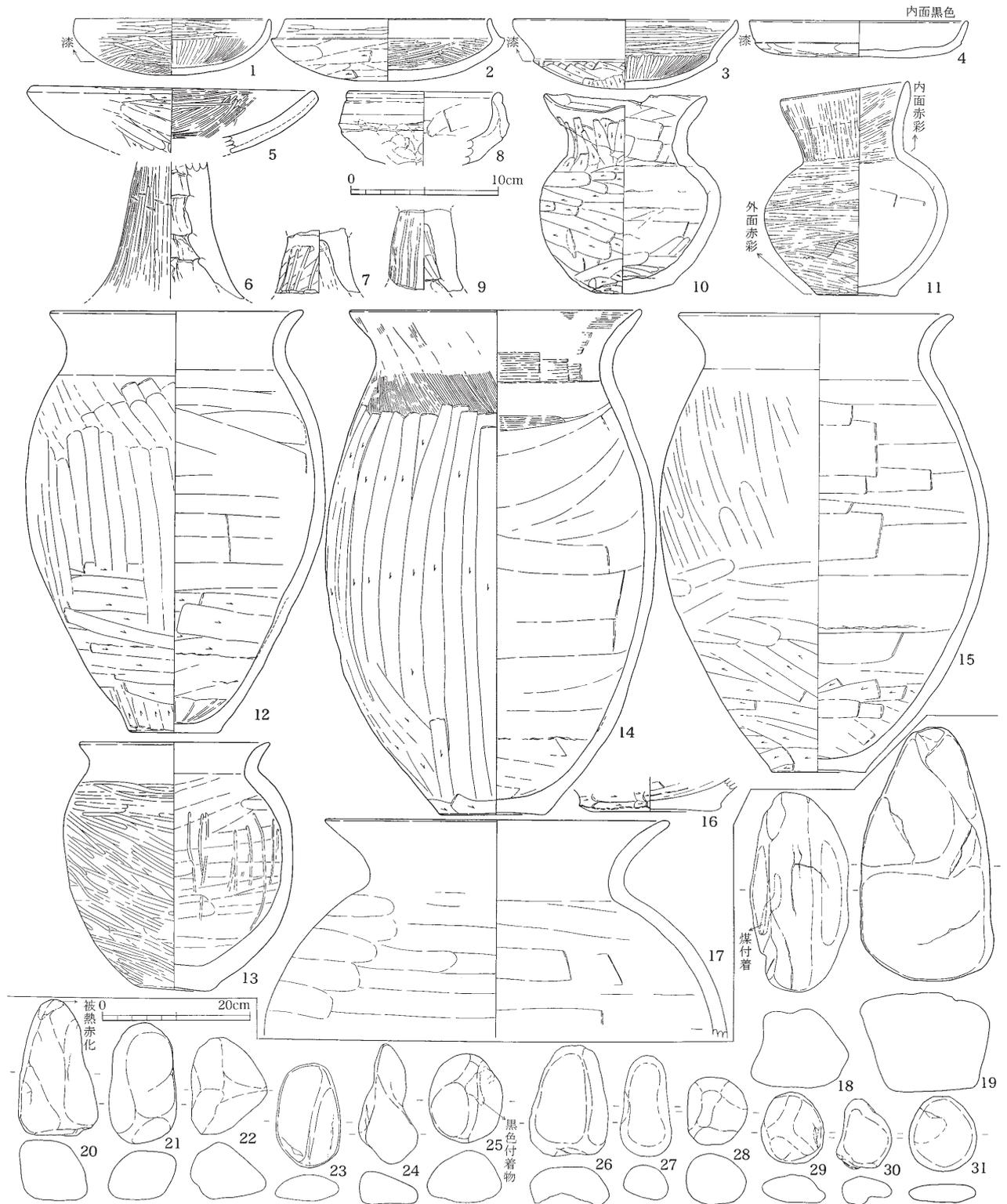
【規模と形状】 南北が若干長いほぼ方形で東西 5.23 × 南北 5.28m、中軸線は N-3° -E。壁は直線的に外傾し、残存高 12 ～ 33cm。床は平坦で傾斜しない。掘方は床面から深さ 2 ～ 10cm で底面に緩い凹凸があり、ローム塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

支柱穴 4 本は、P1 が径 23 × 22 × 深さ 62cm、P2 は径 27 × 25 × 深さ 47cm、P3 は径 26 × 23 × 深さ 62cm、P4 は径 28 × 25 × 深さ 41cm。柱間は P1-P2 間 2.80m、P3-P4 間 2.68m、P1-P4 間 2.68m、P2-P3 間 2.71m で、ほぼ方形配置。南東隅の貯蔵穴 P5 は東西軸の隅丸長方形で 84 × 66 × 深さ 34cm、平底で壁がほぼ垂直。P5 覆土は西から自然流入し、最上層に大形壺の上半部 (17) が入る。南西柱穴 P3 の北西側にある間仕切溝 D1 は長さ 108 × 幅 19 ～ 30 × 深さ 7 ～ 9cm で、貼床除去後に確認したが、単に床面で見落とししていた可能性も高い。

【カマド】 東壁中央にあり、比較的良く残る。両袖幅 88cm、煙道先端から焚口部まで 93cm。灰白色粘土で袖を作る。調査時の写真では、袖が竪穴壁からわずかに離れて U 字形に連結するようにも見える。しかし、土層断面を検討すると、U 字形ではなくて煙道と袖が竪穴壁に連結する通常のカマドである。平面図は大幅に修正したため、写真と形状が合わない部分もある。焼土と炭化物を少量含む 5 層、天井が崩れた灰白色粘土を含む 2 ～ 4 層、崩落後に流入した 1 層が燃焼部に堆積する。天井崩壊土のうち 2・4 層には天井内壁に関連すると考えられる焼土塊が顕著である。煙道は壁外に突出しないで、先端が垂直気味である。

火床はほぼ平坦で、長さ 18cm の河原石の支脚 (20) を立て、その上に大形壺の底部 (16) を置く。架口に架けた土師器甕 13・14 が壁側からの土圧で落ちたと思われる。カマド北側の床付近に残存度の高い土師器がある。調査時の所見では、14 と 13 は建物廃絶時にカマド祭祀を行った遺物で、北側の土器群は棚などに置いた土器が落下したものかと解釈している。両袖下に 15 など土師器壺甕類破片と礫 22・30 がある (袖下層平面図と断面図 A-A')。カマド内や北側の甕 (15) 破片は、袖構築材の一部が流出したのだろうか。

【覆土】 全体にローム塊・粒が多く混入する。南・北の壁際には炭化物の多い焼土 (10 層)、西壁際には粘土 (11 層) がある。中央から南西の床面直上に厚さ 2 ～ 3cm の炭化物・焼土混層が薄く堆積している。



第315図 権現山遺跡 SG5区 SI-21(2)遺物

高杯 30片・400g、小形壺 16片・123g、壺甕類 366片・3,323g、甑 2片・81g、焼粘土塊 13点・49g。遺物出土状況の項でも触れた焼粘土塊は、SG5区ではSI-21に最も多い。他遺構では多くても3～5点である（SI-12・15～18など）。建物以外では古墳時代土坑SK-210に焼粘土塊が1点ある。礫は多いが編物石風ではない。

第8章 権現山遺跡 SG5 区

第 179 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-21 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.3 高 3.8	精良な胎土。外面口縁部ヨコナデ・体～底部ケズリのち口縁～底部ミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部ミガキ。ミガキは内面体～底部は放射状で密、口縁部内外面は横方向でやや密、外面体部は多角形状、底部は一方方向と見られ、ともにやや密。外面口縁～体部・内面全体漆仕上げ。	5YR7/6 橙 緻密 白微粒少 硬質	中央部床上 13cm 口～底 1/5 周 34
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 4.2 最大 復 15.6	外面口縁ヨコナデのち疎らなミガキ。体～底部ケズリのちナデ。内面口縁ヨコナデ、体～底部密なミガキ。ミガキは体部多角形状、底部は一方方向。内面は黒褐色だが、表面処理はないと見られる。 [注記] 47(K)、61(K)、51(K)	2.5Y4/2 暗灰黄 やや緻密 白細～微粒と黒細粒少 やや硬質	カマド西側と北側の床面より若干浮く。カマド南袖床直上 口～底 1/4 周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 15.0 高 4.7	精良で褐色土と白色土がマーブル状に混じる胎土。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁部横方向の密なミガキのち体～底部放射状の密なミガキ。外面口縁部、内面全体漆仕上げ。	5YR6/8 橙 緻密 白微粒少、赤細粒と透明微粒微量 やや硬質	中央部床上 10cm 口～底 1/2 周 35
4 土師器 杯	口 14.6 高 2.5	器高が低く偏平な地域(安蘇・足利地域か)の影響。外面体～底部ケズリのち軽いナデ、内面底部ヘラナデのち斜め方向のナデのち疎らなナデ。内外面全体漆仕上げ。内面は土器胎土とともに黒色を呈し、炭素吸着で黒色処理した可能性がある。	10YR6/2 灰黄褐 やや緻密 白微粒少、赤細粒と透明微粒微量 硬質	中央部床上 9cm 口～体 3/4 周、底完存 8
5 土師器 高杯	口 復 21.0 高 残 4.3	厚手。外面杯部口縁～体部ケズリのち軽いナデ。端部はケズリにより面取りされる。内面ナデのち密なミガキ。欠損した断面の観察から縦方向に接合面があり、この部分のみ器壁が 3mm 程度厚くなっていることがわかる。盛り上がりは内外面ともに認められるが、内面で顕著であり、現存幅 1.2cm の部分が段差をもって盛り上がる。欠損面下面も外側部分が接合面である。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・半透明粗粒と白・透明微粒多、赤粗粒少 やや硬質	中央部床上 8cm 杯口～体 1/6 周 27
6 土師器 高杯	高 残 9.2	11 の壺と類似する灰白色土で作成された土器。外面脚部上半縦方向のケズリのち縦方向の密なミガキ。上位にヘラ痕わずかにあり。内面脚部上半縦いナデで、組積痕は極めて明瞭に残る。下端は組積の接合面からの欠損。	10YR8/2 灰白 緻密 赤・黒細粒微量 やや硬質	北西部床上 3cm 脚上半完存 2
7 土師器 高杯	高 残 4.4	短い柱状脚。外面脚部上半縦方向のナデのち疎らな縦方向のナデのち疎らな縦方向のミガキ。ミガキは規則的に施される。内面脚部上半縦方向主体のナデ。上面の欠損面は凹凸はあるがやや磨滅するほか、下面の欠損面はほぼ水平となるように人為的に細かく打ち割ったと見られる。これらのことから、残存する現存の状態では何らかの用途に使用したと考える。古墳中期の遺物が混入。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤礫～粗粒と白粗粒少 やや硬質	D1 底上 25cm 脚上半完存 11
8 土師器 小形土器	口 復 10.4 高 残 4.9 最大 復 11.4	碗形、歪みあり。褐色土・灰白色土・白色土がマーブル状に混じる胎土。口縁部は丸く肥厚しており、外面に沈線が形成される。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデで、指頭圧痕残る。内面口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・半透明細粒多、赤粗粒微量 やや硬質	中央部床上 7cm 口～体 1/4 周 30
9 土師器 高杯	高 残 5.6	短い柱状脚。外面脚部上半縦方向のナデのち疎らな縦方向のミガキ。内面脚部上半縦方向のナデ。残存部下端に明瞭な接合痕あり。上面はほぼ平坦な欠損面で、全体に磨滅している。また、下面は土器の水平をとるように人為的に細かく打ち割られたと見られるため、ほぼ現存の状態のまま何らかの用途に使用された可能性がある。古墳中期の遺物が混入。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 白・黒・赤細粒少、白礫と白・黒・赤・砂微粒微量 やや硬質	中央部床上 2cm 脚上半完存 9
10 土師器 壺	口 11.0 高 13.4 底 5.3 最大 12.0	粗雑な作り。整形が充分でないため全体に歪みあり。胴部下半には、貫通してしまつた穴を内外両面から粘土で埋めたあとが明瞭に残る。外面ケズリで、底部はケズリの後軽いナデで、突出したいびつな丸底となっている。口縁部上端は内外面ともわずかにヨコナデ。内面ナデ・ヘラナデで、組積痕が部分的に顕著に残る。ヘラナデは頸部と胴部中に施される。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白・黒・砂微粒少、白礫と赤・黒粗粒微量 やや軟質	カマド北側の床面より若干浮いた状態、口縁部を南東に横位の状態 完形 49(K)
11 土師器 壺	口 8.7 高 14.5 底 5.6 最大 12.2	灰白色土を使用した、異質な土器。内外面とも表面全面が細かく剥落しているため、調整が不明瞭な部分が多い。外面口縁部縦方向のミガキ、胴部ナデのち横方向ミガキ、底部ケズリのちナデで、わずかにくぼむ。内面口縁部斜めないし横方向のミガキ、胴～底部ヘラナデ・ナデ。ミガキは基本的に密に施す。外面全体・内面口縁赤彩。	10YR8/2 灰白 やや緻密 白微粒多 やや硬質	口縁部を北東に横位の状態、カマド北側の床面より若干浮いた状態ほぼ完形、口一部欠損あり 50
12 土師器 甕	口 17.0 高 28.6 底 6.1 最大 20.0	砂質の胎土であり、表面が磨滅している部分もある。外面胴部下半ケズリのち上半～中位ヘラナデ。底部は円周方向主体のケズリで、平底。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴～底部ヘラナデ。底部上 9cm 付近には積み上げ体による接合面があり、内面ではこの部分のみ厚く、ケズリが施される。外面胴部下半～底部被熱により赤変。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 白・黒・砂細粒少、砂礫微量 やや硬質	カマド北側の床面より若干浮いた状態 ほぼ完形 53、53K
13 土師器 小形甕	口 12.8 高 16.7 底 5.4 最大 15.5	底部は強く被熱しており、外面は赤変のうえ外周が剥落、内面も表面の剥落が著しい。外面胴部一部に被熱による赤変あり。外面口縁部ヨコナデ、胴部ナデのちやや密なミガキ。底部ナデで、わずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、胴部横方向のナデのち縦方向の疎らなミガキ。底部は不詳だが、胴部と同じくナデのちミガキになると見られる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・砂粗粒多、白・砂礫微量 やや硬質	カマド南袖、床面より若干浮いた状態 ほぼ完形 52(K)
14 土師器 甕	口 19.6 高 34.1 底 6.8 最大 22.1	外面口縁～胴部上半 9 本 / 1cm のハケのち口縁部ヨコナデ・胴部ケズリ、底部ケズリのちナデで、わずかにくぼむ。内面口縁部 6 本 / 1cm のハケのちヨコナデ。胴～底部ヘラナデで、胴部上半一部に口縁部と同様のハケあり。外面胴部(底部より上 28cm くらいまで)全体的にカマドに使用したと見られる赤褐色土が付着するとともに、部分的に黒色物質付着。内面胴部上半(底部上 18～30cm コケ付着。底部より上 6cm 付近に積み上げ体による接合面があり、外面には器壁の張り出しとして、内面には粘土の継ぎ目として残る。	7.5YR6/8 橙 粗い 白・赤礫～微粒多 やや硬質	カマド内床上 4cm、口縁部を東に横位の状態、土器のすぐ下が火床 ほぼ完形 45、カマド
15 土師器 甕	口 18.4 高 31.0 底 6.1 最大 21.9	外面胴部下半ケズリのち上半～中位ナデ。底部は円周方向主体のケズリで、わずかにくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴～底部ヘラナデ。底面上 6cm 付近に積み上げ体による接合面があり、内面ではこの部分のみケズリが施される。内面胴部上半一部コケ付着。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒少、白・赤粗～細粒と砂礫微量 やや硬質	カマド北側とカマド内床面より若干浮いた状態、カマド袖下層底上 7cm 口～胴 1/3 周、底完存 K51、55K、61(K)
16 土師器 大形壺	高 残 2.2 底 9.6	外面底部ナデで、わずかにくぼむ。胴部下端ケズリで、底部からの粘土のめくれが著しい。内面底部ヘラナデ。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 白・透明・砂微粒少、白・砂細粒微量 やや硬質	カマド内、支脚の上から逆位で出土 底完存 48、カクラン

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

17 土師器 大形壺	口 復 23.0 高 残 14.7 最大 復 31.0	白色土と赤褐色土がマール状に混じる砂質の胎土。表面の磨滅著しい。外面胴部上半ナデと見られるが、ミガキの可能性あり。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上半ヘラナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや粗い 砂粗～細粒と白・黒・透明微粒多、白礫少 やや軟質	P5 底上 15cm 口 1/6周、胴上半 3/4周 44、貯蔵穴
18 礫	長 26.7 幅 13.1 厚 11.2	河原石。特に加工の痕跡なし。一部煤付着。重量 4450.0g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 玢岩	カマド西側床直上 25cm 完形 54
19 礫	長 34.1 幅 17.8 厚 13.8	河原石。特に加工の痕跡なし。右側面は表面が褐色がかかった色になっており、この面のみ被熱している可能性がある。重量 10150.0g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 流紋岩	南壁際床直上 完形 21
20 支脚	長 18.1 幅 10.8 厚 8.6	河原石。特に加工の痕跡なし。上端は丸味を持ちつつ尖っており、被熱によりわずかに赤変する。また、使用による痕跡が、上端表面はやや荒れている。重量 2289.7g。	5Y7/2 灰白 やや粗い 流紋岩	カマド内床直上 21cm 完形 K、56、支脚
21 礫	長 16.1 幅 9.0 厚 6.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1356.6g。	2.5Y8/3 淡黄 やや緻密 流紋岩	中央部床直上 完形 6
22 礫	長 13.0 幅 10.2 厚 7.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1010.1g。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 礫岩	カマド北側床直上 完形 58
23 礫	長 13.9 幅 8.6 厚 3.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 570.1g。	N6/ 灰 緻密 安山岩	南部床直上 完形 16
24 礫	長 16.0 幅 7.8 厚 5.2	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 707.8g。	5Y7/2 灰白 緻密 玢岩	北部床直上 完形 38
25 礫	長 12.0 幅 9.8 厚 6.9	河原石。特に加工の痕跡なし。一部、黒色物質(煤か?)付着。重量 1012.6g。	N5/ 灰 緻密 安山岩	南部床直上 完形 17
26 礫	長 14.8 幅 10.5 厚 残 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。裏面は欠損する。残存重量 943.8g。	10Y7/2 灰白 やや粗い 流紋岩	中央部床直上 8cm 一部欠 7
27 礫	長 13.6 幅 6.9 厚 4.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 599.9g。	5YR7/1 明褐灰 やや粗い 安山岩	中央部床直上 完形 32
28 礫	長 9.0 幅 8.0 厚 7.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 697.2g。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 流紋岩	南部床直上 完形 19
29 礫	長 9.5 幅 8.3 厚 3.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 360.6g。	7.5Y7/2 灰白 緻密 安山岩	南部床直上 完形 18
30 礫	長 9.2 幅 7.0 厚 4.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 325.4g。	2.5Y8/3 淡黄 やや緻密 凝灰角礫岩	カマド北側の床直上 完形 59
31 礫	長 10.1 幅 9.1 厚 2.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 276.8g。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 安山岩	D1 付近床直上 10cm 完形 10

SG5 区 SI-22 (第 316・317 図、写真図版 35・182・183)

〔位置〕 SG5 区中央の 14-17・18 グリッド。東側は低地へ傾斜する。同じく古墳中期の SI-24 が南西 3m に、後期の SI-20・21・107 が北と西にある。北部を後期の SI-107 に、中央を試掘トレンチに切られる。

〔規模と形状〕 北東-南西に長い長方形で、東西 4.35 × 南北 5.84m、中軸線は N-50° -E。壁は緩く外傾し、残存高 4 ~ 29cm。床面は平坦で、東に若干傾斜する。南隅の貯蔵穴を 8 字状に囲み、東西 130 ~ 150 × 南北 270cm の範囲に幅 28 ~ 45cm、高さ 2 ~ 3cm のロームを突き固めた土手状高まりがある。西隅部の床面直上で、ハードローム塊と、140 × 60cm の範囲に多量の灰と炭化物に焼土を少量含む厚さ 2 ~ 4cm の層がある(断面図 E-E')。掘方底はほぼ平坦で、ローム粒・塊が多い黄褐色土の貼床を 2 ~ 5cm の厚さでほぼ全体に施す。

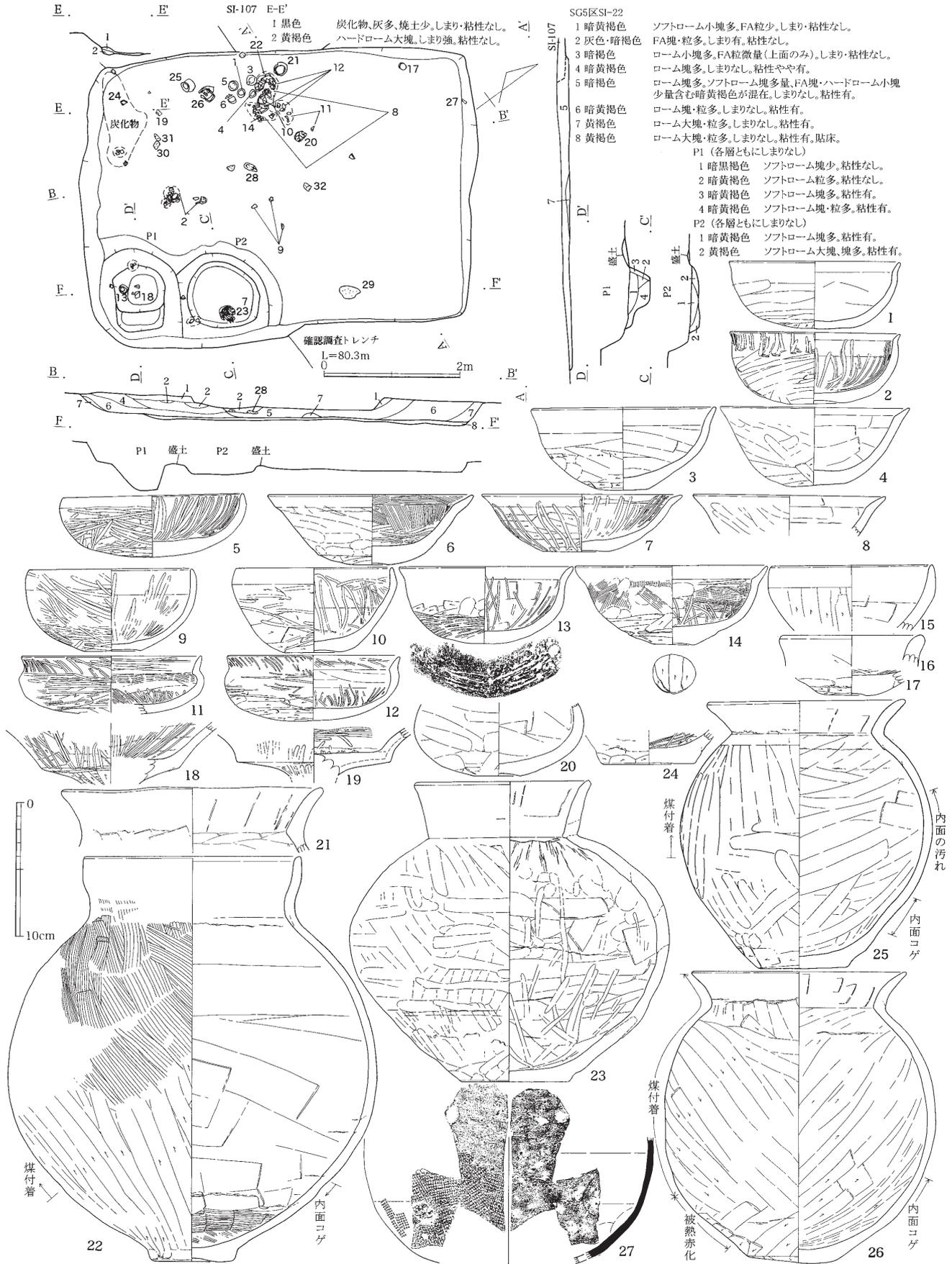
南隅にある貯蔵穴 P1 は東西に長い長方形で、東辺と南辺は壁に接し、西及び北側に土手状の盛土が巡る。P1 は 72 × 95 × 深さ 39cm であるが、70 × 75cm の隅丸方形貯蔵穴の東側に幅 20cm・床から深さ 6 ~ 10cm のテラスが付く。P1 底面は 40 × 40cm の隅丸方形で、壁は直線的に外傾する。P1 の一次堆積土 3・4 層にローム塊が多い。P1 の北東にある皿状の掘り込み P2 は、94 × 107 × 床から深さ 13cm の浅い楕円形で、覆土 1・2 層にロームが多く、土手状盛土が周囲に巡る。P2 は貯蔵穴と考えるには浅く、入口施設に係わる可能性が高い。

〔火処〕 認められなかった。

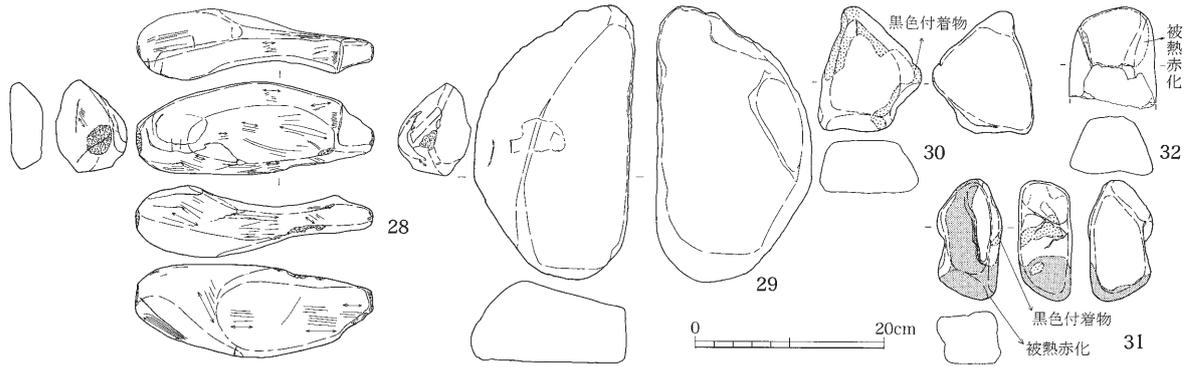
〔覆土〕 自然埋没途中の 2 層が古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラ塊で、1・3 層にも FA 粒を少量含む。

〔遺物出土状況〕 残存度の高い土師器(横倒しの甕類と上向きの杯類)が北西部にまとまり、床面直上のものから数 cm 浮いたものまでである。P2 (入口施設?) 内に、底面から 9cm 浮いた壺(23)がある。

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第316図 権現山遺跡 SG5 区 SI-22 (1) 遺構・遺物



第 317 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-22 (2) 遺物

【出土遺物】 遺物はやや多い。土師器杯類は小破片以外を全て図化した（ただし、混入品と考えられた外傾口縁の杯 1 個は図示していない）。初期的なもの（5）以外の模倣杯はなく、内斜口縁の椀形杯が多い。4・7・8・14 は内彎気味の口縁部、外面口縁部のわずかなナデ調整、体部の軽いナデ調整、底部はケズリで段差を残す部分がある、内面の調整が雑一などの諸点が類似する。高杯・壺・小形壺が少しずつ混じる。甕が多く、長胴甕・甔はない。図示した以外に大形壺・甕は底部で数えて 3 個体分がある。

格子叩き調整の壺下半部（27）は加耶陶質土器で、SI-24 の第 320 図 27 が同一個体の上半部とみられるが、中間部の破片が不足して接合できない。この壺は SI-22 に同一個体 6 片（叩き調整部 2 片と無文部 4 片で計 58.7g）、SG5 区 SI-19・20・22・24、SK-106、SD-101、低地部古墳時代包含層（第 357 図 7・11・27・28 グリッドと低地北部）に同一個体が計 18 片ある。SI-22 の 2 片と SI-20・SK-106 の各 1 片が遺構間接合した胴下半部が 27 である。また、北側の SG10 区 SD-43（SG5 区居館の北側区画溝）にもこの陶質土器の肩部小破片 1 点がある（出土状況図は第 405 図）。

ホルンフェルスの砥石（28）は SG5 区 SI-7 他にある。図示以外の土師器など 430 片・3,729g の内訳は杯 164 片・1,027g、高杯 22 片・231g、壺甕類 243 片・2,467g、焼粘土塊 1 点・4g（他に須恵器甕 5 片・46.4g）。

第 180 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-22 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.5 高 5.0	歪みあるが、軽く薄手な土器。内斜口縁で丸底。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデのち底部ケズリのち体部下半ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。内面は磨滅している部分多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗 ～細粒微量 やや軟質	北西部床上 2cm 正位 完形 36
2 土師器 杯	口 12.4 高 5.3 底 4.0	内斜口縁。底部くぼむ。外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリのち対部丁寧なヘラナデのち口縁部縦方向の疎らなミガキ。ミガキ下端にヘラの当たりあり。底部ケズリのちミガキ。内面体部下半～底部ナデ、口縁～体部上半ヨコナデのち体～底部やや疎らな放射状のミガキ。内面口縁～体部一部タール状の黒色物質付着。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明微粒少、白 細粒微量 やや硬質	中央部床直上～床上 5cm 口～体 2/3 周、底完存 10、44
3 土師器 杯	口 13.4 高 6.1 底 3.4～4.0	内斜口縁。外面体～底部軽いナデのち口縁部ヨコナデ、体部下半～底部ケズリ。底部はいびつな平底。体部わずかに縦方向の粘土の皺残る。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。内外面とも、被熱のためか、部分的に表面が赤変している。内面よりも外面が著しい。	2.5YR6/8 橙 緻密 白・黒粗～微粒と透明細 粒微量 やや軟質	北西部床直上正位 ほぼ完形 34
4 土師器 杯	口 13.8 高 5.8 底 4.2	内斜口縁。外面体部軽いナデのち口縁部わずかにヨコナデ・体部下半～底部ケズリ。底部は数回一方のケズリでやや凹凸のある平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。内面体～底部表面はクレーター状に剥落するため、調整不明確な部分多い。内面口縁～体部一部黒色物質付着。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白微粒 少、透明微粒微量 硬質	北西部床直上正位 ほぼ完形 35
5 土師器 杯	口 12.2～ 13.2 高 4.6 最大 13.6	歪みあり。底部は厚く、内面に凹凸が残る。外面体部軽いナデのち口縁部ヨコナデ・体部下半～底部ケズリのち体～底部疎らなミガキ。ミガキは底部付近の一方のもの、体部に施される、底部を上にした状態で見て四角形状のもの、体部上半に円周方向のものが施される。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁～体部放射状のミガキのち底部 1 方向の密なミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白礫 と白粗～細粒微量 やや硬質	北西部床直上正位 ほぼ完形 38
6 土師器 杯	口 14.9 高 5.2 底 2.4	全体に歪みあり。内斜口縁。外面体部軽いナデのち口縁部わずかにヨコナデ・体部下半ケズリ。底部はナデのみで小さくくぼんでいる。体部下半は段差をなくすようにケズリが施されるが、外面に示すように全体の半分ほどで、段差が残ってしまっている。内面口縁～体部 10 本/1cm のハケのち底部 5 本/1cm のハケを使用した乱雑なハケのちナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白礫 と白・砂粗粒微量 硬質	北西部床直上正位 完形 37

第8章 権現山遺跡 SG5 区

7 土師器 杯	口 14.6 高 4.2 底 4.8	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部ケズリのち一部ナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。底部ケズリのち密なミガキで、全体が浅くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部放射状の疎らなミガキ。内面体～底部表面の剥落著しい。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・ 灰色細粒微量 硬質	P2 底上 9cm 口～体一部欠 7、床下
8 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 2.9	内斜口縁。口縁部歪みあり。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ。体部に縦方向の細かな粘土の皸あり。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、体部ヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少 硬質	北西部床直上～床土 12cm 口～体 1/4 周 30、32
9 土師器 杯	口 復 11.8 高 6.0 底 4.0 最大 復 12.5	薄く、精緻な作り。外面口縁部ヨコナデ・体部下半～底部ケズリのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部のミガキは横ないし斜め方向で上半ほどスキ目が目立つ。底部のミガキは丁寧で、全体的に浅くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち疎らな放射状のミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 白・黒・透明微粒少、白 粗～細粒微量 硬質	中央部床直上～床土 2cm 口～体 1/2 周、底 3/4 周 21、22、23、22 覆土
10 土師器 杯	口 11.6 高 6.2 底 4.0 最大 12.0	作り荒く、小形土器風。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデのち下半ケズリのち疎らな横方向主体のミガキ。底部丁寧なナデのちミガキで、浅くくぼむ。内面体部下半～底部ケズリのち口縁～体部上半ヨコナデのち口縁～底部放射状を基調とする疎らでやや雑なミガキ。	7.5YR8/8 黄橙 やや粗い 黒細粒少、砂礫と白 細粒微量 やや硬質	北西部床直上正位 口～体 3/4 周、底完存 31、32、
11 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 4.2 最大 復 13.4	12 に類似する内斜口縁の杯。丸底になるものと推定される。外面口縁部ヨコナデ、体部下半ケズリのち口縁部斜位のミガキのち体部横方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体部 10 本 /1cm のハケのちナデのち放射状のミガキ。内外面ともミガキは 12 より太く、また、より密に施される。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白細粒と赤粗～細粒 少、白・赤礫微量 硬質	北西部床土 1 ～ 4cm 口～体 1/5 周 28、29
12 土師器 杯	口 12.5 高 4.8 最大 12.8	内斜口縁。丸底。外面体部軽いナデのち体～底部ケズリ・口縁部ヨコナデのち口縁部斜位のミガキのち体部横方向のミガキ。ミガキは細く疎らで、口縁部の場合工具の角度が適正でないためか、刻線状に表面をへこませているところもある。内面口縁部ヨコナデのち横ないし斜め方向の疎らなミガキ。体部ヘラナデのち体～底部やや乱雑な放射状のミガキ。内面のミガキも細く鋭いものである。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒少、砂礫 と白粗～細粒微量 やや硬質	北西部床直上～床土 12cm と SI-107 体一部欠 29、30、32、SI-107 覆土
13 土師器 杯	口 12.8 高 5.7	内斜口縁。外面体部上半軽いナデのち体部下半～底部ケズリ。底部は丸底。口縁部内面ヨコナデ。内面体～底部ヘラナデのち体～底部放射状の疎らなミガキ。外面口縁部一部煤付着、体部下半の 1/3 周ほどが被熱のためか表面剥落、体部下半の 1/3 周ほどには擦痕が集中しており、研磨具に転用されたと思われる。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤細～微粒少、赤粗 粒・白細粒微量 硬質	P1 底直上、やや斜めの 状態 ほぼ完形 2
14 土師器 杯	口 14.0 高 5.8 底 2.8 ～ 3.3	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部軽いナデのち体部上半一部 10 本 /1cm のハケ、体部下半～底部ケズリ。体部下半には、段差が残る。底部ケズリは一方方向数回で、わずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部 10 本 /1cm のハケのち強いナデのち疎らなミガキ。ミガキは放射状を基調とするが、乱雑。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤微粒多、赤粗 粒少 やや硬質	北西部床土 12cm と SI-107 口～体一部欠 30、SI-107(床直)
15 小形土器	口 復 11.6 高 残 4.8 最大 復 12.2	粗雑な作り。外面体部ケズリのち口縁部ヨコナデ、内面体部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 粗砂粒～細砂粒少、 砂礫と赤粗粒微量 やや軟質	口～体一部
16 土師器 小形土器	口 復 10.6 高 残 2.3	厚手。内外面口縁部ヨコナデ、外面体部ケズリ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白粗粒少、白・黒・ 赤細粒微量 やや硬質	口 1/6 周
17 土師器 鉢	高 残 1.9 底 4.0	外面胴部下端～底部ナデのち胴部下端～底部外周ケズリ。底部は丸味を持ち、中央のみくぼむ。内面底部強いヘラナデのち疎らなミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗粒多、白・赤礫 と白・黒細粒微量 やや硬質	北部床土 19cm 体下端～底完存 42
18 土師器 高杯	高 残 4.6	外面底部縦方向のケズリ・体部斜位の疎らなケズリのち稜周辺の横方向のケズリのち体部疎らなミガキ。内面体～底部ナデのち放射状の疎らなミガキ。内外面ともミガキは明瞭。	5YR6/6 橙 緻密 白礫と透明粗粒と白・赤 細粒微量 硬質	P1 底上 18cm 杯～底 1/4 周 3
19 土師器 高杯	高 残 3.5	外面杯部体部から底部外周ヨコナデ・底部ケズリのち体～底部縦方向のミガキ。内面体～底部外周ヨコナデのち体部横方向のミガキ、底部放射状のミガキ。底部は密なミガキだが、体部はやや雑であり、ミガキが施されない部分が目立つ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤細粒少、白・ 赤礫微量 硬質	西部床土 13cm 杯体～底 1/4 周 18
20 土師器 壺	高 残 5.3 底 3.4 胴 12.3	外面胴部下端に円周方向の多角形状ケズリのち胴中位～下半・底部ナデ。底部はいびつな楕円形であり、くぼむ。底部外周は鋭い。内面胴部中位～底部ヘラナデ。内面は黒褐色を呈しており、クレーター状に表面が剥落する。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 半透明粗粒少 やや硬質	中央部床土 10cm 正位 体下半 2/3 周、底完存 27
21 土師器 甗	口 19.2 高 残 4.9	外面口縁部ヨコナデのち胴部上端ヘラナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端強いヘラナデ。外面口縁部に多量に煤付着。内面口縁部にも、一部煤付着。	7.5YR6/8 橙 やや緻密 白・黒・透明細粒少、 白粗粒微量 硬質	北西部床土 16cm 逆位 口完存 33
22 土師器 甗	口 復 16.0 高 29.8 底 6.2 最大 26.8	口縁部は内彎する。外面胴部上半 4 本 /1cm のハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下半ケズリ、底部ケズリのちナデ。底部は突出する平底で、中央くぼむ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部上 4cm に積み上げ休止による接合面があり、それより下位は 4 本 /1cm のハケが施される。ハケは接合前の調整と見られ、接合後のヘラナデにより消されるところがある。外面底部上 8cm まで被熱により部分的に赤変、それより上位となる胴部中位は煤付着。内面胴部下端～底部(底部上約 5cm まで)コゲ付着。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 白・赤・黒・砂粗粒 ～微粒少、白・砂礫微量 硬質	北西部床直上横位南東の 下向き ほぼ完形 32
23 土師器 壺	口 復 12.9 高 22.1 底 7.9 最大 23.4	厚手。外面口縁～胴部上半は平滑に調整されるが、それ以外は調整が荒く、胴部下半は成形も不充分。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半～中位丁寧なナデ。胴部下半荒いナデで、積み上げ休止による接合面は不十分な成形により段差と継ぎ目となって残る。底部ケズリのちナデで、平底。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上半軽いナデで、指頭丘痕と粘土のしぼり目が目著。胴部中位～底部ヘラナデのち縦方向の疎らなナデ。胴下半～底部は比較的平滑に仕上げられている。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・半透明粗～細粒 と黒細粒少、赤細粒微量 硬質	P2 底上 9cm 口 1/4 周、胴上半一部 欠、胴下半 3/4 周、底 完存 7
24 土師器 甗	高 残 2.5 底 6.8	外面胴部下半ナデのち胴部下端～底部ケズリ。底部は平底で、中央がわずかにくぼむ。内面底部強いヘラナデのちヘラ先端によると見られる光沢のないミガキ状のヘラナデ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白粗～細粒少、白・ 赤礫微量 硬質	西部床土 4cm 底 1/2 周 15
25 土師器 甗	口 14.3 高 19.4 底 6.5	外面胴部中位～下半多方向のナデのち胴部上半縦方向の丁寧なナデ・胴部下端～底部ケズリ。底部平底。口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴～底部ヘラナデで、一部ケズリ状に強く施される部分あり。胴部上端には、紐積痕が残る。外面胴部中位～底部被熱により部分的に赤変。外面口縁～胴部上半煤付着。内面胴～底部、部分的にコゲ付着。	10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 砂粗粒多、白粗粒 少、白礫微量 硬質	西部床直上横位 ほぼ完形 41

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

26 土師器 甕	口 15.7 高 21.3 底 6.8 最大 19.8	やや歪みがあるが、丁寧に成形された土器。外面胴部上半へラナデのち胴部中位～底部ケズリのち軽いナデ。底部は丸味を持つ平底。口縁部ヨコナデ。内面口縁部へラナデのちヨコナデ、胴～底部丁寧なケズリのち軽いナデ。外面底部上7～8cmが被熱により赤変、それより上の胴部および口縁部に厚く煤附着。内面は、外面の被熱した範囲とほぼ同じ位置となる胴部下半～底部に厚くコゲ附着。	10YR3/1 黒褐 やや粗い 砂粗～細粒少、砂礫 と白・赤粗～細粒微量 硬質	西部床直上～床上7cm、 横位底部西 口・胴一部欠 40、40-1
27 陶質土器 壺	高 残 9.1	外面細かな格子のタタキ。内面ナデで、緩やかな凹凸あり。同一個体と見られる破片は計6点あり、それからすると、胴部下半は外面格子のタタキ、内外面胴部上半はロクロナデ、内面胴部下半は凹凸が残るナデとなると見られる。外面図右半の上下端にある各1片がSI-22出土で、他の2片はSI-20とSK-106で出土。SI-19・24や低地出土の上半部と同一個体と考えられるが接合できない。	N5/ 灰 やや緻密 白礫と白粗～細粒微 量 硬質	北壁溝底上7cmが1片 と位置不詳が5片、SI- 20・SK-106・SD-101の各 1片と接合 胴部破片 43
28 石器 砥石	長 24.9 幅 9.7 厚 7.5 重 1846.8	主要な使用面は表裏2面であり、上下方向では使用面中央が大きくくぼむほか、断面図に示すように左右方向で見ても中央がくぼんでいる。表側に見られる左右両側面も使用されたと見られるほか、裏面下半も平滑で擦痕が残っており、砥面として使用されたと考えられる。上下両端は敲打痕が集中する。	5Y5/1 灰 緻密 ホルンフェルス	中央部床直上6cm 完形 20
29 礫	長 28.2 幅 16.1 厚 8.7	河原石。特に加工の痕跡なし。重量5650.0g。	7.5Y6/1 灰 やや粗い 礫岩	東部床直上 完形 24
30 礫	長 12.8 幅 10.7 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。表側黒色物質附着。煤か？裏面は、被熱のためか表面が黄色がかる。重量1051.5g。	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 流紋岩	南西部床直上 完形 13
31 礫	長 12.5 幅 6.8 厚 5.5	河原石。特に加工の痕跡なし。表面は被熱により赤変するほか、煤か？と見られる黒色物質が附着する部分あり。重量718.5g。	2.5Y6/2 灰黄 やや粗い 流紋岩	南西部床直上 完形 14
32 礫	長 残 10.5 幅 9.1 厚 6.0	河原石。特に加工の痕跡なし。表面の一面のみ被熱により赤変。残存重量696.3g。	2.5GY5/1 オリーブ灰 やや緻密 礫岩	中央部床直上 破片 25

SG5区 SI-23 (第318図、写真図版35・36・173)

【位置】 SG5区中央の13-16・17グリッド。同じく古墳中期の建物は南にSI-26があり、詳細時期不明のSI-99・155が南と北東にある。同じく古墳中期末葉のSI-25を切り、古墳時代のSK-110と南側の確認調査トレンチに切られる。

【規模と形状】 ほぼ方形で東西5.90×南北5.61m、中軸線はN-23°-E。残存壁高は2～6cm。床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方の深さは床面から4～12cmで、ローム塊を少量含む暗黄褐色土でほぼ全面に貼床を施すが、地山ロームのまま床とする部分もある。

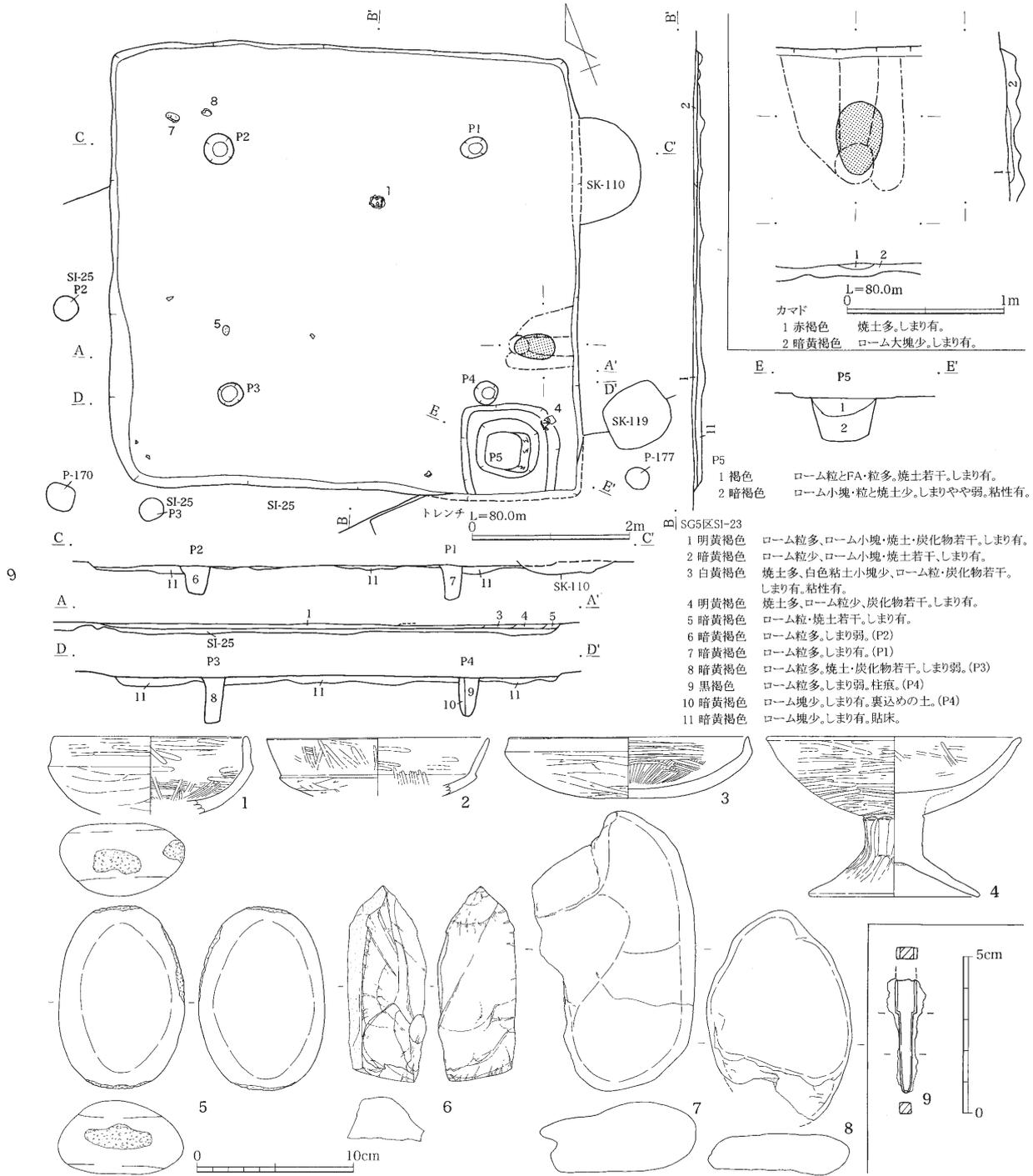
主柱穴4本は、P1が径32×26×深さ45cm、P2は径41×39×深さ36cm、P3は径31×30×深さ58cm、P4は径30×29×深さ50cm。柱間はP1-P2間が3.23m、P3-P4間が3.26m、P1-P4間が3.01m、P2-P3間が3.09mで、東西より南北方向の柱間がやや狭い方形に配置する。

南東隅にある貯蔵穴P5は78×74×床から深さ54cmの隅丸方形。周囲は幅20～25cm・床から3～5cmの深さで浅い平坦面を設け、南側は壁面に接する。平底で東端が少し高く、直線的に立ち上がる壁面に掘削工具の凹凸痕が残る。貯蔵穴P5の西側と北側は、調査時の写真によると周囲よりも床面が少し高く見える。この高い部分は図示されていないが、写真を見るとP5の西側に入口の窪みがあり、その周囲がわずかに高いように観察される。P5の覆土上層にはローム粒と古墳後期初頭に降下したFAテフラ粒が多い。

【カマド】 東壁の南部にある。東壁に接する床面の南北75×東西86cmの範囲に焼土・粘土粒・炭化物が附着し、断面図A-A'の3～5層がカマド崩落土と考えた。袖やカマドの構造は不明確だが、白色粘土を構築主材とし、煙道が壁外に出ない。50×52cmの範囲で床面が焼けた部分が火床面であろう。

【覆土】 竪穴部覆土1～5層のうち、3～5層はカマド崩落土と考えられる。3・4層は焼土を多量、3層には白色粘土塊を少量含む。古墳後期初頭に降下したHr-FAと思われるテフラ粒を貯蔵穴P5の上層に含み、覆土の残りが薄い竪穴部ではテフラを確認できない。

【遺物出土状況】 竪穴の残りが浅いので、貯蔵穴上部にある高杯(4)以外の遺物は床面付近にある。ただし、杯の小破片(2と3)は混入する可能性もあるので、残存度の高い杯(1)がこの建物に伴うと考えられる。



第318図 権現山遺跡 SG5 区 SI-23 遺構・遺物

〔出土遺物〕古墳中期末の建物だが、後期後半の土師器（3）も混入している。遺物はごくわずかで杯片が多く、ほとんどは1のような深身の杯で、2のような外傾口縁の杯片がわずかにある。土師器壺甕類が混じり、甌はない。図示以外の土師器は合計144片・913gで、内訳は杯44片・252g、高杯1片・20g、小形壺3片・20g、壺甕類96片・621g。鉄製の篋被関部（9）は角関なので古墳中期中葉的であるが、短脚高杯（4）は中期末である。中期末葉（本遺跡編年の4段階古相）のSI-25を切ることからみても中期末（4段階新相）の建物であろう。

第181表 権現山遺跡 SG5 区 SI-23 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 5.0 最大 復 13.0	軟質なため、表面が磨滅している部分多い。外面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ、体部ケズリのち丁寧なナデ。内面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ、体部4本/1cmのハケと7本/1cmのハケのちナデのち放射状を基調とする疎らなミガキ。内外面ともミガキは太め。外面体部ターレットの黒色物質が付着。	5YR5/8 明赤褐 緻密 赤粗～細粒と白細粒微量 やや軟質	中央部床上 3cm 口 1/6 周、体 2/3 周 2
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 3.7	赤褐色の緻密な胎土。外面口縁部ヨコナデのち斜め方向主体のミガキ、体部ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。内面口縁部は表面の剥落が著しいため、ミガキの疎密などは不明。体部放射状のミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・黒細～微粒微量 やや硬質	口～体 1/6 周
3 土師器 杯	口 復 15.0 高 3.9 最大 復 15.6	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのちケズリで、体部にケズリが施されない部分あり。内面口縁部ヨコナデのち体～底部放射状の密なミガキのち口縁～体部横方向の疎らなミガキ。古墳後期後葉の遺物が混入。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 粗砂粒少、赤粗粒と 透明粗～細砂粒微量 硬質	口～底 1/6 周
4 土師器 高杯	口 復 16.0 高 10.1 脚 10.8	短脚の高杯。軟質なため特に杯部で表面が磨滅する。外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部横方向のミガキ。磨滅により明確にしないが、比較的密に施されていたと見られる。脚部下半ヨコナデのち上半～中位密なミガキ。内面杯部は磨滅著しいが、密にミガキが施されていたと見られる。脚部ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 緻密 白粗粒少、赤粗粒と透明 微粒微量 やや軟質	P5 付近底上 68cm 杯口～底 1/5 周、脚上 半 1/2 周、脚下半完存 8
5 石器 敲石	長 11.6 幅 7.9 厚 4.6 重 488.1	縄文石器の可能性あり。河原石。上下両端と右側面に敲打痕あり。表裏面とも中央付近が平滑になっているが、研磨によるものとは見られない。表面の小さなくぼみの中には、鉄分酸化によると見られる赤褐色土が入り込んでいる。	2.5Y5/1 黄灰 やや粗い 多孔質安山岩	中央部床上 3cm 完形 4
6 石器 剥片	長 12.3 幅 5.0 厚 2.8	泥岩起源と見られる緻密なホルンフェルス製の破片。下端および左側面に原礫面を残す。砥石の素材とも見られるが、縄文石器の可能性もあり。重量 224.7g。	7.5Y6/1 灰 緻密 ホルンフェルス	破片 K、掘り方
7 礫	長 17.7 幅 9.8 厚 4.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 920.3g。	5Y6/1 灰 緻密 安山岩	北部床直上 完形 1
8 礫	長 残 13.2 幅 9.2 厚 2.5	河原石。特に加工の痕跡なし。残存重量 324.4g。	5YR7/6 橙 やや粗い 流紋岩	北部床直上 一部欠 10
9 鉄製品 鉄鏃	長 残 3.6 幅 0.7 重 残 2.5	鉄鏃の頸部下端から基部の破片と見られる。X浅写真から見て棘関や台形関ではなく直角関。茎関の上下面には段がなく、左右側面を段にする。現状で木質や有機質は見られない。		下端部残

SG5 区 SI-24 (第 319・320 図、写真図版 36・37・173・183)

【位置】 SG5 区中央西寄りの 13-17・18 グリッド。南東部は低地へ傾斜する。同じく中期の SI-22 が北東にある。北に後期の SI-21、西に時期不詳の SI-155 が近接する。時期不明の SD-108 に北東部を切られる。

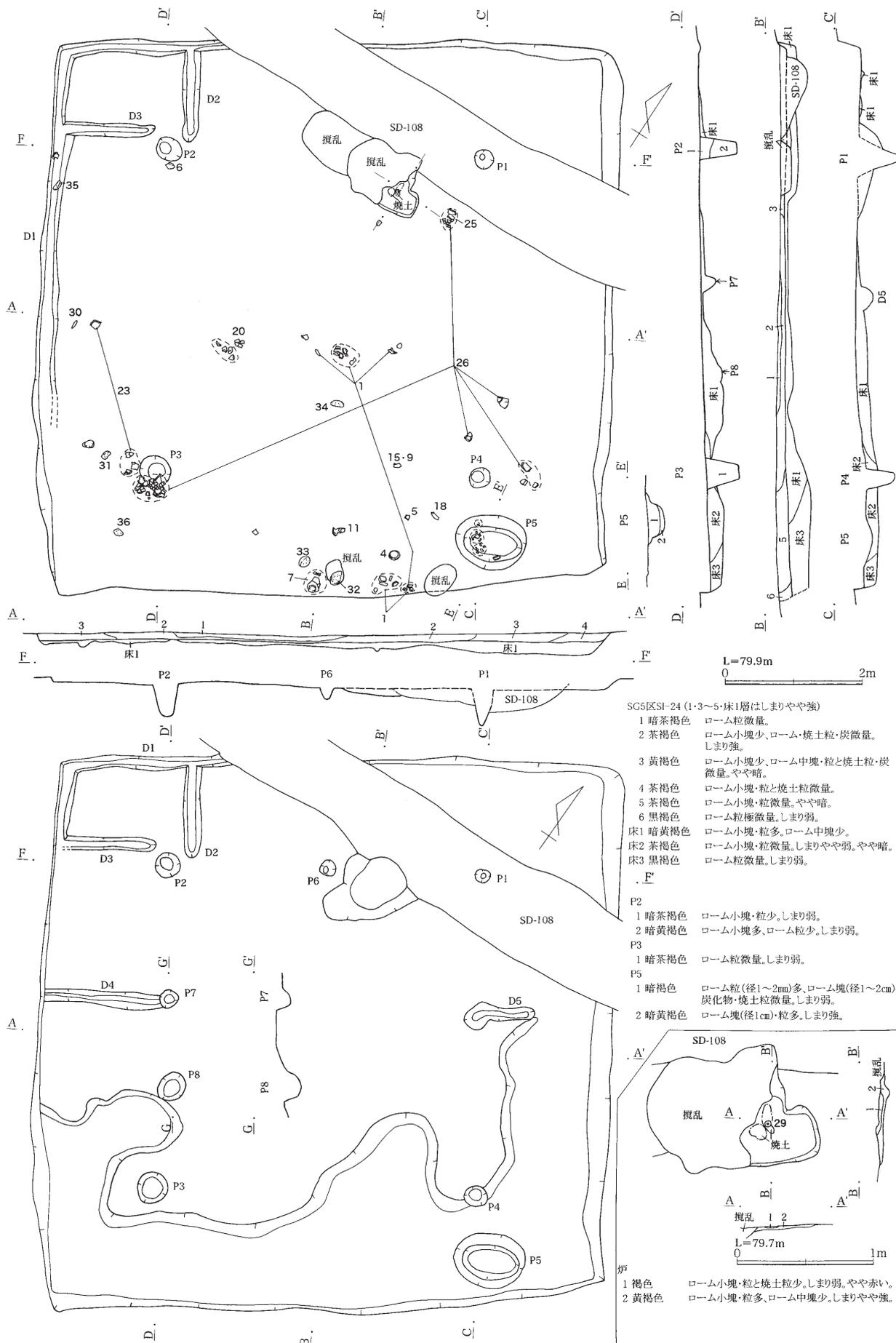
【規模と形状】 ほぼ方形で、東西 8.57 × 南北 8.01m、中軸は N-33° -W。南壁はほぼ直立で、他の壁は直線的に傾き、残存高は 2 ～ 43cm。床はほぼ平坦で北東と南東が少し低い。掘方は床から深さ 2 ～ 20cm で南半の外区が深く、底面に細かな凹凸が目立ち、主にローム粒・塊が多い暗黄褐色土で貼床する。

主柱穴 4 本は、P1 が径 28 × 29cm で SD-108 底面から深さ 39cm (床面から推定 62cm)、P2 は径 32 × 39 × 深さ 53cm、P3 は径 44 × 45 × 深さ 48cm、P4 は径 29 × 33 × 深さ 42cm である。径はほぼ同じだが、北側に比べ南側はやや深い。柱間は P1-P2 間が 4.60m、P3-P4 間が 4.65m、P1-P4 間が 4.65m、P2-P3 間が 4.71m で、ほぼ等間隔の方形に配置する。P1-P2 の中間で 1 本 (P6)、P2-P3 のラインを 3 等分するように 2 本の補助柱穴と考えられるピット (P7・P8) を、いずれも掘方底面で確認した。P6 が径 22 × 24cm で掘方底面から深さ 8cm、P7 が径 25 × 29cm で掘方底面から深さ 20cm、P8 が径 38 × 44cm で掘方底面からの深さ 24cm である。

西壁北側と北壁西側で検出した壁溝 D1 は断面 U 字状で幅 18 ～ 28 × 深さ 2 ～ 3cm。北壁際で D2、西壁際で D3・D4、東壁際で D5 の 4 本の間仕切溝は断面 U 字状で長 130 ～ 150 × 幅 15 ～ 36cm、掘方底面から深さ 10 ～ 20cm。D2・D3 は床面で確認し、北・西壁溝と P2 を矩形に結ぶ。D4・D5 は掘方底で確認し、D4 は P7 と西壁溝を連結し、D5 は D4 の延長上にある。東壁際は掘方が深いため D5 が途切れる。

南東部にある貯蔵穴 P5 は、長軸が南壁に対し 12° 北に振れる楕円形で、径 100 × 80 × 深さ 29cm、P5 底面内側の楕円状掘り込みは径 82 × 50cm。P5 は平面楕円形の鍋底状底面から壁が垂直気味に上がった後に、幅 7 ～ 18 × 深さ 5cm ほど緩く上がり床に至る。P5 の覆土上層に微量の炭化物・焼土粒を含む。

【炉】 中央部の北東寄り地床炉を確認した。攪乱を受け全体形は不明確だが、東西 58 × 南北 50cm の範囲で床面から 2 ～ 3cm くぼむ。底面は被熱により硬化し、中央に焼土塊が認められた。



第319図 権現山遺跡SG5区SI-24(1)遺構

[覆土] 1～6層は自然堆積である。

[遺物出土状況] 南半部と貯蔵穴付近で、少し浮いたレベル（床から10cm以内）に遺物が多い。南壁付近に大形の礫と完形の杯（4）、貯蔵穴P5内にも大形の自然礫がある。紡錘車状土製品（29）の出土番号が図に記録されていなかったが、写真と炉平面図から判断して炉の焼土上から出土したと考えられる。

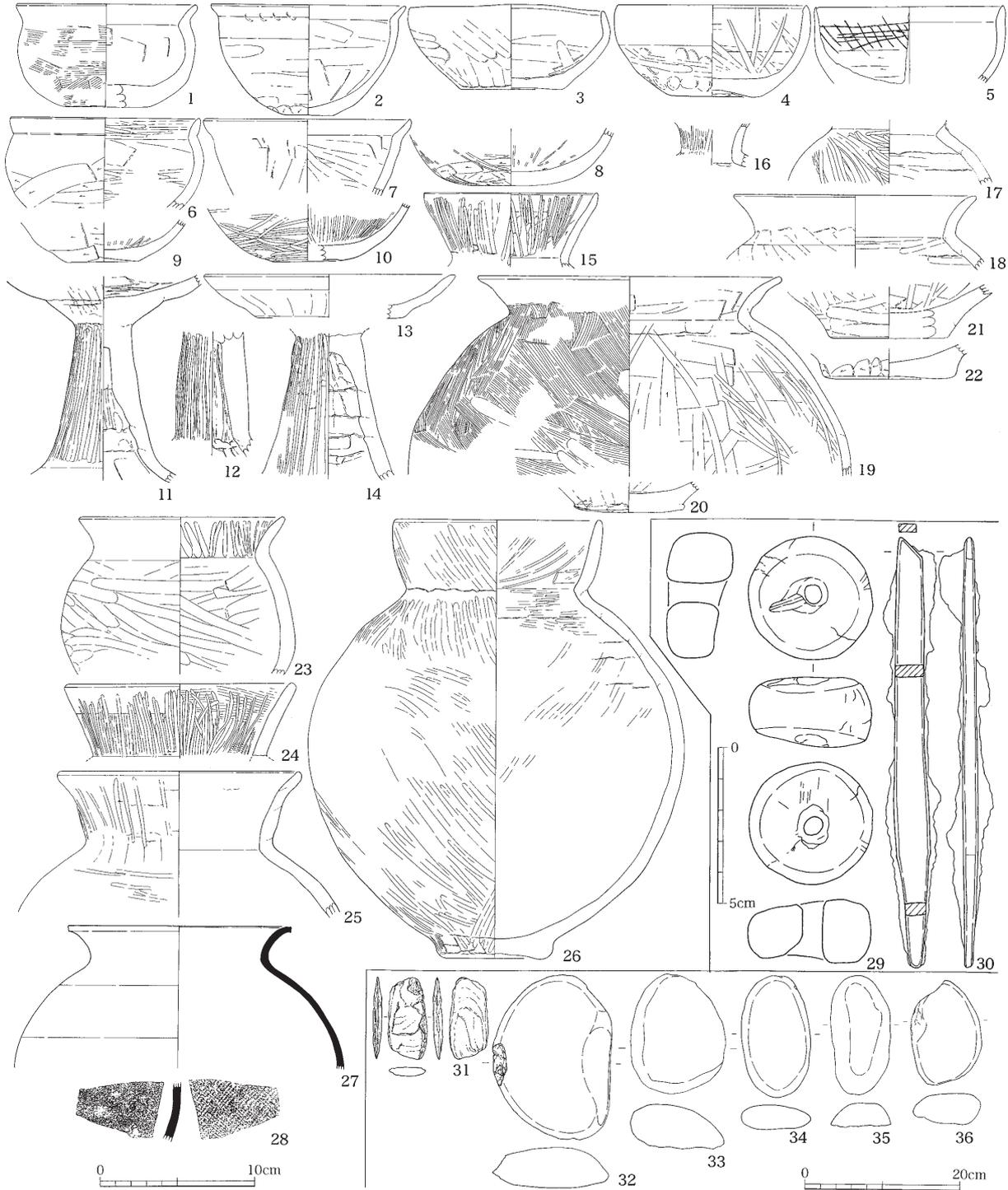
[出土遺物] 遺物は比較的多く、杯と壺甕類が主体で高杯も多い。半球状（3・4）や口が開く内斜口縁（2・7）の杯があり、確実な模倣杯はない。12のように雲母を含む土師器は茨城県域の製品とみられ、SG5区ではこれ1点だが、隣接するSG10区ではSI-12などに事例がある。格子叩き調整の加耶陶質土器は、同一個体と見られる2片が出土し（27・28）、SI-19・22・106・低地包含層に同一個体の上半部破片、SI-22などに下半部破片がある（各遺構への分布状況はSI-22および第405図を参照）。29は紡錘車に似るが、孔が中心になく、厚さも一定しないで重心が偏るので紡錘車状土製品とした。紡錘車はSG5区SI-4などにある。

キサゲ状工具は、千葉県稲荷台1号墳出土例（田中1988）に比べると先端の角度が緩くて身部が薄く、長野県鳥羽山洞窟・安坂將軍塚1号墳例に近い（関・永峯2000、大場他1964）。

図示した以外に、杯鉢類は上げ底状1点・平底3点・丸底3点があり、高杯は杯底部で数えて2個、大形壺・甕は底部で数えて4個あり、1cmあたり5本程度の粗いハケ調整甕もある。長胴甕・甌はなく、厚手の大形壺胴部片を1辺6cm位の方形に割ったものがある。図示以外の土師器は合計635片・6,491gで、内訳は杯296片・1,970g、高杯46片・682g、壺甕類293片・3,839g。

第182表 権現山遺跡SG5区SI-24出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 6.6 底 復 5.6	内斜口縁。外面口縁部軽いヨコナデ、体部8本/1cmのハケ。底部は丁寧なナデで、平底だが、小粘土塊2コが貼り付いている。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。内面は、表面が磨滅している部分が多い。外面体部と口縁部内外面の一部に煤付着。火にかけられた可能性あり。内面体部下～底部の表面剥落著しい。	5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒少、白細 粒と砂礫微量 やや硬質	南東壁際床土3～4cm 口～底1/3周 11、12
2 土師器 杯	口 復 12.4 高 7.0 底 3.0	内斜口縁。薄手な作り。外面体部軽いナデのち口縁部ヨコナデ・体部下端～底部ケズリ。口縁部には、指頭圧痕が残る。底部は平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白微粒多、白細粒 少、砂礫微量 やや硬質	口～体上半1/4周、体 下半～底完存
3 土師器 杯	口 12.4 高 5.0～5.5 底 6.3 最大 12.8	口縁部内彎。整形は体部下～底部は丁寧だが、口縁～体部上半は整形が甘く、歪みがある。外面体部横方向のやや雑なナデのち口縁部軽いヨコナデ・体部下縦方向のナデ・底部はナデで、整った平底であり、中央がわずかにくぼむ。内面体～底部ナデ・ヘラナデ、口縁部軽いヨコナデ。内面底部の剥落著しく、侵食されるように数mm分失われるところもある。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白微粒 少、白礫と透明礫～粗粒微量 やや硬質	口～体2/3周、底完存
4 土師器 杯	口 12.5 高 5.8 底 5.0	半球状。外面口縁部ヨコナデ、体部一部横方向の光沢を持つナデ。ナデはわずかで、歪みがある。外面体部横方向のやや雑なナデのち口縁部軽いヨコナデ・体部下縦方向のナデ・底部はナデで、整った平底であり、中央がわずかにくぼむ。内面口縁～体部上半ヨコナデ、体部下～底部ヘラナデのち口縁～底部疎らな強いナデ。内面底部は表面の剥落著しい。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明微粒少、 白・赤粗～細粒微量 やや硬質	南東部床土11cm正位 ほぼ完形 10
5 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.9	内斜口縁。硬質、薄手な作り。体部ナデのち口縁部ヨコナデ・体部下ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部は被熱のためか剥落が著しく、調整不明。体部外面に斜格子状の刻線あり。横方向5本、縦方向10本が確認できる。線刻は細いが先端にやや丸味を持つと思われ、体部上半に間隔なく施される。最上位の横線1本が最も深く、それ以外は縦線の方が横線よりも深い。粘土が動いていないので、焼成前の乾燥した時点で描いた可能性が高い。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白微粒少、赤粗～細 粒と白・黒細粒微量 硬質	南東部床土7cm 口～体1/6周 9
6 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 5.8 最大 復 12.6	内斜口縁。やや厚手だが、歪みなく整った作り。外面体部ナデのち体部中位～下半ケズリ・口縁部ヨコナデ。口縁部下端は、わずかな段となる。内面口縁部ヨコナデのちやや疎らな横方向のミガキ。体部ヘラナデのち中位～下半やや疎らな横方向のミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・透明粗粒と 砂細粒少、砂礫微量 硬質	西部床土2cm 口～体1/6周 1
7 土師器 杯	口 復 13.3 高 残 5.0	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部縦方向のナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部やや雑なヘラナデ。外面体部には、粘土の皸が目立つ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗粒少、砂粗 粒微量 やや硬質	南東壁際床土6cm 口～体1/6周 14
8 土師器 鉢	高 残 3.7	丸底。外面体～底部ケズリのち疎らなミガキ。横方向（円周方向）のミガキはほとんどなく、一方向に磨く。内面体～底部ヨコナデのち疎らな放射状のミガキ。内外面ともミガキは細い。内面は剥落著しく、調整不明な部分多い。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗粒と粗砂粒少、 白礫～粗粒と細砂粒微量 やや硬質	体一部、底完存
9 土師器 鉢	高 残 2.7 底 4.6	外面体部下～底部ケズリ。底部くぼむ。内面体部下～底部疎らな放射状のミガキ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗粒多、白細粒と 赤礫少、透明礫微量 やや硬質	中央部床土7cm 体下半1/2周、底完存 確認面 17
10 土師器 杯	高 残 3.7 底 復 4.4	外面体部下ケズリのち体部ミガキで、下寄りほど密に施される。底部ケズリで、浅くくぼむ。内面体～底部放射状の密なミガキ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 砂細～微粒少 やや硬質	体～底1/2周
11 土師器 高杯	高 残 13.3	外面杯部体部ヘラナデ、底部ナデ、脚部上半縦方向の密なミガキ。脚部下ヨコナデ。内面杯部体～底部ヘラナデのち雑なミガキ、脚部上端径1.35cmの円筒状で上端は平坦になっており、径1.35cmないしそれ以下の直径の工具により調整されたと見られる。これ以下はヘラナデで、組積痕が明瞭に残る。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・半透明細粒少、 赤・砂粗～細粒少 やや硬質	南東部床土5cm 杯底一部、脚柱完存 16



27・28は第316図27と同一個体

第320図 権現山遺跡 SG5 区 SI-24 (2) 遺物

12 土師器 高杯	高 残 8.0	外面脚部上半ナデのちミガキ。ミガキは密だが、隙間もあり。内面脚部上半縦方向のしぼり目が顕著、下半ヘラナデで、組積痕残る。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白細粒と金色雲母粗粒微量 やや硬質	P5 脚上半 1/2 周 K-K' 貯 1
13 土師器 高杯	口 復 16.0 高 残 2.8	浅い杯部と見られる。外面杯部体部ナデないしヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面杯部口縁～体部ヨコナデ。内外面とも表面が磨滅している部分が多く、調整は不明瞭。	7.5YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤細粒少、赤粗粒微量 軟質	杯口～体 1/3 周
14 土師器 高杯	高 残 9.3	外面脚柱部ナデのち上半ケズリのちやや疎らなミガキ。内面脚柱部上半ナデ、下半ヘラナデで、組積痕顕著に残る。	5YR7/6 橙 やや緻密 白微粒少、白礫微量 やや軟質	脚柱 1/3 周
15 土師器 小形壺	口 復 11.0 高 残 4.8	口縁部は直線的に開き、端部で内向きに角度を変えて直立気味となる。外面口縁部上半ヨコナデのち口縁部縦方向のヘラナデのちやや疎らな縦方向のミガキ。内面口縁部上半ヨコナデのち口縁部斜め方向のケズリのちやや疎らな縦方向のミガキ。	7.5YR4/4 褐 緻密 赤・黒細粒と白細～微粒微量 硬質	中央部床 上 7cm 口 1/4 周 17

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

16 土師器 小形壺	高 残 2.8	小形。頸部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ、内面頸部ヨコナデ、胴部上端軽いナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明礫と白・黒・赤・砂微粒微量 やや軟質	頸 1/2 周
17 土師器 小形壺	高 残 4.2	外面胴部上半ナデのちミガキ、内面口縁部下端ナデ、胴部上半軽いナデで、紐積痕残る。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒少、白・黒粗粒微量 硬質	口一部、胴上半 1/3 周
18 土師器 甕	口 15.5 高 残 4.8	外面胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデで紐積痕残る。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白微粒少、白礫～細粒と赤粗～細粒と透明微粒微量 硬質	南東部床上 4cm 口 2/3 周 8
19 土師器 甕	口 復 19.4 高 残 12.7 最大 復 28.4	外面胴部上半 10 本 /1cm のハケのち一部ナデ、口縁部ヨコナデ。ハケは、工具の当たり方によりハケが出ない部分もある。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上半横方向のヘラナデのち縦方向の当沢を持つ軽いケズリ。胴部上端には、紐積痕が残る。外面胴部中位・口縁部煤付着。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細～微粒多、白・透明礫と赤・黒・透明粗粒微量 硬質	南東壁際床上 4cm と中央部床上 1 ～ 3cm 口～胴上半 1/3 周 12、19、20、21
20 土師器 甕	高 残 2.0 底 6.8	19 と同一個体の可能性あり。外面胴部下端ヘラナデ、底部ケズリで、突出した平底のように作られるが、外周が強く削られるため丸味を持つ。内面底部軽いケズリ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・半透明粗粒多、赤粗粒少 硬質	中央部床上 1cm 底完存 25
21 土師器 甕	高 残 3.5 底 復 7.4	外面胴部下端ナデ、底部ケズリで、平底。内面底部ヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・黒・赤・砂粗～細粒少、白・黒・砂礫微量 硬質	胴下端～底 1/2 周
22 土師器 甕	高 残 2.2 底 8.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部は突出し、中央が浅くくぼむ。内面底部はほぼ全面で表面が剥落しているため、調整不明。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・半透明細粒少 やや硬質	底 2/3 周
23 土師器 甕	口 13.2 高 残 10.1 最大 15.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のナデ。内面口縁部ヨコナデのち縦方向の強いナデ、胴部上半横方向主体の幅の狭い密なヘラナデ。外面口縁部・胴部中位煤付着。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤・砂微粒少、白・黒・砂礫と赤・黒粗粒微量 やや硬質	西部床上 6 ～ 7cm 口 1/2 周、胴上半 2/3 周 27、32
24 土師器 壺	口 復 15.0 高 残 4.7	外面口縁部 6 本 /1cm のハケのち上半ヨコナデのち縦方向のミガキ。口縁部は斜めの平坦面となる。内面 6 本 /1cm のハケのち縦方向のミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂礫と白・透明細粒微量 やや硬質	口 1/3 周
25 土師器 壺	口 復 15.4 高 残 9.4	外面口縁部軽いヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。胴部上半ヘラナデ・ナデのちわずかな横方向のミガキ。内面口縁部軽いヨコナデ、口縁部はわずかに内彎する。胴部上半ナデ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明確な部分多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・半透明粗粒多、赤礫微量 やや硬質	北部床直上 口～胴上半 1/3 周 3、確認面
26 土師器 壺	口 復 13.4 高 28.0 底 7.4 最大 復 24.0	外面口縁部上半ヨコナデのち口縁部やや斜め方向のミガキ。口縁部内彎。胴部ナデ・ヘラナデのち密なミガキ。胴部磨減する部分多い。底部ケズリのちミガキ。底部は突出するくぼみ底。内面口縁部ヨコナデ、下半ヘラナデのち斜め方向の疎らなミガキ。胴～底部ナデないしヘラナデのちミガキ。胴部上半紐積痕残る。ミガキは密に施されると思われるが、胴部中位以下は表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂礫～細粒と赤粗～細粒少、赤礫微量 やや硬質	P3 付近床上 4cm、東部床直上～床上 3cm、北部床面上 口 1/3 周、胴一部欠、底完存 3、4、5、7、28、SI-24 確認面
27 陶質土器 壺	口 復 14.3 高 残 9.1 最大 復 21.0	内外面とも青灰色で、断面は赤灰色。内外面胴部細な格子目タタキのちわずかにナデ、内面胴部ナデ。内面に、わずかに自然釉付着。27 および SI-20・22 や SK-106 出土の下半部と同一個体と考えられるが接合できない。	5PB6/1 青灰 やや緻密 白礫～細粒微量 硬質	低地出土の 4 片および SI-19 の 1 片と接合 口 1/8 周、頸 1/4 周
28 陶質土器 壺		内外面とも青灰色で、断面は赤灰色。外面胴部細な格子目タタキのちわずかにナデ、内面胴部ナデ。内面に、わずかに自然釉付着。27 および SI-20・22 や SK-106 出土の下半部と同一個体と考えられるが接合できない。	5PB6/1 青灰 やや緻密 白礫～細粒微量 硬質	胴部下半破片
29 土製品 紡錘車状 土製品	径 3.86 ～ 3.97 厚 1.58 ～ 2.19 重 24.15	外面はナデで整形され、外周にわずかに粘土の皺が残る。孔径は 6.0 ～ 6.8 mm で、外周の円の中心を外れているほか、器厚も 1.5 ～ 2.1cm と幅広く、整形はやや雑と言える。外面には、部分的に淡褐色土が付着する。化粧土か？ 孔の大きさからみると土玉より紡錘車に近いが、重心が偏っているため紡錘車として使うには適さない。	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 赤粗～細粒少、黒粗粒微量 やや軟質	炬 1 層上面 完形
30 鉄製品 キサゲ状工 具	長 13.7 幅 1.1 厚 0.5 重 20.59	平面形は関部が不明瞭で、茎尻は丸く仕上げられる。断面形は関部付近が最も厚く 4.7mm で、先端側と茎尻側では厚さ 2.8 ～ 2.9mm まで少しずつ薄くなる。最先端だけは側面図に示したように急に薄く尖り気味になる。有機質は確実には見られないが、茎に木質がわずかに残存しているかもしれない。X 線写真でも孔は認められない。		西部床直上 完形 35
31 礫	長 残 10.3 幅 残 4.9 厚 残 1.0	板状の雲母片岩片。破片と見たが、現存する形に近い形で完形となる刃器ないしは模造品の可能性もあるだろう。残存重量 71.7g。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 雲母片岩	南部床上 4cm 破片 29
32 礫	長 20.9 幅 15.0 厚 5.2	河原石。加工の痕跡はなく、左縁に 2 面の剥離面があるのみ。重量 2291.1g。	5Y7/1 灰白 やや緻密 安山岩	南東部ビット底上 11cm 完形 13
33 礫	長 15.0 幅 11.8 厚 5.4	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 1313.1g。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 安山岩	南東部床上 12cm 完形 15
34 礫	長 15.4 幅 8.7 厚 3.0	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 566.8g。	5Y7/2 灰白 粗い(やや多孔質) 安山岩	中央部床直上 完形 23
35 礫	長 15.0 幅 7.5 厚 2.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 498.2g。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 安山岩	西壁溝底上 3cm 完形 33
36 礫	長 12.8 幅 8.2 厚 9.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 572.2g。	N6/ 灰 やや粗い 安山岩	南部床上 1cm 完形 31

SG5 区 SI-25 (第 321 図、写真図版 37・183)

[位置] SG5 区中央西寄りの 13-16 グリッド。同じく古墳中期末の SI-26 が南に近接し、やはり中期末の SI-23 に東北部を切られる。西部に重複する時期不明の P-170 は、写真で西側に見える浅い攪乱溝と関わる可能性がある。

[規模と形状] 東壁が明確ではないが、ほぼ方形であろう。東西推定長 5.09m、南北長 5.18m。中軸線は N-2° -W。確認面が低いため、残存壁高は 2～9cm。床は緩い凹凸があるが、ほぼ平坦である。掘方は床面から深さ 2～14cm で底面に緩い凹凸があり、ローム塊を少量含む明黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

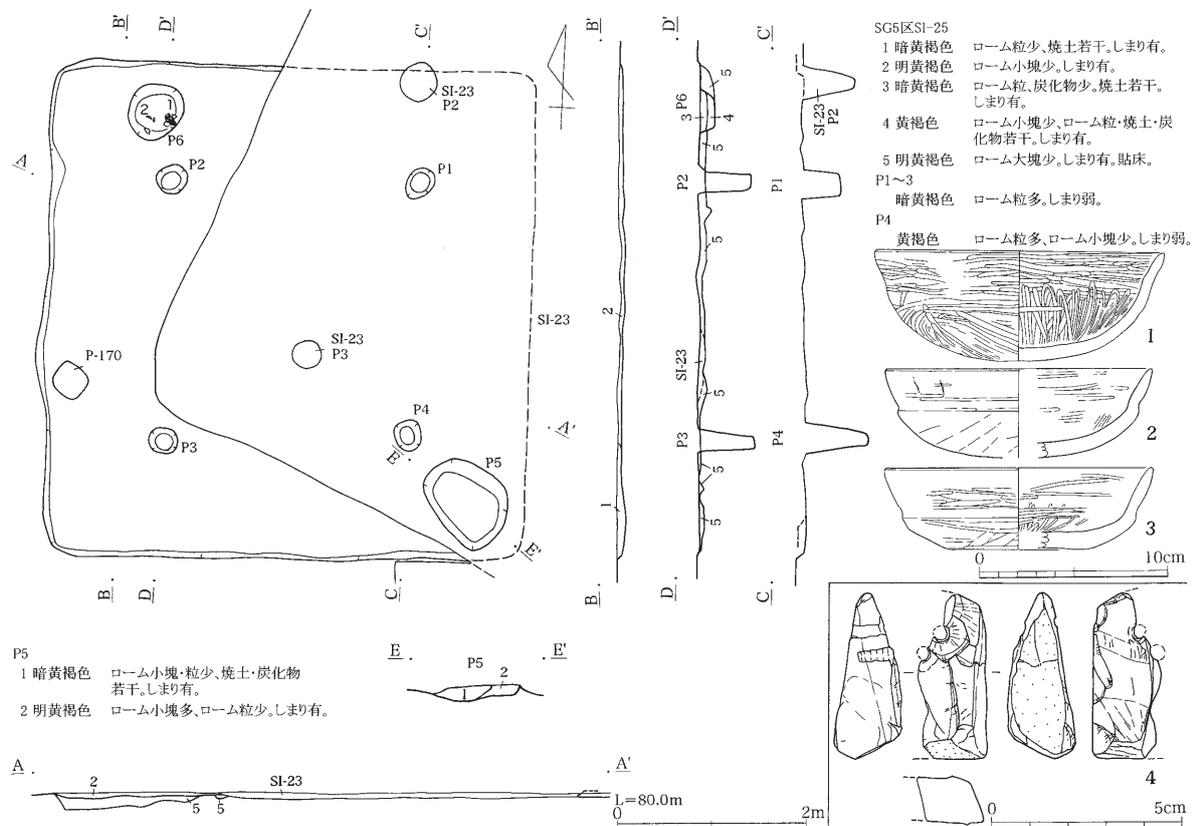
主柱穴 4 本のうち P1・P4 は SI-23 の床下で確認した。P1 は径 35 × 26cm × 推定床から深さ 41cm (SI-23 掘方底から 40cm)、P2 は径 32 × 31 × 深さ 56cm、P3 は径 31 × 28 × 深さ 61cm、P4 は径 33 × 29cm × 推定床から深さ 72cm (SI-23 掘方底から深さ 40cm)。柱間は P1-P2 間が 2.61m、P3-P4 間が 2.55m、P1-P4 間が 2.67m、P2-P3 間が 2.75m でほぼ同様である。

南東隅の P5 と北西隅の P6 が貯蔵穴の可能性はある。P5 は径 96 × 74 × 深さ 15cm の楕円形で、南壁に対し約 45° 斜行する。P6 は 60 × 58 × 深さ 18cm の円形。P5・P6 はほぼ平底で壁は緩く外傾し、覆土に焼土・炭を含む。貯蔵穴が 2 箇所の建物は、SG5 区 SI-11 などがある。調査時には P5 だけを「貯蔵穴」と呼んでいるので、P6 は SI-25 より新しいと考えた可能性もあるが、遺物の時期から P6 が SI-25 に伴うと判断した。

[火処] 確認されなかった。SI-23 に破壊されたとみられる。中期末の建物の通例として、東壁または北壁にカマドを持っていたことが想定される。

[覆土] 土層の残りが薄いので、白色テフラ粒などの有無は不明。南半に 2 層が見られる。

[遺物出土状況] 竪穴の残りが悪いので、遺物はピット内のものである。P6 で、1・2 の他に土師器 (甕壺類胴部と杯体部が各 1 片) が出土した。3 は貯蔵穴出土と注記され、調査時の図面では P6 ではなく P5 を「貯



第 321 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-25 遺構・遺物

蔵穴」と記しているので、P5 から出土している。

【出土遺物】平底の杯は3以外にも破片がある。甑はない。同じく中期末のSI-23に切られるのでそれより古く、中期末（本遺跡編年の4段階）の古相と考えておく。4は穿孔した粘板岩製模造品で、穿孔時に破損した製作失敗品であろうか。後期に多い粘板岩製模造品が中期末に出現する事例かもしれないが、粘板岩破片はこの1点だけで、出土状況も不明なので、後期の混入遺物の可能性も残る。SG5区SI-6（白玉・剥片）などに粘板岩製品があり、粘板岩製模造品はSG10区SI-47などにある。

遺物のごくわずかで、杯（高杯?）・小形壺・壺・甕が同量程度ずつある。図示以外の土師器は合計160片・1,195gで、内訳は杯66片・424g、壺甕類94片・771g。

第183表 権現山遺跡SG5区SI-25出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.2 高 5.8	外面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部横方向のミガキのち体～底部一方のミガキで、体～底部のミガキは一端が1点に収束するような向きに施される。内面ヨコナデのち口縁～体部横方向のミガキのち体～底部放射状のミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒少 やや硬質	P6底上2cmとSI-23覆土が接合 口～体2/5周、底完存 1、SI-23覆土
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.7	外面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ、体～底部ケズリのちナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部は疎らな横方向、体～底部は放射状と見られるが、体～底部は表面の磨滅が著しく、調整不明瞭。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤礫～細粒少、白微 粒微量 やや軟質	P6底上19cm 口～底1/4周 4、貼
3 土師器 杯	口 復 14.2 高 4.3 底 復 7.4	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ・底部ケズリのち口縁～底部光沢のあるナデ。底部は平底で、わずかに浅くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち体～底部やや疎らな放射状のミガキのち口縁～体部疎らな放射状のミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白・黒・赤・砂微粒 少、白・赤礫～粗粒微量 やや硬質	口～底1/6周 貯蔵穴
4 石製模造品 不明	長 残 4.3 幅 残 1.8 厚 残 1.7 重 残 13.5	棒状に残存する粘板岩片。上半には貫通する孔と貫通しない孔があり、いずれかの穿孔により欠損して加工を停止してしまったものと見られる。貫通する孔は表側から穿孔されていると思われる、径は3.0～3.3mm、壁面はやや平滑である。貫通しない孔は径3.1～3.3mmで、壁面は穿孔時の工具痕と見られる円周方向の凹凸が明瞭。右側面と下面は節理面、下面は裏面図下方からの打撃による剥離面が大きく残る。表面は主に左方向からの剥離面が認められるほか、孔の周囲は穿孔に伴って円形に剥離している。左側の欠損面も含め、突出した部分がやや磨滅している。	7.5YR3/1 黒褐 緻密 粘板岩	破片

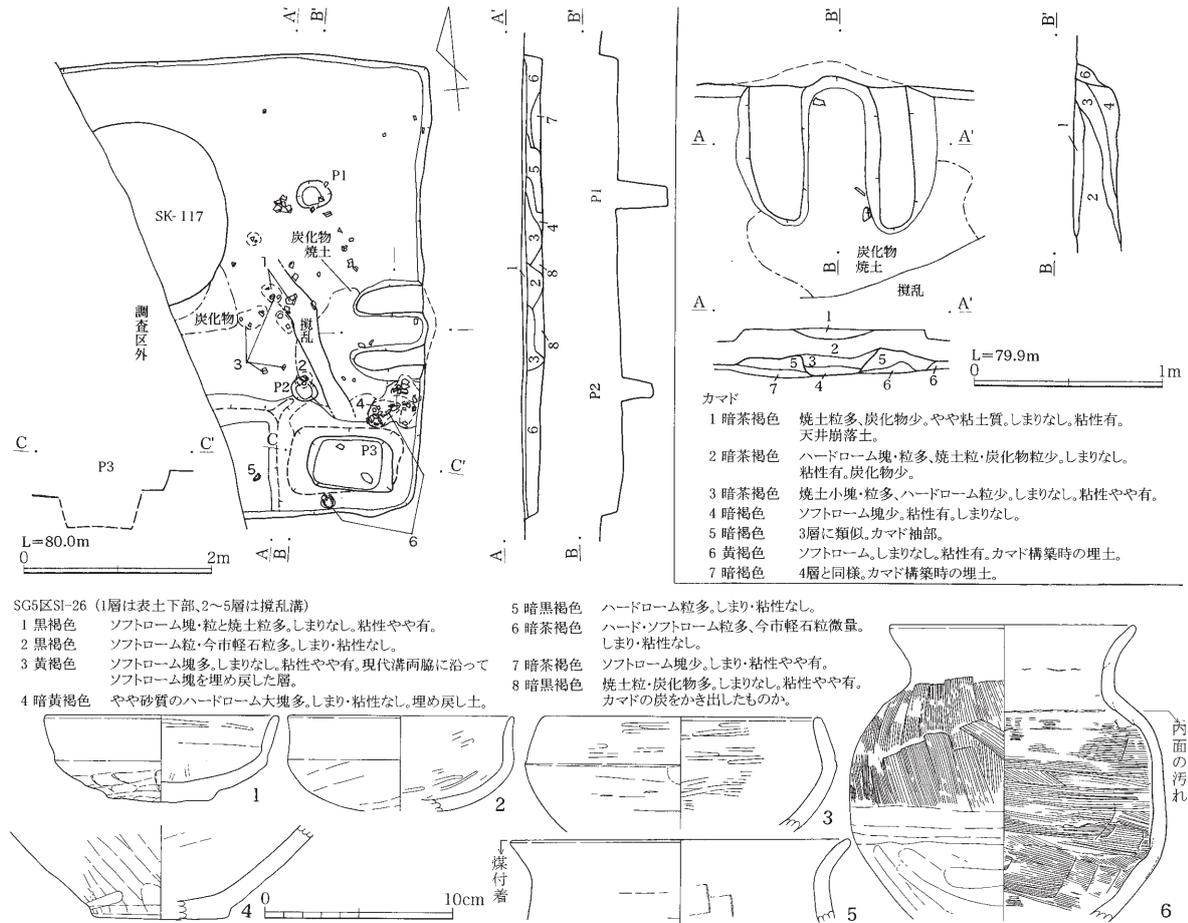
SG5区SI-26（第322図、写真図版37・38）

【位置】SG5区中央の12-16、13-16グリッド。同じく古墳中期のSI-25が北側に、時期不詳のSI-99が東に近接する。西半は調査区外。中央北側を時期不明のSK-117に切られる。

【規模と形状】ほぼ方形と推定され、中軸線はN-4°-E、南北長4.88m。東西長は調査部分からみて3.91m以上で、本来は南北長とほぼ同様と思われる。壁は外傾し、残存高16～21cm。掘方の図や写真はないが、貼床を施していたことが、掘方完掘写真から判断できる。床はほぼ平坦で傾斜しない。南壁に接して東西90cm以上×南北125cmの方形に巡る帯状の高まりが、南東支柱穴P2へ延びる。幅20～35×高さ約3cmのわずかな高まりで、ロームを主とした土である（現地で記録した図に不明な点が多いため、写真から判断した）。

支柱穴は東側の2本を確認し、本来は4本支柱と考えられる。P1は径30×35×深さ54cm、P2は径24×28×深さ34cmで、P2はやや浅い。P1-P2間は2.06m。南東隅の貯蔵穴P3は東西軸の長方形で89×51cm。P3の深さは現地計測値に誤りがあるので不明だが、写真から推測すると床面から深さ30cm程度。P3の底面レベル値がちょうど30cm誤っていると推定して断面図C-C'を作成した。写真からP3周囲の傾斜を判断すると、P3の周囲は南東部を除き10～20cmの幅で、床面から3～5cmの深さでなだらかに浅くなる。

【カマド】東壁中央南寄りにある。天井は崩れ、残りは悪い。両袖幅105cm、煙道先端から焚口まで82cm。カマド部の掘方をさらに5cmほど掘り窪め、黄褐色・暗黄褐色の6・7層を埋め戻した上に、暗褐色土の袖基部が5～10cm残る。焼土も目立つ。火床はほぼ平坦で、奥壁寄りに炭や焼土を含まない4層、天井内壁に関わる焼土塊が多い3層、天井が流れた1・2層が堆積する。煙道は壁外に出ないで、先端は垂



第 322 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-26 遺構・遺物

直気味。

現地調査時の図面では5層より上に袖が残っていると観察・図化した。しかし、カマドの流れた覆土(2層)に過ぎないとカラー写真から判断して、写真を参考に横断面図と平面図を大幅に修正した。

[覆土] 1~5層は表土と攪乱で、6・7層が覆土である。中央床面直上に焼土・炭化物の多い8層が堆積する。カマド前面に焼土・炭化物を多く含む範囲が、カマドから流出した土層と推定される。

[遺物出土状況] カマド南側では床付近(4~6)、竪穴中央部では床よりやや浮いた位置に遺物が多い(3)。1は中央部でも床近くで出土した。2は柱穴で出土した。6は南壁のすぐそばで床面に正位で置いてある。

[出土遺物] 橙色の緻密な胎土が主体だが、1と5は色調がやや異なる。1は杯底部が削り足らないので突出底状。甕(5)の外面に付く煤は、カマドよりも炉で使用した場合に多い。6は内面全体に黒色物質が付き、中身の貯蔵物に由来すると思われる。遺物量は少なく、杯と壺甕類が主体で、高杯も少し入る。明確に長胴甕や大形甕とわかる破片はない。図示した以外に球胴の甕破片が多くあるが接合・図示できず、4や5の胴部とも思われるが確実ではない。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計158片・2,423gで、内訳は杯40片・215g、高杯2片・63g、壺甕類115片・2,141g、焼粘土塊1点・4g。

第 184 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-26 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復12.3 高 4.6 底 5.7	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのうち中央付近のみヘラナデ。胴部下端には、指頭圧痕残る。底部は乱雑なケズリであり、突出した平底だが凹凸が著しい。内面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ、体~底部は表面の磨滅が著しいが、おそらくミガキが施されていたものと見られる。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白糜~細粒と赤粗~細粒 微量 やや軟質	中央部床上1~2cm 口~体1/3周、底一部 欠 14、15

2 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 5.0	内外面とも細かなクレター状に表面が剥落しているため、調整不明な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、体部丁寧なナデ、内面口縁～体部は円周方向のミガキと見られる。	2.5YR6/8 橙 緻密 白・赤粗～細粒微量 やや軟質	P2 底上 13cm逆位 口～体 1/3 周 8
3 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 6.1 最大 16.2	深身・大形。外面口縁部ヨコナデ、体部丁寧なナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向のミガキ。内面は細かなクレター状に剥落しているため、調整不明な部分も多い。	5YR5/8 明赤褐 緻密 赤細粒と白・黒微粒少 やや軟質	中央部床上 2～19cm 口～体 1/3 周 9、10、11、14
4 土師器 甕	高 残 5.0 底 復 7.4	外面胴部下端丁寧なナデ、底部ケズリで、突出した平底だが、胎土中の礫に当たって、平坦にしきれない部分あり。内面胴部下端～底部ナデ。内面クレター状の剥落が著しい。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒多、砂礫 微量 やや硬質	東部床上 4cm 胴下端～底 1/3 周 4、貯
5 土師器 甕	口 復 17.8 高 残 4.5	外面口縁～胴部上端ヨコナデ、内面胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。外面口縁～胴部上端煤付着。	10YR8/2 灰白 やや緻密 黒細粒少、白・黒粗 粒と白細粒微量 やや硬質	南部床直上 口 1/3 周 30
6 土師器 甕	口 復 13.0 高 残 15.5 最大 16.6	橙色、緻密な胎土。外面胴部上半 10本/1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下半ナデ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、外面ではわずかな段差と器形の角度の変化として残る。内面口縁部ヨコナデ、胴部 10本/1cmのハケ。胴部下半の接合面は粘土の接ぎ目として残る。胴部上半縦積痕あり。胴部内面全体的に黒色物質付着。	5YR7/8 橙 やや緻密 赤礫～細粒少、白・ 黒・砂細粒微量 やや軟質	南壁際 6cmと東部床上 4 cm 口 1/2 周、胴ほぼ完存 1、4

SG5 区 SI-28 (第 323 図、写真図版 38)

【位置】 SG5 区中央南寄りの 12-16・17 グリッド。SI-29 とともに最も南に位置する竪穴建物である。北東隅が古墳中期の SI-29 の北西隅を切る。時期不明の SB-159 と重複する。SI-28 の貼床層に SB-159 柱穴が覆われていないので、SB-159 が SI-28 を切る可能性が高い。

【規模と形状】 ほぼ方形と推定され、東西 6.25 × 南北 6.00m、中軸線は N-18° -E。残存壁高は 7～10cm である。床面は平坦で、傾斜しない。掘方は床面から深さ 2～12cm で、底面に緩い凹凸があり、ローム粒・塊が多い暗黄褐色土でほぼ全体を貼床する。

主柱穴は P1～P3 以外に南西にも推定され、4 本主柱と考えられる。P1 は径 36 × 40 × 深さ 63cm、P2 は径 34 × 37 × 深さ 61cm、P3 は径 32 × 36 × 深さ 49cm。なお、貼床下で P3 の東側に重複するように径約 30cm、深さ不明のピットを確認した。柱間は P1-P2 間が 3.66m、P1-P3 間が 3.61m で、方形配置と考えられる。

北東隅の貯蔵穴 P4 は東西軸の楕円形で 42 × 88 × 床面から深さ 23cm。平底で、壁がゆるく上がる。P4 の覆土各層に炭・焼土を含み、1 層にカマド側から粘土も流入している。P4 の底面中央に柱穴状の掘り込みが附属する。調査時には時期不明遺構「SB-158」のピットと考えたが、土層からみて SI-28 貯蔵穴に伴うと判断できる。調査時に SB-158 南辺柱穴とされた柱穴は、SI-28・29 の柱穴と考えて帰属を変更した。

貼床除去後に確認した北東部の P5 は、南北にやや長い楕円形で 65 × 89 × 床面から深さ 12cm。床面に開口していた穴を、ローム塊の多い貼床で埋め戻したと考えられる (断面 A-A')。P5 を旧期貯蔵穴とみるには、やや浅くて位置が不自然な点に疑問もある。貯蔵穴を 2 箇所持つ竪穴は、SG5 区 SI-11 などがある。

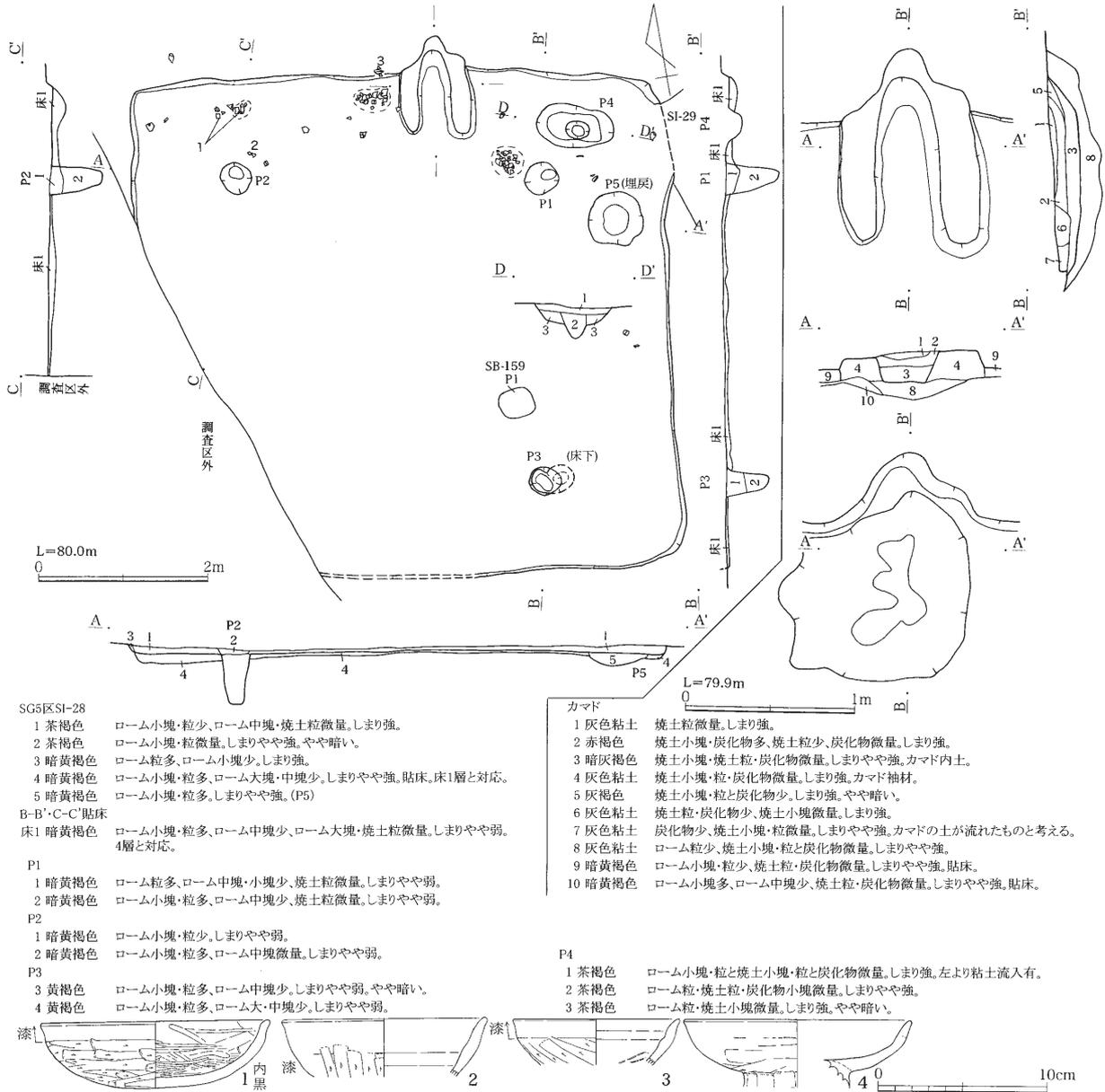
【カマド】 北壁中央の東寄りにある。両袖幅 88cm、煙道先端から焚口まで 123cm。灰色粘土主体の 4 層で袖を作る。火床面から煙道部は掘方に灰色粘土を貼る。火床上には、炭多量と焼土少量を含む流入土 3 層の上に、天井が崩れた粘土塊が多い 1・2 層が堆積する。煙道先端は、北壁より 25cm ならだかに突出する。

【覆土】 大半は 1 層で、P2 上方に 2 層がある (断面図 A-A')。西壁近くの 3 層はロームが多い壁崩落土。

【遺物出土状況】 主に北部で出土した。カマド西側の床付近と、北東主柱穴 P1 の北西側貼床中で、それぞれ長胴甕が破片化しているが、復原・図示できなかった。

【出土遺物】 遺物は少ない。図化した遺物以外は小破片である。甕が主体で、長胴甕片が比較的多く、1～2 個体分とみられるが、接合・復原できなかった。杯も多く、半球形杯が主体で漆仕上げと炭素吸着黒色処理の両者がある。1 は内面黒色処理と漆仕上げの両方を用いた可能性がある。小さな杯 (2・3) を含む点からは古墳時代終末期と考えられるが、1 はやや深身で、また黒色処理+磨き調整の少し変わった杯で、4 の高杯もまだ小型化していないので、古墳後期末の可能性もある。中期後葉～末の遺物も混入している。図示以外の土師器は合計 278 片・2,610g で、内訳は杯 69 片・485g、鉢 9 片・289g、壺甕類 200 片・1,836g。

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 323 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-28 遺構・遺物

第 185 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-28 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.4 高 残 3.9	外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリ。底部のケズリではクローラー状に段差が生じている。内面口縁部ヨコナデのち体～底部ナデのちミガキ。ミガキはやや疎らで、基本的に円周方向に施される。内面全体黒色処理だが、外面口縁部と内面の一部に黒色の塗膜状のものが認められるため、漆仕上げの可能性もある。	2.5Y5/1 黄灰 緻密 白・赤細粒微量 やや硬質	北壁際 13～14cm 口～体 1/4 周、底完存 20、22
2 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.4	精良な胎土。外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。内外面口縁～体部漆仕上げ(残存部全体)。	5YR7/6 橙 緻密 赤細粒と白微粒微量 やや硬質	P2 周辺床直上 口～体 1/4 周 5
3 土師器 杯	口 復 9.8 高 残 2.7	外面口縁部ヨコナデのち体部丁寧なケズリ、内面口縁～体部ヘラナデのちヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。漆は口縁部内外面に良く残る。	7.5YR7/6 橙 緻密 赤粗～細粒と白細～微粒 と・黒微粒微量 やや硬質	北壁床上 10cm 口～体 1/4 周 24
4 土師器 高杯	口 復 13.4 高 残 4.0	短脚高杯。外面杯部口縁部ヨコナデ、体部ナデ、脚部上端ヘラナデ。内面口縁～体部丁寧なヨコナデ、体～底部表面剥離のため不明。内面ミガキの可能性あり。口縁部内画面一部に黒色物質付着。漆仕上げの可能性あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と砂粗～ 微粒微量 やや軟質	杯口～底 1/6 周

SG5区 SI-29a・29b (第324・325図、写真図版39・183・184)

[位置] SG5区中央南寄りの12-17グリッドにあり、SI-28とともに最も南に位置する竪穴建物。P-255 → SI-29(b → a) → SI-28・(SB-159?)の順で、東辺で時期不明のP-255を切り、古墳後期末のSI-28に北西隅が切られる。時期不明のSB-159柱穴が(SI-29a・bの貼床に覆われないので)SI-29を切る可能性が高い。現地調査時名称はSI-29で、新建物にSI-29a・旧建物にSI-29bの名称を整理作業時に与えた。

[規模と形状] a・bともに方形で南北5.63×東西5.53m、中軸線はN-25°-W。壁は外傾し、残存高8～20cm。床はほぼ平坦で東部が少し低い。掘方平面図はないが、断面A-A'と掘方写真からみて貼床を施している。

支柱穴P1～P4に旧(b期)と新(a期)があり計8本。P4旧は床下で確認した。

P1旧=径25×32×深さ34cm、P1新=径31×33×深さ27cm。P2旧=径32×36×深さ51cm、P2新=径25×27×深さ42cm。P3旧=径28×34×深さ40cm、P3新=径35×43×深さ60cm。P4旧=径27×32×深さ34cm、P4新=径20×23×深さ37cm。

柱間は旧期(b期)でP1-P2間が2.06m、P3-P4間が2.10m、P1-P4間が2.33m、P2-P3間が2.32m
新期(a期)でP1-P2間が2.66m、P3-P4間が2.61m、P1-P4間が2.80m、P2-P3間が2.69mである。貯蔵穴に新旧があり、P3の新・旧柱穴が重複することから、旧建物SI-29b(柱間東西2.1×南北2.3m)から新建物SI-29a(柱間東西2.6×南北2.7～2.8m)へ拡張したと推定できる。

床面が高い西壁及び南壁際で確認した壁溝D1は、幅19～20cm・深さ8～10cmの断面U字状である。床下で確認した間仕切溝2本は、西側のD2と南側のD3である。P3(新・旧)と西壁溝に繋がるD2は長108×幅13～19cm、掘方底面での深さ10cm。南壁溝に繋がるD3は長110×幅14～28cm、掘方底面での深さ10cm。

貯蔵穴は、北西隅のP5と南東隅のP6を確認した。いずれも覆土のしまりが弱い。床面で確認したP5は76×98×床面から深さ28cmの南北に長い楕円形で、やや丸底気味で壁が緩く、周辺に遺物がない。P6は南北にやや長い円形で85×99×床レベルから深さ32cm(床下から深さ28cm)。貼床除去後に確認したP6は調査時に旧期(SI-29b)の貯蔵穴と考えたが、P6外側周辺の破片と接合する5・18などの流入遺物があり、覆土がレンズ状自然堆積で竪穴覆土3・4層と同じ焼土・炭を含み、写真でも床面にP6の黒色覆土を確認できるので、新期(SI-29a)の貯蔵穴に用いたであろう。a・b期ともに2基の貯蔵穴を持つか、P5が旧期(b期)でP6が新期(a期)の可能性もある。貯蔵穴を2箇所持つ竪穴は、SG5区ではSI-11などがある。

[火処] 確認されなかった。

[覆土] 確認できるのはSI-29aの覆土で、北側からの流れ込みが観察される。3層に炭化物が多い。

[遺物出土状況] 建物北部では床よりやや浮いたレベルに遺物が多く、南東部貯蔵穴P6周辺では床面付近に多い。貯蔵穴P6埋土上面に残存度の高い甕(17)、貯蔵穴内に砥石(22)がある。貯蔵穴P6の北東側に白色粘土があり、貯蔵穴内で出土した高杯杯部(6)の外側にも粘土が付着している。貯蔵穴P6南東の床面では高杯杯部と杯が上を向く(3・4)。P6の北側では口縁部を欠損した小形甕(15)が正位で床付近にあり、その北側で高杯脚部が横転している(10)。南壁近くに逆位の杯(1)と高杯杯部(5)が並び、5破片は貯蔵穴付近にも分布する。北東支柱穴P1の南側で、P1旧期柱穴の跡地が窪んだ部分に粘土と壺(18)の底部を入れて据え置き、壺の上部が破片化して周囲に広がっていた。P1-P2間の北側にも大形壺(19・20)があり、19の胴部は接合図示できなかった。

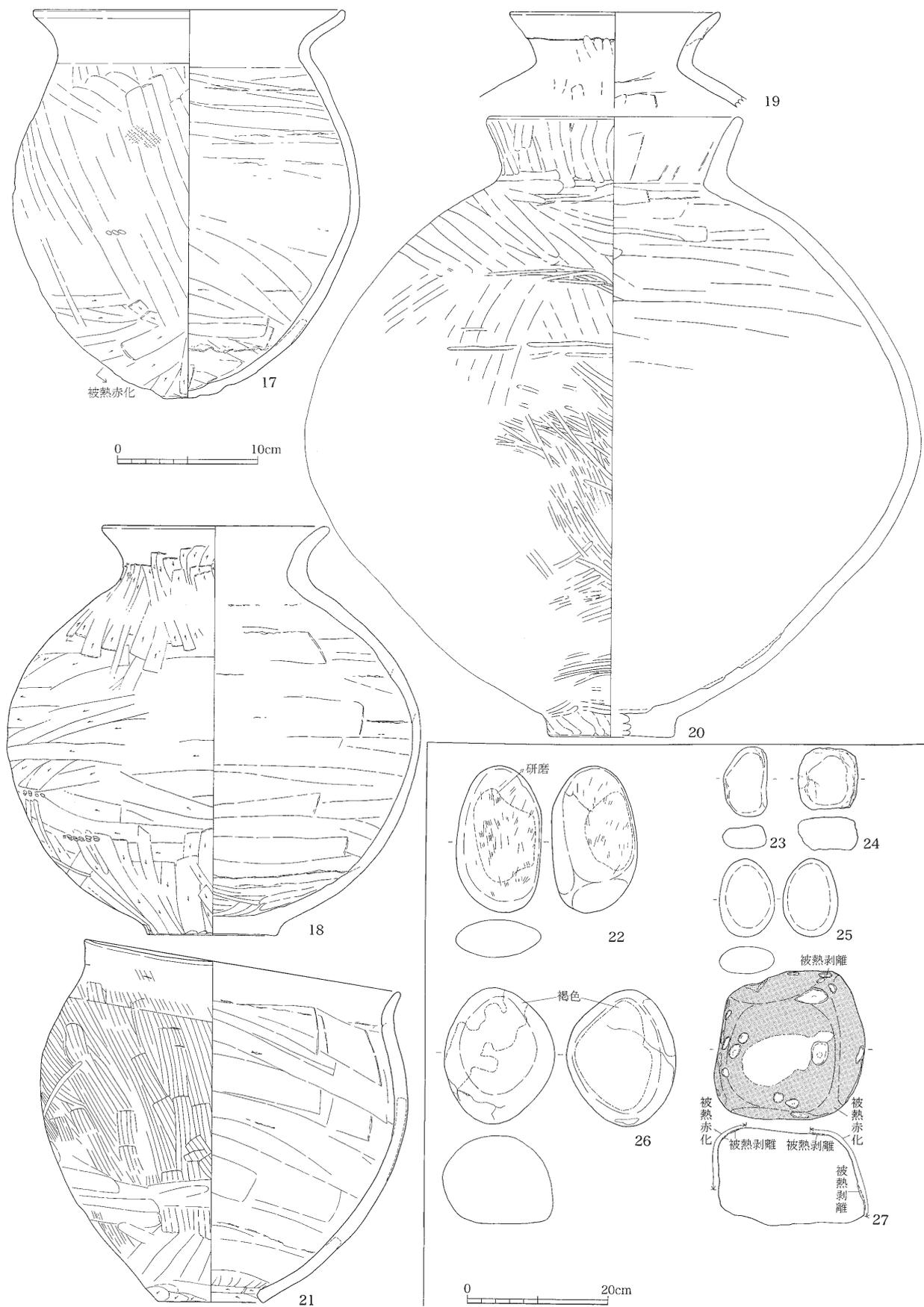
[出土遺物] 遺物はSI-29aに伴う。量が多く壺甕類が主体で杯・高杯も多い。図示以外の高杯は小破片ばかりである。6は杯部内面中央に黒色物質が均一に着く。15は被熱使用痕のある小形甕。17は丸底状に削る。底が凸面状の甕はSG10区SI-16他にある。17には織物痕があり、胴部を布ナデ調整したと考えられ

る。17や壺胴部下半に縄圧痕がある甕(18)はSG10区SI-47など、貼付口縁の壺(19)は5区SI-100などにある。21は出現期の大型甕で、大型甕のハケ調整はめずらしい。ホルンフェルスの砥石(22)は、SG5区ではSI-7などにある。27は被熱して表面が浅く剥離した礫で、鉄錆や鍛造剥片がないので、SG10区SI-36・106にあるような金床石ではない。

図示以外の土師器と焼粘土塊は合計198片・2,836gで、内訳は杯30片・253g、高杯13片・172g、壺甕類154片・2,401g、焼粘土塊1点・10g。古墳中期後～末葉の土器も少し混入している。

第186表 権現山遺跡SG5区SI-29a出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.2 高 4.7 底 5.5 最大 12.6	整形が甘く、歪みあり。外面口縁部軽いヨコナデ、体部無調整で、整形時の荒いナデと指頭圧痕が残る。体部下端光沢を持つケズリ。底部軽いケズリが施されるのみであり、細かな粘土の敷が残る。平底で、わずかに中央がくぼむ。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部光沢を持つケズリ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒少、白細粒微 量 やや硬質	南壁際床直上 完形 1
2 土師器 杯	高 残 2.8 底 1.8	外面体部ケズリのち密なミガキ。底部ケズリのちわずかにミガキであり、全体が浅くくぼむ。内面体～底部密な多方向のミガキ。ミガキは体部のち底部。	5YR6/6 橙 緻密 白微粒少、赤・灰色礫微 量 やや硬質	床土 5cm 体～底 1/2 周 66
3 土師器 杯	口 復 14.1 高 6.3 底 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部端部が荒れたヘラによるケズリであり、目の粗いハケのようにも見える。底部はケズリが四方に施されるため方形の平坦となる。体部無調整。内面口縁部ヨコナデ、体部丁寧な横方向のナデのち底部ヘラナデ。口縁部内面の下側に粘土接合痕を残す部分あり。	10YR7/8 黄橙 やや緻密 白微粒少、白細粒微 量 やや硬質	南東壁際床直上 口～体 3/5 周、底完存 3
4 土師器 高杯	高 残 4.9	外面杯部体～底部 5本/1cmのハケのち底部～脚部縦方向のケズリのち体～底部横方向の疎らなミガキ。杯部底部は明瞭な稜を持つ。内面杯部体部 4本/1cmのハケのち底部ヘラナデのち多角形状の疎らなミガキ。脚部上端ナデ。内面のミガキはやや乱雑。内外面ともミガキがハケを消せていないところが多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・半透明粗粒と赤 粗～細粒少、砂礫微量 やや硬質	貯蔵穴付近床直上 杯体～底完存 4
5 土師器 高杯	口 復 17.0 高 残 6.8	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデ・底部～脚部縦方向のケズリのち口縁～底部縦方向のやや疎らなミガキ。底部に及ぶミガキは少ない。内面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～底部ミガキ。ミガキは乱雑で多方向であり、底部は密に施される。下端は接合面から欠損しており、その状態から、杯部底面中央を突出させて脚部と接合させたものと見られる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白粗 粒少 やや軟質	南部壁際床直上と貯蔵穴 内と東側にも破片あり 杯口～体 1/3 周、底完 存 2、29
6 土師器 高杯	口 復 22.0 高 残 5.3	外面口縁部横方向・体部縦方向のケズリのち口縁部横方向・体部縦方向の疎らなミガキ。内面口縁～体部横方向のケズリのち多方向の乱雑なミガキ。口縁部は、外面端部上方、外方ともケズリにより面取りされるほか、内面も体部との境にわずかな段差を持つようにケズリが施される。内面段差の上方はわずかにくぼむ。外面体部に白色粘土少量付着。内面体部に黒色物質付着。蓋などに転用か。	7.5YR7/8 黄橙 やや粗い 白・砂粗～細粒多、 赤粗～細粒少 やや硬質	貯蔵穴内 杯口～体 1/4 周 29
7 土師器 高杯	口 復 21.0 高 残 6.3	外面口縁部横方向のケズリ・体～底部縦方向のケズリのち口縁部横方向のミガキ・口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。口縁部端部のミガキが施される部分は外向きの平坦面に面取りされる。内面口縁～底部横方向のケズリのちミガキ。ミガキは比較的密で、口縁～体部は乱雑な放射状主体、底部は横方向。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 灰色礫～粗粒と白礫 ～細粒と赤粗～細粒少 やや硬質	東部床直上 杯口～体 1/3 周、底一 部 9
8 土師器 高杯	口 復 20.3 高 残 5.5	外面口縁部ヨコナデのち口縁～体部縦方向のミガキ。内面体部ケズリのち口縁部ヨコナデのち口縁～体部ミガキ。内面ミガキはやや乱雑だが、おおむね放射状。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と灰色粗 粒少 硬質	東壁際床土 6～14cm 杯口～体 1/3 周 6、7
9 土師器 高杯	高 残 12.7 脚 14.1	外面杯部体部下半横方向のケズリ・底部縦方向のケズリのち体～底部縦方向の密なミガキ。脚部下端ヨコナデのち全体縦方向のナデのち縦方向の密なミガキ。内面杯部体～底部は残存部全体の表面が剥落しているため調整不明。脚部上半ナデ、下半ヘラナデのちヨコナデ。調整方法はやや異なるが、10の高杯と同様に、脚部内面は丁寧に調整される。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、砂粗 粒微量 硬質	東壁際床土 8cm 杯体～底一部、脚完存 8、表採 17.5-12.5
10 土師器 高杯	高 残 9.2 脚 復 15.0	柱状脚。外面脚柱部～下半縦方向のケズリ・下端ヨコナデのち脚柱部～下半縦方向の密なミガキ。内面脚部下半ヨコナデのち脚柱部ケズリ。ケズリは脚柱部上端まで丁寧に施される。	10R6/8 赤橙 やや緻密 砂粗～細粒多、砂礫 微量 やや硬質	東部床直上 脚柱完存、脚下半 3/4 周 12
11 土師器 小形壺	口 復 6.4 高 残 9.9 底 3.2 最大 10.4	器高は10cmに復原できる。外面口縁部ヨコナデのち縦方向のミガキ。体部上半ナデのち体部下半～底部ケズリのち体～底部密なミガキ。底部は小さく、全体が浅くくぼむ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。体部上半ナデで、組積痕が顕著に残る。体部下半ヘラナデ、底部ナデ。内面体～底部は黒褐色を呈する。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、黒 粗粒少 硬質	中央部床土 2～3cm 口 1/4 周、体～底完存 60、76、77
12 土師器 鉢	口 復 16.7 高 残 10.6 最大 17.6	外面体部ヘラナデのちミガキ、頸部無調整。口縁部内外面ヨコナデ、内面体部ヘラナデのちミガキ。ヘラナデが組積の痕跡を消せていないためにミガキが施されない部分あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、赤礫 微量 硬質	中央部床土 7cm 口～体 1/4 周 32
13 土師器 甕	高 残 3.7 底 6.8	外面胴部下荒いナデのち縦方向の粗いヘラナデ。ヘラの端部を当てているためか、深い沈線状になるところがある。底部ナデで、中央がくぼむ突出底。内面胴部下～底部ヘラナデ。底部付近は、胴部との間にわずかな段差を持って一段低くなる。外面底部付近のみ黒色物質付着。内面胴部下～底部クレーター状の剥落著しい。内面胴部下黒色で、内面底部中央の径7cmの範囲のみ焼成時または使用時の被熱で褐色となる。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・砂粗粒少、砂礫 ～細粒微量 やや硬質	北西部床土 4～8cm 胴下端～底完存 79、106
14 土師器 甕	高 残 2.2 底 6.6	胴部下端～底部ケズリのち胴部下端一部ナデ。底部ケズリは基本的に一方のみ。底部全体的にくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。内面は、胎土も含め、黒色となっている。	5YR4/8 赤褐 やや粗い 砂礫多、砂粗粒 少、白礫微量 硬質	東部床土 3cm 底 2/3 周 10



第 325 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-29a・b (2) a期遺物

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

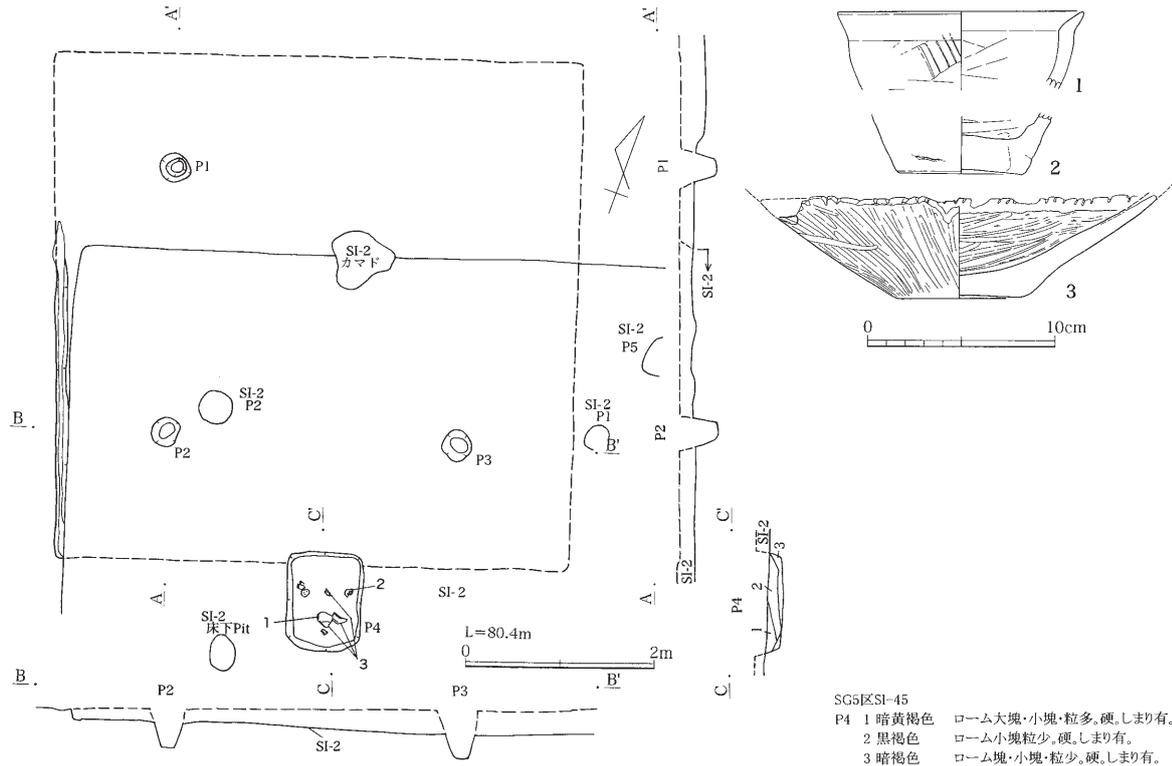
15 土師器 甕	高 残 12.4 底 7.0 胴 16.0	小形・球胴。外面胴部上半 13 本 /1cmの細かなハケのち口縁部ヨコナデ・胴部中位～下半縦方向のナデのち胴部下端ケズリのち胴部下半中心に横方向の幅広いミガキ・底部ケズリのち一部ミガキで、ドーナツ状に中央のみ浅くくぼむ。内面口縁部 13 本 /1cmのハケのち疎らなミガキ。胴部上半横方向のヘラナデのち胴～底部縦方向のヘラナデのち縦方向の疎らなミガキ。縦方向のヘラナデとミガキは放射状に長く施されている。ヘラナデの一部は 13 本 /1cmのハケであるように見られるところもあるため、外面のハケと同様の工具での調整の可能性がある。外面胴部一部煤付着、外面底部付近被熱のため赤変。	7.5YR5/3 にぶい褐 やや緻密 白微粒多、砂粗～細粒少 やや硬質	東部床上 1cm 胴～底一部欠 34、11
16 土師器 甕	口 復 17.2 高 残 15.6 最大 復 28.2	外面胴部上半～中位ナデ、内外面口縁部ヨコナデ、内面胴部強いナデで、上半に粗積痕顕著。下端は積み上げ休止による接合面から欠損している。内外面とも被熱により赤変している部分あり。内面は被熱のためか剥落が著しい。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白微粒多、白礫と砂 細粒少、赤粗～細粒微量 やや軟質	北部床上 6～13cmと P2 周辺床上 6cm 口～胴中位 1/4 周 80、81、82、83、84、92
17 土師器 甕	口 21.9 高 27.6 最大 24.3	緻密な胎土。外面胴部下半～底部ケズリのち胴部上半～中位丁寧なナデ。底部は乱雑なケズリのためいびつな丸底状であり、中央にわずかな平坦面がある。胴部上位に 10 本 /cm程度の織物圧痕が焼成前に付き、布でナメナデしたと考えられる。底部上約 12cmの胴部には、1 段 L の縄らしき縄文の圧痕がある。18に見られたもの同一の可能性あり。口縁部内外面ヨコナデ。端部はやや内彎し、外面に面があるように整形される。内面胴部はヨコヘラナデで、底部上 10～18cm付近で表面の剥落が著しいのは使用によるものか。底部上 6cm付近には積み上げ休止による接合面があり、内面で粘土の継ぎ目として痕跡が残る。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・砂粗粒少、赤粗粒微量 やや硬質	貯蔵穴付近の床直上 ほぼ完形 5
18 土師器 壺	口 16.0 高 29.0 底 9.2 最大 29.0	外面口縁部ヨコナデ・胴部中位～下半横方向の強いケズリのち胴部中位横方向の丁寧なケズリのち頸部～胴部上半・胴部下半縦方向の丁寧なケズリ。胴部中位～下半には、部分的に 2 段 LR の縄の圧痕がある。底部はケズリで、外周寄りに棒状工具によるナデが残る。突出する平底。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデ。胴部下半に積み上げ休止による接合痕あり。外面胴部中位部分的に煤付着。外面胴部下半～底部はおそらく焼成時の被熱で赤褐色を呈する。内面胴部～底部は黒褐色。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白礫～細粒多、黒・透明細粒と白微粒少 硬質	西部床直上、P6 内、中央部床直上～2cm、東部床上 3cm 口～胴一部欠、底完存 24、29、57、58、59、60、61、62、63、64、105
19 土師器 壺	口 復 14.8 高 残 6.8	外面口縁部上半ヨコナデ、口縁部下半～胴部上半縦方向のナデ。胴部はミガキの可能性あり。口縁部は粘土貼付けによる複合口縁。内面口縁部はヨコナデと思われるが、全体的に細かなクレーター状に剥落するため調整不詳。胴部上半強いナデ。胎土は灰白色だが、被熱のためか内外面の表面は赤変している部分が多い。	10YR8/2 灰白 やや粗い 赤粗粒と細砂粒少 やや軟質	中央部床上 3～12cm 口～胴上半 1/6 周 62、63、73、74、79、80、81、82、91、92、94
20 土師器 壺	口 復 17.5 高 43.0 底 残 9.2	底面は円板状に 15mmほど突出し、外底面を 1 方向ヘラケズリ。外面胴下端ユビオサエ、胴下半ナデ後ヘラミガキ、胴上半ナメヘラナデ後に主に胴中位をヘラミガキ。外面口縁部タテヘラナデ後に口～頸部を軽くヨコナデ。内面は胴部がヨコヘラナデと思われるが、下半部は磨滅と剥落で調整不詳。内面口縁部ヨコヘラナデ後に軽いナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・透明細粒やや多、黒細粒微量 やや軟質	中央部床上 2～7cm 口完存、底 2/3 周 61、62、73、75、80、81、81カ
21 土師器 甕	口 22.5 高 25.5 底 7.4 最大 25.8	外面胴部下半荒いナデのち胴部 3 本 /1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下半ナデ・胴部下端ケズリ。内面胴部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ・底部ケズリ。上半の歪みが目立つ。積み上げ休止による接合面は底部上約 4.5～7cm、19.5～21cmの 2ヶ所ある。下方は外面に段差となって残り、これを消すようにナデが施される。上方のものは表面に痕跡は残さないが、これより上では下半の胎土とは異なる黄褐色の強い精緻な胎土が使用される。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗粒と細砂粒少、黒・透明細粒微量 やや軟質	貯蔵穴内 ほぼ完形 29
22 石器 砥石	長 20.6 幅 11.9 厚 6.2 重 2074.8	河原石。偏平な楕円形で、研磨面の様子から上下両端を除くほぼ全面が使用されたと見られる。このうち表裏両面の比較的平坦な部分が特に研磨されている。使用によると見られる細かな擦痕は、特に研磨される面を中心に確認できる。方向はほぼ砥石の長軸に平行しており、この方向に使用されたことがわかる。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	P6 内 完形 109
23 礫	長 9.8 幅 6.2 厚 3.4	河原石。特に加工の痕跡なし。上端の表面が荒れているが、敲打によるものとは見られない。重量 311.3g。	2.5Y7/2 灰黄 緻密でチャート起源のホルンフェルス	北部床直上 完形 65
24 礫	長 8.5 幅 8.4 厚 4.5	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 615.8g。	10BG5/1 青灰 緻密でチャート起源のホルンフェルス	東壁付近床上 2cm 完形 16
25 礫	長 11.0 幅 7.7 厚 3.9	河原石。特に加工の痕跡なし。重量 390.5g。	2.5Y7/3 浅黄 やや緻密 安山岩	北部床上 9cm 完形 48
26 礫	長 19.2 幅 15.4 厚 12.9	河原石。特に加工の痕跡なし。球状で、裏側は平坦。表裏面ともに褐色に変色した部分が多いが、被熱によるものかどうかは判別できない。重量 5750.0g。	2.5Y7/3 浅黄 緻密 安山岩	P1(新) 付近床上 3cm 完形 56
27 礫	長 21.1 幅 20.6 厚 14.0	方形の大形の礫。河原石で、特に加工の痕跡なし。表側と側面は被熱により赤変しており、「焼けハジケ」も見られる。裏側全面と、表側中央部分には被熱の痕跡がない。重量 9850.0g。	5GY6/1 オリーブ灰 粗い 礫岩	東部床直上 ほぼ完形 35

SG5 区 SI-45 (第 326 図、写真図版 39・184)

[位置]SG5 区北部の 19-15・16 グリッド。周囲に後期の SI-1・3・4 があり、東方には SG10 区の建物群がある。土層断面では確認できていないが、南半を古墳後期の SI-2 に切られる。

[規模と形状] 削平を受け不明確だが、主柱穴配置からみると平面方形に近い。一辺 5.5m 前後と推定される。中軸線は N-28° -W。壁・床面・貼床は削平されて残っていない。

主柱穴は 3 本確認したが、本来は北東にも存在し、4 本主柱と推定する。P1 は径 32 × 30 × 深さ 22cm(床



第 326 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-45 遺構・遺物

第 187 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-45 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 4.1	内斜口縁。外面体部ヘラナデのち横方向の軽いナデ。ヘラナデによるクローラー痕が残る。口縁部内外面ヨコナデ、内面体部ナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白微粒 少 やや硬質	P4 底上 2cm 口～体 1/6 周 2
2 土師器 小形土器	高 残 3.3 底 復 6.6	鉢形と見られる。全体に整形が甘い。外面体～底部ナデと見られるが、表面磨滅のため不詳。底部は厚くしっかりした平底で、浅くくぼむ。内面体～底部強いナデで、表面にクレーター状の剥落がある。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白微粒少、赤粗～細 粒微量 やや軟質	P4 底上 5cm 体～底 1/2 周 1
3 土師器 甕	高 残 5.4 底 復 6.8	胴部下半の接合面から剥落するように欠損しており、接合面にはヘラ状工具によるランダムな刻みが施される。外面胴部下半縦方向の密なミガキ。底部ナデで、ミガキの可能性あり。平底で、中央がわずかにくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデで、接合部のみケズリが施されたのち、胴部下半～底部疎らなミガキ。接合前の胴部下半の調整は横方向のナデと見られる。外面胴部下半、表面の剥落あり。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂細～微粒多、赤・ 砂粗粒微量 やや硬質	P4 底上 1～2cm 胴下半～底 3/4 周 2、3、5

面から推定 32cm)、P2 は径 31 × 27 × 深さ 27cm(床面から推定 41cm)、P3 は径 34 × 29 × 深さ 26cm(床面から推定 50cm)。東西間 (P2-P3 間 3.08m) が南北間 (P1-P2 間 2.78m) より若干長い。

南側支柱穴を結ぶラインのほぼ中央から 120cm 南にある張出ピット P4 は南北軸の長方形で 105 × 79cm、確認面から深さ 17cm(推定床面から深さ 30cm)。P4 はほぼ平底で壁が外傾し、覆土 2・3 層には遺物を含み、1 層はローム塊・粒が多い。張出ピットを持つ竪穴建物としては古い時期で、高根沢町砂部遺跡に同時期の例がある (菊井他 1990)。SG5 区では SI-4 などに張出ピットがあり、本例よりも新しい。最も残りの良い西壁南寄りで僅かに確認できた壁溝は幅 13cm、深さ 1～2cm である。

[火処・覆土] 床面から 10～25cm 削平を受けており、覆土も火処も残っていない。

[遺物出土状況] 張出ピット P4 の底面から 5cm 以内のレベルで出土した。

[出土遺物] 極めて少ない。口縁部が開いた古墳中期後葉の椀形杯 (1) を持つので、カマドが一般化する以前と見られる。大形壺の底部 (3) は、接合部の刻みが良くわかる。図示以外の土師器計 16 片・205g の内訳は杯 4 片・53g、壺甕類 12 片・152g。壺甕類のうち、張出ピットに特徴的な黒色の土師器甕が 4 片ある。

SG5区 SI-95 (第327図、写真図版39)

[位置] SG5区北部の17-15・16グリッド。同じく古墳中期の建物は北西にSI-5、南東にSI-100がある。北東部を古墳後期のSI-6に、西壁南側を長方形攪乱土坑に、南壁を試掘トレンチに切られる。

[規模と形状] 方形で東西6.42×南北6.12m、南北の中軸線はN-1°-E、壁はほとんど消滅。床はほぼ平坦で北が少し低い。床から深さ2～30cmの掘方底に細かい凹凸があり、ロームが多い土で全体を貼床する。

支柱穴4本はP1が径23×32×床面から推定46cm (SI-6掘方から深さ29cm)、P2は径35×38×深さ37cm、P3は径37×36×深さ35cm、P4は径30×33×深さ45cm。柱間はP1-P2間が3.24m、P3-P4間が3.38m、P1-P4間が3.43m、P2-P3間が3.25mで、ほぼ方形に配置する。

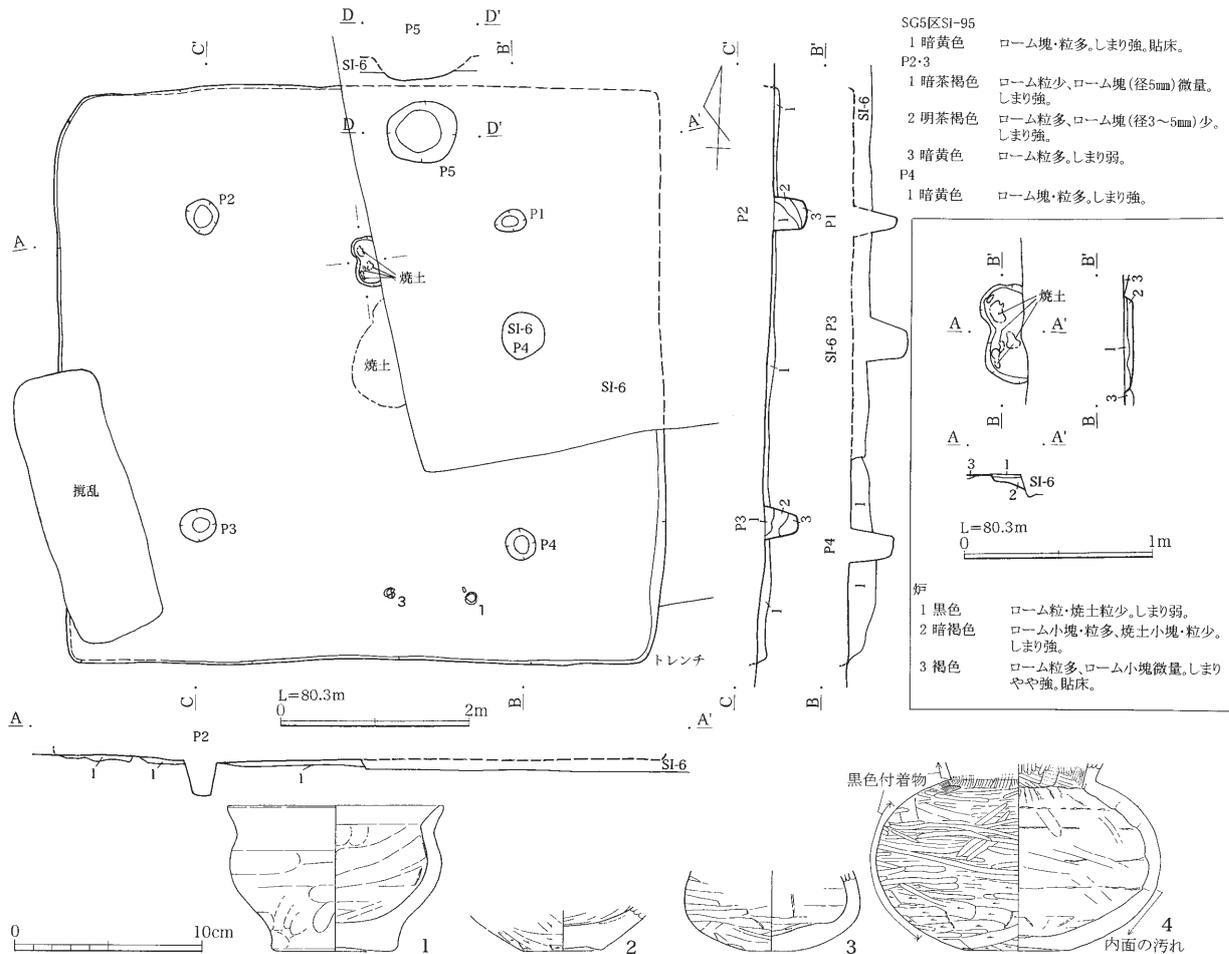
位置的には疑問もあるが、SI-6の床下で確認した窪みP5が本建物の貯蔵穴の可能性がある。62×73cmのほぼ円形で、SI-6掘方から深さ10cm、SI-95床面からの深さは推定23cmで、貯蔵穴としては浅い。

[炉] 北側支柱穴P1-P2間のやや南寄りで地床炉を確認した。SI-6に東側が切られるが、南北長53×東西残存幅23cm (推定幅32cm前後)・深さ4～5cmのだるま形で、底面は部分的に焼土化している。

[覆土] 覆土はほとんど残っていない。

[遺物出土状況] 1と3は床面で出土した。2と小形壺体部(4)は出土地点不明である。

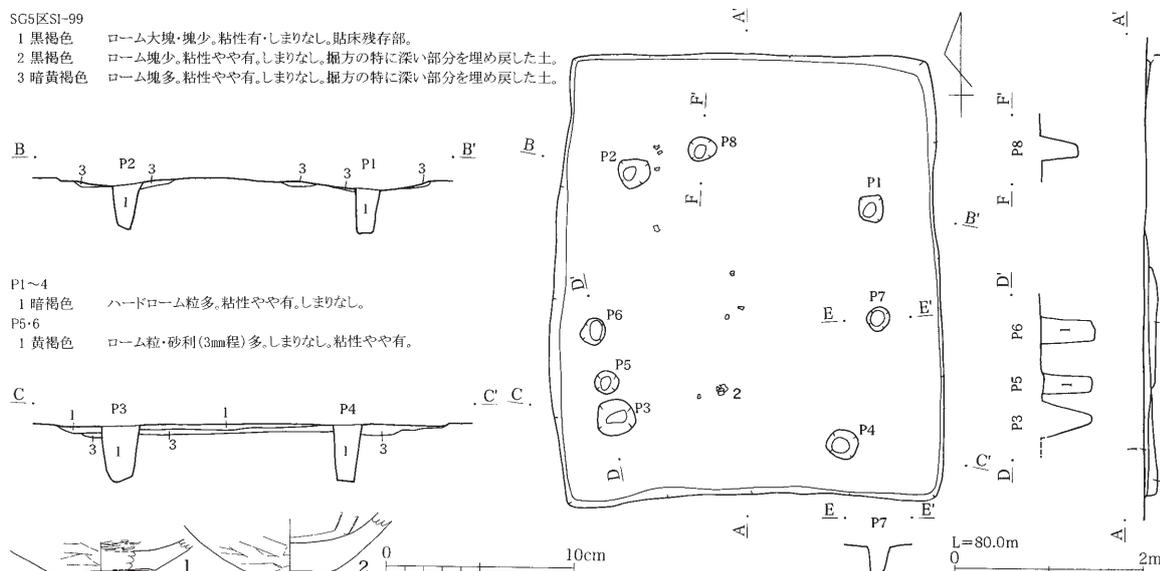
[出土遺物] 1は底部を小さく削っていないので鉢としたが、底部外面削りを省略した杯かもしれない。外面を丁寧に磨く小形壺(4)と、胴部が小さくて磨かない中期後葉の小形壺(3)がある。4の外面に付着物(煤?)、内面は内容物の影響で汚れがある。遺物量はきわめて少なく、図示した以外は土師器片のみ12片・84gで、内訳は杯1片・5g、高杯3片・14g、壺甕類8片・65g。



第327図 権現山遺跡 SG5区 SI-95 遺構・遺物

第 188 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-95 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 11.4 高 7.7 底 6.5	底部は丁寧に作られるが、口縁～体部の整形は甘く、歪みが残る。外面体部軽いナデのち口縁部ヨコナデ。底部は軽いナデで、厚く突出する平底。中央はわずかにくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部強く荒いヘラナデであり、器面の凹凸が目立つ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白微粒少、白・赤粗粒微量 やや硬質	南部床直上 口 1/4 周、体 1/2 周、底完存 1
2 土師器 杯か鉢	高 残 2.4 底 4.2	外面体部下半光沢のあるケズリ、底部ナデで、粘土の皺が残る。ややいびつに全体が浅くくぼむ。内面体部下半～底部光沢のあるナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗粒と白細粒少 硬質	体下半～底完存 表採
3 土師器 小形壺	高 残 4.3 底 復 2.6	黒褐色の精良な胎土。外面体～底部ナデのち光沢を持つ強いヘラナデ。底部を作出することを意識した特別な調整はないが、中央に復元径 2.6cm の平坦な面がある。形状からは平底とできよう。内面体部ヘラナデ、底部ケズリ。底部中央はケズリにより大きくくぼんでいる。	10YR4/1 褐灰 緻密 白細粒微量 やや軟質	南部床直上 体～底 1/3 周 3
4 土師器 小形壺	高 残 10.0 底 4.5～ 5.1 最大 15.0 頸部 8.2	外面頸部～胴部上半 5 本 / 1cm のハケのち口縁部ヨコナデ・胴部上半横方向のナデのち横方向のミガキ。胴部中位の最大径付近から底部はケズリで、のち体部横方向のミガキ。ミガキは胴部中位付近が密で、上端・下端付近は疎らになる。底部は外周のケズリにより作出されるもので、平面形はいびつな楕円形。底面は数回の一方方向のケズリが施され、浅くくぼむ。内面頸部は 5 本 / 1cm のハケのち縦方向のミガキ。胴部ナデで、上半は縦積痕顕著。下半には積み上げ休止による接合面があり、外面は調整により段差はないが、内面では角度の変化と継ぎ目が明瞭。接合面～底部はヘラナデ。内外面胴部中位爆付着。内面胴～底部クレーター状の剥落著しい。外面頸部と胴中位に黒色付着物(スス?)内面下位に褐色の汚れあり。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明細粒多、 白・黒・赤礫微量 やや硬質	胴～底完存



第 328 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-99 遺構・遺物

SG5 区 SI-99 (第 328 図、写真図版 40)

[位置] SG5 区中央部西寄りの 12-16・17、13-16・17 グリッド。同じく古墳中期の建物跡は北に SI-23・25、西に SI-26、南に SI-29 がある。また、後期の建物は南に SI-28 がある。重複する遺構はない。

[規模と形状] 床面下まで削平されているため、建物プランは掘方から推定した。南北にやや長い方形で、東西 4.14 × 南北 4.62m。中軸線は N-2° -E である。掘方は、床面からの深さ 2～14cm。ローム粒・塊が多い 2・3 層を埋め戻した後、5cm ほどの厚さで 1 層を入れて、水平に貼床を施す。

対角線上から若干ずれるが、支柱穴と推定されるものは P1～P4 の 4 本である。いずれも掘方で確認した。P1 は径 33 × 31 × 深さ 48cm、P2 は径 34 × 31 × 深さ 51cm、P3 は径 42 × 40 × 深さ 56cm、P4 は径 33 × 31 × 深さ 60cm。南側の P3・P4 がやや深い。柱間寸法は P1-P2 間が 2.55m、P3-P4 間が 2.27m、P1-P4 間が 2.49m、P2-P3 間が 2.57m。掘方底面で確認した P5～P8 は、本建物に伴わない可能性もある。P5 は径 25 × 23cm、掘方底面からの深さ 54cm、P6 は径 29 × 27cm、掘方底面からの深さ 58cm、P7 は径 24 × 23cm、掘方底面からの深さ 30cm、P8 は径 29 × 25cm、掘方底面からの深さ 40cm である。

[火処および覆土] 不明である。

[遺物および出土状況] 遺物はきわめて少ない。図示以外の土師器は合計 20 片・186g で、内訳は杯 14 片・77g、壺甕類 6 片・109g。杯類破片は椀形杯片や高杯片と思われるものなどがあり、内面赤彩の杯片もある。図示した平底の杯 (1) は古墳中期末ころと思われる、掘方から出土した赤彩の杯片があることを重視すると後期前葉かもしれないが、確実に伴うかどうか不安なので時期決定が難しい。

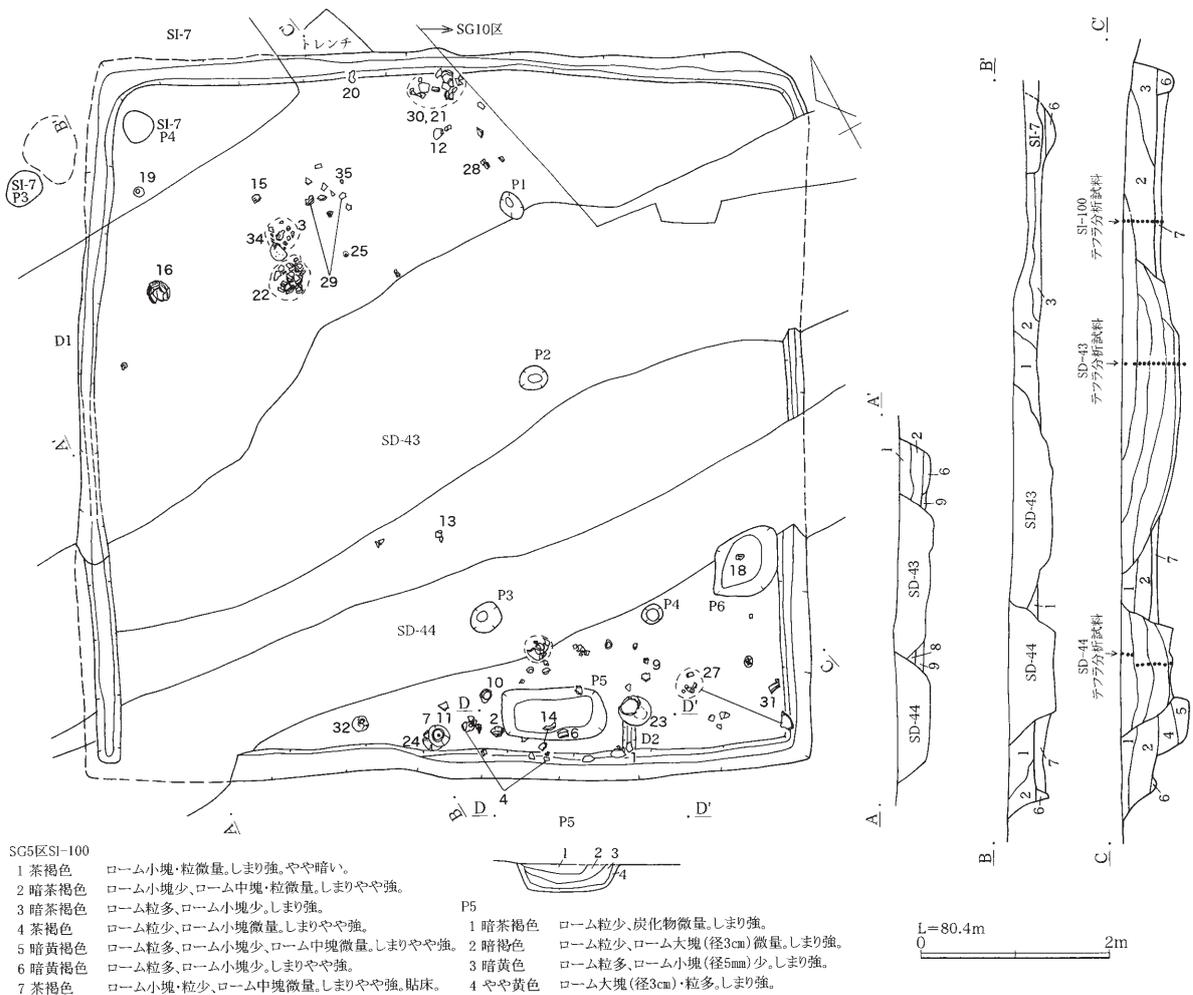
第 189 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-99 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯か鉢	高 残 1.6 底 復 5.0	外面体~底部光沢のあるナデ。底部は平底で、わずかにくぼむ。底部外周は明確な稜となって、体部と区別される。内面体部横方向、底部一方の密なミガキ。	2.5YR4/6 赤褐 緻密 赤粗粒少、白粗粒と砂粒 粒微量 硬質	体下半~底 1/3 周
2 土師器 鉢	高 残 3.1 底 4.2	成形がやや甘く、特に外面に歪みあり。外面体部光沢のあるヘラナデ。底部ナデで、ややいびつな平底。内面体~底部ヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒少、白・黒細粒微 量 やや硬質	南部床上 6cm 体~底完存 1

SG5 区 SI-100 (第 329・330 図、写真図版 40・174・184)

[位置] SG5 区中央部北寄りの 16-16、17-16 グリッド。北東隅は SG10 区で調査を行った。SI-100 の中央部を、古墳中期の SD-43 と古墳後期の SD-44 が切る。また、古墳後期の SI-7 に北西部を切られる。

[規模と形状] ほぼ方形で、東西 7.63 × 南北 7.67m、中軸線は N-28° -E である。壁は外傾し、残存高は 34 ~ 43cm。床はほぼ平坦で、北側に若干傾斜する。南壁際と北西隅との比高差は 10cm ほどである。掘方は床面から深さ 8 ~ 18cm で、西壁際を除くほぼ全体をローム粒・塊が多い暗黄褐色土の 7 層で貼床する。



第 329 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-100 (1) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区

柱穴は P1 ～ P4 がある。位置や深さからみて P4 (径 22 × 14 × 深さ 46cm) が 4 本主柱の南東主柱穴の可能性があり、他は溝に切られて確認できなかったと考えられる。P1 ～ P3 は配置が不自然で主柱穴とは見なせない。P1 は径 31 × 21 × 深さ 16cm、P2 は径 29 × 24 × 深さ 10cm、P3 は径 22 × 19 × 深さ 46cm である。

ほぼ全周する壁溝 D1 は断面 U 字状で幅 15 ～ 35cm、深さは床面から 5 ～ 14cm。ただし南壁西側が明確でない。貯蔵穴 P5 の 20cm 東で、南壁溝にほぼ直交して 1 本確認した間仕切溝 D2 は長さ約 50cm、幅 11 ～ 13cm。

貯蔵穴は P5 で、やや不整形であるが P6 もその可能性がある。南壁中央からやや東寄りに位置する貯蔵穴 P5 は、南壁と平行する東西軸の長方形で 109 × 56 × 床から深さ 30cm。ほぼ平底で、壁はなだらかに上がる。炭化粒を僅かに含む P5 の 1 層に土器が流れ込んで出土し、下層の 3・4 層にローム粒・塊が多い。

南東隅の北方 1.5m で東壁溝に接している P6 も貯蔵穴の可能性はある。P6 は SD-44 に切られてやや不整形で、規模は 99 × 65 × 床面から深さ 31cm。貯蔵穴を 2 箇所持つ竪穴は、SG5 区では SI-11 などがある。[火処] 確認されなかった。溝によって消滅したと想定される。

[覆土] 自然埋没状で、3 層にローム粒が多い。SG5 区 SI-100 と、SI-100 を切る SD-43・44 の埋土を採取してテフラ検出分析を実施した (土層断面 C-C' および本章第 2 節)。その結果、SD-43 上層部と SD-44 各層で確認された白色軽石が、古墳後期初頭の Hr-FA テフラの可能性が高いと考えられた。後期中頃の Hr-FP テフラとの区別が難しいが、各遺構出土土器から考古学的に見ると Hr-FA とみて矛盾しない。

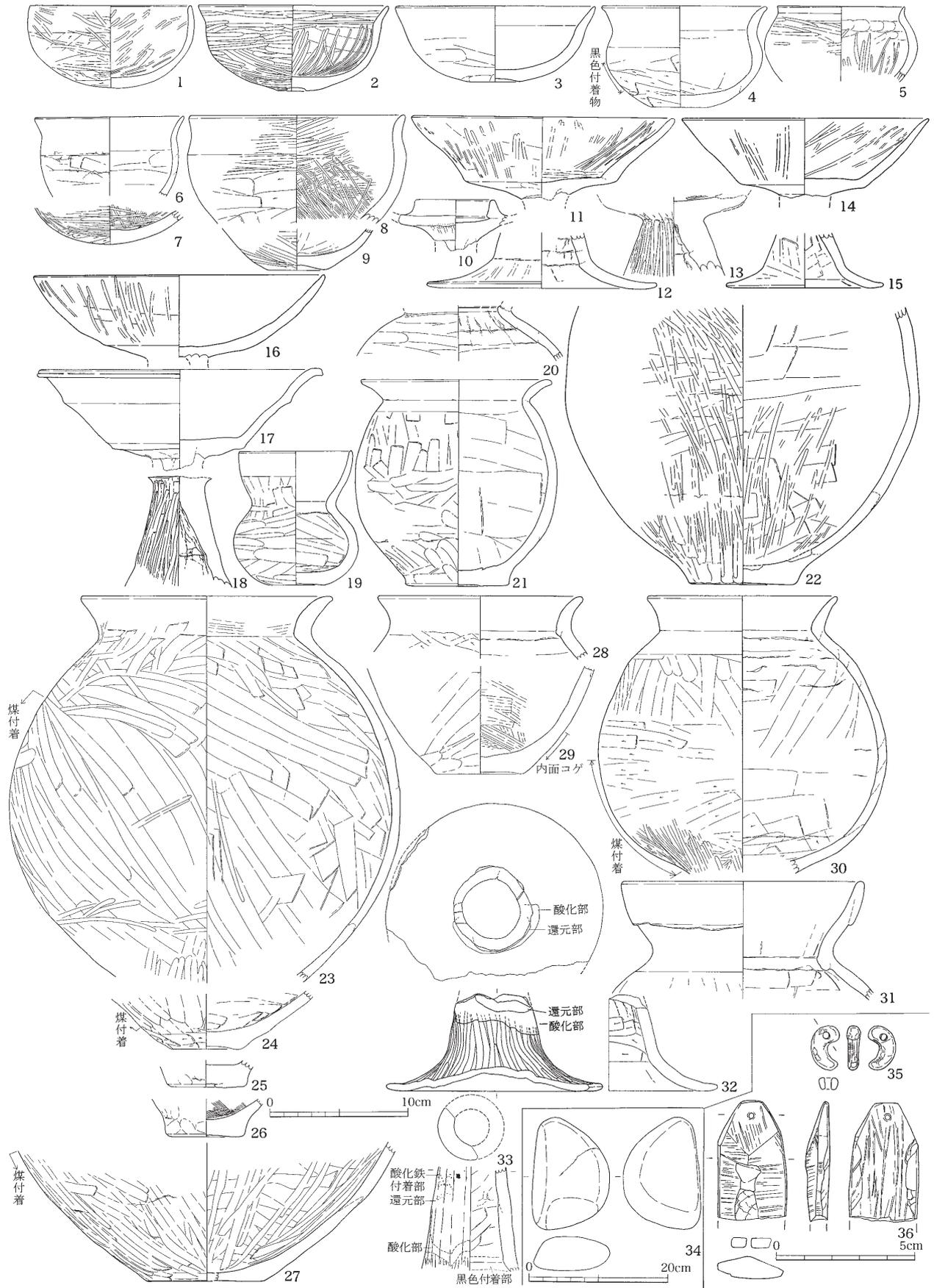
[遺物出土状況] 南壁中央付近では 24 の甕底部片の上に杯底部 7、その上に 11 の高杯が伏せてある。貯蔵穴 P5 の東側に逆位の甕(23)がある。北部では床付近に 16 がある。羽口は、床から 30cm 以上浮いた 32 と、重複する SD-43・44 の土層断面記録箇所を取り上げた 33 で、この建物で使用したとは断定できない。

[出土遺物] 遺物は多い。大・中・小の壺甕類が多く、杯・鉢・高杯の個体数も多い。図化できる杯・高杯・鉢などはほぼすべてを図示した。杯は内斜口縁が主体で深い 4・5・6 は古墳中期中葉的、口が開く 2・3 は中期後葉的。高杯は柱状脚の脚柱部が図示以外に 5 個体分ある。10 は異形高杯、13 は大形高杯。甕の内面にコゲが付着し (24・29)、外面の煤も多い。23 は吹きこぼれた水分が垂れた痕が外面肩部の煤に残る。貼付口縁大形壺 (31) の例は SG5 区 SI-16・29 と SD-101・227 や、SG10 区 SI-16・50 などにある。図化以外の壺甕類では、小～中形品底部に平底 5 点と凹底 1 点、ハケ調整甕片は 3 本/cm と 5 本/cm のハケがある。図示以外の土器器計 685 片・5,746g の内訳は杯 327 片・1,669g、高杯 55 片・497g、壺甕類 303 片・3,580g。

鉄関連遺物では、高杯転用羽口がある (32・33)。この建物が鍛冶遺構である可能性も皆無ではないが、羽口は床面から 30cm 以上浮いて出土し、鍛冶炉・鉄滓・鍛造剥片も確認していない。ただし、床面土の採取・水洗は実施していない。SG5 区では他に SD-42 に鉄滓がある。34 は緻密なホルンフェルスの礫。SG5 区では SI-7 などこの材質の砥石がある。滑石製模造品は剣形と勾玉形がある (35・36)。SG5 区では SI-8 などに滑石製模造品がある。勾玉形は SG5 区 SX-118、SG9 区中央区南東部低地、SG10 区 SI-64a などにある。

第 190 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-100 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 11.5 高 6.0 最大 11.8	半球状で、丸底、薄手。表面は細かく剥落しており、特に内面が著しい。外面体～底部ケズリのち口縁部ヨコナデのち口縁～体部疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～底部斜め方向のミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・灰色・透明細粒 少、白粗粒と赤粗～細粒微量 やや硬質	D2 底上 11cm 口～体 1/6 周、底完存 11
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 6.2 底 2.0	内斜口縁。口縁部ヨコナデ・体～底部ナデ・ケズリのち口縁～体部密なミガキ。底部は乱雑なナデのみで、いびつにくぼむ。内面口縁部ヨコナデのち横方向の疎らなミガキ、体～底部ナデのち放射状のやや疎らなミガキ。内面は外面より暗い色に変色している。	5YR4/8 赤褐 緻密 白・赤微粒微量 やや硬質	南西壁際床直上 口～体上半 1/3 周、体 下半～底完存 21
3 土師器 杯	口 復 14.2 高 5.4 底 3.6	内斜口縁。表面は細かく剥落しており、特に内面が著しい。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。底部上げ底。内面はミガキの可能性はあるが、表面剥落のため不詳。	5YR7/6 橙 やや緻密 砂礫と赤粗粒と白粗 ～細粒微量 やや硬質	中央部北寄り床 13cm 口～体上半 1/3 周、体 下半一部欠、底完存 62



第330図 権現山遺跡 SG5 区 SI-100 (2) 遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

4 土師器 杯	口 復 11.8 高 7.3 底 4.0	外面口縁～体部上端ヨコナデ、体～底部光沢のあるケズリ。底部平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち体部ヘラナデ。外面体部黒色物質(煤か?)付着。	7.5YR4/3 褐 やや粗い 白細粒と砂粗～細粒少、赤細粒微量 やや硬質	南西部床面と南西壁溝底上 31cm 口～体 1/3 周、底完存 18、23
5 土師器 杯	口 復 9.2 高 残 5.4 最大 復 11.0	内斜口縁。外面口縁～体部上端ヨコナデのち体部上半疎らなミガキ。外面体部は下位ほど表面が細かく剥落しており、調整が不明な部分多い。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち疎らな縦方向のミガキ。体部上端のナデは荒く、ナデの単位が明瞭に残る。下半ナデは丁寧。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 白・透明微粒少、透明粗粒と赤細粒微量 やや硬質	口～体 1/5 周
6 土師器 杯	口 復 10.7 高 残 5.7	小形・薄手。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いヘラナデで、粘土の皺が残る。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多 やや硬質	貯蔵穴 P5 底上 18cm 口～体 1/3 周 14
7 土師器 杯	高 残 2.8	丸底。外面体部下～底部ケズリのち体部下半ミガキ。内面放射状のミガキのち横ないし斜め方向のミガキ。体部下半タール状の光沢を持つ黒色物質が不規則に偏って付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少 やや硬質	南壁際床 上 10cm 体下端～底完存 50
8 土師器 鉢	口 復 15.4 高 残 7.8 最大 復 15.6	外面体部ケズリのち口縁～体部上端ミガキ。内面口縁～体部横方向のミガキのち斜め方向のやや細いミガキ。内面には黒褐色の部分多い。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白粗粒微量、砂粗粒少 やや硬質	口～体 1/6 周
9 土師器 鉢	高 残 3.0 底 4.0	外面体～底部ナデで、幅の狭いミガキ状のナデが、体部に斜位に施される。底部は全体が大きくくぼむ。内面体～底部ヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・黒・赤・砂微粒多、赤礫～粗粒と白粗粒微量 やや硬質	南部床 上 2cm 体下半～底完存 7
10 土師器 高杯	高 残 3.6	異形の高杯。杯部内面に作られた円形の直立する部分と底部のみが残存する。やや軟質なため表面が磨滅しており、調整不明な部分が多い。直立する部分の上端径は 5.6cm、深さ 1.6cm で、内外面ともヨコナデ、底部内面ナデと見られるが、ミガキの可能性もある。外面底部はミガキ。下端の欠損の状況から、脚部との接合は杯部側の突出部を脚部に挿入する形と見られる。底部外周は意図的に打ち欠かれていると見られるため、この状態で使用されたことがあったと考えられる。	10YR8/6 黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少 やや軟質	南西部床直上 杯口～体完存 25
11 土師器 高杯	口 18.7 高 残 5.7	軟質なため表面が磨滅しており、調整不明な部分多い。外面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち体部縦方向の疎らなミガキ。脚部との接合は、接合部の欠損状況から、杯部底で粘土塊を脚部に挿入して接合するものと見られる。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～底部ミガキ。口縁～体部は縦ないし斜め方向、底部は外周付近しか確認できないが、ほぼ円周方向に施される。底部中央は浅くくぼむ。杯部ほぼ全体が被熱により赤変する。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白粗粒微量 やや軟質	南壁際床 上 8cm 杯部ほぼ完存 34
12 土師器 高杯	高 残 4.0 脚 復 16.4	やや軟質な胎土のため、内外面とも表面は磨滅しており、調整が不明な部分が多い。杯部は体部の一部が残っており、体部下端が稜をなすものと推定される。内面杯部底部密なミガキ。残存する体部上端は接合面から剥がれている。脚部上半組積痕と粘土のしぼり目が顕著。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤・灰色粗粒少 やや軟質	北部床 上 16cm 脚下半 1/3 周 47
13 土師器 高杯	高 残 5.7	器壁厚く、大形と見られる。外面杯部底部ケズリ、脚部上半縦方向の密なミガキ。杯部は体部の一部が残っており、体部下端が稜をなすものと推定される。内面杯部底部密なミガキ。残存する体部上端は接合面から剥がれている。脚部上半組積痕と粘土のしぼり目が顕著。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白粗～微粒と赤細粒少 硬質	中央部床 上 21cm 杯底 1/5 周、脚上半 1/4 周 38
14 土師器 高杯	口 17.5 高 残 5.7	やや軟質なため、表面が磨滅しており、調整不明な部分多い。外面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～体部疎らな縦方向のミガキ。杯部底部中央の欠損部分は磨滅しており、脚部を欠損した状態で使用されていた可能性がある。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち口縁～体部斜め方向のミガキ。口縁部は徐々に薄くなるようにヨコナデされる。底部のミガキは確認できず。杯部全体に被熱による赤変部分がある。	5YR7/8 橙 やや緻密 白細～微粒少、白・赤・灰色礫微量 やや軟質	貯蔵穴 P5 底上 23cm と 南西部壁際床 上 16cm 杯一部欠 15、16、貯蔵穴
15 土師器 高杯	高 残 4.0 脚 復 11.2	外面脚部下半ヨコナデのち脚部ヘラナデ・ナデ。内面脚部～脚部下半ヘラナデのち脚部下半ヨコナデ。残存部の内面全体および外面一部が黒褐色を呈する。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 白細粒と赤粗～細粒微量 やや硬質	北部床 上 2cm 脚下半 1/4 周 51
16 土師器 高杯	口 20.7 高 残 5.9	全体に表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。外面杯部口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち体部縦方向の疎らなミガキ。体部下端は緩やかな稜となる。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。ミガキの可能性はあるが、不詳。内外外面口縁～体部一部煤付着や被熱による赤変あり。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂粗～細粒と赤細粒少、砂礫と白粗粒微量 やや軟質	北部床 上 3cm 杯口～体 1/2 周、底完存 2'
17 土師器 高杯	口 20.4 高 残 7.3	表面全体磨滅のため調整不詳。成形は丁寧で、歪み少ない。外面杯部口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ナデと見られる。体部上半に稜あり。口縁部は外反し、外面端部にはヨコナデにより細い沈線が作出される。脚部との接合は、杯部底で粘土塊を脚部に挿入することでなされると推定される。内面杯部ヨコナデ・ナデであろう。内外面とも、ミガキが施されていた可能性あり。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 砂粗～細粒少、砂礫と赤・透明細粒と軟質白粗粒微量 やや軟質	杯口～体 1/2 周、底完存 37
18 土師器 高杯	高 残 7.9	外面脚部上半縦方向の密なミガキ。内面脚部上半わずかなナデで、組積痕や縦方向の粘土のしぼり目が目立つ。上端は凹凸なく欠損しており、接合面から剥離したものと推定される。脚部上半全体が被熱により赤変する。脚部上端径 3.8cm。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗粒少、白細粒微量 硬質	P6 内 脚上半完存 1'
19 土師器 小形壺	口 復 8.2 高 9.6 底 3.8 最大 復 9.0	小形。口縁部は器壁薄く、精緻な作り。外面口縁～体部上半ヘラナデのち口縁部ヨコナデ・体～底部一部ケズリのちナデ。底部平底で、わずかにくぼむ。内面口縁～胴部上端ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。体部上半組積痕あり。	7.5YR7/6 橙 緻密 砂礫と白・黒・赤・砂粗～細粒微量 やや硬質	北西部床 上 1cm 口 1/3 周、体～底完存 40
20 土師器 小形壺	高 残 4.1	内面胴部上半横方向のナデのち頸部ミガキ。口縁部はミガキの可能性あり。外面頸部ヨコナデ、胴部上半ナデで、組積痕としぼり目が残る。頸部は接合面欠損している。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白細～微粒と透明微粒少、白礫～粗粒と砂礫微量 硬質	北部壁際床 上 1cm 頸～胴上半 1/2 周 49

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

21 土師器 小形甕	口 復 13.2 高 14.8 底 7.4 最大 復 14.4	小形。外面胴部上半ヘラナデのち口縁部～胴部上端ヨコナデ・胴部中位～下半ナデ。底部ナデで、突出する平底であり、ドーナツ状に中央部分のみがくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデで、底部中央にヘラ状工具を突き立てたような痕跡がある。外面は口縁～胴部全体が黒褐色を呈するが、煤かどうかは不明。底部のみ被熱のためか褐色となっている。	10YR6/2 灰黄褐 やや粗い 白礫～粗粒少、赤粗～細粒と白細～微粒微量 硬質	北壁際床上 3cm 口～胴 1/4 周、底完存 48、SD-43 覆土
22 土師器 甕	高 残 20.0 底 7.6 最大 復 25.4	比較的精良な胎土で、剥がれるように各破片が割れている。外面胴部上半ナデ・中位～下半ケズリのち胴部疎らなミガキ。ケズリは胴部中位は横に、下半は縦に施される。底部ケズリで、わずかにくぼむ平底。内面胴～底部ヘラナデのち胴部中位～底部縦方向の疎らなミガキ。底部上 6.5cmに積み上げ休止による接合面がある。外面胴部中位～底部に煤が散発的に付着。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白礫と赤粗～細粒と白・透明細粒少 やや硬質	中央部床上 11cm 胴 1/3 周、底完存 64
23 土師器 甕	口 18.0 高 残 27.6 最大 28.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部ケズリのち胴部ヘラナデ。ケズリは主に上から下へと斜位に施される。ヘラナデは中位～上半は斜位に、口縁部下 23.5cmにある積み上げ休止による接合面より下は縦方向、接合面付近は横方向に施される。内面口縁部一部 6 本 /1cmのハケのちヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部上端のヘラナデは強く施される。内外面とも成形、調整は丁寧で、胴部下半の接合面も薄く仕上げられる。外面口縁～胴部煤付着で、中位～下半に顕著。口縁～胴部上半では、吹きこぼれによってスダレ状に一部煤が洗い流されている。	7.5YR4/2 灰褐 やや粗い 白粗～細粒多、白礫と砂粗～細粒少 硬質	D2 周辺床上 4cm 口～胴はぼ完存 36
24 土師器 甕	高 残 4.2 底 4.5	外面胴部下半ナデのち下端ケズリ。底部中央は丁寧なナデで、中央がくぼむ平底。胴部下端のケズリが乱雑なため、外周は凹凸があり、形も不整。内面は表面が細かく剥落している。胴部下半～底部ヘラナデ。外面胴部下半煤付着。内面の残存する全面にコゲ付着。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・透明細粒多、白粗粒少 やや硬質	南西部床直上 胴下半～底完存 35
25 土師器 甕	高 底 2.0 底 5.6	小形。小形粗製土器の可能性あり。胴部下端～底部ナデ。底部は器壁厚く突出する平底で、中央部のみが小さくくぼむ。内面底部ナデ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 白・赤細粒微量 やや硬質	中央部北寄り床上 15cm 底完存 41
26 土師器 甕	高 残 2.7 底 5.7	小形。小形粗製土器の可能性もある。外面胴部下半ナデ。底部はナデで、丁寧な成形される。器壁厚く突出する平底で、中央がわずかにくぼむ。内面胴部下半～底部 10 本 /1cmのハケ。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 赤粗粒多、白・砂粗粒微量 硬質	胴下半一部、底完存
27 土師器 甕	高 残 10.0 底 復 8.4	外面胴部下半斜位のヘラナデで、底部付近は強く施される。底部ケズリで、丁寧な成形される。器壁厚く突出する平底で、中央がわずかにくぼむ。内面胴部下半～底部横方向のヘラナデのち縦方向のヘラナデ。胴部には積み上げ休止による接合面があるが、外面の角度と器厚がわずかに変化するのみであり、丁寧な調整で消されている。外面胴部下半～底部、残存部分全体に煤付着。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白粗粒少、砂礫微量 硬質	南隅床上 14cmと南部床 付近 胴下半～底 1/4 周 4、6
28 土師器 甕	口 復 14.6 高 残 4.5	外面口縁部ヨコナデのち胴部上端ケズリ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端横方向のナデで、紐積痕が残る。外面口縁部のヨコナデは強く施される。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒少、白礫～細粒微量 やや硬質	中央部床上 4cm 口～胴上端 1/4 周 43
29 土師器 甕	高 残 7.8 底 復 6.2	外面胴部下半ナデ、底部荒いナデで、わずかにくぼむ平底。内面胴部下半 5 本 /1cmのハケのち底部周辺ナデ。内面胴部下半～底部わずかにコゲ付着。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白細～微粒少、白粗粒と透明微粒微量 硬質	中央部北寄り床上 14～ 19cm 胴下半～底 1/4 周 55、58
30 土師器 甕	口 13.6 高 残 19.9 最大 復 20.6	外面胴部上半ナデのち口縁部～胴部上端ヨコナデ・胴部中位～下半横方向の丁寧なケズリのち胴部下半縦方向のやや密なミガキ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデのち一部ケズリ。胴部上半には紐積痕が残る。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、下側の接合面上端には、ヘラ状工具による刻み目が約 9mm間隔に施される。刻み目の深さは約 2mm。外面胴部中位～下半煤付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・赤・半透明粗粒微量 やや硬質	北壁際床上 33cm 口 5/6 周、胴上半 2/3 周、胴下半 1/3 周 48
31 土師器 壺	口 復 17.3 高 残 8.5	外面胴部上半ナデのち口縁～胴部上端ヨコナデ。口縁部は粘土貼付けによる複合口縁。内面口縁部ヘラナデのち上半中心にヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部上端は粘土の継ぎ目が明瞭に残る。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明微粒多、白礫微量 硬質	南壁際床上 23cm 口～胴上半 1/4 周 3
32 土師器 高杯 (転用羽口)	高 残 6.4 脚 15.4	高杯脚部転用羽口。平面図下側は直線的に裾部が欠損しており、羽口使用時にはここが住居床面に接していたと推測される。上端は欠損しており、溶解部は見られない。平面図下側側に幅約 1cmの還元部、さらに下には幅 1～2cmの酸化部があるが図上方には変色は見られず、図下方がより強く被熱したと見られる。外面脚部下端ヨコナデのち脚部縦方向のミガキ。内面脚柱部中位ナデで、しぼり目あり。脚柱部下半ケズリ、脚部下半ヘラナデのちヨコナデ。鍛冶関連遺物構成No.26。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・砂粗～細粒少 硬質	南西部床上 32cm 胴中位完存、下半 2/3 周 66
33 土師器 高杯 (転用羽口)	高 残 7.5	先端を欠損するため、溶解部はない。残存部上端径 4.8cm。約 5cmの還元部があり、先端寄り約 1.5cmは灰白色で、表面に酸化鉄が付着する。その下は青灰色、灰白色と変化しており、その下に約 1cmの黄褐色をした酸化部がある。外面脚部上半ケズリのちミガキであろう。内面脚部上半ナデで、下寄りにはヘラナデ。内面は上 3cmが淡褐色、下 2.5cmが褐色に変色する。その下本来の土器の色を示す部分を挟んで下端約 1.5cmには黒色物質が付着する。欠損面に付着している部分もあり、脚下半を除去した後には羽口として使用したと見られる。鍛冶関連遺物構成No.27。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明細粒少、白粗粒微量 硬質	断面 B-B' 付近 脚上半 1/3 周 UT-SG-V SD-43、44 E-E'
34 礫	長 15.9 幅 10.9 厚 5.0	河原石。特に加工の痕跡なし。左側縁がやや平滑な面となっているが、研磨された面とは言えない。砥石の素材か。重量 1197.3g。	5Y6/2 灰オリーブ 緻密 ホルンフェルス	北部床上 6cm 完形 61
35 石製模造品 勾玉形	長 1.62 幅 1.00 厚 0.47 重 0.95	良質な滑石製。断面は平坦な面を持った楕円形で、比較的丁寧に研磨されているが、体部腹側に成形時の深い条線が残る。また、「J」字に見える側の頭部は形割時の剥離面を残すため、平坦面となっている。「C」字に見える側からの穿孔と見られ、孔径は 2.1mm、反対側は 1.9mm。	10GY3/1 暗緑灰 緻密 滑石	北部床直上 完形 67
36 石製模造品 剣形	長 残 4.30 幅 2.50 厚 0.78 重 残 12.92	下端を欠損し、表側中央にガジリによると見られる欠損がある。表側は三叉状鑄で、やや深く深い条線を伴い、各面ともほぼ一方に研磨される。下端中央は形割時の剥離面であろう。側面は幅 1.5～4.5cmの平面に加工されており、表側と同様の条線を伴って、長軸に直交する方向に研磨される。左側縁上半は節理面の可能性あり。裏側は表側と同様の条線を伴い、平坦に研磨される。裏側の右側縁にのみ形割時の剥離痕、左右側縁には工具による切削痕あり。穿孔は表側からと見られ、孔径は表側で 1.76mm、裏面は 1.63mmで、孔の周囲に穿孔時のものと思われる小さな剥離がある。	10GY5/1 緑灰 やや緻密 緑泥片岩	一部欠 床直

SG5 区 SI-107 (第 331 図、写真図版 40・41)

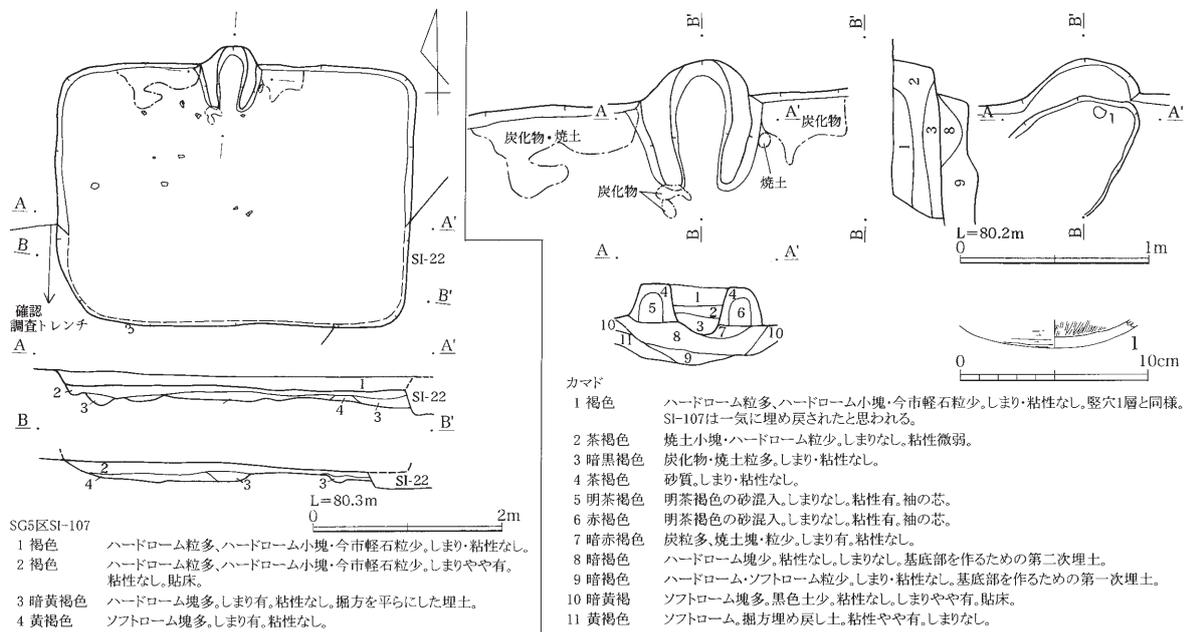
[位置] SG5 区中央の 14-17・18 グリッド。東側は低地に向かって傾斜する。同じく古墳後期の SI-20・21 が北と南西に近接する。古墳中期の SI-22 を切る。南半の上部を試掘トレンチに切られる。

[規模と形状] 東西に長い長方形で、東西 3.80 × 南北 2.78m、中軸線は N-2° -E。壁は外傾し、残存高 17cm。床は平坦で傾斜しない。南半部の平面図に不備があり、写真を参考に壁下端を破線で示した。床面から深さ 4 ~ 20cm の掘方底に細かな凹凸があり、ロームが多い 3・4 層で埋めた上に厚さ 4 ~ 10cm の 2 層を貼る。

[カマド] 北壁中央にある。両袖幅 90cm、煙道先端から焚口まで 70cm。貼床整形後、カマド部分を地山まで掘り下げローム塊・粒を少量含む 8・9 層で埋め戻す。袖部は明茶褐色の砂混じりの 5・6 層を心とし、砂質茶褐色の 4 層を被せる。火床はほぼ平坦で、火床上には炭化物多量と焼土粒少量を含む 3 層と、天井が崩れた 2 層が堆積し、1 層で埋め戻される。煙道先端は北壁より 20cm 出てほぼ垂直に上がる。カマド西側の床面に薄い炭化物と焼土、カマド東側の床面に薄い炭化物、カマド西袖の先端に塊状の炭化物が認められた。

[覆土] ローム粒が多く、ローム塊・今市軽石粒を少し含む褐色土の単層である。カマド 1 層の説明に記されているとおり、一気に埋め戻したものと観察された。

[遺物および出土状況] 遺物のごくわずかな小破片で、模倣杯・漆仕上げ杯・長胴甕破片はない。長胴甕片は 1 片だけある。カマド掘方で出土した杯 (1) からみて古墳後期中～後葉の建物と判断される。図示以外の土師器は小破片ばかり計 44 片・265g で、内訳は杯 24 片・73g、高杯 5 片・41g、小形壺 5 片・15g、壺甕甑類 10 片・136g。重複する古墳中期の SI-22 の遺物が混入していると思われる。



第 331 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-107 遺構・遺物

第 191 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-107 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
仮 1 土師器 杯	高 残 1.5	丸底。精良な胎土。外面底部ケズリ、内面底部ほぼ一方の細く密なミガキ。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白微粒微量 硬質	カマド掘方底上 23cm 底部のみ完存 11

SG5区 SI-116 (第332・333図、写真図版41・184・185)

〔位置〕 SG5区中央部の14-16グリッド。西半は調査区外。同じく古墳中期のSI-17が北にあり、東に古墳後期のSI-19・137がある。古墳中期の可能性のあるSK-130と、古墳時代の可能性のあるSD-101に南側を切られ、SI-116→SK-130→SD-101の順になる。SI-116の中層以下をSK-130が切り、その埋没後にSI-116の上層が堆積する。そして、SI-116埋没後にB層とC層が上を覆い、そのB層をSD-101が切る。このB層で、12世紀初頭に降下したAs-Bテフラが検出された(本章第2節)。SD-101とB層の前後関係が確実で、またテフラの混入がなければ、SD-101が12世紀以降の溝になる可能性も残されている。ただしその場合は、古墳後期のSI-20・21がSD-101を切るという調査所見と矛盾する点に疑問がある。

〔規模と形状〕 東側しか確認していないが、方形と推定される。南北長6.85m、東西長3.20m以上、中軸線はN-1°-E。壁は外傾し、残存高42～56cm。床は平坦で傾斜しない。南北長142×幅60×高さ6～10cmの高まりがP2北西にある。支柱穴より内区は地山ロームを平坦にして床とし、外区は床から深さ5～14cmで周溝状に掘り込んだ後にローム塊が多い黄褐色土で埋め戻して硬くしめる床面とする。

東側の支柱穴を2本確認し、P1-P2間は3.65m。P1は径52×55×深さ60cm、P2は径56×46×深さ59cmで貯蔵穴P3に接する。北東隅の掘方底で確認したP4は径41×30cmで深さは床から24cm・掘方底から11cm。

調査部を全周する壁溝D1は断面U字状で幅20～30×深さ3～11cm。北・東壁際中央で確認した間仕切溝2本は壁溝に直交して連結し、D2は長118×幅13～17cm、D3は長102×幅12～15cm。

南東隅の貯蔵穴P3は南北軸の隅丸長方形で111×81×床面から深さ42cm。底面は平坦で、壁は直線的に外傾する。P3の覆土はほぼ水平に堆積し、2層中から3層上面に遺物が多い。

〔火処〕 不明である。覆土各層に焼土を含む。

〔覆土〕 自然埋没で、下層ほどロームの混入が多い。SI-116中層以下をSK-130が切り、その後にSI-116の上層が堆積する。SI-116埋没後にB層とC層が上を覆い、B層をSD-101が切る。B層で12世紀初頭のAs-Bテフラ、埋土上部の1層で古墳後期初頭のHr-FAと推定されるテフラが検出された(本章第2節)。

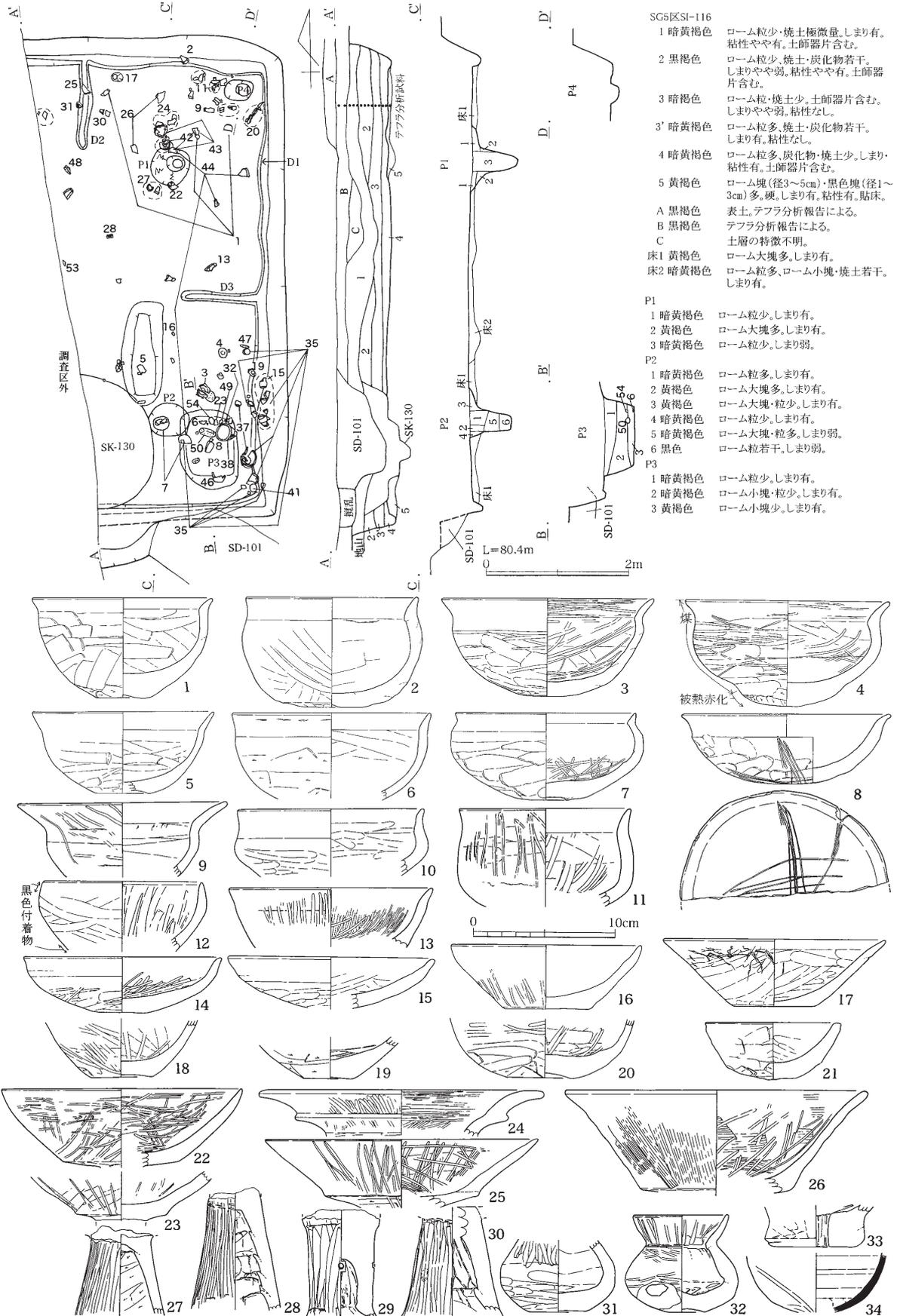
〔遺物出土状況〕 貯蔵穴内では2層中から3層上面にかけて遺物が多く、逆位の土師器甕上半(38)、正位の小形壺(32)、砥石2点(49・50)や土師器杯(8)などが出土した。貯蔵穴東側にも土師器甕上半(37)が倒立してある。竪穴北東隅付近にも鉢3点(42～44)などの遺物がやや目立つ。

〔出土遺物〕 遺物数が多い。土師器は杯・鉢と甕壺類が主体で、小形壺も少し入る。少し口が開く椀形杯が多い。8は外面に刻線がある。図示以外の椀形杯は底部で約3個体ある。脚部に非貫通孔を持つ高杯(29)は、SG5区SI-5やSG10区SI-25などに例がある。高杯は個体数が多いが破片量は少ない。図示以外に高杯脚柱部が8片以上あり、1点は上半部中実の柱状脚。小形壺は中形品もありそうだが、接合・図示できなかった。32は小形壺に内面から穿孔する。鉢と小形甕は図示以外に各1個体ある。大形の壺甕類は図化品以外に口縁部で7～8個体分、底部で12個体分(ドーナツ底3、突出2、平底7)ほどがある。甕の破片は少ない。図示以外の土師器と焼粘土塊は合計1,883片・16,988gで、内訳は杯535片・3,529g、高杯313片・4,293g、小形壺10片・232g、壺甕類1,001片・8,550g、甕22片・365g、焼粘土塊2点・19g。

薄くて内面のロクロ目が強い須恵器壺(34)は、東側のSK-51出土破片(第351図SK-51の7)と同個体で、SG5区SD-42の陶質土器壺に焼成・色調・胎土がやや似る。47～50は砥石と敲石で、48は砥石に使う凝灰岩質の剥片。52は滑石製模造品、51は粘板岩の素材(?)。滑石製模造品はSG5区SI-8など、粘板岩製品はSI-6などにある。

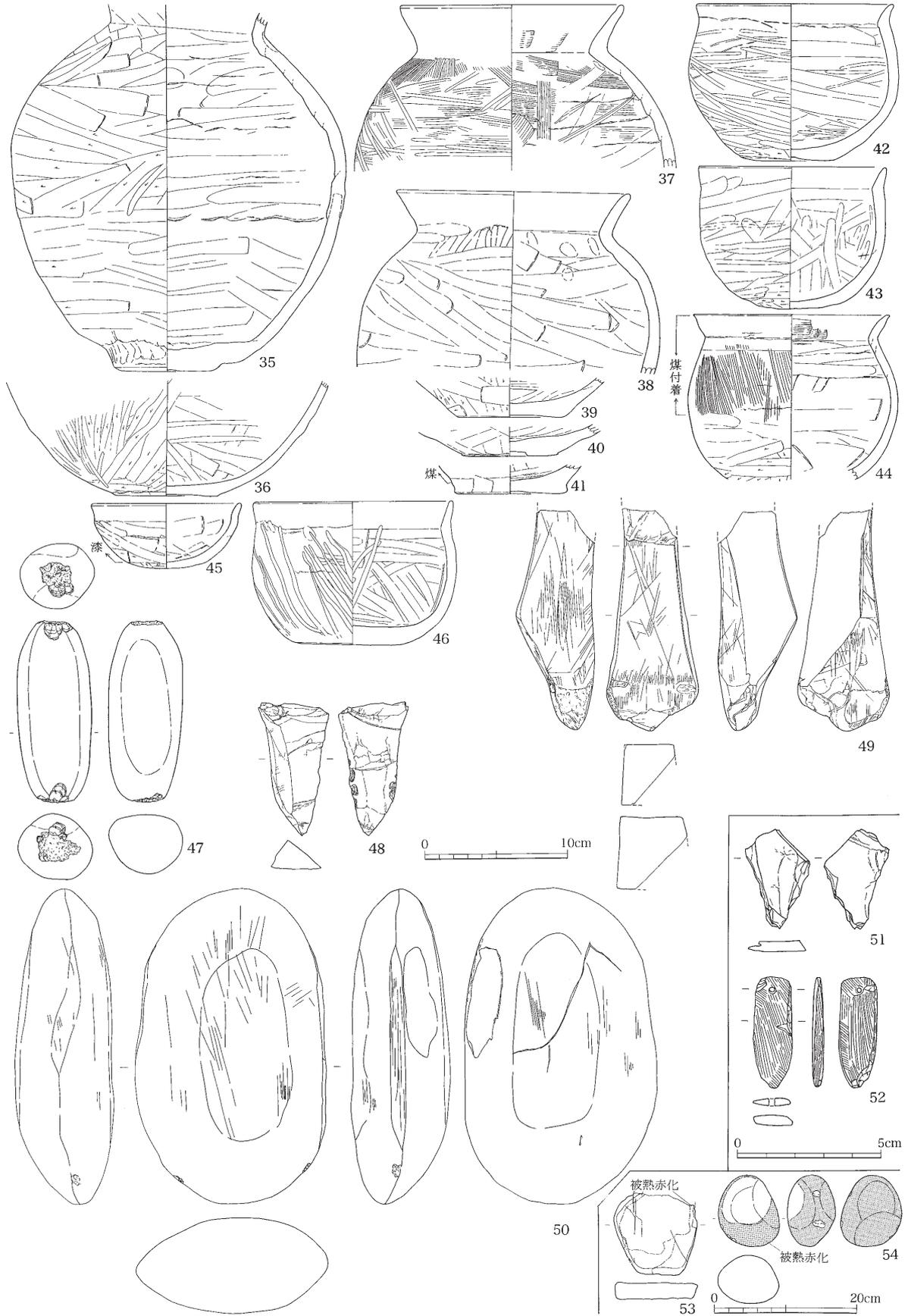
弥生前期後半～中期前半と思われる条痕文系の弥生土器甕類がややまとまって混入するので(『東谷・中島地区遺跡群10』p.88)、この建物が弥生時代の遺構か包含層を壊している可能性がある。流紋岩の石核(前掲書p.102)や多孔質安山岩片も出土し、弥生時代の石器も含むかもしれない。

第8章 権現山遺跡 SG5 区



- SG5区SI-116
- 1 暗黄褐色 ローム粒少・焼土極微量。しまり有。粘性やや有。土師器片含む。
 - 2 黒褐色 ローム粒少・焼土・炭化物若干。しまりやや弱。粘性やや有。土師器片含む。
 - 3 暗褐色 ローム粒・焼土少。土師器片含む。しまりやや弱。粘性なし。
 - 3' 暗黄褐色 ローム粒多・焼土・炭化物若干。しまり有。粘性なし。
 - 4 暗黄褐色 ローム粒多・炭化物・焼土少。しまり・粘性有。土師器片含む。
 - 5 黄褐色 ローム塊(径3~5cm)・黒色塊(径1~3cm)多。硬。しまり有。粘性有。貼床。
 - A 黒褐色 表土。テフラ分析報告による。
 - B 黒褐色 テフラ分析報告による。
 - C 土層の特徴不明。
 - 床1 黄褐色 ローム大塊多。しまり有。
 - 床2 暗黄褐色 ローム粒多・ローム小塊・焼土若干。しまり有。
- P1
- 1 暗黄褐色 ローム粒少。しまり有。
 - 2 黄褐色 ローム大塊多。しまり有。
 - 3 暗黄褐色 ローム粒少。しまり弱。
- P2
- 1 暗黄褐色 ローム粒多。しまり有。
 - 2 黄褐色 ローム大塊多。しまり有。
 - 3 黄褐色 ローム大塊・粒少。しまり有。
 - 4 暗黄褐色 ローム粒少。しまり有。
 - 5 暗黄褐色 ローム大塊・粒多。しまり弱。
 - 6 黒色 ローム粒若干。しまり弱。
- P3
- 1 暗黄褐色 ローム粒少。しまり有。
 - 2 暗黄褐色 ローム小塊・粒少。しまり有。
 - 3 黄褐色 ローム小塊少。しまり有。

第332図 権現山遺跡 SG5 区 SI-116 (1) 遺構・遺物



第333図 権現山遺跡 SG5区 SI-116(2) 遺物

第 192 表 権現山遺跡 SG5 区 SI-116 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.6 高 7.0 底 3.9	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部下端ケズリのち体部光沢を持つヘラナデ。底部ナデで、平底であり、中央のみ小さくくぼむ。内面口縁部軽いヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白粗～微粒と赤粗～ 細粒と透明・砂細～微粒少 硬質	北部床上 3cmと床直上 ほぼ完形 13、19、35
2 土師器 杯	口 復 12.0 高 7.7 最大 復 12.5	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。底部は丸味を持つ平底で、ややいびつ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗粒微量 硬質	北壁溝底上 23cm 口～底 1/5 周 6
3 土師器 杯	口 復 14.8 高 6.9	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデのち底部わずかにケズリのち体部疎らな横方向のミガキ。底部いびつな丸底。内面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ。体～底部ヘラナデ・ナデのち疎らなミガキ。内面体～底部のミガキには、光沢を持つヘラナデと言えそうな幅広いものあり。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・赤・灰色・透明細粒 少、白粗粒微量 硬質	南東部床上 1cm正位 口～体 1/2 周、底完存 60
4 土師器 杯	口 14.2 高 7.4 底 6.6	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち底部ケズリのち体部疎らなミガキ。ミガキは横ないし斜め方向で、ヘラの先端で引かれるような細いミガキが斜め方向のものによく見られる。底部は大きく突出する特徴的な形状で、厚く重い。内面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ、体部ヘラナデのち疎らなミガキ。底部も体部と同様と推定されるが、表面剥落のため不明。底部中央にヘラの当たりのみが残る。内外面口縁～体部一部に煤付着。外面底部は被熱のためか、やや赤変する。煮沸用に使用された可能性あり。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗粒多、白礫と砂 粗～細粒微量 やや硬質	東部床上 1cm逆位 ほぼ完形 47
5 土師器 杯	口 復 12.6 高 5.7 底 復 3.8	内斜口縁。薄手で硬質。外面口縁部ヨコナデのち体～底部ヘラナデ。底部は全体がくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂・透明粗粒少 硬質	中央部床上 17cm 口～底 1/4 周 43
6 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 6.1	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。体部上半に無調整部分あり。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内外面とも、クレーター状の剥落著しい。外面口縁～体部は被熱により赤変している。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 黒粗～微粒と赤・砂 微粒少、黒・砂礫微量 やや硬質	貯蔵穴 P3 底直上 口～体 1/3 周 77
7 土師器 杯	口 12.6 高 6.1 底 2.7 最大 13.4	内斜口縁。成形・調整とも丁寧だが、外面体部調整のみ乱雑。外面口縁部ヨコナデのち体部荒いナデ。底部ナデで、くぼむ。底部平面形はいびつな円形。内面口縁～体部中位ヨコナデ・体部下～底部ヘラナデのち体～底部多方向の疎らなミガキ。	7.5YR6/6 橙 緻密 白微粒少、赤粗粒と透明 微粒微量 硬質	貯蔵穴 P3 底上 34cmと P2 底上 79cm 口～体 4/5 周、底完存 66、67
8 土師器 杯	口 復 14.6 高 4.9	外面口縁部ヨコナデ、体～底部やや荒いナデで、体部上端に無調整部分あり。体～底部には、数本一組となる細い線刻が3組描かれる。横線4本の後に、中央部の縦線4本と右部の縦線3本を描く。中央部と右部の縦線は図の上端で下側へもう少しV字形に折り返す。内面口縁～体部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。体～底部はミガキが施されるようにも見えるが、クレーター状の剥落が著しく、不詳。外面は被熱のため赤変している部分が多い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・灰色礫と白・赤 細粒少 やや硬質	貯蔵穴 P3 底上 10cm 口～底 1/2 周 79
9 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 5.2	口縁部は大きく外反する。外面体部ナデのち口縁～体部上半ヨコナデのち口縁～体部疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部強いナデ。外面は煤付着のためか、全体に黒褐色。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細粒と細砂粒と微 砂粒少、赤粗粒微量 硬質	北東部床上 11cm 口～体 1/4 周 11
10 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.6 最大 復 13.4	内斜口縁。成形はやや荒い。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。体部上端に無調整部分あり。内面口縁部ヨコナデのち口縁～体部強いナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～微粒微量 やや軟質	口～体 1/3 周
11 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 5.9 最大 復 12.2	内斜口縁。外面口縁部わずかなヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部横方向の強いヘラナデのち縦方向の疎らな太いミガキ。外面体部中位に煤がごく少量付着、体部下～半は被熱により赤変しており、煮沸用に使用したかもしれない。内面口縁～体部クレーター状の剥落著しい。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗 ～細粒微量 やや軟質	北東部床上 23cm 口～体 1/4 周 1
12 土師器 杯	口 復 11.2 高 残 4.9	外面口縁部ヨコナデのち体部ナデ。内面口縁～体部ヨコナデのちナデのちわずかにミガキ。内外面体部のナデは、細かな条線を伴う。荒れた工具のためか。外面口縁部と胴部下位に部分的にタール状の黒色物質が付着する。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～微粒少、白粗 ～細粒微量 やや硬質	口～体 1/4 周
13 土師器 杯	口 復 14.2 高 残 4.2	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち疎らな縦方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部放射状と見られる密なミガキ。内面口縁部もミガキと思われるが、表面が細かく剥落しているため不詳。外面体部一部被熱により赤変。内面体部一部黒色物質(煤か?)付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・透 明細粒少 やや硬質	東部床上 4cm 口～体 1/3 周 38
14 土師器 杯	口 復 13.8 高 3.9 底 復 3.2	歪みあり。口縁部やや外反する。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち体部ナデのちわずかにミガキ。底部はいびつな平底と見られる。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部強いナデのち疎らな放射状のミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 白礫微量 硬質	口～底 1/6 周 貼床
15 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 3.6	浅い半球状。外面口縁部ヨコナデ、体部強いナデのち光沢を持つナデがわずかに施される。体部上端無調整。内面口縁～体部ヨコナデのち体部強いナデのち光沢を持つナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・透明細粒少、 白粗粒微量 やや硬質	東壁際床上 20cm 口～体 1/4 周 53
16 土師器 杯	口 復 13.2 高 4.5 底 5.8	体部は直線的に開き、9世紀代の須恵器杯のような形状となる。口縁部はやや内彎する。表面全体が磨滅し、内面はさらにクレーター状に剥落するため、調整不明な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。底部ケズリのちナデで、丁寧に平底に仕上げられる。内面ヨコナデおよびナデと思われるが、不詳。ミガキの可能性あり。内外面全体の赤みが強く焼成されている。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤・半透明粗粒 少 やや軟質	中央部床直上 口～体 1/6 周、底 1/2 周 46
17 土師器 杯	口 復 15.5 高 4.7 底 5.8	16に類似する、9世紀代の須恵器杯のような形状。外面調整は荒いが、内面は比較的丁寧に仕上げられる。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデで、上半には粘土の皸が著しい。皸のあるところだけに幅の狭いナデが集中する。修正しようとしたものだろう。底部ナデで、平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのちナデ。口縁部は幅 1.5cmほどの面となる。内外面口縁～体部の一部に黒色物質(煤か?)付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・赤・砂微粒 少、白・黒・赤礫～粗粒と砂礫 微量 硬質	北壁際床上 15cm 口～体 1/4 周、底完存 18
18 土師器 杯	高 残 3.9 底 4.2	外面体部上半ナデのち下半ケズリのち疎らな太いミガキ。底部ケズリのち疎らな太いミガキで、全体に浅くくぼむ。内面体～底部ヘラナデのち疎らな放射状の太いミガキ。内面ヘラナデは工具先端が荒れているためかハケ状に見えるところがある。ミガキは 90°あたり 3～4本でやや規則的。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 透明粗粒微量 やや硬質	体 1/6 周、底完存

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

19 土師器 鉢か？	高底 残 3.0 3.5	内外面とも調整は荒い。小形甕の可能性もあろう。外面体部ケズリ、底部ナデで、平底。内面体～底部強いヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白礫 ～細粒と透明細粒微量 やや硬質	東壁際床直上 体下半～底完存 52
20 土師器 鉢	高底 残 4.2 4.6	外面体部下端～底部ケズリのち体部ナデ。体部上位には、幅広いミガキが疎らに施される。底部は大きくくぼむ。内面体～底部ヘラナデのちおおむね放射状となる疎らな幅広いミガキ。	10YR7/4 にぶい黄褐 やや緻密 白・赤粗～細粒少 やや硬質	東壁際床直上 26cm 体 1/5 周、底完存 14
21 土師器 小形土器	口高 復 9.4 4.0	鉢形。外面口縁～体部わずかなナデとヘラナデ、底部ケズリ。底部のケズリは荒く、粘土のめくれが顕著。尖った工具を刺した痕跡あり。内面口縁～底部荒いナデのち部分的に丁寧なナデ。内面黒褐色。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明細～微粒 少、白粗粒微量 やや軟質	口 1/6 周、体～底一部 欠
22 土師器 高杯	口高 復 16.8 残 5.5	外面杯部口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ、体部ケズリのちナデのち疎らなミガキ、底部ケズリ。ミガキは縦→横の順に施される。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部ケズリのち口縁～底部疎らなミガキ。ミガキは縦→横の順に施される。杯部体部内外面の一部に煤のような黒色物質付着。杯部底部径 6cm。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 砂粗～細粒少、白微 粒微量 やや硬質	P1 付近床直上 杯口～底 1/6 周 30
23 土師器 高杯	高底 残 3.5	外面体～底部丁寧なナデのち体部縦方向の疎らなミガキ。稜部分の径は 6.2cm。底部欠損面は脚部との接合面と見られる。内面体～底部ナデのち疎らな放射状と見られるミガキ。内面は被熱のためか表面の剥落が著しい。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・半透明粗粒多、 砂礫・黒粗粒少 やや硬質	貯蔵穴 P3 直直上 杯体～底 1/2 周 74、16 貯
24 土師器 高杯	口高 復 19.8 残 3.2	杯部二重口縁状。外面杯部口縁～体部ヨコナデのちミガキ。ミガキは主に縦方向で、残存部下端に横方向のミガキが見られる。体面杯部口縁～体部ヨコナデのちミガキ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・黒・赤・砂微粒 多、赤礫少、赤細粒微量 硬質	北部床上 9cm 杯口～体 1/5 周 16
25 土師器 高杯	口高 復 19.0 残 4.8	外面杯部口縁～体部ヨコナデのち疎らな縦方向のミガキ、底部ケズリのち縦方向の疎らなミガキ。内面杯部体～底部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデのち体～底部やや疎らなミガキ。ミガキは縦→横の順に施される。杯部は、円盤状の底部に口縁～体部をのせて作出される。	10R5/8 赤 やや緻密 白・赤微粒少、透明 細粒微量 やや硬質	D2 底上 39cm 杯口～底 1/4 周 20
26 土師器 高杯	口高 復 21.0 残 7.2	外面杯部の成形が甘く、紐積痕が残る。外面杯部体～底部 5 本/1cm のハケのち口縁部ヨコナデ。内面口縁～底部 5 本/1cm のハケのちナデ、ヨコナデのち斜位の疎らなミガキ。被熱により内外面とも表面が赤変・磨滅する。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・透明細～微粒多 やや軟質	北部床上 9～15cm 杯口～底 1/3 周 9、28
27 土師器 高杯	高底 残 6.2	外面脚部上半径方向の密なミガキ。内面脚部上半ナデ、上半ケズリ。内面のケズリにより器壁が薄く仕上げられる。上端には削れなかった紐積痕が残る。下端欠損面はやや磨滅しており、脚部下半を人為的に打ち欠いた状態で使用された可能性がある。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤礫～細粒・黒粗～ 微粒と砂礫～微粒と白微粒多 硬質	北部床上 1cm 脚上半完存 29
28 土師器 高杯	高底 残 8.5	外面脚部上半ナデのち疎らなミガキ。上端には、ヘラの当たりのような跡が斜位に付けられる。残存部下端にも一部にあり。内面脚部上半紐積痕をそのまま残す。上端欠損面はやや磨滅しており、杯部を欠損した状態で使用された可能性がある。下端も人為的な欠損かもしれない。残存部上端径 3.7cm。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 硬質	中央部床上 3cm 脚上半完存 40
29 土師器 高杯	高底 残 7.5	柱状脚。外面脚部上半幅広い強いミガキ。上端には段差が作出されている。柱状部ほぼ中央に孔あり。径 3.1 × 3.3mm、深さ 1.7mm。内面脚部上半ナデで、しばり目が顕著。脚部上方の欠損は人為によるものの可能性あり。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒細粒と白細～微粒 少、白・赤粗粒微量 硬質	脚上半 1/2 周
30 土師器 高杯	高底 残 7.7	外面脚部上半ナデのち縦方向のやや密なミガキ。内面杯部底部ミガキ、脚部斜位に付けられる。残存部下端にも一部にあり。上端は杯部との接合面での欠損、下端は外面からの人為的な打ち欠きによる欠損の可能性あり。脚部上端復原径は 4.0cm。	10YR4/2 灰黄褐 やや緻密 白微粒少、白・赤粗 粒微量 硬質	北部床上 5cm 脚上半 2/3 周 22
31 土師器 小形壺	高底 残 5.1 胴 復 8.0	小形。体部は調整により八角形状を呈する。外面体部上半ナデ後縦方向の太いミガキ、体部下半ケズリ後体部中位～下半横方向の太いミガキ。底部ナデで、平底。内面体部ナデ、底部荒いヘラナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 緻密 白・赤粗～細粒微量 やや軟質	D2 底上 9cm 逆位 体 1/4 周、底完存 21
32 土師器 小形壺	口高 最大 6.6 6.8 2.5 7.9	小形。軟質のため表面がやや磨滅している。外面口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。体部ナデのち中位～下半ケズリのち上半～中位に疎らなミガキ。底部はナデで、くぼむ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのちわずかに縦方向の荒いミガキ。体部上半ナデ、体部下半～底部ヘラナデ。口縁部上端はほとんどが欠損ないしは磨滅により失われている。体部下半には 1.5 × 2.1cm の孔があり、内側からの刺突による人為的穿孔と見られる。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・赤・透明細～微 粒多、白・赤粗粒少 やや軟質	貯蔵穴 P3 底上 18cm ほぼ完形 72
33 土師器 小形甕	高底 残 3.0 7.0	底部中央 1 孔。外面体部下端～底部ナデ、内面底部ヘラナデ。孔内面はケズリ。	5YR6/8 橙 緻密 白細粒と透明微粒微量 やや軟質	底 1/2 周
34 須恵器 壺	高底 残 4.2	薄手。外面胴部下半丁寧なロクロナデのち一部ナデ。内面胴部下半強い回転ヨコナデにより、ロクロ目が明瞭に残る。内面胴部下半わずかに自然釉付着。甕の可能性もある。破面は灰赤色 (10R5/2)。SK-51 出土破片と同一個体。	5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒微量 硬質	胴下半 1/6 周
35 土師器 甕	高底 残 25.7 7.5 最大 復 23.3	底部上 12cm 付近に積み上げ休止による接合面があり、これより下は丁寧に、上は粗雑な調整となっている。外面胴部中位ケズリのち頸部～胴部上半ヘラナデ・胴部下半ナデ。底部はナデで、突出する平底。内面頸部ヨコナデ、胴部上半～中位強いナデで、上半には紐積痕が残る。接合面付近は、継ぎ目と器壁の変化が顕著。胴部下半～底部ヘラナデで、底部中央がややくぼむ。外面胴部中位～下半に煤が少量付着するが、煮炊に用いたと考えられるほどではない。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤礫～細粒少、白粗 ～細粒と砂礫微量 やや軟質	東壁際床直上 1～20cm 頸～底一部欠 50、53、56、61、62、63、 65、貼床
36 土師器 甕	高底 残 8.1 7.1	薄手・硬質。底部上約 5cm に積み上げ休止による接合面があり、外面に段差として残る。外面胴部下半～底部ケズリ。ケズリは幅が狭く、光沢を持つ。底部はわずかに突出する平底。内面胴部下半～底部ヘラナデ。破損後の被熱等により、色調の異なる破片が接合する。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白細～微粒少、白礫 微量 硬質	胴下半～底 1/3 周
37 土師器 甕	口高 残 15.4 11.6	口縁部上端は、受け口状にわずかに内彎する。口縁部ヨコナデのち胴部上半 6 本/1cm のハケのち疎らなミガキ。内面口縁部 6 本/1cm のハケのちヨコナデ、胴部上半 6 本/1cm のハケで、一部にナデあり。紐積痕顕著。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 白粗粒と赤粗～細粒 と黒・透明細粒少、白礫微量 やや硬質	東壁際床直上 2～5cm 口～胴上半一部欠 58、61
38 土師器 甕	口高 復 16.3 残 12.5 最大 21.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部上端縦方向のナデのち胴部上半横方向の強いナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。胴部中位の欠損面はほぼ平坦で、端部はやや磨滅しており、胴部下半を欠損した状態で使用されていた可能性がある。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗粒多、白・砂礫 少、赤粗粒微量 やや硬質	貯蔵穴 P3 底上 4cm 口 1/2 周、胴上半完存 71

第8章 権現山遺跡 SG5 区

39 土師器 壺か甕	高底 残 2.8 復 7.3	外面胴部下端～底部ケズリのち一部ナデ。底部は平底で、全体にわずかにくぼむ。内面底部 4 本 /1cm のハケのちヘラナデ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明細粒多、 白・半透明粗粒少、黒細粒微量 硬質	底ほぼ完存
40 土師器 甕	高底 残 2.1 復 6.6	外面胴部下端～底部軽いナデ。底部は平底でドーナツ状に外周が高くなっており、内周・外周とも縁辺は粘土がめくれた状態になっている。内面底部ナデで、中央がくぼむ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤微粒少、白礫 微量 硬質	胴下端～底 1/3 周
41 土師器 甕	高底 残 2.0 復 7.8	外面胴部下端～底部ナデ。底部は突出する平底で、外周周りがドーナツ状に高く、中央がくぼむ。内面底部ヘラナデ。外面胴部下端煤附着。	7.5YR5/4 にぶい褐 緻密 白礫～細粒少 硬質	南東壁際床上 5cm 底完存 64
42 土師器 甕	口高底 復 14.2 高 10.9 底 6.5	小形。外面胴部上半ヘラナデ・胴部下端～底部ケズリのち口縁部ヨコナデ・胴部疎らなミガキ。底部はいびつな平底で、中央のみ深くくぼむ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・底部ケズリのち胴部中位と底部付近に疎らなミガキ。外面胴部中位～下半が少し黒色味を持つ。煤か？	10YR4/1 褐灰 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 白・赤礫微量 やや硬質	P1 付近床上 5～9cm 口～胴 2/3 周、底ほぼ 完存 31、33、34
43 土師器 甕	口高底 残 13.0 高 10.0 底 4.5	小形。42 に類似。外面口縁部ヨコナデのち胴部ナデのち胴部下端～底部ケズリのち胴部下半疎らなミガキ。ミガキは乱雑で底部も明瞭ではないが、ここでは中央の比較的平坦に見られる部分を底部とした。その周囲のケズリを含めると、底径は約 8cm になる。底部は荒い調整に加え、混和材の焼成による膨張により安定しない。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ナデのち底部を中心とした放射状のやや疎らな幅広いミガキ。	2.5Y7/4 浅黄 やや緻密 赤粗～細粒と白細～ 微粒少、白礫～粗粒微量 やや硬質	P1 付近床上 5～9cm 口～胴 1/2 周、底ほぼ 完存 17、31、34
44 土師器 甕	口高最大復 復 13.6 高 11.5 最大 復 14.6	小形。42・43 に類似するが、胎土・調整ともより良質。外面胴部上半 6 本 /1cm のハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下半ナデ。胴部下半はその後ケズリ。内面口縁部 6 本 /1cm のハケのちヨコナデ、胴部上半ナデで、紐積痕顕著に残る。胴部中位～下半ヘラナデ。外面口縁部および胴部中位煤附着。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・半透明細粒多、 赤粗～細粒微量 硬質	北東部床上 5～9cm と貯 蔵穴 P3 底上 34cm 口～胴 1/2 周 31、36、37、66
45 土師器 杯	口高 残 10.4 高 4.6	外面口縁部ヨコナデ・体部下半～底部ケズリのち胴部ナデ。底部は丸底で、体部との境目は緩やかな稜となる。内面体～底部ヘラナデのち口縁～底部ヨコナデ。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。古墳終末期中葉の遺物が混入。	10YR7/6 明黄褐 緻密 白・黒微粒少、白・透 明・黒細粒微量 やや硬質	口～底 1/3 周
46 土師器 鉢	口高最大復 復 13.9 高 10.0 底 7.0 最大 復 14.2	外面口縁部ヨコナデ、体から底部ナデのち体部疎らなミガキ。底部は厚い平底で、植物の繊維と見られる圧痕がある。内面口縁部ヨコナデ、外面口縁部と内面体部下位の一部分に漆附着。全体が漆仕上げされた状況ではない。古墳後期遺物の混入の可能性あり。	5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・赤粗粒微量 硬質	貯蔵穴 P3 底上 23cm 口～体 1/4 周、底完存 81
47 石器 敲石	長幅重 残 12.5 幅 5.1 重 422.0	棒状の河原石を素材とする。上下両端がほぼ平坦な敲打面となっており、敲打に伴う小さな剥離が周囲にある。	10YR7/2 にぶい黄橙 やや緻密 安山岩	東部床直上 完形 49
48 石器 剥片	長幅厚重 残 9.1 幅 4.7 厚 2.4 重 70.3	二等辺三角形の厚手な縦長の剥片。表面右は下からの剥離面、左は遠い打点からの横方向の剥離である。裏面は一回の剥離面ではなく、上端のみ潜在的な割れによる剥離面と見られる。石質から軟質な砥石との関連が想定される。	2.5Y8/3 淡黄 緻密 白色凝灰岩	中央部北寄り 8cm 完形 26
49 石器 砥石	長幅厚重 残 15.2 幅 6.3 厚 5.2 重 495.7	四角柱状。四面ともほぼ同様に使用されており、砥石長軸方向ないし斜位の擦痕が残る。表面および左側面の中央部は、ごく浅い溝状にくぼむ。裏面下半の斜位の面も使用され、多数の条線と、幅 7mm 程の溝および擦痕が残る。石器下端は節理面および製作時の剥離・敲打面である。右側面～裏面の欠損の両側縁には深く刻まれた擦痕があり、擦り切りにより分割された可能性がある。上端の欠損部縁はやや磨滅しているため、欠損後も砥石として使用されたかもしれない。	7.5Y4/1 灰 緻密 泥岩	貯蔵穴 P3 底直上 一部欠 73
50 石器 砥石	長幅厚重 残 21.8 幅 13.1 厚 6.7 重 2840.0	河原石を素材とする大形の砥石。上下両端付近を除きほぼ全面が使用により研磨され、わずかに擦痕が残る。表裏両面の中央付近が最も研磨されている。左右両側縁は研磨により平坦面となる。	2.5GY6/1 オリーブ灰 緻密 ホルンフェルス	貯蔵穴 P3 底上 6cm 完形 78
51 石器 剥片	長幅厚 残 3.5 幅 2.2 厚 0.37	いびつな菱形の剥片。右上の側面は厚手の表面と見られる。表裏面は板状に剥離する節理面で割れており、右上を除く側面は整形のために打ち欠かれた可能性がある。石製模造品の素材か。重量 3.2g。	5B2/1 青黒 緻密 粘板岩	完形
52 石製模造品 剣形	長幅厚重 残 3.8 幅 1.3 厚 0.4 重 3.7	表側左上と右側縁および左下の側面に形割時の剥離面を残す。表側中央にガジリあり。研磨痕は光沢の弱い条線状で、表裏側とも大きく平面的に研磨するほか、上端と右側縁のみ少し向きを変え、面取り状に研磨する。表裏側は、長軸および短軸両方向にわずかに彎曲する。上端の面は孔と平行に、両側面は長軸と平行に研磨。穿孔は表側からと見られ、孔径は表側 1.76mm、裏側 1.66mm で、裏側の孔周囲は小さく剥離する。	2.5GY5/1 オリーブ灰 緻密 滑石	完形
53 礫	長幅厚 残 11.0 幅 11.5 厚 2.5	河原石。特に加工の痕跡なし。板状で、表裏とも周縁部が被熱により赤変しており、中央部は変色しない。被熱による焼けハジケのためか、表面の一部が欠損する。残存重量 507.3g。	5Y6/2 灰オリーブ やや粗い 流紋岩	中央部床上 36cm 一部欠 41
54 礫	長幅厚重 残 9.8 幅 8.4 厚 6.7 重 726.7	河原石。特に加工の痕跡はないが、上下両端部付近は表面が平滑となっており、磨石の可能性も考えられる。右および左下の側縁部には、鋭利な工具によると見られる欠損がある。発掘時の欠損であろう。	5Y6/2 灰オリーブ やや緻密 安山岩	貯蔵穴 P3 底上 50cm ほぼ完形 75

SG5区 SI-137 (第334図、写真図版42)

〔位置〕 SG5区中央の13-17、14-17グリッド。東側は低地に向かって傾斜する。同じく古墳後期のSI-19・21が北と東に近接する。古墳中期の方形柵列SA-151の南辺を切る。中央が確認調査時のトレンチで切られるので、SA-151との新旧がやや不確実だが、同じく古墳後期前葉のSI-18がSA-151を切るので妥当と思われる。

〔規模と形状〕 方形で、東西6.10×南北6.05m、中軸線はN-1°-E、残存壁高は10～30cm。南壁の方が高くてややなだらかに外傾する。床はほぼ平坦で傾斜しない。掘方は床面から深さ4～12cmで、底面に細かな凹凸があり、ローム粒多量・ローム塊少量と、焼土・炭を含む黄褐色土の5層で貼床する。

主柱穴4本はP1が径24×30×深さ35cm、P2は径34×38×深さ31cm、P3は径32×35×深さ31cm、P4は径24×28×深さ35cm。P1-P2間が2.35m、P3-P4間が2.31m、P1-P4間が2.17m、P2-P3間が2.21mで、東西が南北より若干短い。

南東隅と南西隅で、貯蔵穴P5とP6を確認した。どちらも東西軸の長方形である。P5は58×113×深さ29cmで、底面も長方形で壁は直線的で、覆土1～2層にしまりが無い。P6は72×97×深さ23cmで、底面は丸みがあって壁が緩く、覆土1～3層は自然堆積状だが1・2層にロームが多くてP5より覆土がしまるので、建物廃絶時に埋め戻されたかもしれない。貯蔵穴が2箇所建物はSG5区SI-11などがある。

〔カマド〕 東壁中央の南寄りにある。両袖幅95cm、煙道先端から焚口まで95cm。貼床上に灰色粘土主体の6・7層で袖を作る。火床上に4層の灰が薄く堆積し、そので焼土多量・粘土少量を含む2層は天井内壁が崩れたと思われる。煙道先端は東壁部で緩く上がる。縦位で出土した土師器甕(13)の破片は、南袖の焚口を補強する位置にある。北側で出土した大形の自然礫(17)を支脚に使ったとも考えられる。

〔覆土〕 レンズ状の自然堆積で、1層に焼土粒を若干含む。

〔遺物出土状況〕 土師器甕3点(11～13)はカマド周辺にあり、14だけは南部にも破片がある。7の杯は、埋め戻されていた可能性のある貯蔵穴P6内ではなくて、P6開口部上方で出土した。

〔出土遺物〕 少なめである。土師器は甕が主体で杯もやや多い。杯は個体数が多く、半球状と外反口縁の杯が主体で、身模倣形・蓋模倣形・外傾口縁の杯は少ない。1・2・5は漆仕上げで、4も可能性がある。3・7は漆不使用のミガキ仕上げ、6は赤彩。甕は図示した3点の形が似ている。この3個体の甕破片は多いが、接合できなかったものが多い。11と12は同一個体の可能性もある。14はハケ調整の長甕。

図示以外の土師器と焼粘土塊は合計543片・5,548gで、内訳は杯145片・650g、高杯21片・379g、鉢7片・181g、壺甕類368片・4,324g、焼粘土塊2点・14g。身模倣形の杯破片も少しある。高杯や椀形杯は小片で、そのほとんどは先行する時期の混入遺物と見られる。粘板岩のような石の小破片も見られた。

大小様々で形も色々な礫が多く、大きさは大(長径20～30cm)・中(長径14～20cm)・小(長径7～14cm)に大別できる。形は厚みがある不整三角形、薄い楕円形、棒状がある。明確な加工はなく、剥離がある礫が少しみられる。安山岩・流紋岩が主体で、鬼怒川の石と見られる。

第193表 権現山遺跡SG5区 SI-137 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.2 高 3.5	薄手。外面底部ケズリのち口縁～底部密なミガキ。体部下半～底部は一方 向。口縁～体部上半は円周方向のミガキ。内面口縁～底部密なミガキ。外 面中位以上と内面漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 砂・赤微粒微量 硬質	口～体 1/4 周
2 土師器 杯	口 復 13.0 高 残 4.1	薄手。外面口縁部ヨコナデのちヨコ方向の疎らなミガキ、体部ナデで、一 部光沢あり。内面口縁部ヨコナデのち口縁～体部ミガキ。口縁部はヨコ方 向でやや疎ら、体部は太く多角形状に密にミガキが施される。内外面でも 表面にドット状に黒色物質が付着する。漆仕上げの可能性ある。	2.5YR7/8 橙 緻密 白微粒少、赤細粒微量 やや硬質	口～体 1/4 周
3 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 4.7	椀形厚手。外面口縁部ヨコナデのちヨコ方向のミガキ。体部丁寧なナデの ちわずかにミガキ。内面口縁部ヨコナデのち口縁～体部ヨコ方向の密なミ ガキ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒と白細粒少 硬質	口～体 1/4 周 貯穴

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

4 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 4.9	軟質で厚い。内外面とも表面の剥落が著しく、調整不明瞭。口縁端部は細かく剥離している部分が多い。外面口縁部ヨコナデのちわずかにミガキ、体部ナデ。内面口縁部ヨコナデのちヨコ方向のミガキ、体部ヨコ方向のミガキ。内面口縁～体部一部黒色物質付着。漆仕上げの可能性もある。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗粒多、赤細粒少、 白粗粒微量 やや軟質	南部床上 13cm 口～体 1/2 周 24
5 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.5	薄手、硬質。外面口縁部ヨコナデで、端部は丸くややふくらむ。体～底部ケズリのち丁寧なナデで、口縁部との境は段になる。内面体～底部丁寧な放射状のナデのち口縁部ヨコナデ。外面口縁～体部、内面全体漆仕上げ。	7.5YR5/4 にぶい橙 緻密 赤礫と透明細粒と白微粒 微量 硬質	口～底 1/5 周
6 土師器 杯	口 復 16.0 高 残 5.0	外面口縁部ヨコナデ、体部光沢のあるナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち密なミガキ。ミガキは口縁部はヨコ方向主体、体部は放射状。外面口縁部上端・内面全体赤彩。	2.5YR4/8 赤褐 緻密 白細～微粒と黒細粒少 硬質	南部床上 5～10cm 口～体 1/2 周 15、18
7 土師器 杯	口 復 14.6 高 残 4.1	表面が磨耗、剥落している部分が多く調整が不明瞭。外面口縁部ヨコナデ、体部でいねいなケズリで、上半は無調整であり、粘土のシワが顕著に残る。内面口縁部ヨコナデのちヨコ方向のミガキで、口縁端部内側には浅く沈線が施される。体部放射状のミガキ。内面のミガキはさほど密にならないと見られる。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤微粒少、赤礫 微量 やや硬質	貯蔵穴 P6 底上 31cm 口～体 1/4 周 42、貯穴
8 土師器 鉢	口 復 12.6 高 残 6.6	外面口縁部ヨコナデのち体部軽いナデのち体部疎らなタテ方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細粒 微量 やや硬質	カマド南側床上 3～10 cm 口～体 1/3 周 45、10
9 土師器 鉢	高 残 2.3 底 3.8	外面体～底部ナデのち体部疎らなタテ方向のミガキ。底部は全体的にくぼむ。内面体部下～底部放射状の強いミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白微粒 微量 硬質	体下半 1/3 周、底一部 欠
10 土師器 鉢か	高 残 2.3 底 4.4	内外面とも表面の磨耗著しい。外面体部下～底部ナデと見られる。底部は中央が丸く大きくくぼむ。内面体部下～底部ヘラナデで、ヘラの当たりが明瞭に残る。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤・半透明粗粒 多、黒細粒微量 やや軟質	南部床上 13cm 底部完形 20
11 土師器 甕	口 8.6 高 残 17.8 最大 復 21.0	外面胴部上半～中位丁寧なヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁～胴部中位強いヘラナデのち口縁部ヨコナデ。外面中位以下のナデは丁寧なナデ。12と同個体の可能性あり。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白細粒と赤透明微粒 少、白礫微量 やや硬質	カマド南側の床上 5cmと カマド北袖付近床上 1cm 口 5/6 周、胴上 1/2 周、 胴中一部 5、9、47、K
12 土師器 甕	高 残 4.4 底 復 7.4	外面胴部下端丁寧なケズリ。底部はケズリと見られるが、被熱のため表面の剥落が著しく不明瞭。内面胴部下端～底部ヘラナデ。11と同個体の可能性あり。	10YR4/1 粗い 砂礫～粗粒多、白細粒少、 赤透明細粒微量 やや硬質	カマド南側の床上 5cm 胴下～底 1/2 周 5、9
13 土師器 甕	口 復 20.0 高 残 21.6 最大 23.8	長胴。外面口縁部ヨコナデ、胴部上半ナデ。内面口縁～胴部中位ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。外面胴部中位被熱により赤変。 [注記]5、9、49、50、カマド	10YR7/11 にぶい黄橙 粗い 白礫と砂粗～細粒多 硬質	カマド南側の床上 5cmと カマド内床上 8cmとカマド 南袖底上 2cm 注記は左欄
14 土師器 甕	口 19.0 高 残 17.5 最大 復 22.9	長胴。外面口縁～胴部上半 1cm 当たり 7 本のハケのち胴部上半削りのち口縁部ヨコナデ。内面口縁の胴部上半外面と同様のハケのち口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラナデ。口縁部は端部のみ内彎し、内側に浅い沈線があるような形になる。	7.5YR7/6 橙 粗い 白粗～細粒多、白・赤礫 と赤粗粒と透明・砂粗粒少 や や硬質	東壁際床上 9cmと南部床 上 2～11cm 口～胴上半ほぼ完形 2、23、31、37
15 土師器 甕	高 残 2.4 底 復 9.0	胴部がかなり張ると思われる。胴部下端ナデのちミガキ、底部ナデ。底部は突出する平底で、全体にくぼむ。内面底部ヘラナデ。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白・半透明粗粒微量 硬質	胴下～底部 1/2
16 土師器 甕	高 1.3 底 5.2	外面胴部下端でいねいなナデ。底部木葉痕で平底。内面底部ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 透明微粒少、白微粒 微量 硬質	東部床直上 底部完形 12
17 礫	長 19.5 幅 8.1 厚 4.7	河原石。特に加工の痕跡はないが、上半 1/3 ほどが被熱により赤変している。カマド支脚として使用された可能性がある。重量 1242.5g。	5Y5/1 灰 やや緻密 ホルンフェルス	カマド北側の床上 3cm 46

SG5 区 SI-155 (第 335 図、写真図版 42)

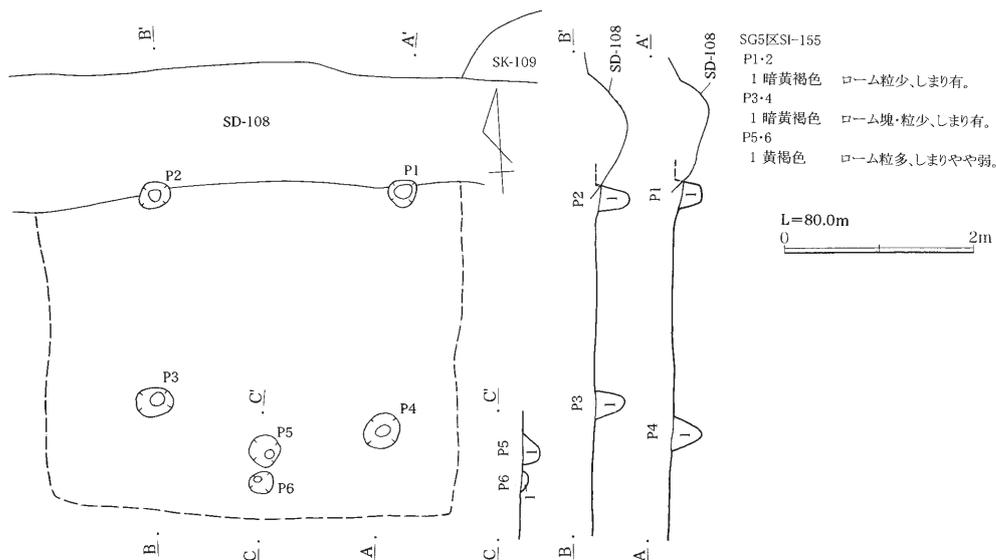
[位置] SG5 区中央の 13-17 グリッドに所在する。すでに床面は消滅していたので、支柱穴と思われるピットの配置から竪穴建物跡と判断した。東に古墳中期の SI-24、北に古墳後期の SI-21・137 がある。土層断面図はないが、時期不明の SD-108 に北壁を切られると思われる。

[規模と形状] ほぼ方形で、東西長推定 4.33m、南北長は 3.57m 以上。中軸線は N-3° -E。4 本の柱穴と入口ピットだけしかなく、建物の範囲は一応点線で示されているが、掘方まで削平されているため、あまり明確ではない。覆土・壁・床面・貼床は削平されて消滅している。

支柱穴と推定される 4 本は、P1 が径 29 × 28 × 深さ 25cm、P2 は径 34 × 27 × 深さ 31cm、P3 は径 39 × 30 × 深さ 31cm、P4 は径 40 × 36 × 深さ 32cm である。柱間は P1-P2 間が 2.62m、P3-P4 間が 2.41m、P1-P4 間が 2.53m、P2-P3 間が 2.15m で、ほぼ方形に配置される。南壁際中央から 20～30cm 北にある P5 と P6 が入口ピットと思われる。P5 は径 34 × 32 × 深さ 19cm、P6 は径 27 × 23 × 深さ 9cm。

[火処] 不明である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかったため、詳しい時期は不明である。古墳時代集落内にあるので、古墳時代の建物と考えられる。



第 335 図 権現山遺跡 SG5 区 SI-155 遺構

第 4 節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）

SG5 区 SX-118（第 336・337 図、写真図版 44・173・185）

【位置】 SG5 区南部の台地平坦面上で、10-17 グリッドにある。周囲に分布する溝・土坑・井戸はいずれも時期不明の遺構である。北側を時期不明の SD-133 に切られる。

【規模と形状】 人為的な掘り込みではなく緩い窪地で、平面形は隅丸方形。東西 2.35 × 南北推定 2.26m の範囲が窪み、確認面からの深さは 5 ~ 13cm。暗色土層中で、明確な掘り込みが認められず、平坦な床面や明確に立ち上がる壁もない。したがって、遺物出土状況および土層断面から遺構の上・下端を推定・記入した。調査時に地山を掘りすぎてしまった部分は、推定復原範囲を破線で示した。

【覆土】 自然堆積と見られる黒褐色の単層である。覆土中に含む白色軽石粒は、古墳時代テフラ（前期の As-C）の可能性もあるが、分析は実施していない。

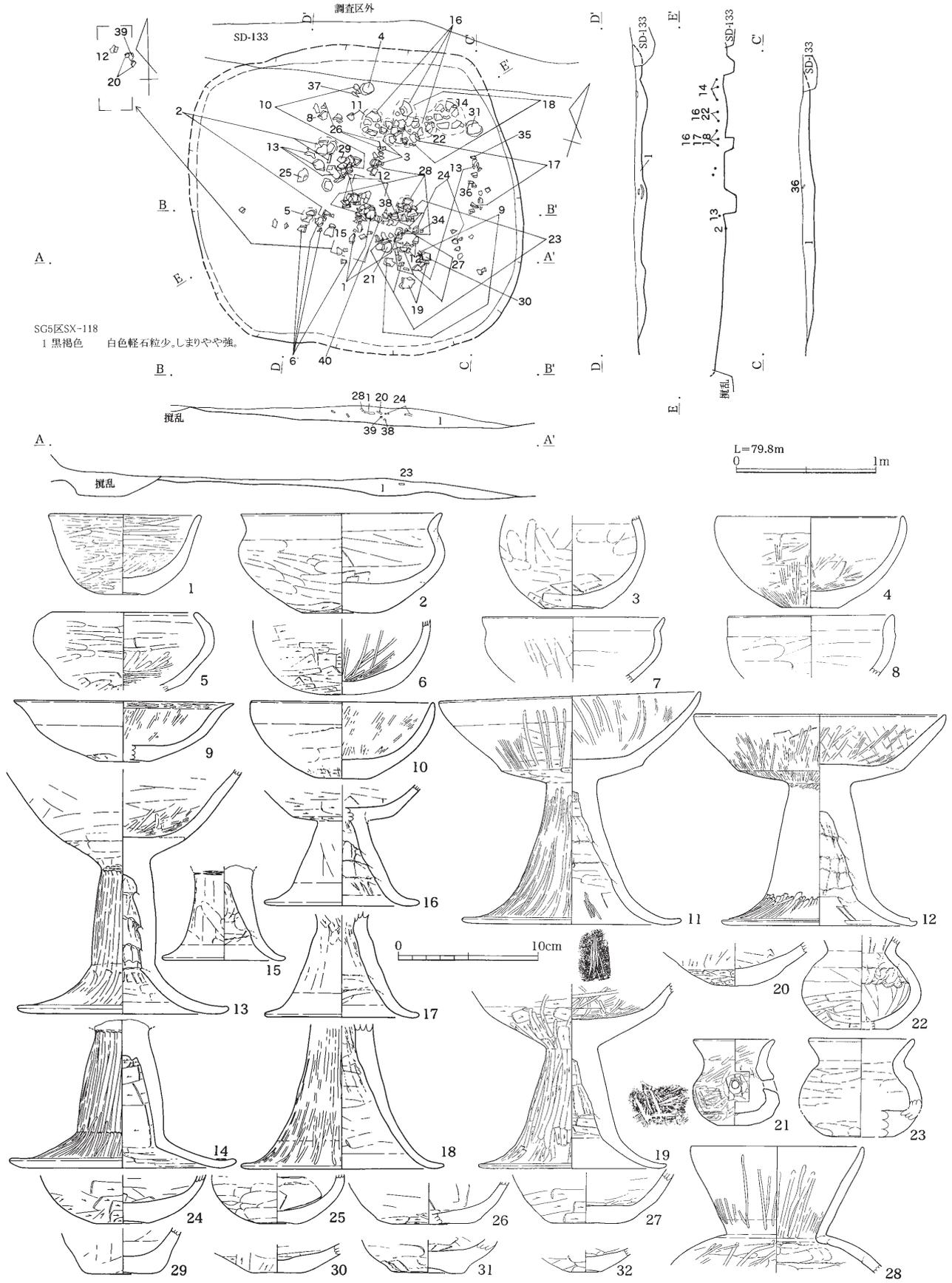
【遺物出土状況】 遺物は、確認面から 10cm ほどの落ち込んだ範囲を覆う土層中から出土している。中央部に径約 1.8m の範囲で土師器が集中し、同じ範囲内に石製模造品 7 点が散在する。

同様の遺構として、北に隣接する立野遺跡 5 区の遺物集積遺構 SX-19・SX-178 がある（『東谷・中島地区遺跡群』 5, pp.399-405）。土師器の各個体がある場所で潰れている立野 5 区 SX-19 よりも、複数個体を壊して捨てた立野 5 区 SX-178 のほうが、本遺構に類似する。立野遺跡の両遺構は火を焚いた上および周囲に土器を集積しているのに対して、本遺構には焼土がみられない。

【出土遺物】 土師器は、口縁部が開いて浅くなった椀形杯（9）を含む。高杯のうち 11 は脚内面に焼成前の刻線がある。14 は被熱しているのでカマドの支脚などに転用していた可能性もあるが、この土器が示す本遺跡編年 3 段階にはまだカマドを持つ建物が少なく、SG5 区では SI-13 にある。土師器の甕（21）は SG5 区 SD-227 などに事例がある。21 は外面を研磨具などに転用したような痕跡がある。鉄製品は末端が尖る棒状破片（33）。

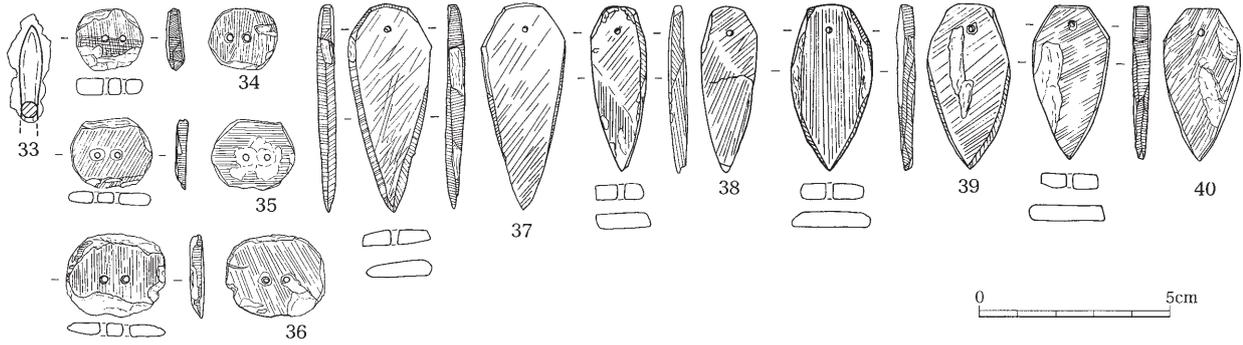
石製模造品は剣形品 4 点と有孔円板 3 点がある。滑石製模造品は SG5 区 SI-8、絹雲母片岩製模造品は SG10 区 SI-101 などにある。石製模造品のまとまった出土例は、権現山遺跡調査区外の東谷神社付近（谷中・大島編 2001, 写真図版 101）や、杉村遺跡の北関東自動車道調査区 92 号住居跡（有孔円板 7・剣形 18・勾玉形 1・白玉 40 点、藤田・安藤編 2000, p.160）がある。図示以外の土師器は合計 563 片・3,191g で、内訳は杯 300 片・1,117g、高杯 80 片・586g、小形壺 70 片・560g、壺甕類 113 片・928g。

第4節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）



第336図 権現山遺跡 SG5区 SX-118(1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 337 図 権現山遺跡 SG5 区 SX-118 (2) 遺物

第 194 表 権現山遺跡 SG5 区 SX-118 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 10.8 高 5.7 底 3.2	外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ・体部下端～底部ケズリのち口縁～底部ミガキ。底部は平底で、全体にくぼむ。内面口縁～体部横方向主体のミガキ、底部一方向主体のミガキ。外面体～底部一部煤付着。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 やや軟質	底上 3～5cm 口～体 1/4 周、底完存 60、66、67、146、147、 148
2 土師器 杯	口 復 14.2 高 7.1 底 5.4 最大 14.6	内斜口縁。外面体～底部ナデのち体部下端一部ケズリ。底部は丸味を持つ平底で、中央が不整形にくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ、体～底部ヘラナデで、底部は丁寧に施される。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤粗～細粒と透 明・砂細粒微量 やや軟質	底直上～底上 5cm 口～体 1/3 周、底完存 97、98、103
3 土師器 杯	高 残 6.7 底 復 4.2	内斜口縁と見られる。外面体部ナデ、体部下端～底部荒いケズリ。底部は平底で全体にくぼんでいる。内面体部ナデ、底部ヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒 少 やや硬質	底上 5～13cm 頸～体 1/5 周、底 1/2 周 110、122、127
4 土師器 杯	口 復 13.2 高 6.5 底 4.0 最大 13.6	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリのち疎らなミガキ。底部は平底で、形状はいびつ。内面口縁～体部上半ヨコナデ、体部下端～底部ヘラナデ・ナデのち疎らなミガキ。ミガキは体部斜位主体、底部一方向主体。	5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒多、白粗 ～細粒少、透明・砂粗～細粒微 量 硬質	底上 3cm 口～体上半一部、体下半 ～底完存 112
5 土師器 杯	口 復 9.8 高 残 5.6 最大 復 12.8	体部上半～口縁部は内彎する。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち体部上半幅広いミガキ・体部下端ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデのち体部ミガキ。ミガキは主に斜位で、下半は一方向に施される。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・砂微粒と赤粗～ 細粒少 硬質	底上 1cm 口～体 1/4 周 92
6 土師器 杯	高 残 5.4 底 3.4	外面体部丁寧なケズリ。底部は軽いナデで、体部のケズリが及ばなかった部分が不整形な平坦面となって残ったもの。内面体～底部ナデのち放射状の疎らなミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒と白微粒 少、白粗粒微量 硬質	底上 3～7cm 体一部、底完存 82、91
7 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 4.7	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデのち体部ナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 微量 硬質	口～体 1/4 周
8 土師器 杯	口 復 11.8 高 残 4.4 最大 復 12.0	外面口縁部ヨコナデ、体部ナデで、上半無調整部分あり。体部に粘土の皸残る。内面口縁～体部ヨコナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや粗い 砂粗～細粒多、 白粗～細粒微量 硬質	底上 7cm 口～体 1/6 周 119
9 土師器 杯	口 復 15.6 高 4.2 底 復 3.6	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、体部下端～底部ケズリ。底部平底で、全体にくぼむと見られる。内面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体～底部ナデのち放射状主体のミガキ。内外面とも体～底部はクレター状の剥落著しい。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤粗～細粒と白細粒 少、砂粗～細粒微量 やや硬質	底直上～底上 5cm 口～底 1/5 周 102
10 土師器 杯	口 復 13.2 高 5.4 底 3.8	半球状。表面は磨滅しているため、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、体部下端ケズリ、底部ナデ。底部は平底。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～体部縦方向主体のミガキ・底部一方向のミガキ。	10YR8/2 灰白 やや緻密 白・黒細粒と赤・砂 粗～細粒微量 軟質	底上 2～4cm 口～体 1/5 周、底完存 29、32
11 土師器 高杯	口 復 18.6 高 16.6 脚幅 15.6	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部一部ケズリのち口縁～体部疎らな縦方向のミガキ。ミガキは数本ずつ束になるように施される。底部丁寧なケズリ。脚部ナデのち下端ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面杯部口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部放射状の疎らなミガキ。脚部上端無調整で、直下はケズリ。脚部上半ナデで、紐痕わずかに残る。脚部下半ヘラナデのちヨコナデのちヘラ状工具による線刻。内面杯部クレター状の剥落著しい。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白細 粒微量 硬質	底上 4cm 杯口～底 1/3 周、脚 1/4 周 111、116
12 土師器 高杯	口 復 18.0 高 15.0 脚幅 復 13.8	外面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち体～底部疎らなミガキ。脚柱部丁寧なナデ、脚部下半ヨコナデのちミガキ。ミガキの上端は工具が器面に強く押しつけられるために明瞭。下端上面は沈線状にくぼむ。内面杯部口縁部ヨコナデのち体～底部ヘラナデのち口縁～底部放射状主体の疎らなミガキ。脚部上半紐痕としぼり目顕著。脚部下半ヘラナデのちヨコナデ。	5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 砂粗～細粒微量 硬質	底上 1～4cm 杯口一部、体～底 1/3 周、脚上半 1/2 周、下 半 1/4 周 47、50、59、74、75、100、 101、104
13 土師器 高杯	高 残 17.4 脚幅 復 15.0	柱状脚。外面杯部体～底部ケズリのちナデ。円盤状の底部に体部を積み上げて作っており、体部下端の接合面は、わずかな稜となって残存する。脚部縦方向のケズリ・下端ヨコナデのち脚部ミガキ。脚部上端には、爪形の工具の当たりがある。内面杯部体～底部ナデのち疎らなミガキ。脚部上半紐痕顕著で、しぼり目も残る。紐痕は、下から見て時計回りに積み上げている。下半ヘラナデのち下端ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と砂細粒 少、砂粗粒と白細粒微量 やや硬質	底上 1～6cm 杯体～底 1/4 周、脚上 半完存、脚下半 1/5 周 23、25、94、95、96
14 土師器 高杯	高 残 10.5 脚幅 16.1	柱状脚。脚部上端の欠損面は、丸く磨滅している上、赤褐色に変色しており、カマドの支脚等に転用された可能性がある。外面脚部ナデ、下端ヨコナデのち脚部ミガキ。上端および屈曲部のミガキを施す工具の当たりが顕著。内面脚部上半ケズリ、下半ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 砂細～微粒多、白・ 赤細～微粒微量 硬質	底上 4cm 脚ほぼ完存 106

第4節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）

15 土師器 高杯	高 残 6.7 脚裾 復 8.8	外面脚部ナデのち下半ヨコナデ。脚部上端には、ヘラ状工具を圧着させたような工具痕あり。内面脚部上半～中位ナデで、上半～中位と下半との接合痕が残る。下半ヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・砂粗～細粒少、赤・透明粗～細粒微量 硬質	床直上 脚上半完存、下半 1/6 周 80
16 土師器 高杯	高 残 8.7 脚裾 11.0	外面杯部体～底部丁寧なケズリ、脚部ナデのち下半ヨコナデ。内面杯部体～底部ヘラナデ、脚部上半ヘラナデ・ナデで、紐積痕残る。脚部下半ヨコナデ。杯部内面のみ橙色(2.5YR6/8)の粘土を使う。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 赤粗～細粒多、赤礫と透明粗粒と白粗～細粒微量 やや軟質	底上 4～6cm 杯体～底 1/3 周、脚上半 1/2 周、下半一部欠 107、108、109
17 土師器 高杯	高 残 7.7 脚裾 復 11.0	外面脚部ナデのち上端ケズリ・下端ヨコナデ。内面脚部上半軽いナデで、しぼり目と紐積痕・上半と下半の接合痕をわずかに残す。下半ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・砂粗～細粒微量 やや軟質	底上 4～8cm 脚上半 1/5 周、脚下半 1/3 周 12、109、12カ 109
18 土師器 高杯	高 残 10.3 脚裾 復 14.4	外面脚部ナデのち下半ヨコナデのち脚部縦方向のやや疎らなミガキ。内面脚部上半～中位ヘラナデ・ナデで、しぼり目残る。下半ヨコナデ。	2.5Y8/2 灰白 やや緻密 砂・白・赤粗～細粒微量 やや硬質	底上 4～6cm 脚 1/3 周 108、109
19 土師器 高杯	高 残 13.2 脚裾 復 13.4	外面杯部体部横方向のケズリのち体～底部光沢のあるケズリ。脚部下半ヨコナデのち脚部縦方向の光沢のあるケズリ。内面杯部体～底部ナデのち多方向の疎らなミガキ。脚部上端ケズリ、上半ナデで、しぼり目が顕著。中位は横方向の丁寧なケズリで、脚部上半と下半の接合痕が残る。脚部下半ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒少 硬質	底上 4～7cm 杯体～底 1/3 周、脚上半完存、脚下半 1/4 周 24、27
20 土師器 鉢	高 残 3.1	外面体部下半一部ケズリ、底部丸底で、密な光沢のあるケズリ。内面体部下半～底部ヘラナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 緻密 赤・砂粗～細粒微量 硬質	底上 2～7cm 体下半～底一部欠 138、140
21 土師器 甕	口 復 5.6 高 6.2 底 2.8	小形。外面口縁部軽いヨコナデ・体部一部ケズリのち口縁～体部ケズリに近いミガキ。底部ナデで、平底。体部には、やや上向きの孔があり、孔径は最も狭い部分で 6.0mm、外面側で 8.2mm。外側からの穿孔であり、外面の孔の周囲はケズリに近いミガキで調整される。内面口縁部軽いヨコナデのち横方向の疎らなミガキ。体～底部荒いナデで、紐積痕や粘土の皸残る。孔の周囲には粘土のめくれがそのまま残る。体部外面には、研磨具に転用されたと思われる痕跡が、多数の条線として残る。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・砂細粒少、砂礫と赤細粒微量 やや硬質	底上 1cm 口一部、体～底完存 42
22 土師器 小形壺	高 6.9 底 3.8 最大 8.4	埴輪のような胎土。外面口縁～胴部上端ヨコナデ・胴部上半横方向のナデ、胴部下半ケズリ。底部ナデで、平底。内面口縁部下半ヘラナデ、胴部下半～底部ヘラナデのち胴部上半軽いナデ。胴部上半紐積痕顕著で、粘土の皸も残る。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白微粒多、白粗～細粒少、赤・砂粗～細粒微量 硬質	底上 6cm 口下半～胴 1/3 周、底 2/3 周 107
23 土師器 小形壺	口 復 7.6 高 残 6.7 底 復 5.0	成形は甘く、小形土器風。外面口縁～胴部上端ヨコナデ、胴～底部ナデで、底部は平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部やや荒いナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・砂粗～細粒微量 やや軟質	底上 1～4cm 口一部、胴 1/2 周、底 1/3 周 45、135
24 土師器 小形壺	高 残 3.5 底 3.5	外面胴部下半ケズリ、底部ナデで、全体が浅くくぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。胴部の一部に明赤褐色(5YR5/6)の胎土あり。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤細粒少、白礫微量 硬質	底上 3～6cm 胴下半一部欠、底完存 18、39、51、54
25 土師器 小形壺	高 残 3.5 底 2.9	丁寧な作り。外面胴部下半光沢のあるナデ、底部ナデで、浅くくぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 砂細粒少、白粗～細粒と赤細粒微量 硬質	底直上 胴下半～底完存 93
26 土師器 小形壺	高 残 3.0 底 5.2	外面胴部下半丁寧なナデ、底部ケズリ。底部は丸味を持つ平底で、ケズリの部分の径は 7.4cm。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒少、白・黒・砂粗～細粒微量 やや硬質	底上 4～5cm 胴下半～底 1/3 周 120、123、124
27 土師器 小形壺	高 残 3.9 底 5.0	外面胴部下端軽いケズリ、底部ナデで、平底。内面胴部下端～底部ナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒と白細～微粒少、白・赤礫微量 やや硬質	底上 4～8cm 胴下端～底完存 35、38、44
28 土師器 小形壺	口 復 12.3 高 残 9.1	外面口縁部～胴部上端ヨコナデのち口縁部縦方向の疎らなミガキ。胴部上半横方向のナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。胴部上半部分的に強いナデで、指頭圧痕と紐積痕残る。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 赤・黒・砂細粒少 やや硬質	底上 2～6cm 口 1/3 周、胴上半 1/4 周 48、52、131、141
29 土師器 小形壺	高 残 3.3 底 4.9	外面胴部下端～底部ナデ。底部は丸味を持つ平底。内面胴部下端～底部ナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒少 硬質	底上 3cm 胴下端一部、底 3/4 周 99
30 土師器 小形壺	高 残 2.1 底 3.6	外面胴部下端ナデのち一部ケズリ、底部ナデで、平底。内面胴部下端～底部ヘラナデで、中央は指で押されたようにくぼむ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤細粒微量 やや軟質	底上 6cm 胴下半～底完存 28
31 土師器 小形壺	高 残 2.5 底 5.2	外面胴部下半ヘラナデのちナデで、粘土の皸わずかに残る。底部は外周ケズリ、中央ナデ。突出する平底で、中央はくぼむ。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	2.5Y4/2 暗灰黄 緻密 白礫と赤礫～細粒と白粗～微粒微量 硬質	底上 7cm 胴下半～底完存 1
32 土師器 小形壺	高 残 1.7 底 2.2	外面胴部下端～底部丁寧なナデ。底部は小さく、浅くくぼむ。内面底部やや荒いナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 砂細粒少、白・赤細粒微量 硬質	胴下端～底完存
33 鉄製品 棒状鉄製品	長 残 2.6 重 残 2.55	径約 4～5mmの断面円形または不整形で、端部近くは径約 6mmまで一度太くなってから末端に至り、先端が尖る。両側縁に刃部は見られない。有機質は見られない。		端部残
34 石製模造品 有孔円板	長 1.76 幅 1.57 厚 0.41 重 1.82	35、36より厚く、入念に研磨される。表裏面とも方向を変えて数回ずつ入念に研磨している。剥離面を残す部分もあり。側面は穿孔と同一方向に入念に研磨される。二孔とも表側からの穿孔と見られ、裏側の孔周囲にわずかに穿孔時の剥離が残る。孔径表側 1.68～1.71mm、裏側 1.50～1.60mm。	10Y4/1 灰 緻密 滑石	底上 6cm 完形 40
35 石製模造品 有孔円板	長 2.13 幅 1.74 厚 0.30 重 1.88	表裏面とも一方方向の研磨。特に表側に剥離面を多く残すが、表側下縁は研磨により剥離面を平滑にしようとしている。側面は穿孔と同一方向の研磨。二孔とも表側からの穿孔と見られるが、表側の孔周囲には浅い剥離が残る。裏面側の孔周囲の剥離も浅いが、範囲は広い。孔径表側 1.41～1.50mm、裏側 1.37～1.46mm。	10Y5/2 オリーブ灰 緻密 滑石	底直上 完形 2

第8章 権現山遺跡 SG5 区

36 石製模造品 有孔円板	長 2.56 幅 2.12 厚 0.33 重 2.85	表裏面とも一方向に研磨されるが、剥離面を残す部分も多い。側面は穿孔と同一方向に研磨される。二孔とも穿孔は表側からで、ともに表側が左に傾く。裏側には、孔の周囲に穿孔時の剥離が残る。孔径表側 1.45～1.50mm、裏側 1.39～1.46mm。	10Y3/1 オリーブ黒 緻密 滑石	底上 6cm 完形 7
37 石製模造品 剣形	長 5.42 幅 2.17 厚 0.40 重 6.80	表裏面とも平坦で、荒い研磨のため条線状の擦痕が残る。上半はやや丸味を持つ台形状で、側面は穿孔と同一方向に平坦に研磨される。中位～下半の三角形部分の側面は表裏面両側からやや斜位に研磨され、稜が作出される。孔は裏面側からの穿孔と見られる。孔径裏側 1.74mm、表側 1.58mm。	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 滑石	底上 4cm 完形 115
38 石製模造品 剣形	長 4.32 幅 1.44 厚 0.44 重 4.7	表裏面とも平坦で、それぞれ大きく2面に分けて荒く研磨されており、条線状の擦痕が残る。上半は台形、中位～下半は三角形に丸味を持つように整形され、側面は斜位の研磨によりほぼ平坦な面となる。孔は裏面側からの穿孔と見られ、表側孔周囲に穿孔に伴う剥離が残る。孔径裏側 1.76mm、表側 1.66mm。	7.5Y6/1 灰 緻密 絹雲母片岩	中央部底上 4cm 完形 62
39 石製模造品 剣形	長 4.33 幅 2.11 厚 0.43 重 6.3	表裏面とも平坦で、それぞれ一方向に研磨され、一部に剥離面を残す。上端は丸味を持つ直線で、側縁は上半～下端まで段差なく研磨され、全体は木葉形となる。側面は穿孔と同一方向ないしやや斜位の研磨で、上端～右上はほぼ平坦に、それ以外は表裏面寄りか面取りされる。穿孔は表面側からで、裏面側の孔周囲には剥離が残る。孔径表側 1.45mm、裏側 1.38mm。	7.5Y5/2 灰オリーブ 緻密 滑石片岩	中央部底上 5cm 完形 61
40 石製模造品 剣形	長 4.02 幅 2.01 厚 0.40 重 5.3	表裏面とも平坦で、一部に剥離面を残してほぼ一方向に数回にわたって研磨される。上半は整った台形状で、側面は穿孔と同一方向に平坦に研磨される。中位～下半は丸味を持つ三角形で、側面は面取りするような研磨もあるため、平坦な部分や丸味を持つ部分、稜が形成される部分などあり。表面側からの穿孔と見られ、孔径表側 1.83mm、裏側 1.52mm。	7.5Y5/2 灰オリーブ 緻密 滑石片岩	底上 3cm 完形 58

第5節 古墳時代の性格不明遺構

SG5 区 SX-129 (第338 図)

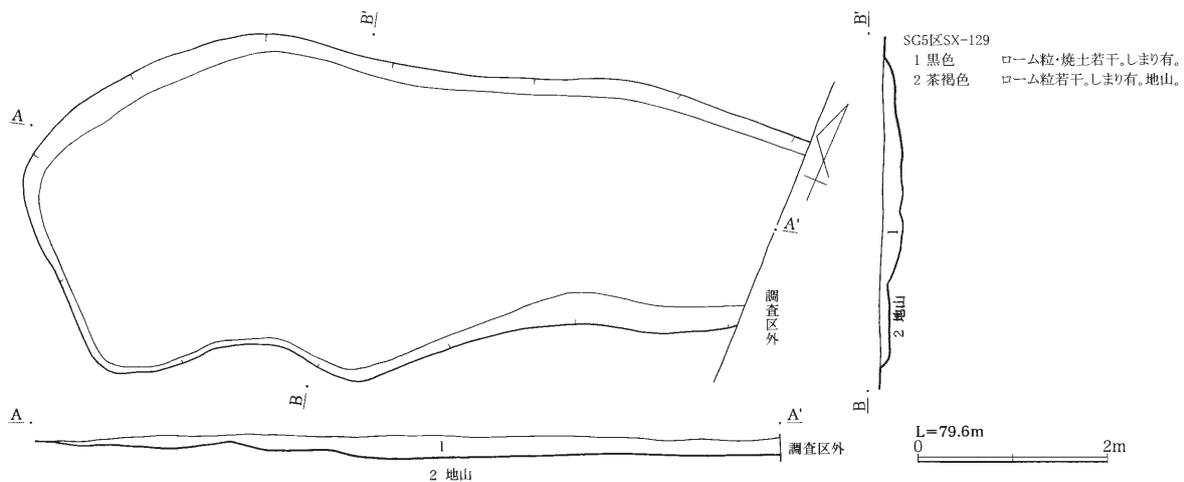
古墳時代と推定される不整形掘込遺構である。

【位置】 SG5 区南部の台地平坦面で、東側の谷部に近い 8-18 グリッドにある。東側は調査区外に続く。周囲に分布する溝・土坑・井戸はいずれも時期不明の遺構である。古墳時代と平安時代の SK-120・121 が 11～15m 北方にある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 不整形の浅い大きな遺構で、周囲がゆるやかに立ち上がる。自然地形かとも考えられる。遺構確認面・遺構底面ともに東西方向には傾斜を持たず、確認面のレベルは遺構南側よりも遺構北側の方が 2～4cm ほど低い。規模は長径 8.26m 以上、短径 3.64m、遺構南側上端から計測した深さは 13～28cm。

【覆土】 黒色土の単層で、焼土も含む。白色テフラ粒などは見られない。

【出土遺物】 遺物は少ない。土師器は小破片ばかりで、図示できる遺物はない。壺甕類の胴部片を主として杯や小形壺の体部片があり、時期は特定しにくい。古墳中期中葉～後葉ころの可能性はある。土師器小破片の他に、縄文中～後期土器（加曾利 E 式と加曾利 B～曾谷式：『東谷・中島地区遺跡群 10』第 39～40 図 234・258）、縄文時代石鏃（前掲書第 45 図 8）、弥生中期土器（前掲書第 42 図 16）が出土した。



第338 図 権現山遺跡 SG5 区 SX-129 遺構

第6節 古墳時代の溝

SG5区 SD-41 (第339・340図、写真図版43・185) (SG10区 SD-41 と連続する溝)

〔位置〕 SG5区中央を南西から北東方向に延びる。13～15-16、15-16・17、16-17グリッドに位置する。南西は調査区外へ、北東はSG10区 SD-41・42へ続く。SG5区 SD-41 とSG10区 SD-41・42をつなげた全体を第339図左端に示した。

古墳中期後葉のSI-11と中期末葉のSD-42を切る。土層や遺物からみてSI-11→SD-42→SD-41の順序になる。古墳中期のSD-42に合流して掘り直すように古墳後期のSD-41を掘る。合流部では古いSD-42のカーブがSD-41底面に現れている。かつてSD-42が北東へカーブしていた跡地にかぶさるように、SD-41を新たに掘ったので、下部のSD-42埋土を掘り返してその形状が再び現れたものと思われる。古墳時代(?)のSD-101と重複するが新旧不明。

古墳中期居館の方形柵列SA-151の柱穴(P20・P21・P43)との重複関係を示す情報はないが、古墳後期のSD-41が中期のSA-151を切るものと推定している。北側に隣接するSG10区に続く溝(SG10区 SD-41・42)も、SG5区居館の北側区画溝を切っている。SG10区 SD-41・42は、この他に古墳中期の竪穴建物・溝・土坑を切り、中世の溝に切られている。

〔規模と形状〕 南西から北東に直線的に続き、中軸線はN-23°-E。長さはSG5区で54.3m、SG10区まで含めると101.3mである。断面は浅い皿状ないしは逆台形で、一部は崩れた薬研状になる。底面は平坦な部分が多い。幅は0.96～1.80m、底面の幅は0.44～1.57m、深さは40～55cmである。

〔覆土〕 4～6層に分けられ、レンズ状の自然堆積である。最上層には微量ではあるが白色パミスを含み、下層に行くほどロームの混入が多くなる。

〔遺物出土状況〕 3・5・12はSD-42およびSI-11との重複地点で出土した(遺物注記番号が1～33)。4・14はこの重複部よりも南側で出土した(遺物注記番号が1B～23B)。2の杯はSG5区内の北端部で出土した(遺物注記番号が100番台)。遺構重複地点以外で出土した遺物の場合でも、他時期の混入品を含むとみられる。遺物出土位置をグリッド名で記録して取り上げた遺物は、規則では「Xグリッド座標-Yグリッド座標」として記録すべきものを「Yグリッド座標-Xグリッド座標」と注記している(例:注記「17.5-15.5」の遺物3は、実際には「15.5-17.5」グリッドから出土した)。

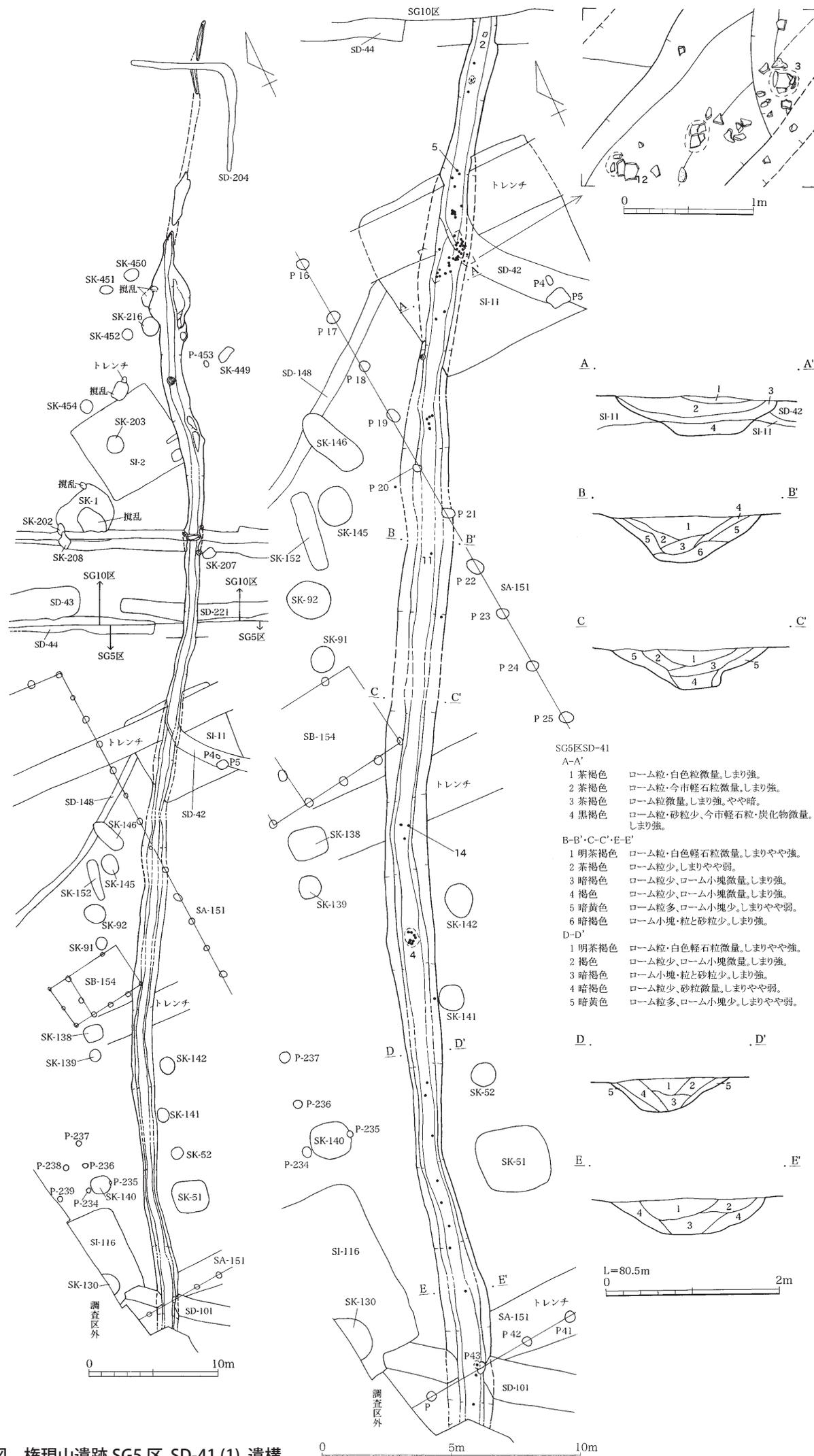
〔出土遺物〕 古墳後期後葉の土師器が中心である。図化以外に杯・高杯・小形土器・壺甕類があり、小形土器は少ない。2は内面炭素吸着。長胴の壺(3)はあまり見ない器種である。やや類似した壺はSG5区SI-21に2点と、本遺跡西部(北関東自動車道路調査A区SI-018,065,098,116a:谷中・大島編2001)に後期中葉の例がある。片口付鉢(4)はSG10区SI-2に類例がある。

口径10.8cmの須恵器杯身(14)は古墳終末期中葉の遺物で、溝の継続年代がやや長いことを示す上層遺物と考えられる。小形土器(7～9)は、SD-42へ混入した小形土器と同じく、SK-98と関係がある混入品かもしれない。

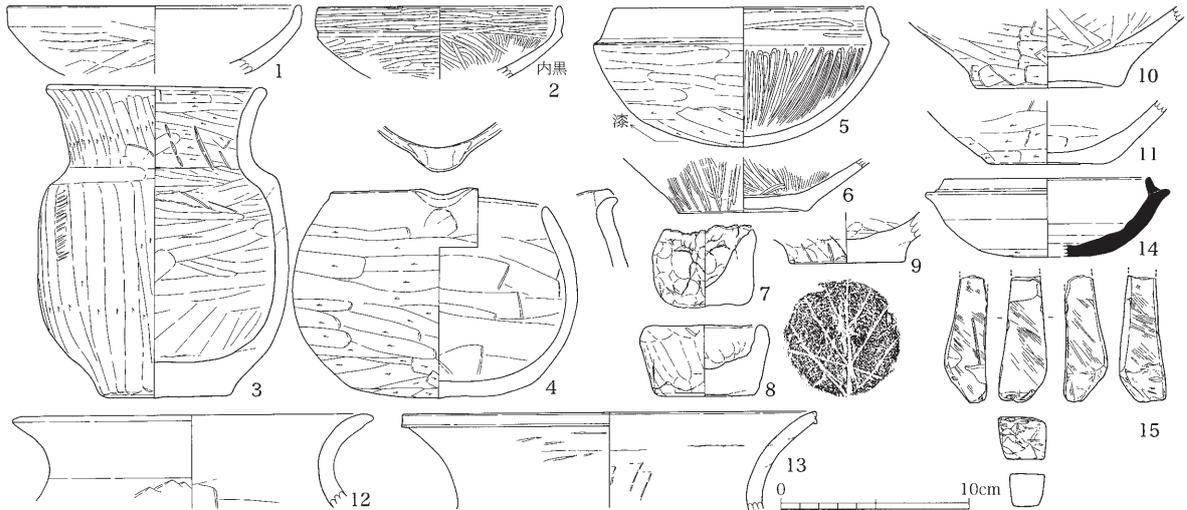
古い時期の土器が混じっているのは、SI-11やSD-42からの混入であろう。高杯はほぼ全てSI-11などからの混入と考えられる。図示以外の土師器は合計1,155片・11,460gで、内訳は杯415片・3,307g、高杯170片・2,309g、壺甕類551片・5,411g、甌3片・106g、小形土器16片・327g。

第195表 権現山遺跡SG5区SD-41出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.5 高 残 3.6	口縁部は直立する。外面口縁部ヨコナデのち体部光沢のあるナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・透明微粒少 やや硬質	口～体 1/5周



第 339 図 権現山遺跡 SG5 区 SD-41 (1) 遺構



第340図 権現山遺跡 SG5区 SD-41(2) 遺物

2 土師器 杯	口 復 12.8 高 残 3.8	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体部横方向のミガキ。内面体部放射状のち口縁部横方向の、ともに密なミガキ。内面口縁～体部黒色処理。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・透明細粒少、黒粗粒 微量 硬質	底上 7cm 口～体 1/6 周 104
3 土師器 壺	口 11.6 高 16.5 底 7.1 最大 13.2	小形・異形。外面口縁～胴部縦方向の丁寧なケズリのち頸部横方向のナデ。肩は明瞭に張る。胴部一部にクローラー痕あり。底部はナデで、厚手な突出する平底。内面口縁部横方向の丁寧なケズリ、胴～底部光沢のあるナデ。胴部上半はやや調整が荒い。口縁部には、胴部調整工具によってつけられたと見られるヘラ痕がある。	5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒多、砂礫 と白・赤粗～細粒微量 硬質	15.5-17.5 グリッド 口～胴上半完存、胴下半 ～底 3/4 周 2、SD-42 17.5-15.5 (15.5-17.5)
4 土師器 鉢	口 11.4 高 10.8 底 9.5 最大 14.8	片口、球胴。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。体部下半でケズリの方向が変わる。底部は丸底で、体部との境は緩やかな稜となる。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。片口部は、ヨコナデのち作出される。外面片口部下には円形のナデがあり、体部ケズリに切られる。内面全体炭素吸着のためか黒褐色を呈する。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白・砂細粒少、赤粗 粒と透明微粒微量 硬質	底上 38cm ほぼ完形 11B
5 土師器 鉢	口 13.4 高 7.4 最大 15.4	丁寧な作り。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデで、無調整部分あり。底部丁寧なケズリで、丸底。内面口縁部～体部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち口縁部横方向・体～底部放射状のミガキ。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。口縁部分の磨滅が著しい。	10YR3/1 黒褐 やや緻密 白・黒・透明粗～細 粒少、砂細～微粒微量 やや硬質	底上 2cm ほぼ完形 1
6 土師器 鉢	高 残 2.9 底 6.8	精良な胎土で、丁寧な作り。外面体部下丁寧なナデのち縦方向の疎らなミガキ。底部ケズリのちミガキで、突出する平底であり、全体が浅くくぼむ。内面体部下～底部ナデのち密なミガキ。体部は斜め方向、底部は体部から続くミガキのため、多方向となる。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・透明微粒少、赤粗粒 微量 やや軟質	体下半～底 3/4 周
7 土師器 小形土器	口 4.8 高 4.3 底 4.6 最大 5.3	鉢形。極めて荒い作りであり、全体が荒いナデで作られる。指頭圧痕顕著。いびつな平底。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・黒・赤細粒微量 硬質	完形
8 土師器 小形土器	口 復 6.8 高 3.8 底 5.4	鉢形。外面口縁部～体部ナデ、底部ナデで、厚い平底。内面口縁～底部荒いナデ。全体に調整は荒いが、内面の方がより乱雑。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや緻密 白細～微粒少、赤粗 粒微量 やや硬質	口～体 1/3 周、底完存
9 土師器 小形土器	高 残 2.7 底 6.0	外面体部下荒いナデ、底部突出する平底で、木葉痕。木葉以外の細い棒状の圧痕 1 本あり。内面体部下～底部荒いヘラナデ。内面黒褐色。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・赤粗粒微量 やや軟質	体下半～底完存
10 土師器 甕	高 残 4.2 底 7.4 最大 14.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部は突出し、底部全体がくぼむので、丁寧に整形されている。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・黒・灰色粗～細 粒多、白礫微量 硬質	SI-116 の東方 胴下端～底完存 16.5-14
11 土師器 甕	高 残 3.4 底 6.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部平底。内面胴部下端～底部丁寧なヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 粗い 白・黒・赤・砂粗粒多、 白・黒・赤・砂礫少 硬質	体下半～底一部欠 B'B' 南側
12 土師器 甕	口 復 19.0 高 残 5.0	外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・透明・砂細粒少、 白礫～粗粒微量 硬質	底上 51cm 口 1/6 周 27
13 土師器 甕	口 復 21.8 高 残 5.2	口縁端部は粘土貼付により垂直な平坦面となる。外面口縁部縦方向のヘラナデのちヨコナデ。内面口縁部横方向のヘラナデのちヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白細～微粒少、白・ 砂粗粒微量 やや硬質	口 1/4 周
14 須恵器 杯	口 復 10.8 高 4.1 最大 復 12.8	口縁部立ち上がりは短く内傾する。端部は丸いが、外寄りはやや直角気味となる。外面ロクロナデのち底部わずかに回転ケズリ。内面ロクロナデのち底部多方向ナデ。底部のナデはごく軽いものであり、ロクロ目を消せるものではない。	5Y5/1 灰 緻密 白礫～細粒と黒細～微粒 微量 硬質	底上 30cm 口～底 1/2 周 8B
15 石器 砥石	長 残 6.7 幅 2.5 厚 2.3 重 残 44.9	小形、四角柱状。四面ともよく研磨されており、使用に伴うと見られる斜位の擦痕が明瞭に残る。下端には製作時の敲打痕や剥離面がわずかに残る。左側面右下の欠損はガシリと見られる。欠損面も含め、表面には斑状に黒色物質が付着する。	10YR6/4 にぶい黄橙 緻密 泥岩	一部欠

SG5 区 SD-42 (第 341 図、写真図版 43・174・185) (SG10 区 SD-42 と連続する溝)

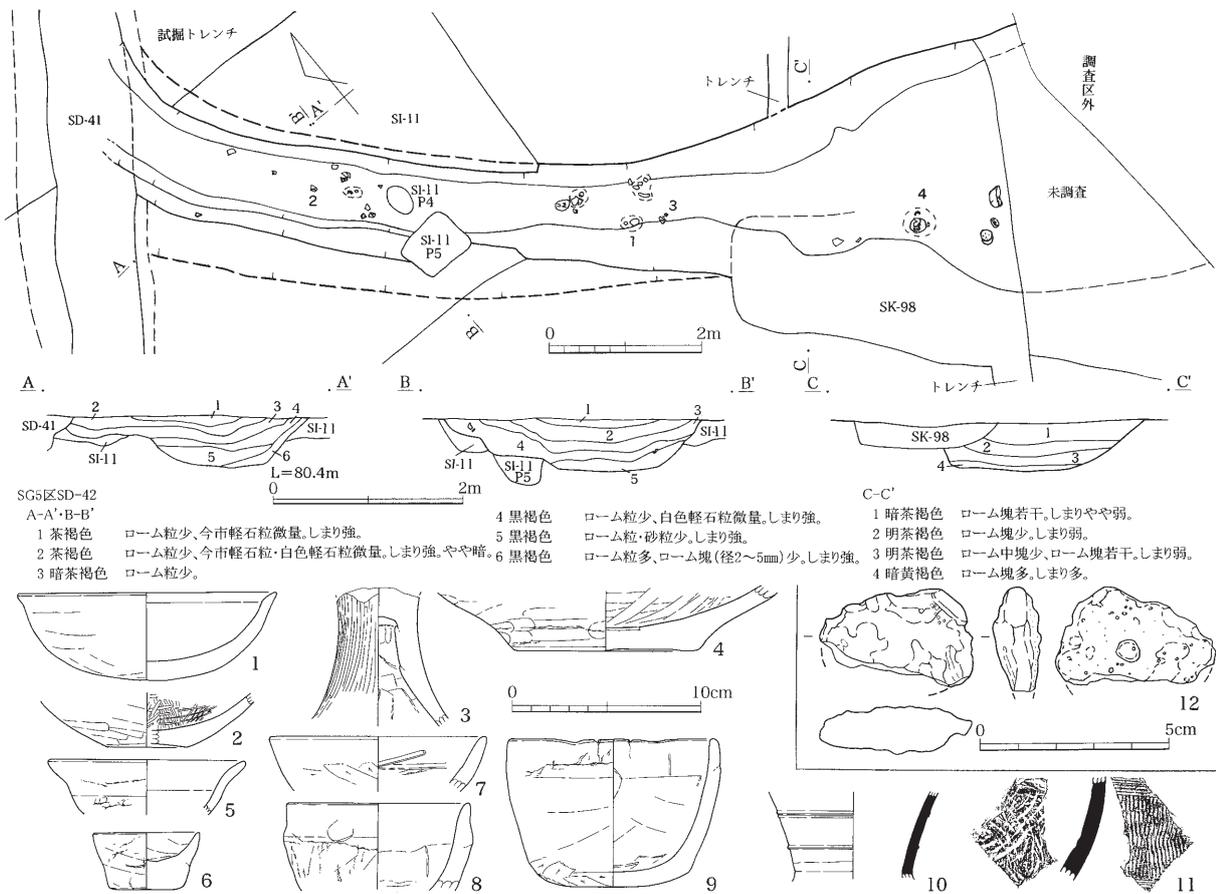
[位置] SG5 区中央北寄りの 15-17・18、16-17 グリッド。東側は低地に面する。古墳中期後葉の SI-11 を切り、古墳後期の SD-41・SK-98 に切られる。古墳中期の溝 SD-42 が西端で北へカーブした付近より北側が古墳後期の SD-41 に切られ、SD-42 の跡を掘り直した溝が SD-41 と考えられる。SD-41 と SD-42 の合流点付近は上部を試掘トレンチで削られている。

[規模と形状] 北西から南東方向にほぼ直線的に延びる溝で、中軸線は N-37° -W。古墳後期の SD-41 によって西側は合流するように掘り返しが行われる。古墳中期の SD-42 もここから北側に延びていたと考えられる。東は低地に向かって大きく開く。長さは確認できる部分で 11.20m である。断面形は崩れた浅い逆台形で、底面はほぼ平坦である。西部の南側法面に段を認つ。幅は 1.26 ~ 3.76m、底面の幅は 0.56 ~ 3.35m、深さは 52 ~ 55cm である。

[覆土] レンズ状の自然堆積である。2 層と 3 層に白色軽石粒を含むが、古墳時代のテフラかどうかは不明である。縄文草創期の今市軽石粒 (橙色) も二次流入しているので、同じく草創期の七本桜軽石粒 (白色) の可能性も考えられる。

[遺物出土状況] SI-11 や SK-98 から混入した遺物を含む可能性がある。出土位置が図面に記録されている遺物は、SI-11 重複部付近、調査区東端部付近、両者の中間付近にみられる。出土位置をグリッド名で記録して取り上げた遺物は、規則では「X グリッド座標 -Y グリッド座標」として記録すべきものを「Y グリッド座標 -X グリッド座標」と注記している (例: 注記「17.5-15.5」の遺物 1 は、実際には「15.5-17.5」グリッドから出土した。遺物 5 ~ 10 も同様である)。

[出土遺物] 土師器は壺甕類が主体で、杯・鉢・高杯などが少量混じる。口縁部が開く椀形杯 (1) や高杯 (3) などは古墳中期後葉の SI-11 から混入した可能性がある。図示した以外の土師器は壺甕類の破片が多い。長



第 341 図 権現山遺跡 SG5 区 SD-42 遺構・遺物

胴甕はなく、球胴状の大形甕がほとんどである。丸底の大形鉢と見られる破片もある。図示以外の土師器は合計 892 片・8,104g で、内訳は杯 157 片・1,084g、高杯 92 片・664g、鉢 52 片・778g、壺甕類 586 片・5,422g、甌 5 片・156g。

10 は突線区画を持つ陶質土器壺で、SG5 区 SI-116 の須恵器壺底部片に色調や胎土が類似している。関連資料としては、古墳中期の SI-22 などに格子叩き調整の陶質土器がある。周辺地域では、上三川町殿山遺跡 KT-121 の突線を持つ小形平底壺（大川他 1995）が、加耶土器と考えられている（定森 1999,p.22）。SG5 区 SI-11 の壺（23）にも突線がある。鉄関連遺物では、小形不定形の鍛冶滓が 1 点見られる（12）。この溝から北に連続する SG10 区 SD-41・42 にも椀形鍛冶滓が 3 点ある。また SG5 区では SI-100 で高杯転用羽口が出土している。

SI-11 や SK-98 から混入した遺物を含む可能性がある。粗製の鉢と小形土器（5～9）は、図示した以外の破片もすべて SK-98 から混入したと考えられる。杯には古墳後期中～後葉の模倣杯をわずかに含み、これも SK-98 などの周辺遺構から混入したと考えられる。

第 196 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-42 出土遺物

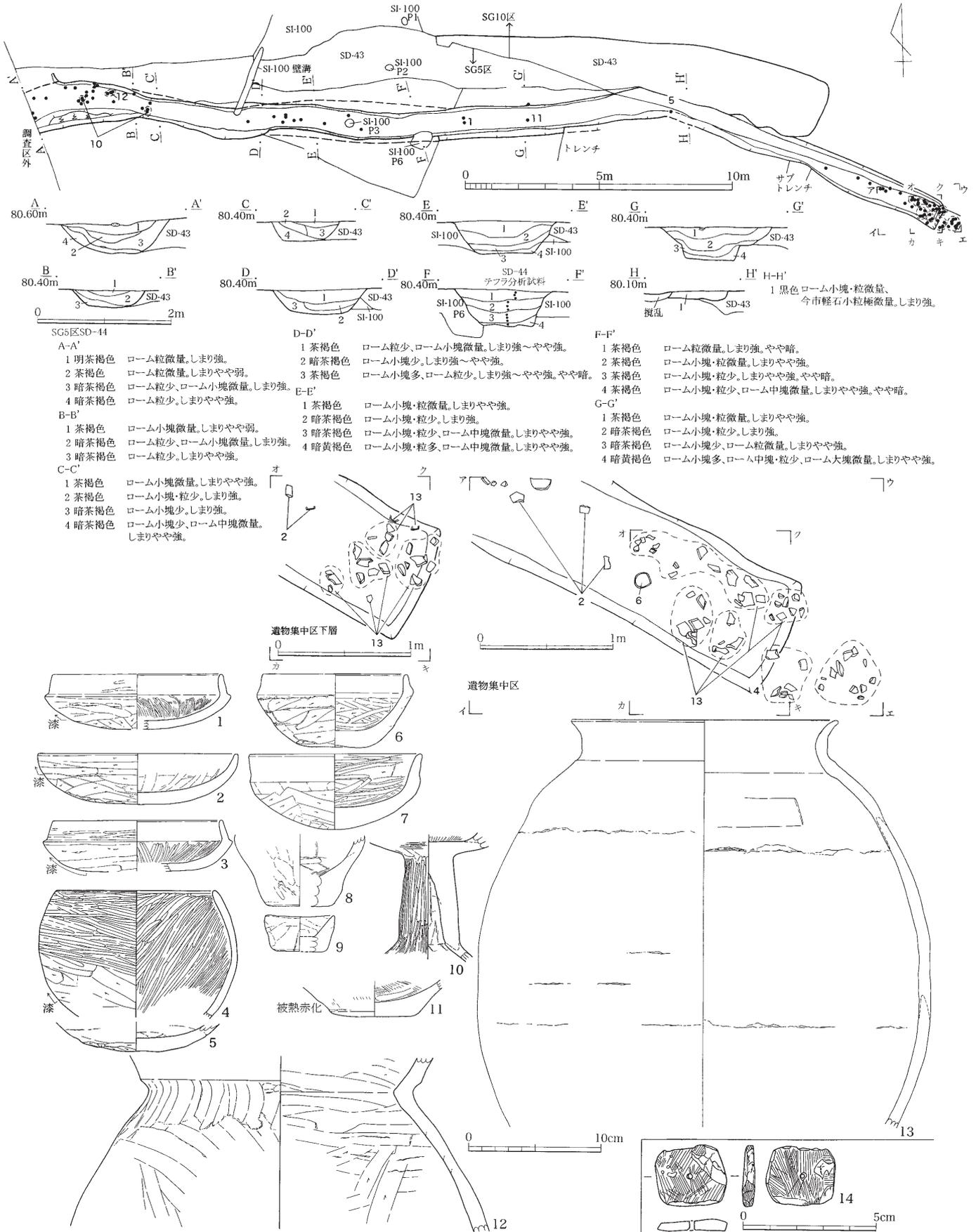
番号 種類 器類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.6 高 4.6	内斜口縁。内面主体に表面の剥離・磨滅が著しく、調整不明な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ケズリで、丸底。内面ヨコナデおよびナデと思われるが、不詳。ミガキの可能性あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤・砂微粒少、 砂礫微量 やや硬質	底上 1cm、15.5-17.5 グリッド 口～体 1/4 周、底完存 7B、17.5-15.5
2 土師器 杯	高 残 2.9 底 復 4.2	外面体部ヘラナデ、底部ナデで、くぼむ。内面体～底部多方向の密なミガキ。	5YR6/8 橙 緻密 赤・砂粗粒微量 やや軟質	底直上 体～底 1/3 周 4
3 土師器 高杯	高 残 7.3	外面脚部上半縦方向の密なミガキ。内面脚部上端ナデ、上半ヘラナデで、紐襠痕明瞭。上下の欠損面は細かな欠損の連続である上、磨滅しているように見えることから、人為的に打ち欠かれて転用された可能性がある。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白・砂微粒少、白・ 赤・砂粗粒微量 やや硬質	底直上 脚上半完存 8B
4 土師器 甕	高 残 3.5 底 9.5	大形、球胴。外面胴部下端ケズリのちナデ、底部ケズリで、突出する平底。内面胴部下端～底部ヘラナデのちナデ。内面は丁寧に調整される。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・赤・砂微粒 多、白・砂粗粒少、赤礫と砂微 量 やや軟質	東部底直上 胴下端～底 3/4 周 3B
5 土師器 小形土器	口 10.4 高 残 2.9	外面体部軽いナデで、粘土の皺が顕著。内外面口縁部ヨコナデ、内面体部ナデ。内斜口縁の椀形の可能性あり。古墳後～終末期の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明細粒少 やや硬質	15.5-17.5 グリッド 口～体 1/6 周 17.5-15.5
6 土師器 小形土器	口 復 5.6 高 3.0 底 4.0	鉢形、小形。外面口縁～底部ナデ。口縁～体部粘土の皺が顕著。底部は厚い平底。内面口縁～底部軽いヘラナデ。外面口縁部および内面全体炭素吸着のためか黒褐色となる。古墳後～終末期の遺物が混入。	7.5YR6/6 橙 緻密 白・砂微粒少、赤粗粒と 白細粒微量 硬質	15.5-17.5 グリッド 口～体一部、底 2/3 周 17.5-15.5
7 土師器 粗製鉢	口 復 11.4 高 残 2.6	外面口縁部ヨコナデのち体部ケズリ、内面口縁部ヨコナデのち体部ヘラナデ。内面窪の当たりが明瞭に残る。古墳後～終末期の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 赤礫と白粗粒と白・ 黒微粒微量 やや硬質	15.5-17.5 グリッド、 15.6-17.5 グリッド 口～体 1/4 周 17.5-15.5、17.5-15.6
8 土師器 粗製鉢	口 復 9.4 高 残 4.6 最大 復 9.9	鉢形。外面体部軽いナデで、粘土の皺が顕著に残る。内外面口縁部ヨコナデのち内面体部ヘラナデ。古墳後～終末期の遺物が混入。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗～細粒と赤細粒 微量 やや軟質	15.5-17.5 グリッド 口～体 1/4 周 17.5-15.5
9 土師器 粗製鉢	口 11.0 高 7.9 底 7.5 最大 11.2	鉢形。口縁部は体部から屈曲なく立ち上がっており、ヨコナデは施されない。このため、特に外面口縁部および上端部に粘土の皺や歪みが残る。外面口縁～体部軽いナデ、底部ケズリで、丸底であり、体部との境はやや歪んだ稜となる。内面口縁～底部丁寧なヘラナデ。古墳後～終末期の遺物が混入。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・砂粗～細粒少、 白礫微量 やや硬質	15.5-17.5 グリッド 口～体 1/4 周、底完存 17.5-15.5
10 陶質土器 壺	高 残 4.7	頸部内外面口縁部ヨコナデで、外面に 2 条の細い突線あり。上方のものは中央をくぼませて 2 条のように見せる。頸部径は 6.2cm。内面に自然釉わずかに付着。外面黒褐色。	5GY4/1 暗オリーブ灰 緻密 白粗粒微量 硬質	15.5-17.5 グリッド 頸 1/8 周 17.5-15.5
11 須恵器 甕	高 残 5.6	外面胴部平行タタキのちカキメ。内面青海波文。	7.5Y5/1 灰 緻密 白細粒微量 硬質	胴一部
12 椀形鍛冶滓 (極小)	長 4.1 幅 2.6 厚 1.3 重 14.5	下手側側部が破面となった厚さ 1cm 程の扁平な極小の椀形鍛冶滓破片。肩部寄りの破片で上面は中央部がやや小高い。浅い皿状の下面には炉床土の痕跡あり。鍛冶関連遺物構成 No. 28。	磁着度 3 メタル度 なし	15.5-17.5 グリッド 1/2 残 15.5-17.5、980513

SG5 区 SD-43 → 古墳時代居館（本章第 1 節）を参照

SG5 区 SD-44（第 342 図、写真図版 43・44・185）（SG10 区 SD-44 と連続する溝）

[位置] SG5 区北部と SG10 区南端部にまたがって、16-16・17 グリッドで調査を行った。東端部は調査時

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第342図 権現山遺跡 SG5 区 SD-44 遺構・遺物

に豎穴建物と判断して「SG5区 SI-102」の名称を与えたが、SG10区の調査によりSD-44の一部であることが判明して、SD-44に統合された。古墳中期の遺構SI-100と、同じく中期の居館北側区画溝SD-43を切る。[規模と形状] ほぼ東西に直線的に続き、SG10区との境界で南東に折れて、東側は角端状に終わる。溝の中軸線は東側でN-58°-Wである。長さはSG5区で32.9m、SG10区を含めた全体で34.0mである。断面は逆台形で、底面は平坦な部分が多い。幅は0.96～1.70m、底面の幅は0.50～1.00m、深さは27～57cmである。

[覆土] レンズ状の自然堆積である。SD-44の覆土(断面図F-F')と、先行する古墳中期のSI-100とSD-43の埋土(SI-100の第329図C-C')を採取して、テフラ検出分析を実施した(本章第2節)。その結果、SD-44の各層で確認された白色軽石が、古墳後期初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)である可能性が高い。

[遺物出土状況] SD-44の遺物の注記には「SD-44」と「SI-102」があり、SG5区内で「SD-44」は西部、「SI-102」はSD-44の東部を示す。「SI-102」と注記されている東端部出土遺物が多い。G-G'ラインの東1.5m付近よりも東側はSG5区調査時の遺構確認面が一段低く、溝の深さは0.1～0.2m程度まで浅くなる。この部分では、遺構確認面より上部や、溝の東外側でも遺物が出土した(集中区拡大図の遺物4・13など)。

[出土遺物] 溝としては遺物が多い。古墳後期前葉～中葉の遺物が主体である。杯類では身模倣形(1・3)と半球形(2)の漆仕上げ杯が主体である。4は丁寧に磨く鉢。粗製の杯(6・7)および小形土器(8・9)を少し含む。壺甕類は破片が多いが、接合・復原できるものは少ない(13)。図化学品以外に、身模倣形杯と半球形杯が各2個体程度と、大形の壺甕類4～5個体分がある。SD-43から混入したと見られる古墳中期後葉頃の土師器(10・12)や石製模造品(14)が混じる。石製模造品は、SG5区ではSI-8などにある。12は外面が二重口縁状。中期の椀形杯も多く混入している。図示以外の土師器は合計944片・9,220gで、内訳は杯218片・1,105g、高杯70片・733g、鉢65片・840g、壺甕類586片・6,530g、小形土器1片・12g。

第197表 権現山遺跡SG5区SD-44出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復12.8 高 残4.2 最大 復14.3	外面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ。底部ケズリのち体部ナデ。体部には組積痕残る。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部放射状のミガキ。内外外面口縁～底部の残存部全体と外面中位以上が漆仕上げ。	7.5YR3/1 黒褐 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 硬質	底上18～29cm 口一部、体～底1/4周 30、33B
2 土師器 杯	口 15.0 高 3.8	半球状。外面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち体～底部ヘラナデ。放射状に施されるヘラナデあり。内外面全体と外面上半漆仕上げ。	2.5Y5/1 黄灰 緻密 白・透明細～微粒少 やや軟質	底直上～底上7cm 口～底1/2周 SI-102 No.8、9、11、 26、31
3 土師器 杯	口 復12.8 高 残3.8 最大 復14.2	外面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ。体部ナデで、組積痕や無調整部分あり。内面口縁～体部ヨコナデのち体部放射状のミガキ。外面部以外と内面の全体が漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白微粒多、白・赤粗 ～細粒少、赤礫微量 硬質	口～体1/3周 SI-102
4 土師器 鉢	口 11.9 高 残9.6 最大 14.7	精緻な作り。外面体部丁寧なケズリのち口縁～体部密なミガキ。内面口縁～体部ヨコナデおよび横方向のナデのち斜位の密なミガキ。外面の体部以上と内面の残存部全体が漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒と白粗～細粒微量 硬質	底上10cmと西部底上31cm 口～体2/3周 SI-102 No.7
5 土師器 鉢か	高 残2.2 底 8.0	歪みあり。外面体部軽いナデで、組積痕が残る。底部ケズリで丸底だが、ケズリの縁辺である体部との境はわずかに稜をなす。内面体～底部ヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白粗 粒微量 やや軟質	底上36cm 体下半～底完存 34
6 土師器 粗製杯	口 10.8 高 5.5 最大 11.6	鉢形で、杯身模倣杯のように口縁部内傾する。調整は荒いが、歪みは少ない。外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリで、体部上半無調整部分あり。体部に組積痕顕著に残る。底部は丸味を持つ平底で、中央が小さくくぼむ。内面口縁～体部上端ヨコナデ、体～底部ケズリのち疎らで多方向の太いミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白・透明微粒少、赤 礫～細粒と白粗～細粒微量 硬質	底上21cm 口一部欠 SI-102 No.1
7 土師器 粗製杯	口 復13.0 高 5.7	丸底、椀形。外面口縁部ヨコナデで、直下に無調整部分あり。体～底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデのち口縁～底部ヘラナデのち口縁～底部疎らなミガキ。口縁～体部には、ミガキが強く施される。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・赤細～微粒少、 白・赤礫～粗粒微量 やや硬質	口1/8周、体1/4周、 SI-102
8 土師器 小形土器	高 残5.3 底 復4.8	鉢形だろう。外面体～底部ナデ。体部には粘土の皸残る。底部厚い平底。内面体～底部ヘラナデのちわずかにミガキ。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗粒少、黒礫 と砂粗粒微量 硬質	体～底1/3周 SI-102
9 土師器 小形土器	口 5.2 高 2.7 底 4.0	小形、鉢形。内外面ともナデで調整される。外面口縁～体部粘土の皸残る。平底。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤細粒少、黒微粒微 量 やや硬質	口1/6周、底1/3周

第8章 権現山遺跡 SG5 区

10 土師器 高杯	高 残 9.6	外面杯部底部ナデのち横方向のミガキ。脚柱部縦方向の密なミガキで、さらに脚柱部下半から下へと細いミガキが施される。細いミガキは強く器面に工具を押し当てるためか、円形ないし直線状の工具痕が明瞭に残る。内面杯部底部放射状のミガキ、脚柱部軽いナデで、わずかにしぼり目が残る。脚柱部下半へラナデのちヨコナデ。古墳中期の遺物が混入。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・砂粗～細粒微量 やや硬質	底上 11～55cm 杯底一部、脚上半完存 8、20
11 土師器 甕	高 残 2.8 底 6.8	外面胴部下端 6 本 /1cm のハケのちナデ。底部ナデ。底部はやや突出する平底で、丸味を持つ。径 3mm、深さ 1～2mm 程の円形のくぼみが数ヶ所あり。紐の結節部分などの圧痕か。内面底部 6 本 /1cm のハケのちナデ。外面底部被熱のためか剥落部分多い。	2.5YR6/6 橙 やや粗い 白・砂細粒多、白・砂粗粒微量、 やや硬質	底上 46cm 胴下端～底完存 32
12 土師器 壺	高 残 13.0	大形。外面胴部上半斜位のナデのち頸部～胴部上端縦方向のナデのち口縁部下半ヨコナデ。内面口縁部下半横方向のナデ、胴部上半横方向のナデのち疎らな縦方向のケズリ。古墳中期の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白礫～細粒と灰色礫 と砂粗粒微量 硬質	底上 6～28cm 口下半～胴上半 1/4 周 16、63B、SD-43・44
13 土師器 甕	口 20.0 高 残 30.8 最大 34.0	大形。内外面ともほぼ全面で表面が剥落しており、調整不詳。胴部上半と下半に粘土積み上げ休止による接合痕があり、内外面に粘土の継ぎ目が残る。[注記]SI-102 № 2、3、4、5、24、27、28、29、30、34、36、37	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白・赤・透明・砂粗 ～細粒少、白礫微量 やや硬質	底上 10～40cm 口一部欠、胴 2/3 周 注記は左欄
14 石製模造品 有孔円板	長 2.30 幅 2.55 厚 0.44 重 4.48	表裏とも一部に切削加工時の剥離面を残し、主に縦および斜め方向に広く研磨される。外周寄りの一部には面取りするような研磨が見られる。側面は各辺と平行ないし斜め方向に研磨されるが、切削時の剥離面をそのまま残す部分もある。表側からの穿孔と見られ、裏側の孔周辺には細かな剥離が生じている。孔径は表側 1.90mm、裏側 1.82mm である。古墳中期の遺物が混入。	10BG2/1 青黒 緻密 滑石片岩	完形

SG5 区 SD-101 (第 343・344 図、写真図版 44・186)

[位置] SG5 区中央の台地平坦面で、13-16・17、14-16・17 グリッド所在。西側は調査区外へ延びる。古墳後期の SI-20・21 よりも東側は黒色土のため、低地まで延びるかは不明である。試掘トレンチで削られる部分がある。

[重複関係] 古墳中期中～後葉の SD-227 を、古墳中期後葉以降の SD-101 が合流するように切り、東側部分では SD-101 が SD-227 を掘り直すように切っている (断面 C-C')。古墳中期の SA-151、後期の SD-41、時期不明の SD-108 と重複するが、新旧関係は不明。試掘トレンチで削られる部分がある。

古墳中期の SK-130・SI-116 を切り、古墳後期の SI-20・21 に切られる。SI-116 の中層以下を切って SK-130 を掘り、その埋没後に SI-116 の上層が堆積する (第 332 図の調査区西壁土層断面)。そして、SI-116 の埋土上部を覆った B 層を SD-101 が切る (断面 A-A')。この B 層には、12 世紀初頭に降下した As-B テフラが検出されている (本章第 2 節)。SD-101 と B 層の前後関係が確実で、またテフラの混入がなければ、SD-101 が 12 世紀以降の溝になる可能性も残されている。ただしその場合には、古墳後期の SI-20・21 が SD-101 を切るという調査所見と矛盾する点に問題がある。古墳後期の SI-20・21 を SD-101 が切ると解釈する (SI-20・21 の断面図中に SD-101 を読み取る) ことも可能かもしれないが、現地所見を尊重して SD-101 を古墳時代の溝と判断した。古墳時代の溝に後世 (12 世紀以後?) の遺構が重複していたと考える余地も残る。

[規模と形状] 南側に彎曲しながら東西に延びる U 字状の溝である。西側の北西方向に続く部分の中軸線は N-50°-W、東側の北東方向に続く部分の中軸線は N-30°-E。確認できる部分の長さは 36.2m である。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。幅は 1.06～1.76m、底面の幅は 0.48～1.28m、深さは 43～53cm である。

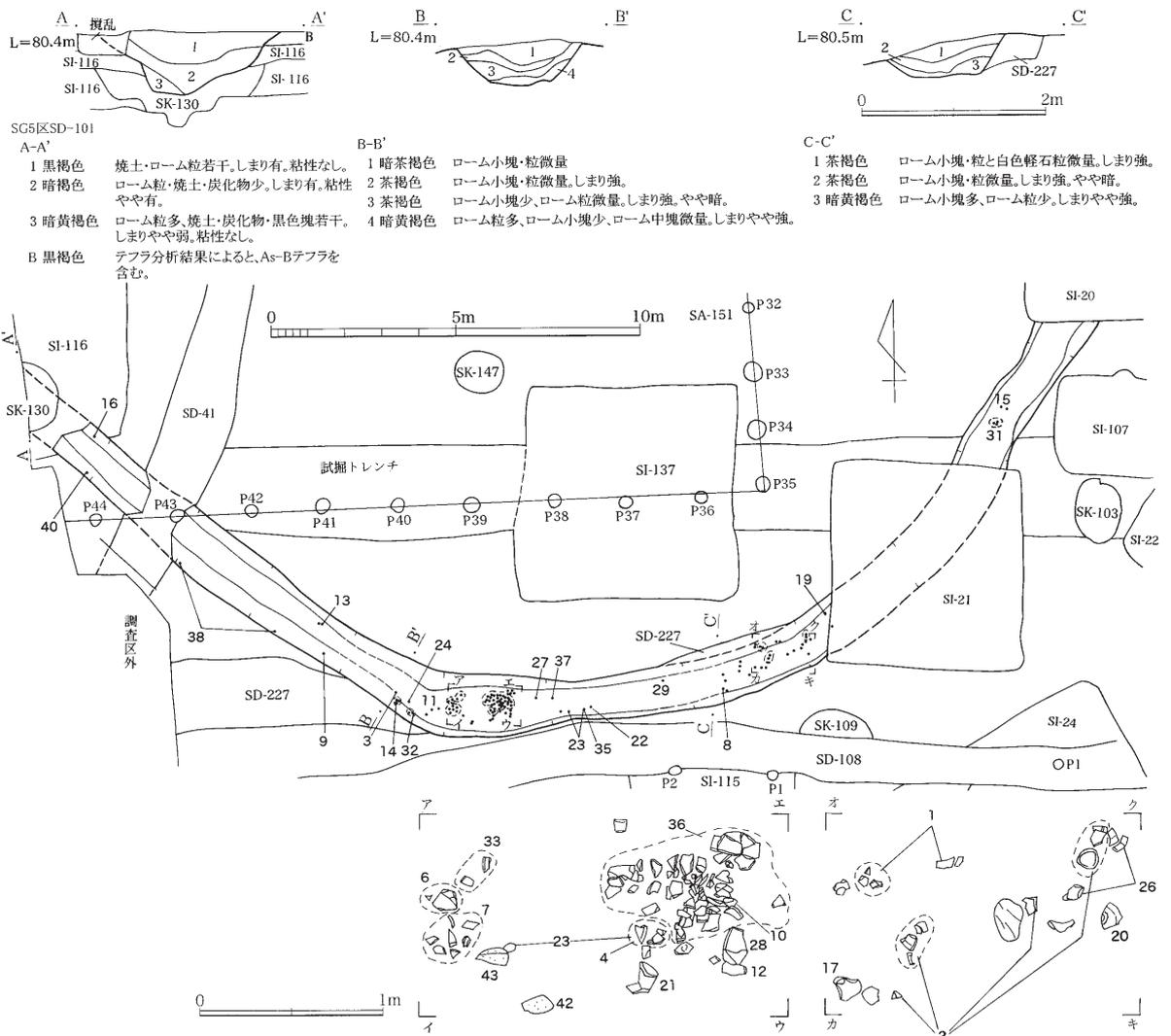
[覆土] 3 層ないしは 4 層に分層される。レンズ状の自然堆積で、断面 C-C' の最上層に微量だが火山灰と思われる白色軽石粒を含む。

[遺物出土状況] SD-227 から流入した土師器を含むとも考えられるが、遺構間での接合例はほとんどない。浅身の椀形杯が多い SD-101 は SD-227 より少し新しい特徴を示すようにも見える。壺・小形壺・高杯が主体の SD-227 に対し、SD-101 は小形壺が少なく、椀形杯・高杯・壺・甕が同量ずつある。古墳中期中葉～後葉の遺物が主体で、中期末葉の土器はほとんどない。SI-116 (古墳中期後葉) と SD-227 (中期中葉～後葉) → SD-101 (中期後葉?) → SI-20 (後期初頭) の順になる。

[出土遺物] 溝としては遺物が多い。SG5 区中央でカーブする部分にまとまっている。土師器の器種は杯・高杯・鉢・小形壺・壺・大形壺甕類が主体で、高杯と壺の多さが目立つ。椀形杯 (1～3・8・10) と壺 (28) は外面に煤が付着している。底部に被熱痕跡があるのは 1 だけで、煤の付着が少なく不規則なものもあり (10)、

火災などで二次的に煤が付着した可能性がある。貼付口縁の壺（36）は、SG5区ではSI-100などにある。図示以外の土師器は合計706片・7,215gで、内訳は杯267片・1,689g、高杯79片・1,353g、鉢1片・69g、小形壺10片・86g、壺甕類349片・4,018g。図化以外に、高杯は脚上半でみると5～6個体、杯・鉢は底部で見ると3個体くらいある。擬格子ではない格子叩き調整の陶質土器（39）は、SI-22などに同一個体の破片がある。軽石質・砂岩質・ホルンフェルスの砥石がある（41～43）。軽石質の砥石はSG10区SI-16などで、ホルンフェルスの砥石はSG5区SI-7などで出土している。

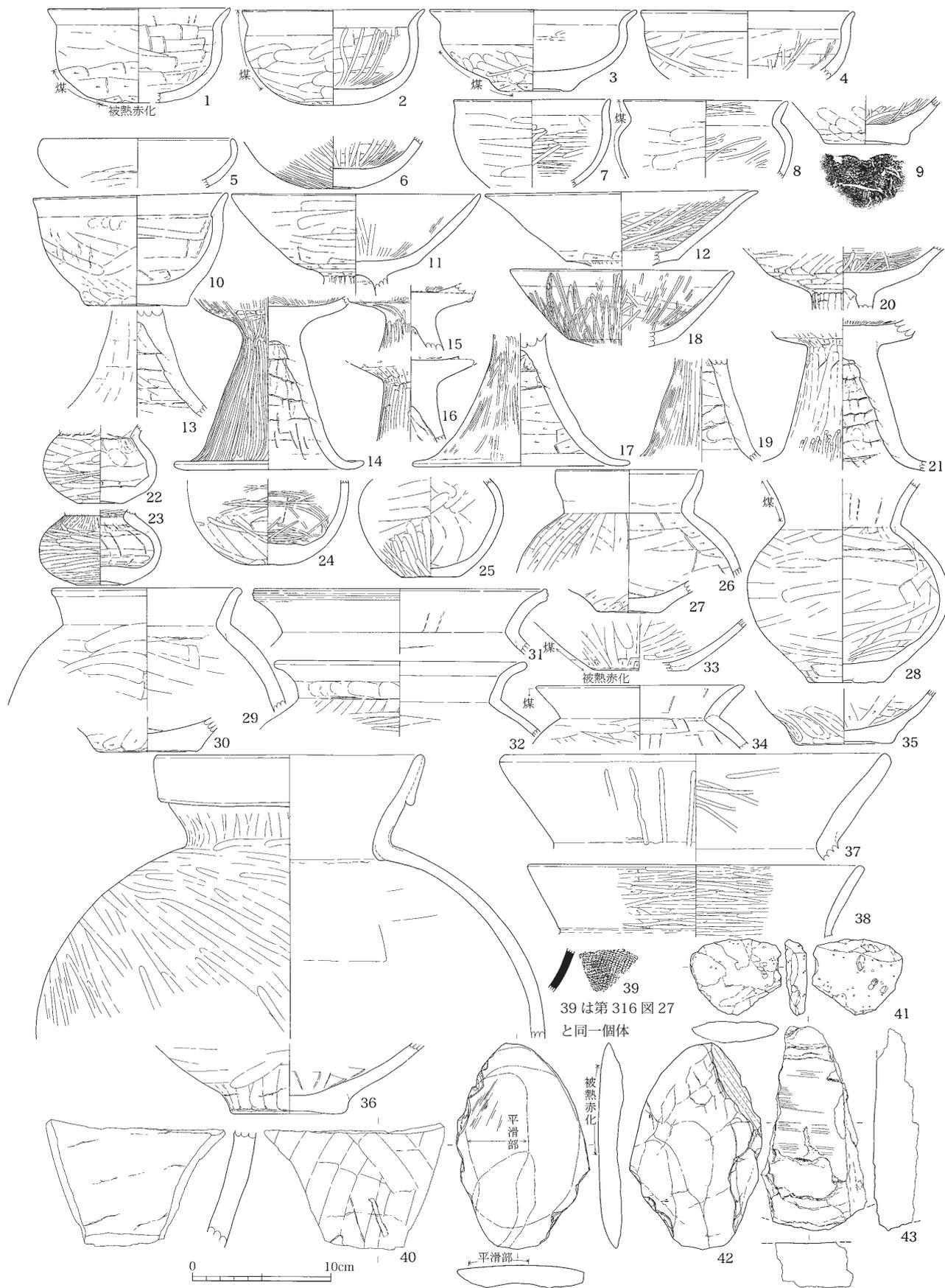
古墳時代以後の遺物は、内面漆仕上げで白色気味の胎土の奈良時代杯1片、古代の常総型甕破片、中世以後の常滑産甕1片（40）が混入している。重複関係について上で触れたように、SD-101に後世（12世紀以後？）の遺構が重複していた可能性も考えさせる資料である。



第343図 権現山遺跡 SG5区 SD-101 (1) 遺構

第198表 権現山遺跡 SG5区 SD-101 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.0 高 6.8	内斜口縁で丸底。荒い調整。外面口縁部軽いヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半～底部ケズリ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、体～底部強いヘラナデ。外面体部煤付着。底部被熱による赤変著しい。火に掛けたものだろう。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒少、 白・赤礫微量 やや軟質	底上14～17cm 口～体2/3周、底一部欠 49、50、C区



第 344 図 権現山遺跡 SG5 区 SD-101 (2) 遺物

第6節 古墳時代の溝

2 土師器 杯	口 復 13.0 高 6.8	内斜口縁。口縁部ヨコナデ、体部下半～底部ケズリのち体部ナデ。体部上端無調整部分あり。底部丸底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデのち放射状の疎らなミガキ。内面底部は比較的平坦になっている。外面口縁～体部煤付着。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 砂粗～細粒微量 やや硬質	底上 7～11cm 口～体 1/2 周、底完存 46、47、52、56
3 土師器 杯	口 14.8 高 5.8 底 5.0	内斜口縁。外面口縁～体部上半ヨコナデ、体部下半～底部ナデのち底部外周ケズリ。底部は突出する平底で、中央がくぼむ。ケズリは乱雑。内面口縁～体部ヨコナデで、体部一部に横方向のミガキがあるが、体～底部は表面の剥落が著しく、調整は不詳。外面体部～底部一部煤付着。全体に被熱している可能性あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白細粒少、白礫～粗 粒と赤・透明粗粒微量 やや硬質	底上 10cm 口～体 1/2 周、底完存 60
4 土師器 杯	口 復 15.2 高 残 4.9	内斜口縁。外面体部ナデのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデのち疎らな縦方向のミガキ。内面ヘラナデの工具先端が荒れているためか、ヘラナデが細かなハゲのようにも見える。	2.5Y7/3 浅黄 緻密 白・赤粗～細粒微量 やや硬質	底上 8cm 口～体 1/4 周 23
5 土師器 杯	口 復 13.5 高 残 3.5 最大 復 14.2	口縁部は丸く内彎する。表面磨滅のため調整が不明確な部分が多い。外面口縁部ヨコナデ、体部下半光沢のあるナデ。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・砂粗～微粒 少 やや硬質	口～体 1/6 周
6 土師器 杯	高 残 3.7 底 3.6	精良な胎土で、厚手。外面体～底部ケズリのちミガキ。ミガキは太く、体部には斜め方向に強く密に施される。底部はいびつで、全体にくぼむ。内面体～底部ナデのち放射状の太いミガキ。	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 白・赤粗～細粒微量 やや硬質	底上 23cm 体～底一部欠 15
7 土師器 杯	口 復 11.1 高 残 6.4	硬質で精緻な作り。内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部ケズリのち体部ナデ、内面口縁～体部ヨコナデのち体部ナデのち体部横方向の密なミガキ。	7.5YR7/8 橙 緻密 白・赤・砂粗粒少 硬質	底上 12cm 口～体 1/4 周 17
8 土師器 鉢	口 復 11.7 高 残 5.5 最大 復 12.4	外面口縁部ヨコナデのち体部軽い光沢のあるナデ。内面口縁部ヨコナデ・体部ヘラナデのち口縁～体部疎らなミガキ。外面口縁～体部煤付着。火に掛けられていたものか。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・ 砂粗粒微量 やや硬質	底上 22cm 口～体 1/6 周 38
9 土師器 鉢	高 残 3.4 底 6.4	外面体～底部ナデ。底部は突出する平底で、中央がくぼむ。内面体～底部ナデのち放射状に近い太いミガキ。外面底部に長さ約3cmの焼成前の線刻あり。線刻内面には凹凸があり、工具を押し引きして線を描いたと見られる。周囲には、粘土の皸とともに、細く短い擦痕のような線が数本ある。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・黒・透明微粒少、 白・赤粗粒微量 やや軟質	底上 39cm 体 1/3 周、底 1/2 周 7
10 土師器 鉢	口 14.0 高 8.1 底 7.2	外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデで、指頭圧痕や粘土の皸が残る。底部丁寧なナデで、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部丁寧なヘラナデで、体部上端に粘土のめくれあり。外面口縁～体部にごく少量の煤付着。内面底部クレーター状の剥落あり。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒 少、白・赤礫微量 やや硬質	底上 26cm 口～体 3/4 周、底完存 31
11 土師器 高杯	口 復 17.8 高 残 7.3	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部光沢のあるナデ、体部下端～底部ナデのち光沢のあるケズリ。脚部上端縦方向の密なミガキ。内面杯部は表面の磨滅が著しいが、放射状のミガキが施されていることは確認できる。脚部上端ナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白粗～細粒と砂粗粒 少、白礫微量 やや硬質	底上 18cm 杯口～体 1/6 周、底 1/3 周 13
12 土師器 高杯	口 復 19.4 高 残 5.3	杯部外面は表面の磨滅著しく、調整不明確。杯部体部下端～底部はケズリ。内面杯部口縁～体部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち口縁～底部太いミガキ。杯部口縁部は薄くやや外反する。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・透明・砂粗～微 粒少、白・透明・砂粗粒微量 やや硬質	底上 19cm 杯口～底 1/5 周 32
13 土師器 高杯	高 残 7.7	外面脚部上半～中位縦方向のナデ。ミガキの可能性はあるが、表面の磨滅が著しく、不詳。内面脚部上半軽いナデで、組積痕をそのまま残す。中位ヘラナデで、組積痕残る。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・砂粗～微粒 少、赤・砂粗粒微量 やや硬質	底上 10cm 脚上半ほぼ完存 9
14 土師器 高杯	高 残 12.5 脚裾 13.6	外面杯部体部下半ナデ・底部ケズリのち縦方向の疎らなミガキ。脚部上半縦方向のケズリ、下半ヨコナデのち縦方向の密なミガキ。内面杯部底部ヘラナデのち密な放射状のミガキ。ヘラナデの工具の当たりが深く刻まれる。脚部上半ナデで、組積痕顕著。下半ヘラナデのち下端ヨコナデ。組積痕は、上側2段は円形、それ以下は螺旋状。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒細粒少、 白礫・赤粗粒微量 やや硬質	底上 27cm 杯底～脚上半一部欠、脚 下半 1/2 周 10
15 土師器 高杯	高 残 4.7	外面杯部体部下端の稜は明瞭で、ケズリのち体部側のみミガキ、底部ナデのち疎らなミガキ。脚部上端ミガキ。内面杯部底部多方向の密なミガキ、脚部上端軽いナデで、しばり目が顕著。杯部は径約8.6cmの円盤を底部にして作られている。脚部上端径は3.8cm。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 赤粗～微粒と砂粗粒 と白・黒細～微粒微量 硬質	底上 21cm 杯底 2/3 周、脚上端完 存 2B
16 土師器 高杯	高 残 6.1	外面杯部底部～脚部上半ケズリのち脚部上半ミガキ。内面杯部底部ナデのち疎らなミガキ、脚部上半強いナデ。杯部は径約9cmの円盤を底部にして作られている。脚部上端径4.0cm。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂粗粒少、砂粗粒と 白礫～細粒微量 硬質	底上 30cm 杯底 1/2 周、脚上半完 存 1
17 土師器 高杯	高 残 9.5 脚裾 復 15.4	外面脚部上半縦方向のナデ・下半ヨコナデのち縦方向のミガキ。表面の磨滅により調整不明な部分多い。内面脚部上端ナデ、上半～中位ケズリのち下半ヨコナデ。上半には組積痕が残る。	7.5YR7/8 黄橙 やや緻密 白・赤・透明・砂粗 ～細粒少 やや硬質	底上 4cm 脚上半完存、下半 1/4 周 44
18 土師器 高杯	口 復 16.0 高 残 5.5	外面杯部体～底部ナデのち口縁部ヨコナデのち口縁～底部やや疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ヘラナデのち放射状の疎らなミガキ。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 灰色礫と白・赤粗～細粒 微量 硬質	杯口～底 1/4 周
19 土師器 高杯	高 残 7.5	外面脚部上半縦方向のミガキ。内面脚部上半ナデで、組積痕が残る。下半ヨコナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや粗い 白・赤・透明・砂粗 ～細粒少、白・砂礫微量 やや硬質	底上 22cm 脚上半ほぼ完存 58
20 土師器 高杯	高 残 4.6	外面杯部体～底部ヘラナデ、脚部上端ミガキ。内面杯部体～底部多方向の密なミガキ、脚部上端ナデ。脚部上端径約4.6cm。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・赤粗～細粒微量 やや軟質	底上 17cm 杯体～底 1/3 周 54
21 土師器 高杯	高 残 10.9	外面杯部体部下半～脚部上半ケズリのち脚部上半～中位ナデのち脚部中位～下半縦方向のミガキ。脚部上半には、杯部の調整に関わると見られる窪の当たりあり。ミガキは強く器面に押し当てたのち下に引いているため、上端が円形にくぼむ。内面杯部体部下半斜め方向、底部一方の密なミガキ。脚部上半～中位軽いナデで、組積痕顕著に残る。下半ヘラナデのちヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 少、白・黒礫微量 やや硬質	底上 21cm 杯底 1/6 周、脚上半完 存 21
22 土師器 小形壺	高 残 5.6 底 3.2 胴 8.1	小形。粗い作り。外面頸部縦方向のヘラナデ。胴部下半～底部ケズリのち胴～底部密なナデ。底部は平底で外縁が丸味を持ち、中央が浅くくぼむ。内面頸部ヘラナデ、胴部上半ナデでしばり目と指頭圧痕が残る。胴部下半～底部ヘラナデのちナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤・砂粗～細粒少 硬質	底上 22cm 頸～底完存 35

第8章 権現山遺跡 SG5 区

23 土師器 小形壺	高底 3.5 胴 8.7	残 5.4	小形。胎土精良で、精緻な作り。外面胴部中位～底部ケズリのち胴～底部密なミガキ。ミガキは口縁部から続くと見られる胴部上半の縦方向ののち、胴部中位～下半横方向。底部は多角形状のミガキで、全体がくぼむ。内面頸部ヨコナデのち横方向のミガキ、胴～底部ヘラナデのちナデ。胴部上半はしぼり目や組積痕がわずかに見られる。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 赤粗粒と白細粒微量 やや硬質	底上 7cm～12cm 頸～胴一部欠、底完存 19、23、33、34
24 土師器 壺	高底 6.0 復 11.4	胴 11.4	小形。底部は外面丸底だが、中央がわずかにくぼみ、正立させることが可能。内面は中央がやや高い平坦面である。外面胴部上半無調整・胴部下半～底部ヘラナデのち胴部疎らなミガキ。鏡先端が荒れているためか、ハケ状に見える部分あり。内面胴～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～微粒と白・砂 細～微粒少、赤・砂礫微量 硬質	底上 3cm 胴 1/4、底完存 61
25 土師器 壺	高底 7.0 復 4.0	底 4.0	小形。胴部上半ナデのち下半幅の狭いヘラナデ。底部ケズリで平底。内面胴部下半～底部ヘラナデのち胴部上半ナデ。	5YR4/6 赤褐 やや緻密 白・砂細粒少 硬質	胴～底 1/5 周
26 土師器 壺	口復 10.4 高残 7.7	復 10.4 高 7.7	外面胴部上半ナデのち疎らな縦方向のケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部は内彎気味に直立する。内面胴部上半ナデのち一部ケズリ。27 と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 砂粗～細粒少 やや硬質	底上 16～18cm 口～胴上半 1/3 周 55、57
27 土師器 壺	高底 2.4 4.6	底 2.4 4.6	外面胴部下端ケズリ、底部ケズリのちナデ。底部は平底で、中央がわずかにくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。26 と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 砂粗～細粒少 やや硬質	底上 13cm 胴下端～底完存 28
28 土師器 壺	高底 14.6 5.4 最大 14.3	底 5.4 最大 14.3	中形。外面口縁部ヨコナデ、胴部ナデのち疎らに光沢を持つナデ。胴部下端～底部ケズリ。底部はやや突出する平底で、中央が小さくくぼむ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴～底部ナデのち胴部疎らな光沢を持つナデ。胴部上半組積痕残る。外面口縁部～頸部に煤が付着するが底部は被熱していないので、糞として使用したものではない。	5Y3/2 オリーブ黒 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 赤粗～細粒微量 硬質	底上 22cm 口下半 1/2 周、胴一部 欠、底完存 27
29 土師器 甃	口復 13.6 高残 9.0	復 13.6 高 9.0	外面胴部上半ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ。胴部上端には、口縁部作出に伴う接合痕が残る。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・半透明粗粒 微量 硬質	底上 16cm 口～胴上半 1/4 周 36
30 土師器 甃	高底 2.5 復 7.0	底 2.5 復 7.0	外面胴部下端～底部ケズリ、底部は平底。内面底部ヘラナデ。内面は表面のクレター状の剥落が著しい。	5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白微粒多、砂礫～粗 粒微量 硬質	底 1/4 周
31 土師器 甃	口復 21.0 高残 4.7	復 21.0 高 4.7	外面胴部上端ナデ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。口縁部は外向きの丸味を持つ面となっており、浅い沈線 2 本がある。上端は軽くつまみ上げられる。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 黒・透明・砂細～微 粒多、白細～微粒少 硬質	底上 21cm 口 1/3 周 2B、17.5-14 表採
32 土師器 甃	口復 18.0 高残 5.3	復 18.0 高 5.3	外面胴部上端縦方向の強いナデのち横方向のミガキ。口縁部下半荒いナデのち口縁部上半ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒 少、白・砂礫微量 硬質	底上 20cm 口～胴上端 1/4 周 11
33 土師器 甃	高底 3.8 復 7.0	底 3.8 復 7.0	薄手。外面胴部下端ケズリのち胴部下半ナデ、底部ケズリ。底部は平底で、外縁にケズリの際の粘土がはみ出す。内面胴部下半～底部ヘラナデ。外面胴部下半煤付着。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 透明・白細～微粒少、 白粗粒微量 硬質	底上 17cm 胴下半～底 1/4 周 16
34 土師器 甃	口復 14.8 高残 4.6	復 14.8 高 4.6	外面口縁部ヨコナデ、胴部上端ケズリのちナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。外面口縁～胴部煤付着。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・砂微粒少、透明 微粒微量 硬質	口～胴上端 1/3 周
35 土師器 甃	高底 3.8 7.2	底 3.8 7.2	外面胴部下端ナデで、底部を上にして見て、底部を右にひねった時にできるような粘土の皺がある。底部ケズリで、突出する平底であり、中央が浅くくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデのち疎らで丁寧なケズリ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・砂細粒少 やや軟質	底上 12cm 底完存 34
36 土師器 大形壺	口高 19.3 残 25.5 底 8.4 最大 復 36.2	口高 19.3 残 25.5 底 8.4 最大 復 36.2	粘土貼付による複合口縁。頸部縦方向のミガキのち胴部上半密なミガキ。胴部下半ケズリのちナデ、底部外周ケズリ、中央のみナデ。底部は突出する平底で、中央のナデ部分がくぼむ。口縁部内外面ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胴部上半は表面の剥落が著しく調整不明な部分が多いが、組積痕をほとんど残していないことは確認できる。内面底部は破片全体に白色土付着。外面胴部下端～底部は赤褐色がかっており、赤彩の可能性ある。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂粗～細粒少、白・ 赤粗～細粒微量 硬質	底上 26cm 口ほぼ完存、胴上半 1/3 周、胴下端～底完存 26、UT-TN-SG TX14-17
37 土師器 大形壺	口高 28.0 残 7.7	口高 28.0 残 7.7	大形。口縁部は厚く、直線的に開く。端部は斜めの平坦面となっている。外面口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ、内面口縁部ヨコナデのち横ないし斜め方向の疎らなミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 砂細～微粒少 硬質	底上 7cm 口一部 29
38 土師器 甃	口高 24.0 残 5.2	口高 24.0 残 5.2	無底式だろう。内外面とも口縁部は横方向のケズリのち密なミガキ。外面口縁部下端は沈線状にくぼむ。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白・黒・砂細粒多 硬質	底上 30～34cm 口 1/6 周 4、6
39 陶質土器 壺	高残 3.2	高 3.2	外面は細かな格子叩き。内面ナデ。SI-22 の 27 番や SI-24 の 27・28 番と同一個体で、SI-22 出土の 1 片と接合した。	5B5/1 青灰 やや緻密 白粗～細粒少 硬質	胴部破片
40 陶器 甃	高残 8.5	高 8.5	常滑産か。内外面ともナデで、内面には組積痕がわずかに残る。外面は、7.5YR4/3 褐色で、暗赤褐色物質が熔出し、径 1～0.7mm のドットとなっている。内面は砂粒と自然釉が付着し、小さな突起の連続となる。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 白・黒粗～細粒少 硬質	底上 35cm 胴部片一部 2
41 軽石	長幅 5.5 重 37.1 厚 1.5	長幅 5.5 重 37.1 厚 1.5	左図の面はゆるい凸凹が多い。右図の面は凸面状の丸味を持つ。擦痕などは確認できない。目の粗い砥石に使用したとすれば右図の面を用いたと考えられる。	5Y4/1 灰 非常に多孔質でやや軟質な溶岩 砂岩	完形
42 石器 砥石	長幅 14.7 厚 9.0 重 1.8 厚 309.1	長幅 14.7 厚 9.0 重 1.8 厚 309.1	河原石を素材とする大形の砥石の破片。残存する表面は丸味を持ち、左寄りの部分が使用により平滑となり、わずかに擦痕が見られる。左下および上端を除く表面が被熱により赤変する。縁辺には細かな剥離があり、やや磨滅している部分もあることから、この状態で使用された可能性もあると見られる。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 ホルンフェルス	底上 28cm 破片 20
43 石器 砥石	長幅 14.6 厚 7.3 重 3.2 厚 37.8	長幅 14.6 厚 7.3 重 3.2 厚 37.8	使用の痕跡は少ないが、表側の平坦面が砥石面で、わずかな凹凸から、左右方向に使用したものと見られる。縁辺が残るのは図下縁のみであり、それ以外は裏面も含め欠損している。	10YR5/4 にぶい黄褐 やや粗い 砂岩	底上 24cm 破片 18

第7節 古墳時代の土坑 (第345～355図、写真図版45～53・186・187)

古墳時代の土坑は、SG5区で71基を確認した。

SG5区SK-34・35・47は古墳中期末の円筒形土坑と考えられる(第346図)。円筒形土坑は集落内の一定箇所に群在することが多い。ここではSG5区の北部に3基がまとまっている。SG5区SK-106・110・111も大形円形で平底だが、壁面がかなり外開きになる形状なので、円筒形土坑とはいえない。

SG5区SK-195・196・202・203は円筒形と呼ぶこともできる形状だが、冬季以外には湧水するような低い土地に掘られているので、貯蔵穴と考えられている円筒形土坑にはふさわしくない。むしろ、井戸や低地の水を汲んで利用する作業に関連する土坑であろう。SK-198とその中にあるSK-199・200は、上部が同時に埋没する複合した井戸状の土坑群である。

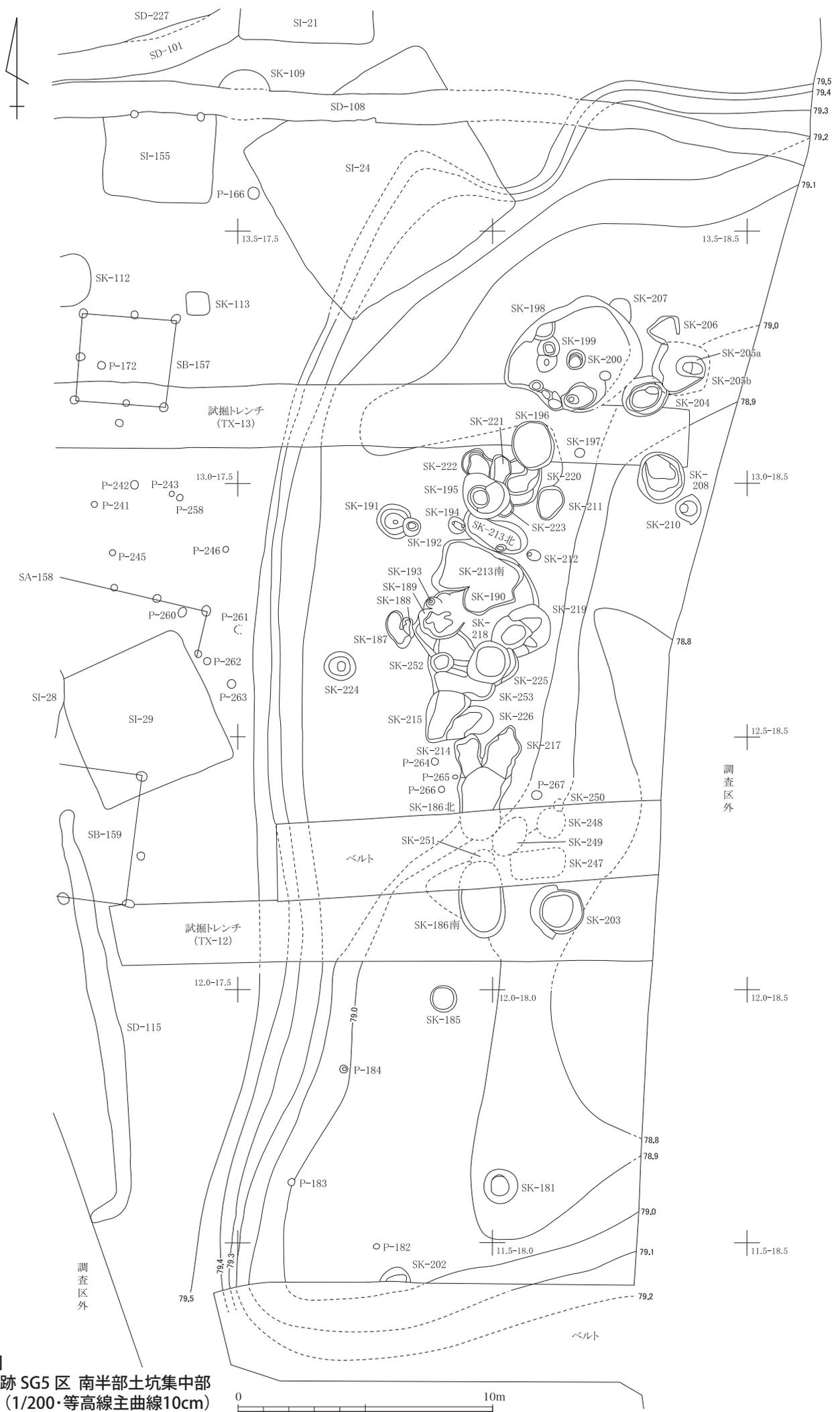
台地端部から低地に群在する土坑群(第345図)は、地山にロームがなく粘土質になる部分に掘るものが目立つ。冬期以外には湧水で水没する地区である。集落が載る台地から東側低地にむかう傾斜面は、地山がローム層直下の礫層になっていて、ここには土坑群を作っていない。それよりも東側の低地に降りた部分では、地山が上層から順に黄色土・灰白色粘土・礫層となっている。この黄色土と灰白色粘土に低地の古墳時代土坑群が集中して掘られていて、深い土坑は底面が礫層に達している。低地面のうちではやや高い、台地側(集落側)に寄った地区に集中している。井戸や粘土採掘坑としての性格が推定される。SK-215とSK-226や、SK-218と219のように、同時に埋没しているとみられる土坑もある。古墳後期初頭のHr-FAテフラが覆土中に堆積・混入する土坑が多いので、主に古墳中期に構築されて自然埋没する途中でテフラが降下したものである。SK-190・191の2基でテフラ検出分析を実施し、白色軽石(Hr-FAまたはHr-FP)と灰白色軽石(As-C)を検出した(本章第2節)。考古学的には、周辺遺跡のテフラ検出状況と出土遺物との関係から、白色軽石を古墳後期初頭のHr-FAと考えることが妥当である。

古墳時代土坑からの出土遺物は、中期後葉～末葉の土師器が目立つ(第351～355図)。SK-31は後期前葉の杯の他に、脚部上端に焼成前穿孔がある高杯片がある(第351図左上隅の2番)。SK-98は古墳終末期前半の土師器を含み、粗製の小形土器が目立つ。SK-98が切る古墳中期の溝SD-42にある小形土器も(第341図)、SK-98の遺物が混在した疑いがある。SK-106にある格子叩き調整の陶質土器2片は、SI-22などに同一個体の破片があり、第351図右下の1は他遺構の破片と接合した図である。関連する遺物としては、古墳中期のSD-42に突線区画を持つ陶質土器の壺がある。SK-190は長胴甕や内面黒色処理の鉢など一定量の遺物があり、後期前～中葉と考えられる。SK-203には白色針状物質(骨針)を含む土師器甕があり、搬入品と考えられる。白色針状物質を含む土師器はSG10区SI-23などにある。SK-204の杯は外面に焼成前刻線がある。SK-204・205aは古墳中期中～後葉の土坑で、上層部に入る古墳時代終末期の杯には底部ヘラ削りを省略したものを含む。SK-205aの甕は焼成前の亀裂を補修した不良品。SK-210には焼粘土塊があり、土師器生産関連遺物の類例はSG5区SI-21などにある。ホルンフェルスの砥石(SK-218)は、SG5区ではSI-7などにある。有機質の遺物は、井戸状のSK-200に木片がある。

第199表 権現山遺跡SG5区 古墳時代の土坑

※SK-34・35・47は円筒形土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-31	16.0-16.0	長方形	重複なし	2.03	0.98	0.11	N-27°-W	単層
古墳後期前葉の土師器杯破片あり。長方形土坑だが覆土は硬く、近現代の長方形土坑とは異なる。								
SK-34	16.5-16.0	円筒形	重複なし	2.03	1.85	0.32	N-75°-E	自然埋没状
わずかに楕円形気味。土坑としては遺物が多く、土師器杯類と壺類が多くて高杯・鉢片と被熱のない礫も含む。古墳中期末と考えられる。								
SK-35	16.0-16.0・16.5、16.5-16.0・16.5	円筒形	SA-151のP6→SK-35→SK-36	2.15	2.08	0.35～37		自然埋没状
時期不明のSK-36に切られる。古墳時代の方形柵列SA-151のP6と重複し、上面の観察からP6を切ると見られる。杯部が完存する高杯と杯が出土。粗いハケ調整の土師器甕破片も出土。古墳中期末。								
SK-47	17.0-16.0	円筒形	重複なし	1.51	1.44	0.26		自然埋没状
遺物は土師器杯(または鉢)2片と壺類胴部1片で、古墳中期と思われる。								
SK-51	14.0-16.5	隅丸方形	SK-96より新?	2.72	2.52	0.49	N-22°-E	Hr-FAの堆積層有
古墳中期のSK-96と重複し、SK-51を先に調査しているのでSK-96を切る可能性あり。土坑としては遺物が多く、土師器壺類の大破片が多い。須恵器壺(または壺)の破片は、西側にあるSI-116で出土した破片と同一個体。上層にFAが入るので古墳中期後葉。								

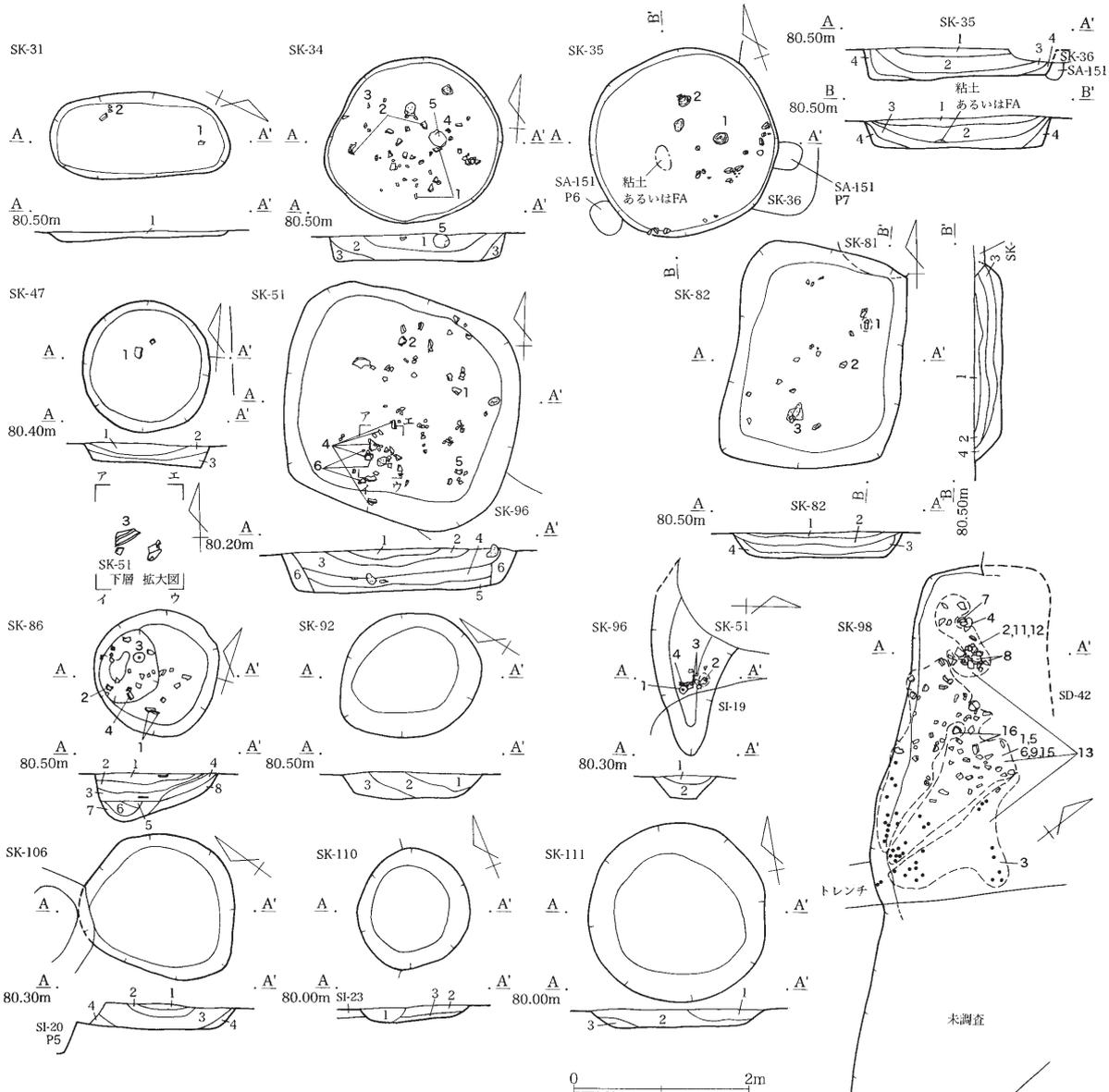


第 345 図
 権現山遺跡 SG5 区 南半部土坑集中部
 (1/200・等高線主曲線10cm)

第7節 古墳時代の土坑

SK-82	15.5-16.5、16.0-16.5	隅丸長方形	SK-81より古	2.57	1.91	0.30	N-15°-E	自然埋没状	白色軽石粒有
時期不明のSK-81に切られる。古墳時代土坑としては遺物は少なめで、模倣杯がなく長脚高杯と小形壺があることから中期後葉頃か。									
SK-86	15.5-16.5	円形	重複なし	1.45	1.40	0.54		自然埋没状	白色軽石粒有
古墳中期のSK-86・92・145は近接し、近い時期かもしれない。底面にピット状の部分あり。最上層はHr-FAテフラ堆積層の可能性もある。土坑としては遺物が多く、模倣杯がなく長脚高杯と小形壺があることから中期後葉頃か。									
SK-92	15.5-16.5・17.0	楕円形	重複なし	1.77	1.41	0.28	N-56°-W		
古墳中期のSK-86・92・145は近接し、近い時期かもしれない。遺物は少量で、図示した以外に土師器杯・高杯・小形壺・壺類の小破片がある。図示した鉢から中期後葉頃と見られる。									
SK-96	14.0-16.5	不整形か	SI-19・SK-51より古?	2.25	1.00	0.25			
古墳後期のSI-19および古墳中期のSK-51の調査終了後に調査を実施しているため、SK-96が最古かと推定される。土師器片は大破片が見られ、杯は含まない。古墳中期中～後葉。									
SK-98	15.5-17.5	長方形か	SD-42より古	3.89	2.00	0.30	N-55°-W	単層	
古墳中期のSD-42を切る。低地際にある。遺物量が多いが混入品も含むと見られる。古墳終末期前半の杯を含む。小形土器は図示以外に底部木葉痕3点と底部削り調整1点。									
SK-106	14.0-17.5・18.0	楕円形	SI-20より古	1.85	1.56	0.34	N-20°-W	Hr-FAの堆積層有	
古墳後期のSI-20に切られる。図示した初期須恵器2片以外は土師器6片(甕5・杯1)だけで時期を決めにくい。上層にFAが入るので古墳中期。									
SK-110	13.0-17.0	楕円形	SI-23より新	1.37	1.26	0.19	N-26°-E	自然埋没状	
古墳中期のSI-23を切る。SK-110・111・112は近接し、同時期の可能性がある。土師器小破片があるが、SI-23から混入したものとと思われる。									
SK-111	13.0-17.0、13.5-17.0	円形	重複なし	2.10	2.03	0.22		焼土有	
SK-110・111・112は近接し、同時期の可能性がある。遺物は出土しなかった。									
SK-112	13.0-17.0	楕円形	重複なし	2.14	1.77	0.07	N-24°-E	焼土・炭有	
SK-110・111・112は近接し、同時期の可能性がある。土師器壺類と杯・高杯片が出土し、上げ底状の杯底部から古墳中期の可能性あり。									
SK-121	9.0-18.0、9.5-18.0	長方形	重複なし	1.78	0.93	0.28	N-27°-W	焼土有	
西側にピット状部分があり、その中に炭化物を多く含むが、後世のピットと考えられる。遺物は土師器の小破片ばかりで、中期の椀形杯と後～終末期の小形土器がある。									
SK-130		円形か	SI-116→SK-130→SD-101	1.90	—	0.69		焼土・炭・Hr-FA塊有	
古墳中期のSI-116を切り、古墳時代の可能性がある溝SD-101に切られる。遺物は土師器小片でSI-116からの混入がほとんどと思われる。									
SK-140	14.5-16.5	隅丸方形	P-235と重複	1.45	1.42	1.31	N-75°-E		
時期不明のP-235と重複し新旧不明。井戸の可能性もある深いピット。両脇のピット2本と併せて井戸となるのかもしれない。土師器破片が少量あり、杯片は中期末～後期前葉頃。									
SK-142	14.5-16.5・17.0	楕円形	重複なし	1.30	1.09	0.21	N-10°-E	自然埋没状	
写真によると、土坑内南端にピットがあるが、その断面図はない。遺物はハケ調整土師器壺破片があり、煤の状況からカマド出現以前と見られる。									
SK-144	15.0-17.0	円形	重複なし	0.52	0.47	0.18		自然埋没状	
断面図に記入した位置で同一個体の高杯破片が出土した。他の遺物はない。古墳中期後葉頃と見られる。									
SK-145	15.5-17.0	楕円形	重複なし	1.50	1.34	0.23	N-10°-E	自然埋没状	
古墳中期のSK-86・92・145は近接し、近い時期かもしれない。土師器壺の底部3片と胴部3片があり、長胴化する以前の古墳中期と考えることもできる。									
SK-149	15.5-16.0	楕円形	重複なし	0.43	0.32	0.12		単層	
平面図と断面図に記入した遺物が、確認面から底面までのレベルにかけて入る。小形壺体部、高杯脚端部、3～4個体の壺類の頸～胴部破片があり、古墳中期の可能性もある。									
SK-181	11.5-17.5・18.0	円形	重複なし	1.35	1.32	1.19		自然埋没状	軽石粒・炭有
低地にあり、底部は灰白色粘土層中にある。調査時は3月中旬なので湧水はしていないが、井戸の可能性もある。遺物は土師器壺類の胴部が主体で、鉢や小形壺が1～2片混じる。軽石粒がHr-FAテフラであるかどうかは不詳。古墳中期の可能性もある。									
SK-185	11.5-17.5・12.0-17.5	円形	重複なし	1.05	1.03	0.15		自然埋没状	
低地寄りにあり、底部は黄色土層中にある。遺物は図示した土師器1片だけだが、周囲の土坑と同じく古墳時代と考えられる。									
SK-186南	12.0-17.5・18.0	長楕円形か	SK-251より新	約3.10	1.74	約0.40	N-9°-E	自然埋没状	
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳中期のSK-251を切る。北半部平面図と南半部断面図なし。土層断面図が所在不明のため、写真をトレースして掲載した。遺物は土師器壺片が主体で古墳中期の杯や鉢なども少量混じり、図示した古墳終末期の漆仕上げ半球形杯(口径10～11cm)もある。									
SK-186北	12.0-17.5・18.0	楕円形	SK-214・217より新?	約3.20	2.10	0.35		Hr-FA塊有?	
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳中期のSK-214・217と重複し、SK-214・217を切る可能性が高い。南半部平面図・断面図なし。覆土上層にHr-FAテフラ塊が入るように観察される。古墳中期の内斜口縁杯や古墳終末期の直立口縁模倣杯(流入?)がある。									
SK-187	12.5-17.5	不整楕円形	SK-218→SK-188→SK-187	1.55	0.75	0.19	N-15°-W	自然埋没状	白色粒有
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳時代のSK-188を切る。SK-187・188は遺物が区別されていない。土師器壺破片が主体で、長胴壺はなく、鉢片も少量ある。古墳中期の可能性あり。									
SK-188	12.5-17.5	楕円形か	SK-218→SK-188→SK-187	0.90	0.50	0.19		自然埋没状	白色粒有
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳中期末のSK-218を切り古墳時代のSK-187に切られる。遺物はSK-187を参照。古墳中期の可能性あり。									
SK-189	12.5-17.5	不整楕円形	SK-218→SK-189→SK-193	1.82	1.63	0.25	N-50°-E	白色粒有	
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳時代のSK-193・218と重複し、SK-193に切られる。SK-189を先に調査しているため、SK-218を切ると考えられる。遺物は図示した2点の他に土師器壺・甕・杯・小形壺・鉢があり、古墳中期中～後葉と見られる。									
SK-190	12.5-17.5・18.0	不整楕円形	SK-213南・218より新?	2.68	1.84	0.63	N-56°-E	自然埋没状	Hr-FA塊有
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳中期のSK-213南・218より先に調査しているため、SK-213南・218を切ると考えられる。遺物はかなり浮いたものが多く、後期前葉の遺物が一定量あるのでその時期と考えられる。									
SK-191	12.5-17.5	円形	SK-192より古	1.42	1.33	0.83		自然埋没状	白色粒有
低地の井戸状土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳時代のSK-192に切られる。遺物は上部に多く、古墳中期末～終末期の杯片も含むが、図示した土師器壺から見て中期中～後葉。									
SK-192	12.5-17.5	円形	SK-191より新	0.75	0.70	1.10		自然埋没状	白色粒有
低地の細い井戸状土坑。古墳中期のSK-191を切る。SK-192に確実に伴う遺物はないが、古墳時代土坑が集中する地区にあるので古墳時代と考えた。									
SK-193	12.5-17.5	楕円形柱状	SK-218→SK-189→SK-193	0.65	0.47	0.44		自然埋没状	白色軽石粒有
低地の土坑で、底部は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-189を切る。古墳中期中～後葉の土師器高杯脚端部が1片だけ出土した。古墳時代土坑が集中する地区にあるので古墳時代と考えた。									
SK-194	12.5-17.5	楕円形	SK-213北より新	0.72	0.60	0.38		自然埋没状	白色粒有
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳時代のSK-213北を切る。土師器高杯と甕が8片あり、長胴壺や模倣杯はない。古墳時代土坑が集中する地区にあるので古墳時代と考えた。古墳中期の可能性もある。									
SK-195	12.5-17.5	楕円形	SK-213北・(221?)・222・223より新	1.20	1.78	1.46	N-45°-W	自然埋没状	Hr-FA塊有
低地の土坑で、底部は灰白色粘土層中にある。古墳時代のSK-221よりも先に調査しているため、SK-221を切る可能性が高い。上部に段を持ち、下段が筒状に深くなる井戸状。古墳中期末の身模倣形杯を含む約60片がある。上部にHr-FAテフラがあるので古墳中期と考えられる。									
SK-196	13.0-18.0	楕円形	SK-220より新?	1.89	1.66	0.40	N-12°-W	自然埋没状	白色軽石粒有
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳中期のSK-220よりも先に調査しているため、SK-220を切る可能性が高い。古墳中期中～後葉の小形壺・杯・鉢・甕あり。									
SK-197	13.0-18.0	円形	重複なし	0.38	0.35	0.20		単層	
低地のピット状土坑で、底部は灰白色粘土層中にある。土師器が4片だけ出土し、古墳中期中～後葉の可能性もある。									
SK-198	13.0-18.0	不整楕円形	SK-204→SK-198→SK-207 SK-199・200と同時期	5.40	4.18	1.54	N-60°-E	自然埋没状	白色軽石塊有
低地の土坑で、底部は黄色土層中にある。古墳時代のSK-199・200と重複し、上部はほぼ同時期に埋没する。古墳中期のSK-204を切り、古墳中期のSK-207に切られると思われる。礫と古墳中期～後葉の土師器片が多く、後期の遺物は含まないので中期中～後葉と考えられる。									
SK-199	13.0-18.0	不整楕円形	SK-198と同時期	0.89	0.82	1.74		自然埋没状	白色粒・炭有
低地の井戸状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて礫層中に底部がある。古墳中期のSK-198と重複し、上部はほぼ同時期に埋没する。遺物はないが、SK-198と同時代の土坑。									

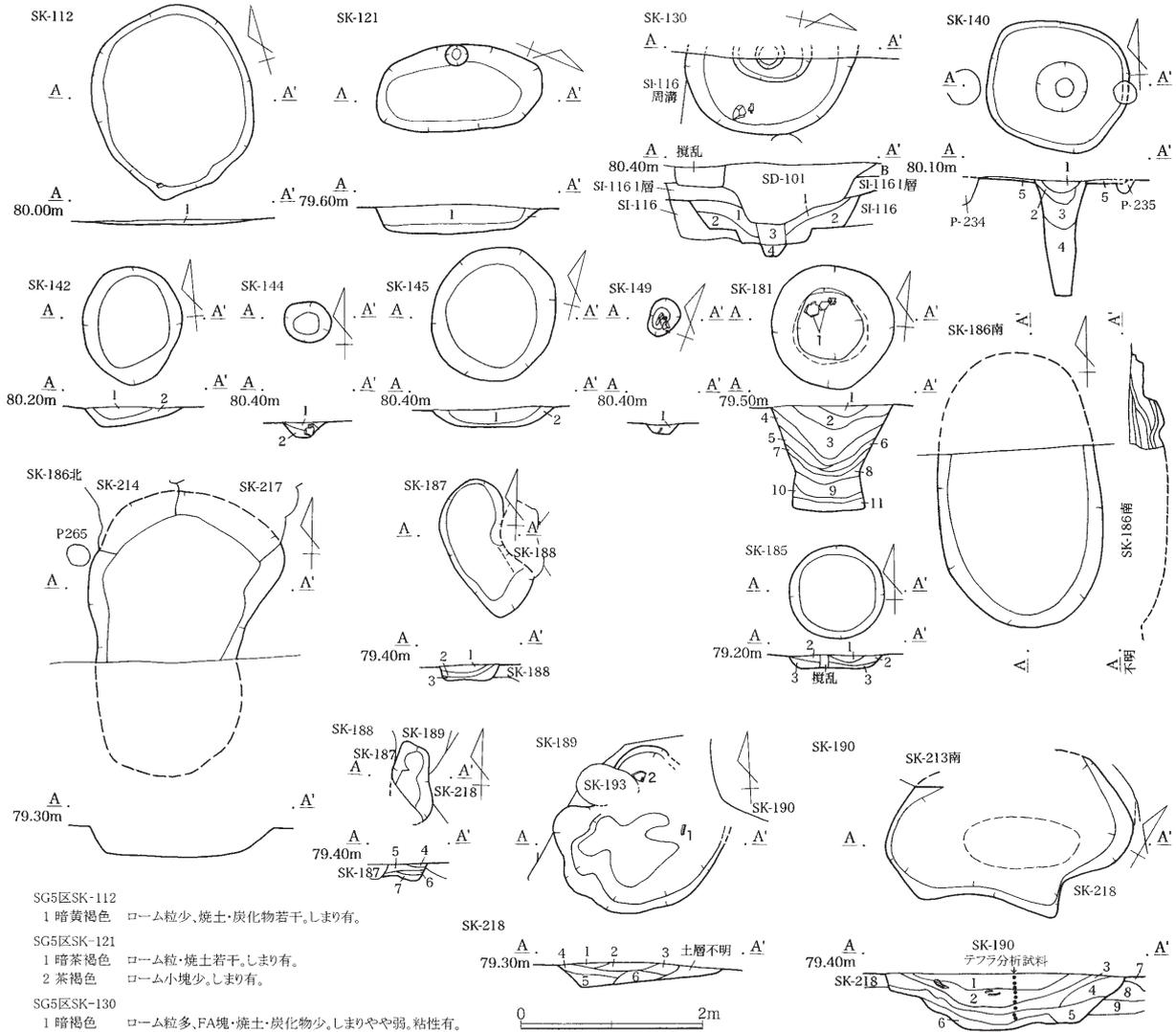
第8章 権現山遺跡 SG5 区



- | | | |
|------------|---------|----------------------------------|
| SG5区SK-31 | 1 暗茶褐色 | ローム粒少、ローム塊(径1cm)微量。しまり強。 |
| SG5区SK-34 | 1 黒色 | ローム粒少、粘土塊(径3mm)微量。しまりやや強。 |
| | 2 やや黒色 | ローム粒少。しまりやや強。 |
| | 3 暗茶褐色 | ローム粒多、ローム塊(径2mm)少。しまり強。 |
| SG5区SK-35 | 1 黒褐色 | ローム粒・今市軽石粒微量。しまり強。 |
| | 2 黒褐色 | ローム粒少、ローム塊(径1cm)微量。しまり強。 |
| | 3 暗茶褐色 | ローム粒少。しまりやや強。 |
| | 4 茶褐色 | ローム粒多、ローム塊(径2~4mm)少。しまりやや強、やや暗。 |
| SG5区SK-47 | 1 暗褐色 | ローム粒少、ローム塊(径3mm)微量。しまり強。 |
| | 2 褐色 | ローム塊(径1~3mm)・粒少。しまり強、やや暗。 |
| | 3 暗茶褐色 | ローム塊(径2~4mm)・粒多。しまり強。 |
| SG5区SK-51 | 1 褐色 | FA粒多。しまり・粘性なし。 |
| | 2 褐色と灰色 | FA堆積層、褐色土にFAが塊状・斑に混入。しまり・粘性なし。 |
| | 3 暗褐色 | ローム粒少。しまり・粘性なし。 |
| | 4 褐色 | ローム粒少。しまり・粘性なし。 |
| | 5 褐色 | ローム粒多。しまりなし。粘性やや有。やや明。 |
| | 6 暗褐色 | ローム粒多、ローム塊少。しまりなし。粘性やや有。 |
| SG5区SK-82 | 1 黒褐色 | ローム粒・白色軽石粒微量。しまりやや強。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒少。しまりやや強。 |
| | 3 褐色 | ローム粒少、ローム塊(径2~3mm)微量。しまりやや強、やや暗。 |
| | 4 暗茶褐色 | ローム粒多、ローム塊(径3mm)少。しまりやや弱。 |
| SG5区SK-86 | 1 黒褐色 | ローム粒・白色軽石粒微量。しまりやや強。 |
| | 2 暗褐色 | ローム粒少、炭化物微量。しまり強。 |
| | 3 褐色 | ローム粒少、ローム塊(径5mm)微量。しまりやや強、やや暗。 |
| | 4 暗茶褐色 | ローム粒多、ローム塊(径3~5mm)少。しまり強。 |
| | 5 暗茶褐色 | ローム粒少。しまりやや弱。 |
| | 6 茶褐色 | ローム粒多、ローム塊(径3mm)少。しまり弱、やや暗。 |
| | 7 暗黄色 | ローム塊(径5mm)多。しまり強。 |
| | 8 黄色 | ローム塊混成。しまり強。(掘り過ぎか) |
| SG5区SK-92 | 1 暗褐色 | ローム粒少、ローム塊(径2~4mm)微量。しまりやや弱。 |
| | 2 暗茶褐色 | ローム塊(径3~4mm)・粒多。しまりやや強。 |
| | 3 茶褐色 | ローム塊(径3~4mm)・粒少。しまりやや強、やや暗。 |
| SG5区SK-96 | 1・2 | 土層の特徴不明。 |
| SG5区SK-98 | 1 明茶褐色 | ローム中塊少。しまり弱。土師器片多。 |
| SG5区SK-106 | 1 灰褐色 | FA粒・今市軽石粒多。しまり・粘性なし。 |
| | 2 灰褐色 | FA大塊・粒多。しまり有。粘性なし。 |
| | 3 暗黄褐色 | ソフトローム小塊・粒多。しまり・粘性なし。 |
| | 4 黄褐色 | ソフトローム塊多。しまりなし。粘性やや有。3 暗黄褐色 |
| SG5区SK-110 | 1 暗黄褐色 | ローム塊・粒多、焼土若干。しまり有。 |
| | 2 暗茶褐色 | ローム塊・粒若干。しまり有。 |
| | 3 茶褐色 | ローム粒若干。しまり有。 |
| SG5区SK-111 | 1 明黄褐色 | ローム小塊・粒多、焼土若干。しまり有。 |
| | 2 暗黄褐色 | ローム粒少、ローム大塊・焼土若干。しまり有。 |
| | 3 暗黄褐色 | ローム粒・黒色小塊少。しまり有。 |

第346図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑(1) 遺構

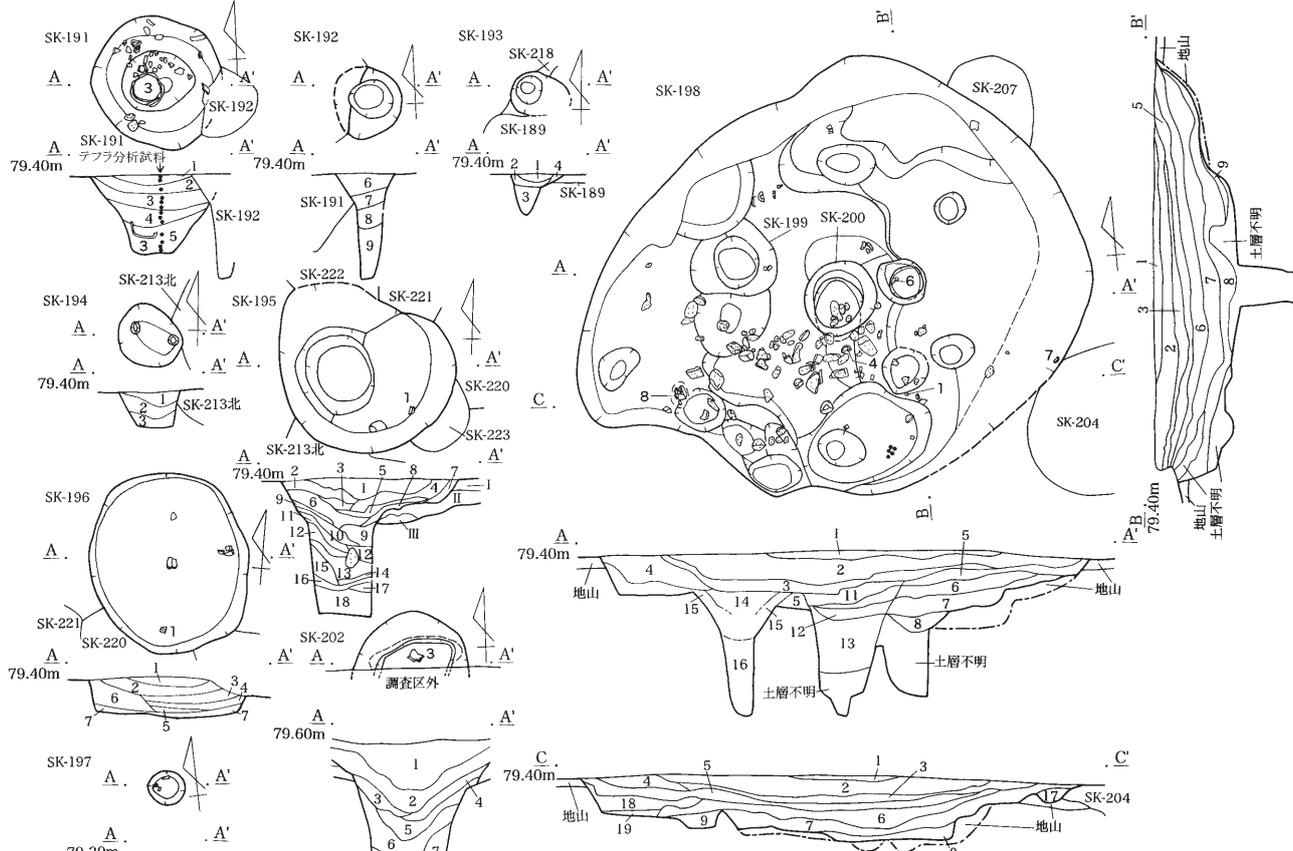
第7節 古墳時代の土坑



- SG5区SK-112
1 暗黄褐色 ローム粒少、焼土・炭化物若干、しまり有。
- SG5区SK-121
1 暗茶褐色 ローム粒・焼土若干、しまり有。
2 茶褐色 ローム小塊少、しまり有。
- SG5区SK-130
1 暗褐色 ローム粒多、FA塊・焼土・炭化物少、しまりやや弱、粘性有。
2 暗褐色 ローム塊・粒と焼土若干、しまり有、粘性有。
3 暗黄褐色 ローム粒・FA小塊多、炭化物少、しまり弱、粘性有。
4 暗褐色 ローム粒少、しまり弱、粘性有。
- SG5区SK-140
1 暗褐色 ローム粒極微量、今市軽石粒極微量、しまりやや強。
2 暗褐色 ローム粒微量、しまりやや弱。
3 暗褐色 ローム粒少、ローム小塊、粘土塊微量、しまり弱。
4 暗黄褐色 ローム小塊・粒多、しまり弱。
5 灰色 粘土多、しまりやや強、粘性有。
- SG5区SK-142
1 暗黄褐色 ローム塊・粒若干、しまり弱。
2 黄褐色 ローム塊少、しまりやや弱、しまり有。
- SG5区SK-144
1 暗黄褐色 ローム粒多、しまりやや強。
2 黄褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりやや強。
- SG5区SK-145
1 黒褐色 ローム粒少、土師器片含む、しまり弱。
2 暗黄褐色 ローム塊・粒少、しまり弱。
- SG5区SK-149
1 黒褐色 ローム粒少、土師器片含む、しまり有。
- SG5区SK-181
1 黒褐色 白色軽石粒少、七本桜軽石(?)粗～細粒と今市軽石粒微量、しまり強。
2 黒褐色 白色軽石粒少、七本桜軽石(?)・炭化物微量、今市軽石粒・酸化鉄極微量、しまり強。
3 暗褐色 白色軽石粒少、七本桜軽石(?)・炭化物微量、今市軽石粒・酸化鉄極微量、しまり強。
4 暗灰色 灰色砂粒・七本桜軽石(?)少、今市軽石粒微量、炭化物・酸化鉄極微量、しまりやや強、粘性有。
5 暗褐色 灰色砂粒少、七本桜軽石(?)・今市軽石粒微量、炭化物・酸化鉄極微量、しまりやや弱、粘性有。
6 暗褐色 灰色砂粒微量、七本桜軽石(?)・今市軽石粒と炭化物極微量、しまりやや弱、粘性有。
7 暗褐色 灰色砂粒・七本桜軽石(?)少、今市軽石粒微量、炭化物極微量、しまりやや弱、粘性有。
8 黒褐色 七本桜軽石(?)極微量、しまり弱、粘性有。
9 暗灰色 粘土小塊・粒多、七本桜軽石(?)・今市軽石粒と酸化鉄極微量、しまり弱、粘性有。
10 暗褐色 粘土粒微量、しまり弱、粘性有。
11 暗灰色 粘土塊・粒少、七本桜軽石(?)・炭化物微量、今市軽石粒極微量、しまり弱、粘性有。
- SG5区SK-185
1 暗褐色 ローム小塊・粒と粘土粒微量、今市軽石粒極微量、しまり強。
2 黒褐色 ローム粒・粘土粒微量、今市軽石粒極微量、しまり強。
3 灰色粘土 粘土粒少、今市軽石粒極微量、しまりやや強。
- SG5区SK-186北・SK-186南
土層の特徴不明。
- SG5区SK-187
1 黒褐色 白色粒微量、ローム粒・炭化物極微量、しまりやや強。
2 暗褐色 粘土塊(径1～2mm)・粒と白色粒微量、しまりやや強。
3 暗茶褐色 粘土塊(径1～2mm)・粒少、白色粒微量、しまりやや強。
- SG5区SK-188 (1～3層は欠番)
4 黒褐色 ローム塊(径1mm)・粒と白色粒微量、しまり強。
5 暗褐色 粘土粒少、粘土塊(径1～2mm)・白色粒・今市軽石粒微量、しまりやや強。
6 暗褐色 粘土塊(径1～2mm)・粒少、しまりやや強。
7 灰褐色 粘土塊(1～3mm)・粒多、しまりやや強、粘性やや有。
- SG5区SK-189
1 黒褐色 ローム塊(径1mm)・粒と白色粒微量、しまり強。
2 褐色 ローム塊(1～2mm)・粒多、白色粒極微量、しまり強。
3 暗褐色 ローム粒少、ローム塊(径1mm)・粘土塊(径1mm)・白色粒微量、しまりやや弱。
4 暗褐色 ローム塊(径1mm)・粒と粘土塊(径1～2mm)・粒微量、しまりやや弱。
5 褐色 ローム塊(径1～2mm)・粒と粘土塊(径1～3mm)・粒少、しまりやや弱。
6 暗茶褐色 ローム塊(1mm)・粒と粘土塊微量、しまり弱。
- SG5区SK-190 (1～9層はすべてしまり強)
1 黒褐色 白色粒少、ローム塊(径1mm)・粒微量。
2 暗褐色 ローム粒・白色粒少、ローム塊(径1～2mm)微量。
3 褐色 ローム塊(径5mm)・粒少、白色粒微量。
4 暗褐色 ローム塊(径5mm)・粒少、白色粒・FA塊(径2mm)微量。
5 明茶褐色 ローム粒多、ローム塊(径2mm)少、粘土塊(径2～3mm)微量。
6 暗黄褐色 ローム塊(径2～5mm)・粒多、粘土塊(径2～3mm)・粒少。
7 黄褐色 ローム塊(径2～5mm)・粒多、白色粒極微量。
8 黒褐色 ローム塊(径1～2mm)・粒と白色粒・FA塊(径1～5mm)微量。
9 暗灰色粘土 粘土塊(層を成す)多、ローム塊(1～3mm)・粒微量、粘性有。

第 347 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (2) 遺構

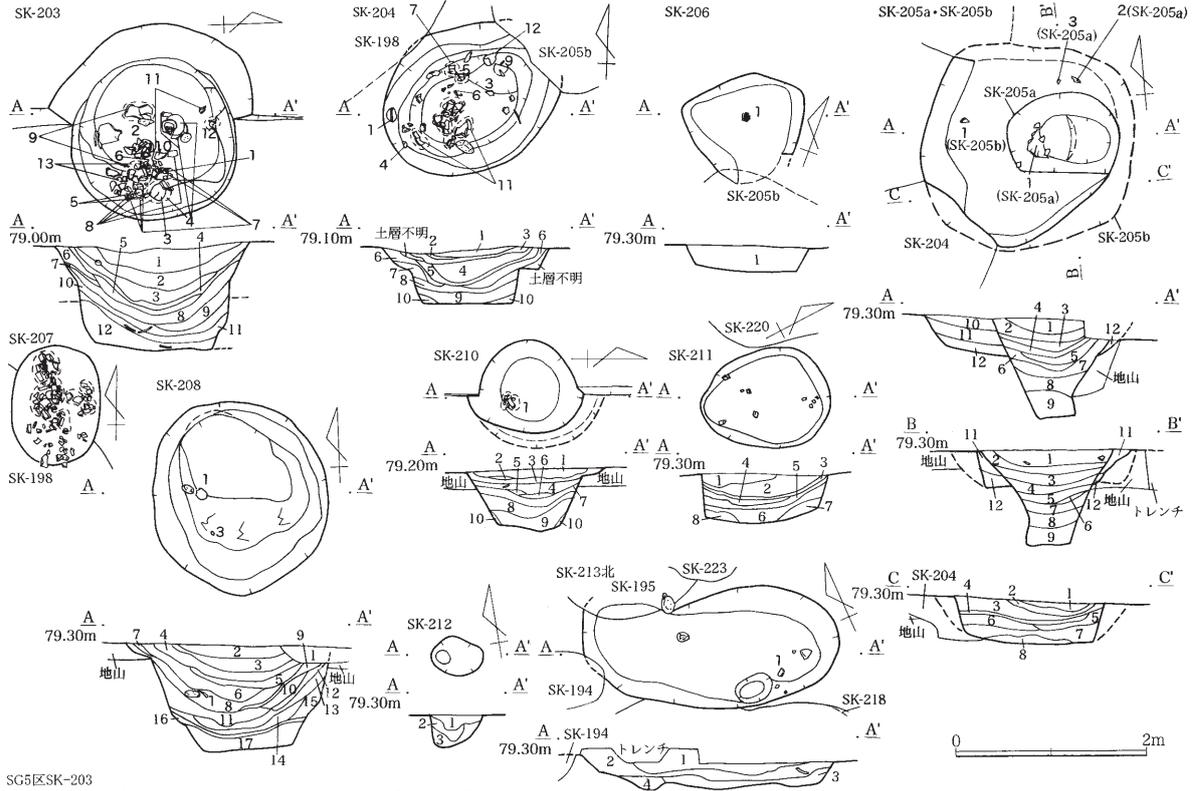
第8章 権現山遺跡 SG5 区



- SG5区SK-191
- 1 黒褐色 白色粒少、ローム粒微量。しまりやや強。
 - 2 暗茶褐色 ローム粒・白色粒微量。今市軽石粒極微量。しまりやや弱。
 - 3 暗褐色 ローム粒少、白色粒微量。しまり弱。
 - 4 暗茶褐色 ローム粒・白色粒・今市軽石粒微量。しまり弱。
 - 5 黒褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と粘土塊(径1~3mm)微量。しまり弱。粘性有。
- SG5区SK-192
- 6 黒褐色 白色粒少、ローム粒微量。今市軽石粒塊(径2mm)極微量。しまりやや強。
 - 7 暗褐色 ローム粒少、白色粒・炭化物微量。しまりやや弱。
 - 8 暗灰色 粘土塊(径2~3mm)・粒多、ローム粒微量。しまり弱。粘性有。
 - 9 灰褐色 粘土塊多、ローム塊(径2~4mm)・粒と白色粒塊(径2mm)・今市軽石粒微量。しまり弱。粘性有。
- SG5区SK-193
- 1 黒褐色 ローム塊(径2~3mm)と粘土塊(径1~2mm)・粒少、ローム粒微量。しまり強。
 - 2 暗褐色 粘土塊(径1~3mm)・粒少、ローム粒微量。しまり強。
 - 3 暗灰色 粘土塊と粒の混成。今市軽石粒・白色軽石粒微量。しまりやや強。粘性有。
 - 4 灰色粘土 粘土純層。しまり強。粘性有。
- SG5区SK-194
- 1 暗褐色 ローム粒少、白色粒微量。今市軽石粒極微量。しまり弱。
 - 2 褐色 ローム塊(径1~3mm)・粒少、粘土塊(径1~2mm)・粒と白色粒微量。しまり弱。
 - 3 黒褐色 ローム塊(径3mm)・粒微量。しまりやや弱。
- SG5区SK-195
- 1 暗褐色 白色粒少、ローム塊(径1~2mm)・粒とFA塊微量。しまり強。
 - 2 暗褐色 粘土塊(径1~2mm)・粒少、白色粒・FA塊微量。ローム塊(径2~3mm)極微量。しまり強。
 - 3 暗褐色 粘土塊(径1mm)・粒少、白色粒極微量。しまりやや強。
 - 4 褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と粘土塊(1~2mm)・粒少、FA塊微量。しまり強。
 - 5 暗灰色 粘土塊(1~3mm)・粒少、ローム塊(径1mm)微量。しまり強。
 - 6 黒褐色 ローム塊(径1~3mm)・粒と粘土塊(径1~2mm)・粒と白色粒微量。炭化物極微量。しまりやや弱。
 - 7 暗褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と粘土粒微量。白色粒極微量。しまり強。
 - 8 褐色 ローム塊(径1mm)・粒少、粘土粒微量。炭化物極微量。しまり強。
 - 9 暗灰色 ローム粒・ローム塊(径1mm)微量。砂粒微量。粘土塊多。しまり弱。
 - 10 茶褐色 粘土塊(径5mm)微量。ローム粒極微量。しまり弱。
 - 11 黒褐色 粘土塊(径2~3mm)・粒微量と砂粒微量。しまり弱。
 - 12 茶褐色 ローム塊(径2mm)・粒と粘土塊(径2mm)微量。しまり弱。
 - 13 暗灰色 粘土塊多、ローム塊(径3mm)・砂粒微量。しまり弱。
 - 14 灰色粘土 砂質ローム塊(径2~3cm)・粘土塊(径2~3mm)少。しまりやや強。
 - 15 暗褐色 粘土塊(径1~2mm)・粒と砂粒微量。しまり弱。
 - 16 灰色粘土 砂質ローム塊(径2~3cm)多。粘土塊(径1cm)少。しまりやや強。
 - 17 茶褐色 砂質ローム塊(径2cm)少。しまりやや弱。
 - 18 暗灰色 粘土塊(径1cm)・粒多。しまり弱。
 - 19 暗褐色 白色粒微量、ローム塊(径1mm)・粒と今市軽石粒極微量。しまり強。SK-220覆土。
 - II 暗灰色 ローム塊(径2mm~5cm)・粒と粘土塊(径2mm)・粒少。しまり強。SK-220覆土。
 - III 明黄褐色 ローム純層(掘りすぎ)。

- SG5区SK-196
- 1 茶褐色 ローム塊(径1mm)・粒少、白色粒微量。しまりやや弱。
 - 2 暗茶褐色 粘土塊(径1~2mm)・粒少、ローム塊(径1~2mm)・粒微量、白色粒極微量。しまりやや弱。
 - 3 暗褐色 粘土塊(径1~3mm)・粒少、ローム塊(径1mm)微量。しまりやや強。
 - 4 暗褐色 粘土塊(径1~5mm)・粒少、ローム塊(径5mm)微量。しまり強。
 - 5 暗灰色 粘土塊混成。ローム塊(径2mm)。白色軽石粒塊(径1mm)極微量。しまりやや弱。粘性有。
 - 6 灰色粘土 粘土塊と粒の混成。ローム塊(径1~5mm)少。しまり強。粘性やや有。
 - 7 明黄褐色 ローム塊混成(砂質ローム含む)。しまりやや強。
- SG5区SK-197
- 1 暗褐色 白色粒少、ローム粒・炭化物微量。しまり強。
- SG5区SK-198・199・200
- 1 黒褐色 ローム粒・白色粒微量。しまりやや強。
 - 2 暗褐色 ローム粒・白色軽石(径2mm)・今市軽石(径2mm)微量。しまり強。
 - 3 黒褐色 白色粒少、ローム粒微量。しまりやや強。
 - 4 暗茶褐色 記載なし。
 - 5 褐色 ローム粒少、ローム塊(径1~2mm)・白色粒・炭化物微量。しまり強。
 - 6 暗黄褐色 ローム塊(径2mm~2cm)・粒多、白色軽石粒塊。
 - 7 褐色 ローム塊(径1~2cm)・粒少と粘土塊(径1~3mm)・粒少。しまり
 - 8 黒褐色 粘土塊(径1~3mm)・粒少、ローム塊(径1~2mm)・粒微量。しまりやや弱。粘性有。
 - 9 黄褐色 ローム塊(粘質化)多、七本桜石(?)微量。しまりやや強。粘性有。
 - 10 褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と炭化物微量。しまりやや強。
 - 11 暗黄褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と粘土塊(1~2mm)・粒少。しまりやや強。
 - 12 暗黄褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と粘土塊(1~2mm)・粒少。しまりやや強。
 - 13 暗灰褐色 砂粒多、七本桜(?)・今市軽石少。しまりやや強。SK-200覆土。
 - 14 暗褐色 ローム粒・白色粒・炭化物微量。しまり弱。
 - 15 黒褐色 ローム粒微量、白色粒極微量。しまり弱。
 - 16 暗褐色 粘土塊(径1~3mm)・粒とローム粒・炭化物・砂粒少。ローム塊(径1~2mm)微量。しまりやや弱。崩落により下層は不明。SK-199覆土。
 - 17 黒褐色 白色粒少、炭土粒微量。しまりやや弱。
 - 18-19 土層の特徴不明。
- SG5区SK-202
- 1 茶褐色 白色軽石粒・炭化物微量。今市軽石細粒極微量。しまり強。
 - 2 黒褐色 白色軽石粒少、炭化物極微量。ローム粒・今市軽石粒極微量。
 - 3 明茶褐色 ローム粒・今市軽石粒極微量。
 - 4 明茶褐色 ローム粒極微量。
 - 5 暗褐色 炭化物極微量。
 - 6 暗茶褐色 ローム粒極微量。
 - 7 暗褐色 ローム粒微量、ローム小塊極微量。
 - 8 暗褐色 ローム粒微量、ローム大塊極微量。
 - 9 暗灰色 礫多。
 - 10 黒色 詳細不明。

第 348 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (3) 遺構



SG5区SK-203

- 1 暗茶褐色 白色軽石粒少、ローム小塊・今市軽石粒(小)微量、炭化物極微量。しまり強。
- 2 黒褐色 ローム小塊、白色軽石粒・今市軽石粒・炭化物微量。しまりやや強。
- 3 暗褐色 ローム粒極微量。しまりやや弱。
- 4 暗褐色 火山灰塊・粒極多、炭化物極微量。しまりやや弱。
- 5 黒色 炭化物極微量。しまりやや強。
- 6 暗褐色 白色軽石粒微量。しまり強。
- 7 暗褐色 火山灰塊少、白色軽石粒微量。しまりやや強。
- 8 暗褐色 白色軽石粒微量、今市軽石粒・炭化物極微量。しまりやや弱。
- 9 暗褐色 白色軽石粒微量・炭化物微量、今市軽石粒(小)極微量。しまりやや弱。
- 10 黒色 炭化物微量。しまりやや弱。
- 11 暗灰色 灰色粘土小塊・粒微量、白色粘土小塊、炭化物極微量。しまり弱。
- 12 灰色粘土 白色粘土粒多、白色粘土中・小塊微量。しまりやや弱。

SG5区SK-204

- 1 暗茶褐色 ローム塊(径1mm)・粒微量。しまり弱。
- 2 灰褐色 灰多、焼土粒・炭化物微量。しまり弱。
- 3 暗褐色 ローム塊(径2~5mm)・粒と炭化物少、焼土塊(径1~3mm)・粒微量。しまり弱。
- 4 暗茶褐色 粘土塊(1~2mm)・粒少、ローム塊(径1mm)・粒と白色粒・焼土粒・炭化物微量。しまり弱。
- 5 暗褐色 ローム塊(径3mm)・粒と粘土粒微量。しまり弱。
- 6 茶褐色 ローム塊(径1mm)・粒、粘土塊(径1mm)・粒と炭化物微量。しまり弱。
- 7 暗茶褐色 ローム塊(径1mm)・粒微量。しまりやや弱。
- 8 褐色 ローム塊(径1mm)・粒と粘土塊(径1~2mm)・粒少、砂粒微量。しまり弱。
- 9 暗褐色 粘土塊(径1~2mm)・粒少、粘土塊(径10mm)・砂粒微量。
- 10 黒褐色 粘土塊(径1~2mm)・粒少、粘土塊(径3cm)微量。しまりやや弱。

SG5区SK-205a-b

- A-A'・B-B'
- 1 黒褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒少、今市・白色軽石粒とFA塊微量。しまり弱。
 - 2 暗褐色 ローム塊(径1mm)・粒微量と今市・白色軽石粒微量。しまりやや強。
 - 3 褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒と砂粒(層状)少、今市・白色軽石粒微量。しまりやや弱。
 - 4 褐色 ローム塊(径1~2mm)・粒少、今市・白色軽石粒と砂粒微量。しまり弱。
 - 5 暗褐色 ローム粒少、ローム塊(径1~2mm)・白色軽石粒微量。しまり弱。
 - 6 黒褐色 ローム粒・白色粒微量。しまり弱。
 - 7 暗褐色 ローム塊(径2~3mm)・粒と粘土粒微量。しまり弱。
 - 8 黒褐色 ローム塊(径2mm)・粒と砂粒・炭化物微量。しまり弱。
 - 9 黒褐色 ローム塊(径3~5mm)・炭化物微量。しまり弱。
 - 10 褐色 ローム粒多、ローム塊(径1~2mm)少、今市・白色軽石粒微量。しまりやや強。
 - 11 黒褐色 ローム粒・白色粒微量。しまり弱。
 - 12 暗褐色 ローム粒・炭化物微量。しまり弱。

C-C'

- 1 暗褐色 ローム小塊・粒と白色粒少、炭化物微量。やや硬。しまり有。粘性有。
- 2 暗黄褐色 黄灰色土塊(FA?)多、白色粒(FA?)少、炭化物若干。やや硬。しまり有。粘性なし。
- 3 暗褐色 白色粒多、今市・七本桜軽石小塊少。硬。しまり強。粘性弱。
- 4 褐色 ローム粒多、今市・七本桜軽石小塊少、やや砂質。硬。しまり有。粘性弱。
- 5 黒色 白色粒多、ローム粒少。やや硬。しまり有。粘性有。
- 6 黄褐色 ローム小塊・粒と黄灰色砂質土塊・白色粒多。鉄分若干。硬。しまり強。粘性弱。
- 7 暗褐色 灰色粘土小塊と鉄分多。やや硬。しまり強。粘性強。
- 8 灰褐色 灰色粘土の大・中・小塊多。やや硬。しまり強。粘性強。

SG5区SK-206・207は土層の特徴不明

SG5区SK-208

- 1 明茶褐色 ローム塊(径1mm)・粒極微量。酸化鉄分含む。しまり強。低地内覆土。
- 2 黒褐色 白色粒少、ローム粒微量。しまりやや弱。
- 3 暗褐色 白色粒少、白色軽石粒塊(径1~2mm)・今市軽石粒微量。しまりやや強。
- 4 褐色 ローム塊(径1mm)・粒少、白色粒・白色軽石粒塊(径1~2mm)微量。しまりやや強。
- 5 暗褐色 ローム塊(径1mm)・粒とFA塊(径2mm)・粒微量。しまり弱。
- 6 黒褐色 白色粒・FA粒微量、ローム粒極微量。しまり弱。
- 7 褐色 FA塊(径2~3mm)多。しまりやや強。
- 8 暗褐色 粘土塊・粒多、ローム粒・FA塊(径2mm)微量。しまり弱。やや粘性有。
- 9 褐色 FA塊(径2~5mm)・粒多。しまりやや強。
- 10 黒褐色 白色粒・FA粒微量。しまり弱。
- 11 褐色 FA塊(径2~5mm)・粒多。しまりやや強。
- 12 暗褐色 粘土塊・粒多、ローム塊(径2mm)・砂粒微量。酸化鉄分含む。しまり弱。やや粘性有。
- 13 暗灰色 粘土塊・粒多、ローム塊(径2~3mm)・砂粒微量。しまり弱。粘性有。
- 14 黒褐色 粘土塊・粒少。酸化鉄分含む。しまり弱。やや粘性有。
- 15 暗褐色 粘土粒・白色粒微量。しまり弱。
- 16 灰色粘土 粘土塊・粒多、砂粒微量。しまりやや弱。粘性有。
- 17 黒褐色 粘土塊・粒少、砂・礫微量。しまりやや弱。

SG5区SK-210

- 1 褐色 白色粒多。やや硬。しまり有。
- 2 黄褐色 黄灰色(FAか)土と褐色土の混合層。白色粒多。やや硬。しまり有。
- 3 褐色 白色粒・黄灰色粒多(いずれもFAか)。やや軟。しまり有。
- 4 暗褐色 白色粒少。軟。しまり弱。
- 5 暗赤褐色 焼土と灰の混合層。軟。しまり弱。
- 6 黄褐色 黄灰色土(FAか)を層状又は小塊で多量。軟。しまり有。
- 7 黒褐色 白色粒少、ローム粒微。やや軟。しまり有。
- 8 暗褐色 混入物はほとんど見られない。軟。しまり弱。
- 9 褐色 灰白色粘土の大・中・小塊多。やや硬。しまり有。
- 10 褐色 鉄分多。やや硬。しまり有。

SG5区SK-211

- 1 黄褐色 ローム小塊・粒多と白色粒多。硬。しまり強。
- 2 黒褐色 淡い灰褐色の中・小塊(共にFAか)と白色粒多。やや硬。しまり有。
- 3 灰褐色 やや暗褐色の土混じりだがほぼ純層。やや硬。しまり有。FAか。
- 4 灰褐色 3層よりやや黄色味薄。暗褐色土少。やや硬。しまり強。粘土質。
- 5 褐色 ローム塊・小塊少(水をうけた様相)。白色粒微量。やや軟。しまり有。
- 6 暗褐色 ローム小塊・粒多、ローム塊少。やや硬。しまり強。ロームはいずれも水をうけた様相。今市・七本桜軽石粒微量。しまり有。やや軟。
- 7 褐色

SG5区SK-212

- 1 暗褐色 白色粒多、今市・七本桜軽石小塊微量。しまり強。硬。
- 2 黄褐色 ローム小塊・粒多。硬。しまり強。
- 3 暗黄褐色 ローム小塊・粒多。やや硬。しまり有。

SG5区SK-213北

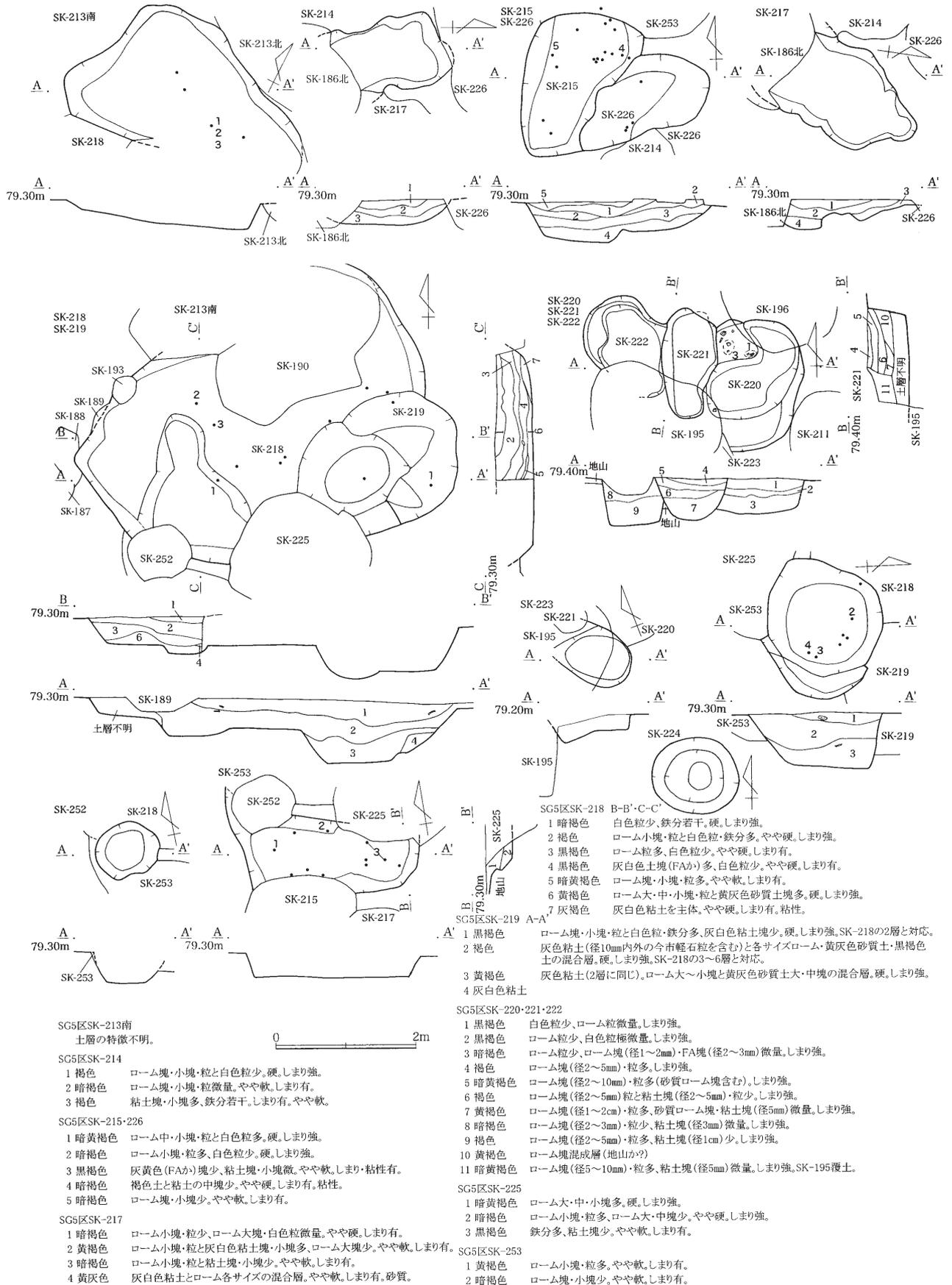
- 1 褐色 ローム小塊・粒と鉄分少。硬。しまり強。
- 2 暗褐色 ローム大・中・小塊・粒少と灰白色土(FAか)小塊少。やや硬。しまり有。
- 3 灰色粘土 灰色粘土主体。所々赤変する。やや軟。しまり有。
- 4 暗黄褐色 ローム大・中・小塊・粒多と青灰色砂質土塊多。やや硬。しまり有。

第 349 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (4) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区

SK-200	13.0-18.0	円形	SK-198 と同時期	0.78	0.73	1.74		自然埋没状 白色軽石塊・炭有
<p>低地の井戸状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて礫層中に底面がある。古墳中期のSK-198と重複し、上部はほぼ同時期に埋没する。図示した木片1点以外は土師器4片(杯底部・壺甕類・高杯)で、古墳後期のものは含まない。</p>								
SK-202	11.0-17.0	円形か	重複なし	1.20	—	1.90		自然埋没状 白色軽石粒有
<p>低地の井戸状土坑で、底部は黄色土層中にある。南半部はベルトを除去できなかったため、調査していない。遺物は少なく、大～中形壺と甕の破片があり、古墳中期中～後葉。</p>								
SK-203	12.0-18.0	円形	重複なし	2.05	1.74	1.14		自然埋没状 Hr-FA 堆積層有
<p>低地の土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて礫層中に底面がある。遺物は底付近に多く、完形に近い個体が多い。土師器壺甕類を主体として、小形壺・杯も含む。古墳中期後葉。FA テフラ(4・7層)より上層に第354図14の小形土器や古墳後期～終末期の土師器がある。</p>								
SK-204	13.0-18.0	楕円形	SK-198・205bより古	2.00	1.55	0.60	N-62°-E	自然埋没状 白色粒有
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-198および205bとの重複状況は、各土坑の断面図を参照。遺物は多いが覆土層に流入してきたものばかりで、古墳中期中～後葉の壺甕が多く、杯・高杯・鉢も含む。外面に線刻のある杯破片あり。古墳終末期後半の漆仕上げ半球形杯も1片ある(第354図12)。SK-198より古いことから見て、古墳中期中～後葉。</p>								
SK-205a	13.0-18.0	楕円形	SK-205bより新	1.19	0.84	1.06	N-90°-W	自然埋没状 Hr-FA 塊・炭有
<p>低地の井戸状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて礫層中に底面がある。古墳中期のSK-205bを切る。土師器は壺甕類が主体で小形壺・鉢・甕も少量あり、模倣杯は見られない。最上層に古墳終末期の杯も1点ある(第354図3)。古墳中期後葉。</p>								
SK-205b	13.0-18.0	不整楕円形	SK-204→205b→205a	2.40	2.40	0.48		自然埋没状 Hr-FA 塊有
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-204を切り、古墳中期のSK-205aに切られる。古墳時代のSK-206と重複するが新旧不明。SK-205aより古いので、古墳中期中～後葉と考えられる。</p>								
SK-206	13.0-18.0	不整形か	SK-205bと重複	1.26	—	0.30		
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-205bと重複するが新旧不明。図示した高杯の他に、内面を粗く磨く内斜口縁碗形杯が1片ある。中期後葉の可能性もある。</p>								
SK-207	13.0-18.0	楕円形	SK-198より新	1.26	0.95	—	N-3°-W	
<p>低地の土坑。遺物の状況から見ると、古墳中期のSK-198の北東部を切ると思われる。遺物出土状況平面図以外の詳細図はなく、写真もない。図示した土師器甕と同様の胴部片が多く、杯・鉢・小形壺・高杯も少量ある。古墳中期後葉。</p>								
SK-208	12.5-18.0・13.0-18.0	楕円形	重複なし	2.08	1.88	1.50	N-15°-W	自然埋没状 Hr-FA 堆積層有
<p>低地の井戸状土坑で、灰白色粘土層を掘り抜いて礫層中に底面がある。7・9・11層にHr-FA テフラ層が入り、それより上層で出土した第355図1の杯は古墳後期の流入品。その他の土師器は杯・高杯・小形壺・壺甕類があり、古墳中期中葉頃。</p>								
SK-210	12.5-18.0	円形	重複なし	1.09	0.99	0.66		自然埋没状 Hr-FA 堆積層有
<p>低地の井戸状土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。遺物は図示した他に土師器壺甕類の破片がある。古墳中期中～後葉頃。</p>								
SK-211	12.5-18.0	楕円形	重複なし	1.37	1.05	0.51	N-25°-E	自然埋没状 Hr-FA 堆積層有
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。遺物は底面からかなり浮いて出土した土師器壺甕類主体で高杯と内斜口縁碗形杯があり、模倣杯はない。古墳中期中～後葉か?</p>								
SK-212	12.5-18.0	楕円形	重複なし	0.54	0.40	0.34		自然埋没状 白色粒有
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。遺物は出土しなかったが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので古墳時代の遺構と考えられる。</p>								
SK-213 北	12.5-17.5・18.0	楕円形	SK-194・195より古	2.70	1.28	0.45	N-64°-W	自然埋没状 Hr-FA 小塊有
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-194と古墳中期のSK-195に切られる。遺物は壺甕類が主体で半球状杯と高杯が少量混じり、模倣杯や長胴甕はない。古墳中期の可能性もある。</p>								
SK-213 南	12.5-17.5・18.0	不整楕円形か	SK-218→SK-213南→SK-190?	3.60	1.99	0.36	N-90°-E	土層の特徴は不明
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-218を切る。古墳後期のSK-190と重複し新旧不明だが、調査時に「SK-190の下のSK」と呼称しているため、SK-190に切られる可能性が高い。南半は浅く攪乱される。図示した土師器3点はSK-190の遺物の可能性もある。土師器壺甕類が主体で高杯や杯もあり、古墳中期と考えられる。</p>								
SK-214	12.0-17.5	不整長方形	SK-186北より古、SK-217・226と重複	1.41～	0.85	0.37	N-22°-W	自然埋没状 白色粒有
<p>低地の土坑。古墳時代のSK-186北に切られる。古墳中期のSK-217・226と重複するが新旧不明。土師器は球胴壺甕類が主体で、高杯・長胴甕片もあり、中期後葉の可能性もある。</p>								
SK-215	12.0-17.5、12.5-17.5	不整楕円形	SK-226・253と重複	2.30	1.50	0.57	N-21°-E	自然埋没状 Hr-FA 塊有
<p>低地の土坑。東側にある古墳中期のSK-226と同時に埋没。古墳後期のSK-190と重複し新旧不明だが、調査時に「SK-190の下のSK」と呼称しているため、SK-190に切られる可能性が高い。南半は浅く攪乱される。図示した土師器片が多く、図示した以外に大形の壺甕類が口縁部破片で見て4個体ほどある。第355図3は中期末で、それ以外は中期後葉頃。</p>								
SK-217	12.0-17.5・18.0、12.5-18.0	不整長方形	SK-186北より古?、SK-214と重複	1.91	1.10	0.45	N-27°-E	自然埋没状
<p>低地の土坑。古墳時代のSK-186北と重複し新旧不明だが、SK-186北に切られる可能性が高い。古墳中期のSK-214と重複し新旧不明。遺物は自然礫破片と土師器壺甕類胴部が各1点ある。低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので、古墳時代と考えられる。</p>								
SK-218	12.5-17.5・18.0	不整楕円形か	SK-188・189・190・213より古、SK-219と同時、SK-225・252・253と重複	5.09	3.80	0.54	N-65°-E	人為埋戻 Hr-FA 塊有?
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳時代のSK-188と古墳中期のSK-213南に切られる。古墳中期のSK-219と連続する土層で同時に埋没。古墳中期のSK-189と後期のSK-190を先に調査しているため、SK-189・190に切られると考えられる。古墳時代のSK-225・252・253と重複するが新旧不明。覆土には古墳後期の漆仕上げ外傾口縁杯も少量あるが、図示した杯から古墳中期末と考えられる。</p>								
SK-219	12.5-17.5・18.0	楕円形	SK-225より古、SK-218と同時	2.45～	1.83	0.78	N-60°-E	人為埋戻
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-225に切られる。古墳時代のSK-218と連続する土層で同時に埋没。土師器は壺甕類が主体で高杯・小形壺も少量あり、古墳中期(後葉?)の可能性もある。</p>								
SK-220	12.5-18.0、13.0-18.0	長方形	SK-221より古、SK-196より古?、SK-223と重複	1.92	1.21	0.48		自然埋没状 Hr-FA 塊有
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳時代のSK-221に切られる。古墳時代のSK-196を先に調査しているため、SK-196に切られる可能性が高い。古墳時代のSK-223と重複し新旧不明。土師器は壺甕類が主体で杯・高杯・鉢も少量あり、図示した杯から古墳中期後葉。</p>								
SK-221	12.5-17.5・18.0、13.0-17.5・18.0	不整長方形	SK-220・222→SK-221→SK-195(?) SK-223と重複	1.58	0.80	0.60		自然埋没状
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-220・222を切る。古墳中期のSK-195を先に調査しているため、SK-195に切られる可能性が高い。古墳時代のSK-223と重複し新旧不明。遺物は出土しなかったが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので古墳時代の遺構と考えられ、SK-195より古ければ中期の遺構ということになる。</p>								
SK-222	12.5-17.5、13.0-17.5	長方形か	SK-195・221より古	1.41～	0.92	0.67		自然埋没状
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。古墳中期のSK-195・221に切られる。断面図作成時に最下部が掘り足らなかった部分の土層の特徴が不明。土師器壺甕類が主体で杯・高杯が少量あり、模倣杯・長胴甕は含まない。SK-220の第355図1と接合する杯破片出土。古墳中期と考えられる。</p>								
SK-223	12.5-17.5・18.0	楕円形	SK-195より古、SK-220・221と重複	1.13	0.85	0.40	N-32°-W	土層の特徴は不明
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-195に切られる。古墳中期のSK-220・221と重複するが新旧不明。遺物はないが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので古墳時代と考えられる。</p>								
SK-224	12.5-17.5	楕円形	重複なし	1.24	1.10	不明	N-90°-E	土層の特徴は不明
<p>低地の土坑。断面図の記録が所在不明。遺物は少なく、土師器大形壺破片が目立ち、杯・鉢・甕・大形甕が少量ある。古墳中期後～末葉の可能性あり。</p>								
SK-225	12.5-17.5・18.0	楕円形	SK-219・253より新、SK-218と重複	2.12	1.65	0.81	N-78°	自然埋戻
<p>低地の土坑。古墳中期のSK-219・253を切る。古墳中期のSK-218と重複するが新旧不明。遺物は少なく土師器壺甕類が主で、大形壺・高杯・内斜口縁杯も含む。古墳中期後～末葉。</p>								
SK-226	12.0-17.5、12.5-17.5・18.0	不整楕円形	SK-214と重複、SK-215と同時	2.08	1.08	0.38	N-60°-E	自然埋没状
<p>低地の土坑。西側にある古墳中期のSK-215と同時に埋没。遺物の図はSK-215と一緒に掲載。古墳中期のSK-214と重複するが新旧不明。土師器壺甕片がほとんどで、周辺の土坑と同一個体と思われる破片が多い。杯・高杯が極少量混じる。古墳中期中～後葉の可能性あり。</p>								

第7節 古墳時代の土坑



第350図 権現山遺跡 SG5区 古墳時代の土坑(5) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区

SK-247	隅丸長方形	SK-249と重複	約2.50	約1.50	約0.30	N-31°-W	
<p>低地の土坑で、底面は黄色土層中にある。東西に長い長方形ないし楕円形で、東半より西半が深くなる。図面が所在不明。古墳中期のSK-249と重複し新旧不明。土師器は壺甕類が主体で、杯・鉢・高杯が少量ある。長胴甕の破片があり、SK-249と接合した。模倣杯は含まない。古墳中期後葉の可能性あり。</p>							
SK-248	円形	SK-250より古	約1.00	—	約0.30		
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-250に切られる。図面が所在不明。土師器壺甕類が多く、内斜口縁杯・高杯を含み中期中～後葉の可能性あり。</p>							
SK-249	不整形円形	SK-186北・247と重複	約1.50	約1.00	約0.30		
<p>低地の土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。底面中央がやや凹む。古墳時代のSK-186北・247と重複し新旧不明。図面が所在不明。土師器片が少量あり、壺甕片が主体で高杯片も少量含む。SK-247の項で述べた接合関係から見て、古墳中期後葉の可能性もある。</p>							
SK-250	円形	SK-248より新	約0.50	—	約0.50		
<p>低地のピット状土坑で、底面は灰白色粘土層中にある。古墳中期のSK-248を切る。図面が所在不明。土師器壺甕片と有段状らしい高杯脚があり、古墳中期と考えられる。</p>							
SK-251	円形か	SK-186南より古	約0.50	—	約0.30		
<p>低地の土坑。古墳時代のSK-186南に切られる。図面が所在不明。土師器壺甕類が少量と小形壺がわずかにあり、古墳中期（後葉？）の可能性もある。</p>							
SK-252	12.5-17.5	楕円形	SK-218・253と重複	0.92	0.80	0.45	N-90°-E
<p>低地に所在。整理作業時に番号を付けた土坑。古墳中期のSK-218・253と重複するが新旧不明。遺物はないが、低地の古墳時代土坑群と一緒にあるので、古墳時代と考えられる。</p>							
SK-253	12.5-17.5・18.0	楕円形	SK-225より古、SK-215・218・252と重複	2.47	1.45	0.35	N-75°-W 自然埋没状
<p>低地に所在。整理作業時に番号を付けた土坑。古墳中期のSK-225に切られる。古墳時代のSK-215・218・252と重複するが新旧不明。図示した高杯や杯から古墳中期後葉。</p>							

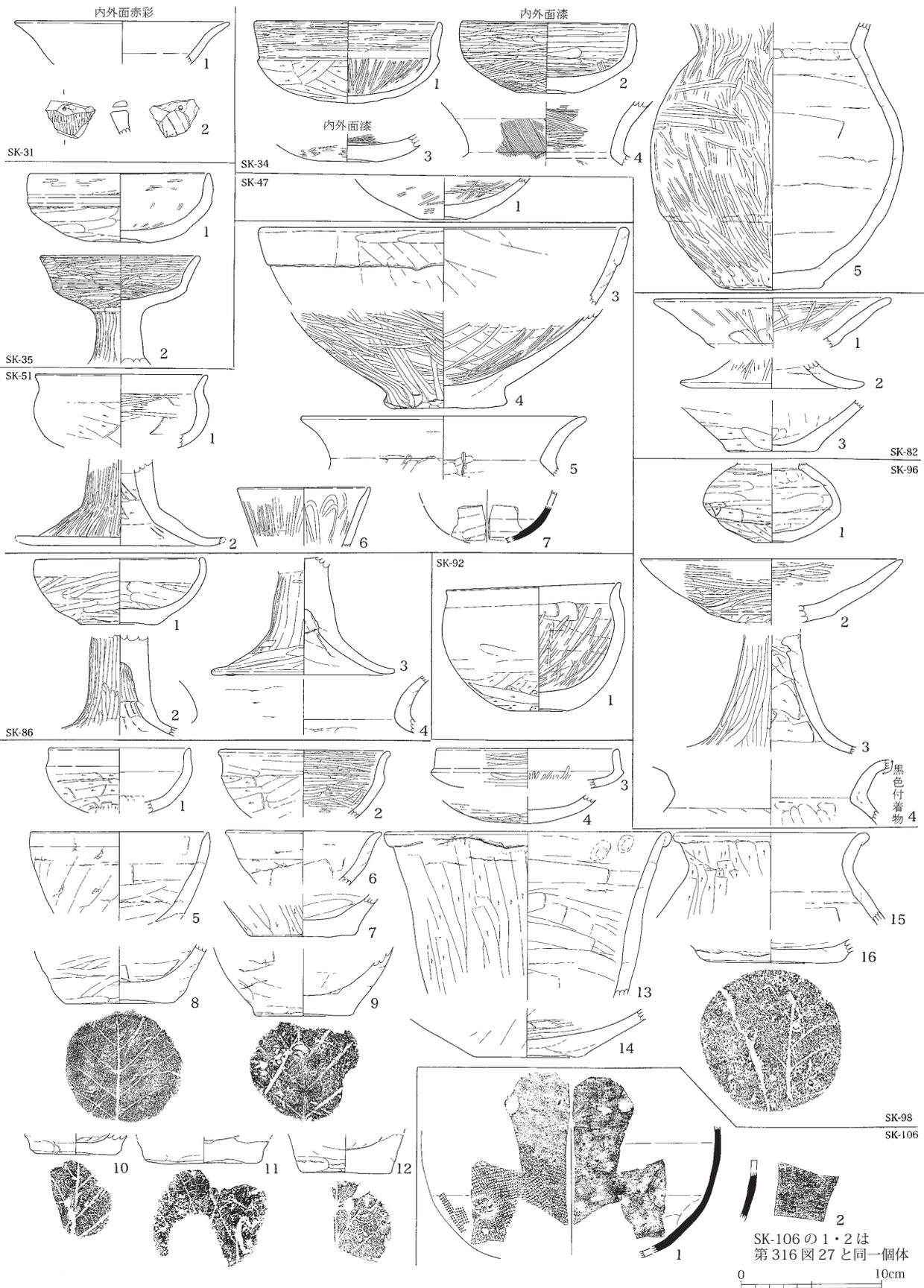
第200表 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG5 区 SK-31				
1 土師器 杯	口 復 15.2 高 残 3.1	内外面とも口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内外面口縁～体部赤彩。	5YR6/6 橙 緻密 白・赤・砂微粒少 やや硬質	底上 4cm 口～体一部 1
2 土師器 高杯	高 残 2.7	高杯脚部上端の破片。内外面を貫く孔が穿たれており、孔径は外面側 0.27mm、内面側 0.31mm。外面側は孔の周囲が同心円状に剥落しており、焼成後に内面側から穿孔されたものと見られる。脚部上端の調整は、外面ミガキ、内面ナデ。	7.5YR4/6 褐 やや緻密 赤粗～細粒と白細～ 微粒微量 硬質	底上 4cm 脚上端一部 3
SG5 区 SK-34				
1 土師器 杯	口 復 13.2 高 5.8	薄手で精緻な作り。外面体～底部丁寧なケズリ。底部丸底。内外面口縁部ヨコナデのちミガキ。外面口縁部下端稜あり。口縁部上端は内彎する。内面体部ヨコナデ、底部ナデのち体～底部放射状のやや疎らなミガキ。	2.5YR6/8 橙 緻密 白・赤細粒微量 やや硬質	底上 6～22cm 口～底 1/3 周 14、32、36
2 土師器 杯	口 復 12.4 高 5.0 底 4.0	内外面ともほぼ全体が丁寧なミガキ。横方向（円周方向）を基本として施される。底部外面のみは一方方向で、浅くくぼむ。外面口縁部下端はわずかな稜となる。内外面全体漆仕上げ。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・透明細粒微量 やや硬質	底上 2～20cm 口～底 1/2 周 1、24
3 土師器 杯	高 残 2.0 底 復 4.2	内外面とも表面の剥落が著しい。内外面とも体～底部全体が密なミガキと見られる。体部は内外面横方向、内面は一方方向のミガキ。外面底部も一方方向か見られ、浅くくぼむ。残存する体～底部内外面全体漆仕上げ。2に類似するものだろう。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白細～微粒微量 やや硬質	底上 18cm 体～底 1/2 周 3
4 土師器 甕	高 残 4.7	外面口縁部 10 本 /1cm のハケのち口縁部上半ヨコナデ、内面口縁部 10 本 /1cm のハケのち口縁部上半ヨコナデ。胴部上端ナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 少、白礫微量 硬質	底上 27cm 口下半一部 37
5 土師器 甕	高 残 19.0 底 7.1 胴 17.8	中形。成形が甘く、胴部内外面に紐積の凹凸が表れている。外面口縁部ヨコナデ・胴部上半ナデ・胴部中位～底部ケズリのち口縁～胴部ミガキ。底部突出する平底で、やや丸味を持つ。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデで、紐積痕が胴部上半に残る。底部上 5cm 付近に積み上げ休止による接合面があり、内外面に器厚の変化として表れる。	5YR7/8 橙 やや粗い 白礫～細粒と砂細粒 少、砂礫と赤粗～細粒微量 硬質	底上 12cm 口下半～底ほぼ完存 40
SG5 区 SK-35				
1 土師器 杯	口 13.2 高 4.9 底 4.2	特に内面表面の細かな剥落が著しく、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。口縁部下端は丸味を持つわずかな稜となる。体～底部ナデで、体部上端に沈線状のくぼみあり。底部は全体がくぼむ。内面口縁部横方向、体～底部放射状のミガキと見られる。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 白・赤細粒と砂微粒少、 白礫微量 やや硬質	底上 7cm ほぼ完形 1
2 土師器 高杯	口 11.4 高 残 7.7	外面杯部体部～脚部上半密なミガキ、内外面口縁部ヨコナデのち密なミガキ、内面体部横方向、底部一方方向の密なミガキ。内面脚部上端ナデ。杯部口縁部はわずかに外反し、内面底部は径 5.4cm の部分が丸くくぼむ。内外面とも表面の一部に黒色物質付着。	10YR7/6 明黄褐 緻密 赤粗粒少、白・砂微粒微 量 やや硬質	底上 16cm 杯・脚上半完存 2
SG5 区 SK-47				
1 土師器 杯か鉢	高 残 3.0 底 3.2	内・外面とも表面が細かく剥落しており、特に外面が著しい。外面体部ミガキ、底部ナデで、全体がくぼむ。内面体～底部ミガキで、体部は横方向、底部付近は放射状と見られる。	5YR6/8 橙 緻密 白・砂細～微粒少、赤細 粒微量 硬質	底上 6cm 体～底完存 1
SG5 区 SK-51				
1 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 5.2 最大 復 12.3	内斜口縁。外面体部ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、内面体部ヘラナデのちわずかに横方向のミガキ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤粗～細粒少 やや硬質	底上 10cm 口～体 1/6 周 56
2 土師器 高杯	高 残 6.1	柱状脚。外面脚部上半ヘラナデ・下半ヨコナデのち脚部縦方向のミガキ。内面脚部上半横方向の丁寧なケズリ、下半ヘラナデのちヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・砂粗～細粒少 やや軟質	底上 28cm 脚 1/3 周 65
3 土師器 甕	口 復 26.0 高 残 5.5	口縁部粘土貼付により複合口縁状であり、口縁部上端は平坦。外面口縁～胴部ナデで、細かな粘土の皺が残る。内面口縁～胴部上半ヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白微粒少、赤粗～細粒微 量 硬質	底上 7cm 口～胴上半 1/5 周 44

第7節 古墳時代の土坑

4 土師器 甕	高底 残 6.9 8.6	外面胴部下半縦方向のケズリのちやや疎らなミガキ、底部ナデのちミガキ。底部は突出する平底で、外縁がやや浮く。内面胴部下半～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。内面胴部下半一部コゲ付着。外面胴部下半一部煤付着。外面底部のみ、被熱のためか明褐色となっている。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂粗～細粒少、白・赤粗～細粒微量 硬質	底上 8～37cmが接合 胴下半～底完存 1、4、7、8、41
5 土師器 甕	口復 20.0 高残 4.3	外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ナデで、ヘラ状工具によると見られる深い条線あり。残存長 1.9cm、深さ 0.1～0.3cm、断面形は先端の丸いV字形で、上半と下半の計2回工具が押し当てられる。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤・砂細粒少、白 礫～粗粒と砂粗粒微量 硬質	底上 14cm 口一部 22
6 土師器 小形壺	口復 9.4 高残 4.2	直線的に開き、口縁部上半内面が浅くくぼむ。内外面とも口縁部ヨコナデのちやや疎らなミガキ。ミガキは外面が直線的、内面はループ状になる。	5YR5/6 明赤褐 緻密 白・赤・砂細粒少 やや硬質	底上 3～17cm 口1/2周 34、39、42
7 須恵器 壺	高残 2.5	外面胴部下半はナメナデ、内面は強い回転ヨコナデによりロクロ目が明瞭に残る。踵の可能性もある。破面は暗赤色(10R5/2)。SI-116出土破片と同一個体。	5Y5/1 灰 緻密 白細粒微量 硬質	小破片1点
SG5区 SK-82				
1 土師器 高杯	口復 16.7 高残 3.5	浅い杯部。外面杯部口縁～体部ヨコナデのち体部ヘラナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面口縁～体部ヨコナデのち疎らなミガキ。口縁部は上端でわずかに外反する。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・砂細～微粒少、赤粗～微粒微量 やや硬質	底上 11cm 杯口一部 6
2 土師器 高杯	高脚 復 13.0 残 2.0	外面脚部下半ヨコナデのち縦方向の丁寧なケズリのち疎らなミガキ。内面脚部下半ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 黒細～微粒と赤細粒と白・透明微粒微量 やや硬質	底上 15cm 脚下半一部 9
3 土師器 甕	高底 復 6.2 残 3.7	外面胴部下半～底部ケズリ。底部平底。内面胴部下半～底部ナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 黒・透明・砂細～微粒少、白・赤粗～細粒と砂粗粒微量 硬質	底上 3cm 胴下半～底 1/3周 17
SG5区 SK-86				
1 土師器 杯	口復 11.8 高底 4.7 5.4 最大 復 12.2	成形が甘く、歪みあり。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち下端一部ケズリのち体部疎らなミガキ。底部ナデでわずかにくぼむ平底。内面口縁部ヨコナデのち体～底部ケズリのち体～底部一部ナデ。口縁部上端はわずかに平坦面となる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 砂粗～細粒少、白礫～細粒と赤粗～細粒微量 硬質	底上 15～26cm 口～体 1/4周、底 2/3周 21、22
2 土師器 高杯	高残 7.0	柱状脚。外面脚部縦方向の密なミガキ。内面脚部上半密な縦方向のナデで、下半部の接合痕が明瞭に残る。脚部下半ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR8/6 浅黄橙 緻密 白・赤粗～細粒少 やや軟質	底上 18cm 脚上半完存 17
3 土師器 高杯	高脚 復 13.0 残 8.4	柱状脚。外面脚部下半ヨコナデのち脚部上半～中位縦方向のヘラナデのち脚部下半横方向のヘラナデ。内面杯部底部ヘラナデ、脚部上端ナデで、脚部下半の接合痕が明瞭に残る。脚部下半ヘラナデのちヨコナデ。脚部下端はやや波打っており、安定させるために小粘土塊が1箇所に貼り付けられる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・黒・砂粗～細粒微量 硬質	底上 32cm 脚完存 1
4 土師器 甕	高頸 復 15.0 残 4.1	内外面とも口縁部ヨコナデ、内面体部ナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 黒・透明・砂細～微粒少、白粗～細粒微量 硬質	底上 28cm 口1/6周 24
SG5区 SK-92				
1 土師器 鉢	口復 12.2 高底 9.1 4.0 最大 復 12.8	外面体部下半～底部ケズリのち体部中位わずかにナデ。体部上半は成形時のナデのみ。底部ケズリは円周方向。口縁部内外面ヨコナデ。体～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。外面口縁～体部 1/3程に縦方向の細い擦痕があるが、当時のものかどうか確定できず。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白粗粒と赤粗～細粒多、黒・砂粗～細粒少 やや硬質	口～体 3/4周、底完存 西側壁際
SG5区 SK-96				
1 土師器 小形壺	高底 復 5.6 2.6 9.6	そろばん玉状の胴部。外面胴部上半横方向のナデ。一部ヘラ状工具の当たりによると見られるミガキ状の調整あり。胴部下半～底部ケズリで、胴部下半に接合痕が明瞭に残る。底部は浅くくぼむ。内面胴～底部ナデで、胴部上半に粗積痕、胴部上端と中位に接合痕が明瞭に残る。頸部外径 4.8cm。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白細～微粒少、透明微粒微量 硬質	底部を上に向け逆位、確認面ですすでに露出 胴～底完存 10
2 土師器 高杯	口復 18.5 高残 4.6	外面杯部口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部横方向のミガキ。底部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向のミガキ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。被熱のためか。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒少 やや軟質	底上 4cm 杯口一部、体～底 1/3周 3
3 土師器 高杯	高残 8.5	外面脚部縦方向のミガキ。ミガキは幅広で光沢はあまりない。内面脚部上半丁寧なケズリで、上端は螺旋状の粗積痕が明瞭に残る。脚部下半ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 砂粗～細粒と白細粒少 硬質	底上 2～3cm、高杯の脚部の上位、リング状で残存 脚上半完存、脚中位 1/4周 6、7
4 土師器 甕	高残 4.6	外面胴部上端ナデ、内外面頸部ヨコナデ、内面胴部上端ナデ。上端欠損面および周辺には黒色物質が付着する。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・砂細粒少、白・砂粗粒微量 硬質	底上 5cm 頸 1/4周 9
SG5区 SK-98				
1 土師器 杯	口復 10.0 高残 4.6 最大 復 10.4	外面口縁部ヨコナデ、体部丁寧なケズリで、上端は無調整部分あり。上半に粗積痕残る。内面体部ヘラナデのち口縁～体部ヨコナデ。内面黒褐色。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白・赤・砂粗～細粒微量 硬質	口～体 1/6周 SK-86
2 土師器 杯	口復 12.0 高残 4.8	成形、調整とも比較的丁寧。外面口縁部ヨコナデのち一部ナデ。体部丁寧なケズリのち一部ナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち密なミガキ。	5YR6/8 橙 緻密 赤粗粒と砂粗～細粒と白細～微粒微量 硬質	底上 22cm 口～体 1/3周 8
3 土師器 杯	口復 12.8 高残 2.8 最大 復 13.5	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ、体部ケズリのちナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部放射状のミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白・赤・砂細～微粒少、黒粗粒微量 硬質	底上 23cm 口～体 1/6周 10
4 土師器 杯	高残 2.0	丸底。外面体部下半～底部丁寧なケズリ、内面体部下半～底部ヨコナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤・透明微粒少、褐色礫微量 やや硬質	底上 3cm 体下半～底完存 1

第8章 権現山遺跡 SG5 区

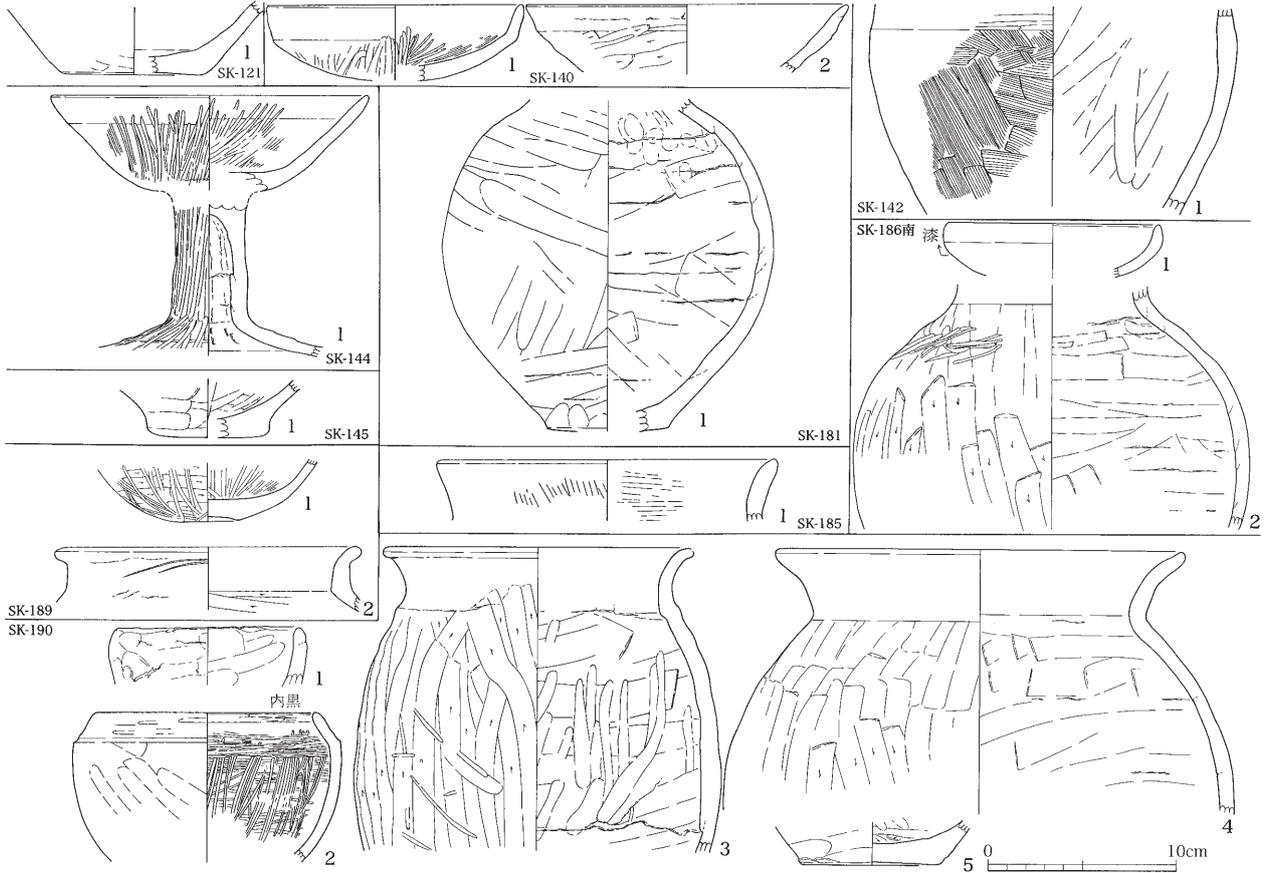


第351図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑(6) 遺物

第7節 古墳時代の土坑

5 土師器 小形土器	口復 12.6 高 残 6.4 最大 復 12.8	内外面とも調整はやや甘く、組積痕や粘土の皸が表面に残る。外面口縁部軽いヨコナデのち体部斜位のナデ。内面口縁～体部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 砂微粒少 やや硬質	底上 22cm 口～体 1/3 周 9、SD-42 15.5-17.5
6 土師器 小形土器	口復 11.0 高 残 3.8	外面口縁部ヨコナデ、体部軽いナデ。外面の調整は甘く、組積痕が明瞭に残る。内面体部ヘラナデのち口縁～体部強いヨコナデ。内面黒褐色。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや緻密 白細～微粒少、白粗 粒と赤細粒微量 やや硬質	底上 22cm 口～体 1/6 周 9
7 土師器 小形土器	高 残 3.0 底 7.4	外面体～底部ケズリのち体部一部ミガキ。底部平底。内面体～底部やや荒いヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細～微粒少、白・ 砂粗粒と赤粗～細粒微量 やや 硬質	底上 14cm 体～底 1/2 周 2
8 土師器 小形土器	高 残 4.1 底 7.6	外面体部荒いナデで、組積痕残る。底部木葉痕で、平底。内面体～底部ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白礫と赤・砂粗～細 粒微量、白粗～細粒少 やや硬質	底上 15～22cm 体下半～底ほぼ完存 4、8
9 土師器 小形土器	高 残 4.8 底 7.0	外面体部軽いナデで、組積痕残る。底部木葉痕で平底。内面体部ヘラナデ。内面は表面の剥落が著しく、調整不明な部分が多い。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 白細～微粒少、白・ 赤・砂粗粒微量 やや硬質	底上 22cm 体一部、底 3/4 周 9
10 土師器 小形土器	高 残 1.5 底 復 5.6	外面体部下端ナデ、底部木葉痕で、平底。内面底部ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 緻密 赤細粒微量 やや軟質	底上 22cm 底 1/2 周 9
11 土師器 小形土器	高 残 1.8 底 8.2	外面体部ナデ、底部木葉痕で平底。内面底部ヘラナデで、黒褐色。	2.5Y5/3 黄褐 やや粗い 白・赤礫～細粒微量 やや硬質	底上 21cm 底 1/2 周 8、SD-42
12 土師器 小形土器	高 残 2.7 底 復 6.4	外面体部荒いナデ、底部木葉痕で、平底。内面底部強いナデ。	2.5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒微量 やや軟質	底上 15cm 底 1/3 周 8
13 土師器 鉢	口復 20.2 高 残 11.8	口縁部は外方に張り出しており、粘土を貼り付けて複合口縁状になるところもある。成形は甘く、壺みあり。外面口縁部軽いヨコナデのち口縁～胴部やや光沢のある丁寧なケズリ。内面胴部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面は部分的に組積痕残る。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤・砂粗～細粒少、 白礫～細粒微量 硬質	底上 21～23cm 口～胴 1/6 周 10
14 土師器 甕	高 残 3.5 底 7.0	外面胴部下半～底部丁寧なナデ。ミガキの可能性はあるが、表面剥落のため不明。底部は平底で、外周のみ環状に高くなっており、中央は平坦にくぼんでいる。内面胴部下半～底部ヘラナデ。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 白・黒・透明・砂微 粒多、砂礫微量 硬質	胴下半 1/5 周、底 1/3 周
15 土師器 甕	口復 13.8 高 残 6.6	外面口縁部ヨコナデのち口縁～胴部上半ケズリ。口縁部は厚く、外反する。内面口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	5YR5/6 明赤褐 粗い 白・砂粗～細粒と黒細粒 少、赤粗粒と透明細粒微量 硬質	底上 21cm 口～胴上半 1/6 周 9
16 土師器 甕	高 残 1.7 底 9.4	外面底部ナデのち木葉痕で、平底。内面底部ナデ。水中にあったためか、表面に鉄分が錆着している。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い 砂粗～細粒多、白粗～細 粒少、白礫微量 やや硬質	底上 14～22cm 底完存 7、9
SG5 区 SK-106				
1 陶質土器 壺	高 残 9.1	外面胴部に斜位の細かい格子タタキ。内面胴部上半ロクロナデで下半は無文当具痕の凸凹面。内面一部に自然袖付着。外面右半の中央部が SK-106 出土で、他の破片は SI-20 と 22 で出土。2 と同一個体。	7.5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒微量 硬質	SK-106 の 1 片、SI-20 の 1 片、SI-22 の 2 片が 接合 胴部破片
2 陶質土器 壺		外面胴部ロクロナデのちナデ、内面胴部ロクロナデ。外面上端にわずかに自然袖付着。内外面とも表面のみ青灰色で、破面は赤灰色。1 や SI-19・20・22・24 などの壺と同一個体。	7.5Y5/1 灰 緻密 白粗～細粒微量 硬質	胴部破片
SG5 区 SK-121				
1 土製品 小形土器	高 残 3.9 底 復 7.4	外面体～底部ナデ。体部には粘土の皸が残る。底部平底。内面体～底部ナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白細粒少、白礫～粗粒と 赤細粒微量 やや硬質	体 1/6 周、底 1/4 周
SG5 区 SK-140				
1 土師器 杯	口復 13.6 高 残 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのち光沢のあるナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち体部放射状のミガキ。内面ミガキはやや疎らだが、強く施される。丸底だろう。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 白微粒少、白・赤細粒微 量 やや硬質	口 1/4 周、体 2/3 周
2 土師器 高杯	口復 17.0 高 残 3.6	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリ。内面口縁～体部ヨコナデ。内面は表面の剥落著しい。漆仕上げの可能性あり。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・赤・透明粗～細 粒少 やや硬質	口～体 1/6 周
SG5 区 SK-142				
1 土師器 甕	高 残 11.1 胴 復 19.4	外面口縁部下半ヨコナデのち横方向のミガキ、胴部 8 本/1cm のハケ。内面口縁部下半～胴部光沢のあるナデ。内面はミガキの可能性もあるが、不詳。甕ではなく皸の可能性があろうか。外面残存部全体煤付着。	10YR5/2 灰黄褐 やや粗い 白・透明粗～細粒少 硬質	口下半～胴 1/4 周
SG5 区 SK-144				
1 土師器 高杯	口復 16.8 高 残 13.1	柱状脚。杯部口縁部ヨコナデのち口縁～底部ミガキ。脚部上半光沢のないミガキ、下端のみヨコナデのち脚部下半疎らな光沢のないミガキ。ヨコナデを施す部分の上端はわずかに段差となる。内面杯部口縁部ヨコナデのち口縁～底部やや斜位のミガキ。脚部上半ナデで、中に接合痕を明瞭に残す。下半ヘラナデのち下端のみヨコナデ。外面杯部体～底部・内面杯部体部被熱のためか表面が細かく剥落する。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 砂粗～細粒微量 硬質	杯口～底 1/3 周、脚上 半完存、脚下半 1/4 周
SG5 区 SK-145				
1 土師器 壺か甕	高 残 3.1 底 復 6.4	外面胴部下端ナデ、底部ナデで突出する平底。内面底部ナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤細粒微量、砂 粗～微粒少 やや硬質	底 1/3 周

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 352 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (7) 遺物

SG5 区 SK-181

1 土師器 甕	高 残 17.5 底 復 6.4 胴 復 17.4	外面胴～底部ナデで、胴部下半には強く施される部分あり。底部は丸味を持つ平底。内面胴～底部ヘラナデで、胴部上半～中位に紐積痕明瞭に残る。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・砂礫微量、白・赤・砂粗～細粒少 やや軟質	底上 8cm 胴～底 1/4 周 1-11 層、2-11 層
---------------	---------------------------------	---	---	--------------------------------------

SG5 区 SK-185

1 土師器 壺か甕	高 復 18.0 残 3.2	外面口縁部縦方向の 5 本 / 1cm のハケのちヨコナデ、内面口縁部横方向の 5 本 / 1cm のハケのちヨコナデ。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白・赤礫と白・赤・砂細粒微量 硬質	口一部
-----------------	-------------------	--	--	-----

SG5 区 SK-186 南

1 土師器 杯	高 復 11.6 残 2.8	白色の精良な胎土。内外面とも表面の剥落が著しく、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。外面口縁部・内面全体漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 白微粒少 やや軟質	口～体 1/5 周 南一拵
2 土師器 壺	高 残 12.9 胴 復 20.8	外面胴部上半縦方向のナデのち口縁部ヨコナデ・胴部中位縦方向のケズリ。胴部上半には、ミガキ状の細いヘラナデが集中する部分あり。部分的な器面の修正か。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部には部分的に紐積痕が残る。	10YR8/4 浅黄橙 緻密 黒細粒少、赤細粒と白微粒微量 やや硬質	胴上半～中位 1/3 周 南、南一拵

SG5 区 SK-189

1 土師器 杯	高 残 3.2 底 3.2	外面体～底部ケズリのち疎らなミガキ。底部くぼむ。内面体～底部放射状のやや疎らなミガキ。	5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、透明粗～細粒と白粗～微粒微量 やや軟質	底上 14cm 体～底 1/2 周 2
2 土師器 甕	口 復 16.2 高 残 3.4	口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部上端ケズリ。外面口縁部には、線刻状の細い条線 2 本あり。意図的に施されたものかどうか判別できない。	5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・砂粗～細粒微量 硬質	底上 21cm 口一部 1

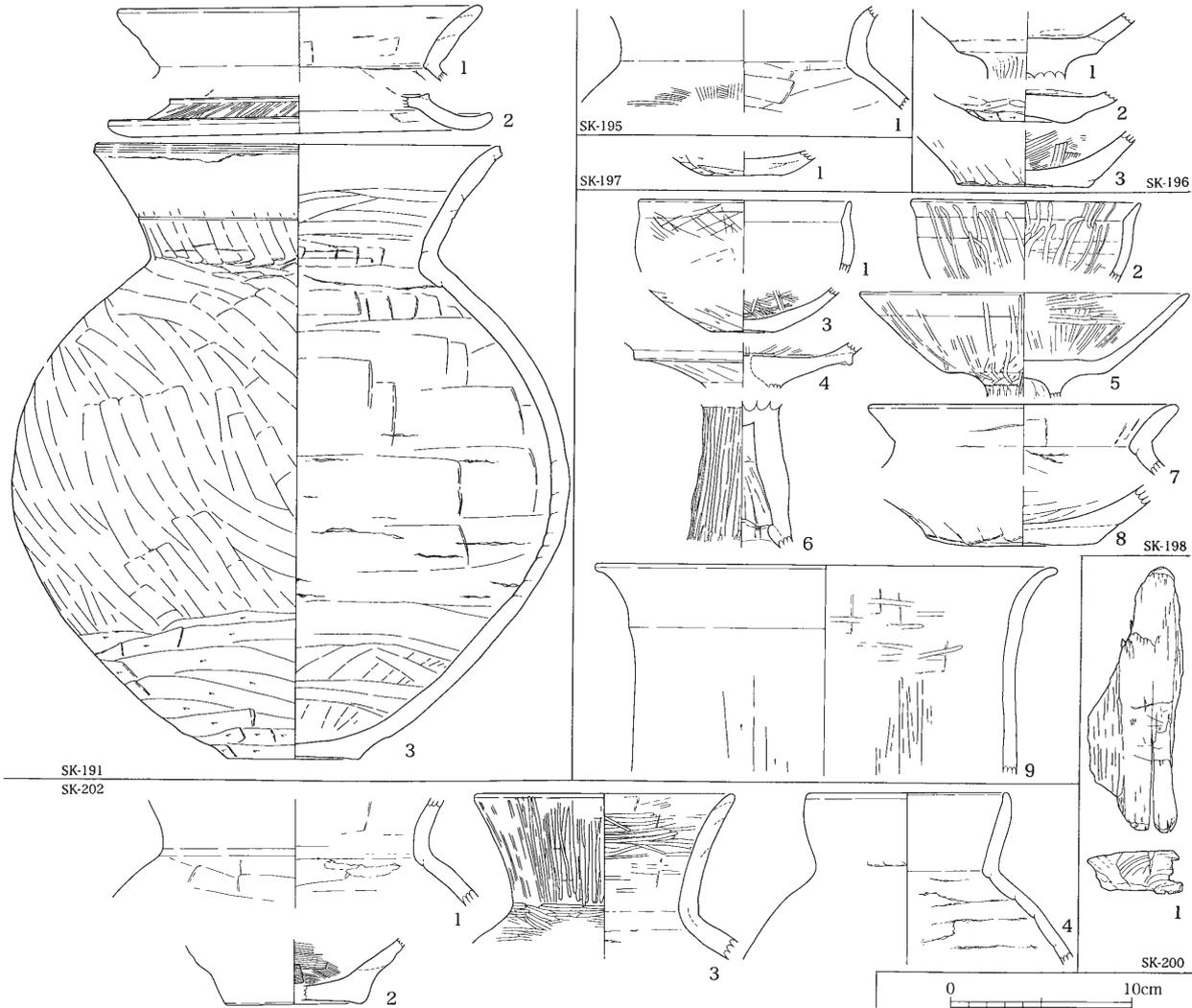
SG5 区 SK-190

1 土師器 小形土器	口 復 9.5 高 残 3.1 最大 復 10.4	内面は丁寧に調整されるが、外面は荒い。外面口縁～体部ナデで、指頭圧痕や紐積痕、粘土の皸が顕著。内面口縁～体部ナデ。	10YR6/1 褐灰 緻密 白・赤細粒微量 やや硬質	口～体 1/4 周
2 土師器 鉢	口 復 11.2 高 残 7.8 最大 復 14.2	口縁部は内傾し、端部内面は垂直に近い面となる。外面口縁部ヨコナデのち疎らなミガキ、体部光沢のあるナデ。内面口縁～体部ヨコナデのち密なミガキ。ミガキは口縁部中位付近を除き、密に施される。ミガキは細く、特に口縁部下端に横方向に施される最後のミガキが細い。内面全体黒色処理。	5YR6/6 橙 やや緻密 砂細粒少、白礫～細粒と赤粗～細粒微量 硬質	口～体 1/4 周 グリッド 27、57

第7節 古墳時代の土坑

3 土師器 甕	口 復 16.2 高 残 16.1 最大 19.2	外面口縁部ヨコナデのち胴部ケズリ。胴部には、ケズリ後に施されたミガキ状の工具痕あり。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデのち縦方向の疎らなナデ。胴部中位に積み上げ休止による接合痕が明瞭に残る。	2.5Y5/4 黄褐 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 白礫と赤・黒粗～細粒微量 硬質	口 1/3 周、胴 2/3 周 G27-54、グリッド 27-54
4 土師器 甕	口 復 21.6 高 残 13.8	外面胴部上半ケズリのちヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上半ヘラナデ。口縁部は直立気味に立ち上がったのち外反するが、端部はわずかに内彎しており、内側がわずかにくぼむ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 白礫と赤粗～細粒微量 やや硬質	口～胴上半 1/2 周 グリッド 27-54、G27-54
5 土師器 甕	高 残 2.3 底 7.2	胴部下端～底部ナデで、底部は平底。内面底部強いナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒多、白粗 ～細粒少 硬質	底 3/4 周 31 グリッド 7
SG5 区 SK-191				
1 土師器 甕	口 復 20.0 高 残 4.2	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 白・砂礫と赤粗粒微量 硬質	口 1/4 周
2 土師器 高杯	高 残 2.0 脚 復 21.0	脚部下半に明瞭な段を持ち、端部は面取りされて反り返る。外面脚部下半ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ。内面脚部下半ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～微粒少、白粗 ～細粒微量 やや軟質	SK-192 底上 10cm 脚下半 1/6 周 SK-191・192 No. 16
3 土師器 壺	口 復 22.4 高 33.9 底 7.2 最大 30.6	外面口縁部縦方向のヘラナデのち上半ヨコナデのち中央に沈線施文。口縁端部は面取りされる。胴部ナデのち下半ケズリ。底部ケズリのちナデで、やや突出する平底。内面ヘラナデのち上半ヨコナデ、胴～底部ヘラナデで、胴部上半～中位に部分的に粗積痕が残る。	10YR5/2 灰黄褐 緻密 白・透明細～微粒少、 白・赤・砂礫微量 やや硬質	底上 10cm 口 1/3 周、胴～底完存 25、グリッド 8、40
SG5 区 SK-195				
1 土師器 甕	高 残 5.7	外面胴部上半 6 本 /1cm のハケのち口縁部～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。口縁部上半は細かく割れており、人為的に打ち欠かれた可能性がある。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・砂粗粒多、白・ 砂礫～粗粒微量 硬質	底上 12cm 口下半～胴上半 1/4 周 2
SG5 区 SK-196				
1 土師器 高杯	高 残 3.7	全体に表面が磨滅しており、調整不明な部分多い。外面杯部体～底部ナデ。ミガキの可能性が高いが、不詳。脚部上端縦方向の密なミガキ。内面杯部体～底部ナデで、ミガキの可能性あり。脚部上端ナデ。脚部上端復元径 4.2 cm。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白粗 ～細粒少 やや軟質	底上 2cm 杯体～底 1/3 周 1
2 土師器 鉢	高 残 1.8 底 4.6	外面体部下半ケズリのち軽いナデ、底部ナデで、全体がくぼむ。内面底部ヘラナデ。	5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 赤粗～細粒少、砂礫 と白細粒微量 やや軟質	体～底 1/2 周
3 土師器 甕	高 残 3.2 底 7.3	外面胴～底部ナデ。胴部は表面の剥落が著しい。底部は平底で、外周寄りがドーナツ状に高くなっている。内面胴部下端～底部 5 本 /1cm のハケ。外面胴部下端～底部被熱により赤変している。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤・砂細粒少 やや硬質	胴下端～底 1/2 周 UT-TN-SG TX13-18
SG5 区 SK-197				
1 土師器 鉢	高 残 1.4 底 4.4	外面胴部下端～底部ケズリ。底部平底。内面底部ナデ。	2.5YR4/6 赤褐 粗い 砂粗～細粒多、白粗～細 粒少、白礫微量 硬質	底上 8cm 底 1/3 周 1
SG5 区 SK-198				
1 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 4.0 最大 復 12.0	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部線刻。線刻は焼成後と見られ、斜格子を描くように多数施される。右下がりの線の方がより明確。体部下半丁寧なケズリ。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデと見られるが、表面磨滅のため不明。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と白微粒 少 やや軟質	底上 28cm 口～体 1/3 周 G41、44
2 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 4.4	内斜口縁。外面口縁～体部上半ヨコナデ・体部荒いナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体部ナデのち口縁～体部縦方向の疎らなミガキ。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗 ～微粒微量 やや硬質	口～体 1/5 周 G41
3 土師器 杯	高 残 2.5 底 3.2	外面体～底部丁寧なケズリ。底部平底で、全体が浅くくぼむ。内面体～底部ヘラナデのち多方向のやや密なミガキ。	5YR6/6 橙 緻密 白微粒少、白細粒微量 やや硬質	底上 32cm 体～底 3/4 周 グリッド 37・28
4 土師器 高杯	高 残 2.6	杯部体部下端は明確な稜をなす。外面体部下端の稜部分ヨコナデ。底部ナデと見られるが、磨滅のため不明。内面底部ナデのち放射状のミガキ。底部中央は接合面から欠損する。杯部底部復元径 12.0cm。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 赤・砂粗粒多、白・ 黒・透明細粒少、白・赤・砂粗 粒微量 やや硬質	底上 16cm 杯底 1/3 周 39
5 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 4.9	内外面とも表面が磨滅している部分多い。外面杯部口縁部ヨコナデ・体部下～底部ケズリのち口縁～底部縦方向のミガキ。脚部上端ヘラナデのち縦方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ケズリのち口縁～底部ミガキ。ミガキは体～底部が放射状、口縁部は横方向。脚部上端荒いナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤・砂細粒少、白・ 灰色礫と白細粒微量 やや硬質	杯口～体 1/3 周、底 2/3 周 UT-TN-SG TX13-18、TX13-18・2
6 土師器 高杯	高 残 8.0	柱状脚。外面脚部上半ミガキ。残存部下端には、下半のミガキの上端が見られる。内面脚部上半ナデ。上端約 2cm の部分は径 1.3cm 程度の円筒状であり、上端中央に粘土の突出部が残ることから、笹のような円筒状工具を使用して成形したと見られる。残存部下半はナデで、接合痕が顕著に残る。脚部上端径 4.2cm。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白粗 ～細粒微量 やや軟質	中央部 脚上半完存 58
7 土師器 甕	口 復 17.0 高 残 3.9	外面口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端ナデ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗粒少、白・砂礫 ～細粒と赤粗～細粒微量 やや硬質	底上 15cm 口 1/3 周 79、グリッド 36 No. 1、 グリッド 37・7
8 土師器 甕	高 残 3.3 底 9.4	外面胴部下端ヘラナデ、底部ケズリ。底部はやや突出する平底で、外周が多く削られるため丸味を帯びた形状となる。中央がわずかにくぼむ。内面底部ヘラナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白粗～細粒少、白礫 と赤・半透明粗～細粒微量 やや軟質	底上 32cm 底完存 7、86

第8章 権現山遺跡 SG5 区



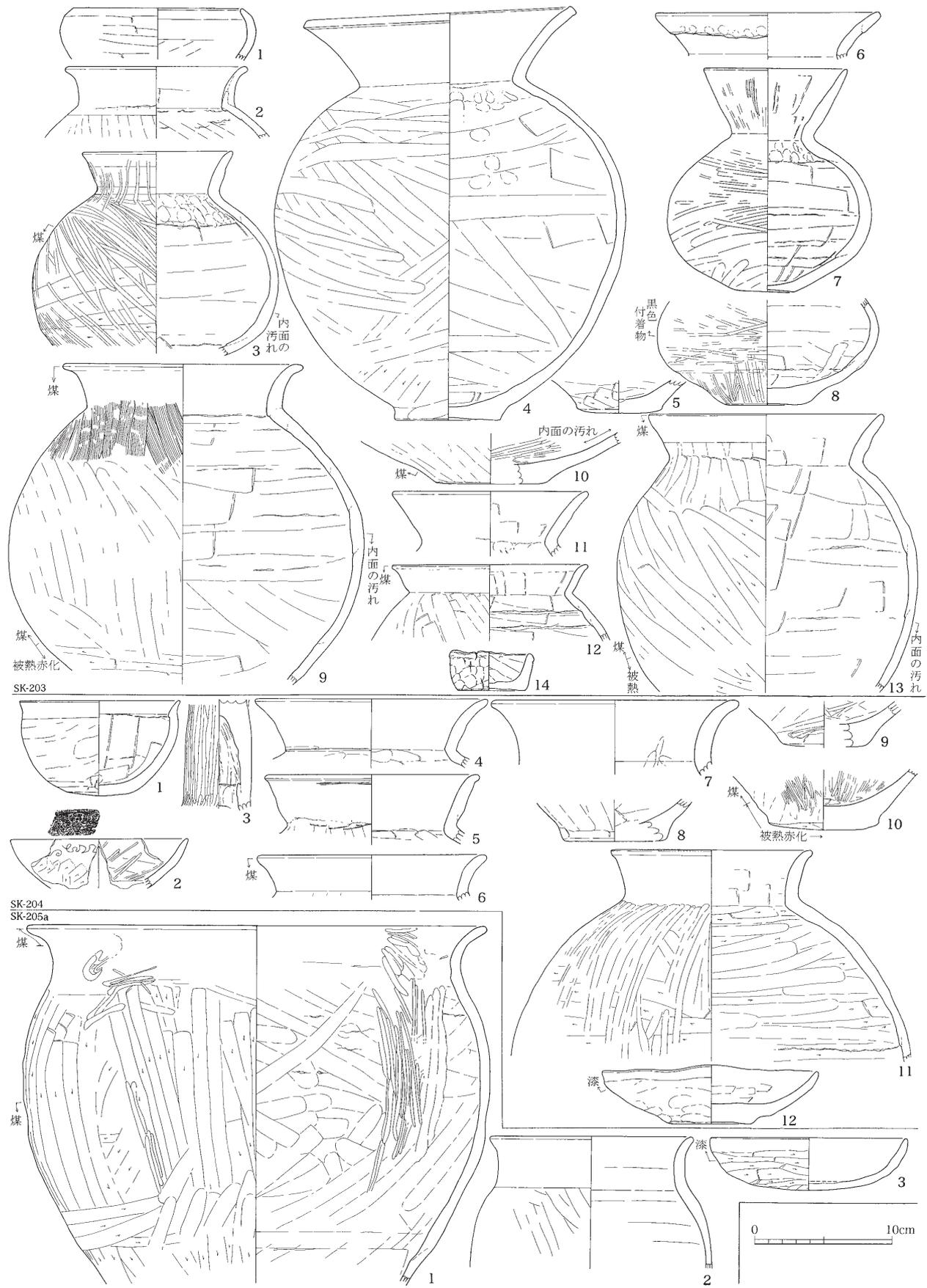
第 353 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (8) 遺物

9 土師器 甌	口 復 25.3 高 残 11.5	表面の磨滅が著しく、特に内面は調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのち横方向のミガキ、胴部縦方向のミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白・赤礫と白・砂粗～細粒微量 やや軟質	口～胴一部 UT-TN-SG TX13-18
SG5 区 SK-200				
1 木材 不明	長 残 14.7 幅 残 5.3 厚 残 2.4 重 残 25.6	自然木か。全体に丸く磨滅しており、加工痕は認められない。同一と見られる小枝の根本部分片も出土することから、加工があったとしても切断・分割される程度であったと推定される。	10YR6/6 明黄褐	破片
SG5 区 SK-202				
1 土師器 甕	高 残 5.9	外面口縁部下半ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。内面口縁部下半ヘラナデのちヨコナデ、胴部上半ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 砂粗～微粒少、白・赤・砂粗～細粒微量 やや硬質	口下半～胴上端 1/6 周 最下層
2 土師器 甕	高 残 3.6 底 復 7.4	外面胴部下端～底部ナデないヘラナデと見られるが、表面剥落のため不明。底部は突出する平底で、全体がくぼむ。内面胴部下端～底部 8 本 /1cm のハケ。	10YR7/2 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤細粒微量、砂粗～微粒少 硬質	胴下端～底 1/3 周
3 土師器 壺	口 復 14.4 高 残 9.1	外面口縁部ヨコナデのちミガキ、胴部上端ミガキ。頸部の横方向のミガキのうち上端の一部は強く施される。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデのちやや疎らなミガキ。胴部上端ナデと見られるが表面の剥落著しく、不明。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 砂粗～細粒多、白・赤粗～細粒微量 硬質	底上 42cm 口一部欠 1
4 土師器 壺	口 11.4 高 残 9.5	内外面とも表面磨滅のため調整不明。口縁部内外面のヨコナデ、外面口縁部下半のヘラナデのみ確認できる。内面胴部上半紐積痕顕著。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・赤・砂粗～細粒少、白・赤・砂礫微量 やや硬質	口 3/4 周、胴上半 1/4 周
SG5 区 SK-203				
1 土師器 杯	口 復 11.8 高 残 3.7 最大 復 14.0	口縁部内彎。外面体部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ、内面体部上半ヨコナデ、体部下半ナデ。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白・赤・砂粗～微粒少 硬質	底上 9cm 口～体一部 34

第7節 古墳時代の土坑

2 土師器 壺	口 14.0 高 残 4.7	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 透明細粒と白細～微 粒少、白・透明粗粒微量 硬質	底上 16～22cm 口ほぼ完存 32、35
3 土師器 壺	口 10.8 高 残 14.7 最大 17.6	火に掛けられた痕跡が明瞭。外面口縁部ヨコナデのち縦方向の疎らなミガキ、胴部上半ナデ・下半ケズリのち斜位のミガキ。胴部下半には積み上げ 休止による接合面があり、外面には稜線として表れている。内面口縁部ヨ コナデで、表面の剥落著しい。胴部上端ナデで、指頭圧痕と接合痕残る。 胴部ヘラナデで、胴部下半に積み上げ休止による接合面あり。外面胴部下 半煤付着、内面胴部下半表面細かく剥落しており、接合面付近より下位に はコゲ付着。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤粗～細粒と透明微 粒多、白粗～細粒少、赤礫微量 硬質	底上 33cm 口～胴完存 4
4 土師器 壺	口 19.5 高 29.9 底 7.8 最大 25.0	外面口縁部ヨコナデ、胴部下半ケズリのち胴部丁寧なナデ。底部はケズリ で、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。口縁部は 面取りされており、面の内側は内外面とも溝状にわずかにくぼむ。	7.5YR6/6 橙 やや粗い 白・黒・赤・砂微粒 多、白・黒・赤・砂粗～細粒少、 白・赤・砂礫微量 硬質	底上 1～20cm ほぼ完形 1、6、7、22
5 土師器 小形壺	高 残 2.4 底 6.0	外面胴部下端ナデのちケズリ。底部ケズリで、丸味を持つやや突出する平 底。内面胴部下端～底部ヘラナデで、中央に窪で成形された径約1cm、深 さ2mmの円形のくぼみあり。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 白・赤・砂細～微粒 少、白・砂礫～粗粒微量 やや硬質	胴下端～底 1/2 周 20
6 土師器 壺	口 復 16.0 高 残 3.4	口縁部は粘土貼り付けによる複合口縁。内外面口縁部ヨコナデ。外面口縁 部上半には、ヨコナデで消えなかった指頭圧痕が残る。	10YR7/2 にぶい黄橙 やや緻密 白・赤細～微粒少 やや軟質	底上 25cm 口 1/5 周 27
7 土師器 小形壺	口 10.3 高 16.1 底 4.4 最大 14.7	全体に表面がやや磨滅する。外面口縁部ヨコナデのち縦方向のミガキ。ミ ガキの疎密不明。強くミガキを施したような縦方向のヘラ描きあり。胴部 ナデのち胴部上半～中位ミガキ。底部ケズリで、全体がくぼむ。内面口縁 部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上端ナデで、指頭圧痕残る。胴～底部ヘラ ナデ。胴部上半・下半に積み上げ休止による接合面があるほか、胴部中位 には紐積痕がわずかに残る。胴部下半の接合面から下は白色が強い胎土、 上は橙色が強い胎土であり、接合面を境に胎土が異なる。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤礫と白・黒・ 赤・透明粗～細粒微量 やや軟質	底上 12～33cm 口～底一部欠 4、14、20、21、31、33
8 土師器 小形壺	高 残 7.6 底 5.3 最大 残 15.8	内外面とも表面が磨滅している部分が多い。外面胴部上半～中位横方向、 下半縦方向のミガキ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、外 面には段差として残る。底部ケズリで、突出する平底である。内面胴～底 部ヘラナデで、胴部下半の接合面が段差などとして残る。外面胴黒色物質 (漆?) 付着。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 白粗～微粒と赤細粒微量 軟質	底上 5～33cm 胴上半～底 1/2 周 4、15、29、37、FA ヨ リ上
9 土師器 甗	口 17.2 高 残 23.0 最大 25.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半8本/1cmのハケ・胴部下半ケズリのち胴部 丁寧なナデ。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデで、胴部上半～中位には 紐積痕がわずかに残る。外面胴部わずかに煤付着。胴部下半は被熱のため 細かくクレター状に表面が剥落する。内面胴部下半コゲ付着。	10YR7/6 明黄褐 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 白礫微量 硬質	底上 12cm 口～胴下半ほぼ完存 2、5
10 土師器 甗	高 残 3.7 底 復 8.0	外面胴部下端ナデ、底部は表面が細かく剥落しているため調整不明。平底。 内面胴部下端～底部ヘラナデのち横方向のミガキ。外面胴部下端煤付着、 内面胴部下端コゲ付着。	10YR4/1 褐灰 やや粗い 透明細～微粒多、白・ 赤礫と白・赤・砂細粒微量 硬質	底上 19cm 胴下端～底 1/3 周 30
11 土師器 甗	口 復 13.0 高 残 5.2	外面胴部上半ヘラナデのち口縁～胴部上端ヨコナデ。内面口縁部ヘラナデ のちヨコナデ。胴部上半ナデで、紐積痕残る。胴部と口縁部は色調の異な る胎土を使用。胴部成形と同時に小さな口縁部を作ったのち、橙色の強い 粘土で口縁部を作っていることがわかる。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 白・赤・砂礫微量 硬質	底上 15～24cm 口～胴 1/5 周 11、28
12 土師器 甗	口 復 14.0 高 残 5.5	外面口縁部ヨコナデ、胴部上半丁寧なヘラナデ。内面口縁部ヘラナデのち ヨコナデ。胴部上半ヘラナデで、紐積痕が明瞭に残る。外面口縁～胴部に 煤付着。	2.5Y3/1 黒褐 やや粗い 白細粒多、白・砂粗 粒と赤細粒微量 硬質	底上 16cm 口～胴上半 1/6 周 10
13 土師器 甗	口 16.8 高 残 20.0 最大 21.4	外面口縁～胴部上半ヘラナデ・胴部下半ケズリのち口縁部上半ヨコナデ・ 胴部中位ナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部ヘラナデ。胴部 には紐積痕残る。外面胴部中位以下は表面が細かく剥落しており、下半はコゲが付着す る。内面胴部中位以下は表面が細かく剥落しており、下半はコゲが付着す る。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 透明細～微粒多、 白・砂粗～細粒と白色針状物質 少、赤粗～細粒微量 硬質	底上 14～31cm 口～胴一部欠 5、18、26、30
14 土師器 小形土器	口 復 6.0 高 2.9 底 4.8	成形甘い。外面口縁～底部軽いナデで、口縁部に粘土のヒビあり。底部平 底で、わずかにくぼむ。内面口縁～底部ナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤細～微粒少 硬質	口～体 2/3 周、底完存 FA ヨリ上
SG5 区 SK-204				
1 土師器 杯	口 11.4 高 6.9 底 4.3	内斜口縁。全体的に歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体部下半～底部ヘラ ナデ。体部上半は成形時のナデのみ。底部はいびつで、丸味を持つ平底。 内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・砂微粒少、白・ 赤礫～細粒微量 硬質	底上 55cm ほぼ完形 1
2 土師器 杯	口 復 12.7 高 残 3.6	外面口縁～体部ヨコナデのち体部ケズリ・口縁部外面に焼成前の刻線を先 端が尖った工具で描く。右側の横長の線も、左側の渦巻状の線も、右から 左へと刻んでいる。内面口縁～体部ヨコナデのち体部ナデのち斜位の疎ら なミガキ。	5YR5/6 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒少、白粗 ～細粒微量 硬質	口～体一部
3 土師器 高杯	高 残 8.0	柱状脚。外面脚部上半縦方向の密なミガキ。残存部下端には、脚部下半に 施されると思われるミガキの上端が見られる。内面脚部上半ナデで、縦方 向の粘土の皸残る。残存部下半には、紐積痕明瞭に残る。脚部上端径 4.3 cm。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・砂細粒少、白礫 ～粗粒と赤細粒微量 やや硬質	底上 52cm 脚上半完存 28
4 土師器 甗	口 復 16.6 高 残 5.0	内外面口縁部ヨコナデ。胴部上端はわずかに残っており、内外面ともナデ と見られる。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 砂微粒少、白・赤礫 ～粗粒微量 やや硬質	底上 57cm 口 1/6 周 2
5 土師器 甗	口 復 15.4 高 残 5.0	外面口縁～胴部上端ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。口縁部は丸く肥厚す る。内面口縁部ヨコナデ、胴部上端ヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・砂細粒少、砂・ 白礫・赤細粒微量 硬質	底上 61cm 口 1/5 周 11
6 土師器 甗	口 復 16.4 高 残 3.4	口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部煤付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤・砂礫～細粒微量 硬質	底上 56cm 口 1/6 周 14
7 土師器 甗	口 復 17.6 高 残 5.4	内外面口縁部ヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・赤・砂細粒少、 白礫微量 硬質	底上 68cm 口 1/6 周 12

第8章 権現山遺跡 SG5 区

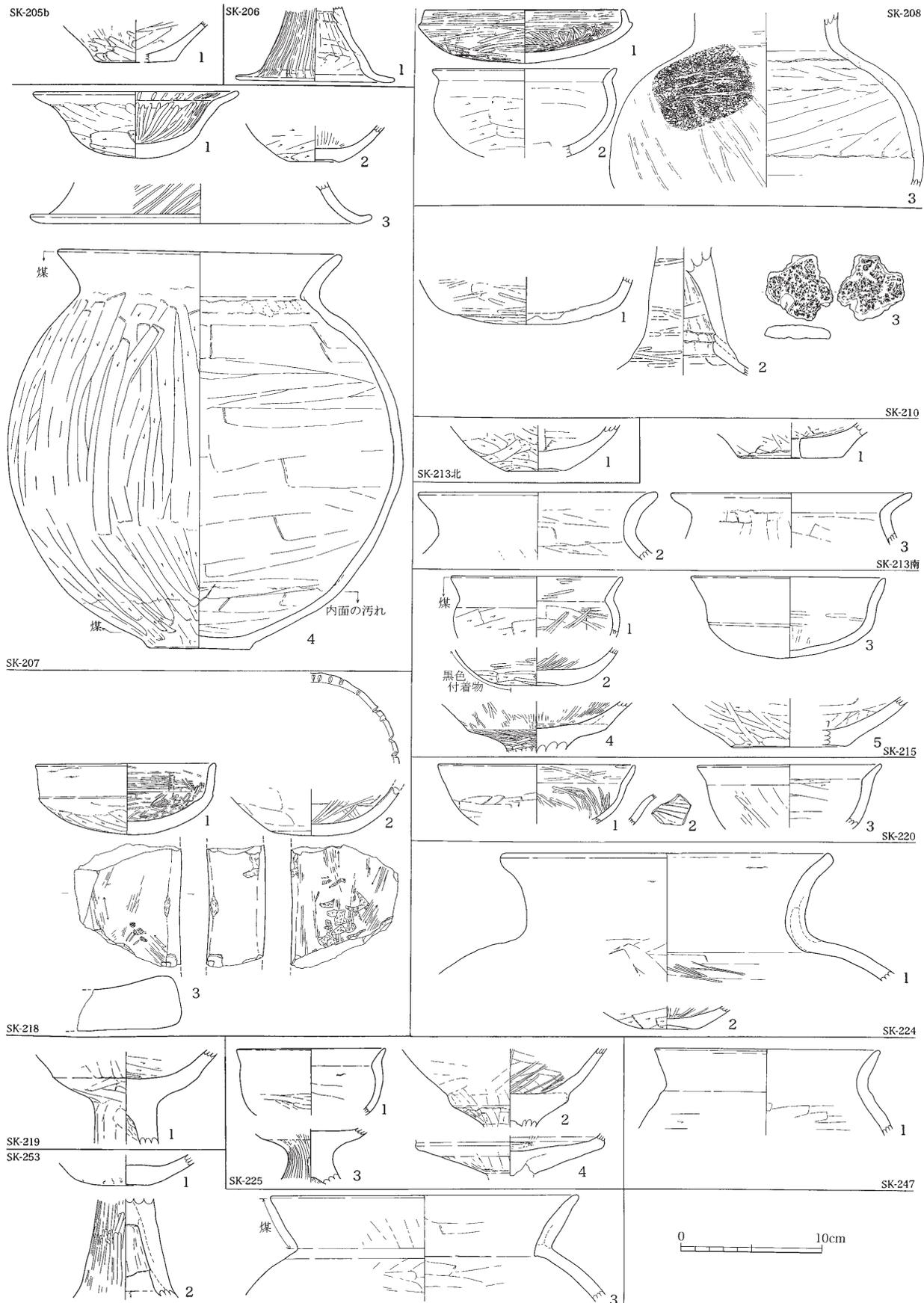


第354図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑(9) 遺物

第7節 古墳時代の土坑

8 土師器 甕	高底 残 3.0 復 7.6	外面胴部下端ナデ、底部は表面剥落のため不明。底部は突出する平底。内面胴部下端～底部ヘラナデ。内面胴部下端～底部コゲ付着。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・砂礫～細粒少、 赤細粒微量 硬質	胴下端～底 1/4 周 UT-TN-SG TX13-18.2
9 土師器 甕	高底 残 3.3 復 6.0	外面胴部下端～底部ヘラナデ。底部はやや突出する平底で、丸味を持つ。内面胴部下端～底部ヘラナデのち多方向の疎らなミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや緻密 白粗～細粒少、白礫 と赤細粒微量 硬質	底上 60cm 胴下端～底 1/4 周 24
10 土師器 甕	高底 残 4.4 8.0	外面胴部下端ナデのち縦方向の疎らなミガキ、底部ケズリ。底部は突出した平底で、丸味を持つ。内面胴部下端～底部ヘラナデのち縦方向の疎らなミガキ。ヘラナデの工具先端は荒れており、不規則な条線が残る。外面胴部下端煤付着。外面底部は被熱のためか表面が部分的に赤変している。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや緻密 白細～微粒少、白粗 粒微量 硬質	底上 53～56cm 胴下端～底完存 18、19
11 土師器 壺	口高最大 復 14.4 残 15.2 最大 復 28.6	外面口縁部ヨコナデ。口縁端部は肥厚しており、外向きに面取りされる。胴部上半ヘラナデ・中位横方向のケズリのち胴部縦方向のナデ。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴部上半ケズリのち疎らなナデ。外面胴部中位煤付着。	10YR5/4 にぶい黄褐 粗い 白・赤・砂粗～細粒多、 白・灰色・砂礫少 硬質	底上 48～52cm 口～胴上半 1/3 周 20、27
12 土師器 杯	口高底 15.5 4.3 5.9	全体に歪みあり。外面口縁部ヨコナデ、体部は成形時のナデのみ。底部ナデで、突出する平底。内面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ。口縁～体部の欠損部分付近には、内外面と断面ともに黒色物質（漆?）付着。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤細～微粒少、 白・赤礫～粗粒微量 やや軟質	底上 59cm 口～体 2/3 周、底完存 25
SG5 区 SK-205a				
1 土師器 甕	口高 復 33.0 残 25.8	鉢形。外面胴部ケズリのち下半ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ。残存部中央口縁～胴部に大きな補修痕あり。外面は口縁部に粘土貼り付けのち口縁～胴部一部にミガキ、内面は厚めに粘土を貼り、集中的にミガキが施される。土器全体はこの補修部分で大きく歪む。外面胴部下半わずかに煤付着。	10YR5/2 灰黄褐 粗い 砂粗～細粒多、砂礫と 白・赤粗～細粒微量 硬質	底上 25cm 口～胴 1/3 周 5
2 土師器 甕	口高 復 14.6 残 9.5	外面胴部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部ナデ。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白細～微粒少、白雲 母細～微粒微量 やや硬質	底上 11cm 口～胴一部 1
3 土師器 杯	口高 14.1 3.8	外面口縁部ヨコナデのち体～底部丁寧なケズリ。底部丸底。内面口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 赤・白微粒少 やや軟質	口～底 1/2 周 1B
SG5 区 SK-205b				
1 土師器 鉢か	高底 残 2.9 復 5.6	外面胴部縦および横方向のヘラナデ、底部ケズリ。底部は平底で、外周は面取り状に削られている。内面胴部下～底部ヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白粗～細粒多、半透 明・砂粗～細粒微量 硬質	底上 24cm 胴下半～底 1/3 周 8
SG5 区 SK-206				
1 土師器 高杯	高脚 残 5.3 11.2	小形。外面脚部上半～中位縦方向のナデ・脚部下端ヨコナデのち脚部縦方向のミガキ。内面脚部上半ナデ、中位ヘラナデで、下から見て右回りの螺旋状に紐積された痕跡が残る。脚部下端ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 緻密 赤粗～細粒と白・半透明 微粒少 やや軟質	脚上半～中位完存、脚 下端 1/2 周 1
SG5 区 SK-207				
1 土師器 杯	口高 復 14.4 4.7	丸底。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデのち体～底部ケズリ。内面口縁部ヨコナデ・体～底部ナデのち口縁～底部乱雑で太い放射状のミガキ。口縁部に歪みあり。	7.5YR5/4 にぶい褐 粗い 白・砂粗～細粒多、白・ 砂礫と赤粗～細粒微量 硬質	口～体 1/4 周、底完存 2、低地一括北
2 土師器 杯	高底 残 2.6 復 3.4	外面体部丁寧なケズリ。底部はケズリで作出されており、いびつにくぼむ。内面体～底部放射状のミガキ。内面体～底部は、クレーター状に深くまで剥落してしまった部分多い。	7.5YR8/3 浅黄橙 緻密 赤・砂粗～細粒少 やや軟質	体～底 1/2 周 9
3 土師器 高杯	脚 復 24.0	大形。外面脚部下半ヨコナデのち斜位の疎らなミガキ。端部は反り返り、わずかに面取りされる。内面脚部下半ヨコナデ。被熱のためか、内外面とも表面が剥落している部分が多い。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、赤・ 砂礫と白細～微粒微量 やや軟質	脚幅 1/8 周 8
4 土師器 甕	口高底最大 19.9 28.1 7.2 27.8	外面口縁部ヨコナデ、胴部下半ケズリのち胴部上半ケズリ。底部ケズリで、突出する平底。内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ、胴～底部ヘラナデ。胴部上端指頭圧痕残る。胴部下半の積み上げ休止による接合痕は、器厚の変化や粘土の継ぎ目としてわずかに残る。口縁部上端から約 8cm まではそれ以下の部分より赤味の強い粘土を使っている。外面口縁～胴部に少量の煤付着。	10YR6/3 にぶい黄橙 粗い 白粗～微粒と砂細～微粒 多、白礫と赤粗～細粒微量 硬質	口全周、底全周 1、3、4、5、6、7、22、G41、 SK198
SG5 区 SK-208				
1 土師器 杯	口高最大 復 14.0 3.8 15.0	外面口縁部ヨコナデのち横方向のミガキ。口縁部は短く、内彎している。体～底部ナデのち疎らな多方向のミガキ。内面口縁～体部ヨコナデのち横方向のミガキのち体部斜位のミガキのち底部一方向のミガキ。内面ミガキは比較的密に施される。口縁端部は磨滅している部分が多い。内面は炭素吸着による黒色処理の可能性あり。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 透明微粒多、透明細粒と 白細～微粒少 やや硬質	底上 63cm 口～体 2/3 周、底完存 2
2 土師器 杯	口高 復 13.0 残 6.7	内斜口縁。内外面とも表面が磨滅しており、調整不明な部分が多い。外面体部ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。内面体部ナデ。	5YR7/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒少、白・ 砂粗～細粒微量 やや軟質	口～体 1/4 周
3 土師器 壺	高胴 残 12.4 復 22.0	外面頸部～胴部および内面頸部は表面の剥落著しく、調整不明な部分多い。外面頸部ヨコナデのち横方向のミガキ、胴部斜位のミガキで、胴部上半に研磨具砥石として使用した痕跡と見られる条線あり。内面頸部調整不明。胴部上半ヘラナデのち中位ケズリ。上半に紐積痕残る。中位に積み上げ体止による接合痕明瞭に残る。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い 赤礫～細粒少、白・ 砂礫～細粒微量 硬質	底上 74cm 頸～胴中位 1/3 周 1
SG5 区 SK-210				
1 土師器 小形壺	高底 残 3.4 4.2	内外面とも表面はやや磨滅する。外面体～底部ナデのち体部ミガキ。体部下端には接合痕と見られる不整なくぼみあり。底部は明確には作出されていないが、中央の径 4.2cm の部分がほぼ平坦になっている。内面体部ヨコナデ、底部は剥落のため不明。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗～細粒と砂微粒少、 白粗～細粒微量 やや軟質	底上 45cm 体 1/6 周、底 1/2 周 2

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 355 図 権現山遺跡 SG5 区 古墳時代の土坑 (10) 遺物

第7節 古墳時代の土坑

2 土師器 高杯	高 残 9.1	柱状脚。外面脚部上半～中位丁寧なナデのち横方向の疎らなミガキ。内面脚部上半わずかにヘラナデで、しぼり目顕著。中位ナデで、組積痕顕著に残る。組積痕より下位はヘラナデのちヨコナデ。上端の欠損の状況から、杯部底部の突出部を脚部に挿入して接合するものと見られる。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒と白微粒少 硬質	脚上半～中位一部欠
3 土製品 焼粘土塊	長 幅 4.6 厚 4.6 重 1.0 20.8	薄い不整形の粘土塊で、全面に細い草本植物繊維の圧痕が顕著。両面の約半分は黒斑。	10YR6/3 にぶい黄橙 やや粗い 透明粗粒と白・灰色粗～細粒少、白・透明礫微量 硬質	完形
SG5区 SK-213 北				
1 土師器 壺	高 底 残 3.2 3.4～4.0	中形。外面胴部下ケズリ、底部ケズリのちナデで、不整形にくぼむ。内面胴部下～底部ヘラナデ。	5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少 やや硬質	底上 24cm 胴 3/4周、底完存 3
SG5区 SK-213 南				
1 土師器 瓶	高 底 残 2.5 復 7.0	外面胴部下端～底部ケズリで、平底。内面底部ケズリのち一部ナデ。底部中央に復元径 1.2cmの孔あり。内面はケズリのちナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白・砂粗～細粒少、 砂礫と白微粒微量 硬質	底 1/2周 グリッド 27 No. 63
2 土師器 甕	口 高 復 16.8 残 4.7	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヘラナデのちヨコナデ。内面胴部上端ナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 緻密 白・黒・赤粗～細粒微量 硬質	口 1/6周 グリッド 27 No. 63
3 土師器 甕	口 高 復 17.0 残 3.7	外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデ。	2.5Y4/1 黄灰 やや緻密 白・砂細粒少、赤細 粒微量 硬質	口一部 グリッド 27 No. 63
SG5区 SK-215				
1 土師器 杯	口 高 復 12.0 残 4.3	内斜口縁。外面体部ケズリのち口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデのち疎らな横方向のミガキ。体部ヘラナデのち疎らな斜位のミガキ。外面口縁～体部煤付着。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや緻密 白・砂細粒少、赤細 粒微量 硬質	口～体 1/6周
2 土師器 杯	高 底 残 2.7 3.6	外面体部中位ナデのち下半～底部ケズリのち体～底部疎らなミガキ。底部は全体がくぼむ。内面体～底部放射状の密なミガキ。内面は表面のクレター状の剥落が著しい。外面体部に黒色物質付着。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明・砂粗～細 粒微量 やや硬質	体～底 1/2周
3 土師器 杯	口 高 13.7 5.8	内外面とも表面の磨滅著しく、調整不詳。外面口縁部と体部の境に浅い沈線あり。丸底で、口縁部上半は外傾する。内面口縁～体部横方向、底部一方方向のミガキと見られる。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 赤粗～微粒と白粗～ 細粒微量 やや硬質	口～体 3/4周、底完存
4 土師器 高杯	高 残 3.8	被熱のためか表面の一部が磨滅し、赤褐色を呈する。外面体～底部密なミガキ。体部は縦、底部は横主体。脚部上端縦方向のミガキ。内面体～底部放射状の密なミガキ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白・ 砂粗～微粒微量 やや軟質	底上 58cm 杯体～底 1/6周 990325 No. 14
5 土師器 甕	高 底 残 3.5 復 8.0	外面胴部下端～底部ケズリのちナデ。底部は平底で、全体に浅くくぼむと見られる。内面胴部下端～底部ヘラナデ。内面黒褐色。	7.5YR5/4 にぶい褐 粗い 白粗～細粒多、白礫と 赤・砂粗～細粒微量 硬質	底上 54cm 胴下端～底 1/4周 990325 No. 11
SG5区 SK-218(グリッド27)				
1 土師器 杯	口 高 復 12.7 5.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ナデのち主に一方方向のケズリ。底部は丸底。内面ヨコナデのちミガキ。ミガキは口縁～体部横方向、底部多方向。	5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒多、白粗 ～細粒少 やや軟質	底上 25cm 口～体 1/2周、底完存 グリッド 27 No. 43
2 土師器 壺	高 底 残 3.3 5.8	外面胴部下～底部丁寧なナデ。底部は丸底だが胴部から角度が変化する部分をたらえて底部とした。内面胴部下～底部ヘラナデのち疎らなミガキ。欠損部は積み上げ休止による接合面であり、上に積み上げる粘土との接合を強めるためにヘラ状工具による刻み目が施されている。外面胴部下～底部は表面が剥落している部分が多い。	7.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒と白微粒 少、赤礫微量 やや硬質	底直上 胴下半～底完存 グリッド 27 No. 58
3 石器 砥石	長 幅 残 8.2 7.5 厚 残 4.1 残 404.7	大形・偏平な砥石の破片。表裏面、側面とも平滑で、使用による細い擦痕が見られる。表面は石皿状にくぼみ、わずかに敲打痕あり。裏面はほぼ平坦で、敲打痕多数あり。欠損部縁辺は磨滅しているように見える部分もあるため、この破片の状態で使用された可能性がある。	5Y4/1 灰 緻密 ホルンフェルス	底面付近 破片 グリッド 27 No. 59
SG5区 SK-219				
1 土師器 高杯	高 残 6.7	内外面ともミガキ調整はなし。外面杯部体部～脚部上端ヘラナデ。内面杯部体～底部丁寧なケズリ、脚部上端ナデ。脚部上端径 4.4cm。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・砂粗～微粒と透 明微粒少、赤礫～細粒微量 やや硬質	杯体 1/4周、杯底～脚 上端完存 グリッド 27 No. 48
SG5区 SK-220				
1 土師器 杯	口 高 復 13.9 残 4.2	内斜口縁。外面口縁～体部ヨコナデのち体部ナデ、内面口縁～体部ヨコナデのち口縁～体部疎らなミガキ。ミガキは口縁部横方向、体部は斜位で放射状と見られる。	5YR6/6 橙 緻密 白・赤粗～微粒微量 やや硬質	底上 22cm 口～体 1/3周 4、SK-222 No. 4
2 土師器 杯	高 残 2.2	内斜口縁の杯と見られる。被熱のためか、内外面とも赤褐色で表面が磨滅しており、調整は不明。口縁部下半～体部に相当すると見られる破片で、外面に6本の斜位の刻線あり。	5YR6/6 橙 緻密 白微粒と赤・黒・砂細～ 微粒微量 やや硬質	口～体部片一部
3 土師器 杯	口 高 復 13.0 残 4.5	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部軽いなデのち一部斜位のミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ケズリのち光沢を持つナデ。内面口縁～体部一部黒色物質付着。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・赤細～微粒微量 やや硬質	底上 20cm 口～体 1/6周 2
SG5区 SK-224				
1 土師器 壺	口 高 復 23.4 残 9.1	大形。外面胴部上端ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。内面胴部上端ヘラナデで、一部にミガキあり。ミガキは器面の補修のためか。口縁部中位内側には積み上げ休止による接合面があり、破片の観察から接合面には刻み目が施されていることがわかる。	5YR6/8 橙 やや粗い 砂粗～細粒多、白・ 赤粗～細粒微量 硬質	口 1/4周、胴上端 1/6周 2、3、4、5、6
2 土師器 杯	高 底 残 1.7 残 4.0	外面体～底部ケズリ。底部は全体にくぼむ。内面体～底部ヘラナデのち放射状の疎らなミガキ。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、白微 粒少、白・砂細粒微量 硬質	体～底 1/2周 7

第8章 権現山遺跡 SG5 区

SG5 区 SK-225

1 土師器 杯	口 復 10.4 高 残 4.7	内斜口縁。外面は表面の磨滅著しい。外面体部ミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。体部ナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 赤粗～細粒少、砂細 粒微量 やや軟質	口～体 1/4 周
2 土師器 高杯	高 残 5.6	外面杯部体部ヘラナデのちナデ、底部ヘラナデのちケズリ。杯部は円盤状の底部に粘土を貼り付けて作られる。内面杯部体部～底部ヘラナデのち疎らな斜位のミガキ、脚部上端ナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白・赤・砂細～微粒 少、白・赤・砂粗粒微量	底上 22cm 杯体一部、底完存 グリッド 27 No 41
3 土師器 高杯	高 残 4.0	外面杯部底部～脚部上半密なミガキ。内面杯部底部放射状のミガキ、脚部上端ナデ。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 白礫微量 やや軟質	底上 57cm 杯底一部、脚上半完存 グリッド 27 No 30
4 土師器 高杯	高 残 2.9	外面杯部底部ヘラナデのち上半ヨコナデ。下端はミガキの可能性あり。内面杯部底部ナデのちミガキ。ミガキは疎らで、横方向のち放射状のミガキが施される。脚部接合部中央には突出部があり、これを脚部側に挿入して接合したものと見られる。	5YR6/6 橙 やや緻密 白細～微粒と砂微粒 少、赤粗～細粒と砂細粒微量	底上 29cm 杯底一部 グリッド 27 No 37

SG5 区 SK-247

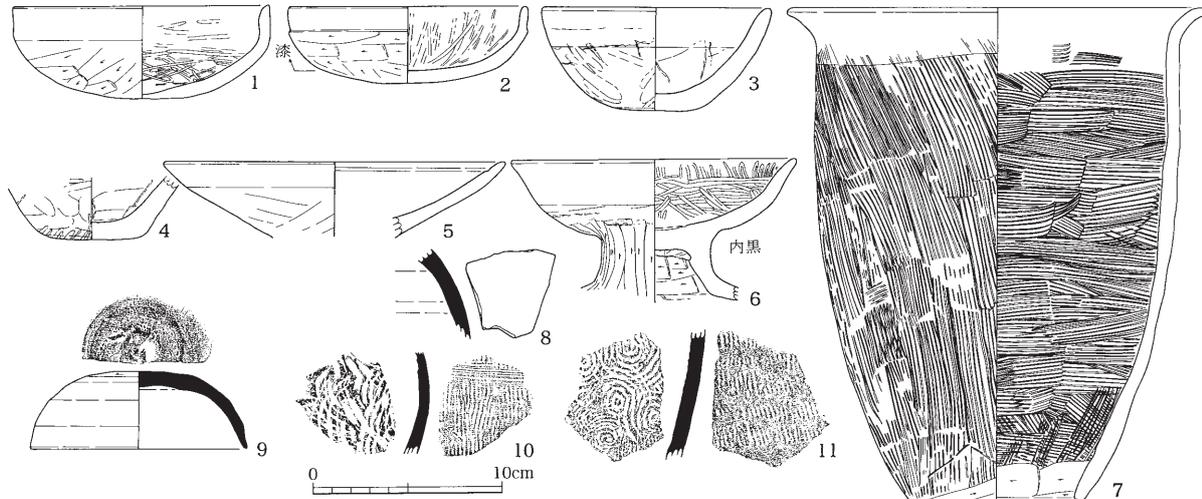
1 土師器 甕	口 復 15.8 高 残 6.1	外面胴部上半ナデのちケズリ、口縁部内外面ヨコナデ、内面胴部ヘラナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 緻密 砂細粒少、赤細粒微量 やや軟質	口～胴上半 1/6 周 3
---------------	---------------------	------------------------------------	--	------------------

SG5 区 SK-253

1 土師器 杯	高 残 2.2 底 3.4	鉢の可能性もある。内外面とも表面は磨滅しており、調整不明。調整は甘く、外面体部には縦方向の粘土の敷が残る。底部は平底で、わずかにくぼむ。	7.5YR7/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 透明細粒微量 軟質	体下半～底完存 990325 No 26
2 土師器 高杯	高 残 7.0	ハの字に開く脚部。外面脚部上半縦方向の密なミガキ。残存部中位にミガキの工具の当たりによる小さなくぼみあり。内面脚部上半ナデ、中位ヘラナデ。中位には脚部下半になると見られる粘土が貼り付けられており、接合痕が明瞭に残る。下半の粘土は上半と異なり、白っぽい色調のもの。上端欠損部はやや磨滅しており、杯部欠損後に転用された可能性あり。	5YR5/8 明赤褐 やや緻密 白微粒多、白粗～細 粒と黒細粒微量 やや軟質	脚上半一部欠 低地一括北、990325 No 28
3 土師器 甕	口 復 21.6 高 残 7.5	外面胴部上端ナデ、口縁部内外面ヘラナデのちヨコナデ。内面胴部上端ナデ。外面口縁部煤付着。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白粗～細粒と黒・灰 色・透明粗粒少、白礫微量 硬質	口 1/12 周、頸 1/9 周 一部 990325 No 31、32

第8節 遺構外出土の古墳時代遺物（第356図、写真図版187）

低地部の遺物包含層（本章次節）以外で、遺構外から出土した古墳時代遺物がある。1は出土地点不明の中期末の模倣杯、8はSG5区南部の10.5-17.5グリッドで出土した須恵器瓶で古墳時代終末期の可能性が有る。この2点以外は、1996年1月・2月に実施した確認調査のトレンチTX15とTX16で出土した。TX15出土の高杯（5）は古墳中期で、それ以外は古墳後期～終末期の土師器・須恵器である。TX16出土遺物のうち粗製杯・高杯・甕（3・6・7）はSI-10に伴う遺物の可能性が有る。ただし、TX16には縄文晩期中葉の土製円盤も混在している。6は杯部内面を炭素吸着で黒色処理している。内外面ハケ調整の甕は珍しい（7）。TX15の須恵器杯蓋（9）は低地包含層出土の杯身（第357図9）とよく似た土器で、湖西窯産かもしれないが、確実ではない。



第356図 権現山遺跡 SG5 区 遺構外出土の古墳時代遺物

第201表 権現山遺跡 SG5 区 遺構外出土の古墳時代遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.4 高 4.9	外面口縁部ヨコナデ、体～底部丁寧なケズリ。底部丸底。内面口縁～体部ヨコナデ・底部ナデのち口縁～底部やや疎らな横方向主体のミガキ。底部中央は極めて薄い。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒・赤粗～細粒 微量 やや軟質	口～底一部欠 不明
2 土師器 杯	口 12.6 高 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体～底部ケズリ。丸底。内面口縁～体部ヨコナデ・底部ナデのち口縁～底部放射状の疎らなミガキ。内面全体・外面口縁～体部漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・黒細粒と砂粗～ 細粒微量 やや軟質	口～底部 1/3 周 TR-15
3 土師器 粗製杯	口 12.0 高 5.5 底 4.4	口縁部ヨコナデ、体～底部は無調整に近く、荒いナデが部分的に施され、粘土の皺が顕著。一部に細い植物圧痕と見られるものあり。底部はやや丸味を持つ平底。内面体～底部ヘラナデのち口縁部ヨコナデ。内面は丁寧な仕上げ。	10YR8/6 黄橙 緻密 赤・砂粗～細粒微量 やや硬質	口～体 3/4 周、底完存 TR-16 SI 外西
4 土師器 粗製杯	高 3.3 底 5.0	外面体～底部軽いナデで、植物圧痕と見られる浅い沈線が各所にある。底部は丸味を持つ平底。内面体～底部荒いヘラナデ。	7.5YR8/4 浅黄橙 緻密 砂細粒少 やや硬質	SI-10の遺物の可能性あり 体～底完存 UT-TN-SG TX16-16 SI
5 土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 4.0	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面表面磨滅により調整不明。口縁部に幅 2mm程度の沈線あり。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少、 黒粗～細粒微量 やや軟質	杯口～体部破片 TR-15 覆土
6 土師器 高杯	口 復 15.0 高 残 7.4	外面杯部口縁部ヨコナデ、杯部底部～脚部上半ケズリ。杯部体部は無調整で、紐積痕を残す。内面杯部口縁～体部ヨコナデのち横方向および放射状主体のミガキ。底部は表面剥落のため調整不明。脚部上端ナデ、上半ケズリ、下半ヘラナデ。杯部内面は炭素吸着による黒色処理。	5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・砂粗～細粒と黒 細粒少 硬質	SI-10の遺物の可能性あり 杯口～体 3/4 周、杯底 ～脚上半完存 UT-TN-SG TX16-16 No.2
7 土師器 甌	口 復 22.0 高 26.2 底 復 9.0	無底式。胎土は粗く、糞のような胎土。外面胴部 6 本 / 1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下端一部ケズリ。内面胴部 6 本 / 1cmのハケのち口縁部ヨコナデ・胴部下端～底部ケズリ。底部はケズリにより面取りされる。	10YR7/4 にぶい黄橙 粗い 砂粗～細粒多、砂礫と白 粗～細粒少 硬質	SI-10の遺物の可能性あり 口～底 1/2 周 SX-16 SI
8 須恵器 瓶	高 残 4.8	内外面口縁部ヨコナデで、ロクロの回転方向は不詳。90°横に倒してプラスチックになる可能性も持つ。外面全体を自然釉が覆い、灰白色にやや汚く溶けている。東海地方産の可能性あり。	2.5Y6/1 黄灰 緻密 白細粒少 硬質	胴 1 片
9 須恵器 蓋	口 復 11.4 高 4.1	外面口縁～体部ロクロナデ、天井部はヘラ切り離し後に外周を回転ヘラケズリしてから軽くナデ。内面口縁～天井部ロクロナデ。湖西窯産かもしれないが不確実。	2.5Y6/2 灰黄 緻密 白粗～細粒微量 硬質	口～天井 1/2 周 TR-15
10 須恵器 甕	高 5.5	外面は縦位の平行叩き目のちにカキメを器面に向かって右から左方向に施す。破片左下部に不規則なナデ。内面は同心円当具痕で、器面に向かって左から右方向へ進行する。	5Y5/1 灰 やや緻密 白細～微粒少 硬質	試掘トレンチ TX16 の 16-18 グリッド 胴部 1 片 TX16-18
11 須恵器 甕	高 6.7	外面は縦位の平行叩き目のちに間隔をあけた回転ヨコナデ。内面は同心円当具痕で、図の上部から下部へ進行する傾向がある。	7.5Y5/1 灰 やや粗い 灰白粗～細粒多、赤 細粒微量 硬質	胴部 1 片 TR14 ～ 15 表採

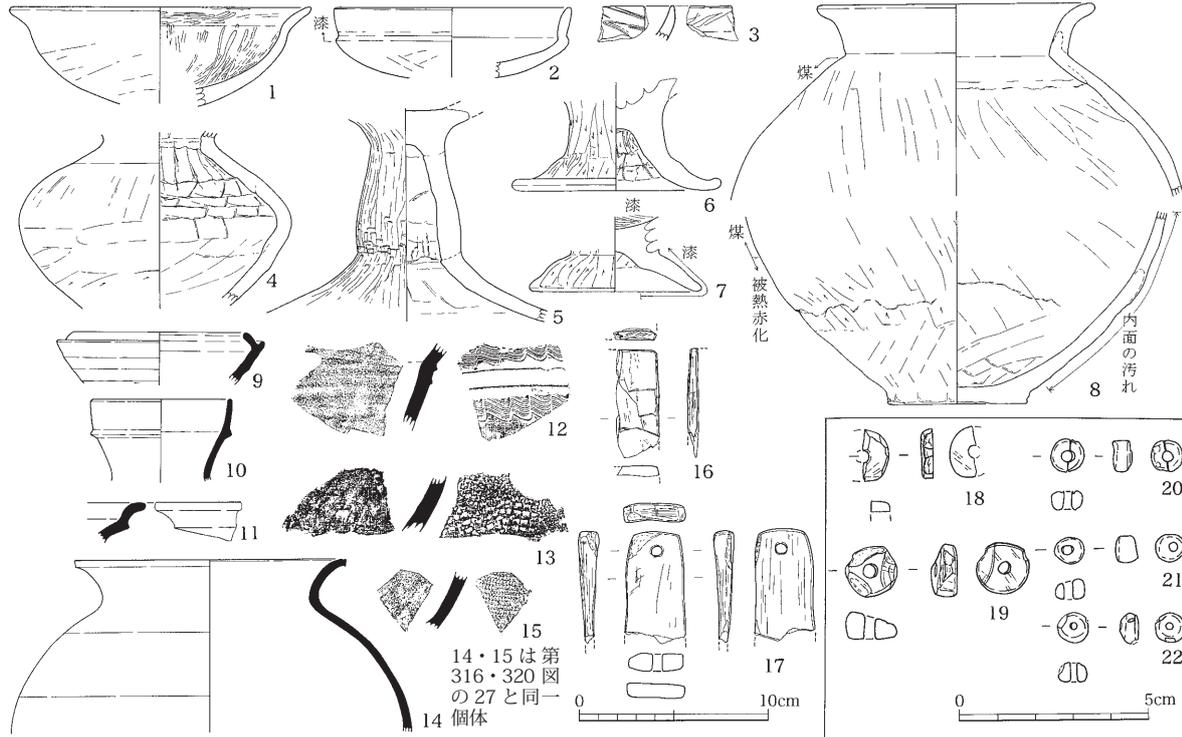
第9節 低地部の古墳時代遺物包含層 (第357図、写真図版61・187)

SG5 区の東部にある低地部分は古墳時代土坑が集中しているため、低地の全土坑間および低地包含層調査グリッド出土土器との接合関係を確認した。低地包含層の「セクション B ライン」で土層中のテフラ検出分析を実施し、下層部から上層部へ順に縄文草創期の男体七本桜軽石、古墳前期の浅間 C 軽石、古墳後期の榛名二ツ岳渋川テフラまたは二ツ岳伊香保テフラ、平安時代の浅間 B テフラ粒子を検出した。また、古環境復原のために 14C 年代測定・植物珪酸体分析・花粉分析も行った (本章の次節に掲載)。B ラインの位置は図示されていないが、13～16 小グリッドおよび 33～37 小グリッドの北壁付近にそれぞれ東西方向の土層観察面があったので、そのどちらかと考えられる。残念ながら低地包含層の土層断面図は所在不明であるが、土層柱状図で概要が分かる (第 358 図)。

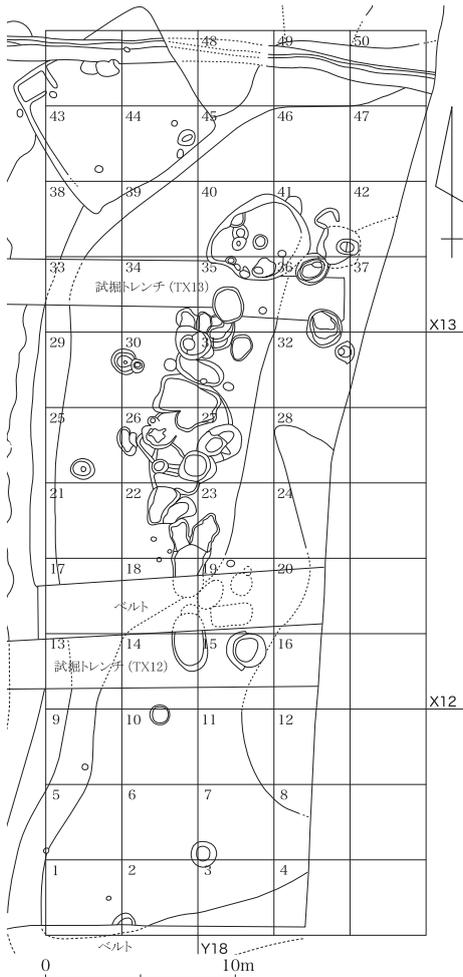
各グリッド (No.1～50) の遺物全体を確認した結果、土師器は壺・甕・小形壺が主体で、高杯などは少ない。容量が少ない小形壺や杯、鉢などはごくわずかで、全形がわかる遺物は少ない。「水を入れる容器」が低地で多く出土していることがわかる。

時期幅は、古墳中期中～後葉の遺物が主体である。西側にある首長居館と並行する時期と言える。低地にある土坑群に含まれる土器同士は、接合はできないが同一個体と思われる大形の土師器壺甕類が複数の土坑に含まれている。全土坑が同時期というわけではないが、中期後葉ころに広い範囲が同時に埋まっている土

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 202 表 権現山遺跡 SG5 区 低地グリッド 遺物出土状況



グリッド	遺物の状況
6	遺物はごくわずかな小破片で、番号を付けて取り上げた遺物はない。
7	番号を付けて取り上げた以外の破片が多い。2～3段階頃で、横俵杯・長胴甕など新しい遺物はない。
8	遺物が多い。2・3段階の遺物が主体で、4段階以降になりそうな遺物はない。
10	遺物ごくわずかで土師器6片。高杯・壺・甕などは2～3段階頃。
11	遺物が多い。壺・甕類が主体で大形壺甕類の底部5点以上、椀形杯・鉢の底部3点以上。高杯少量。2～3段階主体で、4段階のような横俵杯が極少量。これより新しい遺物はない。
12	遺物が多い。大半が土師器で、須恵器は1片。ほぼ2・3段階で、それより新しい遺物なし。
14	遺物はわずかで椀形杯3片のみがあり、3段階頃と推定される。
19	遺物は少なく、番号を付けて取り上げた遺物はない。甕・壺などが多く、2・3段階が主体のようである。弥生土器などが少量混じる。
21	縄文土器2片、土師器椀形杯の体部1片。
23	遺物やや少。壺・甕主体で高杯・椀形杯少量。2・3段階が主体で、確実な4段階以降はない。
24	遺物やや多。2・3段階が大半で、4段階の横俵杯を稀に含む。須恵器1片。縄文・弥生土器極少量。
25	遺物少量。2・3段階ばかりで、新しい遺物はない。
27	遺物やや多。壺・甕主体で椀形杯・高杯・鉢など少量。2・3段階が主体で、それ以降はほとんどない。
28	遺物多く、土師器小片も多い。壺・甕主体で、高杯・椀形杯・鉢など少量。2・3段階が主体。内面同心円当具痕の須恵器類片のような新しい遺物も少量。須恵器壺?口縁部片あり。
29	番号を付けて取り上げた遺物なし。土師器壺・甕類3片と破破片3点のみ出土。
30	遺物少量。壺・甕類、特に小形壺が多く、高杯も比較的多い。
31	遺物やや少。土師器壺・甕・小形壺が主体で、椀形杯・鉢・高杯などはわずかに。2・3段階の遺物。縄文時代の礫器1点以外に混入遺物はない。
32	遺物が多い。壺・甕・小形壺が主体で、椀形杯・鉢・高杯などがわずかに混じる。横俵杯がわずかにあるが、2・3段階が主体で、4段階以降の遺物がわずかに混じている。
33	番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器は2点のみ。縄文早期?の土器片混入。
34	2・3段階と思われる土師器があるが、極少量で詳細不明。旧石器的な黒色安山岩?の剥片1点。
35	遺物少量。番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器壺・甕が主体で、椀形杯・高杯がわずかに混じる。2・3段階で、4段階以降の遺物はない。
36	遺物が多い。壺・甕主体で、高杯・椀形杯などが少量。2・3段階で、新しい遺物はない。
37	遺物少量。壺・甕主体で、高杯・椀形杯少量。2・3段階で、新しい遺物なし。弥生土器片有。
38	番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器は椀形杯片、高杯片など極少量。横俵杯などはない。縄文・弥生土器片あり。
39	土師器なし。縄文時代の条痕土器2点。北側のSI-24に関連する遺物はない。
40	番号を付けて取り上げた遺物はない。土師器は壺・甕・高杯・椀形杯など極少量。古墳後期の土師器はない。縄文または弥生土器片少量。
41	遺物少量。壺・甕片が主体で、椀形杯・高杯などが少量。2・3段階と見られる。
42	遺物少量。土師器は2・3段階頃の壺・甕・椀形杯などのほか、7段階頃の破片が混じる。近世以降の陶器片や一定量の弥生土器もあり、各時期が混じている。
44	遺物はわずかで、壺・甕・椀形杯・高杯などが同量程度あり、2・3段階頃。
45	土師器なし。縄文土器片のみ出土。
47	土師器なし。縄文土器片のみ出土。

第 357 図 権現山遺跡 SG5 区 低地グリッド配置 および遺物

坑が多いといえる。

3は内外面に刻線がある杯小破片。10は口縁端部が丸味を持つ初期須恵器の壺。器台(12)は突線が高く、黒色の自然釉がかかる良質の製品で、本遺跡北部のSG1区(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.340)や、北関東自動車道調査A区SI-141(谷中・大島編2001 p.214)、本書146図に掲載したSG10区SI-111などの器台破片とは別個体である。14と15は胴部上半をロクロナデ、下半を細かい格子叩きにする陶質土器で、SI-22などにある胴部下半を含めて同一個体と思われる。

古墳中期末葉以降の遺物は稀である。中期末葉の土師器杯、後期末～終末期前半ころの土師器杯・短脚高杯や須恵器杯・瓶が少量ある。低地の使用、ないしは祭祀など何らかの行為があった痕跡であろう。古い遺構の覆土に入り込んだように出土する遺物が多い。中期末葉の土坑はあるかもしれないが、後期末葉頃の遺構はなさそうである。時期不明のSD-108出土破片と同一個体の須恵器瓶が1片ある(第369図1)。9は試掘トレンチTX15出土の須恵器杯身(第356図9)と胎土・焼成・口径がよく対応している。13は古墳時代終末期ころの在産須恵器甕で、粗い真格子叩き調整を行う。白玉(18・19)は材質が滑石から粘板岩に転換した古墳後期の遺物。土製丸玉(20～22)は漆仕上げをしているので、おそらく後期～終末期のものであろう。

砥石は詳しい時期を決められない。有孔砥石(17)は本遺跡南部のSG10区SI-37にある。また、穿孔が貫通しない砥石は本遺跡北部の4区SI-17・31にある(『東谷・中島地区遺跡群』10)。

第203表 権現山遺跡SG5区 低地部の古墳時代遺物包含層 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 3.7	外面口縁部ヨコナデ、体部丁寧なナデ。内面口縁～体部ヨコナデ。内面には放射状のミガキがごく疎らに施されているようにも見えるが、明確ではない。内面全体・外面口縁部漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄橙 緻密 赤粗粒と白細粒微量 やや硬質	口～体1/4周 低地一括北
2 土師器 杯	口 復 15.8 高 残 5.2	内斜口縁。外面口縁部ヨコナデ、体部は表面剥落により調整ははっきりしないが、ヘラナデと見られる。内面口縁～体部ヨコナデのち口縁部横方向・体部放射状のミガキ。	5YR7/8 橙 やや緻密 白・赤・砂粗～細粒 微量 硬質	口～体1/2周 低地一括北、12.5-18表 採
3 土師器 杯	高 残 1.9	半球状の杯口縁部片。内外面とも口縁部ヨコナデのち線刻。外面は斜位に施される細い線刻6本あり、各2本ずつが交わる。左端の2本は横方向のものが先、中央と右のものはそれぞれ右側が先に施される。内面はやや太い2本一組の線であり、外面の線刻方法とは異なる。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや緻密 白・赤細～微粒少 硬質	口縁部破片
4 土師器 小形壺	高 残 9.3 胴 14.3	胴部は丸味を持ち、ややそろばん玉状に張る。外面胴部ナデのち上端ヨコナデ・下端ケズリ。内面頸部ヘラナデ、胴部ヘラナデで、上半には紐積痕としぼり目が顕著。紐積一段ごとにヘラナデを行っている。胴部下半には積み上げ休止による接合面があるが、痕跡はあまり明確ではない。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 白・砂粗～微粒少、 赤・黒細～微粒微量 やや硬質	胴一部欠 27、30、32、49、52、53、 55、57、58、59、60、61、 62、6-12
5 土師器 高杯	高 残 11.3	柱状脚。外面杯部底部ナデ・脚部上半～中位縦方向のケズリのち杯部底部～脚部中位縦方向のミガキ。脚部柱状部下端付近には、ミガキを施す工具の当たりが集中する。内面杯部底部ナデと見られるが、ミガキの可能性もあり。杯部は円盤状の底部に粘土を積み上げて作るもの。脚部上半荒いナデ、中位ヘラナデで、柱状部下端に接合痕あり。	10YR8/3 浅黄橙 やや緻密 赤粗～細粒多、黒・ 砂粗～微粒少、白粗粒微量 やや軟質	杯底～脚中位一部欠 35
6 土師器 高杯	高 残 5.9 脚 復 11.0	短脚。外面脚部下半ヨコナデのち上半～下半縦方向のケズリ。内面脚部上半ケズリ、下半ヘラナデのちヨコナデで、紐積痕残る。上端欠損部側面付近は、接合面から欠損している。	10YR8/2 灰白 緻密 白細粒少、黒・砂細粒微量 やや硬質	脚上半完存、下半1/3 周 低地一括南
7 土師器 高杯	高 残 3.9 脚 復 9.0	短脚。外面脚部ヨコナデのち縦方向の丁寧なケズリ。内面杯部底部密なミガキ、脚部上端ケズリ、中位～下半ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 緻密 白・赤・砂細粒微量 やや軟質	杯底1/3周、脚1/3周 低地
8 土師器 甕	口 復 14.6 高 残 19.5 底 7.2	外面胴部上半および下端ナデ、胴部下半ケズリ。胴部下半には積み上げ休止による接合面があり、この部分にケズリが施されるが、調整は荒い。底部ナデで、突出した平底であり、外周寄りがドーナツ状に高くなっている。口縁部内外面ヨコナデで、積み上げ休止による接合面あり。胴～底部ヘラナデで、胴部下半の接合面は丁寧に調整される。外面胴部中位～上半煤付着。外面口縁部と底部付近被熱により赤変。	10YR6/4 にぶい黄橙 やや緻密 白粗～細粒少、白・ 赤礫微量 硬質	口～胴1/3周、底一部欠 2、3、6、13、14、15、16、 17、18、19、36、37、38、 39、41、42、44、45、63、 64
9 須恵器 杯	口 復 9.0 最大 復 11.0 高 2.7	口縁～体部内外面ロクロナデ。外面残存部下端はケズリおそらく回転ヘラケズリ。湖西窯産の可能性もある。	5YR5/1 灰 緻密 白微粒微量 硬質	口～体1/5周 低地
10 須恵器 壺	口 復 7.4 高 4.3	薄手で硬質。口縁部内外面ロクロナデで、外面中位に稜あり。口縁部上半はやや内彎する。断面は赤灰色。内外面の全体に黒色の自然釉が均一に付着する。	N3/ 暗灰 やや緻密 白粗～細粒少 硬質	口1/4周 36
11 須恵器 不明	口 復 19.0 高 残 1.6	二重口縁。口縁部内外面ヨコナデで、内面にはわずかに自然釉付着。断面は赤灰色。	N6/ 灰 緻密 白礫～細粒微量 硬質	口縁部破片 グリッド37 No.16

第8章 権現山遺跡 SG5 区

12 須恵器 器台	高 残 4.6	杯部体部片。外面には2条の明確な稜があり、その上下に波状文を施す。内面横方向のナデ。外面全体に均一な黒色の自然袖付着。波状文は幅1cmで、11本の楕円。	N3/ 暗灰 緻密 白細～微粒微量 硬質	杯部体部片 低地
13 須恵器 甕	高 残 3.0	外面胴部格子タタキ、内面胴部同心円文当具痕のちナデで、わずかに当具の痕跡が残る。酸化焰焼成に近く、断面には灰白色(2.5Y8/2)、橙色(7.5YR6/6)の部分が薄い層状に見られる。	5Y5/1 灰 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒 細粒微量 やや軟質	胴部破片 8
14 陶質土器 壺	口 復 14.3 高 残 9.1 最大 復 21.0	器壁薄く、破面は赤灰色。口縁端面は上下にわずかに拡張した外向きの平坦面となる。内外面口クロナデ。低地遺物包含層の15やSI-22・24・SK-206出土の胴下部と同一個体と考えられるが接合できない。 [注記]グリッド7 10、G27、グリッド28、テイチャー括北、SI-24	5PB5/1 暗青灰 やや粗い 白粗～細粒少 硬質	口縁部はG7とG8、頸部はG27。胴部は低地北部とSI-19とSI-24の各1片が接合 口1/8周、頸1/4周 注記は左欄
15 陶質土器 壺	高 残 3.1	外面胴部細かな格子タタキ。内面胴部ナデ。当て具の痕跡と見られる凹凸が器壁の歪みとして残るが、内面は丁寧にナデ消されている。低地遺物包含層の14(上半部)やSI-22・24・SK-206出土の下半部と同一個体と考えられる。	2.5Y5/1 黄灰 やや緻密 白微粒少、白礫～細 粒微量 硬質	胴部破片 83
16 石器 砥石	長 残 5.7 幅 残 2.3 厚 残 5.5	表面・右側面・上面の3面が部分的に残存する。残存部はすべて平滑で、擦痕もわずかに確認できる程度。棒状・小形の砥石と見られる。残存重量11.0g。	10G4/1 暗緑灰 緻密 粘板岩	破片 47
17 石器 砥石	長 残 5.9 幅 3.2 厚 1.0	薄い棒状で、上端に1孔あり。4面とも使用されたと見られ、4面すべてに縦方向の研磨痕が残る。上端は成形時のままだが、丁寧に成形されている。孔は両面穿孔と見られ、中央がやや高く削り残される。表裏両面付近の径約6.2mm、中央部5.8mm。上端の面中央と左側面上端には、孔と平行する明確な線刻あり。紐をかけて掲げる際のキズか。残存重量25.3g。	5Y8/2 灰白 緻密 流紋岩質凝灰岩	破片 34
18 石製品 白玉	径 1.33 厚 残 0.37 重 残 0.5	表側は節理面からの剥離面そのまま、研磨されていない。側面は切削加工時の痕跡を残す。残存部で見ると、孔径2.8mm。表面はやや磨滅している。	N5/ 灰 緻密 粘板岩	破片 低地グリッド出土か
19 石製品 白玉	径 1.37 幅 1.35 厚 0.70 重 1.2	表裏両面とも節理面からの剥離面そのままであり、研磨されていない。側面は切削加工時の剥離および工具痕をそのまま残す。側面左下・左上には、鉄分が沈着した古い節理面あり。厚さは一定しておらず、側面観は楔形を呈する。裏面からの穿孔と見られ、裏面側孔径3.1mm、表側孔径2.9mm。表面は全体に磨滅する。	N4/ 灰 緻密 粘板岩	完形 低地グリッド出土か
20 土製品 丸玉	径 0.80 厚 0.45 重 0.25	裏側からの焼成前の穿孔と見られ、孔の周囲が裏側ではくぼみ、表側では突出する。孔径裏側2.1mm、表側1.9mm。全体漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 微粒微量 硬質	完形 低地グリッド出土か
21 土製品 丸玉	径 0.70 厚 0.52 重 0.23	表側からの焼成前の穿孔と見られる。表側孔径2.3mm、裏側1.9mm。全体漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 緻密 微粒微量 硬質	完形 低地グリッド出土か
22 土師器 丸玉	径 0.80 厚 0.50 重 0.24	孔径1.5mmで、焼成前の裏側からの穿孔と見られ、孔の周囲が裏側ではくぼみ、表側ではやや突出する。全体漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄橙 緻密 砂微粒微量 硬質	ほぼ完形 低地グリッド出土か

第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テフラと古環境

8.10.1. 分析調査の視点と考古学的評価

SG5 区東側の低地部に群在する古墳時代土坑のうち SK-190・191 の2基(第347・348 図)でテフラ検出分析を実施し、白色軽石(Hr-FA または Hr-FP) と灰白色軽石(As-C) を検出した。Hr-FA と Hr-FP の区別に関しては、杉村遺跡北関東自動車道調査区や立野遺跡5 区などの周辺遺跡において古墳中期竪穴建物跡の堆積土上部でテフラ層を検出できる状況から考えて、考古学的には白色軽石を古墳後期初頭の Hr-FA と考えることが妥当である。

東部にある低地古墳時代遺物包含層では、「セクションBライン」で土層中のテフラ検出分析を実施し、下層部から上層部へ順に縄文草創期の男体七本桜軽石、古墳前期の浅間C 軽石、古墳後期の榛名二ツ岳渋川テフラまたは二ツ岳伊香保テフラ、1108 年の浅間B テフラ粒子を検出した。浅間C 軽石と男体七本桜軽石の中間付近に堆積している腐植質土壌で放射性炭素年代測定を実施した結果は、5190 ± 70BP であった。

水田稲作の有無と植生環境を調査する目的で、包含層堆積層の植物珪酸体分析と花粉分析を実施した。浅間C 軽石直下層で少量のイネ珪酸体があり、SG5 区低地や東方のSG2 区・SG9 区で少量の弥生後期土器(『東谷・中島地区遺跡群』10 の第44 図102・105～109)や古墳前期土師器片(本書第6・9 章)、北東側台地上にある杉村遺跡の北関東自動車道調査区で古墳前期末の竪穴建物跡3 棟が確認されていることとの関係が推定される。ネザサ節やメダケ節などの竹笹類が増加していることから低地が乾燥化したと考えられるので、水田はSG5 区よりもさらに低地側に想定されるかもしれない。発掘調査では、各時代の水田遺構は確

認められていない。古墳前期から古墳後期にかけて、ナラ林やカシ林（コナラ亜属やアカガシ亜属）が減少してマツの二次林が増加したことが花粉から推定されることは、古墳中期・後期にこの地域で大きな集落が形成されたこととよく対応している。この大規模集落に対応する時期の層ではイネ珪酸体が検出されていないので、仮に水田が営まれていたとしても SG5 区から少し離れた地点であったことが想定できる。平安時代末の浅間 B テフラ下層には少量のヒエ属型珪酸体があるが、栽培種か野生種かは不明である。浅間 B テフラに対応する 12 世紀前後の遺構や遺物は、確認されていない。

古環境研究所に委託して実施したテフラ・植物珪酸体・花粉分析と放射性炭素年代測定の結果を以下に掲載する。

8.10.2. 権現山遺跡 SG5 区低地の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

栃木県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、日光火山群のほか、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層や遺構が検出された権現山遺跡 SG5 区においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析や屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、低地セクション B ライン、190 号土坑、191 号土坑の 3 地点である。

2. 土層の層序

(1) 低地セクション B ライン

低地セクション B ラインでは、白色軽石混じり砂礫層（層厚 3 cm 以上、軽石の最大径 14mm、礫の最大径 112mm）の上位に、下位より砂混じり灰色土（層厚 19cm）、暗灰色粘質土（層厚 9 cm）、暗灰色土（層厚 8 cm）、黒灰色土（層厚 5 cm）、灰色土（層厚 13cm）、灰色粗粒火山灰混じりで若干色調の暗い灰色土（層厚 10cm）、白色粗粒火山灰に富む黒灰色土（層厚 6 cm）、礫混じり黄灰色砂層（層厚 3 cm）、白色粗粒火山灰や灰色粗粒火山灰を多く含む黒灰色土（層厚 8 cm）、若干色調が暗い灰色土（層厚 7 cm）、褐灰色土（層厚 29cm）、暗灰色土（層厚 10cm）、黄灰色土（層厚 21cm）、暗灰褐色土（層厚 8 cm）が認められる（第 358 図 1）。

(2) 190 号土坑〔SG5 区 SK-190〕

190 号土坑の覆土は、下位より暗灰褐色土（層厚 9 cm）、黒っぽい暗灰色土（層厚 7 cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚 17cm）、暗灰褐色土（層厚 16cm）からなる（第 358 図 2）。

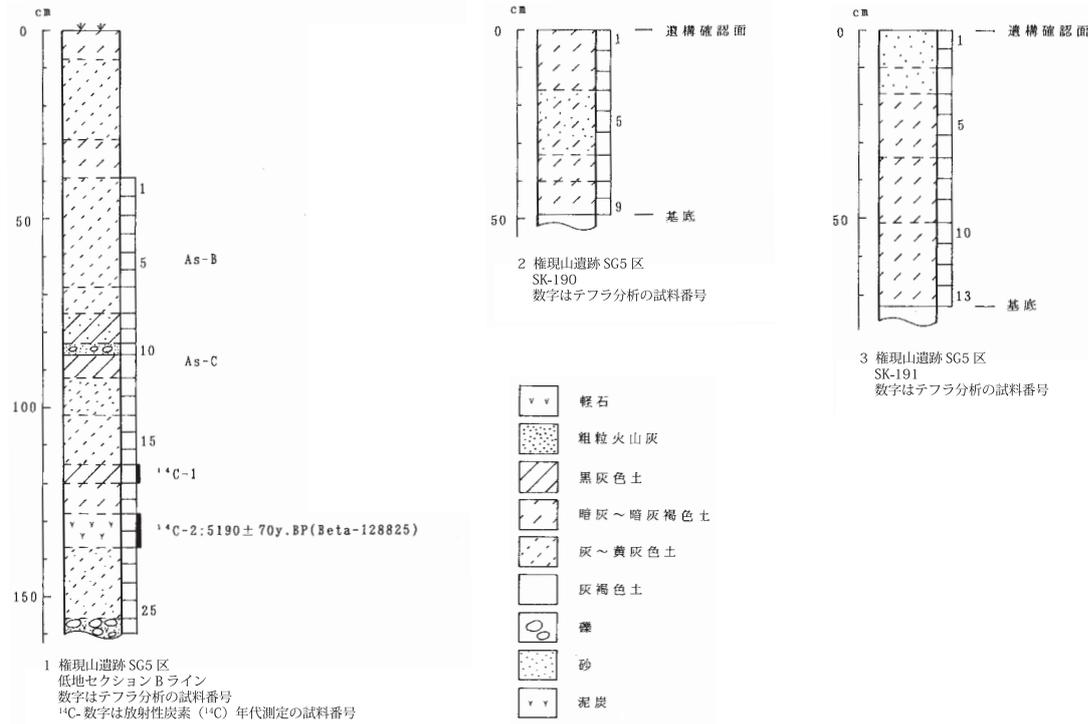
(3) 191 号土坑〔SG5 区 SK-191〕

191 号土坑の覆土は、下位より暗灰色土（層厚 22cm）、暗灰褐色土（層厚 17cm）、暗灰色土（層厚 17cm）、白色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚 7 cm）、白色粗粒火山灰を多く含む灰褐色土（層厚 10cm）からなる（第 358 図 3）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

低地セクション B ライン、190 号土坑、191 号土坑の 3 地点において採取された 26 点の試料について、示標テフラの降灰層準を求めるためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。



第 358 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部および SK-190・191 の土層柱状図とテフラ分析試料

- 1) 試料 15g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80 ° C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 204 表に示す。低地セクション B ラインでは、試料 26 に白色軽石（最大径 161mm）が少量含まれている。試料 15 には、スポンジ状に良く発泡した白色軽石（最大径 0.9mm）が少量含まれている。試料 11 には、スポンジ状に比較的良好に発泡した灰白色軽石（最大径 1.8mm）が多く含まれている。試料 10 から 3 にかけて、あまり発泡の良くない白色軽石（最大径 3.8mm）が少量ずつ認められる。さらに、試料 7 より上位の試料に、比較的良好に発泡した淡灰褐色軽石（最大径 1.2mm）が比較的多く含まれている。

これらの軽石のうち、あまり発泡の良くない白色軽石については、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められることから、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川

第 204 表 権現山遺跡 SG5 区におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
低地セクション B ライン	1	++	淡灰褐	1.1
	3	++	淡灰褐>白	1.1,1.3
	5	++	淡灰褐>白	1.2,1.3
	7	++	淡灰褐>白	1.2,3.8
	9	+	白>灰白	1.3,1.3
	10	+	白	1.8
	11	+++	灰白	1.8
	13	+	灰白	0.9
	15	+	白	0.9
	17	-	-	-
19	-	-	-	
21	-	-	-	
23	-	-	-	
25	-	-	-	
26	+	白	16.1	
190 号土坑	1	+	白>灰白	2.1,1.2
	3	+	白>灰白	1.3,1.0
	5	++	白>灰白	2.3,1.3
	7	+	白>灰白	1.2,1.1
	9	+	白>灰白	1.3,1.0
191 号土坑	1	++	灰白>白	1.3,1.3
	3	++	白>灰白	2.8,1.3
	5	+	灰白	1.3
	7	+	灰白>白	1.2,1.3
	9	++	灰白	2.0
	11	++	白	1.9

++++:とくに多い, ++++:多い, ++:申程度, +:少ない, -:認められない, 最大径の単位は, mm.

テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) または 6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。

190 号土坑では、試料 9 以上の試料にスポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石 (最大径 1.9mm) と、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径 2.3mm) が認められる。これらの軽石のうち、あまり発泡の良くない白色軽石については、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められることから、Hr-FA または Hr-FP に由来すると考えられる。

191 号土坑では、試料 11 にあまり発泡の良くない白色軽石 (最大径 1.9mm) が比較的多く認められる。この軽石の斑晶には、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められることから、Hr-FA または Hr-FP に由来する可能性が考えられる。試料 9 より上位では、Hr-FA に由来する軽石のほかに、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

土層の観察やテフラ検出分析の結果、検出されたテフラ粒子と、示標テフラとの同定精度を向上させるために、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) によりテフラ粒子の屈折率測定を行った。測定の対象となった試料は、低地セクション B ラインの試料 26、11、5 および 191 号土坑の試料 11 の 4 点である。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第 205 表に示す。低地セクション B ラインの試料 26 の火山ガラス (n) の屈折率は、1.501-1.503 である。また重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石や角閃石が認められる。斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.710-1.713 である。この軽石は、その特徴から約 1.2 ~ 1.3 万年前 *1 に男体火山から噴出した男体七本桜軽石 (Nt-S, 原田, 1943, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。

試料 11 の火山ガラス (n) と斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.514-1.519 と 1.706-1.710 である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは、4 世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石 (As-C, 新井, 1979) に由来すると考えられる。試料 5 の火山ガラス (n) の屈折率は、1.523-1.530 である。斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.706-1.710 である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (As-B, 新井, 1979) と考えられる。

191 号土坑の試料 11 に含まれる火山ガラス (n)、斜方輝石 (γ)、角閃石 (n_2) の屈折率は、順に 1.501-1.504、1.706-1.711、1.672-1.678 である。これらの特徴から、この試料に含まれるテフラは、Hr-FA あるいは Hr-FP および As-C に由来すると考えられる。

以上のことから、190 号土坑および 191 号土坑の年代に関しては、いずれも少なくとも Hr-FA 降灰後の可能性が考えられる。

5. 小結

権現山遺跡 SG5 区において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より男体七本桜軽石 (Nt-S, 約 1.2 ~ 1.3 万年前 *1)、浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭) または榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 6 世紀中葉)、浅間 B テフラ (As-B,

第 205 表 権現山遺跡 SG5 区における屈折率測定

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n_2)
低地セクション	5	1.523-1.530	opx>cpx,(ho)	1.706-1.710	-
B ライン	11	1.514-1.519	opx>cpx	1.706-1.710	-
	26	1.501-1.503	opx>cpx,ho	1.710-1.713	-
191 号土坑	11	1.501-1.504	opx>ho,cpx	1.706-1.711	1.672-1.678

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による。

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石. 重鉱物の () は、量の少ないことを示す。

第8章 権現山遺跡 SG5 区

1108 年) に由来するテフラ粒子を検出することができた。

*1 放射性炭素 (^{14}C) 年代。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定 - テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 - 研究対象別分析法」, p.138-148.
原田正夫 (1943) 関東ロームの生成に就いて. 東大土肥教室報告, 3, p.1-140.
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, P.297-312.
早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴 - とくに御岳第 1 テフラより上位のテフラについて -. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

8.10.3. 権現山遺跡 SG5 区低地における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料	採取地点	種類	乾燥重量	前処理・調整	測定法
No. 2	低地セクション Bライン	腐植質土壌	368.1g	酸洗浄 (低濃度処理)	β 線法

2. 測定結果

試料	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代	測定 No. Beta-
No. 2	5120 ± 70	-20.7	5190 ± 70	交点: BC3980 2 σ : BC4220 ~ 3915, BC3880 ~ 3800 1 σ : BC4045 ~ 3955	128825

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950 年 AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代 (西暦) を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は 10,000 年 BP より古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率)・2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

8.10.4. 権現山遺跡 SG5 区低地における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、おもにイネ科植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、低地セクション B ラインから採取された試料 1～8 の計 8 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃ で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-6}g) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は 2.94 (種実重は 1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は 8.40、ヨシ属 (ヨシ) は 6.31、ススキ属 (ススキ) は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 206 表および第 359 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)、ウシクサ族 B (大型)、B タイプ

[イネ科 - タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

第 206 表 権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

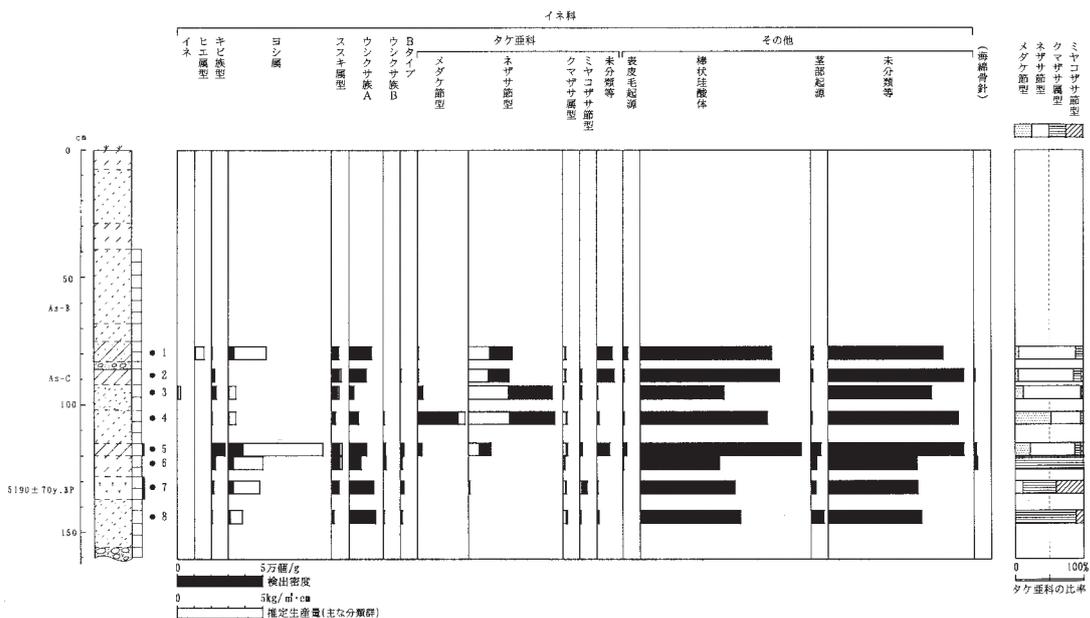
分類群	学名	地点・試料	低地セクションBライン										
			1	2	3	4	5	6	7	8			
イネ科	Gramineae (Grasses)												
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)				7								
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		7										
キビ族型	Paniceae type		21	7	29	7	80	25	14	7			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		35		7	7	87	32	29	13			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		35	47	36	21	51	51	36	13			
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type		132	100	29	57	102	70	144	155			
ウシクサ族 B	Andropogoneae B type					7	15	19		7			
Bタイプ	B type			7				22	13	22	13		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)												
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		7	7	29	241	22						
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		257	239	491	504	131				7		
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		21	20	7	28	29	13	22	27			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>			13	14		15		43	7			
未分類等	Others		90	100	7	14	73		7	13			
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin		28	7		7	22	6					
棒状珪酸体	Rod-shaped		771	818	491	746	943	463	554	587			
茎部起源	Stem origin		14	13		7	58	32	29	74			
未分類等	Others		674	791	606	760	791	520	525	546			
(海綿骨針)	Sponge			7			15	19					
植物珪酸体総数	Total		2091	2168	1754	2408	2437	1244	1431	1464			

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)			0.21									
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	0.58											
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	2.19		0.46	0.45	5.49	2.00	1.81	0.85				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.43	0.58	0.45	0.26	0.63	0.63	0.45	0.17				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.08	0.08	0.34	2.80	0.25							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.23	1.15	2.36	2.42	0.63			0.03				
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	0.16	0.15	0.05	0.21	0.22	0.10	0.16	0.20				
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>		0.04	0.04		0.04		0.13	0.02				

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	5	5	12	52	22							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	84	81	84	45	55		11					
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	11	11	2	4	19	100	50	91				
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>		3	2		4		40	9				



第 359 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体分析結果

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) イネ

イネは、As-C直下層（試料3）から検出された。密度は700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを大きく下回っている。ただし、As-C混層（試料2）やその上層（試料1）からはイネがまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) ヒエ属型

ヒエ属型は、As-Bの下層（試料1）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか, 1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

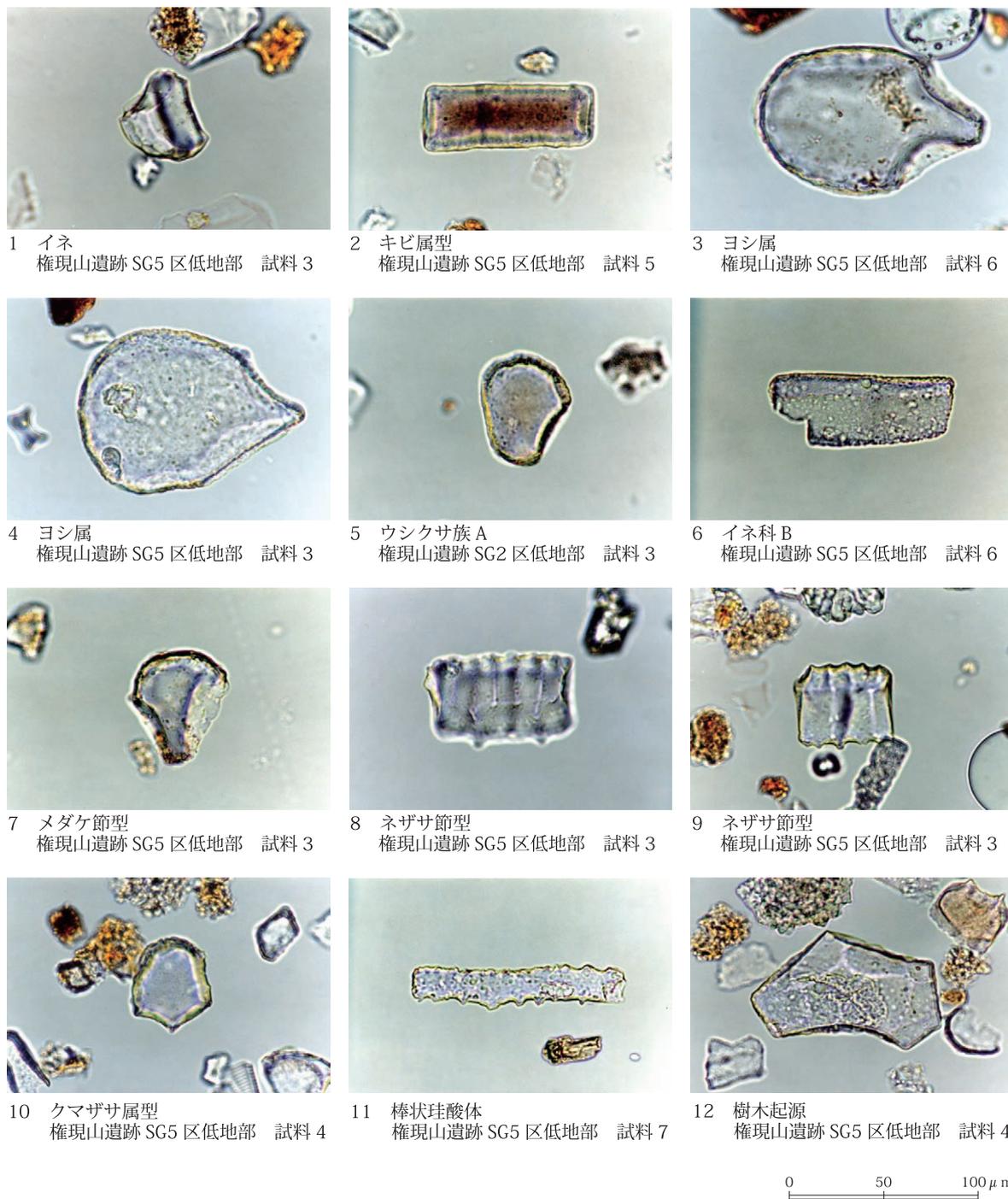
試料8から試料5までの層準では、棒状珪酸体やイネ科（未分類等）が多量に検出され、ウシクサ族Aも比較的多く検出された。また、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、イネ科Bタイプ、クマザサ属型なども検出された。試料4ではネザサ節型やメダケ節型が大幅に増加しているが、ヨシ属は減少している。おもな分類群の推定生産量によると、試料5より下位ではヨシ属が優勢であり、試料4より上位ではネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、放射性炭素年代測定で 5190 ± 70 yBP（暦年代でBC3980年頃）の年代値が得られた暗灰色土層およびその上下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の台地部などにはススキ属やチガヤ属などが分布していたと推定される。その後、As-Cの下層の時期には、ヨシ属が減少してネザサ節やメダケ節などの竹笹類が増加したと考えられる。この植生変化は、堆積環境の乾燥化を示しているものと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉）直下層からイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、As-Cの上層ではヒエ属（ヒエ）が栽培されていた可能性も認められた。

縄文時代早期頃の調査区は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の台地部などにはススキ属やチガヤ属などが分布していたと推定される。その後、As-Cの下層の時期には、ネザサ節やメダケ節などの竹笹類を主体とする比較的乾燥した堆積環境に移行したものと考えられる。



第 360 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部における植物珪酸体の顕微鏡写真

文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第 2 号, p.27-37.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第 31 号, p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

8.10.5. 権現山遺跡 SG5 区低地における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、低地セクションBラインから採取された試料1～8の計8点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す(第361図)。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

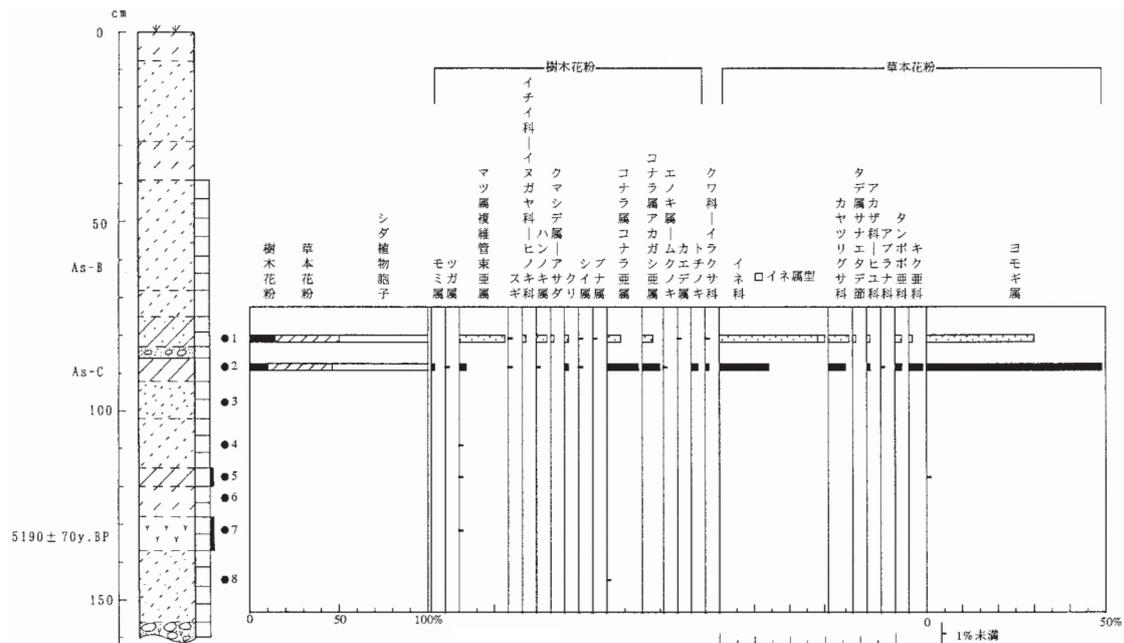
以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉9、シダ植物孢子2形態



第 361 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部における花粉組成図(花粉総数が基数)

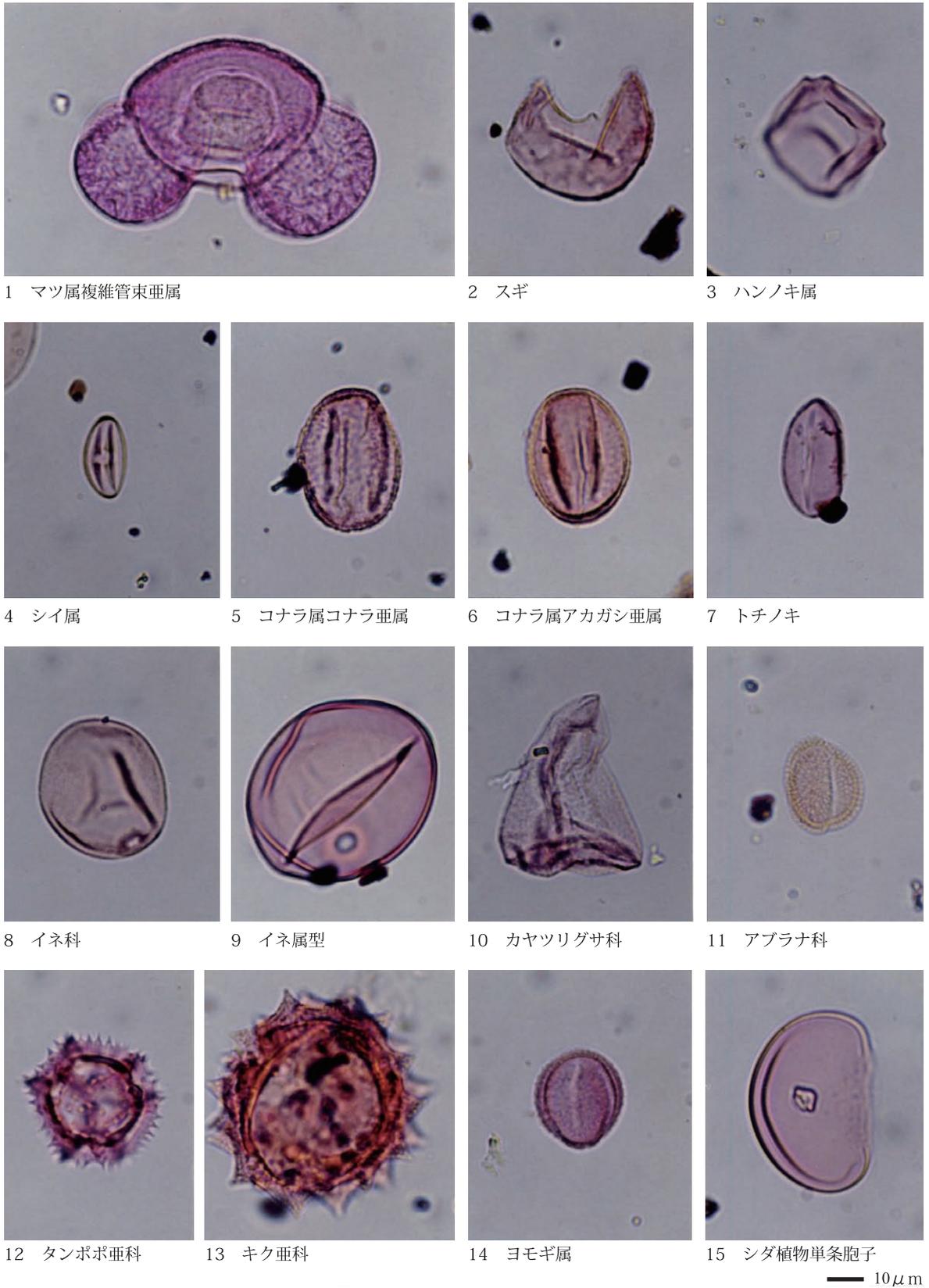
第 207 表 権現山遺跡 SG5 区 低地部における花粉分析結果

学名	分類群	低地セクションBライン							
		1	2	3	4	5	6	7	8
Arboreal pollen	樹木花粉								
<i>Abies</i>	モミ属		3						
<i>Tsuga</i>	ツガ属		1						
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	25	5		1	1		2	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1	1						
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2							
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	6	2						
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	2							
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	3						
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1	2						
<i>Fagus</i>	ブナ属	1							
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	8	23						1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	6	13						
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		1						
<i>Acer</i>	カエデ属	1							
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		4						
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	3						
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	53	36						
<i>Oryza type</i>	イネ属型	4	1						
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	13						
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	2							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	3						
Cruciferae	アブラナ科		2						
Lactucoideae	タンポポ科	4	4						
Asteroideae	キク亜科	2	10						
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	57	123			1			
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	186	287	4	2	1		1	
Trilate type spore	三条溝胞子	6	8						
Arboreal pollen	樹木花粉	55	58	0	1	1	0	2	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	3	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	135	192	0	0	1	0	0	0
Total pollen	花粉総数	191	253	0	1	2	0	2	1
Unknown pollen	未同定花粉	1	5	0	1		0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	192	295	4	2	1	0	1	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

の計 27 である。これらの学名と和名および粒数を第 207 表に示し、主要な分類群を第 362 図の写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ



第 362 図 権現山遺跡 SG5 区 低地部の花粉・孢子遺体

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科 - イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

上位の試料 1、2 からは比較的多数の花粉が検出されたが、下位の試料 3～8 からは花粉がほとんど検出されなかった。試料 1、2 では樹木花粉より草本花粉とシダ植物孢子の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科とヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ亜科、アカザ科 - ヒユ科が伴われる。試料 1 ではイネ属型が出現する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属が優占し、コナラ属アカガシ亜属、ハンノキ属などが伴われる。上位の試料 1 ではマツ属複維管束亜属の出現率が高い。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

放射性炭素年代測定で 5190 ± 70 yBP (暦年代で BC3980 年頃) の年代値が得られた暗灰色土層の下層から浅間 C 軽石 (As-C, 4 世紀中葉) の下層にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。これは、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境によって、花粉等の有機質遺体が分解されたためと考えられる。

As-C 混層の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科を主にカヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ亜科、アカザ科 - ヒユ科などの草本が生育する、比較的乾燥した人里の環境であったと考えられ、周辺には水田が分布していたと推定される。また、周辺地域にはナラ林 (コナラ属コナラ亜属) やカシ林 (コナラ属アカガシ亜属) などの森林が分布していたと考えられる。

As-C の上層の時期には水田が拡大したと考えられ、周辺地域ではナラ林やカシ林が減少して、マツ (マツ属複維管束亜属) の二次林が増加したと推定される。

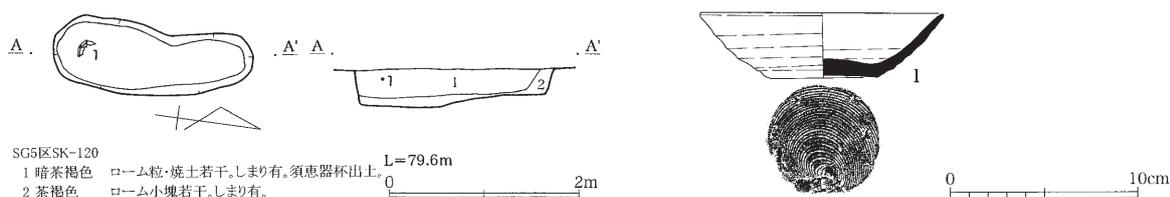
文献

- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花形形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.
 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.

第 11 節 平安時代の土坑

SG5 区 SK-120 (第 363 図、写真図版 53・187)

SG5 区南部の台地平坦面、9.5-17.5・18.0 グリッドに位置する。重複する遺構はない。周辺に古代の遺構はない。東 2m に古墳時代土坑 SK-121 と時期不明の SK-122 がある。平面形は長楕円形で、ひょうたん形に少しくびれを持つ。中軸線は N-0° - E で、長径 2.09 × 短径 0.55m、深さ 0.38m である。底面はほぼ平



第 363 図 権現山遺跡 SG5 区 SK-120 遺構・遺物

第 208 表 権現山遺跡 SG5 区 SK-120 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 杯	口 12.8 高 3.6 底 5.4	外面口縁～体部ロクロナデ、底部糸切りで平底。内面口縁～底部ロクロナデ。使用のためか、内面は平滑になっている。三義窯産。	2.5Y7/2 灰黄 やや緻密 白・灰色礫～細粒と 黒粗～細粒微量 やや硬質	底上 35cm 口～体 1/2 周、底完存 1

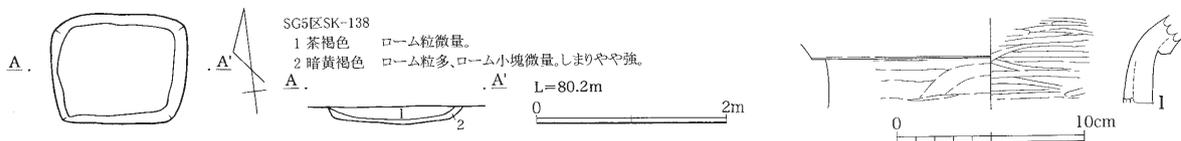
坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土上層に若干ではあるが焼土を含む。遺物は、栃木県西部の三義山麓窯跡で生産された 9 世紀後葉の須恵器杯が 1 点だけ出土した。この杯は側面を上に向けて遺構確認面に出た状態であり、約半周を欠損して破面が磨滅していないので、埋没時には全周が残っていたのかもしれない。調査時の写真を見ると、径 5～10cm 前後の礫が覆土中に数個入っている。

第 12 節 中世～近世の土坑

SG5 区 SK-138 (第 364 図、写真図版 53)

SG5 区中央の 15.0-16.5 グリッドに位置する。重複する遺構はない。時期不明の掘立柱建物跡 SB-154 が北側に、時期不明の土坑 SK-139 が南に近接してある。平面形は隅丸長方形で、中軸線は N-8°-E である。規模は長径 1.45 × 短径 1.12m、深さ 19cm である。底面はほぼ皿状で、壁はなだらかに立ち上がる。覆土はレンズ状の自然堆積で、下層ほどローム粒の混入が顕著である。

遺物は図示した甕頸部片があり、この甕と胎土・焼成がよく類似した大形器種と思われる胴部の小破片も図示以外に 10 点ある。中世～近世の瓦質土器でも壺や火鉢の内面を磨く場合がある（池田 2010, 遺物編 p.117）。色調・焼成は土師質に近いが、非常に硬く焼成されていて古墳時代や古代の土師器ではないので、中世から近世の「瓦質土器」としておく。図示以外の混入遺物として、古墳時代中期の可能性が高い土師器片（椀形杯、「ハ」の字形脚部の高杯、胴部の小さな小形壺、壺甕類）も少量含み、模倣杯はない。



第 364 図 権現山遺跡 SG5 区 SK-138 遺構・遺物

第 209 表 権現山遺跡 SG5 区 SK-138 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 瓦質土器 甕	高 残 4.7	外面口縁～頸部横方向のナデで、口縁部は粘土の貼付により複合口縁状となる。内面口縁～頸部ヨコナデの横方向のミカキ。外面頸部復元径 17.2 cm。	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 白・赤・透明粗～細 粒少、白礫と砂粗粒微量 硬質	口～頸 1/6 周

第 13 節 中世～近世の溝状遺構

SG5 区 SD-133 (第 365 図下、写真図版 54)

SG5 区南部の 10.0-17.5・18.0 グリッドにあり、東西両側は調査区外へ伸びる。古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）SX-118 の北側を切る。東部は時期不明の SD-134 へと合流する関係にあるが、同時存在か、時間差を持って重複するのかわかりません。

溝幅 22～34cm、残存する深さは 6～11cm で、底面が西から東へ傾斜し、標高は西端で 79.39m、東端で 79.29m。覆土は単層で、テフラの層や粒はみられず、炭化物を少し含む。遺物は出土しなかった。重

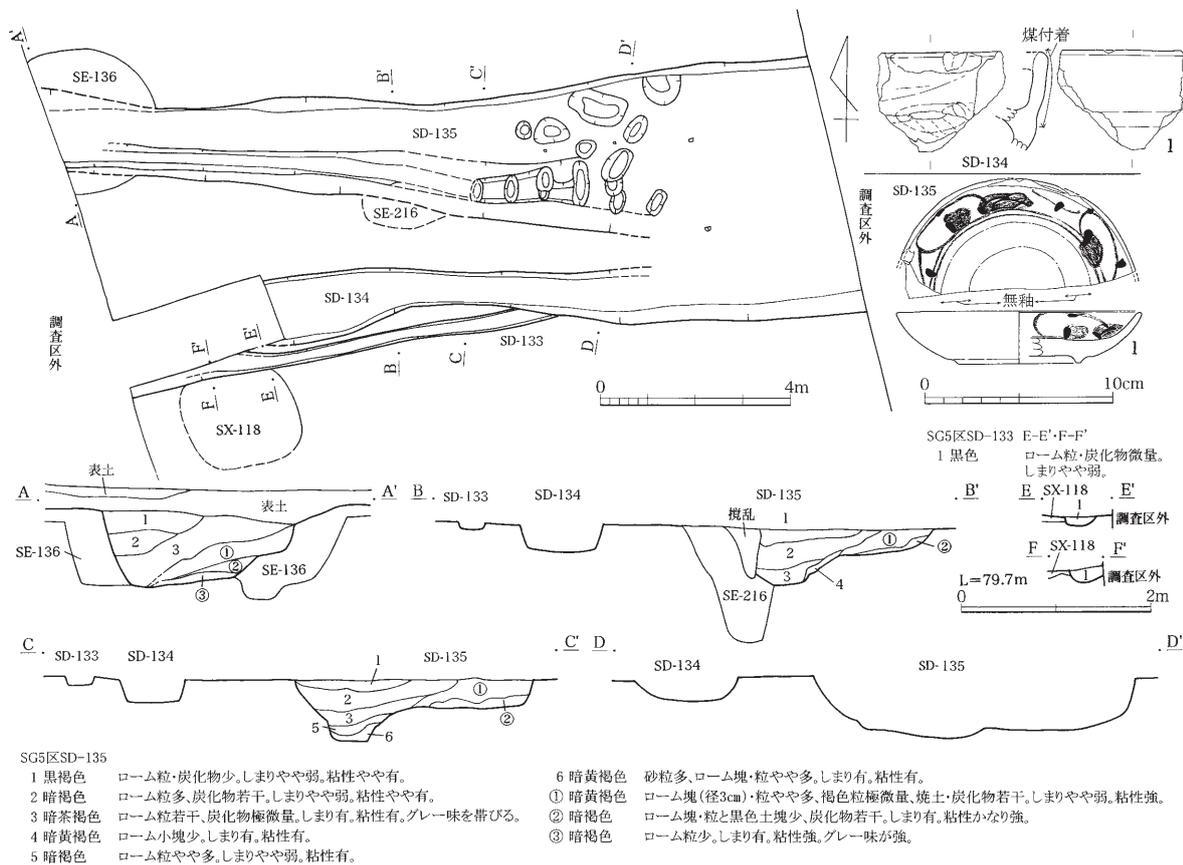
第8章 権現山遺跡 SG5 区

複する SD-134 では古墳時代土師器の他に中～近世の内耳土器片が出土している。SD-134 との新旧は不明だが、おそらく近い時期、つまり中世～近世の溝であろう。

SG5 区 SD-134 (第 365 図中央)

SG5 区南部の 10.0-17.5・18.0 グリッドにあり、東西両側は調査区外へ伸びる。時期不明の SD-133 の東部が合流している関係にあるが、同時存在か、時間差を持って重複するのかは不明である。西端部分 (E' と F' の北側) は、電柱の補強施設があるので、調査できなかった。溝幅 63～141cm で、調査区東部では幅 110cm まで広がり、その東側は湧水などのため遺構が確認・記録されていない。残存する深さは 23～34cm で、底面が調査区中央部 (標高 79.17m) から (西部 79.08m) へ傾斜する。土層断面図の記録がなく、覆土の特徴は不明である。

遺物は古墳時代土師器片と内耳土器片がある。内耳土器片 (SD-134 の 1) からみて中世～近世の溝かと考えられる。古墳時代土師器は杯・甕片などがあり、口径が小さい半球形および口縁外反形の杯が多いので、古墳後期末ころの土師器が混入したものであろう。内耳土器の事例は、北方の立野遺跡 2 区 SD-4 や中島笹塚遺跡 3・7 区 SD-315 に近世焙烙がある (『東谷・中島地区遺跡群』5・9)。



第 365 図 権現山遺跡 SG5 区 SD-133・134・135 遺構 SD-134・135 遺物

第 210 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-134 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 土器 内耳鍋	高 残 5.2	外面口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデのち耳貼付。耳は下端のみ残存しており、上端は貼付部分から剥落している。外面口縁部煤付着。	5YR5/6 明赤褐 緻密 赤・透明粗粒微量 硬質	口一部

SG5 区 SD-135 (第 365 図上、写真図版 54・187)

SG5 区南部の 10.5-17.5・18.0 グリッドに所在する。東西は調査区外へ伸びる。時期不明の SE-136・216 を切る。

溝幅は 140cm (SE-136 重複部) ～ 322cm (東端) で、東側が広い傾向があり、調査区西壁付近では溝幅 204cm (断面図 A-A')。南よりの部分は、埋没後に幅 169cm (断面図 C-C') ～ 204cm (断面図 A-A') の溝幅で掘り返している。残存する深さは北部の浅いところで 24 ～ 39cm、南部の深く掘り返した部分で 40 ～ 59cm。北部の浅いところは底面が東から西へ傾斜し、標高は東端で 79.14m、西端で 79.00m。南部の深いところは底面にはっきりした傾斜がなく、調査区東部 (湧水で調査できなかった東端を除く) で 78.85m、西端で 78.80m。深い部分の溝底面より 8 ～ 12cm ほど土坑状に深い部分が、約 80cm の間隔で底面に並ぶ。この深い部分に砂質の 6 層が認められる (断面図 C-C')。

覆土は自然埋没だが、途中で掘り返したような状態で、2 時期の溝が重複したとも考えられる。断面図で番号に○印を付けた層が旧期の覆土である。断面図 C-C' で、新期溝の 3 層はグレー味が強くて保水力のある特徴的な層で、5・6 層は溝底面が土坑状に窪む部分を埋めている。凹凸状の底面を砂質土で埋め戻すことを重視すると、通路状遺構の可能性もある。権現山遺跡南部で通路状遺構の可能性のある事例は、SG9 区 SX-54 がある (第 9 章第 2 節)。各層ともにテフラの層や粒はない。

肥前系の磁器 (SD-135 の 1) から 18 世紀後半ころの溝と考えられる。他に厚手の土師質土器甕破片や施釉陶器破片があり、古墳後期中葉～末ころの土師器も混入している。

第 211 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-135 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 磁器 皿	口 復 12.9 高 2.7 底 6.5	肥前系と見られる。内面底部の施釉されない輪弁げ部分や口縁端部の剥離状の欠損面は平滑になっており、口縁部がわずかに欠けた状態でも使用されていたと見られる。内面口縁～体部唐草文。	2.5Y8/1 灰白 緻密 黒微粒少 硬質	口～底 1/2 周

第 14 節 時期不明の掘立柱建物跡

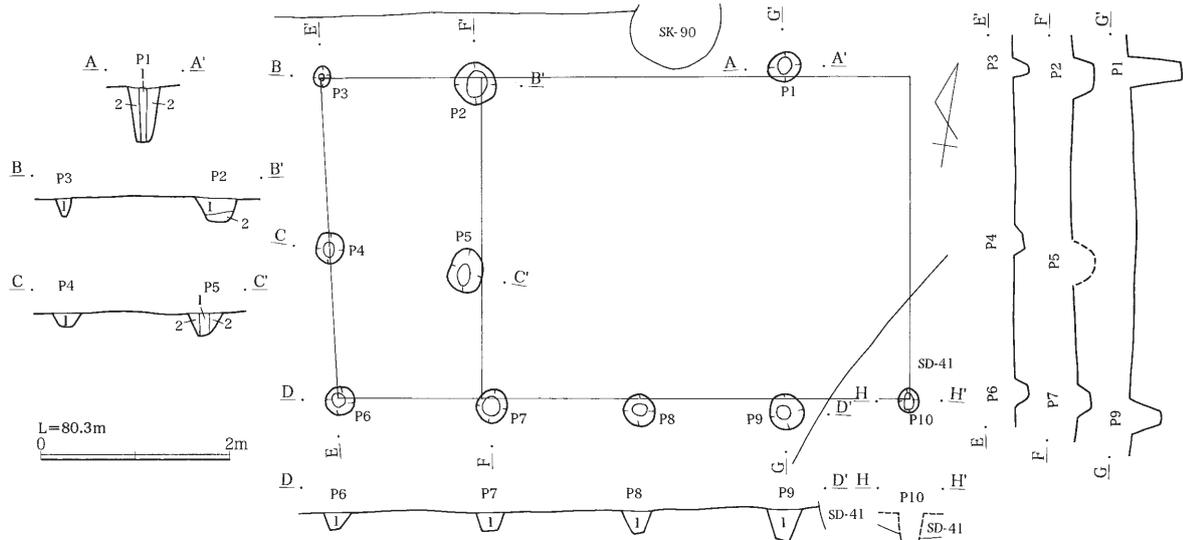
SG5 区 SB-154 (第 366 図上、写真図版 54)

SG5 区中央北寄りの 15-16・17 グリッドに位置する。南東隅の柱穴 P10 が古墳後期の溝 SD-41 と重複するが、新旧関係は不明である。古墳中期の居館跡を構成する柵列 SA-151 の内部 (東辺中央の西 4m) にあるので、仮にこの建物が古墳中期であれば、居館に関連する建物の可能性もある。しかし、SA-151 と方位が少し異なり、また P1 や P5 の柱痕部はしまりが弱いので、それほど古くまで遡らない建物と考えるのが自然であろう。

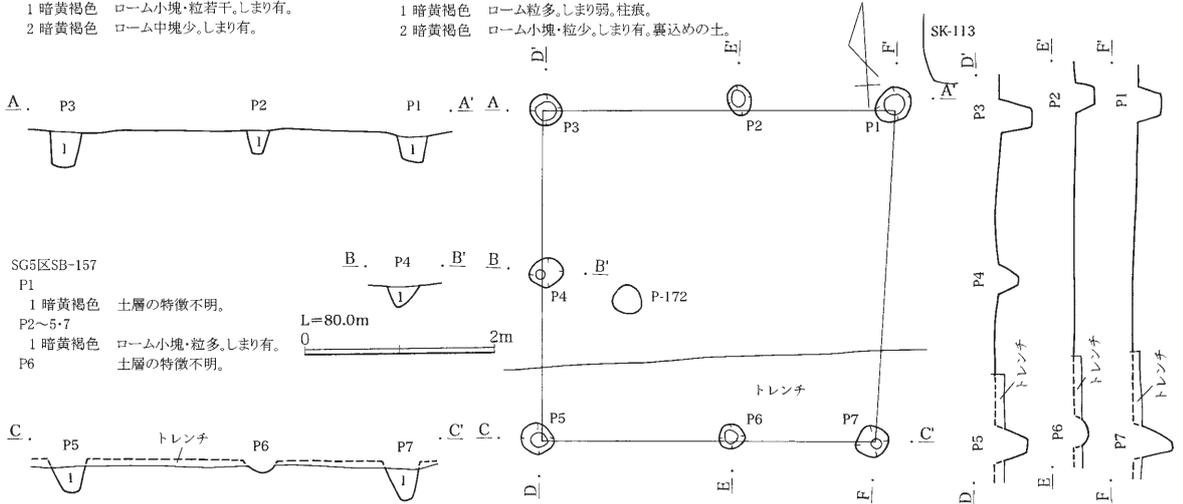
桁行 4 間・梁行 2 間と推定される東西棟の側柱建物跡。ただし、P1-P2 間の北辺柱穴や、南東隅柱穴 (P10) 以外の東辺柱穴が確認されていない点に疑問も残る。P1 と P10 は他の柱穴より深い点異なる。P10 は SD-41 の覆土中の地山が不安定なので深く掘ったと考えることもできる。西端部の 1 間分を仕切るように P5 があり、西辺中央柱穴 P4 と対応するように、西へ少し張り出す位置にある。桁行 4 間 (6.00m) × 梁行 2 間 (3.42m)。南北の中軸線は N-13° -W で柱穴は 10 本あり、配置は長方形である。

柱間は桁行 1.31 ～ 1.64m、梁行 1.44 ～ 2.00m である。P1 は 31 × 34 × 深さ 59cm、P2 は 43 × 45 × 深さ 26cm、P3 は 17 × 21 × 深さ 21cm、P4 は 29 × 32 × 深さ 15cm、P5 は 36 × 46 × 深さ 25cm、P6 は 30 × 31 × 深さ 17cm、P7 は 31 × 35 × 深さ 20cm、P8 は 32 × 34 × 深さ 20cm、P9 は 35 × 36 × 深さ 35cm、P10 は 20 × 27 × 深さ 31cm (推定 54cm) である。覆土は、P1 と P5 に柱痕が残る以外は単層である。遺物は出土しなかった。

第8章 権現山遺跡 SG5 区



- SG5区SB-154
- | | | |
|------|--------|----------------------|
| P1 | 1 暗黄褐色 | ローム粒多。しまり弱。柱痕。 |
| | 2 暗黄褐色 | ローム小塊・粒少。しまり有。裏込めの土。 |
| P2 | 1 暗黄褐色 | ローム小塊・粒若干。しまり有。 |
| | 2 暗黄褐色 | ローム中塊少。しまり有。 |
| P3 | 1 暗茶褐色 | ローム粒若干。しまり有。 |
| P4 | 1 暗黄褐色 | ローム小塊・ローム粒若干。しまり有。 |
| P5 | 1 暗黄褐色 | ローム粒多。しまり弱。柱痕。 |
| | 2 暗黄褐色 | ローム小塊・粒少。しまり有。裏込めの土。 |
| P6~9 | 1 暗黄褐色 | ローム小塊・粒若干。しまり有。 |



- SG5区SB-157
- | | | |
|--------|--------|----------------|
| P1 | 1 暗黄褐色 | 土層の特徴不明。 |
| P2~5・7 | 1 暗黄褐色 | ローム小塊・粒多。しまり有。 |
| P6 | | 土層の特徴不明。 |

第366図 権現山遺跡 SG5 区 SB-154・157 遺構

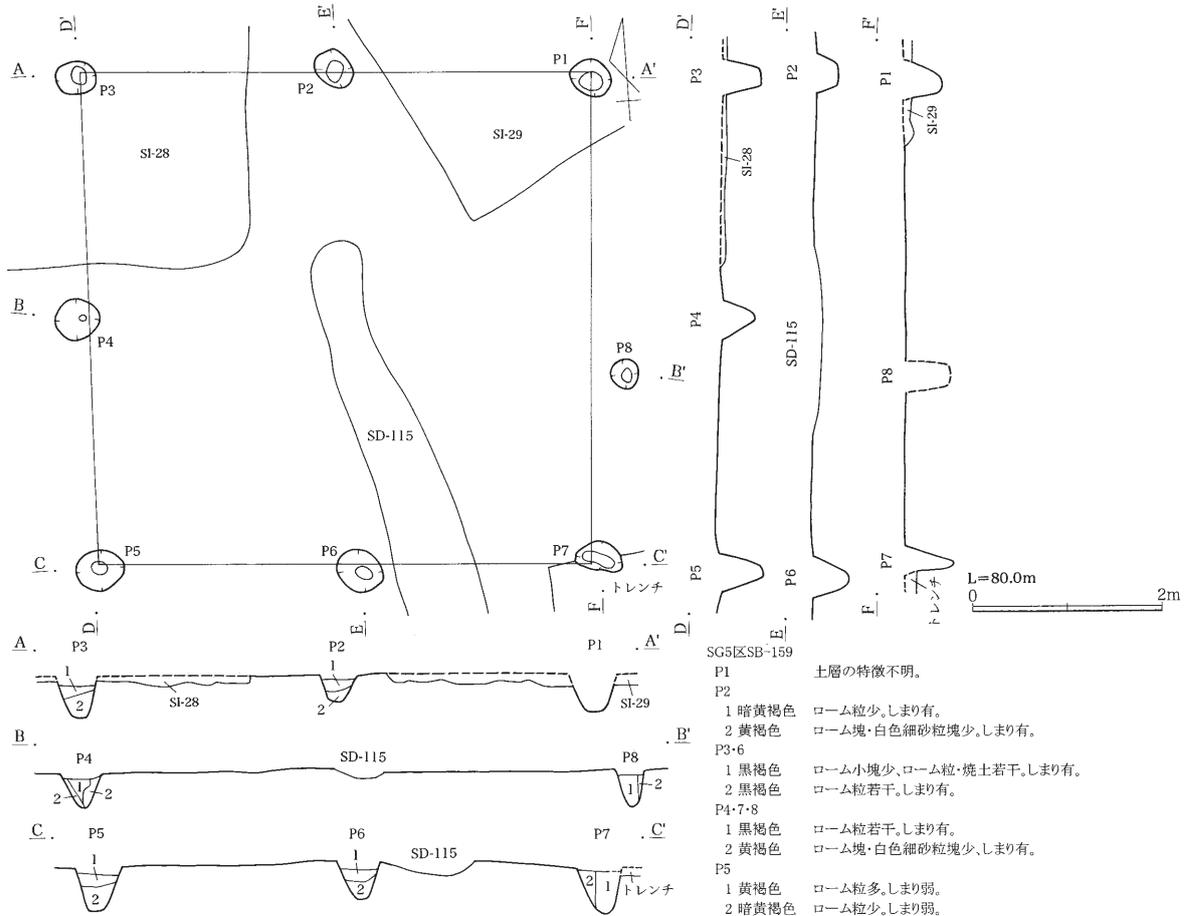
SG5 区 SB-157 (第366図下、写真図版54)

SG5 区中央の 13-17 グリッドに位置する。西側 3m に古墳時代の SI-23 がある。南列は確認調査時のトレンチに削られる。

桁行 2 間 (3.55 ~ 3.66m)、梁行 2 間 (3.48m) の側柱建物である。南北の中軸線は N-4° -E で柱穴は 7 本あり、配置は方形である。東辺中央の柱穴は確認されなかった。柱間は桁行 1.54 ~ 2.02m、梁行 1.72 ~ 1.75m である。P1 は 33 × 38 × 深さ 28cm、P2 は 25 × 30 × 深さ 25cm、P3 は 33 × 35 × 深さ 39cm、P4 は 30 × 35 × 深さ 22cm、P5 は 30 × 34 × 深さ 29cm(推定 36cm)、P6 は 27 × 28 × 深さ 10cm(推定 15cm)、P7 は 32 × 35 × 深さ 35cm(推定 43cm)。覆土は単層である。遺物は P5 出土の古墳中期末以前とみられる土師器片 2 点だけで、この遺構の時期を示すものとは思われない。

SG5 区 SB-159 (第367図、写真図版54)

SG5 区中央南寄りの 12-17 グリッドに位置する。古墳中期の SI-29 および後~終末期の SI-28 と重複する。SI-28・29 の貼床層に SB-159 柱穴が覆われていないことから、SB-159 が SI-28・29 を切ると考えられる。



第 367 図 権現山遺跡 SG5 区 SB-159 遺構

桁行 2 間 (5.27 ~ 5.42m)、梁行 2 間 (5.06 ~ 5.34m) の側柱建物である。東西側柱の P4・P8 は若干外側に逸れる。南北の中軸線は N-8°-E で柱穴は 8 本あり、配置はほぼ方形である。柱間は桁行 2.48 ~ 2.79m、梁行 2.46 ~ 3.14m である。P1 は 35 × 42 × 推定深さ 40cm (SI-29 床面から深さ 29cm)、P2 は 35 × 43 × 深さ 22cm、P3 は 36 × 41 × 推定深さ 45cm (SI-28 床面から深さ 40cm)、P4 は 42 × 47 × 深さ 36cm、P5 は 43 × 50 × 深さ 46cm、P6 は 42 × 51 × 深さ 47cm、P7 は 29 × 49 × 深さ 50cm、P8 は 30 × 32 × 深さ 48cm である。覆土は、P4・P7・P8 に柱痕を反映する黒褐色土が見られる。遺物は出土しなかった。

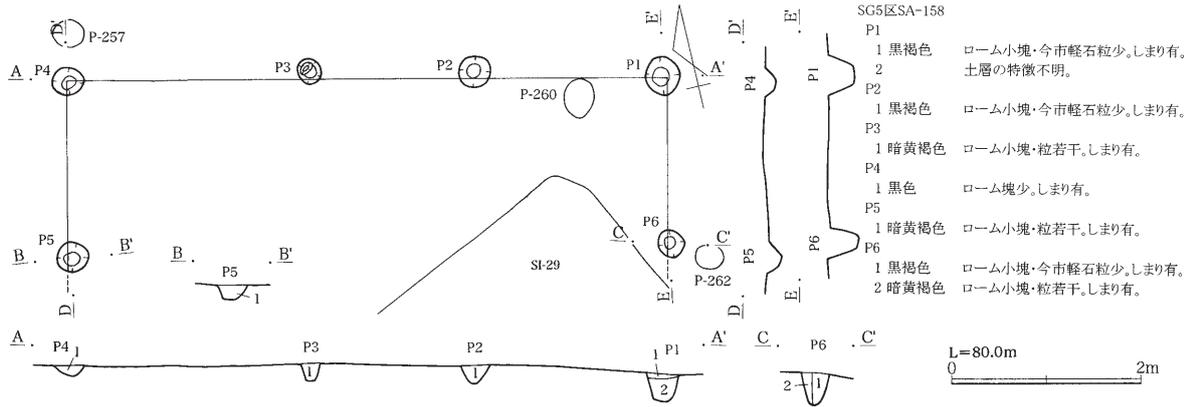
第 15 節 時期不明の柵列

SG5 区 SA-158 (第 368 図)

SG5 区中央南寄りの 12-17 グリッドに位置する。当初、2 間 × 3 間の掘立柱建物跡と考へて「SB-158」とされていたが、現地調査時には南辺とされた柱穴は古墳時代竪穴建物 SI-28・29 に伴うものと考えられるので削除し、東西に 3 間、南に 1 間のコの字状の柵列として SA-158 に名称を変更した。掘立柱建物跡と考へた場合は、南側は SI-28・29 と重複するが明確ではない。

北辺を構成する 4 本の柱穴 (P1 ~ P4) の南側に各 1 本 (P5・P6) を配置し、全体が「コ」の字形になる。東西柵列の中軸線は N-76°-W である。柱穴は調査区内で 6 本確認した。東西 3 間 (6.23m)、南北 1 間 (西側 1.90、東側 1.76m) のコの字状の柵列である。東西柱間は 1.71 ~ 2.56m、各柱穴の規模は、P1 は径 35 × 40 × 深さ 31cm、P2 は径 31 × 35 × 深さ 20cm、P3 は径 25 × 27 × 深さ 19cm、P4 は径 30

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 368 図 権現山遺跡 SG5 区 SA-158 遺構

× 34 × 深さ 12cm、P5 は径 32 × 34 × 深さ 16cm、P6 は径 26 × 30 × 深さ 35cm で、深さには若干の深浅がある。このうち P6 は柱痕が認められる。遺物は出土しなかった。

第 16 節 時期不明の溝状遺構

SG5 区 SD-108 (第 369 図左、写真図版 55)

SG5 区中央の 13-16 ~ 18 グリッド。古墳中期の SI-24 を切る。古墳時代の SI-155、時期不明の SK-109、古墳時代の SD-101 と重複し、土層断面図はないが、各遺構を切ると考えられる。東端は谷部に入り、調査区東側の低地へ続く。古墳時代の土坑群や遺物包含層が形成されている低地部の埋積層上部にこの溝の東端部が掘り込まれているので、古墳時代よりもかなり新しいことがわかる。

若干彎曲するが、ほぼ東西に直線的に続き、中軸線は N-87° -W である。長さは確認できる部分で 41.4m である。断面形は西側は皿状、東側は浅い V 字状で、底面の平坦部分は狭い。北側面に比べ南側面の傾斜が緩い。幅は確認面で 1.02 ~ 2.06m、底面の幅は 0.08 ~ 0.52m、深さは 55 ~ 94cm である。覆土は 3 層または 4 層の自然堆積で、1 層は以外は締まりがなく、下層ほどロームの粒・塊の混入が多い。

遺物はごくわずかである。土師器は高杯・椀形杯・壺・甕など、須恵器は外面カキ目調整の瓶? が 1 片ある (1)。古墳中期の土師器が中心で、重複する古墳時代の竪穴建物 SI-24・155 などからの流入・混入と見られる。現地調査時の所見でもかなり新しい時期の溝と判断されている。

第 212 表 権現山遺跡 SG5 区 SD-108 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 瓶類	最大 残 21 高 残 4.0	外面胴部カキ目。内面胴部ロクロナデ。外面胴部には、上位となる部分主体に自然軸付着。2 片が同一個体。残存円周が少ないので復原径は参考値。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや緻密 やや硬質	低地北部と SD-108 の各 1 片が同一個体 胴部 2 片 アイチー括北、SD-108

SG5 区 SD-115 (第 369 図右、写真図版 55)

SG5 区中央南寄りの 11-17、12-17 グリッド。北側に古墳後期~終末期の SI-28 と中期の SI-29、時期不明の SA-158 がある。北端で時期不明の掘立柱建物 SB-159 の P6 と P7 の間を通るが、SB-159 との新旧関係は不明。

南北に直線的に続き、南端で西側にほぼ直角に折れて調査区外に延びる。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。南北に延びる溝の中軸線は N-20° -W、長さは確認できる部分で 16.66m、幅は 0.35 ~ 0.95m、底面の幅は 0.19 ~ 0.52m、深さは 10 ~ 12cm である。覆土は自然埋没状の上下 2 層で、下層にローム粒・塊が多い。出土遺物はなく、時期不明である。

SG5 区 SD-148 (第 369 図下、写真図版 55)

SG5 区中央北寄りを横断する溝で、15-16・17、16-17 グリッドに位置する。現地調査時には SD-156 の名称も用いているが、同一の溝である。時期不明の SK-146・150 に切られる。古墳後期の SI-15 に切られる可能性もあり、それが正しければ古墳時代の溝とも考えられる。古墳中期の SI-11 (図の東端部) および後期の SI-14 とは重複部分が僅少なため新旧は不明。古墳中期の SI-13 を切る可能性がある (図の西端部)。SI-13 の調査区西壁土層断面 (第 300 図) で SI-13 を切る「攪乱」が、SD-148 ではないかと推定されるからである。

南西 - 北東方向にはほぼ直線的に続く。中軸線は N-57° -E、長さは確認できる部分で 24.78m である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。幅は 0.38 ~ 0.78m、底面の幅は 0.18 ~ 0.36m、深さは 25 ~ 32cm である。SK-150 に切られる付近で上半部の土層の特徴だけが記録されているが (断面 C-C')、それ以外の部分の状況は不明である。

遺物は古墳時代の土師器小破片だけなので、時期ははっきりしないが、外反口縁の杯などからみて古墳後期後葉~末頃かと思われる。口縁部が内傾・直立・外傾する杯や半球形の杯は認められない。小形甕の口縁部片などが少量ある。土師器は重複する SI-14・15 などからの混入品とも考えられる。SD-148 には古墳後期の土師器片があるので、重複する中期の SI-11・13 よりも時期が新しい可能性が考えられる。

第 17 節 時期不明の井戸

SG5 区 SE-114 (第 370 図上、写真図版 54)

【位置】 SG5 区中央部西寄りの 12.5-16.5 グリッド。北に SI-26、東に SI-99 の古墳時代中期堅穴が近接する。西側は調査区外。重複する遺構はない。

【規模と形状】 確認面の平面形はほぼ直径 1.90 m の円形で、深さ 2.80 m である。断面形は漏斗状で、壁は底面から垂直気味に立ち上がったのち 2m ほど上方で外傾する。下方の壁はオーバーハングしているが、これは地山が崩落したためであろう。壁上半の傾斜が変化する部分の平面形は直径 85cm ほどの円形である。破線で図示した底面はほぼ平坦で、上端の円形の中心よりやや南に寄る。

梅雨期 (1998 年 6 月) には 2 層付近まで湧水した。地下水位が低い 99 年 3 月に、周囲の地山を断ち割らないで底面まで調査を行った。

【覆土】 砂・礫がやや多い覆土 2 層や、ローム塊が多い 2 ~ 5 層は人為的に埋め戻した可能性もあるが、確実ではない。6 層以下は地山が崩れながら互層状に自然堆積した薄層群のように見られる。

【出土遺物】 ごくわずかな遺物が出土している。図示した土師器杯 1 片 (1) と砥石 (2) 以外に、土師器高杯片がある。この遺構の確実な時期は不明で、遺物だけで判断すれば平底の土師器杯破片があるので古墳時代中期中葉~末頃の可能性もあるが、埋土の締まりが弱いので、もっと新しい時期の遺構と考える方が適切であろう。

第 213 表 権現山遺跡 SG5 区 SE-114 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 1.4 底 復 5.0	内外面とも全体的に表面が磨滅しており、調整は不明瞭。外面体~底部ナデ。底部は全体的に浅くくぼむ。内面底部ナデ。	10YR8/4 浅黄橙 やや緻密 微粒微量 やや軟質	体下半~底 1/3 周
2 石器 砥石	長 残 26.1 幅 残 24.2 厚 残 7.1 重 5600.0	大形。板状に割れる砂岩製で、裏面は層理面から欠損する。右側面には、整形時の切削痕が残る。使用面は表側のみで、平滑ではあるが、使用に伴う擦痕・変形はなく、さほど使用されていないと見られる。下端には、刃物が当たった痕跡あり。水中にあったためか、表面には鉄分が斑状に付着する。	2.5Y6/3 にぶい黄 やや粗い 砂岩	一部欠

第8章 権現山遺跡 SG5 区

【規模と形状】有段の井戸である。規模は上段の開口部で口径 3.05m、底径 2.60m、深さ 0.52m、中段で口径 1.38 × 1.28m、底径 0.98 × 0.86m、確認面からの深さ 1.02m(上段底面からの深さ 0.50m) である。下段は口径 0.45 × 0.40m、底径 0.35 × 0.28m、確認面からの深さ 1.54m(中段底面からの深さ 0.52m) で、円筒状の井筒である。調査を実施した 1998 年 7 月中旬には上段の底面付近まで湧水し、春季(1999 年 3 月)には下段部でも湧水しなかった。土層断面図 A-A' に記入した暗褐色土(地山のローム漸移層)を掘り終わったところが上段の底面になっていることがわかる、

【覆土】上段で 4 層、下段の井筒部分で 2 層が見られる。上段の層は 1 層に白色粒子(テフラ?)と炭、3 層には周囲の古墳時代遺構から混入した土師器片を含み、自然に埋没した層と見られる。下段部もローム塊などを含まず、自然埋没の可能性がある。各層ともにしまりが弱いので、それほど古い時期の遺構ではないと見られる。土層断面図に記入した黒色土は表土の下部であろう。

【出土遺物】遺物はごくわずかで、古墳中期末から後期中頃までの土師器(杯・高杯・鉢・壺甕類など)の小破片である。半球形および口縁部外傾の模倣杯、内斜口縁ふうの椀形杯、短脚・柱状脚の高杯破片などがある。この遺構に伴うものとは思えない。

SG5 区 SE-216 (第 370 図下右、写真図版 55)

【位置】SG5 区南寄りの 10.0-17.5 グリッドに位置する。同じく時期不明の井戸 SE-136 が西にある。東西に延びる近世の溝 SD-135 に北側上部を切られる。

【規模と形状】SD-135 に切られているため、平面形は明確でないが、確認面で推定 1.90 × 1.40m の楕円形で、確認面から約 80cm の深さで稜を持って、円筒状の井筒となる。断面形は漏斗状となる。稜の変換点で 0.78 × 0.68m の楕円形、底面は 0.35 × 0.32m のほぼ円形である。確認面からの深さは 1.58m である。調査を実施した 1999 年 3 月中旬には底面でも湧水していなかった。

【覆土】4 層にわけられる。最下層の 4 層はローム塊と黒色土塊の混土層で、3 層とともに埋め戻した層であると現地調査時に判断した。それよりも上層は白色粒子(テフラ?)や炭を含む暗褐色土で、自然埋没であろう。

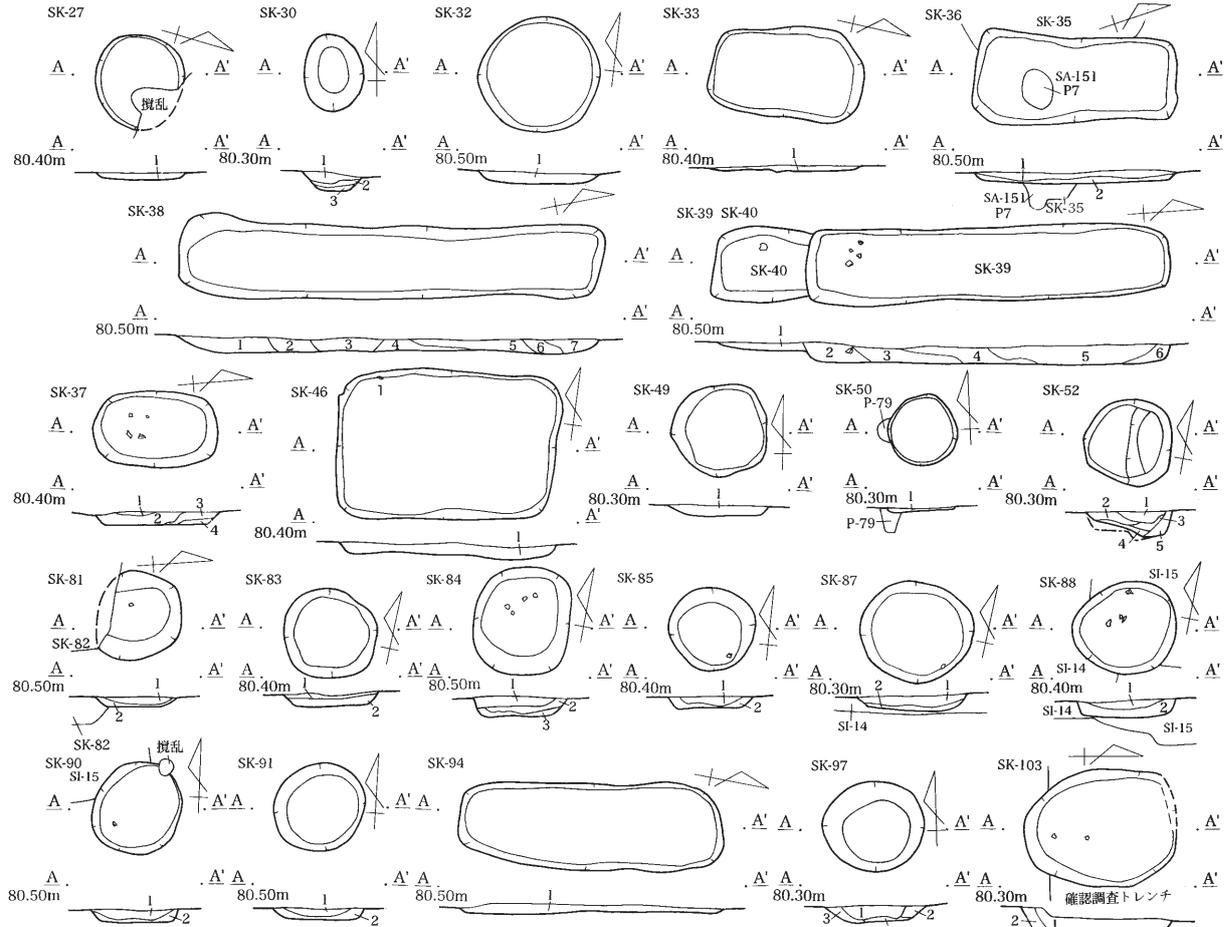
【出土遺物】土師器 3 点だけである。須恵器杯身模倣形の土師器鉢口縁部 1 片、上げ底状の杯か鉢底部 1 片、漆仕上げを行う半球形杯の口縁部破片がある。古墳後期前半期の遺物と見ることができそうだが、SE-216 の時期を示すものとは思えない。

第 18 節 時期不明の土坑 (第 371・372 図、写真図版 56 ~ 60)

時期不明の土坑は SG5 区で 46 基を調査した。SG5 区は古墳時代集落が中心になるので、これら時期不明土坑の中にも古墳時代土坑を含む可能性はある。SK-33・36・37 の 3 基や、SK-87・88・90・91 の 4 基は、それぞれ同種の土坑である。また、SK-81・83・84 もやや類似している。SK-122 は出土した陶器片からみて近世以降の可能性が高い。SK-38・39・40・94・125・126・128・131・152 は近代以降の農業関連土坑(通称「イモ穴」と考えられる。詳細は表に示す。

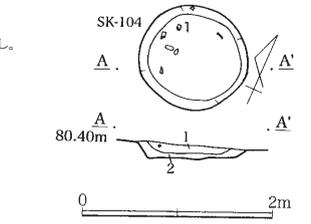
第 214 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-27	18.5-15.5	円形	重複なし	1.00	0.93	0.08		
径 1m 程度の円形で浅い。北東部は攪乱。遺物はごくわずかな土師器壺甕類と杯の小破片で、模倣杯・漆仕上げ杯片はないので古墳中期末葉以前。最も近い竪穴 SI-2 は 6 世紀代。形状から古墳時代の可能性もある。SK-49・50 も参照。								
SK-30	16.5-16.0	楕円形	重複なし	0.83	0.62	0.21	N-5° -W	3 層 白色粒あり
遺物はごくわずかな土師器の小破片で身模倣形の杯片があり、漆仕上げはあるが磨かないため、古墳後期末頃の土器と思われるがこの時期の遺構かどうか不明。3 層は貼床か? 上層ほど白色粒が多くなる。写真で見ると谷際にある感じ。南半の上部は失われている。古墳時代の可能性もある。								
SK-32	16.0-16.0、16.5-16.0	円形	重複なし	1.26	1.21	0.15		
古墳時代の方形欄列 SA-151 の列にあり、SA-151 の P2 と近接する。北東には古墳中期の円筒形土坑 SK-34 があるため、SK-32 も古墳時代の土坑または円筒形土坑の可能性はある。								

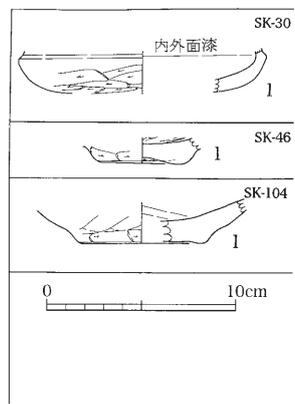


- SG5区SK-27
1 暗褐色 ローム塊・小塊と褐色土小塊少。硬。しまり有。土器片有。
- SG5区SK-30
1 褐色 焼土塊・粒と白色粒・炭化物少。硬。しまり有。
2 暗褐色 ローム小塊・粒少。焼土粒・白色粒微量。硬。しまり有。
3 暗黄褐色 ローム大・小塊・粒多。硬。しまり有。
- SG5区SK-32
1 暗茶褐色 ローム粒多。ローム塊(径1cm)少。しまりやや強。
- SG5区SK-33
1 黒色 ローム粒微量。しまりやや弱。
- SG5区SK-36
1 黒色 ローム粒微量。しまりやや弱。
2 やや黒色 ローム粒少。しまりやや弱。
- SG5区SK-37
1 黒色 ローム粒少。しまりやや弱。
2 やや黒色 ローム粒多。ローム塊(径2mm)微量。しまり弱。
3 暗茶褐色 ローム塊(径5mm)・粒多。しまりやや弱。
4 やや黒色 ローム粒少。しまりやや強。
- SG5区SK-38
1 暗茶褐色 ローム粒少。ローム塊(径1~2cm)微量。しまりやや強。
2 茶褐色 ローム粒多。ローム塊(径3~10mm)少。しまりやや強。やや暗。
3 暗茶褐色 ローム粒少。ローム塊(径3mm)微量。しまりやや強。
4 茶褐色 ローム粒多。ローム塊(径5mm)少。しまりやや強。やや暗。
5 茶褐色 ローム塊(径5mm)・粒多。しまりやや強。やや暗。
6 暗茶褐色 ローム粒少。しまりやや強。
7 暗茶褐色 ローム粒多。ローム塊(径2~5mm)少。しまりやや強。
- SG5区SK-39・40
1 茶褐色 ローム塊・粒少。しまりやや強。やや暗。
2 黒色 ローム粒少。ローム塊微量。しまりやや弱。
3 黒色 ローム粒多。ローム塊少。しまりやや弱。
4 やや黒色 ローム塊・粒多。しまりやや弱。
5 暗茶褐色 ローム粒多。ローム塊少。しまりやや弱。
6 暗茶褐色 ローム粒多。ローム塊微量。しまりやや弱。
- SG5区SK-46
1 暗褐色 ソフトローム粒と軽石粒少。ソフトローム小塊微量。硬。
- SG5区SK-49
1 暗茶褐色 ローム塊・小塊と褐色土小塊少。硬。しまり有。
- SG5区SK-50
1 暗褐色 ローム塊・小塊と褐色土小塊少。硬。しまり有。

- SG5区SK-52
1 暗褐色 ローム粒少。しまり有。粘性やや有。
2 褐色 ローム粒多。今市軽石粒微量。軟。しまり有。粘性なし。
3 暗褐色 ローム小塊少。しまり有。粘性なし。
4 黄褐色 ローム塊少。しまり有。粘性なし。
5 暗黄褐色 ローム塊多。しまり有。粘性なし。
- SG5区SK-81
1 暗褐色 ローム粒少。炭化物微量。しまりやや強。
2 暗茶褐色 ローム粒多。しまりやや弱。
- SG5区SK-83
1 暗褐色 ローム粒多。炭化物微量。しまりやや強。
2 暗黄褐色 ローム混成層(掘り過ぎかり)。しまりやや強。
- SG5区SK-84
1 暗茶褐色 ローム粒少。炭化物微量。しまりやや強。
2 黄褐色 ローム粒多。しまりやや強。やや暗。
3 暗黄褐色 ローム粒多。ローム塊(径2cm)少。しまり強。
- SG5区SK-85
1 暗褐色 ローム塊粒多。しまり・粘性なし。
2 黄褐色 ロームに一部暗褐色土混入。しまりなし。粘性やや有。
- SG5区SK-87
1 暗褐色 ローム粒・焼土少。ローム塊若干。しまり有。
2 暗褐色 ローム中塊多。しまり弱。
- SG5区SK-88
1 暗褐色 ローム粒・焼土少。しまり有。
2 暗褐色 ローム小塊少。ローム粒・焼土若干。しまりやや弱。
- SG5区SK-90
1 暗褐色 ローム塊・粒若干。しまり有。
2 暗黄色 ローム中塊少。しまり弱。
- SG5区SK-91
1 暗褐色 ローム粒・白色軽石粒微量。
2 茶褐色 ローム粒多。しまりやや弱。やや暗。
- SG5区SK-94
1 暗褐色 ローム塊少。しまり・粘性なし。
- SG5区SK-97
1 暗褐色 ローム粒・焼土若干。ローム塊若干。
2 暗黄褐色 ローム大塊多。しまり弱。
3 暗茶褐色 ローム塊若干。しまり弱。
4 暗黄褐色 ローム塊少量。しまり弱・粘性有。



- SG5区SK-103
1 暗黄褐色 ローム粒多。しまり粘性なし。
2 暗黄褐色 ローム塊少。しまり粘性なし。
- SG5区SK-104
1 暗黄褐色 ローム粒多。しまり粘性なし。
2 黄褐色 ローム塊多。しまり粘性なし。



第 371 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑 (1) 遺構・遺物

第8章 権現山遺跡 SG5 区

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-33	16.5-16.0	長方形	重複なし	1.61	0.87	0.06	N-8° -W	
長さ 1.6m 程度なので、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)としては小さい。近くにある古墳時代の長方形土坑 SK-31 に類似する。SK-31 では古墳後期前葉の遺物がわずかにあるので、この土坑も同じ時期の可能性もある。時期不明の SK-36・37 も同じような遺構で、これもセットかもしれない。								
SK-36	16.0-16.5、16.5-16.5	長方形	SB-151・P7→SK-35→SK-36	2.15	1.02	0.13	N-19° -E	
古墳中期末の SK-35 と古墳時代の方形欄列 SA-151 の P7 より新しい。近くにある古墳時代の SK-31 や時期不明の SK-33・37 等に類似する。現地の見所では近代以降の農業関連土坑(イモ穴)とは判断されていない。古い時期の土坑かもしれない。								
SK-37	16.5-16.5	隅丸長方形	重複なし	1.30	0.80	0.14	N-10° -E	
遺物は土師器 4 点のみで時期はまったく分からないが、内斜線と思われる杯片も含む。模倣杯や漆仕上げ杯はないため、古墳中期末以前と見られることもできる。古墳時代の SK-31 や時期不明の SK-33・36 等と同様の遺構の可能性があり、この場合は古墳後期前～中葉の土坑かもしれない。								
SK-38	16.5-15.5・16.0	長方形	重複なし	4.48	0.70	0.19	N-11° -E	
遺物は土師器壺類の胴部 2 片のみ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か。								
SK-39	16.0-16.0	長方形	SK-40 より新	3.81	0.82	0.22	N-4° -E	
時期不明の SK-40 を切る。遺物は土師器壺類と鉢の胴部 4 片のみ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か。								
SK-40	16.0-16.0	長方形?	SK-39 より古	1.02	0.80	0.11	N-4° -E	
時期不明の SK-39 に切られる。遺物は土師器小形壺の口縁部 1 片のみ。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)か。								
SK-46	16.5-16.0、17.0-16.0	長方形	重複なし	2.37	1.50	0.18	N-82° -E	軽石粒あり
古そうな土坑。形からは近代以降の農業関連土坑(イモ穴)とは見えない。遺物は土師器鉢・壺・甕の可能性があり、伴うものではない。遺物が鉢などであれば古墳中期だが、壺・甕ならば限定できない。古墳時代の方形欄列 SA-151 の北部周辺の土坑集中地区にあることから、古墳時代の可能性あり。								
SK-49	18.5-16.0	円形	重複なし	1.04	0.98	0.10		
遺物は土師器片で椀形杯・高杯・壺・甕等 5 点のみ。模倣杯がないため古墳中期と考えるが、伴うものとは言えない。近くに時期不明の SK-27・50 があり、古墳時代の土坑はまとまる傾向があることから、3 基あわせて古墳時代となる可能性もある。								
SK-50	19.0-15.5	円形	P-79 と重複	0.74	0.72	0.06		
時期不明の柱穴状土坑 P-79 よりも本遺構を先に調査しており、P-79 を切る可能性がある。遺物はない。近くに時期不明の SK-27・49 があり、古墳時代の土坑はまとまることが多いので、古墳時代と見られることもできるが、根拠は薄い。								
SK-52	14.5-16.5	円形	重複なし	0.94	0.90	0.29		
底面は段状。古墳後期の竪穴 SI-19 の西で、古墳中期の SK-51・96 の北にある。SK-51 と関連があれば古墳時代となるが、断定する根拠はない。SK-51 は方形、SK-52 は小さい円形。								
SK-81	16.0-16.5	円形	SK-82 より新	0.96	0.88	0.11		
古墳後期の竪穴 SI-10 の南西にあり、古墳中期の SK-82 を切る。遺物は SK-82・Ma 1 として取り上げた土師器壺類の胴部 2 片と底部 1 片のみ。この土坑に伴うとは思えないため、時期を限定できない。周囲にある同じような時期不明の SK-83・84 と近い時期の可能性もあり。								
SK-83	15.5-16.5	円形	重複なし	1.00	0.93	0.15		
時期不明の SK-81 と類似。SK-81・84 等と近い時期と見られることもできる。								
SK-84	15.5-16.5	隅丸方形	重複なし	1.16	0.99	0.20	N-5° -E	
古い土坑のように見えるが、遺物はわずかな土師器杯の小破片で時期を限定できない。時期不明の SK-81・83 等と同時期の可能性もあるが、形の差から異なるものと見られることもできる。								
SK-85	15.5-16.5	円形	重複なし	0.89	0.87	0.14		
古墳時代の竪穴 SI-9 の南東にある。遺物は土師器壺類の胴部 1 片だけなので時期不明。近くにある時期不明の SK-83 等と同時期の可能性もある。								
SK-87	15.0-16.5	円形	SI-14 より新	1.19	1.08	0.18		
古墳後期末の竪穴 SI-14 の覆土中に作られ、この土器が混入している可能性あり。遺物はごくわずかだが、土師器杯・壺・甕・甔等各種がある。時期不明の SK-88・90・91 に類似。								
SK-88	15.0-16.5	円形	SI-14・15 より新	1.09	0.99	0.22		
古墳後期末の竪穴 SI-14・15 覆土中にあり、SI-14・15 を切る。遺物はわずかな土師器杯・鉢・壺・甕・甔等の小破片ばかりで、時期を限定できない。縄文土器 1 点混入。時期不明の SK-87・90・91 と類似。								
SK-90	15.0-16.5	円形	SI-15 より新	1.01	0.89	0.14		
古墳後期末の竪穴 SI-15 を切る。北端にあるピット状部分は攪乱か? 遺物はごくわずかな土師器杯・高杯・甕・甔等の小破片だけで、時期を限定できない。時期不明の小さな円形土坑 SK-87・88・91 と同様な遺構だろう。								
SK-91	15.0-16.5	円形	重複なし	1.00	0.90	0.12		白色軽石粒あり
遺物は土師器杯・鉢などの小破片 3 点だけで、時期を限定できない。西に時期不明の SK-90、北に古墳中期の SK-92 がある。小さな円形土坑で、SK-90 に類似するので、SK-90 と同様に古墳後期の竪穴 SI-15 よりも新しいと推定される。時期不明の SK-87・88・90 等と同時期の可能性あり。								
SK-94	16.0-16.5	長方形	重複なし	2.76	0.95	0.10	N-8° -W	
遺物はごくわずかな土師器杯・高杯・壺・甕等の小破片ばかりで混入であろう。長方形で覆土が軟らかいため、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。								
SK-97	14.5-16.5	円形	重複なし	1.07	0.95	0.18		
遺物は少量の土師器小形壺・杯等があるが、周囲にある古墳中期の竪穴などから混入した可能性が高い。時期不明の SK-87・88 等と同様なものか?								
SK-103	14.0-17.5	楕円形	重複なし	1.59	1.23	0.27	N-5° -W	
確認調査トレンチに北側上部を削られる。古墳時代の竪穴 SI-22・107 と近接する。北東にやや離れて古墳時代の SK-106 があるが、土坑が集中する部分とはいええない。遺物は土師器壺類の胴部 2 片だけしかない。古墳時代の可能性もあるが確定ではない。								
SK-104	14.5-17.5	円形	重複なし	1.14	1.08	0.18		
谷に向かう斜面にあり、西に時期不明の SK-105 がある。遺物は土師器杯と壺類の小破片 5 点だけで、時期を限定できない。								
SK-105	14.5-17.5	不整形	重複なし	1.76	1.67	0.40		
遺物は土師器小破片 6 点で、時期を限定できない。古墳時代の可能性もあるが、確定ではない。縄文土器深鉢の小破片も混入していた。								
SK-109	13.5-17.0・17.5	円形	SD-108 より古	2.00	残 0.80	0.19		
時期不明の溝 SD-108 に切られる。SD-108 の南部底面に土坑南壁の痕跡あり。平面図では底面形状が不明。遺物はごくわずかな土師器だけで、模倣杯・漆仕上げ杯・長胴甕等はない。高杯杯部底面のミガキは少し隙間がある。古墳中期末以前の可能性が高いが、確定ではない。古墳時代の竪穴 SI-24・155 と近すぎるので異なる時期と思われる。								
SK-113	13.0-17.0	方形	重複なし	0.88	0.87	0.20		
時期不明の掘立柱建物 SB-157 の北東にある。西にやや離れてある古墳時代の SK-110・111・112 とは形が異なり、関連するとは言えない。出土遺物はない。SK-119 を参照。								
SK-117	12.5-16.5、13.0-16.5	円形	SI-26 より新	2.02	0.95 以上	0.25		
古墳中期の SI-26 を切る。遺物は少量の土師器で杯片が多く、壺類少量、高杯 1 点・甔 1 点があり、SI-26 とほぼ同時期で SI-26 からの混入と思える。覆土にしまりがなく、新しい時期の土坑か。								
SK-119	13.0-17.0	隅丸方形	重複なし	0.83	0.80	0.23	N-9° -W	
南半が確認調査トレンチに削られる。北に古墳時代の SK-110 がある。古墳時代の可能性もあるが、根拠は薄い。北東 8m にある SK-113 と類似する。出土遺物はない。								
SK-122	9.5-18.0	円形	重複なし	1.23	1.17	-		
低地への斜面にある。確認面下 30cm で湧水して、掘り下げを中止した面以下は状況不明。井戸の可能性もある。遺物は土師器甕? 底部と陶器 1 片。陶器片から近世以降の可能性あり。								
SK-123	9.5-17.5、10.0-17.5	楕円形	重複なし	1.85	1.06	0.46	N-79° -W	
遺物は土師器 3 点の他、便所甕のような陶器片・コンクリート片等。ごく新しい時期と考えられる。								
SK-124	9.0-17.5・18.0	楕円形	重複なし	0.85	0.58	0.30	N-28° -W	
出土遺物はない。時期は推定できない。								
SK-125	9.0-18.0	長方形	重複なし	2.39	1.04	0.52	N-80° -E	
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。出土遺物はない。								
SK-126	9.0-18.0	長方形	SE-127 より新	2.32	0.81	0.44	N-80° -E	
時期不明の井戸 SE-127 を切ると考えられる。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。出土遺物はない。								
SK-128	8.5-17.5・18.0、9.0-18.0	長方形	重複なし	1.69	0.67	0.40	N-78° -E	
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられる。出土遺物はない。								

第8章 権現山遺跡 SG5 区

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-131	15.0-16.5	長方形	SI-14 → SK-132 → SK-131	2.83	0.64	0.32	N-30°-E	
古墳後期の竪穴 SI-14 と時期不明の SK-132 を切る。遺物は全て他遺構からの混入で、SI-14 から混入した可能性大。近代以降の農業関連土坑（イモ穴）か。								
SK-132	15.0-16.5	円形	SI-14 → SK-132 → SK-131	0.95	—	0.18		
古墳後期の竪穴 SI-14 を切る。時期不明の SK-131 に切られる。北側に SI-14 を切る時期不明の SK-87・88 等があり、これらと同じ時期に作られた可能性がある。出土遺物はない。								
SK-139	15.0-16.5	円形	重複なし	0.92	0.83	0.08		
中世の土坑 SK-138 の南にあることから、SK-138 に近い時期の可能性あり。出土遺物はない。								
SK-141	14.5-16.5	円形	重複なし	1.01	0.92	0.12		
古墳後期の SD-41 の東にある。遺物はホルンフェルス破片（剥片？）1 点と土師器壺・甕 1 片のみで、時期を限定できない。古墳中期の SK-142 と近接し、古墳時代と考えることもできる。								
SK-143	15.0-17.0	円形	重複なし	1.53	1.49	0.37		
遺物は縄文（または弥生）土器片 1・土師器小破片 1・ホルンフェルス剥片 1 だけで、時期を限定できない。古代以前の遺構のように覆土がしまり、現代に近い土坑ではない。								
SK-146	15.5-17.0	隅丸長方形	SD-148 より新					
時期不明の SD-148 を切る。土師器小破片あり、平面図に図示されているが、遺物番号を付けて取り上げていない。杯（内面漆仕上げあり・ミガキなし）・高杯・鉢・壺・甕等がある。古墳中期的な土器が多いが、7～8 世紀中葉の白色胎土の杯の体～底部が入っており、7 世紀中葉以降の土坑である。								
SK-147	14.0-16.5・17.0	楕円形	重複なし	1.33	1.19	0.16	N-10°-E	
古墳後期の竪穴 SI-19 の南にある。出土遺物はない。古墳中期中～後葉の SK-51・96 の近くにあるため、古墳時代の可能性もあるが、具体的な根拠はない。								
SK-150	15.5-16.0	円形 柱穴状	SD-148 より新	0.50	0.45	0.16		
時期不明の SD-148 を切る。遺物は古墳中期頃と見られる土師器小形壺の体部 2 片のみで、土坑の時期は限定できない。古墳中期の SK-149 と揃えると掘立柱建物になる可能性もある。								
SK-152	15.5-17.0	長方形	重複なし	3.14	0.65	0.32	N-8°-E	
南北に長い長方形。遺物は土師器 9 点で、杯内面にミガキがない漆仕上げの白褐色胎土の土師器杯片は、7 世紀中葉頃以降。土層の様子から 2 期の重複の可能性があり、これは近代以降の農業関連土坑（イモ穴）のあり方である。覆土が新しいとは記載されていないため、時期は決められない。重複の様子がはっきりすれば現代の土坑となる。								
SK-153	15.5-17.0	長方形	重複なし	1.78	0.70	0.26	N-4°-W	
出土遺物はない。時期不明の SK-152 と方位が揃うが、確認面の様子が不明瞭で覆土にしまりがあるので、近代以降の農業関連土坑（イモ穴）ではないように見える。どこまで時期が遡るかは分からない。								

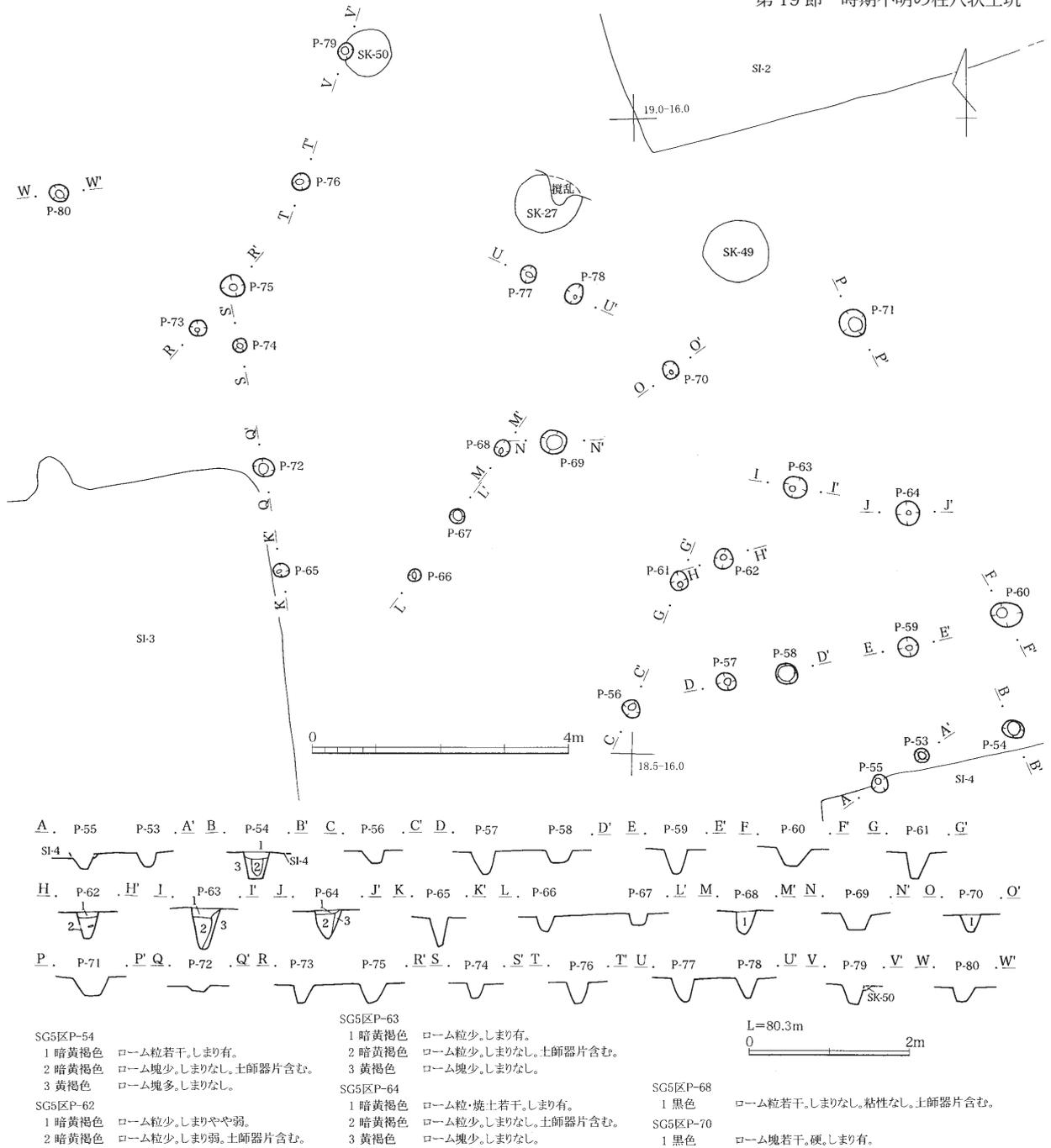
第 215 表 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG5 区 SK-30				
1 土師器 杯	高 残 2.3 最大 復 13.0	外面口縁部ヨコナデ、体部ケズリで上端無調整部分あり。内面体部ヨコナデ。内外面漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 緻密 砂細粒少、白粗粒微量 やや硬質	体一部
SG5 区 SK-46				
1 土師器 甕	高 残 1.4 底 4.4	外面胴部下端ケズリ、底部ナデで、外周は平坦、内側のみくぼむ。内面底部ナデ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 砂粗～細粒少、白・ 赤粗粒微量 硬質	底上 5cm 底一部欠 1
SG5 区 SK-104				
1 土師器 甕	高 残 2.3 底 復 6.6	外面胴部下半ケズリのちナデ、底部ケズリ。底部は平底で、浅くくぼむ。内面胴部下端～底部ヘラナデ。	5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・赤粗～細粒少 やや軟質	底上 5cm 胴下端～底 1/4 周 6
SG5 区 SK-117				
1 土師器 杯	口 復 11.4 高 残 3.5	表面が溶けるように磨滅・剥落しており、調整不明な部分多い。外面口縁部ヨコナデ・体部ナデ。内面調整不明。	2.5YR6/8 橙 やや緻密 赤粗～細粒少、白細 粒微量 やや軟質	口～体 1/5 周 SE-117 覆土
SG5 区 SK-122				
1 陶器 碗	口 復 14.0 高 残 3.0	内外面に緑色の文様が描かれる。残存部全体に透明釉施軸。	2.5Y7/2 灰黄 緻密 黒・赤微粒微量 硬質	口縁部破片

第 19 節 時期不明の柱穴状土坑（第 373～376 図、写真図版 39）

時期不明の柱穴状土坑（ピット）は SG5 区で 74 基を調査した。SG5 区北端の柱穴状土坑群 P-53～P-80 から出土した遺物はごくわずかである。P-79 までの柱穴状土坑に少量ずつ入っている遺物は小破片ばかりで詳しい時期が不明だが、模倣杯・長胴甕が入らないことから、P-53～P-80 は古墳中期中葉～後葉の可能性もある。ただし、覆土や柱痕部にしまりが無い土坑があるので、後世の土坑に古墳時代集落の遺物が混入したとも考えられる。P-80 以降については時期の手がかりがきわめて少ない。土坑覆土中の白色粒は、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラの可能性があり、古墳時代遺構を判別する手がかりの一つである。ただし、Nt-S（男体 - 七本桜軽石＝縄文草創期）の二次流入粒や、As-B（12 世紀初）と考える余地も残る。P-264～267 は、低地部の古墳時代遺物包含層調査区にある古墳時代土坑群の周辺にあり、古墳時代遺構の可能性もあるが、覆土の記録がない。柱穴状土坑の詳細を次表に示す。

第 19 節 時期不明の柱穴状土坑

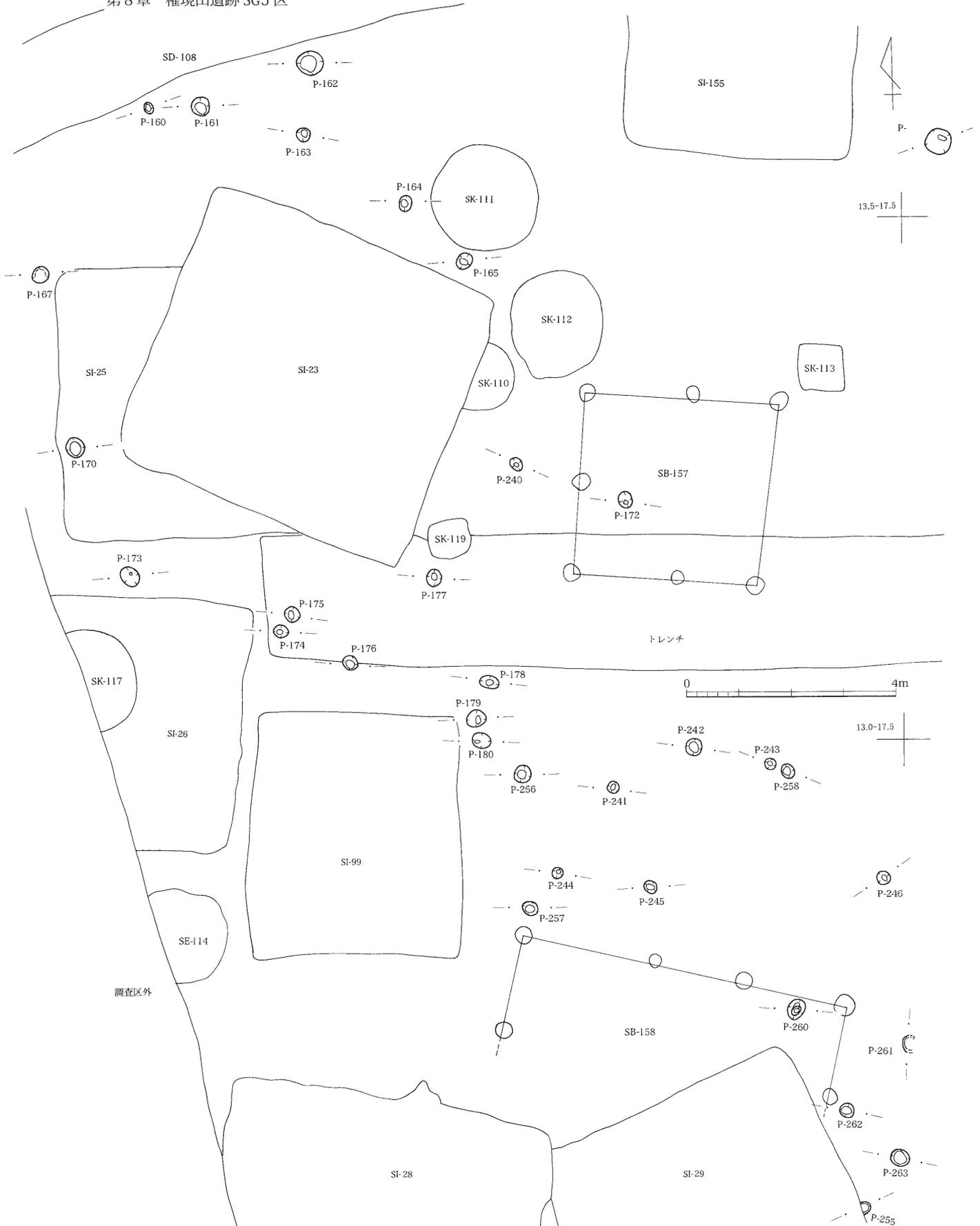


第 373 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (1) 遺構

第 216 表 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑

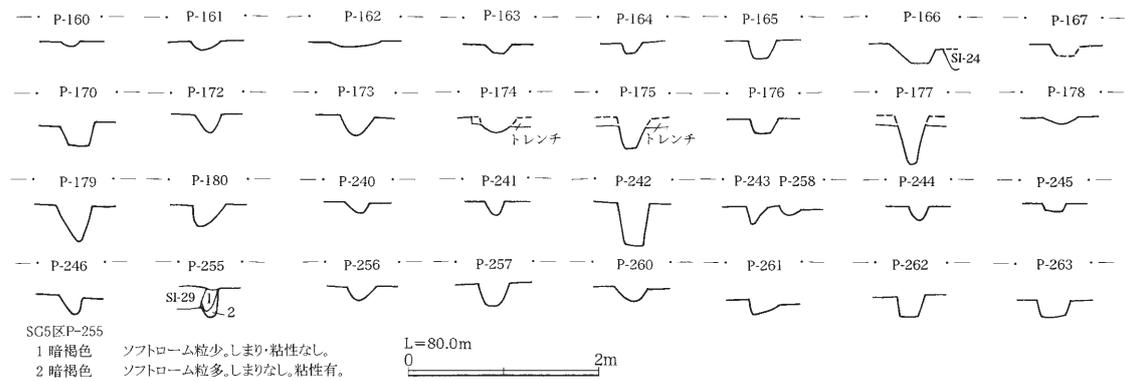
遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	覆土
P-53	18.0-16.0、18.5-16.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.18	記録なし
出土遺物はない。							
P-54	18.5-16.0	円形	重複なし	0.34	0.28	0.35	柱痕部のしまりなし
出土遺物は少量で土師器甕・高杯片のみ。							
P-55	18.0-16.0	円形	SI-4より新	0.28	0.25	0.20	記録なし
古墳時代のSI-4を切る。出土遺物は少量で土師器器片1点。							
P-56	18.5-15.5・16.0	円形	重複なし	0.28	0.26	0.15	記録なし
出土遺物はない。							
P-57	18.5-16.0	円形	重複なし	0.30	0.29	0.30	記録なし
出土遺物はない。							
P-58	18.5-16.0	円形	重複なし	0.34	0.33	0.16	記録なし
出土遺物は少量で土師器甕・杯片のみ。							
P-59	18.5-16.0	円形	重複なし	0.32	0.30	0.31	記録なし
出土遺物は少量で土師器杯1点のみ。							

第8章 権現山遺跡 SG5 区



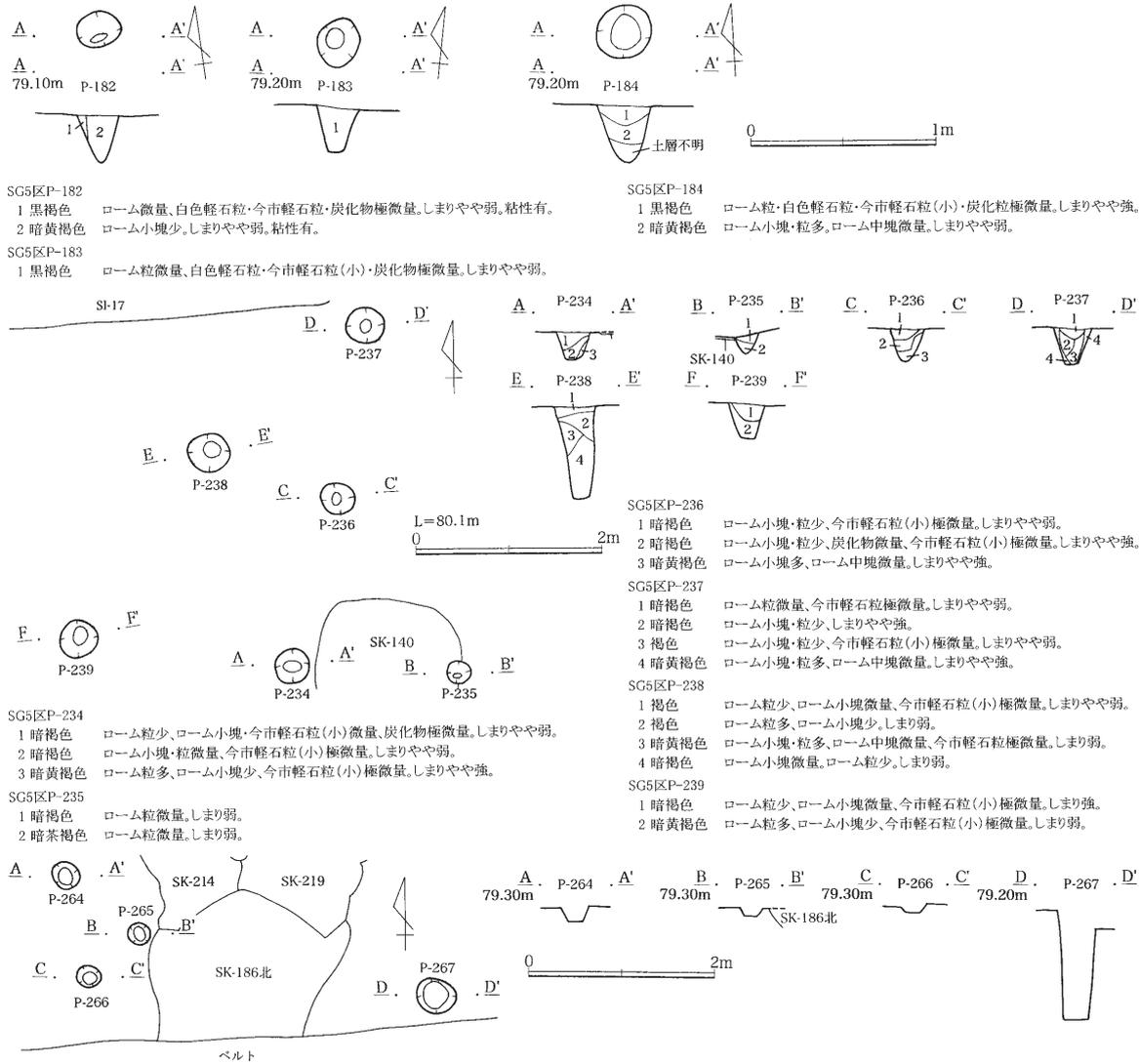
第 374 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (2) 遺構

P-60	18.5-16.0	楕円形	重複なし	0.50	0.40	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-61	18.5-16.0	円形	重複なし	0.30	0.26	0.33	記録なし
出土遺物は少量で土師器裏片 2 点のみ。							
P-62	18.5-16.0	円形	重複なし	0.31	0.28	0.34	上下 2 層 しまり弱
出土遺物は少量で土師器裏片 1 点のみ。							
P-63	18.5-16.0	円形	重複なし	0.37	0.33	0.52	柱痕部のしまりなし
出土遺物は土師器裏片・高杯片などがあり、柱穴状土坑としては多い方。							
P-64	18.5-16.0	円形	重複なし	0.38	0.37	0.35	柱痕部のしまりなし
出土遺物は少量で土師器裏片のみ。							
P-65	18.5-15.5	円形	重複なし	0.26	0.22	0.36	記録なし
出土遺物はない。							
P-66	18.5-15.5	円形	重複なし	0.22	0.20	0.19	記録なし
出土遺物は土師器裏片 1 点のみ。							
P-67	18.5-15.5	円形	重複なし	0.24	0.23	0.15	記録なし
出土遺物はない。							
P-68	18.5-15.5	円形	重複なし	0.26	0.24	0.29	単層 しまりなし
出土遺物は少量で土師器裏片・杯片のみ。							
P-69	18.5-15.5	円形	重複なし	0.40	0.37	0.20	記録なし
出土遺物はない。							
P-70	18.5-16.0	円形	重複なし	0.29	0.25	0.23	単層 しまり有
出土遺物は少量で土師器裏片 2 点のみ。							
P-71	18.5-16.0	円形	重複なし	0.42	0.40	0.25	記録なし
出土遺物は少量で土師器裏片 1 点のみ。							
P-72	18.5-15.5	円形	重複なし	0.33	0.28	0.09	記録なし
出土遺物はない。							
P-73	18.5-15.5	円形	重複なし	0.26	0.24	0.23	記録なし
出土遺物はない。							
P-74	18.5-15.5	円形	重複なし	0.22	0.21	0.18	記録なし
出土遺物はない。							
P-75	18.5-15.5	円形	重複なし	0.37	0.33	0.25	記録なし
出土遺物はない。							
P-76	18.5-15.5	円形	重複なし	0.28	0.27	0.27	記録なし
出土遺物は少量で土師器杯片 1 点のみ。							
P-77	18.5-15.5	円形	重複なし	0.28	0.24	0.29	記録なし
出土遺物はない。							
P-78	18.5-15.5	円形	重複なし	0.32	0.28	0.26	記録なし
出土遺物はない。							
P-79	19.0-15.5	円形	SK-50 と重複	0.27	0.24	0.24	記録なし
時期不明の土坑 SK-50 と重複するが新旧不明。出土遺物は少量で土師器裏片 2 点のみ。							
P-80	18.5-15.5	円形	重複なし	0.28	0.25	0.19	記録なし
出土遺物はない。							
P-160	13.5-16.5	円形	重複なし	0.22	0.19	0.05	記録なし
出土遺物はない。							
P-161	13.5-16.5	円形	重複なし	0.36	0.34	0.10	記録なし
出土遺物はない。							
P-162	13.5-16.5	円形	重複なし	0.52	0.47	0.06	記録なし
出土遺物はない。							
P-163	13.5-16.5	円形	重複なし	0.30	0.26	0.10	記録なし
出土遺物はない。							
P-164	13.5-17.0	円形	重複なし	0.30	0.24	0.13	記録なし
出土遺物はない。							
P-165	13.0-17.0	円形	重複なし	0.34	0.28	0.19	記録なし
出土遺物はない。							
P-166	13.5-17.5	円形	重複なし	0.50	0.46	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-167	13.0-16.5	円形	重複なし	0.34	0.29	0.13	記録なし
出土遺物はない。							
P-170	13.0-16.5	円形	SI-25 と重複	0.40	0.35	0.26	記録なし
古墳時代の竪穴 SI-25 と重複するが新旧不明。出土遺物はない。							



第 375 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構

第8章 権現山遺跡 SG5 区



第 376 図 権現山遺跡 SG5 区 時期不明の柱穴状土坑 (4) 遺構

P-172	13.0-17.0	円形	重複なし	0.30	0.28	—	記録なし
時期不明の掘立柱建物 SB-157 の範囲内にある。出土遺物はない。							
P-173	13.0-16.5	円形	重複なし	0.38	0.31	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-174	13.0-16.5	円形	重複なし	0.30	0.27	0.09	記録なし
確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-175	13.0-16.5	円形	重複なし	0.29	0.25	0.24	記録なし
確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-176	13.0-16.5	円形	重複なし	0.28	0.24	0.15	記録なし
北半部が確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-177	13.0-17.0	円形	重複なし	0.30	0.28	0.41	記録なし
北半部が確認調査トレンチに削られる。出土遺物はない。							
P-178	13.0-17.0	楕円形	重複なし	0.39	0.24	0.09	記録なし
出土遺物はない。							
P-179	13.0-17.0	円形	重複なし	0.36	0.32	0.39	記録なし
出土遺物はない。							
P-180	12.5-17.0、13.0-17.0	円形	重複なし	0.35	0.30	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-182	11.0-17.5	円形	重複なし	0.24	0.20	0.25	白色軽石粒有 しまり弱
出土遺物はない。低地寄りにある。							
P-183	11.5-17.5	円形	重複なし	0.27	0.24	0.26	白色軽石粒有 単層 しまり弱
出土遺物はない。							
P-184	11.5-17.5	円形	重複なし	0.30	0.28	0.31	白色軽石粒有
出土遺物はない。							
P-234	14.5-16.0・16.5	円形	重複なし	0.38	0.36	0.32	自然埋没
出土遺物はない。							
P-235	14.5-16.5	円形	SK-140 と重複	0.25	0.24	0.32	上下 2 層 しまり弱
古墳時代の土坑 SK-140 と重複するが新旧不明。出土遺物はない。							

第 19 節 時期不明の柱穴状土坑

P-236	14.5-16.5	円形	重複なし	0.38	0.34	0.35	自然埋没
出土遺物はない。							
P-237	14.5-16.5	円形	重複なし	0.41	0.40	0.40	柱痕部のしまりやや弱
出土遺物はない。							
P-238	14.5-16.0	円形	重複なし	0.47	0.42	1.00	人為埋戻か
非常に深い。出土遺物はない。							
P-239	14.5-16.0	円形	重複なし	0.42	0.38	0.37	自然埋没
出土遺物はない。							
P-240	13.0-17.0	円形	重複なし	0.28	0.21	0.12	記録なし
出土遺物はない。							
P-241	12.5-17.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.16	記録なし
出土遺物はない。							
P-242	12.5-17.0、13.0-17.0	円形	重複なし	0.34	0.32	0.46	記録なし
出土遺物はない。							
P-243	12.5-17.0	円形	重複なし	0.24	0.22	0.20	記録なし
出土遺物はない。							
P-244	12.5-17.0	円形	重複なし	0.22	0.20	0.14	記録なし
出土遺物はない。							
P-245	12.5-17.0	円形	重複なし	0.27	0.24	0.09	記録なし
出土遺物はない。							
P-246	12.5-17.0	円形	重複なし	0.26	0.24	0.20	記録なし
出土遺物はない。							
P-255	12.5-17.0	円形	SI-29 より古	0.22	—	0.30	柱痕部のしまりなし
古墳時代の竪穴 SI-29 に切られる。出土遺物はない。							
P-256	12.5-17.0	円形	重複なし	0.35	0.28	0.15	記録なし
出土遺物はない。							
P-257	12.5-17.0	円形	重複なし	0.34	0.28	0.23	記録なし
出土遺物はない。							
P-258	12.5-17.0	円形	重複なし	0.28	0.24	0.12	記録なし
出土遺物はない。							
P-260	12.5-17.0	円形	重複なし	0.40	0.30	0.16	記録なし
時期不明の柵列 SA-158 の範囲内にある。出土遺物はない。							
P-261	12.5-17.0	円形	重複なし	0.32	—	0.17	記録なし
出土遺物はない。東半部は図化されていない。							
P-262	12.5-17.0	円形	重複なし	0.30	0.26	0.22	記録なし
出土遺物はない。							
P-263	12.5-17.0	円形	重複なし	0.36	0.31	0.18	記録なし
出土遺物はない。							
P-264	12.0-17.5	円形	重複なし	0.30	0.26	0.17	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺にある。出土遺物はない。							
P-265	12.0-17.5	円形	重複なし	0.25	0.23	0.10	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺にある。出土遺物はない。							
P-266	12.0-17.5	円形	重複なし	0.27	0.25	0.10	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺にある。出土遺物はない。							
P-267	12.0-18.0	円形	重複なし	0.40	0.38	1.20	記録なし
低地部の古墳時代の土坑群周辺で、東へ傾斜する地形に所在する。非常に深い。出土遺物はない。							

第9章 権現山遺跡 SG9 区

権現山遺跡 SG9 区は、上三川町大字磯岡字西谷 406-1・406-3・407-1・407-2・408-1・408-5・409-1・409-2 に所在し、「西谷田」の低地部に立地する。権現山 SG9 区の位置は北緯 36° 28′ 50″、東経 139° 54′ 23″（世界測地系）である。権現山遺跡 SG9 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.0～79.2m、東側の磯岡遺跡 SG9 区（標高 79.4m）との比高が約 0.4m である。権現山 SG9 区の範囲は南北長 140m × 東西幅 85m で、調査面積は 4,800m²。権現山遺跡 SG9 区の調査時名称は「杉村遺跡 IX 区」である。遺跡名称・範囲の見直しが行われた結果として、「杉村遺跡 IX 区」のうち東区が磯岡遺跡、中央区から西区が権現山遺跡の範囲に含まれることになった。これに従い、本報告においては東区を「磯岡遺跡 SG9 区」、中央区と西区を「権現山遺跡 SG9 区」と呼称する。

権現山遺跡 SG9 区の北側には SG2 区が続く。1995 年に調査を実施した権現山遺跡 SG2 区の南端部は、権現山遺跡 SG9 区でも重複して調査を行った部分があり、SG2 区で調査済の土坑を再度確認している。この時に、SG2 区中央部南端で南北ベルト下に隠れていた土坑 4 基（SG9 区 SK-19～22）と溝 SD-34 の調査を実施できた。また、SG2 区で調査済みの土坑を SG9 区で再度調査した部分もある。

権現山遺跡 SG9 区の南側に隣接する、一般県道雀宮真岡線改良工事に伴う権現山遺跡の 1999 年度調査区（とちぎ生涯学習文化財団 2000、正式報告未刊）では、SG9 区と関連・連続する遺構はないが、自然堆積層中に自然流木が埋没していた。SG9 区南側の県道調査区「7 区砂層中」で、5.5-23.5 グリッドの標高 77.0～77.6m 付近において、縄文時代晩期ころの埋没樹木層を確認している（位置は第 256 図下端）。この埋没木材の放射性炭素年代は 2710 ± 60 年 BP であり、 δ 13C 測定値（-27.9‰）から 14C/12C の測定値を補正した上で算出した年代は 2,660 ± 60 年 BP となっている。この年代測定結果が判明する前に書かれた概要報告では旧石器時代の流木と記述されている（とちぎ生涯学習文化財団 2000）。

SG9 区の調査は 1999 年 12 月に開始し、翌年 3 月まで実施した。遺構調査と航空写真撮影（2 月 24 日）が終了した後に、重機で地山断ち割りトレンチ（A～D）を掘って自然堆積層の土層断面図を作成した。権現山 SG9 区の西側は、権現山遺跡 SG5 区のある台地の東側縁辺部にあたり、東側の低地へなだらかに下る。この付近の遺構は、北端で時期不明の土坑 3 基・道路状遺構 1 箇所、南端で時期不明の土坑 1 基を確認した。遺物は、西側台地上の SG5 区古墳時代集落から流入したとみられる古墳中期土師器破片が Hr-FA テフラ層下や地山礫層直上から出土している。権現山 SG9 区中央区の低地では、中洲状の微高地上で時期不明の土坑群が確認された。中央区の南東隅部では段丘下のよどみ状部分で古墳時代の土師器杯・甕や勾玉などが出土している。この他に遺構外から縄文・弥生土器および石鏃・打製石斧、古墳時代の土器片、古代の須恵器杯などが出土した。縄文・弥生土器および石器は『東谷・中島地区遺跡群 10』（pp.69, 88, 102）で報告した。同書第 45 図 10 に掲載した石鏃は、第 13 表では「4 区」となっているが、注記に示されているとおり SG9 区出土品なので、ここで訂正する。

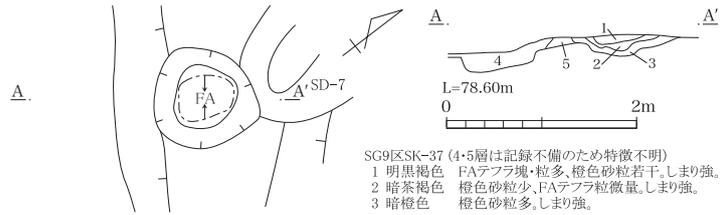
第 1 節 古墳時代の土坑

権現山 SG9 区 SK-37（第 378 図、写真図版 64）

SG9 区中央区の 6.5-23.0 グリッドにある。南西側が低地へ向かって低くなる場所に立地する。時期不明の SG9 区 SD-7 に切られる。断面図の西側にはこの土坑よりも先行する窪みが 4 層・5 層として記録されるが、遺構としては認定されていない。SK-37 はほぼ正円形で口径は短径 105 × 長径 115cm、残存する深さは最大 19cm。埋土は自然埋没状で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラが最上層に認められるので古墳中期末ころの土坑と考えられる。東に隣接する磯岡遺跡 SG9 区 SI-49 などの古墳時代集落と関係する遺

第9章 権現山遺跡 SG9 区

構であろう。遺物は出土しなかった。



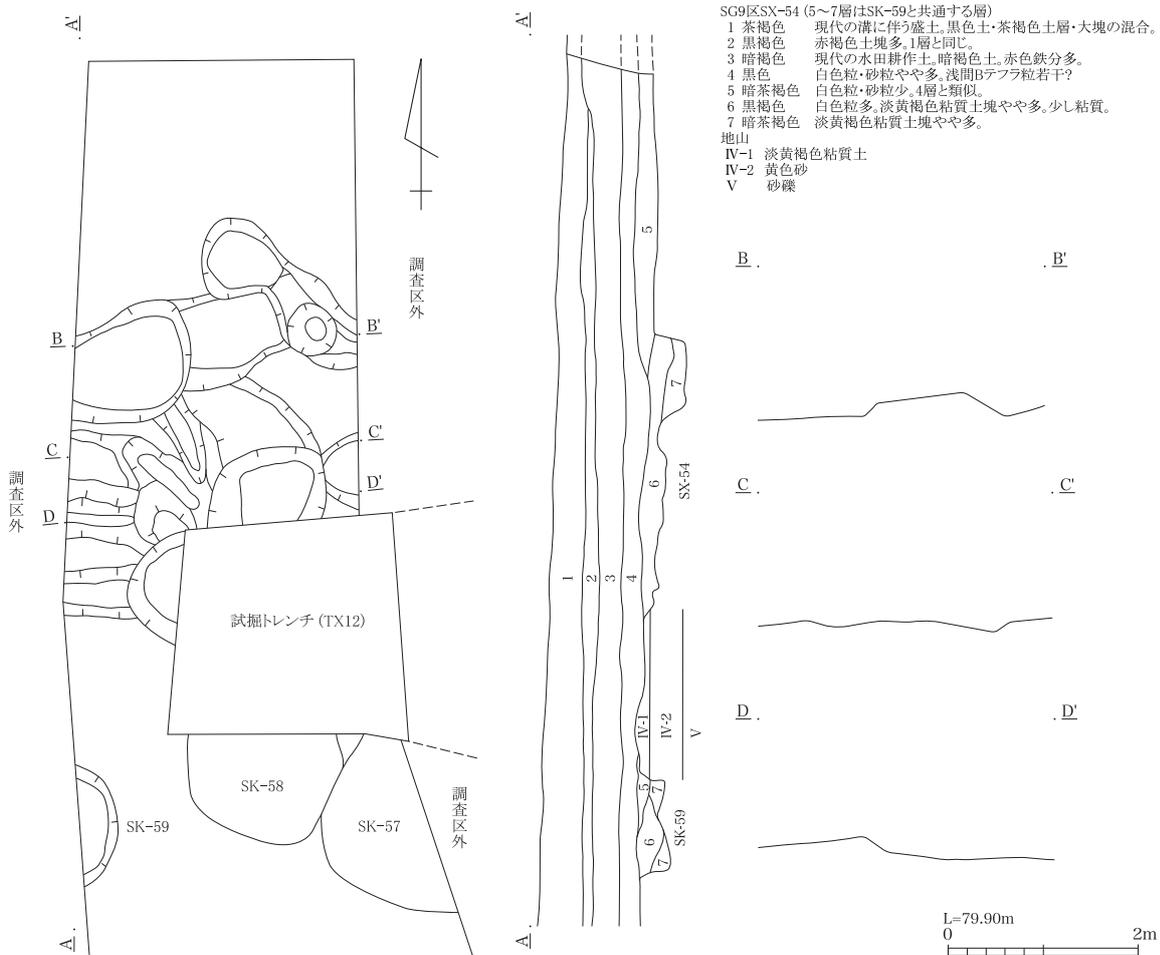
第 378 図 権現山遺跡 SG9 区 SK-37 遺構

第 2 節 時期・性格不明の遺構（通路状遺構？）

権現山 SG9 区 SX-54（第 379 図、写真図版 64）

[位置] SG9 区の西区北端付近で 12.0-18.5 グリッドにあり、西側は調査区外で現代の農業用水路があり、その西側に権現山遺跡 SG5 区がある。東側も調査区外へ少し延びるとみられる。重複する遺構はない。現地調査時には土坑状に深い北西部・中央部・南東部にそれぞれ「SK-54・55・56」の名称を与えた。全体が一連の凹凸面と考えられるので、整理作業時に「SX-54」へ改称した。時期不明の土坑 SK-57・58・59 が南側に近接し、SK-59 は覆土が共通するので SX-54 と時期が近い。

[規模と形状] 主軸方位は不明確だが東西方向で、およそ GN-64° -E 前後である。南端が試掘トレンチ(TX12)で消滅して不明確だが、南北幅は 160～170cm 程度と考えられる。通路状遺構（道路遺構）のように波板状の凹部が並列するような規則性は認められない。残存する各凹面の深さは、南部で 9～22cm、北部



第 379 図 権現山遺跡 SG9 区 SX-54 遺構

で2～24cm。底面標高は南部で78.30～78.67m、北部で78.30～78.58m。6層上面の標高は78.66～78.76mである。

〔覆土〕調査区西壁と一連の土層図・土層番号で表示した。1層は調査区西外の農業用水路に関わる盛土で、2・3層は現代の水田耕作に伴う土層である。4～6層に白色粒を含む。SX-54を覆う4層と5層に含まれる白色テフラ粒は、12世紀初めに降下した浅間B軽石(As-B)と肉眼観察で判断されている。この観察が正しければ12世紀以前の遺構と考えられる。ただし、テフラ検出・同定分析は実施していない。4～5層は砂粒も含む。

6～7層は粘質土で、SX-54が通路状遺構であれば、路面を形成するために埋め戻した整地土層ということになるが、人為的に埋め戻した土層かどうかは明確ではない。6・7層中の淡黄褐色粘質土塊はSX-54が掘り込まれている地山土の塊で、それほど大きな塊ではない。通路状遺構にしばしば伴う、強く締まる砂層はない。6層と7層は類似しているので、ごく短い間に埋まったのであろう。南側1.6mにある時期不明の土坑SK-59に同じ土質の5・6・7層が自然埋没状に堆積しているので、人為的に埋め戻した層ではない可能性もある。

〔遺物と性格〕遺物は出土しなかった。凹凸面が連続するので、通路状遺構の可能性もある。ただし、人為的に埋め戻したかどうか不明なので断定はできない。周辺遺跡の通路・道路遺構は、凹凸面を中心として人為的に埋め戻されていた。砂田3区の道路遺構SF-188の埋土は砂粒主体で非常に硬くしまった土で(藤田・田代2002)、立野2区SX-23の埋土はローム塊が主体である(内山2005)。

SX-54を通路状遺構と考えた場合は、SG5区付近の台地から東側低地(SG2区の流路3)に向かう「昇降施設」あるいは「降り口施設」の可能性はある。この位置から東側に続く自然流路(SG2区のB区にある流路3)の底面標高は、SG2区TX12におけるVII層下面や基盤層上面のレベルからみて78.2m前後なので、SG9区SX-54の6層上面からSG2区流路3の底面まで0.5～0.6mほど降りてゆくことになる。

低地や溝へ昇降する通路状遺構は、近隣の砂田遺跡24区(津野他2007)・同遺跡22・36・37区(整理作業中、『東谷・中島地区遺跡群』15掲載予定)・同遺跡宇都宮市調査A区(中山・青木他2005)、砂田姥沼遺跡2区・3区(藤田2011)、中島笹塚遺跡8区(内山2008)、立野遺跡2区(内山2005)で古墳後期から9世紀までの例がある。また、百目鬼遺跡SD-124・125に附属する事例は古墳中期の可能性がある(谷中他2001・上野2005,p.561)。昇降施設でない古代の道路状遺構は、砂田遺跡3・12・25区(『東谷・中島地区遺跡群』2・13・15)、磯岡遺跡(第411図)、推定東山道跡(藤田2003)がある。

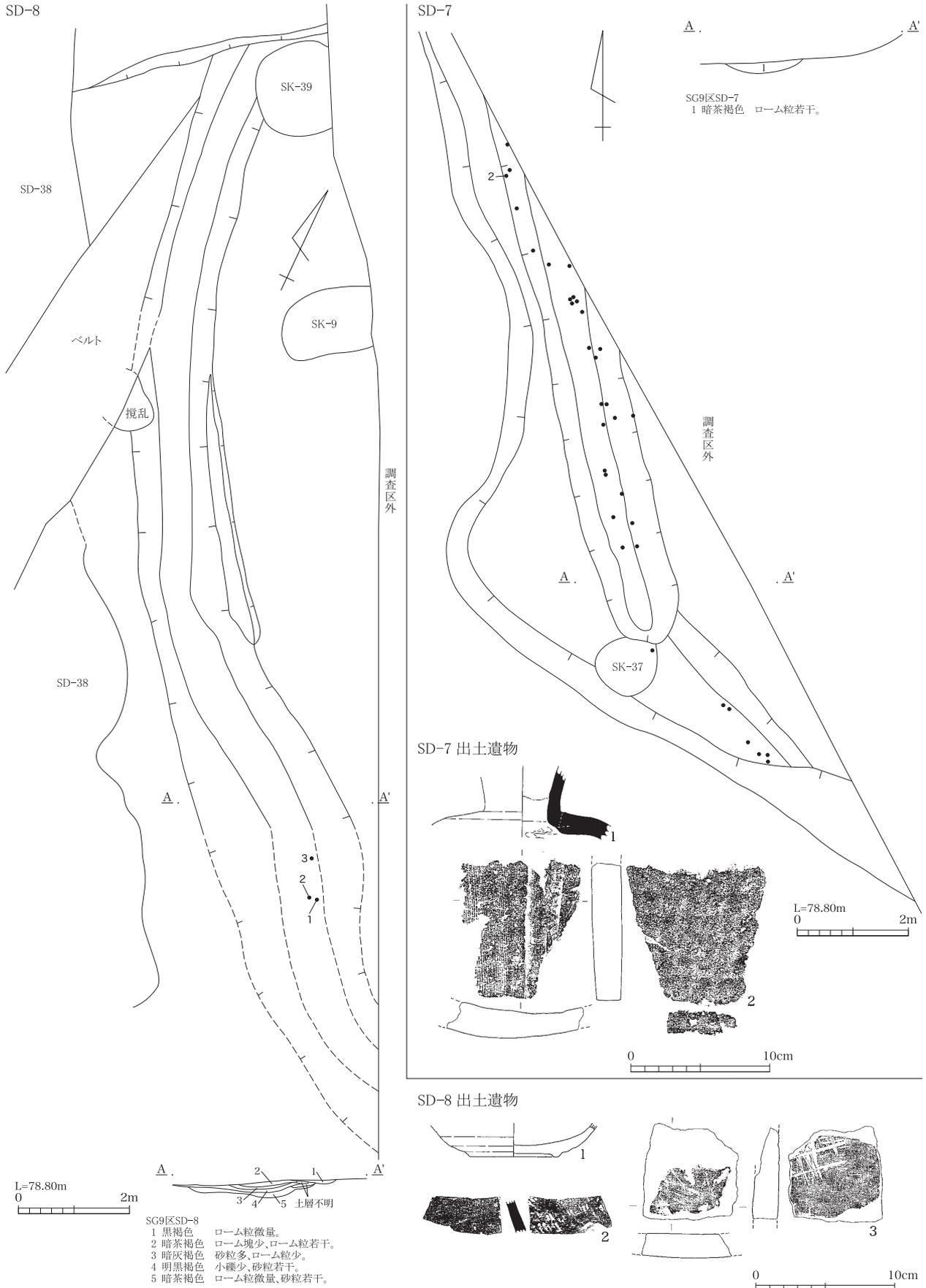
第3節 時期不明の溝

権現山SG9区SD-7(第380図右、写真図版65・188)

SG9区中央区東端の6.5-23.0および7.0-23.0グリッドにある。東側の磯岡遺跡から延びる低台地の西縁に作られた溝である。北側は調査区外へ続き、さらに北側のSD-8と連続する可能性がある。地山のローム層が東から西へ傾斜する面がSD-7のすぐ西にあるので、平面図にその傾斜面も表示した。古墳時代のSG9区SK-37を切る。それよりも南側ではSD-7の状況が分からなくなる。SK-37の東側にある地山ローム層の落ち込みが、SD-7の東半部かもしれない。

幅128～143cm、残存する深さは12～15cmで、底面が南へ傾斜し、底面標高は北端で78.46m、南端で78.38m。埋土は単層で、テフラの層や粒は見られない。遺物はいずれも混入品と見られ、古墳時代中期後半頃の土師器を主体として、縄文土器、古墳前期(?)のハケ調整甕破片、奈良～平安時代の須恵器瓶(1)、8世紀中葉の瓦(2)、平安時代の常総型土師器甕が少量見られる。SD-8と連続する溝であれば、近世以降の溝と考えられる。

第9章 権現山遺跡 SG9 区



第 380 図 権現山遺跡 SG9 区 SD-7・8 遺構・遺物

第217表 権現山遺跡 SG9 区 SD-7 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 瓶	頸高 5.4 残 5.2	胴部上面を粘土板で閉塞した後に、孔を開けて頸の基部を差し込んだように見える。内面肩部はやや雑なナデとユビオサエで、それ以外の内外面は右回転(時計回り)のロクロで回転ヨコナデ。暗緑色の自然釉が外面に多量に附着し、頸内面でも中位まで及ぶ。益子窯産?	5Y5/1 灰 やや粗い 白粗～細粒多、白礫少 硬質	頸 1/3 周
2 平瓦	長幅重 残 11.1 残 10.2 残 253.7	凸面の残存部に叩きはなない。凹面は模骨痕があり布目も残るが、広い範囲を縦方向にヘラケズリ。残存する端縁部もヘラケズリ。宇都宮窯産。	N4/0 灰 やや粗い 白礫～細粒多、透明細粒少 やや硬質	北部底上 3cm 1

権現山 SG9 区 SD-8 (第 380 図左と右下、写真図版 65・188)

SG9 区中央区東端の 7.5-22.5 および 8.0-22.5 グリッドにまたがり、東側の磯岡遺跡から延びる低台地の西縁に作られた溝である。南東側は調査区外まで伸びて、SD-7 と連続する可能性がある。北端は遺構確認面が一段低くなるところで SD-8 も認められなくなるが、調査区外まで延びていたと考えられる。南端は遺構を掘りすぎてしまったために破線部は推定形状で、調査区東壁に見える土層の高まりから判断した。時期不明の SK-39 と重複するが新旧関係は不明。溝幅は北部で 116～120cm、南部で 170～264cm。残存する深さは北部で 11～14cm、南部では(高い東側確認面から計測して)深さ 21cm。底面が南へ傾斜し、底面標高は北端で 78.65m、南端で 78.46m。埋土は自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。陶器碗(1)からみて、近世以降の溝と考えられる。この碗は灯明具に使った可能性もある。また研磨痕のある近世以降の瓦(3)、古墳時代の須恵器片(2)、縄文土器・土師器破片もある。2 は東に隣接する磯岡遺跡 SG9 区の SD-40 に同一個体の破片があり、同じ遺物の破片が両遺構に流入したのであろう。

第218表 権現山遺跡 SG9 区 SD-8 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 碗	高底 残 2.5 復 6.4	外底面は倒立してロクロ右回転による回転ヘラケズリ。高台も削り出し。内外全面に厚く長石釉を施し、高台底面は釉を拭き取る。また、高台内の施釉も少ない。破面の狭い範囲に黒褐色のタール状附着物があるので、破損した状態で灯明具に用いていたのかもしれない。	5Y7/1 灰白 やや緻密 白・半透明粗～細粒 やや多 硬質	南部底上 7cm 底 5/12 周 1 A-A'2 層下部
2 須恵器 甕		外面は斜位の平行叩き。内面はうすすらとした不明確な同心円文当具痕で、当具の年輪が浮き出たものと見られる。外面に暗緑灰色の自然釉が少量附着し、やや汚く発泡している。内面は暗灰色(N3/B)。磯岡遺跡 SG9 区 SD-40 に同一個体の破片あり。	N6/B) 灰 緻密 白細粒やや多、白礫少 硬質	南部底上 6cm 胴部片 3 A-A'3 層上面
3 平瓦	長幅厚 残 7.0 残 6.6 1.7	凹面は多方向のナデ、凸面は非常に平滑。凸面に焼成後の擦痕が深く格子状に施されているので、研磨具に転用しているかもしれない。	5Y4/1 灰 やや緻密 白礫～細粒と透明細粒少 硬質	南部底上 6cm 破片 2 A-A'2 層下部

権現山 SG9 区 SD-34 (第 381 図)

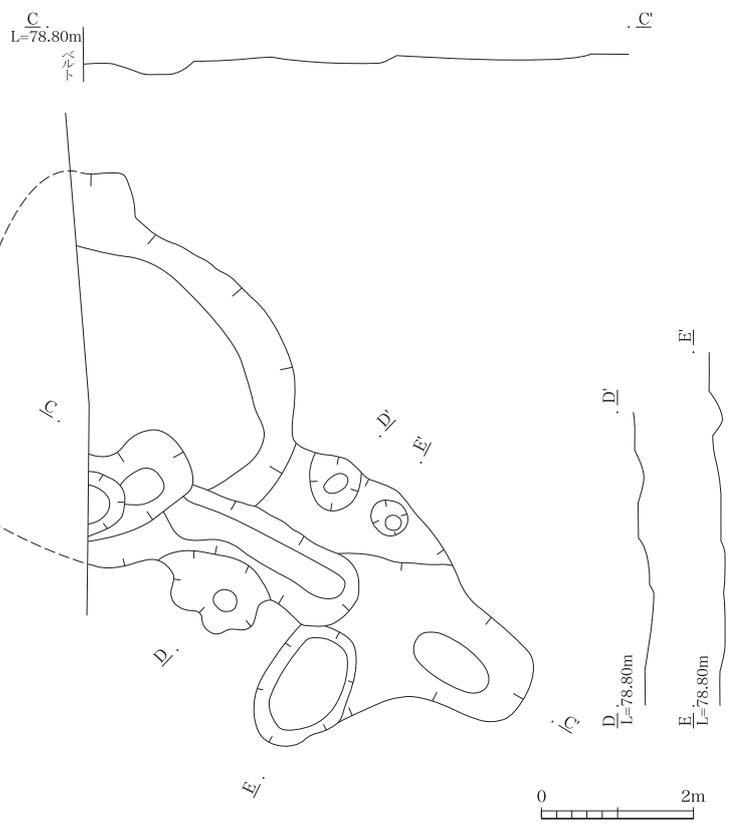
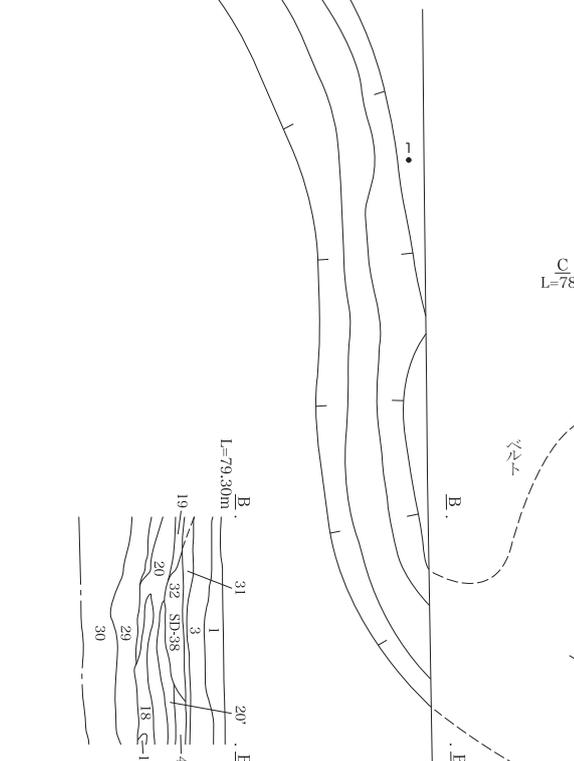
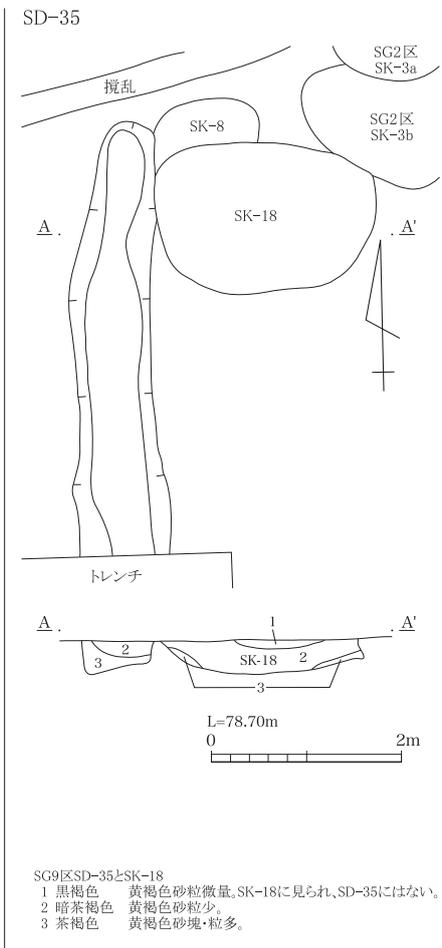
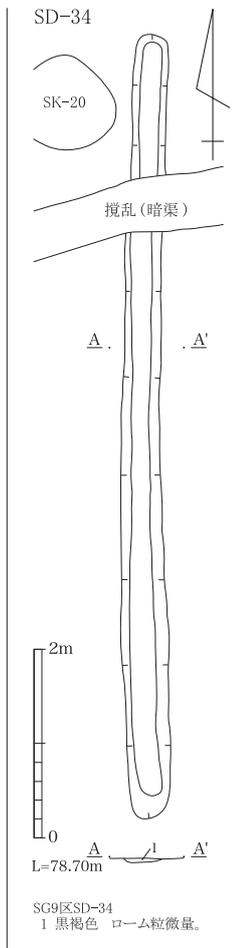
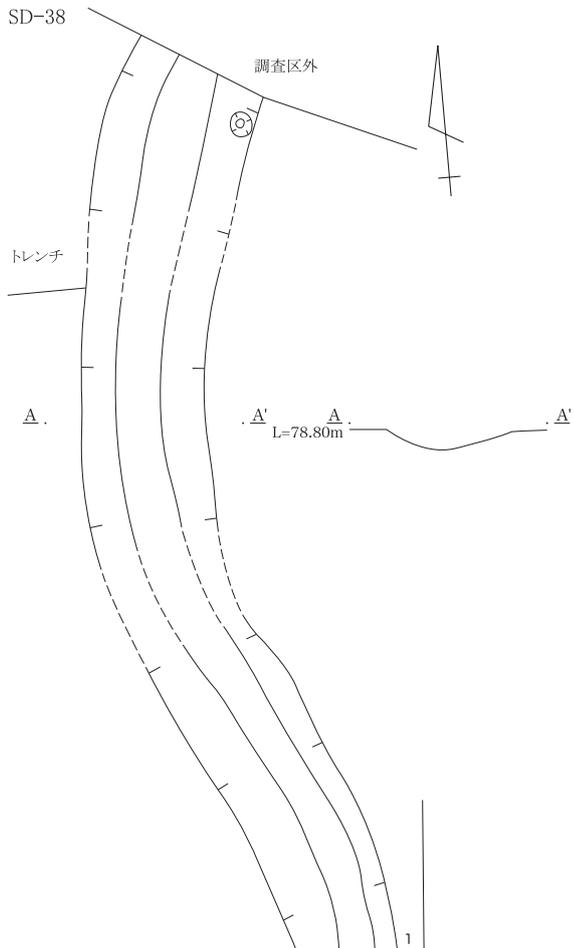
SG9 区中央区の 8.0-21.0 および 8.5-21.0 グリッドにまたがる。東西方向の暗渠(近代以降の農業用水関連遺構)に北部で重複するが前後関係は不明で、暗渠よりも浅い。時期不明の SK-20 と近接する。幅 36～51cm、残存する深さは 1～5cm で、底面の高さには大きな高低差がなく、底面標高は北端で 78.63m、中央で 79.64m、南端で 78.60m。埋土は単層で、テフラの層や粒は見られない。遺物は出土しなかった。

権現山 SG9 区 SD-35 (第 381 図)

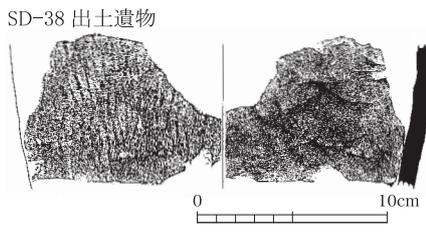
SG9 区中央区の 8.0-20.0 グリッドにある南北方向の短い溝で、南端部は試掘トレンチで消滅している。東側に接する時期不明の SK-18 と同じ土層で埋没しているので、SD-35 と SK-18 が同時に存在していたことがわかる。幅 59～102cm、残存する深さは 14～43cm で、底面は中央が低くて南北両端が高く、底面標高は北端で 48.34m、中央で 48.16m、南端で 48.25m。埋土は自然埋没状で、テフラの層や粒はみられない。遺物は出土しなかった。

権現山 SG9 区 SD-38 (第 381 図、写真図版 65・188)

SG9 区中央区東端の 7-22・8-22 グリッドにまたがり、北側は調査区外へ伸びる。東側の磯岡遺跡から延



SG9区SD-38
 32 黒褐色 砂粒少、白色粒微量、SD-38覆土。
 ※32層以外の土層説明は、地山断ち割りトレンチBの断面図に記載



第381図 権現山遺跡SG9区 SD-34・35・38 遺構 SD-38 遺物

第219表 権現山遺跡 SG9区 SD-38 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕	高 残 7.5	外面は縦位の浅い平行叩き。内面は無文当具痕の凹凸が明瞭。やや硬質焼成で、白雲母を確認できないが、新治窯産の可能性もある。	10Y4/1 灰 緻密 白礫～細粒やや少、透明 細粒少 硬質	中央の東肩部付近 胴下半 1/6 周 7

びる低台地の西縁に作られた溝である。重複する遺構はない。南端部は底面に凹凸があり、北西へ向かって下る。図示した南端部の底面の凹凸は、やや強調して表示してある。北部は幅 126～194cm、遺構確認面からの深さは 8～17cm、土層断面図 B-B' での深さは 22cm。底面標高は北部で 78.39～78.48m、南端では 78.35～78.38m で、底面は特定方向に傾斜しない。埋土は単層である。底面から少し浮いたレベルで 10～18cm 大の円礫が 8 点出土している。遺物は奈良～平安時代の須恵器甕 (1) の他に、古墳後期以降の土師器が数片あり、大形壺の大破片を含むが、接合・図化できなかった。古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラを含む層を切るので、古墳後期以降の溝である。SD-7・8 と同様に近世以後の溝かもしれない。

第4節 時期不明の土坑 (第382図、写真図版64・65)

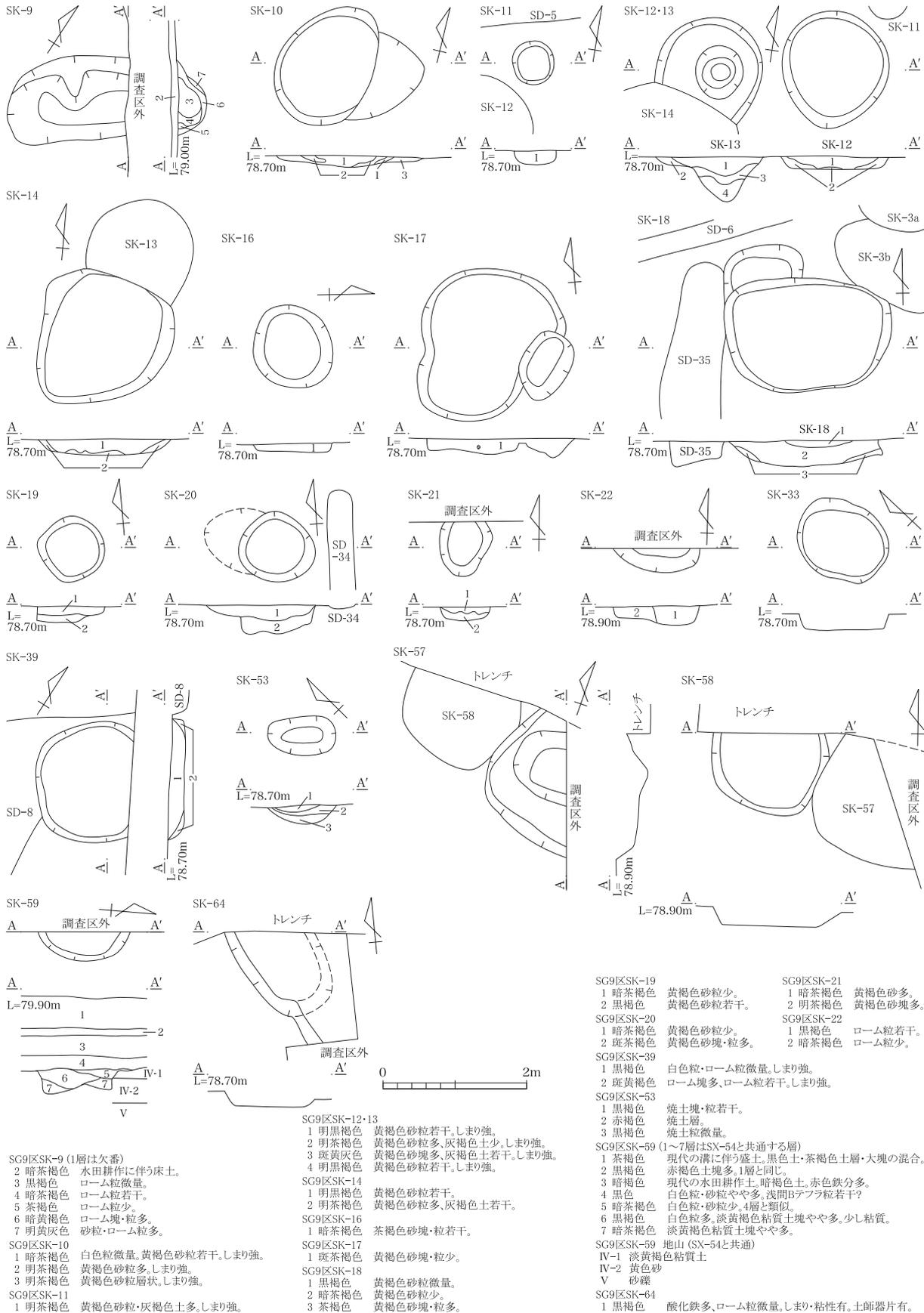
権現山遺跡 SG9区では時期不明の土坑を 20 基確認した。詳細は下記の表に掲載する。この他に、SG9区と SG2 区の境界線上にある SK-3b は、便宜的に SG2 区の遺構として扱い、「SG2区 SK-3b」として報告した。SG2区南部の土坑集中部 (第6章の第251図) に連続する土坑群が中心である。SG2区で調査した土坑群の跡地を再調査した部分は、遺構の形状が不鮮明になっていたもので、航空写真に記入した白線の形状がおかしくなっているものがある (図版62・63)。

第220表 権現山遺跡 SG9区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-9	8.0-22.5	楕円形	重複なし	1.66	1.17	0.54	N-57°-E	記録なし
東端は調査区外。土坑底面は西部が東部よりも約 10cm 深くなり、北壁の中部がやや南側へ張り出している。遺物なし。								
SK-10	7.5-21.0	不整円形	重複なし	2.04	1.62	0.17	N-77°-E	自然埋没状 白色粒あり
SK-11	7.5-20.5	円形	重複なし	0.62	0.58	0.20		単層
遺物は土師器小破片 1 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-12	7.5-20.5	円形	重複なし	1.65	1.49	0.20		自然埋没状
SK-13	7.5-20.5	円形	SK-14 と重複	1.20	1.20	0.64		自然埋没状
SK-14 と重複するが新旧不明。遺物は土師器壺甕類の小破片 3 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-14	7.5-20.5	不整楕円形	SK-13 と重複	2.02	1.90	0.23	N-35°-E	自然埋没状
SK-13 と重複するが新旧不明。遺物は土師器壺甕類の小破片 4 点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-16	8.0-20.5	円形	重複なし	1.16	1.10	0.14		単層
土師器壺甕類の小破片が 9 点出土したが、時期を特定できるものではない。								
SK-17	8.0-20.5	楕円形	重複なし	2.06	2.12	0.28	N-5°-E	単層
土師器片が少量出土したが、本遺構に伴うとは断定できない。								
SK-18	8.0-20.5	楕円形	SK-3b と重複・SD-35 と同時	2.28	1.48	0.40	N-88°-W	自然埋没状
SG2区 SK-3b と重複するが新旧不明。西側に接している SD-35 と同じ土層で埋没しているため、同時に存在していたことがわかる。東端はオーバーハング状になる。遺物なし。								
SK-19	8.0-20.5	円形	重複なし	0.93	0.93	0.24		
遺物なし。西半分は破線は、断面図との対応から整理作業時に記入した。								
SK-20	8.5-21.0	円形	重複なし	1.06	1.00	0.42		
時期不明の SD-34 と近接するが重複はしない。遺物なし。								
SK-21	8.5-21.0	楕円形	重複なし	0.76	0.74	0.10	N-0°	
北側は調査区外。遺物なし。								
SK-22	8.5-21.0	円形か楕円形	重複なし	1.22	0.34	0.32	N-89°-E	
北側の大半が調査区外のため、正確な形状は不明。遺物なし。								
SK-33	8.0-20.5	楕円形	重複なし	1.25	1.22	0.23	N-44°-W	記録なし
遺物なし。								
SK-39	8.5-22.5	楕円形	SD-8 と重複	1.68	1.32	0.25	N-30°-W	自然埋没状
SD-8 と重複するが新旧不明。遺物なし。								
SK-53	8.0-21.5	楕円形	重複なし	0.94	0.56	0.29	N-40°-W	自然埋没状
遺物なし。								
SK-57	12.0-18.5	円形?	SK-58 と重複	1.90	1.14	0.48		記録なし
SK-58 と重複するが新旧不明。東側は調査区外。北側は確認調査時のトレンチに切られる。遺物なし。								
SK-58	12.0-18.5	円形?	SK-57 と重複	1.55	1.15	0.42		記録なし
SK-57 と重複するが新旧不明。北側は確認調査時のトレンチに切られる。遺物なし。								
SK-59	12.0-18.5	円形?	重複なし SX-54 と同時	1.27	0.40	0.37		白色粒あり
西側の大半が調査区外のため、正確な形状は不明。遺物なし。時期不明の SX-54 と埋土が共通する。								
SK-64	9.0-19.0	楕円形?	重複なし	1.34	1.10	0.22	N-34°-W	記録なし
北側は確認調査時のトレンチに切られる。現地調査時の図面には土師器片を含むことが記録してあるが、現物が確認できない。								

※ SK-3b は SG2区と SG9区にまたがって調査しており、SG2区の遺構として扱った。

第9章 権現山遺跡 SG9区



第 382 図 権現山遺跡 SG9 区 時期不明の土坑 遺構

第5節 低地堆積層の調査 (第383～386図、写真図版66・188)

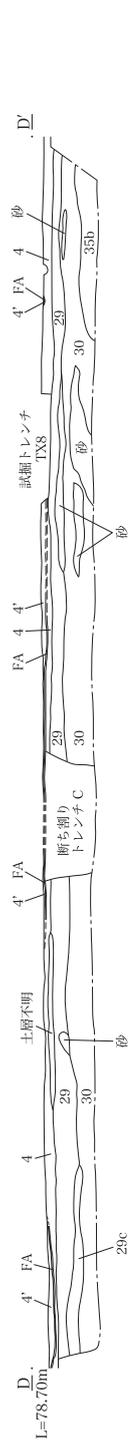
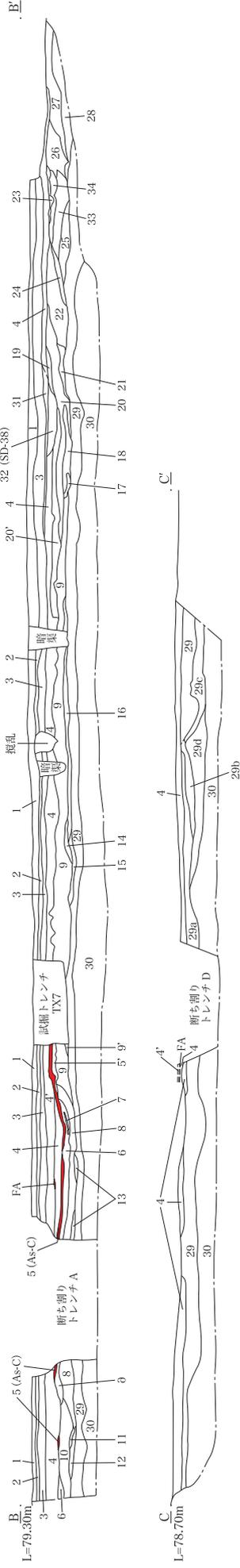
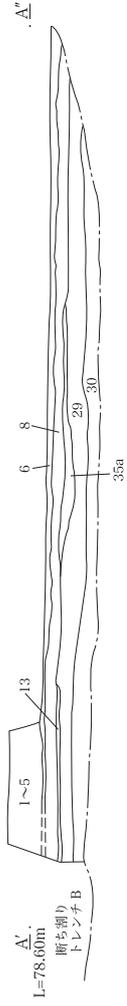
[中央区微高地] (第383・384図) 権現山遺跡SG9区は、中洲状微高地から南東側の低地にかけて所在するので、下層における遺構や遺物包含層の有無を確認するために、4本の断ち割りトレンチを設定した(第377図のトレンチA・B・C・D)。トレンチAとBは地形が最も低くなる南東部に、トレンチCとDは西側台地(SG5区)の東裾から緩く傾斜する中洲状微高地に、それぞれ直交する方向で設定した。

4層の直下に古墳後期初頭のHr-FAが、北側に連続する権現山遺跡SG2区と同様に、広く堆積している。断ち割りトレンチDの断面図D-D'には、Hr-FAテフラ堆積状況を図上部に合成して示した。断ち割りトレンチCの断面図C-C'を図化した時点では、Hr-FA層が除去されている。また、4・5層には古墳前期のAs-C軽石粒を含む。テフラ検出分析や火山ガラス屈折率測定は実施していないので、層相の観察と、Hr-FAよりも下層のテフラ粒は古墳前期に相当するという判断によってAs-Cを認定した。北側に隣接する低地堆積層ではテフラ検出分析でAs-Cが確認されている(第256・257図)。下部には砂礫層が多いので、洪水を受けた状況が考えられる(29・30・35b層)。後期初めのFA火山灰層が流出していないので、古墳時代の中～後期には水の影響が少なくなったことが4層より上のD-D'断面でわかる。

古墳中期中葉の土師器小形壺がある(3・4・5)。1・2・6は古墳中期末頃で、微高地に堆積しているFA層のレベル付近で出土したものであろう。10はSG2区SK-28a・SK-31にあるカキメ調整の上半部破片(第255図)と同個体かとみられる。下位を真格子叩きで調整する古墳終末期～奈良時代初めの甕で、三毳窯製品かもしれない。9も10に類似している。奈良時代初めの須恵器杯の完形品もある(7)。

第221表 権現山遺跡SG9区 中央区微高地の遺構外出土遺物

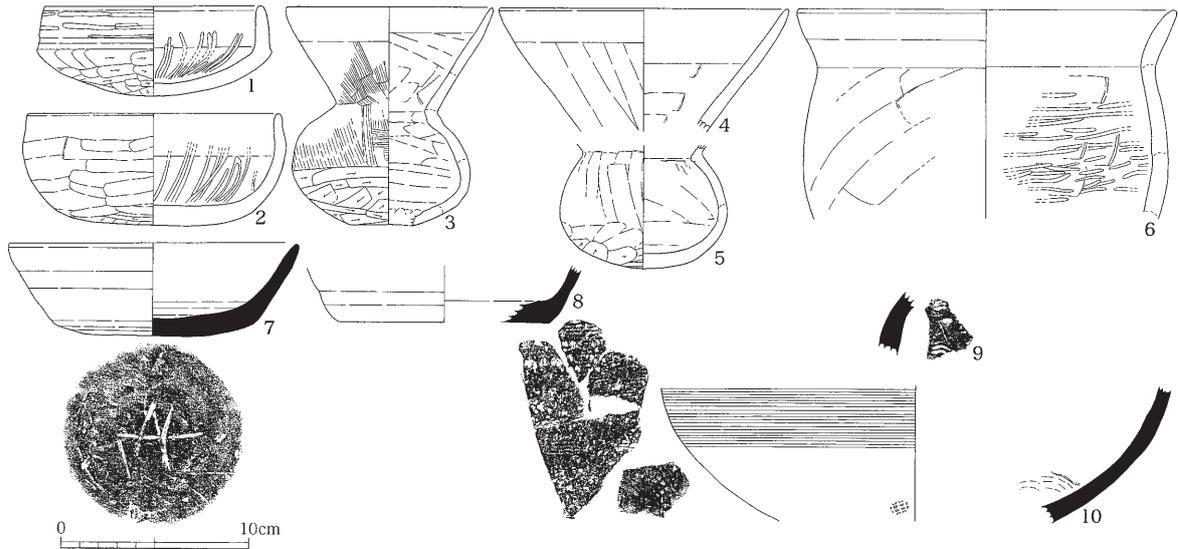
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.3 高 4.7 最大 12.3 重 残 219.5	外面は口～体部境に凹線2本と段を持ち、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ後、外面ヨコヘラミガキ。内面は体部に多方向ヘラナデ後、放射状ヘラミガキ。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・透明粗～細粒多、 赤・黒・灰色粗～細粒少 やや軟質	試掘トレンチTX8 口11/12周、体全周 TX-8
2 土師器 杯	口 13.2 高 5.9 最大 13.9 重 348.8	厚く重い。外面の口～体部境に弱い稜あり。外面は底部に多方向ヘラケズリ、体部にヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は体部に放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや粗い 白・灰色・透明粗～ 細粒多、赤粗～細粒少 やや硬質	7-20グリッド試掘ト レンチC-C'29層と対応 完形 TX7-20SD中央FA直下
3 土師器 小形壺	口 復 10.9 高 11.5 底 3.5	外面は浅いタテハケ後に体部下位と底部をヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に雑なユビナデ、体部ナデ、頸部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。 [注記]7.5-20.2、7.5-20.3、7.5-20.4	10YR7/3 にぶい黄橙 やや緻密 白・透明粗～細粒多、 赤・灰色粗～細粒と黒細粒少 やや硬質	SK-13の西7m地山断ち 割りトレンチCの4層 口1/3周、頸2/3周、 底2/3周 注記は左欄
4 土師器 小形壺	口 復 15.4 高 残 6.5	外面頸部タテヘラナデと内面頸部ヨコヘラナデの後に内外面口縁部ヨコナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや緻密 白・透明粗～細粒や や多、赤・灰色粗～細粒と黒細 粒少 やや硬質	SK-18の南6m 口1/6周、頸1/4周 7.5-20.10
5 土師器 小形壺	高 残 6.5 最大 8.8	外面は体部に縦位と斜位のヘラナデ後、下半～底部をヘラケズリして丸底に仕上げる。内面は底部に1方向、体部に横～斜位のヘラナデ。	5YR6/6 橙 やや緻密 白・灰色・透明粗～ 細粒多、白礫と黒粗～細粒と赤 細粒少 やや硬質	地山断ち割りトレンチD の29層 頸1/2周、底全周 7.5-20.11
6 土師器 甕	口 復 19.8 高 残 11.0	外面は胴部ナメヘラナデと口～頸部ヨコナデ。口縁部外面の下半がやや凹む。内面は胴部ヨコヘラナデ後にヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 緻密 赤粗～細粒多、黒粗～細 粒と白・透明細粒少 やや軟質	口7/12周 8.5-19、8.5-19.2、9-19.1
7 須恵器 杯	口 15.3 高 4.9 重 344.9	厚く重い。外底面はおそらく回転ヘラ切り後に中央部を軽いナデ、外周部を強いナデ。体部内外面の回転ナデと底部ヘラ切りは、ともにロクロ右回転(時計回り)。外底面中央のヘラ記号は「W」に「一」を重ねたように見えるが、縦線のうち2本は底面調整時に生じた段と考えられるので、「井」の記号と判断する。益子窯産?	5Y6/1 灰 やや粗い 白粗～細粒多、白・ 灰色礫と透明粗～細粒少 硬質	自然堆積層の褶曲部 SK-53の北4m ほぼ完形 8-21.5 1
8 須恵器 壺?	高 残 3.1 底 復 11.0	外底面は回転ヘラケズリで、倒立した状態でロクロ右回転(時計回り)。外面体部と内面は回転ヨコナデ。破面は暗赤色。	5B5/1 青灰 緻密 灰色礫と白粗～細粒少 硬質	調査区南端 地山断ち割 りトレンチAの周辺 底1/6周 6.5-21
9 須恵器 甕		甕の頸部で、厚さが上方で少し薄くなるのでそれほど大形の甕ではない。4歯の工具で櫛描波状文を描く。ロクロ回転方向は不詳。三毳窯産の可能性もある。「SX-30」の注記があるが、遺構出土遺物ではない。	2.5Y8/1 灰白 緻密 黒・透明細粒少 軟質	SG2区とSG9区の境界 付近(SD-34の東側) SX-30
10 須恵器 甕	高 残 7.3 最大 復 26.8	残存破片が小さいので復原径は参考値。外面はカキメおよび真格子叩き。内面はナデおよび浅い同心円文当具痕。三毳窯産の可能性あり。SG2区SK-28a・SK-31の須恵器甕と同一個体。	2.5Y8/1 灰白 緻密 白・透明・灰色粗～細粒 少 軟質	胴1/8周 8-21



SG9区中央区断ち割りトレンチ

- 1 黒褐色 耕作土
- 2 斑茶褐色 ローム塊多、ローム粒少、床土、鉄分、
- 3 明茶褐色 白色粒微量
- 4 黒褐色 4層より明るい、FA粒微量
- 5 明黒褐色 淡褐色C少
- 6 黒褐色 記録不備のため特徴不明、6層の可能性あり、B-B'の5層下に存在、
- 7 黒褐色 砂粒少
- 8 黒褐色 黄灰色砂層
- 9 黄灰色 黒色土・黄灰色砂多、11層とほぼ同じ、
- 10 黄灰色 黄灰色砂層、20層とほぼ同じ、
- 11 黒褐色 記録不備のため特徴不明、13層または15層の可能性あり、
- 12 灰褐色 8層とほぼ同じ、
- 13 灰褐色 灰褐色砂層、粒子はやや粗い、
- 14 明褐色 砂層、白色粗粒若干、
- 15 灰褐色 砂層、砂少
- 16 茶褐色 黄灰色砂多、
- 17 明褐色 14層とほぼ同じ、
- 18 黄褐色 砂層、粒やや粗い、
- 19 暗黄灰色 砂粒多、
- 20 黄灰色 9層とほぼ同じ、
- 21 灰褐色 砂層、淡黄褐色粒若干、
- 22 暗灰色 砂層、淡黄褐色粒若干、
- 23 黄灰色 砂層、
- 24 灰褐色 砂層、部分的に橙色化、
- 25 灰褐色 砂層、粗い砂と細砂層状に堆積、
- 26 黄褐色 砂層、粘状、
- 27 黄灰色 砂粒多、ローム粒少、
- 28 黄灰色 3~4cmの礫多、
- 29 砂礫層 基本的には29層と同様、4層に多量の小礫を含む、
- 29a 灰褐色 鉄分を含み橙色化、
- 29b 灰褐色 粗砂層、
- 29c 砂層、
- 29d 灰褐色 29層より礫大、鉄分を含み黄褐色化、
- 30 砂層、
- 31 暗茶褐色 砂粒少、白色粒微量、
- 32 黒褐色 白色粗粒少、22層に近い、
- 33 暗灰色 白色粗粒多、24層より砂少ない、
- 34 灰褐色 砂層、粗い砂と細砂層状に堆積、
- 35a 灰褐色 砂層、粘状、
- 35b 灰褐色 砂層、粘状、

第383図 権現山遺跡SG9区 中央区微高地断ち割りトレンチ 断面図 (1/160)



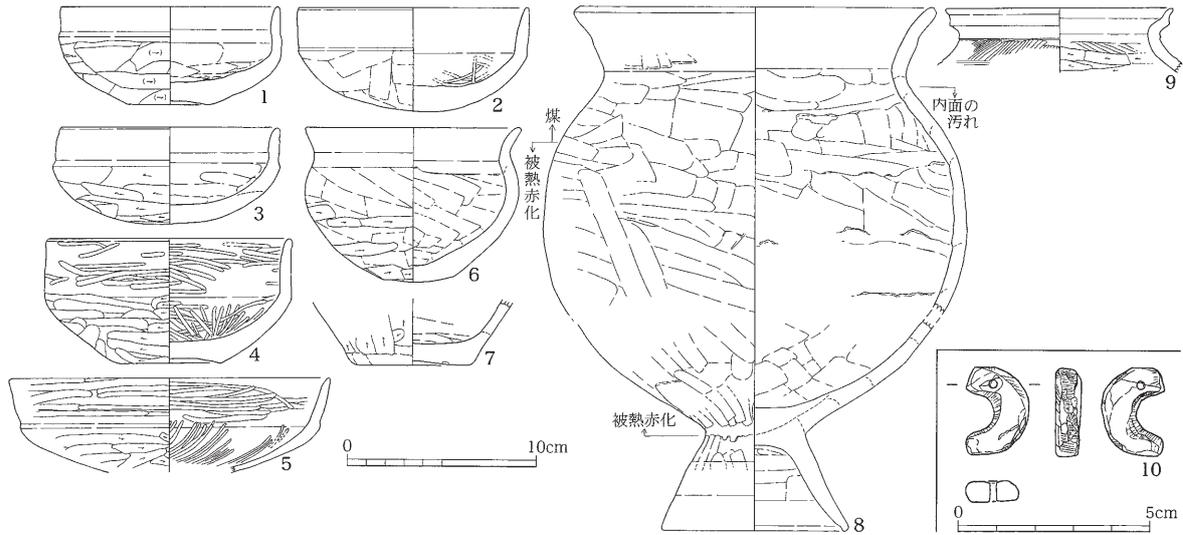
第 384 図 権現山遺跡 SG9 区 中央区微高地遺構外出土遺物

[中央区南東部の低地] (第 385・386 図) 権現山遺跡 SG9 区の南東部である 7-23 グリッド周辺は、東側に隣接する磯岡遺跡 SG9 区の微高地西端から低地に下る位置に相当する。この部分について、低地調査区を設けて基盤層(礫層)の上面まで掘り下げた。等高線と土層断面を第 385 図に示す。低地調査区の南部にある土層断面 A-A' と B-B' では古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラと考えられる層または白色粒が認められた。断面 C-C' の 2 層は、FA であるのかどうかを現地では判断できなかった。北部にある断面 E-E' の 2 層で観察された別のテフラは、古墳前期に降下した浅間 C 軽石 (As-C) と判断した。

遺物は、A-A' および B-B' 図の 5 層中に多い。東側の台地上にある磯岡遺跡 SG9 区周辺の集落から低地へ降りてきて使用・廃棄した遺物と考えられる。同様に磯岡遺跡の西側低地で土器を使用・廃棄した状況を、磯岡遺跡 3 区でも確認できる(『東谷・中島地区遺跡群』6)。遺物の表面や破面が磨滅していないので、上流から水で流されてきた遺物群ではない。台地西端から低地へ落ちる際の部分では、完形に近い土師器杯 3 個(1・3・4)が上向きで重なった状態で出土した(写真図版 66)。また、7-23 杭の南東側では、D-D' 断面図の底面直上で自然木片が 3 点出土した。低地調査区は、南東隅の 6.0-23.5 グリッド(土師器 64 片・1154g)と 6.5-23.5 グリッド(土師器 64 片・491g)で遺物が多く、6.5-23.0 グリッド(土師器 135 片・868g)にもやや多い。6.5-23.0 グリッドは低地を掘り下げた面積も広いので、南東隅の狭いグリッド(6.0-23.5 と 6.5-23.5)で遺物密度が最も高く、東側台地上の磯岡遺跡から持ち込まれた遺物であることがわかる。滑石製勾玉(10)は SG5 区 SI-100 などに例がある。

古墳前期の土師器は、東谷中島地区周辺では事例が少ない(8・9)。権現山遺跡では北に連続する SG2 区流路 2 に二重口縁壺、SG2 区 D 区遺構外に高杯と台付甕の破片がある(第 244・250 図)。S 字状口縁台付甕(9)は西方の東谷北浦遺跡 SI-139、北方の砂田姥沼遺跡 2 区 SI-1、北東の西刑部古屋原遺跡 SI-02 に見られる(篠原他 2009・藤田 2011・清水 2002)。

権現山遺跡 SG9 区の南側に隣接する県道工事調査区では、SG9 区中央区南東部低地の南側に続く自然堆積層中で縄文晩期ころの自然流木が確認されている(位置は第 256 図下端)。5.5-23.5 グリッドの標高 77.0~77.6m 付近で埋没樹木層を確認し、木材の放射性炭素年代は 2710 ± 60 年 BP、 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値(-27.9‰)から $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値を補正した年代は 2660 ± 60 年 BP である。この年代測定は磯岡遺跡 3 区の資料を分析する機会に合わせて実施したもので、測定前に書かれた県道調査区概要では旧石器時代の流木と記述されている(とちぎ生涯学習文化財団 2000)。



第386図 権現山遺跡SG9区 中央区南東部低地調査区(2) 遺物

第222表 権現山遺跡SG9区 中央区南東部低地調査区 出土遺物

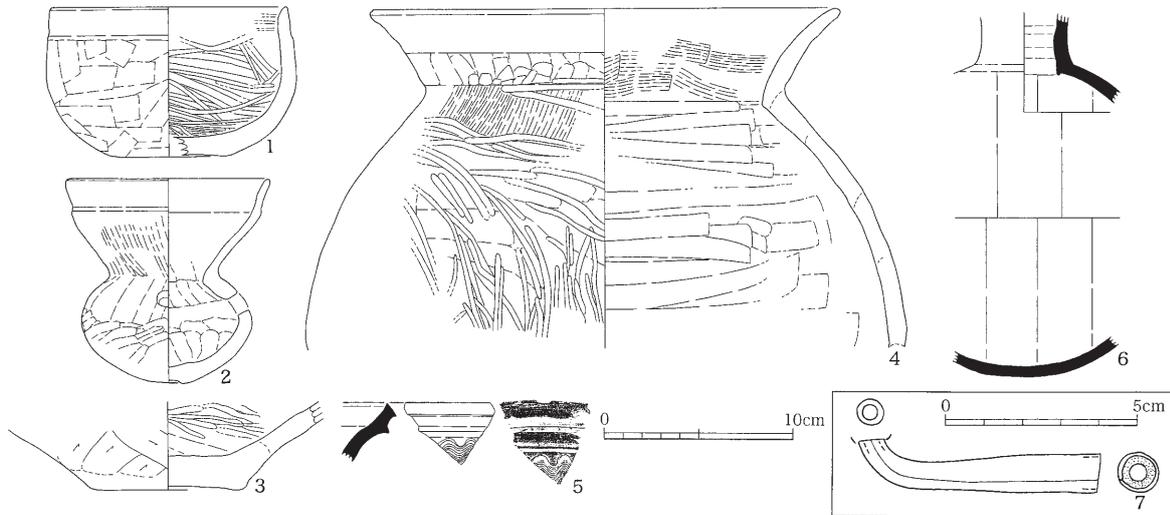
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.4 高 5.0 底 4.2 最大 11.8	外底面はヘラケズリで凹底状。外面は体部ヨコヘラケズリ、内外面の口縁部ヨコナデ。内面は体部に横位と底部に多方向のヘラナデ。器面がやや磨耗気味なので、ヘラミガキが行われていた可能性もあるが不明確。残存重量 201.2g。	5YR6/6 橙 やや緻密 赤粗～細粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	A-A'6層(FA下)の3枚重ねた杯の1枚目 口11/12周、底全周 6.5-23.5 12
2 土師器 杯	口 12.2 高 5.5	外面は底部に1方向または多方向と体部に横位のヘラケズリまたはヘラナデ。内外面の口縁部はヨコナデで、ヘラミガキの有無は磨耗しているの不明。内面体部に多方向の密なヘラミガキ。体部の内面に暗褐色の付着物あり(漆?)。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 赤粗～細粒多、黒粗～細粒と白・透明細粒少 軟質	A-A'6層(FA下) 口1/2周、体2/3周 6.5-23.5 2、3、15
3 土師器 杯	口 11.3 高 5.1 最大 12.0 重 残 181.6	外面は底部に1方向(?)と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデで、少し光沢を持つ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや緻密 赤粗～細粒やや少、白・黒・透明細粒少 やや軟質	A-A'6層(FA下)の3枚重ねた杯の2枚目 口11/12周、体全周 6.5-23.5 13
4 土師器 杯	口 12.8 高 6.6 底 5.3 最大 13.0	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面体部は少し光沢のあるヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に1方向と体部に斜放射状の密なヘラミガキ。重量 296.7g。	5YR7/6 橙 緻密 白・黒・赤細粒少 やや軟質	A-A'6層(FA下)の3枚重ねた杯の3枚目 ほぼ完形 6.5-23.5 14
5 土師器 杯	口 復 17.0 高 残 5.0	外面は体部ヨコヘラケズリ。内外面の口～体部をヨコナデ後、口縁部ヨコヘラミガキ、体部に放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒やや多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	A-A'5～6層(FA下) 口1/4周 6.5-23.5 6
6 土師器 鉢	口 11.4 高 8.2 底 3.8 重 残 263.1	外底面は多方向ヘラケズリで凸面状。外面体部はヘラナデまたはナデの後に、間隔を少し空けたヨコヘラケズリ。内面体部はナメヘラナデ後に頸部を成形してナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面底部に7×5cm大の黒斑あり。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤・透明礫～細粒多 やや硬質	SG9区の南隣接地試掘トレンチ6-23グリッド 口5/6周、底全周 TX6-23
7 土師器 甕	高 残 3.5 底 6.3	やや薄い。外底面は多方向ナデでやや上げ底状。外面は胴下位ナデと胴部タテヘラケズリ。内面は円周方向のナデ。外底面に稲稈痕かもしれない凹みが1箇所ある。[注記]6.5-23.5、6.5-23.5 1、8	5YR5/4 にぶい赤褐 やや粗い 灰色礫やや多、白・灰色・透明粗～細粒少 硬質	A-A'5～6層 底1/2周 注記は左欄
8 土師器 台付甕	口 復 18.6 高 27.7 最大 復 22.2	内外面ともに主として斜位のヘラナデ後、口縁部と脚部部の内外面をヨコナデ。脚台と胴の接合部は厚い。外面の胴部中～下位が被熱赤化して、内面の胴部に汚れが見られる。外面の口～肩部に煤が付着。	7.5YR6/4 にぶい橙 粗い 白・灰色礫～粗粒多、透明粗～細粒と白・黒細粒やや多 やや硬質	B-B'5層 口5/6周、脚部3/4周 6.5-23、6.5-23 2、3、4、10、11
9 土師器 S字状口縁 甕	口 復 12.0 高 残 3.4	外面は口縁部ヨコナデ後に肩端ナメハケと肩部ヨコハケ。内面は頸部ナメハケ後に肩部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	10YR5/3 にぶい黄褐 やや粗い 白・赤粗～細粒やや多、黒・透明細粒少 やや軟質	口1/4周 6.5-23
10 石製模造品 勾玉	長 2.31 幅 1.63 厚 0.70 重 3.42	両面は節理に沿って打ち割ったほぼ平坦な面で、研磨しない。側面の全周を横方向に研磨し、粗い研磨痕がよく残る。右図の面から穿孔し、左図の面に大きな穿孔剥離を生じる。初孔径 2.10～2.20mm、終孔径 1.65～1.75mm。	10YR5/6 黄褐 緻密で軟質な滑石	A-A'6層(FA下) 完形 6.5-23.5 5

第6節 西区の遺構外出土遺物 (第387図、写真図版173・188)

権現山遺跡 SG9 区の西区は、権現山遺跡 SG5 区のある台地の東側縁辺部で、東側の低地へなだらかに下る。この付近の遺構は、北端で時期不明の土坑 SK-58・57・59 と道路状遺構(?) SX-54、南端で時期不明の土坑 SK-64 を確認した。遺構外から出土した古墳時代遺物があり、西側台地上の SG5 区古墳時代集落から流入したとみられる遺物がある。2 は口縁部外面の段が特徴的である。土師器の甕は居館区画溝 (SG5 区 SD-227・SG10 区 SD-43) などに例がある。4 を出土した試掘トレンチ TX11 の 11-18 グリッドは本遺跡 SG5 区と SG9 区の両方にまたがる位置である。1・2・3 は古墳後期初頭に降下した FA テフラよりも上層にあり、SG2 区流路 4 から西側の SG9 区に続く土層中の遺物であろう (第 241・245 図の断面図 C1-C2 左端)。ただし、2 は後期ではなく、中期中～後葉と考えた方がよい遺物である。5 は古墳中期の須恵器甕で、非常に丁寧な製品である。6 は 7 世紀の湖西産フラスコ瓶。7 は近世の煙管。

第 223 表 権現山遺跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 復 12.5 高 7.9 底 5.5 最大 復 13.2	外底面は平坦でナデまたはヘラナデ。外面は口～体部間に浅い段があり、口縁部ヨコナデ後に体部ヘラナデ。内面は底部に多方向と口～体部に横～斜位の密なヘラミガキ。漆仕上げは見られない。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや緻密 白・黒・赤・透明細 粒やや多、白・赤粗粒少 軟質	FA テフラ層より上 口 1/4 周、底 2/3 周 FA 上 11-18.5
2 土師器 甕	口 復 10.6 高 10.8 底 1.3 最大 復 10.8	外面体部上半タテヘラケズリ後ヘラナデ、下半ナメヘラナデ。外底面は小さな凹底。外面頸部にタテヘラナデまたは浅いタテハケ。内外面口縁部はヨコナデで、外面に浅い段を作る。内面は体部ヨコナデ、頸部ヨコヘラナデ。焼成前に径 1.0cm の円孔を 1 箇所、丸棒で穿孔する。	10YR7/3 にぶい黄橙 やや粗い 白・灰色礫～細粒と 黒・透明細粒やや少、赤粗～細 粒少 硬質	FA テフラ層より上 口 1/12 周、頸 1/2 周、 体全周 FA 上 11-18.5、11-18.5 1
3 土師器 大形壺	高 残 4.6 底 8.0	厚く重い。外底面はナデで緩い凹面状。外面胴部ナメヘラケズリ。内面は円周方向のナデ後、胴部下位をヨコヘラミガキ。外面が被熱した可能性もある。	7.5YR5/4 にぶい褐 やや粗い 白・黒・透明粗～細 粒やや多 やや軟質	FA テフラ層より上 底 11/12 周 FA 上 11-18.5
4 土師器 甕	口 復 24.3 高 残 17.9 最大 復 31.6	外面は胴部にヘラナデ、肩部に浅いタテハケの後にヨコおよびタテヘラミガキ、頸部に浅いタテハケ後、口縁部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に頸部ヨコヘラナデ。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白粗～細粒多、黒・灰色・ 透明粗～細粒やや多、赤粗～細 粒少 やや硬質	11-18 グリッド試掘ト レンチ 口 1/4 周、頸 1/4 周 TX11-18
5 須恵器 甕	口 復約 30 高 残 3.2	外面は口縁部とその直下に断面三角形の鋭い突線を持つ。11 歯の工具で右から左へ丁寧な櫛描波状文を回転施文する。	N4/(B) 灰 やや緻密 白細粒少 硬質	口 1/24 周 11-18.5
6 須恵器 フラスコ瓶	高 残 5.2	内外面ともにロクロナデ。穿孔時に頸部を載せて接合し、内面頸下端が内面に少しはみ出すように内面の回転ナデを行う。薄黄緑色の自然釉が外面と頸内面にかかる。湖西窯産。	5Y7/1 灰白 緻密 白細粒と黒色湧出粒少 硬質	頸 5/12 周、体 1/6 周 10-18.5
7 銅製品 煙管	長 残 6.3 径 1.00～ 1.08 重 残 6.4	巻いた銅板を、図に記入した側面中央のラインで接合して作る。接合部は極細の範囲で色が異なるので、継付けをしていると思われる。銅板の厚さは 1.2～1.3mm だが、ラウの側では厚さ 0.8mm の部分もある。火皿は欠失し、首部先端の外周に継付けされていた痕を残す。火皿に接する首の部分で径 6.5mm、孔 4.0mm。ラウの孔径は 4.8mm (ただし、竹材が少し縮んでいるので本来はもう少し小さい)。	銅薄板製	火皿部欠 10-18.5



第 387 図 権現山遺跡 SG9 区 西区遺構外出土遺物

第 10 章 権現山遺跡 SG15 区

権現山遺跡 SG15 区は、栃木県河内郡上三川町大字磯岡字西谷 410-1・410-2・410-3 に所在し、「西谷田」の低地部に立地する。西側の台地には権現山遺跡 SG5 区の前古墳時代集落、東側の台地には磯岡遺跡 6 区などの古墳～平安時代集落がある。SG15 区の位置は北緯 36° 28′ 55″、東経 139° 54′ 23″（世界測地系）である。権現山遺跡 SG15 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.4m。東側の磯岡遺跡台地部（磯岡 6 区付近で標高 80.4m）との比高が約 1.0m、西側の権現山遺跡 SG5 区台地部（標高 80.5m）との比高が約 1.1m である。SG15 区の範囲は東西長 75m × 南北幅 7～13m で、調査面積は 900m²。SG15 区の南側には、権現山遺跡 SG2 区が隣接する。

第 1 節 古墳時代以降の自然流路

SG2 区と同様の自然流路を 2 箇所調査した。SG15 区の周囲に流路が続く状況を 1995 年 3 月の試掘トレンチ TX15 と TX16（第 388 図）で把握できる。TX15 の断面図を第 389 図下段、TX16 の断面図を第 390 図上段に示した。遺跡の有無を確認する目的で設けたトレンチなので、すべての個別土層については特徴が記録されていない。I 層から XI 層までの記号は SG2 区の試掘トレンチ TX11～TX13 断面図（第 241 図）と共通する。ただし、TX16 の IX-1 層と IX-2 層は TX16 だけで用いた層名である。

SG15 区流路 1（第 389 図、写真図版 169）

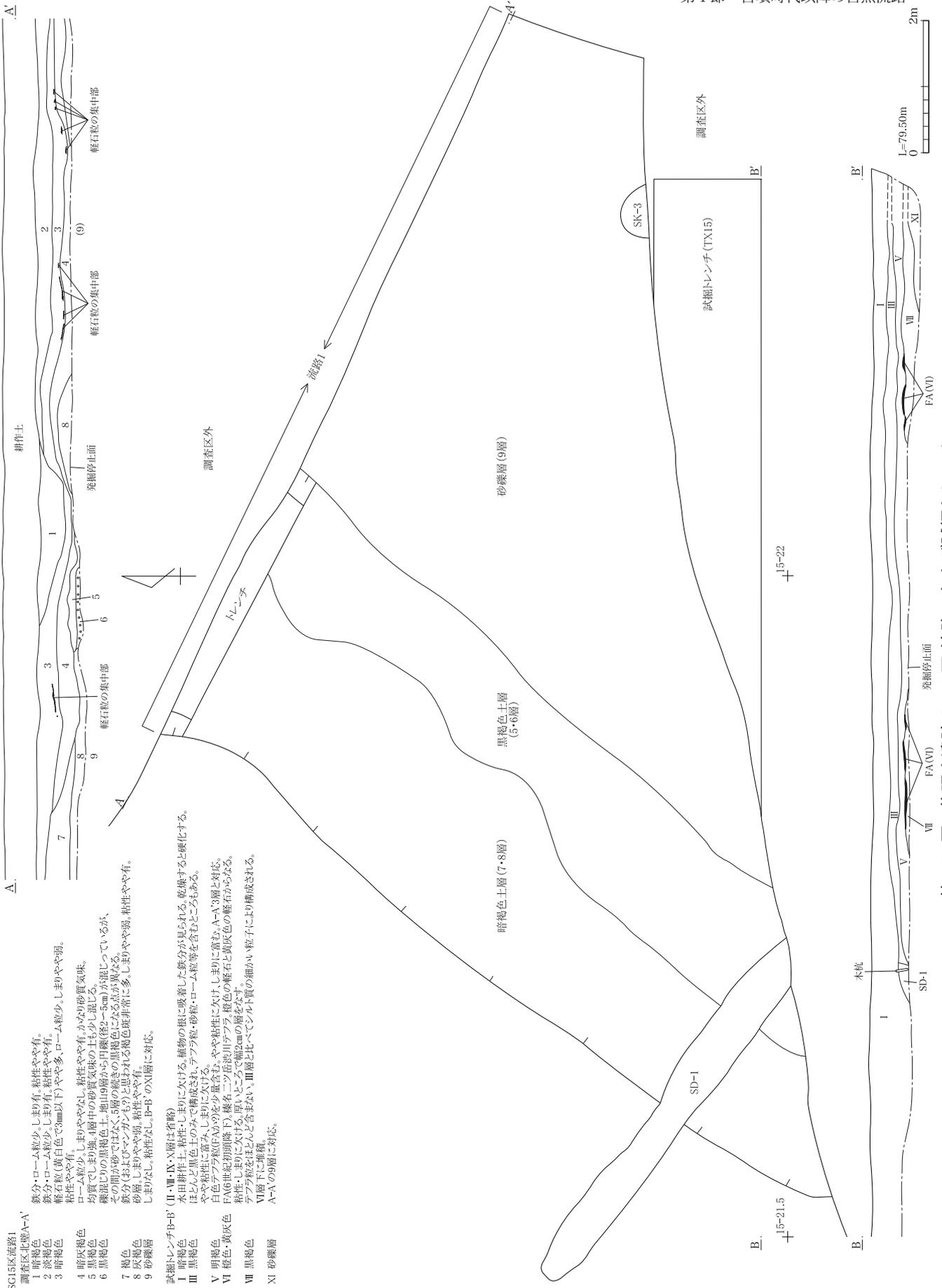
【位置】 SG15 区東部の 15.0-21.5・22.0 グリッドにあり、時期不明の SD-1 に西端部を切られ、同じく時期不明の SK-3 に東部を切られる。

【規模と形状】 幅 12.2m 以上で、東側は調査区外まで続く。残存する深さは、断面図 A ポイント付近の地山 7 層上面から地山 9 層上面（6 層下面）までで約 56cm。この 9 層上面が最も深くなる付近での流路底面標高は、調査区北壁面（断面図 A-A'）で 78.50m。ただし、流路の底面が 9 層上面にあることは確実ではない。9 層自体が、ある時代の流路で形成された洪水砂礫層を含んでいる場合も考えられる。調査区北壁に沿った部分は少し下層までトレンチで掘り下げた。それよりも南側は、平面図に記入した暗褐色土（断面図の 7・8 層）、黒褐色土（5・6 層）、砂礫層（9 層）が見える状況で掘り下げを終えている。

【覆土】 水による自然埋没で、軽石と考えられる白色粒が 3 層中に広く含まれる。2001 年 3 月の本調査時に記録された土層の説明（1～9 層）と、1995 年の試掘トレンチで記録された土層の説明（I～XI 層）は、層相の記述やテフラの判定がすこし異なっているので、両方を図示した（第 389 図の上端と下端）。3 層のうちでも、3 層下部には軽石粒がややまとまって層状に近くみられる（断面図 A-A'）。北側に隣接する試掘トレンチ TX16 のテフラ分析結果（第 7 章第 2 節）を参考にすると、古墳後期初頭の Hr-FA や、12 世紀初頭に降下した As-B の可能性もある。1995 年 3 月の試掘トレンチ TX15 で確認したテフラは Hr-FA と判断されている（断面図 B-B' の VI 層）。ただし、3 層下部の軽石は、東谷・中島地区遺跡群でよく見られる Hr-FA や As-B とは、肉眼で観察した層相が異なっていた。SG15 区および TX15 ではテフラ検出分析や屈折率同定などは実施していないので、すべて肉眼観察による所見である。

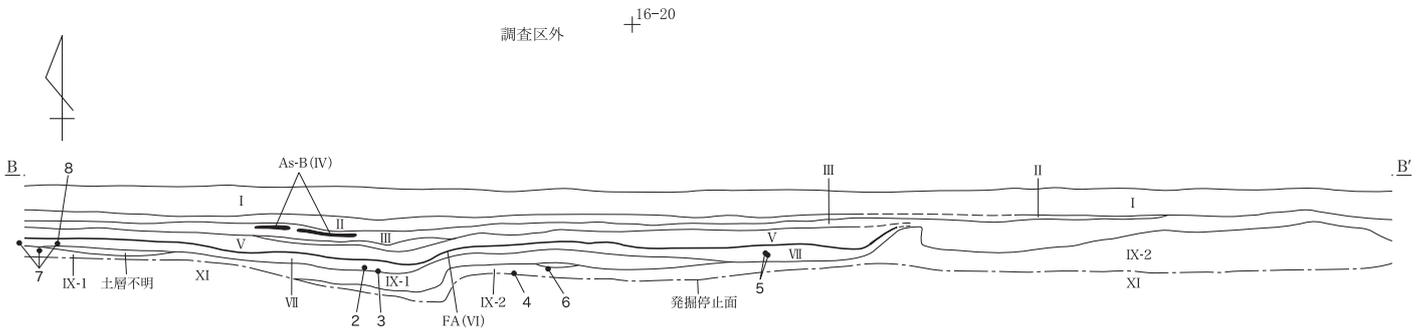
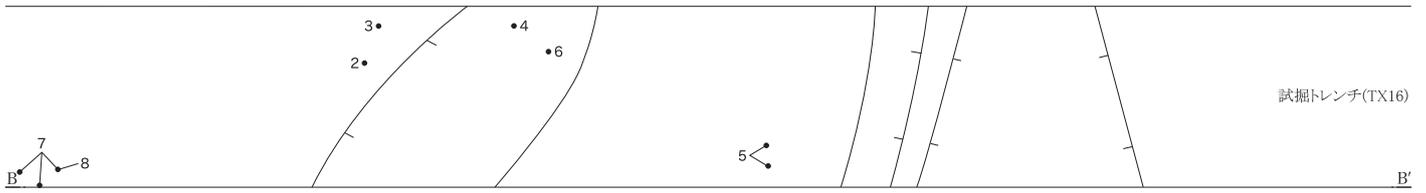
【遺物および出土状況】 かなり新しいと思われる陶器底部小片が 1 点、流路 1 の覆土 3 層中で出土している（SK-3 西側の調査区南壁部）。この陶器片を重視すると、3 層はおそらく中～近世以後に堆積したと考えられる。4 層以下の土層は、権現山遺跡 SG2 区の流路 1・流路 2 に連続する古墳時代流路の可能性がある。確認調査時の試掘トレンチで 15-21 グリッドから出土した古墳時代土師器 23 片中に、SG2 区流路 2 で出土した土師器壺（第 244 図の 21）と接合する 1 片を含むことも参考になる。

第1節 古墳時代以降の自然流路



第389図 権現山遺跡 SG15 区 流路1 および試験トレンチ TX15

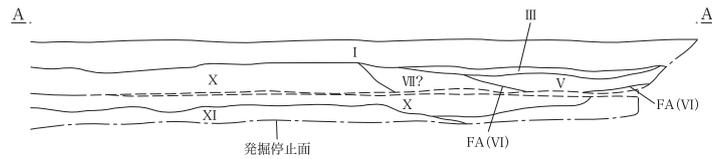
- SG15区流路1
調査区北端A-A'
- 1 暗褐色
 - 2 淡褐色
 - 3 暗褐色
 - 4 暗赤褐色
 - 5 黒褐色
 - 6 黒褐色
 - 7 褐色
 - 8 灰褐色
 - 9 砂礫層
- 鉄分・ローム粒少、しまり有、粘性やや有。
鉄分・ローム粒少、しまり有、粘性やや有。
軽石粒(黄白色で3mm以下)やや多、ローム粒少、しまりやや弱、粘性やや有。
ローム粒少、しまりやや弱、粘性やや有、かなたの砂礫臭味。
均質でしまり強、4層中の砂質味の土も少し混じり、その間が砂ではく、5層の緑色の黒褐色になる点があるが、鉄分(おとびマンガン?)と混ざると思われる褐色斑非常に多、しまりやや弱、粘性やや有、しまりなし、粘性なし、B=B'のXI層に対応。
- 試験トレンチB-B' (II・III・IX・X層は省略)
I 水田耕作土、粘性、しまりに欠ける、雑物の根に吸着した鉄分が見られる、乾燥すると硬化する。
II ほとんど黒色の土のみで構成され、テフラ粒、砂粒、ローム粒等を含むところもある。
III やや粘性に富み、しまりに欠ける。
IV 明褐色
V 暗褐色
VI 褐色・黄灰色
VII 暗褐色
VIII 暗褐色
IX 暗褐色
X 暗褐色
XI 砂礫層



SG15区流路2および試掘トレンチTX16 (VIII層は省略)

- | | |
|-----------|--|
| I 暗褐色 | 水田耕作土。粘性・しまりに欠く。植物の根に吸着した鉄分が見られる。乾燥すると硬化する。 |
| II 暗褐色 | As-BやFA等のテフラ粒を含む。粘性・しまりにやや富む。 |
| III 黒褐色 | ほとんど黒色土のみで構成され、テフラ粒・砂粒・ローム粒等を含むところもある。やや粘性に富み、しまりに欠ける。 |
| IV 桃灰色 | 桃灰色テフラ。浅間B軽石(As-B)。1108年降下。 |
| V 明褐色 | 白色テフラ粒(FAか?)を少量含む。やや粘性に欠け、しまりに富む。 |
| VI 褐色・黄灰色 | FA(6世紀初頭降下)・榛名二ツ岳洪川テフラ。橙色の軽石と黄灰色の軽石からなる。粘性・しまりに欠ける。 |
| VII 黒褐色 | テフラ粒をほとんど含まない。III層と比べてシルト質の細かい粒子により構成される。VI層下に堆積。 |
| IX-1 黒灰色 | 灰色砂の薄層を挟む。 |
| IX-2 黒色 | 粘質土。 |
| X 砂層 | いくつかの層に細分できる場合もある。 |
| XI 砂礫層 | いくつかの層に細分できる場合もある。 |

試掘トレンチ TX15 南壁断面図

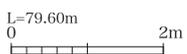


調査区外

試掘トレンチ(TX15)

流路 2

15-20



第 390 図 権現山遺跡 SG15 区 流路 2 および試掘トレンチ TX16 の流路跡 (1/100)

SG15 区流路 2 (第 390 図、写真図版 167・215)

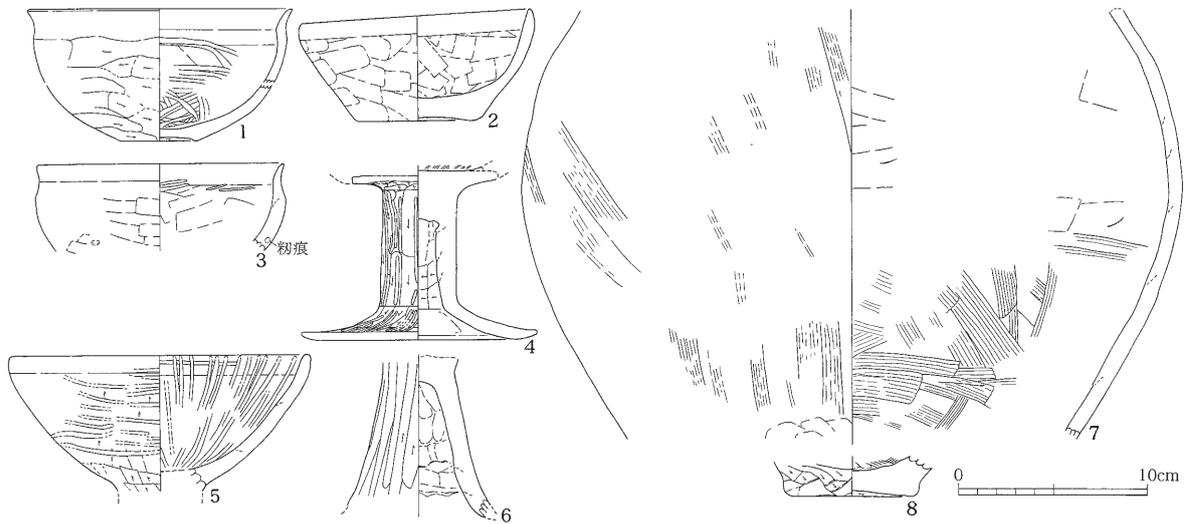
【位置】 SG15 区中央部の 14.5-20.0 と 15.0-20.0 グリッドにあり、南北両側は調査区外まで伸びる。南方約 25m にある権現山遺跡 SG2 区北端の流路 1 と流路 2 に連続することも想定できるが (第 388 図)、中間にある試掘トレンチ TX14 では確認できていない。重複する遺構はない。

【規模・形状・覆土】 上部を削平された浅い流路跡で、幅 2.8 ~ 11.0m。断面図 A-A' で西側から計測した深さは約 40cm で、地山および底面は砂層 (A-A' の X 層) と砂礫層 (XI 層) である。流路底面の標高は 78.37 ~ 78.63m。調査区南・北壁面の断面図は作成されていないが、流路両側の地山層を写真で確認できる。1995 年 3 月の試掘トレンチ TX15 で作成した断面図 A-A' は、階段状に掘削した TX15 南壁面の上段と下段を合成した図面で、トレンチ設定の都合により流路 2 中央部から東部の断面図がない。VI 層は古墳後期初頭の Hr-FA テフラと判断されているので、流路下部の堆積層は古墳中~後期までさかのぼる。ただし、TX15 ではテフラ検出分析や屈折率同定などを実施していない。SG15 区内の流路 2 には遺物がない。

北側へ約 15m の地点には 1995 年 3 月の試掘トレンチ TX16 で確認した流路跡があり (第 390 図上段)、SG15 区流路 2 と連続する可能性が高い。TX16 の流路は、Hr-FA 以前の古墳中期から 12 世紀初頭の As-B までの時期幅がある (断面 B-B')。この部分だけ As-B 火山灰が堆積しているため、ほとんど埋没した流路跡の浅い窪地だったのだろう。TX16 の流路下部で FA 下の各層から古墳中期の土師器片が出土した。TX16 の 16-19 グリッドでは、この流路内で低地堆積層のテフラ検出分析も実施している (第 7 章第 2 節)。

SG15 区のすぐ南側に隣接する試掘トレンチ TX14 では流路跡を確認できなかった。TX14 内の 14-20 グリッドでもテフラ検出分析を実施し、上下に接近した層位で Hr-FA と As-C を検出した (第 257 図)。

【遺物および出土状況】 SG15 区では流路 2 から遺物が出土しなかった。SG15 区北側の TX16 で古墳時代中期の土師器が出土している。3 は胎土に混和した稲粃痕が認められる。粃痕の類例は SG10 区 SI-50 などにある。4 は成形・調整が丁寧な高杯。FA テフラ下層のなかでも上層に短脚高杯 (5)、下層に長脚高杯 (4・6) があるので、時期差を持つことがわかる。7 と 8 は同一個体の可能性がある薄い大形壺。



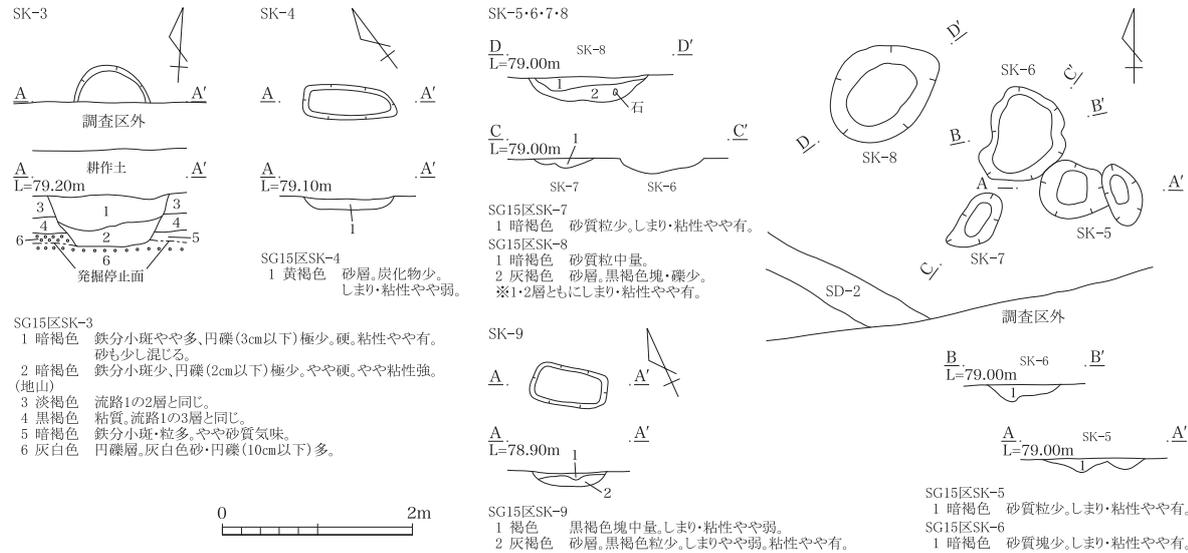
第 391 図 権現山遺跡 SG15 区 流路 2 北方の TX16 出土遺物

第 224 表 権現山遺跡 SG15 区 流路 2 北方の TX16 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.8 高 推 7.0 底 復 4.0	口縁部と体部が接合しないので器高は推定値。外底面は円周方向にヘラケズリして凹底状。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は上半ヨコナデと下半多方向ヘラケズリの後にナナメヘラミガキ。	7.5YR7/4 にぶい橙 やや粗い 白・赤・灰色粗~細 粒多、黒・透明細粒少 やや硬質	16-20 グリッドの試掘ト レンチ TX16 内 口 1/3 周、底 2/3 周 TX16-20
2 土師器 杯	口 12.0 高 5.5 底 6.2 重 残 218.6	外底面は軽くヘラケズリした後にナデで、緩い凹底状。外面体部ナデ、内 面体部ナナメナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR7/4 にぶい橙 粗い 白・赤・灰色礫と白・赤 粗~細粒多、黒・透明粗~細粒 少 軟質	流路内 VII 層 口 3/4 周、体~底全周 TX16-19 21

第10章 権現山遺跡 SG15区

3 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.6 最大 復 13.1	外面は体部ヨコヘラナデまたはヨコナデの後に口縁ヨコナデ。内面は体部ナナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後に、口へ体部上位ヨコヘラミガキ。胎土に混和した稲稈圧痕が破面に1箇所現れる。	2.5Y6/1 黄灰 やや粗い 白・赤粗～細粒やや多、黒・透明粗～細粒少 やや硬質	流路内Ⅷ層かⅨ-1層 口1/12周、体1/4周 TX16-19 23
4 土師器 高杯	高 残 9.0 脚幅 12.4	丁寧な製品。杯底部を円板に作ってから体部を成形。外面は脚部タテヘラケズリと裾部ヨコナデの後にタテヘラミガキ、杯底部放射状ヘラケズリ。杯部内底面は多方向ヘラミガキ。脚内面は上部に雑なナデ、脚柱下半ヨコヘラケズリ、脚幅ヨコヘラナデ後ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白礫と白・灰色粗～細粒多、赤・黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	流路内Ⅸ-2層 杯底全周、脚幅5/6周 TX16-19 7
5 土師器 高杯	口 復 16.0 高 残 7.1	杯体部と杯底部の境に稜がなく、深い形状。外面は脚上端から杯底部までタテヘラケズリ、口縁部ヨコナデと杯体部タテヘラケズリ後にヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデと杯体部ナデかヘラナデの後に全体を放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/4 にぶい橙 やや緻密 白・灰色礫～粗粒やや多、黒・透明粗～細粒少 やや軟質	流路内Ⅷ層 口1/4周、杯底5/12周 TX16-20 4、5
6 土師器 高杯	高 残 8.4	外面タテヘラケズリ。内面は上部ユビナデ、下部ユビオサエとヘラナデで、粘土組織み痕をよく残す。	7.5YR8/6 浅黄橙 やや緻密 白粗～細粒多、赤・黒・透明粗～細粒少 軟質	流路内Ⅸ-2層 脚柱全周 TX16-19 3
7 土師器 大形壺	高 残 22.6 最大 復 34.6	大形であるが器壁は薄い。外面はタテハケおよびナメハケの後に下端部に斜位のナデまたはヘラナデ。内面は下位にハケ、上位にヨコヘラナデ。被熱使用痕はなく、胴面下位に13cm以上の黒斑あり。器面が磨耗して調整が不明瞭。8と同一個体の可能性あり。	10YR7/3 にぶい黄橙 粗い 白・透明粗～細粒多、赤・黒細粒やや少 やや硬質	流路西方Ⅷ層とⅨ-1層 胴1/3周 TX16-19 25～27
8 土師器 大形壺	高 残 2.1 底 7.1	外底面は中央の凹みをナデ、外周の高い部分をヘラケズリ。外面胴下端にナメヘラケズリ。内面は底中央に雑なナデ、底外周にナメヘラナデ。7と同一個体の可能性あり。	10YR6/4 にぶい黄橙 粗い 白粗～細粒多、白礫と黒・透明細粒やや多、赤細粒少 硬質	流路西方Ⅷ層 底全周 TX16-19 25



第392図 権現山遺跡 SG15区 時期不明の土坑 遺構

第225表 権現山遺跡 SG15区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	中軸線	覆土
SK-3	15.0-22.0	円形	流路1より新	0.80	0.54			自然埋没状
南半は調査区外。遺物は陶器小破片と礫の計2点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-4	15.0-21.5	長方形	重複なし	0.99	0.36	0.16	N-55°-W	単層 炭化物あり
遺物は炭化材と縄文土器小破片の計2点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-5	14.5-21.0	楕円形	重複なし	1.06	0.48	0.14		単層
SK-6と接するが新旧不明。2基がつながったように見えるが、覆土から見て1基の土坑。遺物は土師器小破片3点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-6	15.0-21.0	不整楕円形	重複なし	1.00	0.78	0.18		単層
SK-5と接するが新旧不明。遺物は土師器小破片6点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-7	14.5-21.0	楕円形	重複なし	0.70	0.38	0.10	N-37°-E	単層
遺物は土師器杯小破片の1点のみで、時期を特定できるものではない。								
SK-8	15.0-21.0	楕円形	重複なし	1.26	0.98	0.26	N-54°-E	自然埋没状
遺物なし。								
SK-9	15.0-20.5	長方形	重複なし	0.82	0.42	0.14	N-66°-W	自然埋没状?
遺物なし。								

第2節 時期不明の土坑 (第392図、写真図版168)

SG15区の時期不明の土坑は7基ある。低地にあるので各土坑の覆土に砂が多く、礫も含む。どの土坑も時期の手がかりが乏しい。詳細は表で説明する。SK-3は流路1の覆土3層を切る土坑で、陶器小破片を含むのでかなり新しいであろう。流路1の項で述べたように、流路1の覆土3層は下部にHr-FAまたはAs-Bを含み、3層上部は中～近世以後に堆積したと考えられる。SK-3も中～近世より後の土坑ということがわかる。SK-5は2基あるような形だが、覆土が同一なので一基の土坑として番号を与えた。

第3節 時期不明の溝

SG15区SD-1 (第393図、写真図版168・169・215)

SG15区東部の15-21.5グリッド。南東部は調査区外へ伸びる。古墳時代以降の流路1を切る。幅47～69cm、残存する深さ5～9cmで、遺構確認面がやや下がりにすぎたため遺構の残りが悪い。底面は中央が少し低く、底面標高は北西端で78.73m、中央部で78.67m、南東端で78.68m。断面模式図(C-C')に記入したように、残存する長さ約40cm程度の木杭を、溝の東西両側縁に沿って打ち込んだものが5箇所で見つかった。同様の木杭は、調査区の南外側で1995年3月に実施した確認調査時の試掘トレンチでも、SD-1の東半分で確認されている(第389図B-B')。溝の埋土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

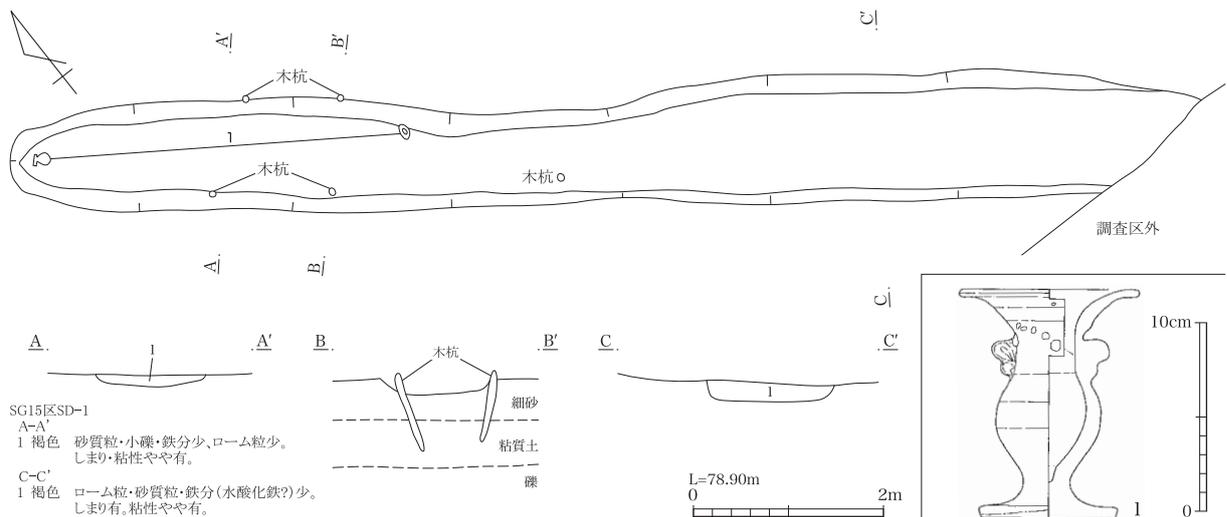
木杭は、径3.0～3.7cmの枝を長さ29.6～38.6cmに切断し先を尖らせたものである。(乾燥して縮んだ現状での計測値)。漆黒釉に長石散らしの仏花瓶(1)は18世紀の美濃産。他に近代以降の工業製品とみられる軽量・白色の瓦破片もあるので、近・現代まで継続した溝で、木杭があるので水路と考えられる。

SG15区SD-2 (第394図、写真図版169)

SG15区中央部の15-20.5・21グリッドにまたがり、南東と北西は調査区外まで伸びる。北西部は遺構確認面を低くしすぎたために遺構がほとんど消失している。重複する遺構はない。

直線的な溝状遺構である。両側が急角度に掘り込まれて、底面が平坦になる。溝の底面には茎状の植物を平面的に敷いた痕が残る。調査区南壁の断面(A-A')ではSD-2が埋没した上を2a層が覆うのに対して、調査区北壁の断面(D-D')でSD-2が2b層を切っている。2b層→SD-2→2a層の順序になると考えられる。現代の耕作土(1層)のすぐ下にある2層の形成期間中に構築された溝なので、かなり新しい時代(近代以降?)の溝と考えられる。暗渠排水施設を設置した溝かもしれない。

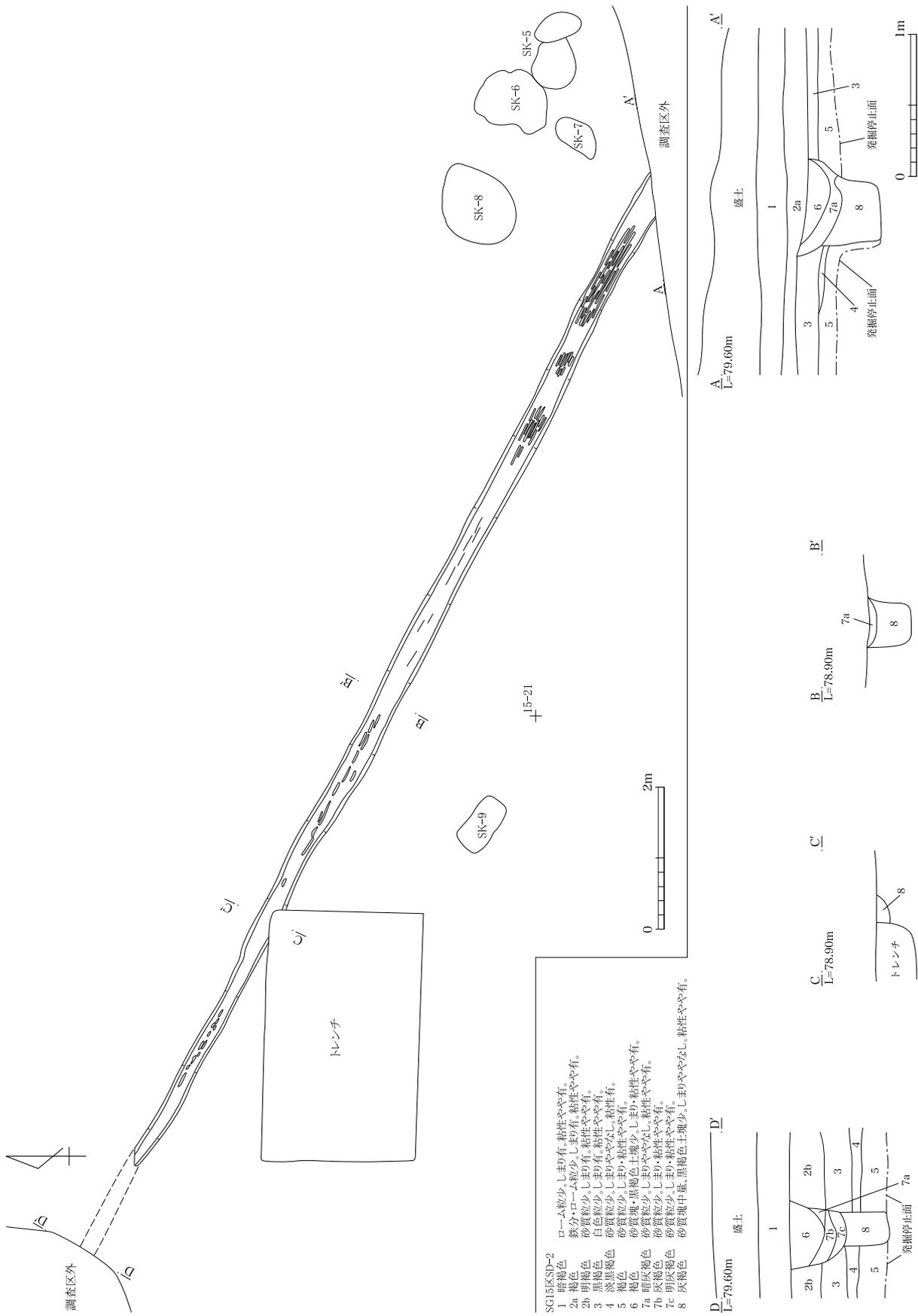
断面A-A'とD-D'で溝上面幅48～70cm、深さは断面D-D'からみて最大70cm。遺構確認面での溝幅25～40cmで、確認面からの深さは約30cm。底面が南東から北西へ傾斜し、底面標高は南東端で78.50m、北西端で78.44m。自然埋没状でテフラの層や粒はないが地山3層の白色粒はテフラの可能性もある。遺物はない。



第393図 権現山遺跡 SG15区 SD-1 遺構・遺物

第226表 権現山遺跡 SG15区 SD-1 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 花瓶	口 復 9.4 高 残 12.0 底 復 7.2 重 残 232.1	底部は回転糸切り。双耳は小さく透を持たない。内面頸部より上と外面の脚底面以外に漆黒釉。頸部に長石散らし。美濃産。	10YR2/1 黒 緻密 透明・半透明礫と黒細粒 少 硬質	口 1/4周、体全周、 脚裾 1/6周 1、2



- SG15区SD-2
- 1 暗褐色
 - 2a 褐色
 - 2b 明褐色
 - 3 黒褐色
 - 4 淡黒褐色
 - 5 褐色
 - 6 褐色
 - 7a 暗灰褐色
 - 7b 灰褐色
 - 7c 明灰褐色
 - 8 灰褐色
- ロー-A粒少、しまり有、粘性やや有。
 鉄分、ロー-A粒少、しまり有、粘性やや有。
 砂質粒少、しまり有、粘性やや有。
 白色粒少、しまり有、粘性やや有。
 砂質粒少、しまり有、粘性やや有。
 砂質粒少、しまり有、粘性やや有。
 砂質強、黒褐色土塊少、しまり、粘性やや有。
 砂質粒少、しまり有、粘性やや有。
 砂質粒少、しまり有、粘性やや有。
 砂質強中量、黒褐色土塊少、しまり有、粘性やや有。

第394図 権現山遺跡SG15区 SD-2 (平面図1/80・断面図1/40)

第 11 章 磯岡遺跡 SG9 区

磯岡遺跡 SG9 区は、河内郡上三川町大字磯岡字西谷 413・414 に所在し、「西谷田」の低地を西側に望む低台地の東端に立地する。磯岡 SG9 区の位置は北緯 36° 28′ 49″、東経 139° 54′ 23″（世界測地系）である。磯岡遺跡 SG9 区は発掘調査前の現況地形が低地部標高 79.4m。西側低地部（権現山遺跡 SG9 区で標高 79.0～79.2m）よりも約 0.4m 高く、東側台地部（磯岡 5 区南部付近で標高 80.0m）よりも約 0.6m 低い。磯岡 SG9 区の範囲は南北長 30m × 東西幅 20m で、調査面積は 600m²。

磯岡遺跡 SG9 区の調査時名称は「杉村遺跡 IX 区」である。遺跡名称・範囲の見直しが行われた結果として、「杉村遺跡 IX 区」のうち東部が磯岡遺跡、中央部から西部が権現山遺跡の範囲に含まれることになった。これに従い、本報告においては東部を「磯岡遺跡 SG9 区」、中央部と西部を「権現山遺跡 SG9 区」と呼称する。

SG9 区の調査は 1999 年 12 月に開始し、権現山遺跡 SG9 区とともに「杉村遺跡 IX 区」の旧名称で遺構調査を実施した。翌年 2 月 24 日には航空写真を撮影し、3 月で調査を終了した。調査区東側から続く台地上にある古墳時代竪穴建物跡 1 棟と、時期不明の溝・焼土集中・土坑がある。磯岡遺跡 SG9 区の東側には、磯岡遺跡 5 区の前古墳～平安時代集落が続く。1999 年度に調査を実施し、古墳時代～平安時代の集落跡を確認している。磯岡遺跡 SG9 区の南側には、一般県道雀宮真岡線改良工事に伴う磯岡遺跡の発掘調査区があるが、SG9 区と連続する遺構はなく、少し東側に離れた地点で古墳時代後期の竪穴建物跡が 1 棟確認されている（とちぎ生涯学習文化財団 2000）。

第 1 節 古墳時代の竪穴建物跡

磯岡 SG9 区 SI-49a・49b（第 396 図、写真図版 2・215）

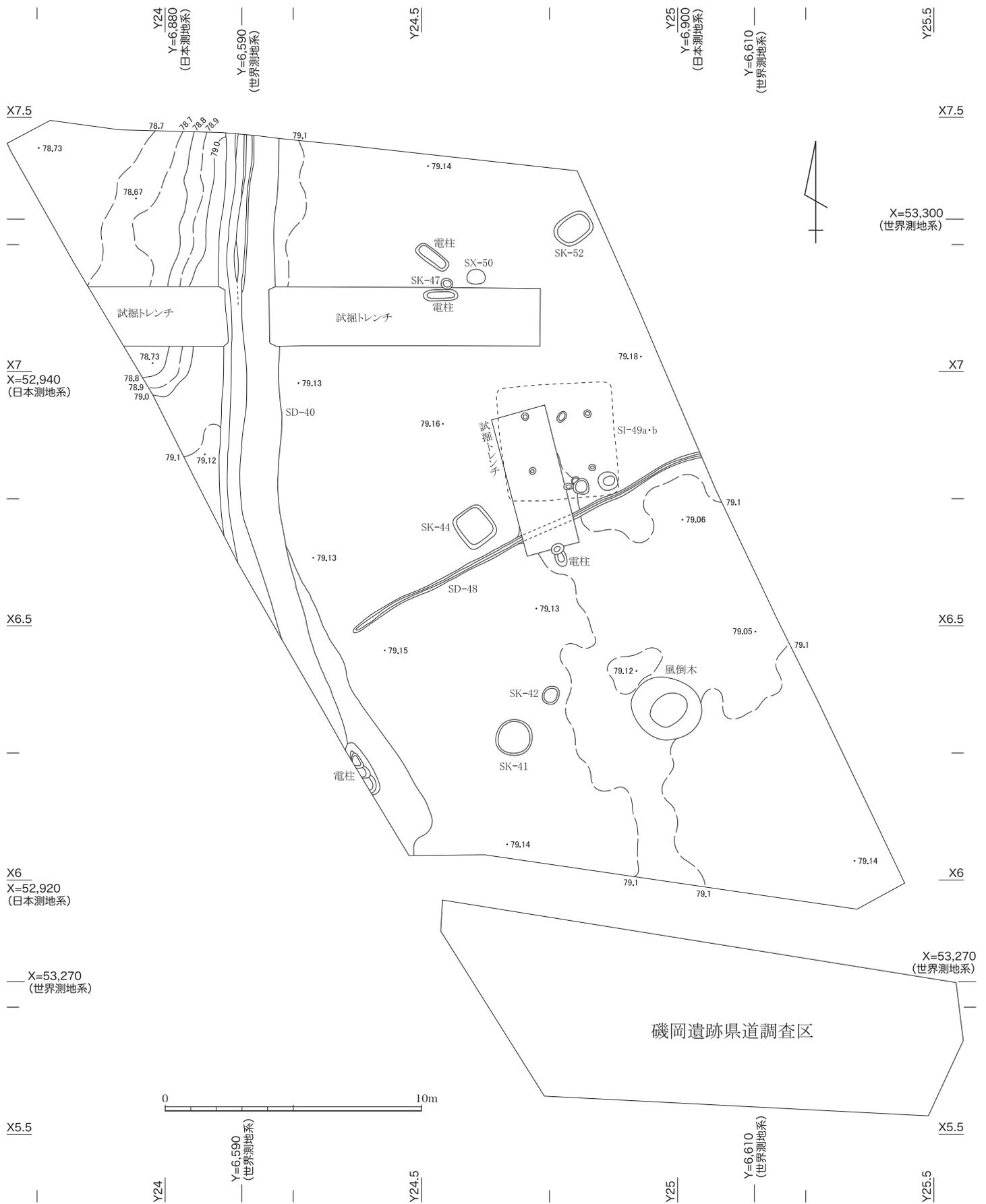
〔位置〕 6.5-24.5 グリッドにある。開田工事によってすでに地山ローム層面まで削平されているため、竪穴壁は確認できなかった。南東隅が時期不明の溝 SD-48 と重複し、この部分の竪穴壁が消滅しているので確実ではないが、SD-48 に切られる可能性が高い。磯岡 SG9 区内に古墳時代遺構は他にない。東に隣接する磯岡遺跡 5 区の前古墳時代集落に関連する建物である。現地調査時の旧名称 SK-45・46・51 は本建物の入口施設および貯蔵穴として吸収・改称した（SK-51 → 入口施設 P5、SK-45 → 旧期貯蔵穴 P6、SK-46 → 新期貯蔵穴 P7）。

〔規模と形状〕 旧期建物が SI-49b、新期建物が SI-49a である。方形と推定される建物跡で、主軸方位は GN-4° 30′ -W。壁が残存しないので、図示した破線は柱穴及び貯蔵穴の配置から推定した。推定規模は辺長 4.5m 前後。支柱穴は 4 本で、柱間は南北 2.13m、東西 2.39m（南側）～2.49m（北側）。断面形からみて柱径は 15cm 前後で、床面からの深さは P1=48cm、P2=36cm、P3=36cm、P4=48cm。入口施設と考えられる P5（調査時名称 SK-51）は床面からの深さ 17cm。貯蔵穴は南東隅にあり、P6（旧期建物 SI-49b 貯蔵穴）と P7（新期建物 SI-49a 貯蔵穴）の 2 時期が認められる。P6 は東西 54 × 南北 60 × 深さ 30cm で、幅 20cm 以内・深さ 7～9cm の浅いくぼみが北西部に附属する。P7 は東西 77 × 南北 65 × 深さ 48cm。複数の貯蔵穴を持つ事例は、SG5 区 SI-11 や SG10 区 SI-6 などがある。壁溝・間仕切溝は見られない。

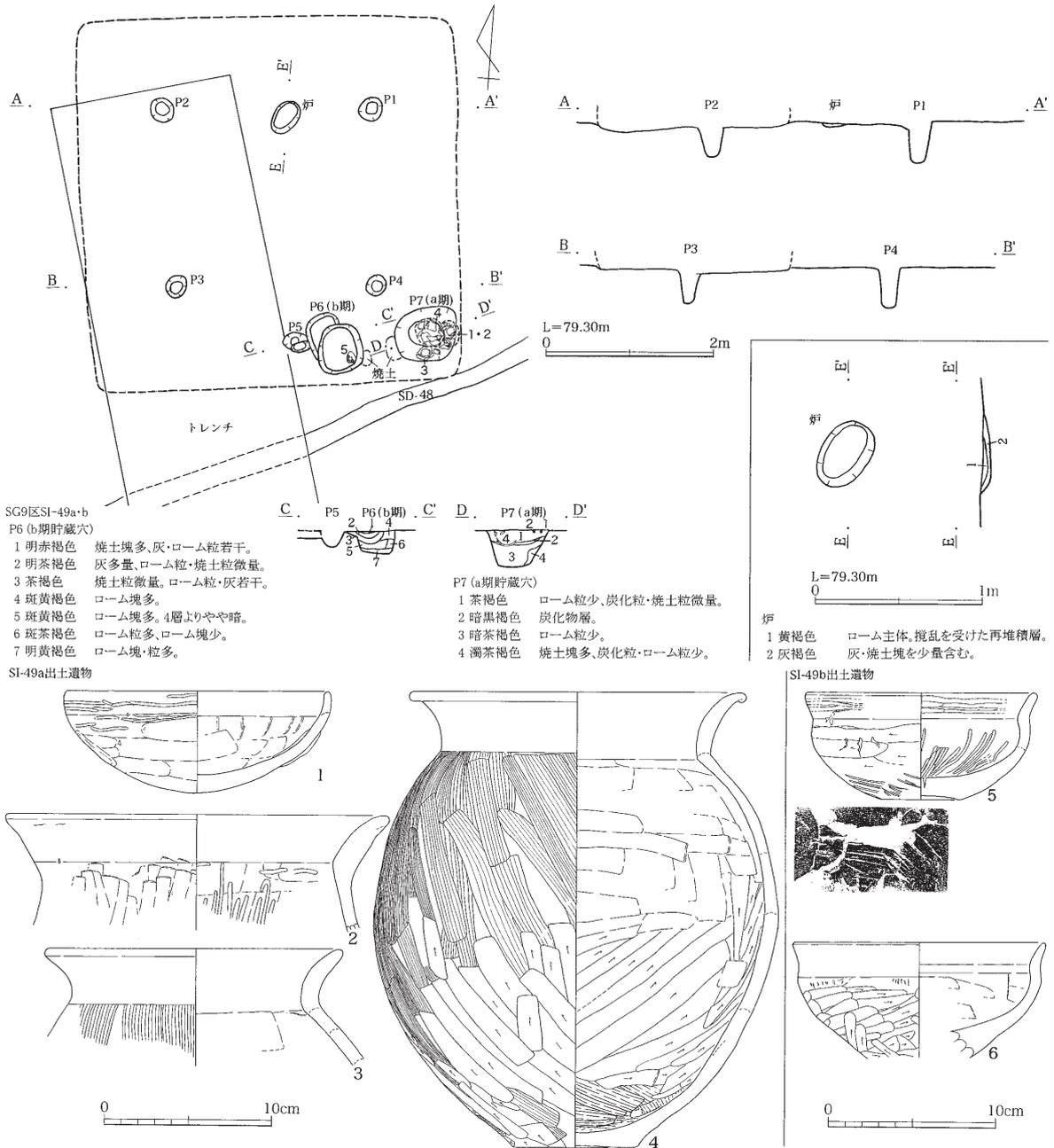
〔炉〕 中央北部に炉があり、短径 28 × 長径 44 × 深さ 5cm。

〔覆土〕 削平されているので貯蔵穴以外の覆土が不明である。旧期貯蔵穴 P6 は人為的に埋め戻されている。新期貯蔵穴 P7 内の焼土・炭化物からみて新期建物 SI-49a は火災を受けたと考えられる。火災建物は、権現山遺跡南部では SG10 区 SI-66 や SG5 区 SI-11 がある。

〔a 期遺物および出土状況〕 新期貯蔵穴 P7 では、覆土 2 層上に遺物がまとまっている（1～4）。この 2 層は炭化物層なので、火災で焼けた貯蔵穴の蓋板痕跡と推定できる。その蓋板の上または付近に置かれた土器



第 395 図 磯岡遺跡 SG9 区 全体図 (1/200・等高線主曲線 20cm・間曲線 10cm)



第396図 磯岡遺跡 SG9区 SI-49a・b 遺構・遺物

が落ち込んだものと推定された。1は内外面に粘土を貼った補修痕がある。補修痕のある土師器は、SG5区SI-21・SG10区SI-6などにあり、b期建物の5もその可能性がある。甕(4)は、底部に被熱痕がないのに胴部中位の約半周が被熱し、火災の痕であろうか。

[b期遺物および出土状況] 旧期貯蔵穴P6の覆土最上部に伏せた状態の土師器杯が1点ある(5)。5は内面に亀裂と一方向のヘラミガキがあり、これも焼成前に亀裂を補修した痕かもしれない。外面に焼成後の平行刻線があるので研磨具にも用いているらしい。研磨具に用いた事例は権現山遺跡SG10区SI-2・25・28・49・50・60・61・76やSG5区SX-118などや、他にも多くの例がある。6は接合する破片の1点が埋め戻されたb期貯蔵穴内にあるので、b期に用いた遺物と考えられる。

図示以外の土師器合計38片・417gの内訳は、杯8片・48g、壺甕類30片・369g。

第 227 表 磯岡遺跡 SG9 区 SI-49a・b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.5 高 6.1	外面は体部ナデと口縁部ヨコナデ、口～体部上位ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面上位以外もヘラミガキしていたかもしれないが、器面が荒れているので不詳。断面図に記入したように、内外面に縦長の粘土を貼っているところがあるので、焼成前に生じた亀裂を補修したことが推定できる。	7.5YR5/6 明褐 やや緻密 白・黒・透明細粒や やや多、白粗粒少 軟質	新期貯蔵穴 P7 の底上 43 cm 口 1/4 周 SK-46 2
2 土師器 甌	口 復 22.4 高 残 7.0 最大 復 22.8	頸部が厚く重い。外面は胴部タテヘラナデで、ごく浅いタテハケと見ることもできる。内面は胴部ヨコヘラナデ後にタテおよびヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR5/6 明赤褐 やや粗い 白粗～細粒多、透明 粗～細粒やや多、黒細粒少 やや硬質	新期貯蔵穴 P7 の底上 43 cm 口 1/2 周、胴上半一部 SK-46 2
3 土師器 甕	口 17.4 高 残 6.1 最大 17.8	外面は胴部タテハケ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に肩部ヨコヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや緻密 黒・透明粗～細粒 やや多、白・赤粗～細粒少 やや軟質	新期貯蔵穴 P7 の底上 39 cm 口全周 SK-46 1
4 土師器 甕	口 復 20.0 高 27.3 底 7.1 最大 24.1	外底面は 1 方向のヘラケズリ後ヘラナデで、わずかに凹面を成す。外面は胴部タテハケ後に下半タテヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。内面胴部は下位に多方向ハケ、中位にナメヘラケズリ、上位ヨコヘラナデ。外面の胴中位の半周が被熱赤化しているため、火災で不規則に被熱したことが考えられる。	10YR7/4 にぶい黄橙 やや粗い 白・黒・透明粗～細 粒多、赤・灰色粗粒少 やや軟質	新期貯蔵穴 P7 の底上 26 cm 口 1/3 周、頸 1/2 周、底 全周 SK-46 3
5 土師器 杯	口 復 13.4 高 6.4 底 4.5 最大 復 13.8	外底面は上げ底状で、おそらくヘラケズリ後にナデとミガキで仕上げる。外面体部は光沢のあるヨコヘラケズリで、焼成後の平行刻線あり。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はナデ後にやや不規則な 1 方向ヘラミガキで、焼成前に生じた亀裂を補修するために磨いたものかもしれない。	2.5YR5/6 明赤褐 緻密 赤粗～細粒やや少、白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	旧期貯蔵穴 P6 の底上 22 cm 口 5/12 周、底全周 SK-45 1
6 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 6.9	外面底部の丸味が強く突出気味。外面は体部上位に無調整部分を残り、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部に丁寧なヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面のほぼ全体と外面の底部が黒斑。	10YR7/6 明黄褐 やや緻密 白粗～細粒多、赤粗 ～細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	入口施設 P5 と旧期貯蔵 穴 P6 の破片が接合 口 1/6 周、体 1/3 周 SK-45、SK-51

第 2 節 時期不明の溝状遺構

磯岡 SG9 区 SD-40 (第 397 図上、写真図版 2)

磯岡遺跡 SG9 区西端の 6.0-24.0、6.5-24.0、7.0-24.0 の 3 グリッドにまたがり、南北両側は調査区の外まで伸びる。南側は調査区外で現代の農業用水路に重複する位置にあり、用水路に破壊されていると考えられる。重複する遺構はない。

幅 200～230cm、残存する深さは南部で 27～30cm、北部で 43～50cm。底面は南から北へ傾斜し、底面標高は南端で 78.77m、北端で 78.52m。覆土は自然埋没状で、下層の 3・4 層に含まれる白色粒は古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラ粒と判断されている。微量の白色粒に対する肉眼の判断なので断定はできず、12 世紀初めに降下した As-B テフラ粒と考えることも可能である。奈良時代または平安時代の須恵器片があることからみても古墳後期の溝とは考えられない。古代～中世の可能性を持つ時期不明の溝として扱う。

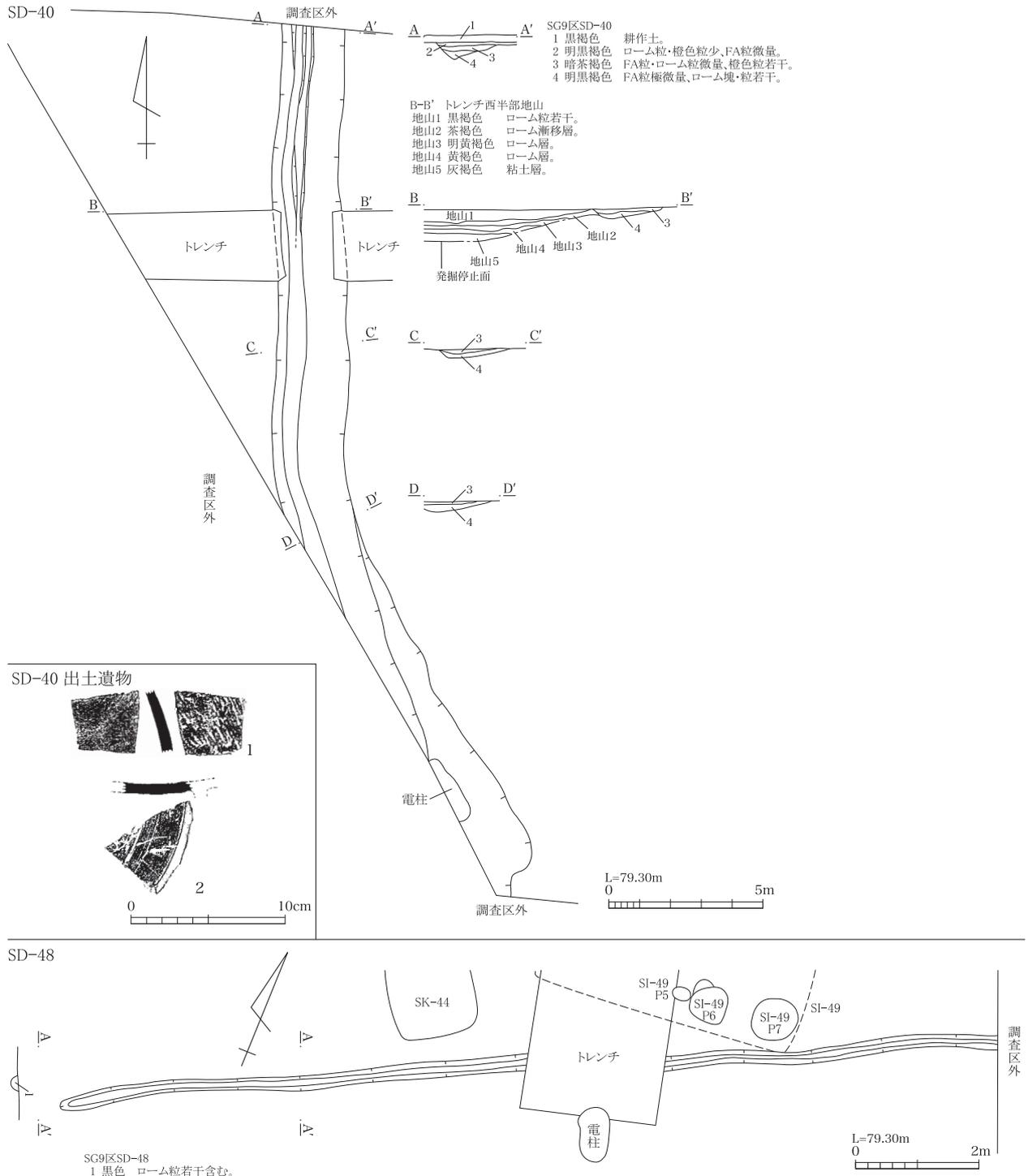
1 は古墳時代の可能性がある須恵器甕胴部片で、西に隣接する権現山遺跡 SG9 区の時期不明溝 SD-8 に同一個体の破片がある (第 380 図 SD-8 の 2 番)。同じ遺物の破片が両方の遺構に流入したのであろう。権現山遺跡 SG9 区 SD-8 はおそらく近世以降の溝と考えられ、磯岡遺跡 SG9 区 SD-40 までは 20～30m ほど離れている。調査区外で 2 条の溝が合流あるいは重複する可能性もあろう。2 はおそらく奈良時代の須恵器有台盤。図示した 2 片以外に、奈良・平安時代の可能性がある須恵器壺 (?) の胴部下半が 1 片ある。

第 228 表 磯岡遺跡 SG9 区 SD-40 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 甕		外面は斜位の平行叩き。内面はうっすらとした不明確な同心円文当具痕で、当具の年輪が浮き出たものと見られる。外面に暗緑灰色の自然釉が少量付着し、やや汚い黄色に発色している部分もある。内面は暗灰色 (N3/(B))。権現山遺跡 SG9 区 SD-8 に同一個体の破片あり。	N6/(B) 灰 緻密 白細粒やや多、白礫少 硬質	胴部片 北端
2 須恵器 有台盤	高 残 1.0 脚径 復約 22～24	器を倒した状態でロクロ右回転 (時計回り) による回転ヘラケズリ後、高台を貼り付けたと推定できる部分の内周を回転ヨコナデ。	5Y7/1 灰白 緻密 白細粒少 硬質	底 1/9 周

磯岡 SG9 区 SD-48 (第 397 図下)

磯岡遺跡 SG9 区中央部の 6.5-24.0・24.5 グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。古墳中期の SI-49 と重複し、SI-49 竪穴壁が消滅しているので確実ではないが、SI-49 を SD-48 が切る可能性が高い。幅 20～26cm、残存する深さは 5～8cm で、底面標高は 79.04～79.08mm。覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。覆土の状態からみて、かなり新しい時期の溝と考えられた。遺物は出土しなかった。

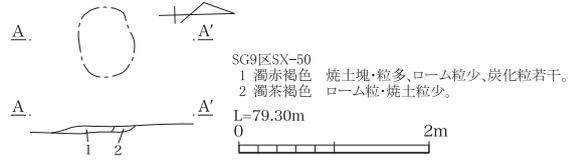


第 397 図 磯岡遺跡 SG9 区 SD-40・48 遺構 SD-40 遺物

第 3 節 時期不明の焼土集中地点

磯岡 SG9 区 SX-50 (第 398 図)

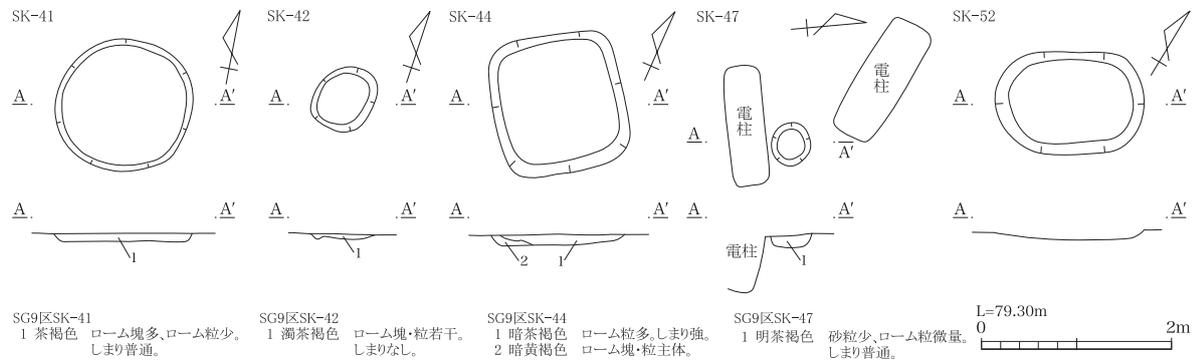
7.0-24.5 グリッド所在。時期不明の SK-47 が西 60cm にあり、古墳中期の SI-49 (a・b) が南約 4m にある。焼土粒・塊や炭粒を含む土が、短径 56 × 長径 74 × 厚さ 6cm の範囲で確認された。遺物はない。



第 398 図 磯岡遺跡 SG9 区 SX-50 遺構

第 4 節 時期不明の土坑 (第 399 図)

磯岡遺跡 SG9 区では時期不明の土坑を 5 基確認した。古墳時代集落から混入したとみられる土師器破片が少量出土した土坑もあるが、確実な時期を決められるものはない。詳細は下記の表にまとめた。



第 399 図 磯岡遺跡 SG9 区 時期不明の土坑 遺構

第 229 表 磯岡遺跡 SG9 区 時期不明の土坑

遺構名	グリッド	形状	重複関係	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中軸線	覆土
SK-41	6.0-24.5	円形	重複なし	1.46	1.40	0.10		単層
土師器片が少量出土したが、本遺構に伴うとは断定できない。								
SK-42	6.0-24.5	不整形円形	重複なし	0.77	0.66	0.06	N-49°-E	
土師器壺類の破片が 3 点出土したが、本遺構に伴うとは断定できない。しまりがなく覆土なので、かなり新しい時期の可能性はある。								
SK-44	6.5-24.5	隅丸方形	重複なし	1.48	1.48	0.12	N-33°-E	自然埋没状
遺物なし。								
SK-47	7.0-24.5	円形	重複なし	0.46	0.43	0.16		単層
すぐ東側に時期不明の焼土 SX-50 が隣接する。遺物なし。								
SK-52	7.0-24.5	楕円形	重複なし	1.58	1.10	0.12	N-60°-W	記録なし
北側は確認調査時のトレンチに切られる。遺物なし。								

第12章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

磯岡遺跡では、今回報告したSG9区においては縄文・弥生時代の遺構遺物が認められなかった。権現山遺跡北部の報告書『東谷・中島地区遺跡群10』に続いて、今回追加報告した各地区の縄文時代遺物と、権現山遺跡南部にある縄文・弥生時代遺構のうち注意をひくものを列挙する。

縄文時代の遺構外遺物 縄文時代の遺構外遺物は北部の報告書で報告済みであるが、その後の整理作業で確認・判明した縄文時代遺物を今回報告した。注意されるものとして、未完成品ふうの磨製石斧がある(第10図12)。表面の敲打痕を残し、縦断面形の中央が厚い部分を除去しきれていないが、刃部には使用痕が明瞭に残るのでこの状態のまま使用したことがわかる。

縄文早期の土坑 SG10区にある縄文時代土坑6基のうちSK-265に早期条痕文系土器が1片ある(第16図右上)。SK-265は、縄文時代と考えられる土坑SK-443(第16図右下)と連続する同一遺構の可能性もある。

縄文早期～中期の陥穴状土坑 SG10区にある縄文時代土坑6基のうちSK-219・697・699が陥穴状土坑と考えられる(第16・17図)。SK-219には撚糸文系土器が1片ある。SK-697とSK-699は2基が並ぶように見え、SK-697では阿玉台III式～加曽利E式の破片が遺構確認面付近で出土した。SK-699には遺物がない。

縄文前～中期 SG10区にある縄文時代土坑6基のうちSK-307には早期土器片もあるが、結節縄文を施す前期末～中期初頭の土器も出土している(第16図左下)。

縄文中期 SG2区にある流路4は古墳時代の遺物・火山灰が目立つが、最下部では縄文中期の阿玉台IV式土器片も出土している(写真図版11および『東谷・中島地区遺跡群』10の第39図214)。

縄文後期 SG10区北部で、時期不明のSK-532から堀之内1式または2式土器が1片出土した(第237図)。縄文時代土坑とは断定できないことが現地所見で指摘されているので、後世の土坑に混入した可能性がある。

縄文晩期 大洞C2式期の竪穴建物が1棟ある(権現山遺跡SG10区SI-63)。有孔円盤状土製品や深鉢形土器からみて大洞C2式期ではあるが、口縁部上面が広がって文様を持つ浅鉢形土器は大洞C1式になる(第14図3)。周辺に存在した大洞C1式期の遺構等から流入したことを想定できる。SI-63は不整円形で、柱穴は1本だけで、地床炉を持つ。同時期の竪穴建物を確認できる栃木県域中央部の宇都宮市刈沼向原遺跡を見ると、壁柱穴を持つ点は異なるが、石囲炉がない不整円形の建物が主体である点はSI-63と共通する(宇都宮市教育委員会1999)。栃木県域北部の日光市川戸釜八幡遺跡の晩期の住居は4本柱穴・石囲炉で、不整円形の他に方形プランの可能性を持つ住居もある(片根・田代2011)。栃木県域中央部とは違いが見られる。

SG10区SI-63の有孔円盤状土製品(第14図12)は、宇都宮市刈沼向原遺跡(上記)・刈沼遺跡(下野考古研1986・1992・1996)・石川坪遺跡(下野考古研1993)、日光市川戸釜八幡遺跡(片根他2011)、小山市寺野東遺跡(初山他1997)、益子町御霊前遺跡SI-04・09(後藤2001)にあり、西広貝塚(鶴岡2007)など千葉県域に多い。SI-63例は小形品である。他に、孔の多い円盤状土製品がSG5区で試掘トレンチと古墳時代のSI-10にあり(第10図2～4)、この付近の縄文時代遺物が古墳時代竪穴に流入したと見られる。

弥生中期 SG10区SK-544で弥生中期後半の土器片と打製土掘具(石鋤)が出土した(第18図)。弥生時代の遺構はこの1基だけである。

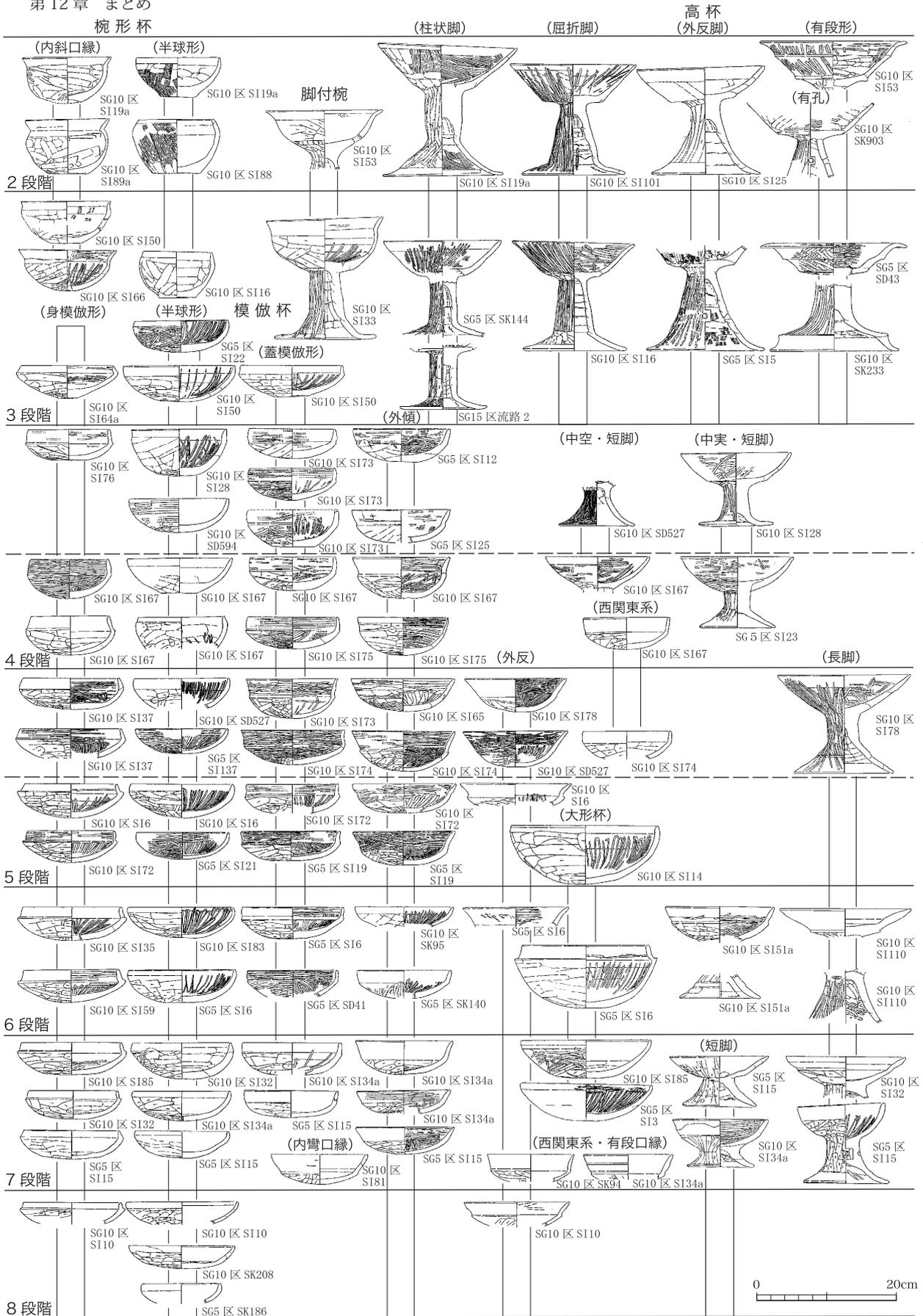
第2節 古墳時代

12.2.1. 古墳時代の土器変遷

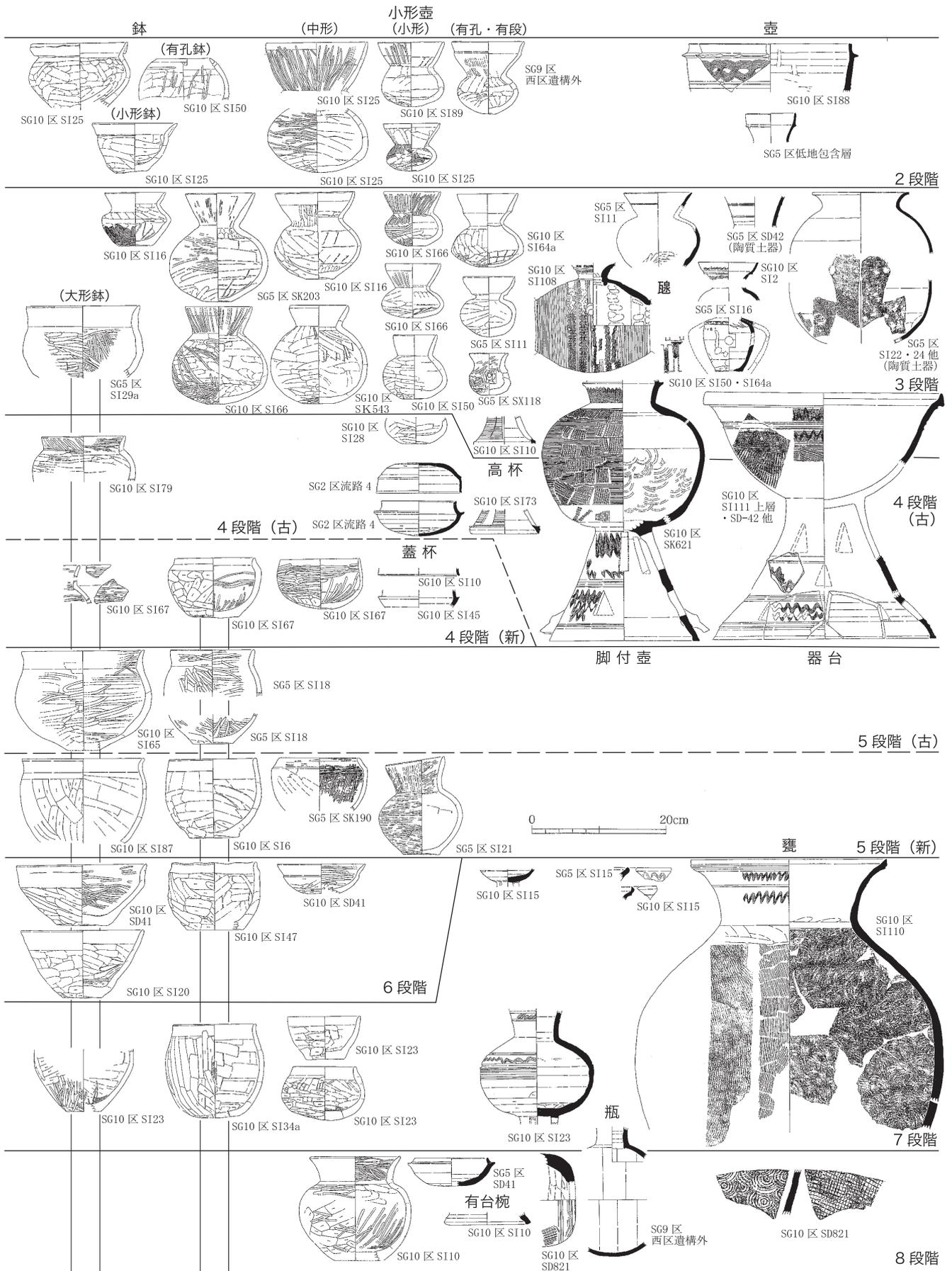
東谷・中島地区周辺では、権現山遺跡の東に所在する磯岡遺跡で、土師器杯を基準とする1～5期の時期区分が行われた(塚原1999)。これに続いて杉村遺跡北関東自動車道路調査区では、藤田(1999)の土器編

第12章 まとめ

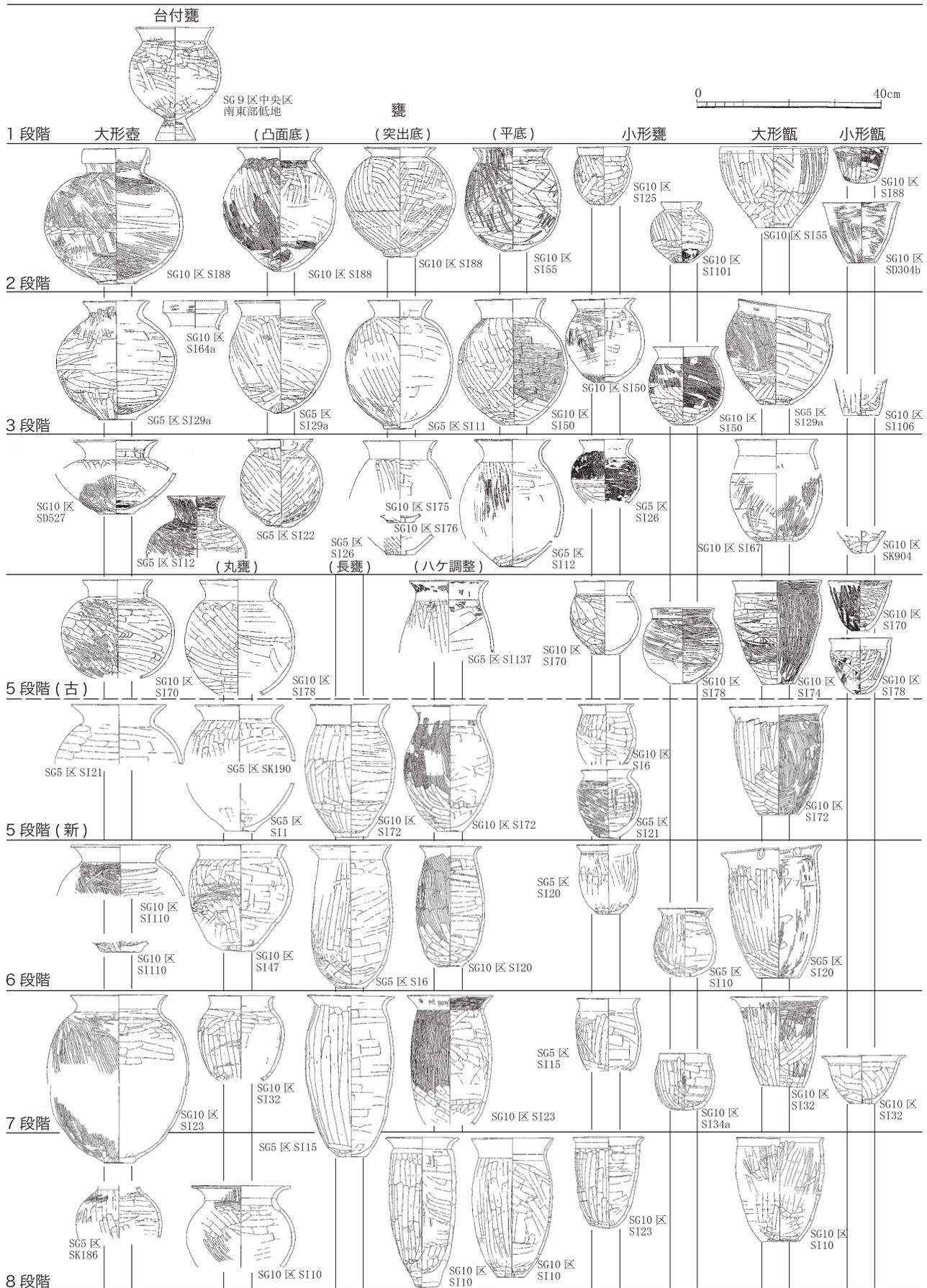
椀形杯



第 400 図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (1) 土師器杯・高杯



第 401 図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (2) 土師器鉢・小形壺と須恵器・陶質土器



第 402 図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡 SG9 区出土土器の変遷 (3) 土師器大形壺・甕・甎

第230表 権現山遺跡南部と磯岡遺跡 SG9 区における古墳時代・古代・中世遺構と時期区分

	編年区分		磯岡遺跡		権現山遺跡南部					
	土師器	須恵器	SG9 区	SG2 区	権現山 SG5 区		SG9 区	SG15 区	権現山 SG10 区	
前期				流路 2 下層	竪穴建物以外	竪穴建物	南東低地		竪穴以外と特殊遺構	竪穴建物
古墳中期	1 段階						南東低地		(SK-11?) (P-469・470?)	
	2 段階	TK73・216		流路 4	SK-208?		中央微高地		SK-29,46?,261b,903,	SI-18(c→b→a),19a,19b,25,53,55,57,64b,88,89a,89b,101
	3 段階	TK208	SI-49a,b	流路 1.2 流路 4 (前段階から継続)	居館外郭溝 SD-43,227 (SD-101?) SX-118 SK-51,86,96,106?, 130?,144,191,198, 199,200,203,204, 205a,206,207,210?, 220,225,	(3 段階古相) SI-24,29b?,95? (3 段階) SI-5,11,13,17(古)→ 16?(新),22,29a,45,100, 116		流路 2 北方	鍛冶遺構 SI-36(2 段階新 ～3 段階古) 居館外郭溝 SD-43,221 SD-304a → 304b,305?, 319,509?,527?(4 段階 まで継続するものあり) SK-91?,233,266,274?, 292,346?,439,543,801,	(3 段階古相)SI-36 (左 欄にも表示) .56 (3 段階)SI-2,9,13,16, 30,33,38,48,49,50,60, 61,64a,66,80?,84,86, 100(SG5 区と同一建 物), 104,105,106,108,111
	4 段階	TK23・47		SK-103 流路 2.4 (前段階から継続)	SD-42(4～5 段階) SK-195,218 SK-215?,226? 円筒形 SK-34,35,47?	SI-12,25(古)→ 23(新),26,99? (SI-12,25? は 4 段階古 相 /SI-23・26 は 4 段 階新相)	南東低地		SD-304b,305?,509?, 527(3～4 段階) SD-42,540(4～5 段階) SD-594,711 SK-207,553a,904?,911 円筒形 SK-550,621 (SK-621 は 4 段階古相)	SI-8,67,73,75,76,79, 113b → 113a (SI-28,73,76,79, 113b? は 4 段階古相/ SI-67,75,113a? は 4 段 階新相)
	詳細時期不明 (2～4 段階)			SK-100	SK-82,92,142,189, 196,202,210,213 南,219,247,253,	SI-155?(古墳後期の可 能性もあり)			SD-533,534,535, 円筒形 SK-210,216,217, 571,674 SK-11,293,803,819,902	SI-82(2 段階か 3 段階)・ 115 (6 段階の SI-83 より古い)
古墳後期	5 段階	MT15・ TK10			SD-42(4～5 段階)・ SD-44(5～6 段階) SK-31,98,190,208 上層,218(SK-31は 5 段階古相/SK-98, 190,208 上層は新 相)	SI-1,4?,7?,18,19,21,137 (SI-18,137 は 5 段階古 相 /SI-1,19,21 は 5 段 階新相)			SD-42,527 上層,540 (4～5 段階) SK-456 (5 段階新相)	SI-6,14,22,37,45,65,69, 70,72,74,78,87,114? (SI-22,37,65,70,74,78 は 5 段階古相/SI-6,14, 45,72,87 は 5 段階新 相)
	6 段階	TK43			SD-41(6～8 段階) SD-44(5～6 段階) SK-140	SI-6,8,9,10,20 (SI-6,10 は 6 段階古相)			SD-41(6～8 段階) SK-95	SI-15,20,24,35,39,47, 51(a,b,c),58?,59,83, 110 (SI-15,20 は 5 段階新 相の遺物も含む)
	7 段階	TK209		流路 5	SD-41(6～8 段階) SK-205a,	SI-3,14(古)→15(新), 28			SK-94,222,908?	SI-12,21a,21b?,23,32, 34(a,b,c),40,81,85,
	詳細時期不明 (5～7 段階)					SI-2(5～7 段階?), SI-107(6～7 段階), SI-155?(古墳中期の可 能性もあり)			SD-696,	
古墳終末期	8 段階	飛鳥 I 新・II			SD-41(6～8 段階) SK-186 南				SK-208	SI-10
	9 段階	飛鳥 III・IV								
	詳細時期不明 (8～9 段階)			SK-31?			西区遺構外		SD-821	
奈良	10 段階	飛鳥 V 益子原東 4 号 新治一丁田窯					中央区微高 地			
	11～12 段階									
平安	(9c 中葉)	三養大芝原 B 益子脇屋 新治小野 1 号		D 区遺構外	SK-120				SK-235	SI-90
古代 (奈良～平安時代)									道路側溝 SD-250a・ 250b	
中世									区画溝 SD-263?, 井戸 SE-232,237,252, 344,377,569, 土坑 SK-92,251 中央部・北部柱穴群 (P-425,627,640 等)	

年に基づいて、古墳中期を「杉村1～4期」、古墳後期を「杉村4期以降」と区分して、土器と集落の変遷が明らかにされた(藤田・安藤編2000)。その後の調査では、今回報告地区から西に連続する権現山・百目鬼遺跡で示されたI～VIII期の土器編年(谷中・大島編2001)を基礎とし、時期・段階区分の数字を共通させて、各遺跡で編年を行っている。北方にある立野遺跡では1～9段階(内山2005)、その東にある中島笹塚遺跡ではそれに続けて12段階(奈良時代後葉)までを設定した(内山2008)。前回報告した権現山遺跡北部・杉村遺跡においても1～10段階を設定した(内山編2010)。各段階区分と段階名は、百目鬼・立野・中島笹塚遺跡の区分と共通させている。今回扱う権現山遺跡南部と磯岡遺跡SG9区古墳時代遺物は、1～8段階に相当する。1段階よりも先行する古墳時代前期の土師器が少量あり、S字状口縁台付甕が権現山遺跡SG9区南東部低地、二重口縁壺が権現山遺跡SG2区流路2にみられる。なお、砂田姥沼遺跡は古墳前期を「1段階」としているため、他遺跡の編年よりも段階名称の数値が一つ多くなっている(藤田2011)。

1段階古相は古墳時代前期末または中期初め、1段階新相～4段階は古墳中期、5～7段階は古墳後期、8段階は古墳終末期前半に相当する。古墳時代中期は古市・百舌鳥古墳群に列島最大規模の首長墳が築造される時期として定義し、特定地域の土器様相や横穴式石室導入期を指標とする立場をとらない。中期の下限は、剣や短甲の副葬が終了するTK47型式並行期である。また、前方後円墳の築造終了後を古墳時代終末期とする。Hr-FA テフラの降下期は4段階末～5段階初頭である。

遺物・重複関係・火山灰などから各段階に位置づけられる遺構を第230表に示す。また、古墳時代中・後期須恵器の田辺編年(田辺1966・1981)、終末期の飛鳥編年(奈良国立文化財研究所1978)、奈良時代の益子窯跡群・三毳山麓窯跡群・新治窯跡群の須恵器編年(津野1997・赤井1998)との対応を示した。

各段階の標識的一括遺物を出土した遺構を以下に示す。段階区分は立野遺跡・中島笹塚遺跡と共通する。また、権現山・百目鬼遺跡の北関東自動車道調査区(谷中・大島編2001)・杉村遺跡の北関東自動車道調査区(藤田・安藤編2000)・磯岡遺跡(塚原1999)の各編年、藤田(1999)編年、須恵器編年との対応を示す。

〔1段階古相〕 権現山百目鬼I期・杉村1期(古墳前期末～中期初頭、4世紀末)

…権現山SG9区中央区南東低地の台付甕

〔1段階新相〕 藤田I期(古墳中期前葉)

…今回報告地区では該当資料なし。2段階のSI-88に切られる権現山SG10区SK-11が、1段階の可能性もある。

〔2段階〕 権現山百目鬼II期・藤田II期・TK73～216型式期(古墳中期中葉、5世紀前葉)

…権現山SG10区SI-19a・88・89a, [権現山SG10区SI-25は2段階新相]

〔3段階〕 権現山百目鬼III期・杉村2期・藤田III期・TK208型式期(古墳中期後葉、5世紀中葉)

…権現山SG5区SI-11・22・SX-118・SD-227, 権現山SG10区SI-16・50・66 [SG10区SI-36は3段階古相]

〔4段階〕 権現山百目鬼IV期・杉村3～4期・藤田IV～V期・磯岡1期・TK23～TK47型式期(古墳中期末、5世紀後葉～6世紀初頭)

…権現山SG5区SI-12, 権現山SG10区SI-28・73 [4段階古相]

権現山SG5区SI-23, 権現山SG10区SI-67・75 [4段階新相]

〔5段階〕 権現山百目鬼V期・杉村4期以降120住・MT15～TK10型式期(古墳後期前～中葉、6世紀前～中葉)

…権現山SG5区SI-18・137, 権現山SG10区SI-65・70・74・78 [5段階古相]

権現山SG5区SI-19・21, 権現山SG10区SI-6・72 [5段階新相]

〔6段階〕 権現山百目鬼VI期・杉村4期以降133住・磯岡2期・TK43型式期(古墳後期後葉、6世紀後葉)

…権現山SG10区SI-35・47・83・110

〔7段階〕 権現山百目鬼VII期・杉村4期以降112住・磯岡3期・TK209型式期(古墳後期末、6世紀末～7世紀初頭)

…権現山SG5区SI-15, 権現山SG10区SI-32・34a

〔8段階〕 権現山百目鬼VIII期・磯岡4期・飛鳥I新相～II期(古墳終末期前半、7世紀前～中葉)

…権現山SG10区SI-10

遺構を各段階に位置付ける操作を行った時の注意点を、以下に記しておく。3段階のSG5区SI-17(古)→SI-16(新)や、7段階のSG5区SI-14(古)→SI-15(新)は、同一段階の竪穴建物跡が重複している。他にも、a・b・cの記号で細分表記した建替建物が同一段階の中に収まる事例がある。複数の段階に継続する溝状遺構は、権現山遺跡のSG2区流路、SG5区SD-41・42・44、SG10区SD-42・520・304・305・527がある。SG5区からSG10区まで続くSD-42は、居館区画溝・SG5区SI-11・SG10区SI-2(3段階)→SG5・SG10区SD-42(4～5段階)→SG5・SG10区SD-41(6～7段階)として位置づけた。SD-42に少量ある3段階の遺物は、SG5区SI-11および居館、SG10区SI-2・111などからの流入品と判断した。6段階にSD-42の北部を掘り直した溝がSG5区とSG10区のSD-41である。

今回も4段階と5段階の資料数が多いので、前段階や次段階に近い型式の増減を手がかりに、各段階を新古に細別した場合がある。4段階では深身模倣杯や短脚中実高杯の極小化、5段階では口縁外反杯の減少と杯身模倣杯・長脚中空高杯の増加および杯の浅身化が、それぞれ新段階の指標となる。しかし、遺物数が少ない場合や、新古の両相が共存する一括遺物では細別の判断が難しい。この点は権現山遺跡北部・杉村遺跡における編年案(内山編2010)と同様である。

12.2.2. 古墳時代の集落と変遷(第403・404図)

集落成立前 古墳時代前期末～中期初頭に相当する権現山遺跡1段階は、権現山遺跡南部・北部ともに確実な遺構がない。権現山遺跡南部では低地部に前期末の土器が少量みられ、SG2区流路2の二重口縁壺(第244図19)やSG9区中央区南東部低地の単口縁・S字状口縁台付甕(第386図)がある。1段階の建物は、同じ開析谷の北方では島状微高地に杉村遺跡北関東自動車道路調査区60・69・70号住居跡があり(藤田・安藤2000)、さらに北側ではこの谷に面して立野遺跡5区SI-14(内山編2005)がある。また、砂田姥沼遺跡にも古墳前期の建物2区SI-1と3区SI-5が単独で所在する(藤田2011)。権現山遺跡・杉村遺跡付近の集落が2段階に大規模化するよりも前に、開析谷に面する微高地で小規模集落が営まれていたことがわかる。

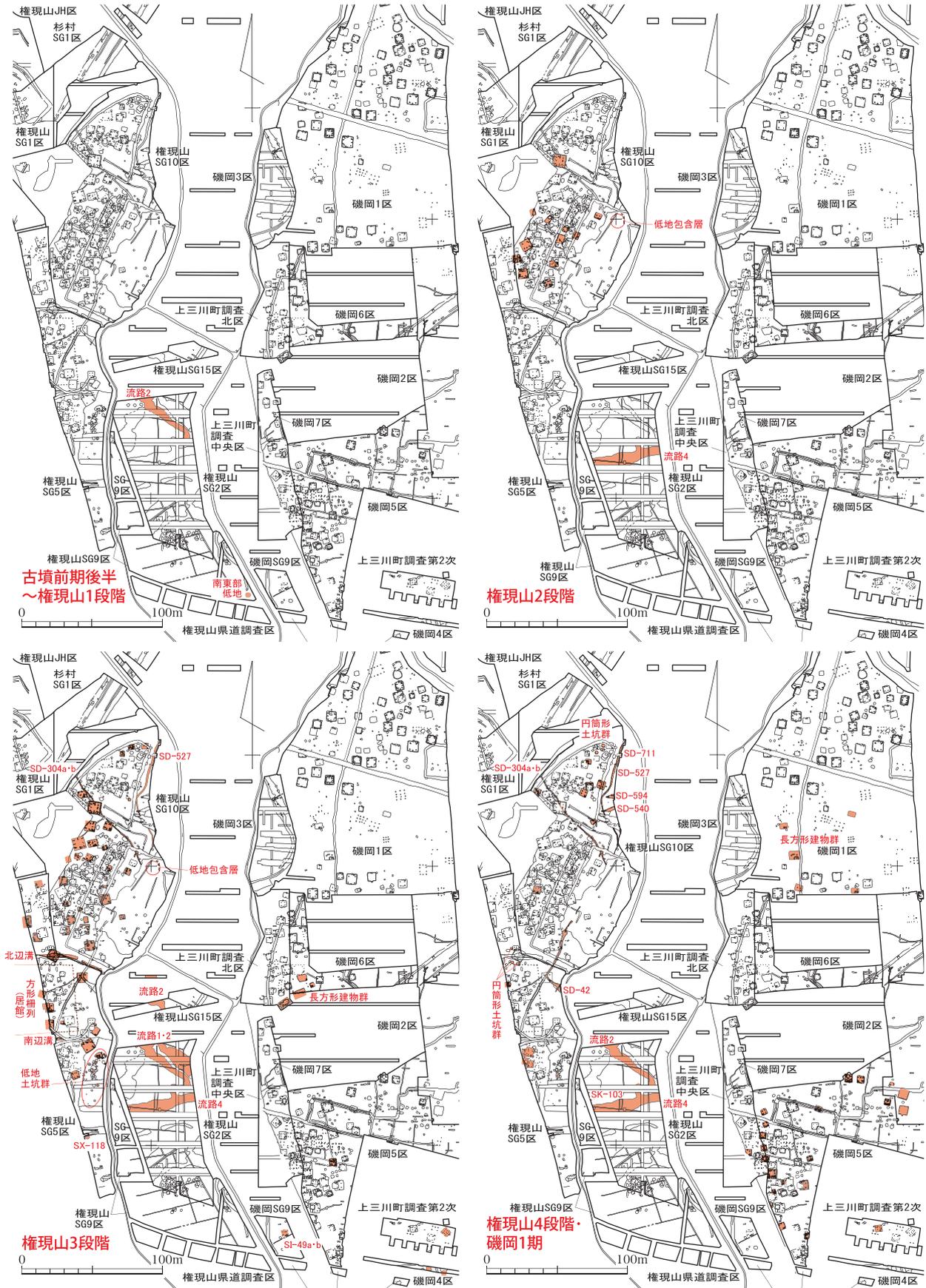
集落の大規模化 古墳時代中期前葉(2段階)から集落が大規模化する。今回報告する権現山遺跡南部ではSG10区に10棟の建物があり、権現山遺跡北部(4区・SG1区)、杉村遺跡GN1区、さらに北方の立野遺跡5区や磯岡北遺跡B区(勝見2005)と磯岡北遺跡SG17区(内山2006)までの広い範囲に集落群が成立する。中期後葉(3段階)にはさらに集落群の範囲が広がって、権現山遺跡南部南半(SG5区)、杉村遺跡北関東自動車道路調査区、磯岡遺跡南半部、砂田遺跡まで居住域拡大つまり分村が進む。

権現山遺跡南部居館 権現山遺跡では、北部と南部に1箇所ずつ居館遺構がある。南部居館(SG5区居館)は方形柵列SA-151の東辺長が47.1mなので、北部居館(SG1区居館、東辺長98m)の約半分である。北部居館は古墳中期中～後葉(本遺跡編年の2～3段階)の継続幅を持つ。これに対して南部居館は中期後葉(3段階)である。南部居館の南辺溝(SG5区SD-227)と北辺溝(SG5区・SG10区SD-43およびSG10区SD-221)の遺物が3段階で、SI-100(3段階)→居館北辺溝SD-43(3段階)、さらに居館北辺溝SG10区SD-221(3段階)→SG5区・SG10区SD-42(4・5段階の溝)、という重複関係がある。3段階のある時点で北部居館から南部居館へ移転したか、または北部居館と南部居館が3段階には共存していたと考えられる。

北辺溝は1箇所が途切れて土橋になり、SG10区集落から入る通路であろう。南辺溝SD-227はSD-101に切られる東半が不明であるが、SD-101と同様に北へ曲がりながら低地へ向かうことを想定できる。柵列の柱穴は深さ1mほどなので、地中部分の長さの3倍ほどを地上建築物の柱高と考えるならば(宮本2001,p.17)、高さ3m程度の柵(または塀)を推定できる。

居館が営まれる3段階には、周囲に竪穴建物群や低地部土坑群が隣接するので、周辺集落から隔絶する群馬県三ツ寺I遺跡居館とは立地が大きく異なる。ただし、3段階の周辺建物でも居館より古いものがあることが、居館北辺溝に切られるSI-100から判明する。南部居館の柵列内にある3段階の竪穴建物はSG5区SI-13、SI-16(?), SI-17, SI-116で、同じ3段階の中でSI-17→SI-16の重複関係がある。また、柵列外で区画溝の

第12章 まとめ



第 403 図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷 (1) 古墳前期後半～古墳中期

内側に SG5 区 SI-11 がある。3 段階の大形建物は、居館周辺よりも北側にある (SG10 区 SI-50・60・64a)。

中期集落と円筒形土坑・特殊建物 権現山 SG10 区の北端部は、古墳中期末葉 (4 段階) ころの貯蔵穴と考えられる円筒形土坑が集中する。また中期中～後葉の 2 本柱や無柱の竪穴建物も目立つ (SI-79・80・82・84・86・115?)。古墳中期集落内で貯蔵関連施設と特殊建物がまとまる地区であったことがわかる。磯岡遺跡と杉村遺跡でも中期中～後葉に長方形建物や無柱建物が目立つ (磯岡遺跡では 6 区と 1 区南端、杉村遺跡では北関東自動車道路調査区)。杉村遺跡は土師器生産・鉄器生産など手工業生産にかかわる地区で (『東谷・中島地区遺跡群』10, p.547)、また中期中～後葉の円筒形土坑も分布する。

中期の低地土坑群 SG5 区と SG10 区で、集落から低地へ降りた付近に土坑群がある。SG5 区の土坑群 (第 345 図) は、残存度の高い土師器甕などが出土するので、低地の水を利用する井戸のような施設と考えたいが、祭祀土坑や地山白色粘土採掘坑と考える意見もあろう。SG10 区の南東部低地で出土した古墳時代遺物は、遺構 (土坑) に伴う遺物と遺構外遺物とのいずれも、古墳時代後期の遺物がほとんど見られない。時期不明土坑・溝に混入している遺物もほぼ中期の遺物である。時期不明土坑の中に古墳中期の土坑も含むであろう。

後期の集落 居館は見られないが、集落の性格や土地利用は中期のありかたを継承している部分がある。古墳後期にも 2 本柱や無柱の竪穴建物が SG10 区北部にある (SI-81・83・114) ことや、後期の大形建物 SI-110 が SG10 区中央部にあることは、中期における 2 本柱建物・無柱建物・大形建物の位置と共通している。居館 (3 段階) より後の中期末 (4 段階) や後期 (7 段階) にも須恵器脚付壺や器台のような祭祀的器種がみられることも (第 401 図)、権現山集落が引き続き首長層と関わりを持っていたことを示唆している。

12.2.3. 古墳時代の各遺構

竪穴建物の炉 火処に炉を使う 2～3 段階の竪穴建物は、大半が 1 箇所 of 炉を持つ。2 段階の権現山 SG10 区 SI-19b と、3 段階の権現山 SG10 区 SI-16・33・86 は、2 箇所 of 炉を持つ。3 段階の権現山 SG10 区 SI-50 は 6 箇所 of 炉が時期差をもって使われている。SI-50 は二重礎を出土する大形建物で、作業場よりも有力者の住居と見たい。SI-50 の鍛冶滓 1 点は南側の鍛冶遺構 SI-36 から持ち込まれたものであろう。

炉の位置は、竪穴床面の中央よりも東側と北側に寄るものが多い。東側に炉があるものを細分すると、2 段階は東部 (SG10 区 SI-19b,55,57)、3 段階は南東部 (SG10 区 SI-2,50,60,64a,86) に炉を作る傾向がある。次段階 (4 段階) のカマドが東壁の南部に多いことと関連するであろう。東側と北側以外に炉がある建物は、中央 4 例 (権現山 SG10 区 SI-50 の炉 5 と SI-106・108・111)、南 1 例 (権現山 SG10 区 SI-80) がある。

カマドの採用 権現山遺跡におけるカマドの出現時期は中期後葉 (3 段階) で、SG5 区 SI-13・16 の 2 例である。これ以外は、3 段階以前の火処は炉である。同じく 3 段階の建物でも SG5 区 SI-17 は炉で、それを切る SI-16 はカマドを北壁に持ち、3 段階の新相でカマドを採用したことがわかる。SG5 区 SI-13 も 4 段階に近い短脚化した高杯を含むので、3 段階の中では新相と考えられる。4 段階以後は大半の建物がカマドを採用し、4 段階に 1 例だけ炉が残存する (SG10 区 SI-79)。

カマドの位置 竪穴建物にカマドを設置する方位は、東側と北側の 2 種が一般的で、1 例だけが南側にある (SG10 区 SI-72)。南側カマドの事例は磯岡遺跡上三川町調査区の SI-30 と、百目鬼遺跡 SI-063 にある (深谷・高野 2004、谷中・大島編 2001)。東側カマドは 4～5 段階に多く、4 段階では主流だが、他段階では少数派である (第 231 表)。5 段階以後は、北側にカマドを作ることが主流になる。

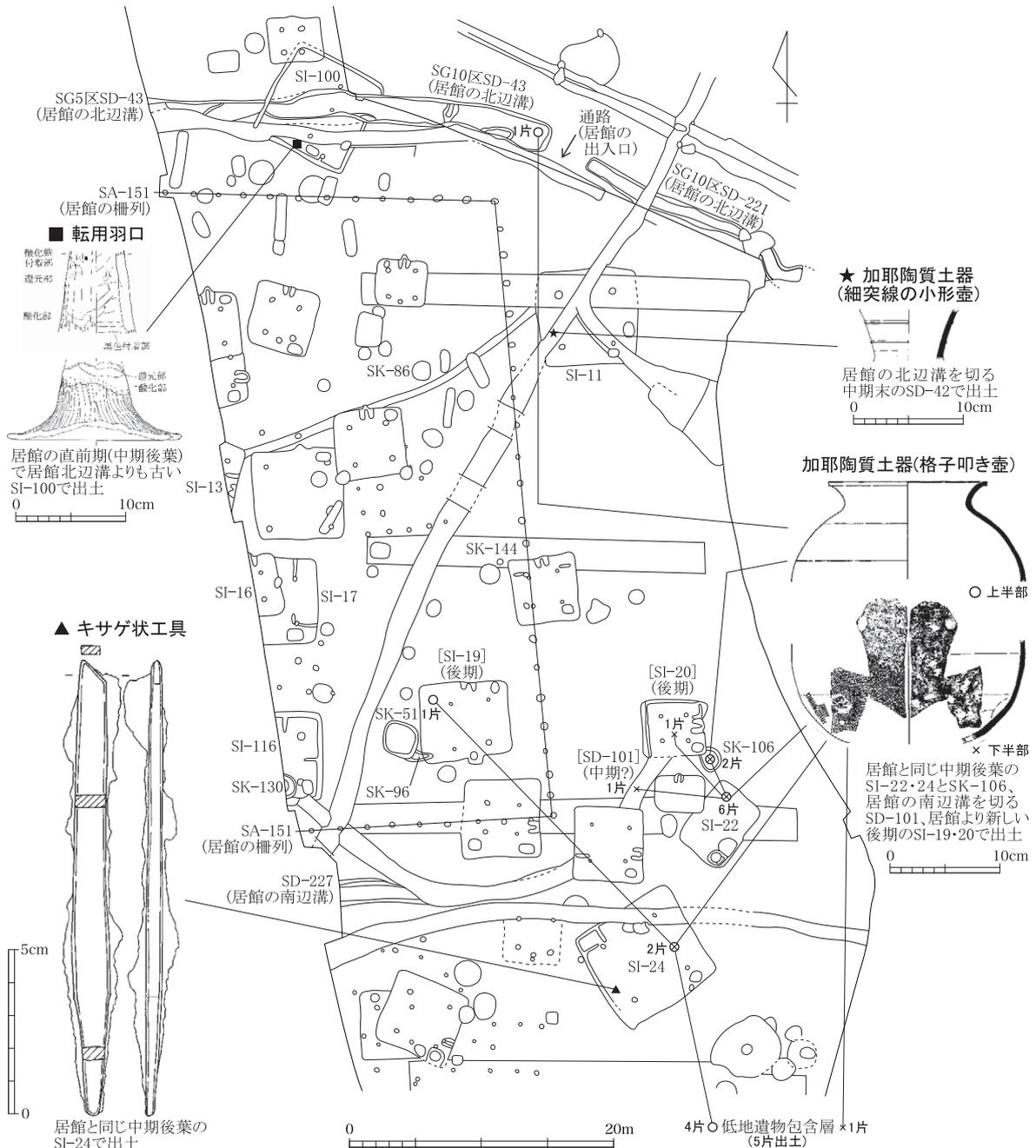
第 231 表 権現山遺跡南部におけるカマドの位置 (カッコ内は建物番号)

時期	3 段階	4 段階	5 段階	6 段階	7 段階	8 段階
東側 (SG5 区) (SG10 区)	1 例 (SI-13)	5 例 (SI-12,23,26) (SI-28,37)	6 例 (SI-1,21,137) (SI-69,70,74)	3 例 (SI-20) (SI-20,83)	1 例 (SI-32)	0 例
北側	1 例 (SG5 区 SI-16)	0 例	11 例	10 例	13 例	1 例
南側	0 例	0 例	1 例 (SG10 区 SI-72)	0 例	0 例	0 例

鍛冶関連遺構 今回報告する権現山遺跡南部では、SG10区SI-36が鍛冶遺構である。南東部以外は消滅しているため建物構造をくわしく把握できない。煤が付着した土師器甕を多く伴い、鍛冶遺構であると同時に生活の場でもあったことを思わせる。この点は、権現山遺跡北部にある鍛冶遺構SG1区SI-33とも共通する。

居館周辺の遺構と特殊遺物 権現山遺跡南部の陶質土器破片は、古墳中期後葉（3段階・TK208型式期）のSG5区居館の周辺部に多い。渡来系文化・技術を取り入れる役割を持つ地区であろう。

格子叩きの陶質土器壺破片が出土した遺構のうち、SG10区SD-43は権現山遺跡南部居館の北辺溝である。SG5区SI-22・24も居館と同じ3段階である。SG5区SI-22に壺の下半2片と上半4片があり、位置がわかる1片はSI-22の壁溝底から7cm浮いて出土した。2片を出土したSG5区SI-24には、金工具の可能性を持つ「キサゲ状工具」もある。SG5区SK-106とSD-101も中期の可能性があり、SK-106の上層に後期初頭のHr-FAテフラが入る。居館南辺溝SD-227を切るSD-101は軽石の粗砥石を出土した。後期のSG5区SI-19・



第405図 権現山遺跡南部SG5区居館周辺遺構と特殊遺物

20にも格子叩きの陶質土器壺破片が1点ずつ流入している。

細い突線を持つ陶質土器小形壺は、SG5区SI-11(3段階)にSD-42(4～5段階)が重複する付近で出土した。3段階の居館に関わるSI-11などから、中期後葉～後期前半のSD-42に流入したものと推定する。

小形の鍛冶滓が、SG5区SD-42に1点、その北に続く中～後期のSG10区SD-41・42に3点ある。居館北辺溝に切られる3段階のSG5区SI-100にも羽口があるので、北辺溝設置前から集落内で鍛冶を行ったことがわかる。SG5区の鉄関連遺物は少なく、鍛冶関連作業は北側のSG10区とSG1区で主に行われている。

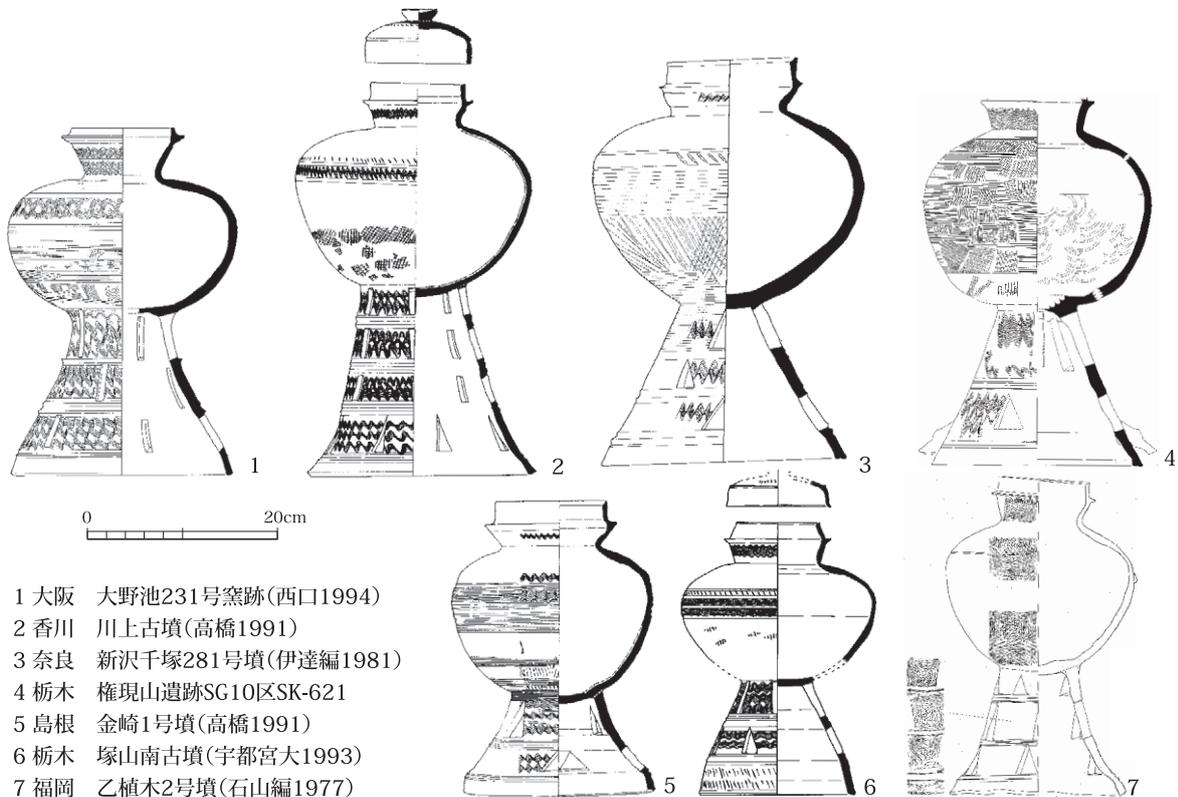
12.2.4. 古墳時代の出土遺物

他地域産の土師器 群馬・埼玉県産の土師器は、古墳後期末(7段階)のSG10区SI-34aに有段口縁杯があり、SG10区SI-67(4段階)・SI-74(5段階古相)・SK-94(7段階)には薄手の杯がある。これらは、第400図で「西関東系」と表示した。雲母を含む茨城県南西部地域産の土師器は、SG5区ではSI-24の高杯(12)があり、隣接するSG10区ではSI-12・21a・22・23・47・59・72・73・74・81・85・114にある。権現山遺跡北部では雲母を含む土師器が2区に多く、他地区にも若干ある(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.550)。第400図で6段階の「外反」土師器杯に示したSG5区SI-6は、東北地方の栗圀式系の可能性を持つ(第287図19)。

須恵器二重壘・器台・脚付壺 これらも一般集落ではあまり出土しない器種である。有力者(首長)層にかかわる儀礼用土器が集落で破損後再利用・廃棄されたものであろう。

二重壘は、古墳中期のSG10区SI-50・64a、時期不明の土坑SG10区SK-254、近世の溝SD-201aに破片がある(第401図3段階)。SI-64aの体部内周(第100図49)と、SG10区SI-50・SK-254・201aの体部外周破片(第83・215・237図)が同一個体の可能性もあるが確定はできない。透窓が波状文を切る点で静岡県山ノ花遺跡・長野県金鑑山古墳例に似る(浜崎市博物館編1998, p.78; 木下1992)。栃木県域では、北西4.7kmにある塚山南古墳でTK208～23型式期の2点が出土している(宇都宮大1993)。

器台は、脚部が内彎しはじめて口縁部が短くなるIV式(高橋・小林1990, p.38)で、TK23型式に相当する(第



- 1 大阪 大野池231号窯跡(西口1994)
- 2 香川 川上古墳(高橋1991)
- 3 奈良 新沢千塚281号墳(伊達編1981)
- 4 栃木 権現山遺跡SG10区SK-621
- 5 島根 金崎1号墳(高橋1991)
- 6 栃木 塚山南古墳(宇都宮大1993)
- 7 福岡 乙植木2号墳(石山編1977)

第406図 権現山遺跡SG10区の脚付壺と類例

401 図 4 段階)。同一個体の可能性が高い須恵器器台が SI-111 の上層に 2 片、SI-111 の南西 10m の SD-41・42 出土口縁部 1 片、古墳時代の SK-292 出土杯部 1 片、時期不明土坑 SK-614 と近世溝 SD-201a と後期の北関東自動車道調査 A 区 SI-141 の脚部各 1 片に分かれて出土した。SK-614 は SI-111 から北に 108m 離れている。権現山遺跡には須恵器器台が多く、別個体の須恵器器台として本遺跡南部 SG5 区低地包含層出土破片（第 357 図 12）、本遺跡北部 SG1 区居館 SD-95 周辺の筒形器台（内山編 2010, pp.340,550）、北関東自動車道路調査 B 区 SZ-003 号墳（谷中・大島編 2001, 本文編 II-pp.49,242）にある。

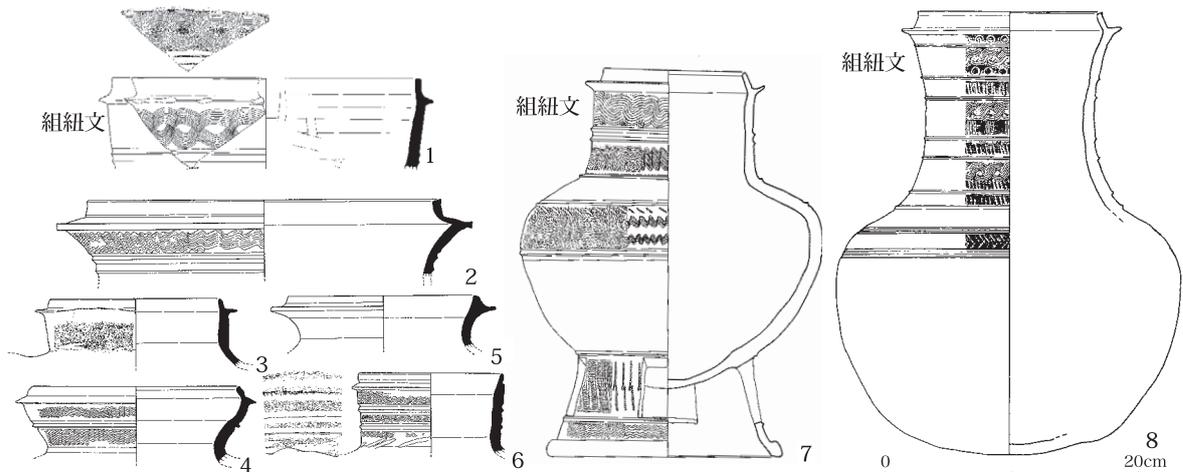
有蓋脚付壺は、肩部の張りや頸部の外傾が弱いものが新しく、口縁端面は水平から内傾へ変遷する（第 406 図 1 → 4, 5 → 7）。中期末～後期には頸と脚が長くなる（中村他 1987）。3 と 4 はまっすぐ開く脚部が共通する。ON231 段階（1）→ TK208 型式（2・5）→ TK23 型式（3・4・6）→ TK23～47 型式（7）と考えられる。

SG10 区 SI-88 の有蓋壺（第 407 図 1） 大野池 231 号窯跡の 2～6 や、口径は異なるが第 406 図 1 の脚付壺と、平坦な口縁端面・高い蓋受部・やや崩れた組紐文が共通する。TK73 型式前半の ON231 段階に相当する初期須恵器で、文様は大野池 231 号窯例より古相である。組紐文を描く有蓋壺が分布する慶州・釜山地域（入江 2011, p.262）や金海地域の陶質土器が、倭で変容した初期の製品であろう（趙晟元氏の御教示による）。

組紐文は器台に多い文様で、組紐文の壺は台を持つ可能性が高い（入江 2011, p.253）。権現山遺跡 SG10 区例も、特別な意味を持つ大形壺と考えられる。組紐文様の須恵器は中部以西に多く、東日本では東京都野毛大塚古墳（風間 1992, p.422）と本遺跡にある。権現山遺跡北部（SG1 区）の豪族居館と同時期なので、首長間交流を介して、特別な容器または内容物がもたらされたことを想定できる。

SG5 区・SG10 区の陶質土器 韓式系（朝鮮半島系）土器の加耶陶質土器が SG5 区で 2 点出土した。下半部格子叩き調整・上半部無文の壺 1 点（SG5 区 SI-22・24 他）と、細突線を持つ小形壺の頸部 1 片（SG5 区 SD-42）がある。権現山遺跡 3 段階（TK208 並行期）に伴う遺物と考えられる。ただし SD-42 は 4 段階の溝に 3 段階の遺物が混入するので、小形壺は 4 段階に下がる可能性もある。

朴升圭氏（嶺南文化財研究院）の御教示によると、第 408 図 1 は加耶土器またはその模倣品で、加耶のうちでさらに地域を限定することは難しい。胴部上半の叩き目をナデ消す加耶陶質土器壺の特徴について、次のような指摘がある：「口縁部製作時の回転力を利用したヨコナデ調整は、5 世紀代以後になると、手が次第に下方まで降りて胴部まで及びはじめ、最後には胴上半部全体を回転ヨコナデするにいたる。少なくとも C 字形口縁部を持つ土器の口頸部製作と胴部上半の調整が、ロクロの回転力を利用して同時になされてゆく過程を示している」（金斗喆 2001, p.93）。倭の古墳中期後半並行期には加耶・新羅地域でも格子叩きの陶質土器が少ない。第 408 図 2 は大加耶地域の土器で（金斗喆 1986, pp.67-68; 朴天秀 2009, p.599）、軟質気味の焼成や口頸部



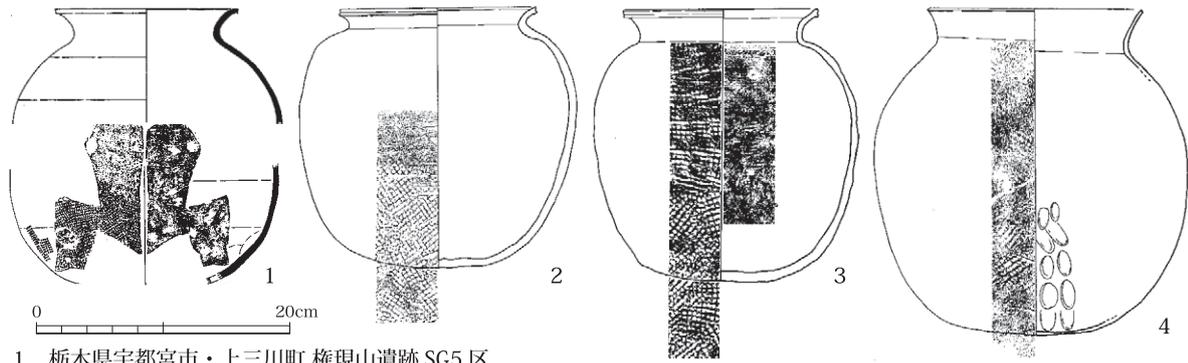
1 栃木県宇都宮市・上三川町 権現山遺跡
SG10 区 SI-88

2～6 大阪府堺市 大野池 231 号窯跡（西口 1994）

7 韓国慶尚南道金海市 禮安里 36 号竪穴式石槨墓（鄭澄元他 1985）

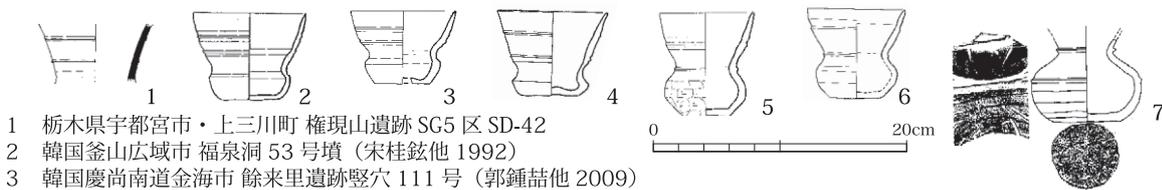
8 韓国慶尚南道金海市 大成洞 1 号木槨墓（申敬澈・金宰佑 2010）

第 407 図 権現山遺跡 SG10 区の有蓋壺と類例



- 1 栃木県宇都宮市・上三川町 権現山遺跡 SG5 区 SI-24 他 (上部)・SI-22 他 (下部) 3 韓国慶尚南道宜寧郡 泉谷里 19-1 号墳 (朴升圭他 1997)
 2 韓国慶尚南道咸陽郡 白川里 1-3 号墳 (鄭澄元他 1986) 4 韓国慶尚北道大邱市 時至 285 号墓 (梁道榮他 1999b)

第 408 図 胴部上半の格子叩きをナデ消す壺



- 1 栃木県宇都宮市・上三川町 権現山遺跡 SG5 区 SD-42
 2 韓国釜山広域市 福泉洞 53 号墳 (宋桂鉉他 1992)
 3 韓国慶尚南道金海市 餘米里遺跡竪穴 111 号 (郭鍾喆他 2009)
 4~6 韓国慶尚南道咸安郡 道項里古墳群
 4 (文)32 号墓 (李柱憲 1997) 5 (慶)61 号墓 (禹枝南他 2000) 6 (慶)破壊墳 (禹枝南他 2000)
 7 栃木県上三川町 殿山遺跡 KT-121 (大川他 1995)

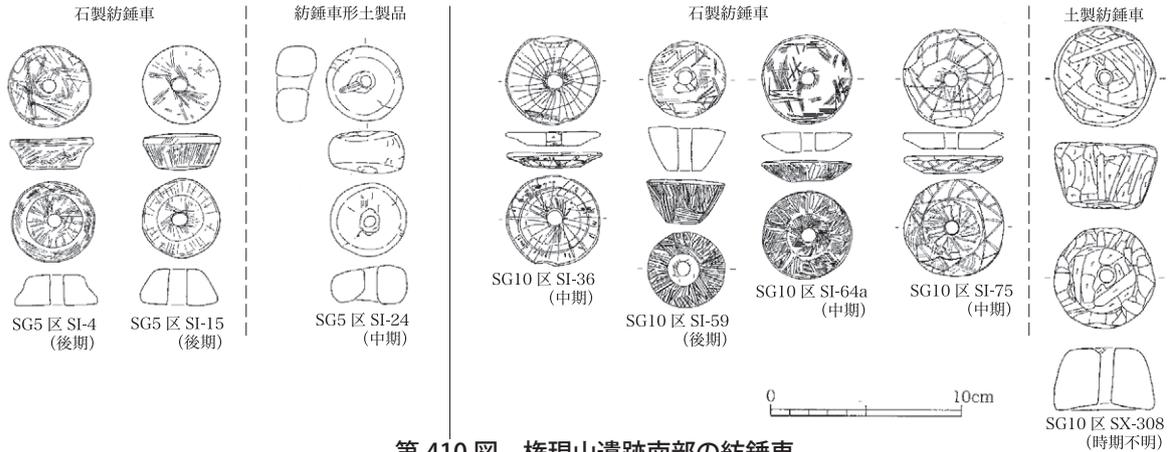
第 409 図 頸部に細突線を持つ小形壺

形状が 1 と少し異なる。新羅地域の 4 も器厚や口縁形が 1 と異なる。陶質土器の格子叩きが古墳中期後半並行期まで続く事例を蓄積すれば、権現山遺跡例の系譜を検討できる可能性がある。

細突線を持つ壺も、加耶の中で地域を限定することは難しいが、慶尚南道咸安地域の陶質土器にある (朴升圭氏御教示)。頸基部に細突線を持つ平底壺は咸安の道項里古墳群に多いが、広口小壺自体は加耶に広く分布するので咸安に限定しないほうがよいという (趙晟元氏御教示)。道項里 (文) 9・29・10・27・32・36 号墳 (李柱憲 1997,1999,2000) や道項里 (慶) 破壊墳・61 号墓 (禹枝南ほか 2000) の小形壺にも頸基部の細突線がある。権現山遺跡の南西 4km にある上三川町殿山遺跡 KT-121 の頸基部と体部に細突線を持つ陶質土器平底壺 (第 409 図 7) を検討した定森秀夫氏は道項里 (文) 10 号墳・(文) 27 号墳出土土器を例示したうえで「咸安地域だけに限定することはできず、広く伽耶地域のものと考えておきたい」と考えた (定森 1995, pp.22-23)。権現山 SG5 区のような頸部 2 本突線の事例も、咸安地域だけの特徴ではなく、釜山・金海地域 (第 409 図 2・3) や大邱地域 (時至 ID-86 号墓: 梁道榮他 1999a, p.374) にも分布している。

上記の 2 点以外で、韓式系陶質土器の可能性のある遺物に触れておく。古墳時代土坑 SG10 区 SK-346 の小形壺が、外底面に藁を敷いて焼成した痕跡を持つので、陶質土器の疑いもある。植物 (藁) を離器材に使うことは韓国南部の陶質土器に多い特徴で、加耶・新羅地域および栄山江流域で広く行われている (酒井 2005, p.138; 松永 2010, p.179)。ただし、SK-346 の小形壺は口縁部形状が不明で手がかりが少ないので、須恵器として報告した。細突線が口縁部に 1 本ある壺破片が SG5 区 SI-11 にあり、これは須恵器として扱った。格子叩き壺 (SG5 区 SI-22・24 他)、細突線のある壺頸部 (SG5 区 SD-42)、藁痕跡のある小形壺 (SG10 区 SK-346) の 3 点について、韓国出土陶質土器との胎土比較分析を予定している。

手工業生産関連遺物 土師器の補修痕は SG10 区 SI-6・22・23・25・33・87・111 と SK-243 と SG5 区 SK-205a、焼成前亀裂は SG10 区で SI-19a・34a・89a と鍛冶遺構 SI-36 にある。SG5 区 SI-3-8、SI-20-18、SI-21-10、SG2 区流路 2-9、磯岡遺跡 SG9 区 SI-49a-1 も補修の可能性を持つ。SG10 区 SI-18a-2 と、SI-25 の 2・25 ~ 27・103 等は変形・剥離などがある不良品土師器で、SI-25 に多い。土師器製作者に関わる遺物である。



第410図 権現山遺跡南部の紡錘車

焼粘土塊も土師器製作関連遺物の可能性がある。SG5区ではSI-3・9 (3点=27g)・10 (5点=82g)・12 (3点=17g)・13・14・15 (4点=45g)・16 (4点=19g)・17 (5点=184g)・18 (3点=26g)・20・21 (13点=49g)・22・26・29a・116・137とSK-210にある。SG10区ではSI-10・15・20 (3点=254g)・23・28 (4点=24g)・30 (3点=31g)・34a (5点=19g)・37・40・65・70・73・89a・105 (5点=25g)と中世～近世の溝SD-263にある。点数を示さない遺構は、1～2点が出土した。SG5区SI-21の13点が最多で、他は5点以下である。SG5区SI-10の重量の大半は大形の1点(68.5g)である。SG10区SI-20の大形板状品は219gで植物痕があり、カマド構築材かもしれない。

稲粃痕のある土師器は、権現山遺跡南部ではSG2区SK-103・流路2・遺構外A区、SG15区流路2(TX16)、SG10区SI-30・50・53・55・64a・66・74・78・82・89a・113a・114とSD-43・304b・527とSK-46にある。また、権現山遺跡北部ではSG1区SI-5などにある。SG10区SI-65の杯(1)とSI-88の杯(13)とSI-110の甕(4)に植物種子圧痕、SG10区SI-18aの甕(5)の胎土中に白玉があることと同様に、土師器の製作または使用に関わる何らかの意味を持って、製作時に混和したものであろう。

紡錘車は、第410図に示した事例がある。中期は滑石、後期は滑石の他に粘板岩も使う。鍛冶遺構SG10区SI-36、キサゲ状工具や加耶土器を出土したSG5区SI-24にもあることが注意をひく。

鍛冶関連遺物 今回掲載した中性子放射化分析の結果、朝鮮半島製の原料を使用した鉄製品を加工製作していると推定された。小山市西裏遺跡・壬生町新郭遺跡などでも知られている朝鮮半島産鉄原料とは異なる「高As・低Sbの系列」で、韓国南部の釜山・陝川地域出土鉄器と同群になることが注意すべき点である(第5章第6節)。また、居館・鍛冶遺構・キサゲ状工具・加耶陶質土器が古墳中期中～後葉の権現山遺跡で共存していることから、首長層の管理下で渡来系技術による手工業生産を組織していた可能性がある(内山2012, p.38)。

古墳時代の鍛冶関連資料は、権現山・磯岡・杉村・砂田・立野遺跡を含む東谷・中島地区遺跡群に多い(第232表)。権現山遺跡を中心とする鍛冶関連資料が集中する東谷・中島地区で大規模な発掘調査が実施されたので、資料数が特に多くなっている。中期には鍛冶炉を確認できる事例が一定数あるが、後期前葉の砂田遺跡12区SI-6を最後として、後期・終末期には鍛冶炉を確認できず鍛冶関連遺物だけが出土する場合がほとんどである(内山2012, p.40)。磯岡遺跡も、後期の鍛冶関連遺物を多く出土する遺跡で大規模な調査が実施されたにもかかわらず、鍛冶炉を確認できない事例である。

SG5区SI-24のキサゲ状工具(第405図左) 茎部を木柄に装着して使う形なので、突き鑿のように手に持って使用したと考えられる。キサゲ状工具が金工具であるという意見(大場・石井他1964, p.12)を検討するためには、熱処理の有無を調査することが望ましい(内山2012, pp.40, 42)。SI-24出土例は完形品なので、金属学的な断面調査・硬度計測などは実施していない。長野県安坂將軍塚1号墳の「きさげA」は、硬度測定値からみて、先端部にかぎらず総体に弱度の焼入を施したと考えられている(大場・石井他1964, p.12)。韓国・京畿道の峨嵋山シル峰堡塁(6世紀前半の高句麗山城)のキサゲ状工具は、低炭素鋼を素材として製作し、強

第232表 古墳時代の鍛冶遺構および鍛冶遺物出土遺構（栃木県域）

時期	番号	地域	遺跡	遺構	平面形状	建物の規模 縦×横 (m)	主柱	貯蔵穴	竈	炉	生活用具 (土器等)	鍛冶炉	鍛冶具	羽口 専用 転用	原料 砂 瓦	鍛造 剥片	粒状 滓	鉄滓	精錬	鍛錬	鉄製品など	文献	その他	
前期	1	真岡市	龜山北	1号住居跡	方形	7以上	4					0	金床石1	あり		○	あり			直刃鎌	小筆 2003	遺構跡上に投棄された鍛冶用 速遣物		
中期	2	小山市	寺野東	5号住居跡	方形							0										SI-038・047・130・519・524 で鍛冶出土		
	3	那珂川町	三輪	4号住居跡	方形	約6	?	2	0	1	埴、高杯、甕、 杯、高杯、埴、 甕、甕	1?		1								三木 1954 炬と報告するものが鍛冶炉? 中村他 1991 鍛冶1点が床面出土3号溝に転 用羽口		
	4	矢板市	十三塚	7号住居跡	方形	6.2	4	1	0	2	杯、高杯、埴、 甕、甕	不明												
	5	壬生町	新郭	SI-34	方形	6.6	4	4	2	0	1	杯、埴、甕、 甕、高杯	3	金床石3		135	2点	埴形 2.6kg		○	錐状?	内山 1998		
	6	宇都宮市	杉村 (北園東 道路調査 区)	113号遺 構	長方形	3.7	2.5	0	0	0	?	杯、高杯	5?	砥石1 (4片)	5	筒形	2	筒形			錐の茎片?	藤田他 2000	近接する5基の炬が各々鍛冶剥 片を出土	
	7	宇都宮市	権現山 SG1区	59号住 居	方形	4.8	4.4	4	1	0	0	杯、高杯、甕、 不明	不明		1							藤田他 2000		
	8	宇都宮市	権現山 SG10区	97号住 居	長方形	5.7	4.0	2	1	0	0	鉢、高杯、甕、 不明	不明	砥石1	ハ字? 1								藤田他 2000	権現山遺跡北部豪族居館の東側 にある竈へ鍛冶遺構
	9	宇都宮市	権現山 SG5区	SI-33	方形	5.4	5.2	4	1	0	1	高杯、埴、甕、 甕	1	被熱礫							○	棒状・板状	内山編 2010	
	10	宇都宮市	権現山 A区	SI-3	方形	5.8	5.8	4	1	1	0	杯、甕	不明								○	埴形233g	内山編 2010	床面に酸化鉄の集中部が2箇所 にある筈へ鍛冶遺構
	11	宇都宮市	立野 5区	SI-36	方形?	残4.4	残2.4	?	?	?	消滅 甕、甕	破環	不明	金床石1	13?	?	?	?		○	鉄地陣孔製品由 来の鍛冶再生品	内山編 2010	権現山遺跡北部居館と南部居館 の中間にある筈へ鍛冶遺構	
	12	宇都宮市	磯岡 3区	SI-30	方形	7.0	7.0	4	1	0	1	土師器各種	不明										内山編 2013 (本書)	SI-30の埴形滓・好壁は流入? (本書)
	13	宇都宮市	砂田 23区	SI-50	方形	8.7	8.6	8	1	0	6	土師器各種	不明	金床石1	2							短柄広身鉄鎌1	内山編 2010 " 2013	遷元土器片・土器転用研器具 SI-106の金床石は流入品? 転用羽口2点出土
	14	宇都宮市	砂田 6区	SI-106	長方形	6.8	5.0	4	1	0	1	土師器各種	不明										谷中他 2001	SI-073・231・241に少量の鍛 冶遺物
	15	上三川町	殿山	SI-100	方形	7.7	7.7	?	2	0	消滅 甕、甕	不明											内山 2005	鍛冶炬は未確認 鉄滓1点のみ (流入)
	16	小山市	西裏	SI-029	遺構外								0		1								津野 2005	古墳中期集落から廃棄した遺物 包含層
17	小山市	喜次海遺 圃	SI-3	方形	4.6	4.5	4	0	1?	1	杯、甕	不明										津野他 2007	鍛冶炬は未確認	
18	小山市	本郷前	SI-325	方形	5.4	5.3	4	1	0	1	杯、高杯、甕、 不明	0										津野他 2007	鍛冶炬は未確認 鉄滓は1点の み(流入品?)	
19	真岡市	蟹ヶ入	KT-116	方形	5.8	5.5	4	2	0	1	碗、高杯	3		9								大川他 1995	1号炬は2基が連接する。2号炬 は1基。	

度が要求される先端部には焼入れを施している（任孝宰他 2002, pp.168-171）。金工具（キサゲ）の条件も満たしているといえるが、木工具（鑿）を含む可能性も残る。

第3節 奈良・平安時代

古代の遺構は少ない。権現山遺跡に竪穴建物跡1棟・土坑2基、道路側溝が1箇所ある。

推定東山道の側溝 古代道路遺構の側溝がSG10区の北東部で確認された（SD-250a・b）。周辺の各遺跡で調査されている推定東山道（藤田 2003）に連続する道路遺構である。SG10区SD-250a・bから南西に230mの県道北側幅幅部分でも、側溝の続きと考えられる溝が2006年度に確認調査されている（第8図左下）。

平安時代遺構・遺物 SG10区に竪穴建物跡SI-90と土坑SK-235がある（第192・193図）。SG10区SK-235で出土した須恵器甕と同一個体の破片がSG10区の広域に分布し、古墳時代のSI-30（SK-235と重複）・SI-61（北へ75m）・SD-527（北へ145m）、中世のSE-252（北東50m）、時期不明のSK-254（北48m）、近・現代のSX-308（北48m）から出土している。また、平安時代須恵器杯破片がSI-50（古墳中期）・SI-65（古墳後期）・SK-251（中世）・SG10区SD-263（中世～近世）・SK-289（時期不明）・SX-308（攪乱か）などで出土していることを見ると、平安時代の遺構・遺物は非常に希薄だが、SG10区の広い範囲が9世紀頃に利用されていたことがわかる。SG15区にも平安時代土坑が1基ある。

第4節 中世

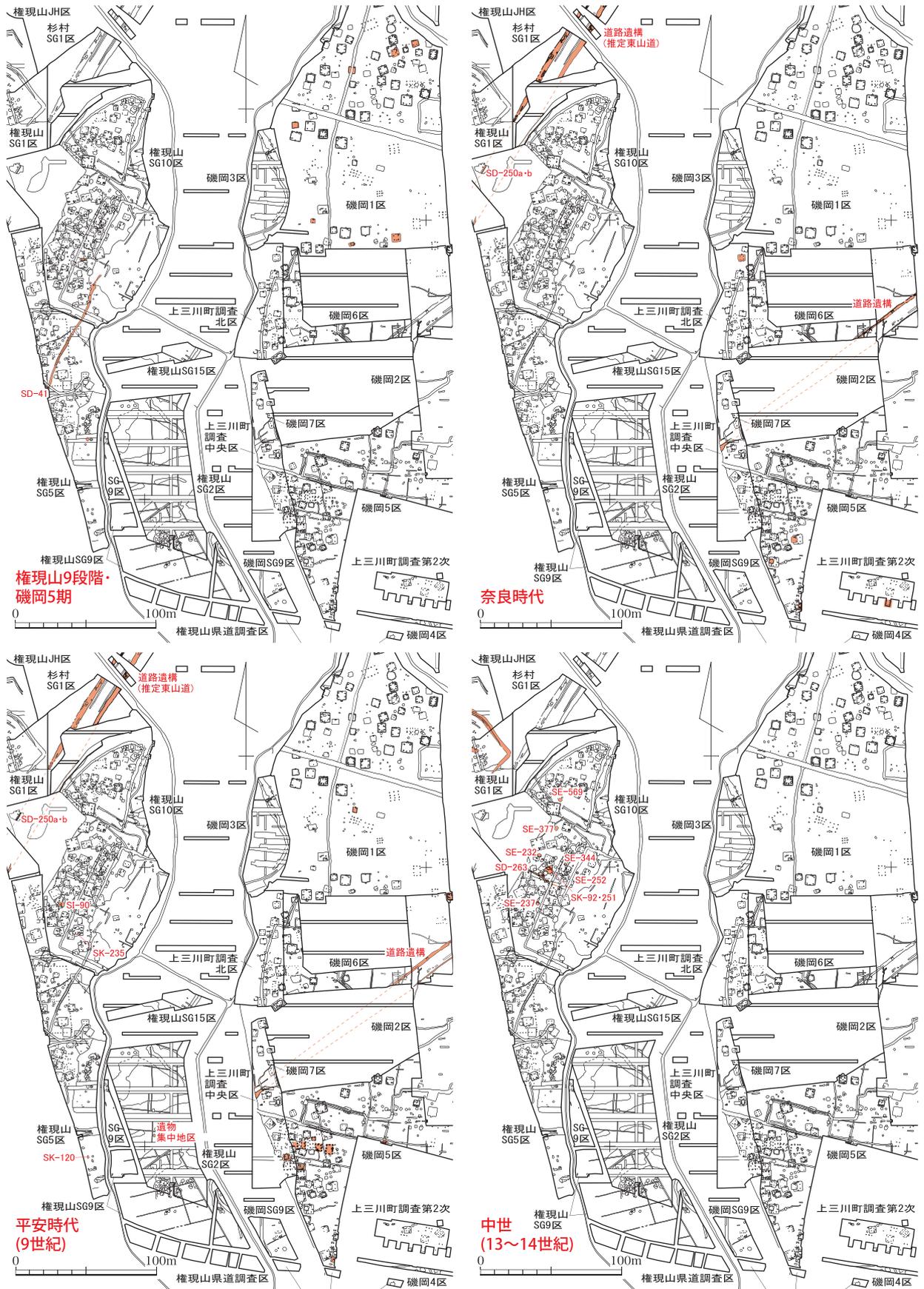
SG10区には井戸6基・土坑2基・溝4条・柱穴状土坑群82基がある。この他に、SG10区にある時期不明の井戸5基も中世の可能性が高い。近在の中世遺跡は、区画溝に囲まれた13世紀後半～14世紀前半の井戸・土坑群が権現山遺跡北部のSG1区にある（『東谷・中島地区遺跡群』10, p.556）。

SG10区出土中世遺物の時期 常滑産陶器からみて、13世紀後半から14世紀である（愛知県史2012, pp.37-38,749）。中世井戸SE-569とSE-377で遺構間接合した常滑産こね鉢は、常滑窯第2段階（6a～6b型式）の片口鉢Ⅱ類とみられ、13世紀後半ころであろう（第200図9）。中世土坑SK-92・中世井戸SE-344・古墳時代土坑SK-46に同一個体がある常滑産こね鉢は常滑窯第3段階（8型式）の片口鉢Ⅱ類で、14世紀後半と考えられる（第198・209図）。

柱穴状土坑P-425・627・640にも中世遺物がある（第208図）。P-425の青磁破片は龍泉窯系青磁碗I-5b類で、13世紀後半に多い（山本1995, p.480）。P-627では皇宋通寶（1039年初鑄）と「□元□竇」（銭名不詳の破片）が出土した。P-640には還元炎焼成の山茶碗系鉢破片がある。

中世土坑SK-92の土師質小皿（かわらけ）は口径不明だが、底径が比較的大きい（5.4cm、第209図2）。時期不明土坑SK-264にある土師質小皿も、重複するSK-92などの中世遺構から混入したものであろう（口径6.6×底径3.6×器高1.6cm、底径/口径=0.55、第237図中段左）。遺構外出土中世遺物の小皿も底径4.5～5.3cmで、底径/口径=0.67である（第210図）。これらの土師質小皿は今平利幸（2001）分類のB類2bに該当し、14世紀後半以後のものである。遺構外出土中世遺物にある直方体に加工した滑石製品（第210図4）は、13～14世紀に多く見られる滑石製石鍋（高田2001）を再加工した可能性がある。

SG10区SE-569の曲物桶 内面に黒色の漆が付着するので、漆容器に使ったことが考えられる（第5章第19節）。ただし、底板部品3点のうち転用材を使った1点だけに黒色が見られないので、底板を修理した後に漆容器以外の用途に変更した可能性がある。この曲物桶は、3枚連結づくりの底板の下面にもう1枚の底板が接して出土したことで、桶内部に補強用の棒とも考えられる木棒があることからみて、桶の下面には別の底板・内面には棒を当てて補強したとも考えられる（第200図1～3）。



第411図 権現山遺跡南部・磯岡遺跡の変遷 (3) 古墳終末期後半・古代・中世

第5節 近世

SG10区の南半部に、近世の大形方形区画溝SD-201a・201b・204がある。山水文を描いた染付碗がSG10区SD-201aに1片、鉄釉の大形鉢口縁部片（鉄釉挿鉢）がSG10区SD-204に1片あることから（第215図）、詳しい時期は不明であるが近世の溝と判断した。権現山遺跡北部の2区SD-5b（『東谷・中島地区遺跡群』10）、立野遺跡5区SD-79・632・296（『同』5）、また砂田遺跡の各地区（『同』3・8・13・15）において、かなり時期が新しいと見られる同様の方形区画溝があり、これらも近世の可能性があろう。

SG10区北半部にある不整形方形区画溝SD-503は陶器片と寛永通寶を出土した（第218図）。この溝で囲まれた内部の土地利用はよくわからないが、砥石・土師質小皿が出土した近世土坑SK-71がある（第219図）。また、時期不明の掘立柱建物跡SB-603も近世遺構かもしれないが（第220図）、SD-503と同時存在ではない。

SG15区では、SD-1に鉄釉の仏花瓶が1点ある（第393図）。土岐川以南の美濃窯で生産した「漆黒釉花瓶」（岡本編2004, p.29）とほぼ同一の製品で、美濃窯の中期（17世紀後葉～18世紀中葉）に相当する。

【参考文献】 第2章（遺跡の環境）と自然科学分析結果（4章2節、5章6・19節、7章、8章2・10節）の文献は各章・節の文末に示した。それ以外の参考文献を以下に示す。

愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史』別編 窯業 3 中世・近世 常滑系

赤井博之 1998「古代常陸新治窯跡群の基礎的研究 - 奈良・平安時代の須恵器編年を中心に -」『婆良岐考古』第20号 ひとちなか, pp.61-109.

秋元陽光・今平利幸 1998「宇都宮市東谷笹塚古墳出土の遺物」『峰考古』第13号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.41-64.

安藤美保編 1996『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第178集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

安藤美保 2001「平底の須恵器模倣坏の検討」『研究紀要』9 (財) とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター, pp.143-158.

安藤美保 2008『北原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第312集 栃木県教育委員会 (財) とちぎ生涯学習文化財団

池田敏宏・篠原祐一 1998『西山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第215集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

池田敏宏 2010『下陰遺跡』II 栃木県埋蔵文化財調査報告第330集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

石山 勲編 1977「粕屋都須恵町所在遺跡群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X 福岡県教育委員会, pp.10-26.

出居 博・藤田清信・有山経世 2007『ゴロノミヤ遺跡II』佐野市文化財調査報告書第7集 佐野市教育委員会

入江文敏 2011「北陸地方出土の朝鮮半島系土器 - 三生野遺跡出土台付長頸壺の位置づけ -」『若狭・越古墳時代の研究』学生社, pp.232-271.

岩上照朗・石橋知明編 1978『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇都宮市教育委員会

上野修一 2005「低位段丘面の開発とその意義 - 栃木県真岡市鶴田A遺跡出土の溝を中心として -」大金宣亮氏追悼論文集刊行会編『古代東国の考古学』慶友社 東京, pp.553-562.

上原康子・麻生尚子・篠原祐一 1998『清六III遺跡II（古墳時代編）』栃木県埋蔵文化財調査報告第218集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団

内山敏行 1997「律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県」『東国の須恵器 - 関東地方における歴史時代須恵器の系譜 -』古代生産史研究会 壬生（栃木県下都賀郡）, pp.87-101.

内山敏行編 1998『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第214集 栃木県教育委員会・(財)

栃木県文化振興事業団

内山敏行 2001「関東の須恵器製作技法」『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会 奈良, pp.31-42.

内山敏行 2005『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行 2006『東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行 2008『東谷・中島地区遺跡群9 中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行編 2010『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団

内山敏行 2012「豪族居館・首長居宅と関わる鉄器生産 - 北関東地域の古墳時代鍛冶 -」『たたら研究』51 たたら研究会 東広島, pp.33-46.

宇都宮市教育委員会 1999「刈沼・向原遺跡II テクノポリスセンター地区開発に伴う埋蔵文化財発掘調査（第2次）」（現地説明会資料）, pp.1-4.

宇都宮市教育委員会 2001「刈沼遺跡II 刈沼遺跡発掘調査第2次調査」（現地説明会資料） pp.1-4.

宇都宮市教育委員会 2007「笹塚古墳」『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかいどう』2007年10月号 栃木県教育委員会, p.6.

宇都宮市教育委員会（とびやま歴史体験館）2012『笹塚古墳とその時代 - 下毛野の成立を考える -』とびやま歴史体験館第14回企画展

宇都宮大学考古学研究会編 1993『塚山西古墳・塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集 宇都宮市教育委員会

宇都宮大学考古学研究会編 1995「塚山古墳外形確認調査報告」『峰考古』第9号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮

宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 佐倉 pp.215-232.

海老原郁雄・津野 仁 2002『西統橋遺跡発掘調査報告書』高根沢町埋蔵文化財調査報告第8集 高根沢町教育委員会（栃木県塩谷郡）

大賀克彦 2002「弥生・古墳時代の玉」北條芳隆・禰宜田佳男編『考古資料大観』第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館, pp.313-320.

大川 清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1995『栃木県上三川町 殿山遺跡I』日本窯業史研究所報告第46冊 馬頭（栃木県那須郡）

大倉 潤 2002「石製紡錘車表面の擦痕・剥離痕をめぐって」『日々の考古学』東海大学考古学教室開設20周年記念論文編集委員会 平塚, pp.231-244.

- 大場磐雄・原 嘉藤・寺村光晴・桐原健・1964「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(1)」『信濃』16(4), pp.1-16.
- 大場磐雄・石井昌国・一志茂樹 1964「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査(2)」『信濃』16(6), pp.1-25.
- 岡本直久編 2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展, pp.25,28,29.
- 小野麻人・大橋生(東京航業研究所編)2007『砂田姥沼遺跡B区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集 宇都宮市教育委員会
- 風間栄一 1999「須恵器」野毛大塚古墳調査会(寺田良喜・三浦淑子編)『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会, pp.419-422.
- 片根義幸・田代隆 2011『川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第338集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 勝見一品 2005『磯岡北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第53集 埋蔵文化財発掘調査支援協同組合・宇都宮市教育委員会
- 亀田幸久 2007『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第304集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 亀田幸久 2012『東谷・中島地区遺跡群12 西刑部西原遺跡(旧石器・縄文・弥生時代編)』栃木県埋蔵文化財調査報告第354集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 菊井和美・藤田典夫・仲山英樹他 1990『砂部遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第108集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 木下 亘 1992「長野県下出土の古式須恵器概観 -北信・東信地域の資料を中心として-」森将軍塚古墳発掘調査団編『史跡森将軍塚古墳』長野県更埴市教育委員会, pp.545-557.
- 久保哲三・大島和子・斉藤均 1979『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第5集 宇都宮市教育委員会
- 合田恵美子 2007『峰高前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第308集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 後藤信祐 2001『御電前遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告第248集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 今平利幸 2001「下野における中世土師器皿について -飛山城跡出土土器を中心に-」『栃木県考古学会誌』第22集, pp.107-122
- 今平利幸 2012『笹塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第78集 宇都宮市教育委員会
- 今平昌子 2012『東谷・中島地区遺跡群13 砂田遺跡(10区・12区・13区・16区・27区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第355集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 酒井清治 2005「韓国栄山江流域の土器生産とその様相 -羅州勢力と百濟・倭の関係をを中心に-」『駒澤考古』30 駒澤大学考古学研究室 東京, pp.115-140
- 酒井清治編 2007『群馬・金山丘陵窯跡群』I 駒澤大学考古学研究室 東京
- 酒井清治・藤野一之・三原翔吾編 2009『群馬・金山丘陵窯跡群』II 駒澤大学考古学研究室 東京
- 定森秀夫 1995「陶質土器からみた東日本と朝鮮」『青丘学術論集』第15集 財団法人韓国文化研究振興財団 東京, pp.5-93.
- 篠原浩恵・杉浦昭博・篠原祐一・磯貝厚 2000『成願寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第239集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 篠原浩恵 2003『霞内西遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第275集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 篠原浩恵編 2009『五霊遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第322集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 篠原浩恵・藤田典夫 2011『田島持舟遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第339集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 篠原祐一・亀田幸久 2009『権現山遺跡・東谷北浦遺跡』
- 栃木県埋蔵文化財調査報告第318集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 清水正幸 2002『西刑部古屋原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第46集 宇都宮市教育委員会
- 下城正他 1988『三ツ寺I遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社 北橘(群馬県勢多郡)
- 下野考古学研究会 1986「刈沼遺跡 第一冊 -表採資料、坂本家寄贈資料-」『下野考古学』8 宇都宮, p.52
- 下野考古学研究会 1992「刈沼遺跡 第六冊 刈沼遺跡第二次調査E地点調査報告」『下野考古学』17 宇都宮, pp.116-117
- 下野考古学研究会 1993「石川坪遺跡」『下野考古学』19 宇都宮, p.40
- 下野考古学研究会 1996「刈沼遺跡 第八冊 刈沼遺跡第三次調査H地点調査報告」『下野考古学』23 宇都宮, p.139
- 関 孝一・永峯光一編 2000『鳥羽山洞窟-古墳時代葬所の素描と研究-』鳥羽山洞窟調査団・信毎書籍出版センター 長野市, pp.38,43.
- 高岡正之・橋本澄朗 1988「木葉底の基礎的研究」『研究紀要』5 栃木県立博物館 宇都宮 pp.27-82.
- 高田大輔 2001「関東地方出土の滑石製石鍋」『埼玉考古』第36号 埼玉考古学会, pp.137-152.
- 高橋照彦 1991「須恵器」小林謙一・花谷浩編 1991『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会(香川県大川郡) pp.40-47,110-121.
- 高橋徹・小林昭彦 1990「九州須恵器研究の課題 -岩戸山古墳出土須恵器の再検討-」『古代文化』42(4) 古代学協会 京都, pp.28-43.
- 伊達宗泰編 1981『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊 奈良県教育委員会, pp.542-560
- 田中新史 1988「古墳の調査概要」『王賜』銘鉄剣概報 千葉県市原稲荷台1号墳出土』市原市教育委員会, p.10, 図10.
- 田中広明 1991「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給 -有段口縁坏の展開と在地社会の動態-」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大里, pp.635-665.
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 京都
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店 東京
- 塚原孝一編 1999『東谷・中島地区遺跡群No.1 磯岡遺跡(I区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 常川秀夫・熊倉直子・大金宣亮・石川均 1979『塚山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第32集 栃木県教育委員会
- 津野 仁 1997「栃木県の須恵器編年」『東国の須恵器 -関東地方における歴史時代須恵器の系譜-』古代生産史研究会 壬生(栃木県下都賀郡), pp.84-86.
- 津野 仁 2005『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡(2~7区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁 2009『青龍淵遺跡・皇宮前塚』栃木県埋蔵文化財調査報告第317集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁・篠原浩恵・今平昌子 2007『東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡(4~6・18・19・23・24区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 津野田陽介 2010『島田遺跡』VII 古墳・歴史時代編1(IV~V次調査) 上三川町埋蔵文化財調査報告第35集 上三川町教育委員会(栃木県河内郡)
- 鶴岡英一ほか 2007『市原市西広貝塚』III 市原市埋蔵文化財センター調査報告書第2集・上総国分寺台遺跡調査報告XVII 市原市教育委員会, pp.537,561,562.
- 寺内武夫・篠崎善之助 1939「下野中原遺跡調査概報 -第二回-」『考古学』10(11) 東京考古学会 大阪, pp.537-555.
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2000『埋蔵文化財センター年報』第10号(平成12年度版)
- 中村亨史 2004『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群(西刑部西原遺跡1・2・6区)』栃木県埋蔵文化財調査報告

第12章 まとめ

- 第283集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
中村 浩 2001『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版 東京
中村 勝・横山邦継 1987「福岡市金武小学校所蔵の須恵器」『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会 北九州, pp.85-90
中山 晋・日向野宏志・岩崎浩恵・仲山英樹・鎗木理広 1988『郭内遺跡・松香遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第94集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
奈良国立文化財研究所編 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II 藤原宮西方官衙地域の調査』奈良国立文化財研究所学報第31冊
西口陽一 1994『野々井西遺跡・ON231号窯跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第86輯 大阪府埋蔵文化財協会, pp.54-55,81-82,137, 図版 111-112.
橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2011「権現山遺跡測量・発掘調査報告」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』11 新潟大学人文学部 新潟 pp.1-37.
橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2012「権現山遺跡測量・発掘調査報告 2」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』12 新潟大学人文学部 新潟 pp.1-65.
橋本澄朗・谷中隆 2001『東谷古墳群』と権現山遺跡・百目鬼遺跡』『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団, pp.295-301.
初山孝行・青柳平人・谷中隆・江原英・猪瀬美奈子・井上武 1997『寺野東遺跡Ⅴ 縄紋時代環状盛土遺構・水場の遺構編』栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団, pp.652-653.
土生朗治・越智徹・富川努 2008『中島塚遺跡(A区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第63集 宇都宮市教育委員会
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之 2007a『西原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第59集 宇都宮市教育委員会
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之 2007b『砂田姥沼遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第60集 宇都宮市教育委員会
浜松市博物館編 1998『山ノ花遺跡 遺物図版編』p.78
坂 靖 1998『古墳時代の階層別にみた居宅』『古代学研究』141 大阪(再録 2008『古墳時代の遺跡学』雄山閣 東京, pp.78-91.)
深谷昇・梁木誠・田熊清彦 2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第47集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
深谷昇・高野浩之・戸部孝一・平岡和夫 2004『磯岡遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第29集 都市基盤整備公団・上三川町教育委員会・山武考古学研究所
藤田直也 2003『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道関連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告第274集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也 2011『東谷・中島地区遺跡群1 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第337集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也・田代隆 2002『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第265集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也・片根義幸 2007『市ノ塚遺跡(第1分冊)』栃木県埋蔵文化財調査報告第303集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田直也・片根義幸 2008『市ノ塚遺跡(第2分冊)』栃木県埋蔵文化財調査報告第303集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
藤田典夫 1999「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 藤沢, pp.65-78.
藤田典夫・安藤美保編 2000『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県埋蔵文化財調査報告第241集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
藤田典夫・仲山英樹 2007『曲田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第324集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学

- 習文化財団
松永悦枝 2010「高霊池山洞44号墳における墳丘祭祀の復元とその特質」『古文化談叢』65(1) 九州古文化研究会 北九州, pp.175-196
宮本長二郎 2001「原始・古代住居の復元」『日本の美術』420 至文堂 東京
谷中 隆・大島美智子編 2001『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
梁木 誠 1984『鶴舞塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財報告第13集 宇都宮市教育委員会
山口耕一 1994「北関東地域における茨城産須恵器について(上)―外面同心円叩き目を有する須恵器を中心に―」『研究紀要』第2号 (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター, pp.109-130.
山口耕一編 1999『多功原原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第222集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化財振興事業団
山越 茂・植木茂雄 1995『柿の内遺跡・下台原原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第162集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 京都, pp.470-484.
【韓国語】
郭鍾喆他 2009『金海餘來里遺蹟』우리文化財研究院 學術調査報告 17冊 昌原, p.347 (111号竪穴)
金斗喆 1986「金海地方の主要古墳遺蹟(2) - 金海 가달遺蹟 地表調査報告 -」『伽倻通信』第15・16合輯號, 伽倻通信編輯部, 釜山, pp.50-81
金斗喆 2001「打捺技法의 研究 - 金海 禮安里遺蹟 出土品을 中心으로 -」『嶺南考古學』第28號 嶺南考古學會 大邱, pp.65-108
任孝宰・崔鍾澤・林尚澤・尹相憲・梁時恩・張恩晶 2002『峨嵯山시루峰堡壘』서울大學校博物館・서울大學校人文學研究處・九里市・九里文化院
朴升圭他 1997『宜寧泉谷里古墳群』I・II 嶺南埋蔵文化財研究院學術調査報告第9・10冊 嶺南埋蔵文化財研究院 漆谷, I-p.108, II-p.142 (19-1號墳)
朴天秀 2009「5-6世紀大伽耶의 發展과 그 歷史的意義」『高霊池山洞44號墳』慶北大學校博物館・慶北大學校考古人類學科・高霊郡大伽耶博物館 大邱, pp.577-641.
宋柱鉉・河仁秀・洪漕植・李賢珠 1992『東萊 福泉洞 53號墳』釜山直轄市立博物館遺蹟調査報告書第6冊 釜山直轄市立博物館 釜山, pp.68,138,200
申敬澈・金宰佑編 2010『金海大成洞古墳群Ⅳ -1~3號墳-』慶星大學校博物館 研究叢書 第14輯 慶星大學校博物館 釜山
梁道榮他 1999a『時至의 文化遺蹟Ⅳ-古墳群3』學術調査報告 第29冊 嶺南大學校博物館・大邱廣域市都市開發公社 慶山, 本文 pp.156-157,374 (86號墓)
梁道榮他 1999b『時至의 文化遺蹟Ⅵ-古墳群5』學術調査報告 第31冊 嶺南大學校博物館・大邱廣域市都市開發公社 慶山, 本文 p.333 (285號墓)
梁道榮他 1999c『時至의 文化遺蹟Ⅶ-古墳群6』學術調査報告 第32冊 嶺南大學校博物館・大邱廣域市都市開發公社 慶山, 本文 p.359 (92-3號墓)
禹枝南・崔鍾圭・金賢・李承一 2000『道項里・末山里遺蹟』慶南考古學研究所遺蹟發掘調査報告書 晋州, 本文 pp.166-167, 図面 pp.106,131
李柱憲 1997『咸安道項里古墳群』I 學術調査報告第4輯 國立昌原文化財研究所 昌原, pp.56,61,130,136,139 (9・10・27・29・32號墳)
李柱憲 1999『咸安道項里古墳群』II 學術調査報告第7輯 國立昌原文化財研究所 昌原, pp.78,81,235 (36號墳)
李柱憲 2000『咸安道項里古墳群』III 學術調査報告第8輯 國立昌原文化財研究所 昌原, pp.65,67,196 (48號墳)
鄭澄元他(釜山大學校博物館編) 1985『金海禮安里古墳群』I 釜山大學校博物館遺蹟調査報告第8輯 釜山, 本文 p.131, 圖面・圖版 pp.54,211.
鄭澄元他(釜山大學校博物館編) 1987『咸陽白川里1號墳』釜山大學校博物館遺蹟調査報告第10輯 釜山, pp.27-33